
真・恋姫†無双～ジョインジョインジョインキレイ～

柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜ジョインジョインジョインクレイ〜

【Nコード】

N93970

【作者名】

柳

【あらすじ】

テンプレで転生したオリジナル主人公がなんだかんだで戦乱に巻き込まれる軽めのノリで進んでいくストーリーです。
作者の求める文才にはまだまだ遠い…

キャラ崩壊要注意

テンプレで転生…（前書き）

テンプレのサクセスストーリー。

初投稿ですよろしくお願ひします。

テンプレで転生…

第1話

俺「あー…ここどこ？」

ども初めまして俺です。なんか白い空間に居ます。

はてさて、ここどこよ？

？「あ、起きたー」

俺「ん？」

なんか声がしたから振り向くと、男物のYシャツのみを装備した幼女がそこにいました…なんぞ？

？「始めましてだな。私は神、気軽に「しんちゃん」って呼んでくれて構わないぞー」

おk、ここは夢だ。裸Yシャツの幼女が出てきて神宣言するとは…
・つかこんな夢見る俺…精神病院行ってこい。

俺「はあ、神様ですか、んじゃ夢からさめる為に二度寝するんでおやすみなさい。」

そういつて横になる。

神「こらー寝るな！折角人が説明してやろうと思ってるのにー！」
両手を振り回しながら怒る自称「神」、見てる分には微笑ましいんだけど、つかあんた人じゃなくて神だろ？

俺「んじゃ手短に説明してくれ。」

神「ああ、お前死んだぞ。折角私が説明してやろうと思ったのに失礼な奴だなまつたく…」

何故？

神「む、覚えてないのか。お前は仕事の帰り道で私を庇って死んだんだ。」

しんちゃん曰く、人間界にパトロール（暇つぶし）に来たら通り魔に襲われたらしい。

簡単に説明すると、

通り魔襲撃 俺庇う 俺死ぬ 俺の魂お持ち帰り 今ここ

俺「はー、んじゃあの世行きって訳か。」いや既にあの世だからこの世行き？

神「随分と軽いな…まあ、良いや転生する前に庇ってくれたお礼しようと思っただな。」

俺「お礼？」

神「そうだ、好きな特殊能力とか付けてやるし、記憶はそのまま転生させるぞ。」

随分と気前の良いことで…

神「私を庇って死んだんだ、礼くらいしないと私の気が済まん。」

俺「ふむ、んで転生先は？」

神「弟がやってたゲームの世界だな。確か「りゅーび」とか「しよく」とか言ってたな。」

りゅーび、しよく？………劉備！？蜀！？無茶苦茶三国志じゃねえか！

つか神もゲームやるんだな…

俺「…ある意味転生してよかったかも…」

いやね、だってさ三国志よ？横山三国志散々読んでたしそんな世界に行くんだよ？

浪漫溢れる英雄の世界…憧れるよね…

神「んで、特殊能力どうすんの？」

しんちゃん、それを聞くのは愚問だぜ？

俺「鍛錬や勉強の効果が10倍になるようにお願いします。」

神「いいぞー、んじゃ行つて来い。」

俺「へ？」

いきなり足元に穴が開いたと思ったたら俺が落っこちる。

俺「テンプレすぎるだろおおおお」！

続けてくれ。

テンプレートで転生…（後書き）

感想、指摘お待ちしております。

いざ往かん！（前書き）

また短いです。

いざ往かん！

第2話

ども、転生しました。俺です。

まあ、目が覚めたら赤ん坊でした。

何も出来ないで世話されるって恥ずかしい…特に授乳とかおしめとか…いや、もう何も言うまい。

時が経つのも早いもので年齢は12歳になりました。

え？面倒になつたわけじゃナイデスヨ…

ああ、そうそう俺の名前

姓は「紀」名「靈」字が「周英」んで真名「顕」

だつてさ…袁術配下の武将で最期は張飛に…

まあ、大丈夫。頑張れば何とかなるだろうし。つか真名ってなんよ？

両親曰く本当に心許した人にしか渡さない大事な名前らしい。

そういうことなら文献に載ってないだろうし判らんのも無理は無い
か。

あ、そうそう

元々親父が武人だつたらしく、2年前から鍛錬してたんだけど。

今日完膚なきまでに叩きのめしてやったZE

んで親父が

「もう俺に教えられる事は無い。長安にいる俺の友人に師事を仰いで
更に強くなれ。」

負けたのに笑いながら言う親父を豪気だなーって思ったけど夜中に
「まけちゃったあ…」とか言いながら寝室で母に甘える親父の声聞
いて訂正した。

んで一カ月後、俺は隊商に同行して長安を目指す事に。

出立の日、親父は威厳のある感じに、母は涙目で俺を送り出してくれた。

俺も少し感動したのか涙を溜めながらの出発となったわけだが…

父「久しぶりに二人つきりだな…ふふふ」

母「まだ昼間なのに貴方つたら」「そんな事言いながらいちやつき始めた…せめて、本人が居なくなってからにしてくれ。」

つか俺の感動を返せ…

そんなこんなで俺は隊商の人たちに慰められながらの出発となりました。

いざ往かん！（後書き）

ご指摘、ご感想お待ちしております。

長安潜にゆゑ長安入城（前書き）

何故か投稿できた3話

くツカレタ

長安潜にゆゝ長安入城

第三話

ども、紀霊です。

数ヶ月の旅の末、はーるばる来たぜ長安

紀霊「皆さん、お世話になりました。」

商人「坊主、元気でやれよ」

数ヶ月共に旅をした隊商の皆さんに挨拶を済ませて手を振る。

…何故だろう、両親との別れの時より感動するんだが…

紀霊「しっかし、賑やかだな」

流石は洛陽と並ぶ大都市「長安」周囲を見渡せば人がごま…人が多く活気付いている。

まあ、そんななか見回りの兵隊さんに聞いたとおりにテクテク歩いてるわけだが

紀霊「どう見てもここだよなあ…」

どう見ても大きくて立派な門、その奥に見える豪華な屋敷…親父の友人殿貴方は何者ですか？

まあ、このまま突っ立っているのもアレなんで、

紀霊「すいませーん、凱乾様はおられますか？」

取り合えず会って話をせねば。

？「はーい。何方でしょうか？」

紀霊「紀迅の息子で紀霊と申します。父よりの手紙を凱乾がいけん様に渡すようにと言われております。」

出てきたのはいかついおっさんとかじゃなくて長身の綺麗な女の人でした。

凱乾「私が凱乾だ。君は紀迅の息子と言ったね、確かに面影はあるし嘘を言っているようには見えないな。まあ、はるばる良く来てくれた。」

「やっぱり凱乾様でした。」

凱乾「まあ、立ち話も何だし中に入りなさい。」

（室内（多分客間））

紀霊「これが父からの手紙です。」

そういつて凱乾様に手渡す。しかし、外装も凄いが内装も豪華っていうか…俺来るところ間違ったんじゃない？

凱乾「やはり落ち着かないようだな。」

あ、凱乾様苦笑してら。

紀霊「生まれてこの方小さな村で生活しておりましたので、このように豪華な家は初めてです。」

凱乾「実を言うとなん年も棲んでいる私ですら落ち着かないよ。本当はもっと簡素な家で良いのだが事情が事情だね。」

どうやら凱乾さまも落ち着かない…って事情か…どうせ子供の俺にはどうしようもないし話してくれるとは思わない。この件は深入りしない方が良さそうしね。

紀霊「それで、父の手紙には何と？」

露骨な話題逸らしただけど子供だからキニシナイ

凱乾「ああ、今から読むんで少し待っててくれ。」

少しの沈黙の中、凱乾様が俺を見ながら苦笑してきた…なんだろう…
…凄く苦労的な目で見られている気が…

凱乾「つくく、いやすまん。どうやら君も苦労してきたみたいだな。」

…
…そういつて手紙を俺に手渡す。

…
…一体何書いたんだあの親父は…

（手紙の内容）

馬鹿息子に稽古つけてやってくれ。

それで本題なんだが家内が結婚した時から変わらなく可愛くてな、もう本当ry

この後馬鹿親父及び母による互いの良いところ自慢（惚気）が延々と3枚程書かれていました。

紀霊「…凱乾様」

凱乾「なんだい？」

紀霊「この手紙燃やして良いですか？」

我ながら良い笑顔だったと思う。

この手紙おかしいだろ！なんで息子に関することは一言で後は夫婦の惚気が延々と続くんだよ！

いや、確かに一言で言うべき事は集約されているけどもってこう、

「久しぶりだな」とかそういったのも無しで延々と惚気？

凱乾様だつてこれじゃ対応に困るだろうが！

この時代つて確か紙は貴重だよな？なんでこんな事に使つてんだよ。紙の無駄遣いしてるんじゃないやねーよ、エコに取り組めエコに！

凱乾「いや、すまんが友人からの手紙だからな…後、少し落ち着いてくれ。」

顔を引き攣らせながら凱乾様が俺を嗜める。

…どうやらドス黒いオーラの何かが出ていたんだろうよきつと…

うーむ、流石に燃やさしてくれないか…

凱乾「その代わりなんだけど今度二人であの馬鹿を殴るとしよう、それなら私の気も晴れる。」

凱乾様、友人の息子にその友人を殴る提案するとか…
凱乾様も大概でした。

ああ、そうそう

親父、アンタ覚悟しておけよ？

「その頃の紀夫婦」

父「っ!？」

母「貴方どうしたの？」

紀迅は得体の知れない寒気に襲われておったそうなの。

父「いや、少し寒気がな。」

母「あら大変、じゃあ今日は一日中そばで看病してあげる」

父「おいおい、それじゃあいつもと変わらないじゃないかあ」

…凱乾と紀霊が紀迅を血祭りに上げる日はそう遠く無いのかもしれない…

長安潜にゆゝ長安入城（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

ご感想、お気に入り登録有り難うございます^^

久々の…（前書き）

朝起きてアクセス数見て爆笑しました。

取り合えず幼少期編、恋姫のキャラが初登場します。

そっぴや、タイトルのネタ判る人いるのかな？

久々の…

ちーす紀霊です。

父への憎悪に燃えた一件の後、凱乾様に弟子入りする事になりました。

つーことで凱乾様について語ろう。

元々は宮廷の警護兵に分を教える師範をしていたほどの実力を持っているとのことで諸侯にも有名な御方らしい。

まあ、師範やっていたんだけど権力闘争や役人の腐敗が嫌になって洛陽から離れ、現在は長安に落ち着いているらしいが長安でも師事を乞う人や色々な相談を持ち掛けて来る人が多いそう。

以前はお弟子さんが何人も居たらしいけど現時点では1人のお弟子さんと一緒に住んでおり使用人は居らず自分たちで家事もこなしている…ってことはさっきの夕食は凱乾様の手作り？

って話がそれだな。後言うならば凄い美人。身長は恐らく170前後…この時代だと無茶苦茶高くない？慣れていない人だと威圧感で話しかけにくいかもしれない。んで、スタイルは普通に良いと思う。そういう評価は詳しくないので簡単に言えば出るとこ出ていて締まるところは締まっている。

…親父の友人なら年齢は…怖いから聞けなかつたけどね

いやね、俺はまだ死にたくないんだよ。年齢機構としたけど笑顔で長剣握り締められたら誰だって聞けないよね？

こらそこ、ヘタレとか言うな。とある隙間の賢者様に禁じられたワード言うくらいの死亡フラグなんだぞ多分…

そんなことよりも、今俺は重大な局面に面している！

それは…久しぶりの布団だよ！

ヒヤッハー！布団だー！枕もあるぞ！折角だから俺はこの布団で寝るぜ！

つーことで寝る！読者が見ている？おいおい、こんな小説読んでくれる人なんて居ないお？

…って言いたいけれど実際居られましたよ…はい。
なんか変な電波受信し始めてきたし素直に寝よう。

（見た目は少年（中身はおっさん）爆睡中）

あーたらしい朝が来たつと。んー、爽やかな朝日だ。

久々の布団のせいか寝つきも寝起きも凄く良い。今までは隊商の人たちと野宿したりだったからねー…一文しか寝てないとかそんなこと気にしないぜ。

そんな事してたら部屋に凱乾様が入ってきて開口一番

凱乾「失礼するよ。ちゃんと寝れたかい？」

紀霊「はい、有り難うございます。久しぶりに良く寝れましたよ。」

凱乾様：こんな良い布団宛がって貰って更に気遣い出来るなんて…

イイヒトダナー

なんでこの人結婚してないんだろう…？それと年齢いくつなんだろ。

凱乾「…なんか非常に失礼な事を考えていないか？」

凱乾様は顔を険しくして剣を握り締めている…エスパー？

紀霊「イイエソナコトアリマセンヨ」

よし、多分この台詞なら乗り切れる！

暫しの沈黙、先に口を開いたのは凱乾様だった。

凱乾「まあ、良い。朝食が出来ているから来ると良い。」

乗り切れた！

紀霊「わかりました。直ぐに行きます。」

そう言うと凱乾様は去っていった。…俺はといえば

紀霊「朝から死亡フラグ立つとかこの世界おかしくね？」
作者【悪いのはお前だがな。】

（少年着替え中）

着替え完了後、居間に行くとき凱乾様ともう1人、既に座って待っていた。

もう1人は女の子、多分俺より年上だろうけど…

女の子「（言「言）」

怖っ！？無茶苦茶睨まれているんですけど…

女の子「凱乾様、こいつは誰ですか？」

こいつ呼ばわりかよ…

凱乾「ああ、私の友人の息子でな紀霊と言う。今日からお前と一緒に修行する言わば弟子だ。」

凱乾様がそう言うのと警戒が解けたのか表情が微笑みに変化した。

女の子「そうでしたか、私の名前は華雄。姓は華、名は雄で字は乾けん香だ。これから宜しく頼むぞ紀霊」

ああ、華雄さんですか。

……………はい？

華雄だと…？

正史では孫堅に撃破され、演義では関羽に打ち取られて、某ゲームでは武力10、知力2の槍兵さん？

…ここ三国志だよな？武将が女って…ここ…三国志は三国志でも恋姫の三国志じゃねえか！

っーかしんちゃんの弟！

お前しんちゃんにエロゲ見られてるぞ！実の姉にエロゲを見られたとか軽くトラウマなるイベントだよな？

それと、後で上手い酒でも飲もう。君となら良い酒が飲める気がする！

凱乾「どうした紀霊、そんな絶叫していそうな地味目な眼鏡君みたいな空気出して？」

それ新 だよ！つかなんでそんな的確な空気よ読み取れるんですか凱乾様！？

…よし、落ち着け俺、このままじゃ話が進まない。

紀霊「紀霊です。字は周英と申します。これからよろしくお願いします。」

おk、少し落ち着いた。

ここは三国志は三国志でも外史の「恋姫無双」の世界で俺は将来袁術に仕える(予定) 武将で主な武将は大体女性…男の浪漫溢れる世界…バイバイorz

…しんちゃん…俺の期待を返せ…

久々の…（後書き）

主人公しかツッコミ出来ないとか…
取り合えずモヒカン大会に向けて練習しよう。

初めての…（前書き）

さて、手合わせ願おうか！

初めての…

ボンソワール、紀霊です。

色々と同んでもな事有り過ぎて朝食の味なんて覚えてないよ…色々納得できないけど、これからこの世界で生きていかなきゃいけないし腹括るしかないか…

んで俺in庭！

凱乾様曰く、取り合えず実力知りたいたので手合わせしましょうって事らしいんだけど…なんで持っているの真剣？

これ手合わせだよな？何で互いに真剣持つて対峙せにやなんのよ？そして華雄さん、それが当たり前前的な目で既に観客モードだし…

凱乾「さーて、覚悟は良いかな？」

全然出来てませんよー

凱乾「紀迅を倒した実力なら少しは出来そうだし、はりきっちゃおーかなー」

話し聞いてませんよーこの人…

紀霊「非常に納得できませんが、止む終えませんね。」

もう避けられそうに無いイベント戦みたいなものだろこれ。なら割り切っていくしかない。

諦めて剣を抜く。って言っても凱乾様と違って俺は子供、勿論剣は両手持ちで構える。こんなクソ重い剣を片手なんぞで持てる訳が無い…

少しの沈黙、先に仕掛けてきたのは凱乾様だった

凱乾「っは！」

俺の鳩尾目掛けて一直線に突きを放つ…ってちよっ！待て待て待て！俺は横に回転して緊急回避。…避けられたけど…その人俺をコロスキデシタヨネ？

紀霊「凱乾様、殺す気でしたよね今…」

恐る恐る聞いた見たよ！嘘だよな？まさか修行初日で天に召されるとか洒落にならんぞ…

凱乾「おー良く避けたね。最初の一撃は勿論殺す気で放ったんだよ。」

…ウソダンドドコドーン！！
…って最初の一撃は？

凱乾「まあ、軽く実力見るためだ…って言ったろ？

一応寸止めする予定だったんだから多分怪我は無かったぞ。」

多分…って言ったよあの人！？

…俺避けてなかったらしんちゃんのとこにUターンだったかもしれない…ん…

紀霊「…という事はここからはー」

凱乾「勿論ちゃんとした手合わせだ。まあ、手元が狂って殺気の籠った攻撃が出るかもしれないが問題ないだろう。」

紀霊「問題大有りですよ！」

なんだよ手元が狂って殺気の籠った攻撃が飛んでくる手合わせって！これそ…う…いう手合わせじゃねーから！

これならまだコインを入れて席を離れるだけのスポーツアクションゲーの方が有情だ…っての…

俺は凱乾様から一定の距離を保ち様子を見る。

凱乾様がじりじり近づいてくればその分後退する。

正直このまま打ち合っても勝てる気がしないので何か策を考えないと…

凱乾「っは！」

策について思案していた隙を突いて凱乾様が一気に距離を詰め、横薙ぎ一閃。

紀霊「っ！」

不意を突かれて回避は無理だった為剣で防御。

…危ない…凱乾様は手加減してくれているみたいだけど両手持ちじやなかったら剣を弾き飛ばされていたらうな…

凱乾「ほう、流石は紀迅の息子だ。その年でこれだけ防げれば大したものだよ。さて、まだまだ行くよ！」

凱乾様はそう言うのと次々と攻撃を繰り返してくる。って正直やりづらい…親父は一撃重視の単発型だったが、凱乾様は手数で相手を圧倒するタイプみたいだ。その証拠に横薙ぎを避けたと思えばそのまま突きを放たれる。

避けれない攻撃は防御し、避けれそうなら回避を繰り返す。それが断続的にあるから一方的なまでに攻撃されて俺の体力は著しく削られていく…

こんなんで攻撃なんか出来やしない…

不意に凱乾様は攻撃を止める。だが、構えは解いておらず俺は直ぐに距離を取る。

凱乾「ここまで防げるとはな…だがな紀霊、防御ばかりでは勝てないぞ？」

そう言うと凱乾様は剣を下ろす。多分攻撃してきてみる。って意味だろ。

…正直言って無理ですって足は生まれたての小鹿だし、腕は小動物みたいにプルプルしてるし、ついでに握っている感覚ないし…

まあ、攻撃しないまま負けるってのも嫌だしね。俺は息を整えながら凱乾様を見据える。

…よし、動く。どうせやるなら逝ってやるさ。

そのまま一直線に凱乾様目掛けて剣を振りかざす。

自分でも不思議でしょうがない。なんでこんな馬鹿正直な突進しか出来ないのだろう…

振りかざした瞬間、俺は意識が遠のいていく感覚を味わった。

〈凱乾 side〉

まったく紀霊は予想以上で驚いたよ。

…初撃どころか全部防いでくれるとはね…紀迅を倒したって言うのもあながち嘘では無い様だね。

気絶して地に倒れこむ紀霊を見ながら凱乾はため息一つ

凱乾「華雄、紀霊の手当てをして寢室に連れて行ってやれ。多分少ししたら起きるからそれまで看病してやってくれ。あ、それと明日からお前と一緒に修行をするからお前もそのつもりで居なさい。」
それだけ言うと私は剣を収め歩き出す。

んー

華雄と言い紀霊と言い見所のある弟子が二人か…さてさて、明日からの修行は何させようかな

〈華雄 side〉

凱乾様と紀霊の手合わせ…紀霊があそこまで戦えるとはな…私の2

つ下か、私もまだまだ未熟！

華雄はそんな事を考えながら紀霊を片手で担ぎ上げ、庭から部屋まで運送する。

流石に放り投げるわけにもいかず優しく下ろしてやるのだがどうにも細かい動作は苦手だな…しかし弟子か…明日から色々教えてやらねばな…姉弟子として！

つと、まずは起きるまで看病してやるか。

…何をすれば良いかわからんし起きるまで素振りでもして待ってるか。

その後彼女は紀霊が起きるまで傍でずっと素振りをしていたらしい

…

初めての…（後書き）

なんか今回の話は予定していた物語から365度程回転した作品に…

華雄さんの扱いが可笑しくなった今回でした。

今後の展開にご希望とかあれば参考にさせていただきます。

さあ、修行だ。(前書き)

今回は頑張って少し長めに…なってるかなあ？
た。 微修正加えまし

さあ、修行だ。

おはこんばんにちようございます紀霊です。

意識が戻った時、俺の部屋で何故か華雄さんが素振りしてました…
なんで？

取り合えず話を聞いてかくかくしかじか…修行について色々聞いて
みたんですよ。ええ…華雄さんが今までしてきた修行なんです、
凱乾様の思いつきで大岩担いで走ってみたり、馬と縄で繋がって引
きずられない様に走ったり、木を拳と蹴りで一ヶ月掛けてへし折つ
たり…大岩を拳と蹴りで球体になるように削れと言われたり…

マテや…色々と人間として限界突破してそんな内容だよな？
女の子、しかも子供の華雄さんがやるような修行内容じゃないよね？
なんで華雄さんはそれが普通だ的な顔して話せるのかな？

と言う事で聞いてみた。

紀霊「華雄さん、その修行やって色々と変だっと思いませんか？
」

華雄「？何を言っているんだ、これが普通だろ？」

…俺、この世界で武将としてやっていけるのかな？

そんな事思いつつも修行開始

まあ、最初は大岩持ってスクワット、5日毎に重さが増すサービス
付き。んで案の定馬と紐でつながれて引きずられ、極めつけは休憩

中や夜中の寝ている時に凱乾様からの奇襲…凱乾様曰く、これが基礎中の基礎だらしいんだが…御陰様で意識失うと三回に二回は三途の川見たぞコノヤロー…

けど、三途の川の船頭さん、行く度行く度に大体昼寝しているからこつち帰って来れたけどさ…稀に起きていても少し喋りしたら返されるし…なんか俺の中での命の重みがどんどん軽くなってるのでけど？このままいったら俺の中で命の重みがマイナスなってその内浮くぞ？大気圏突破しちゃうよ？

んー、このままいったら色々なモノに点とか線とか見えてきそうで怖い…

けど慣れというのは恐ろしい。

そんな地獄の修行を一ヶ月続けて来たけど新たな修行が追加されました。

何故か面倒だなー位にしか思わなくなっていました。

…人間って怖いね！

修行内容はいたって簡単

長安の城壁に沿って外回り一周、一周すると城門付近で凱乾様が待ち構えていて、いざ尋常に勝負。勝てば本日の修行は全て終了しました。負ければもう一周して凱乾様とry 通称「エンドレス走り込み」

まあ、こんな感じです。昨日は大岩スクワット、馬による荒野引き回し。

次の日は朝からエンドレス走り込み。

それを交代交代で4日間、休みが1日、孫子の兵法等の座学が1日。このローテーションで一ヶ月やっていくらしい。

因みに今日はエンドレス走り込み。地獄なんだけどさ…

あ、俺は現在八週目、朝からやってるけど華雄さんは十三週位していると思う。…うん、華雄さんって凄いな…全力疾走でペース落ちていないし、偶に叫んでいるし…

華雄さんはこの修行をかなり前からやっているみたいで警備の兵隊さんから

「お、華雄ちゃん頑張れよー」とか「大分周回の間時間縮まっているなあー」とか「怪力幼女ハアハア」とか「もつと熱くなれよ！」とか声掛けてもらっているし…取り合えず後半の二人は戦死してくれないかな？

あ、俺も最近言われるようになりましたよ。華雄さん程じゃないけれど主に女性の兵隊さん達から「頑張つてー」とか「早く大きくなつてねー」とか…なんだそりゃ？

まあ、成長期だし修行もしているし何れは体格良くなると思うよ？

お、凱乾様が見えてきた、少し考えすぎたかな。

凱乾「ふむ、来たか。」

仁王立ちの凱乾様と対峙。って華雄さんさつき俺のこと追い越したから居るはずなんだけど…

紀霊「華雄さんは？」

まあ、予想は付きますがね。

凱乾「ついさつき全速力で行ったぞ。」

ですよーw

俺は息を整えつつ長剣を握り締める。
勿論両手持ち…溜め切りとか出来ないのが少し残念だ。
さて、9回目「紀霊の挑戦」いい加減エンドレス走り込み終わらせたいね。

〜一騎打ち開始〜

長剣を構えて凱乾様目掛けて突進敢行、勢いをつけた突きを凱乾様はいとも簡単にいなして更に蹴りを放つ。

瞬時に屈んで前転、懐に入り込んで…弾き飛ばされた…これもフェイントかい！

受身を取りつつ足元を払うように横薙ぎ。

だが、掠りもって誰も居ないし…

しかも

凱乾「はい、もう私の勝ちー」

背中に得物突きつけられていましたー

ため息一つ、地面に座り込んで頭を掻く。

紀霊「いやはや、勝てませんねえ。」

凱乾「だが上達しているぞ。以前よりも攻撃の質も上がっているし、このまま行けば私を倒すのもそう遠い未来ではないかもしれんな。」

そう言われても勝てる気がしないわけで…まあ、あの修行内容で上達していなかったら泣くよ？

多分これからもこんな修行が続いていく、それを考えれば何れは凱乾様に勝てる日も来ると納得できる。…納得したくないけどな！

紀霊「何れは勝たせていただきます。」
凱乾「そう簡単に勝たせるか戯け。」

凱乾様は苦笑しながら言い放つ。

うおおおおおおおつ！

凄…雄たけびだ…

つて華雄さんが凄…い表情でこっちに向かって全力疾走！？ 怖い怖い怖い！ こつち来んなし！

凱乾「お、華雄も来たようだな。」

そう言いながら剣の腹で肩を叩く凱乾様。 その落ち着きようが流石すぎます…

紀霊「いや、まだ30分位しか経ってないんですけど…」

普段、兵隊さんたちが訓練で走っているの見るけどあの人たちでも二時間位掛かっているよな？

俺でも一時間位掛かるし…つてよく考えたら俺の体力が規格外になつて来てる！？

そんな事考えていたら華雄さんは俺らの前で急停止、凄え…地面抉れているんですけど…

華雄「む、紀霊か。丁度良い、私の戦い方をそこで見ておけ。」

凄く良い笑顔でそう言われた。凱乾様も別に良いよ的な雰囲気だし、俺が返事する前に華雄さんは長剣を振りかざす。

…殆ど俺と同じ体格なのに片手で振り回す姿は子供ながらに格好良いと思つた。

片手で振り回せる程の力はその細い体のどこにあるんデス力？

俺の素朴な疑問を知ってか知らずか二人の戦いが始まった。

先手は華雄さん、凱乾様目掛けて長剣振りかざし真正面から…って
清清しい程に力押し戦法な気が…

凱乾様に横薙ぎを連続で繰り出す華雄さん。けど俺でもわかる位隙
だらけで危なっかしい。

華雄さんが長剣を振り回しても凱乾様は余裕の表情で回避しまくる。
避ける、避ける、弾く、避ける。

自分の攻撃が掠りもしない事に苛立った華雄の攻撃は更に大振りにな
る。

あ、負けた。

結果は簡単。隙だらけの華雄さんの鳩尾に凱乾様の攻撃が一発入る。

あーあ、華雄さん転がり込んで悶えてらw

転がり続ける華雄さんを尻目に剣を収める凱乾様。

凱乾「ふう、今日はこれで仕舞いにしよう。紀霊、華雄の事頼んだ
ぞー。」

そう言うと街に向かって歩き出す凱乾様。…あの人、後姿も様にな
るなー

さてさて、取り合えず華雄さんはっと、

華雄「くうううううっ」

あーあ、涙目になってこっち見てるわ…このままにしておいたら何
かに目覚めそうな気がするので華雄さんの傍に近寄る。

紀霊「大丈夫ですか華雄さん。」

俺は屈んで華雄さんに手を差し出す。すると華雄さんは俺の手をとりながら一言

華雄「また今日も…一撃すら当てられなかった…」

と、しょんぼりした感じで話す。

…不謹慎かもしれないけど、涙目の華雄さん可愛いw

俺何かに目覚めるから！

なんか苛めなくなっちゃうから！

それ位可愛かった。

紀霊「けど最初に見たときよりも攻撃が鋭く力強くなっていると思いますよ。俺もそうですが、こうれからの精進次第で益々強くなれると思いますし、何れは凱乾様に勝てるようになりますって！それに俺、華雄さんみたいにまつすぐな人好きですよ。」

なんだかんだ言いながらもこの人俺の面倒見てくれるし、目標に向かつて真っ直ぐな人って好感持てるよね。

…真っ直ぐ行き過ぎて予想できない時もあるんだけどさ…

華雄「…へ？／＼／ つうく！ ええいつ紀霊！一応私は姉弟子だぞ！姉弟子をからかうものじゃないっ！」

顔を真っ赤にしながら叫ぶ華雄さん。って痛い痛い痛い！頬抓らないでっ！

因みに本心ですよー

紀霊「本心ですし、からかってもいません。後頬が無茶苦茶痛いんで抓らないで下さい。」

華雄「ほ、本心っ!?!？」

俺の説得が実を結んだのか華雄さんの指が離れ…てまた抓るつうう

ううううっ!? 痛い痛い痛い! 止めて! 紀霊の頬が抉れちゃうっ!

湯気が出そうなくらい顔赤くした華雄さんの俺の頬を抉るような指先いつ!

真っ赤になつて俯いている姿は可愛いと思つのに指先が容赦無さ過ぎてカオスだよ!

華雄「き、紀霊…も、もう少し姉に対して言う言葉を考える…可愛いとか本心とか言われるのは嬉しいが…とは言つものの歳も近いし其処まで気にする必要もないか…」

急に思案顔でぶつぶつ独り言を言い出す華雄さん。

…姉? おお良いね姉!

姉属性持ちは大好物ですよ本当。お、良いこと考えた。

華雄「うむ、紀霊。歳も近いしそこまで私が偉い訳でもないからな、今後私に関しては敬語は要らん。」

ほう、敬語不要っていうのは正直有りがたいね。敬語ってやりにくいからねーw

紀霊「わかった姉者。今後俺が可笑しなことをしたら姉者が注意してくれると助かる。」

華雄「姉者? 紀霊、なんだその呼び名は?」

紀霊「俺の姉弟子だから姉者。何故なら俺は姉が好きだから!」
多分後に波飛沫の厳格が見えた気がする…

威風堂々と訳の分からんことを言う紀霊…姉? 私が?

姉…姉…お姉ちゃん!? わ、私が紀霊のお姉ちゃん!?

あ、湯気出してショートした。反応が無い、ただの屍ry

本当に反応が無いな…微妙に緩んだ感じの笑顔のままだし、ほっぺ
つんつんしても何も反応しないとは…

もしかして、凱乾様との一騎打ちで頭でも打ったのか？だとすれば
このままゆっくりりする訳にもいかんし、夕食にも遅れる。なら手は
一つ。

取り合えず姉者を抱き上げる。姉者軽いなあ…こんな軽いのになん
で俺より力あるのよ？

まあ、良いや。こんな事で時間潰すわけにも行かない為取り合えず
歩き出す。

下手に頭揺らすと不味いから普通よりゆっくり目の歩調で歩いて門
を潜る。

夕日に染まる街を歩いているんだが、なーんか待ちの人たちが笑顔
でこっち見てくるし…こっち見んなし…

こちらら怪我人抱えて急いでいるってのに…

作者【お姫様抱っこで街中歩いてたら誰でもニヤニヤするわな…】

街の人達から変な視線を感じつつも屋敷に無事到着。

紀霊「姉者ー大丈夫か？直ぐ凱乾様に診てもらってから辛抱してくれ
よ…」

凱乾様を呼ぼうと思った矢先、姉者の意識が戻りつつあることに気
が付いた。

うう、いつの間にか惚けていたか…？

ん？何だこの浮遊感は…？

自分の足が地に付いていない違和感、だが嫌な感じはしない。寧ろ…安心できるようなほっとするようなそんな感覚…
恐る恐る目を開けると、其処には紀霊の顔が…凄く近くて…

あ、気が付いた。 目と目が合うその瞬間ヤバイと感じた

華雄「うわあああああつ ば Xあぶsっ!？」

目が覚めた姉者は数秒間の沈黙から戻って来たと思つたら、俺の顔面に姉者の右拳がめり込んだ気がする…

どうやらメダパニ状態だったらしく、快心の一撃で痛みを感じる前に意識ごと刈り取られたみたいですよ…

俺は そんな事 を思い ながら 意識を手 放した。

「紀霊さんの意識がログアウトしたようです。」

さあ、修行だ。(後書き)

御意見、ご感想お待ちしております。

4ページ書くのがこんなに大変だったとは…

他の作者さんが長文書いているのを見ると凄く羨ましいです。

凄い努力しているんだろうなあ…

仲良き事は…？（前書き）

やりたかったネタが多く入った回です。微修正加えました。

仲良き事は…？

ども、紀霊です。

…顔面が梅干になった夕方から気が付いたら朝に…
これなんてキングダムゾン？

姉者を屋敷まで運んだのは良いんだけど、その後の事を凱乾様も姉者も教えてくれないし…

凱乾様から「き、今日は休め。華雄の馬鹿力で顔面殴られたからか鼻の周りが痣になってるぞ…」

…なんで生きてるの俺？

そして凱乾様、嘔出しそうな堪えているのは腹立ちます。
けど大笑いされても腹立ちます…

姉者は姉者で俺を避けるように逃げていくから話しも出来ないしさ…
…それ見て凱乾様はニヤニヤ笑ってるし…

その笑い方止めて頂けませんか？無性に殴りたくなります。

…どうせ返り討ちだろうけどね…

それに、ニヤニヤきめえwとか思ったただけなのに短剣が数本飛んで来て、

凱乾「次は耳だよ？」

…何なんだよこの人…

え？ 話し進めろだつて？

…進めるも何も、安静にしてろつて言われて屋敷で留守番中だよ？
今も布団の中で回想してた怪我人に何させる気だよ…

しかし、前世で風邪引いた時もそうだったけど詰まらないw

病人怪我人って大体暇を持って余す事が多くなるから漫画読んだりゲームしたりしたらだらと過ごしてたな…

だが、考えても見て欲しい。

ここは一応三国志の時代。

PS2やらモンハンやら中野TRFと言った現代人のお楽しみは勿論、そもそも娯楽自体が絶望的なまでに無いw

どれ位絶望的かって？

夜中、姉者が1人で庭とかに居る事があるんだけど

溜息ついて

自分の胸に手を当てて

華雄「何れ…凱乾様みたいに…」

落ち込み気味にそんな事呟いていたんだよね。

それも凱乾様と一緒に入浴した日の夜は確実に見掛ける。

…頑張れ姉者…

努力に無駄は無いって誰かが言ってたからさ…

まあ、そんな感じ。

把握できたかい？

一応少しはあるんだよ！って事さ。

あー大分話がずれたな…暇だし素振りでもするか？それとも薪割りか？

面倒だし家事を一通り済ませるか。

そうと決まれば行動あるのみ。

取り合えず薪割り。

ハイホー！ハイホー！死ねえいつ！

ユクゾハアーンヒダリテハソエルダケ…

この薪をきちんと割れば貴様の体は丁度二分の一になる…ん？間違ったかなあ？

よし、薪割完了。

思いつきで色々な台詞呟きながらやっていたせいか、時間の経過が早かった気がする。

他人から見たら危ない子供だけどねw

お次は部屋の掃除。

最初は玄関、居間という風に効率良く行っ。

く居間く

(埃が)逃げられんぞお！

拭かぬ！掃かぬ！整理せぬ！

俺の箒捌きは凶暴です。

よし、とあるマジカルなアンバーさんよりも出来ていると考えざる得ない。

次はく

風呂！

俺は両手にタワシを持って前に突き出す…

北斗羅漢撃！（っばい何か。）

浴槽、床両腕をフルに使い磨いていく。

紀霊「速い拭きがかわせるかあ〜？」

久しぶりに1人のためか、変な方向にテンションが上がっている…
騒霊三姉妹の長女、俺を静めてくれ…

紀霊「ふう、大体終わったな。」

後は凱乾様と姉者の部屋なんだが…やっていいのかな？

どうする？

YOU やっちゃいなYO!

ダンボールの準備OK!

…やる方向しか選択肢無いのかよ…

…キングクリムゾンッ!…

凱乾様の部屋に来たんだが…

立て札

「対人用畏始めました

追記

勝手に入ると死ぬよ?」

……………ハイリタクナイ…

いや、そんな、冷やし中華始めました的なノリで言われてもさ…追記で背筋寒くなるわw

という事で、

折角だから俺は

昨日に向かって全速前進するぜ!

いやいやいや、無理無理無理!

だってコレさ、モヒカンがラオウとかに挑むレベルの死亡フラグだよ!?

誰が好き好んでジョイヤーパーチペチルートに行きたいと思うのよ!

もしされたいってモヒカンさんが居たら相当なMだよ？

……………華雄の部屋……………

そっぴや姉者の部屋って初めて入るな。

そんな俺は箒やら道具を持って姉者の部屋手前で立ち往生してしました。

立て札

「仕込み槍注意」

……………ナンデ？

なんで自分の部屋に仕込み槍？

確かに姉者の事だから強くなる為とか言ってるやうそっぴだよ？

けどね、それ専用の部屋とか作りなよ…

仕込み槍やら対人用罠のあるってどこの忍者屋敷だよ…

俺この屋敷で今までよく生活して来れたよね？

拝啓、しんちゃんへ

癒しを下さい。

紀霊より

……………結局、俺は二人の部屋に入る事を諦めた。

うん、入る事を期待していた人達に言いたい。

期待裏切って御免ね。けど自分で入ってくれ、俺はまだ死にたくない

い。

夜

凱乾「紀霊、戻ったよ」

華雄「紀霊怪我は大丈夫か？」

紀霊「お帰りなさいませ。取り合えず食事とお風呂は用意できています。」

二人が帰ってきたようなので出迎えたのだが、

二人「……………」

何故無言？

凱乾「なあ、紀霊…なんでそんなに疲れた顔しているんだ？」

華雄「凱乾様の言うとおりだ。今のお前からは眼鏡を掛けた地味目君の雰囲気が出ているぞ？」

俺が疲れた顔しているのはあんた等二人のせいだ…

それと姉者、それ親八だから！これそう言う世界じゃないから！

紀霊「少々掃除をしまして、疲れが出たみたいですね。」

けど二人を怒鳴れない俺はヘタレなのかあ…？

それと姉者が今朝よりも機嫌よくなっている…

二人は俺の言葉に一応の納得をしてくれたみたいで、二人一緒に入浴するとの事。

今日も姉者が星に願う姿を見るのか…

凱乾「紀霊も一緒に入るかい？」

紀霊「食事の準備があるので遠慮します。」

凱乾様の爆弾発言を華麗にスルーした俺なんだけど、

華雄「紀霊と…一緒に風呂…：…き、紀霊！貴様は死ねえい！」

姉者の投げた花瓶が高等部直撃。

紀霊は目の前が真っ暗になった！

それを見ていた凱乾様は

凱乾「いやはや、仲良き事は良いこと…かな…？」

自分の発言が起こした事態に現実逃避を起こしていたみたいです。

仲良き事は…？（後書き）

執筆速度の遅さはどうにもならんw

けど見ている人がいる限り、これからも頑張っ
て行きたいと思いま
す。

御意見、ご感想お待ちしております。

姉者との…（前書き）

投稿遅くなりました。

何時の間にもやらPVが16000を越えている…

姉者との…

「???」「さーで、やりますかな。」

作者「作者のターンドロー！魔法カード【死者蘇生】を使い三途の川でシエスタしている主人公をフィールド（物語）に特殊召還！そしてターンエン…とでも言うと思ったかい？俺たちの物語はまだ始まったばかりだ…」

……

……

……

紀霊「あー…」

俺は後頭部をさすりながら朝日で明るみを帯び始めた庭を歩いていた。

昨日の夜、目が覚めて一昨日の一件を聞いたところ、姉者の「壺は投げ捨てるもの」で俺の頭が壺にクリーンヒット。倒れた俺は耳からドス黒い血を流しながら三途の川に緊急搬送されたって訳だ。相変わらず仕事は昼寝な死神さんを尻目に暇つぶしに散歩したり順番待ちで溢れ帰った幽霊さん達と戯れたりしていたところこっちに戻ってきたらしい。

起きた時に凱乾様が紳士個安心した顔で良かった…って呟いていた。そして姉者は俺に平謝りで俺が許しても落ち込んでいた。凱乾様曰く、一番心配していたのは姉者で寝ずに看病してくれていたらしい。姉者、有り難うね。

しかし姉者との関係が微妙に気まずい…

俺と目を合わせてくれないし、普段よりも元気が無いんだよね。

いやはやどつしたものが…

そんな事を考えつつも井戸に到着。顔を洗い眠気を吹き飛ばす。

ふと見れば姉者が井戸に向かっけてきていた。多分俺と同じで顔を洗いに来たのだろう。

紀霊「おはよう姉者」

華雄「っ」

俺の顔を見るなり顔を暗くする姉者…俺、何かしたか？

姉者は無言で顔を洗うとそのまま逃げるように去っていった。

まだ気にしているのか？だったら速く何とかしないと色々厄介だな…まあ、なんとかなるだろうし今日から修行再開だし考えてもしかたが無い。

俺は考える事を止めて現実から逃げ出した。そして時間は動き出す。

〜修行〜

城門前で凱乾様、姉者と向かい合う。

凱乾「よし、今日から紀霊も修行再開だ。だが、病み上がりだから無理はするなゆっくり慣らすように。」

その言葉を受けて俺は馬に結ばれた紐を自分の体に括りつけ、馬の尻を軽く叩く。

馬「ヒヒーン！」

急に叩かれた為、驚いた馬は猛スピードで走り出す。勿論引つ張られない様に俺も同時に走る。

馬の隣で距離を維持しつつ走る。

凱乾様も今日は馬を追い抜いて連れまわせとは言わず引き摺られることの無いようにすれば良いとの事。

以前は引き摺られるだけしか出来なかったが今なら余裕を持って走れるようにまで成長した…経験10倍って結構ずるいよね？

そんな事思いながら姉者を見やる。

明らかに全力ではないのだが、それでも馬を引き摺る速さの姉者。

まだ俺の事を気にしているのか、表情は暗く何時もの姉者の面影は無い。

その後、午後に大岩スクワットをこなしてその日の修行は終了した。

（屋敷）

今日は珍しく姉者が夕食を作るという事で居間には俺と凱乾様の二人だけ。

恐らく姉者は俺と顔を合わせずらいから自ら厨房に向かったのだろう。

何もすることの無いので適当にポケーっとしてた俺に凱乾様が話しかけてきた。

凱乾「なあ、紀霊。」

紀霊「なんですか？」

凱乾「華雄のことなんだが、一昨日からずっと塞ぎこんでいてな…
どうにかならんか？」

紀霊「そう言われましても姉者には気にするなって伝えましたし。
こついう事は凱乾様の方が得意な気がするのですが。」

実際のところ、姉者に関しては男の俺ではどうしようもない部分もあるんだと思う。姉者については、やはり凱乾様の存在が重要になってくると思う。

凱乾「既に私からは離しているんだ。華雄もそれに納得しているし
後は紀霊が何とかしてくれないと華雄は落ち込んだままよ？」

若干呆れ顔で俺に話す凱乾様。要するにもう一押しあれば何時もど
おりの姉者に戻るから俺にどうにしかしろと言っているようなもの
だろう。

凱乾「と言う訳で、夜にでも華雄の部屋に行って二人で話しなさい。
勿論異論は認めないから。」

紀霊「随分と無茶振りしてくれませぬ凱乾様…」

まったく、この人は…
しかし姉者が今後あのまま塞ぎこんだままだと非常にやり辛い。な
んと言えば良いのか…調子が狂うんだよね。

仕方が無い、姉者のフォローするか。

紀霊「自分の出来る範囲でやりますが。結果は期待しないで下さい

よ？」

その言葉を聞いた凱乾様はニヤリと笑いながら言い放つ。

凱乾「大丈夫だ。紀霊、お前ならきつと成功する。」

随分と信用されている…と思っても良いのかな？

まあ、食事終わってひと段落したら姉者の元に向かうか。流石にここでは話づらいものがあるから姉者も自分の部屋ならある程度落ち着いて話聞いてくれると思うし…なんとなく凱乾様の前で説得したら余計にこじれそうな気がする…

けど…凱乾様も何だかんだ言いながら姉者の事ちゃんと考えてくれているんだな。やっぱり凄い人だよこの人。

凱乾「あ、華雄の部屋行く前にきつちりお風呂入りなさいよ。後近所迷惑にならない程度だったら五月蠅くしても良いから。後、遺書書くなら紙の用意するから言っただね。」

訂正。

何を考えているか理解不能な凄い人だった。

…貴方は俺に何をさせようというのだ？

姉者との…（後書き）

お気に入り登録、ポイント有り難うございます。

先週は色々あつて投稿できずでしたが今後は出来上がり次第早めに投稿します。

呼んでくれている皆様に感謝。

それではまた次回、よろしく願います。

人の話は聞いておいて損はない。(前書き)

今回の回は大幅に変更を行いました。
若干更新が遅くなってきた: orz

人の話は聞いておいて損はない。

…こちら紀霊、姉者の部屋へと続く廊下にいる。
突入準備と心の準備が完了し次第対象の部屋に入室する。

わっほい！紀霊です。

いきなりですが俺は姉者の部屋に向かって絶賛牛歩戦術敢行中です。
いや、あの後お風呂に入ったんだけど…その時紀霊は気が付いた。

姉者の部屋って…仕込み槍が設置されているアノ部屋ダヨネ？

あの立て札は実は嘘でした。って言うのなら嬉しいのだが、今までの修行内容と凱乾様及び姉者の性格を考えると

【あの人達ならしょうがない！】

そんな言葉が脳内に駆け巡る…

信じたくないけれども、今まで何度も何度も三途の川臨死体験ツアーに御招待（強制送還）されている経験がある以上、前世の常識なんて投げ捨てるものっ！だし…

恋姫の世界では常識に囚われてはいけないのですね！

…うん、考えるのを止めて地球の周りグルグル回りたくなってきた…
もう良いさ、たかだか仕込み槍程度なら上手くいけば脇腹貫通程度だし注意すれば三途の川ツアーはまず大丈夫だ服はボロボロだろうけど気合避けでなんとかしてやるよ！

俺は自分に言い聞かせながら牛歩戦法で姉者の部屋に全速前進した。

紀霊「と思っていた時代が俺にもありました。」

とうとう姉者の部屋に到着してしまったわけだが、気分はボス戦前の勇者（笑）だ。

…クイツクセーブとかここらへんで出来ないかな？

だってね

立て札「期間中、仕込み槍増量。ついでに新作の罠を設置しました

提供：凱乾」

立て札さんマジ立て札さん。

姉者の部屋に掲げられた立て札がこんな物騒なコンナコトホザイテヤガリマスヨ？

凱乾様：貴方が何をしたいのか俺には全然わからない…

この流れで逝くと

姉者の部屋に罠設置

その上で俺を姉者の部屋に向かわせる。

部屋に俺入る。

仕込み槍「上から来るぞっ気をつける！」

紀霊「うわらばっ」

…あの人は俺の事を罠の実験台か何かと考えてないか？

さて、どうするか？

ライフカード？それとも心の天秤？

紀霊（悪）「何を迷う事がある？ 何を迷う事がある突き進めい！
今は姉者が微笑むべきなんだ！」

なんか俺の悪魔的な部分が囁いてきた…ジャギ様っぽい台詞でヘル
メットは付けていないよ？

…確かに俺がなんとかしないと姉者が…

紀霊（天）「フハハハハハハ！ 女子供といえどこの紀霊に逆らう
物には死あるのみ！」

待て俺の中の天使的な何か、お前はどこの将星だ…しかも元氣付け
るのが目的なはずなのに言っている事は悪魔より酷いし…
そもそもお前は槍を投げる側の人間だろうが。

脳内にいきなり沸いた二人は互いににらみ合う。

紀（天）「……………」

紀（悪）「……………」

紀（天）「汚物は消毒せねばならんな…」

紀（悪）「ほざきやがれい！」

おーい、勝手に脳内で戦うな。そもそもお前等、北斗でやれ。

悪「ニゲラレンゾォ！」

天「ヒカヌ！コビヌ！カエリミニヌ！」

…取り合えず喧嘩をおっ始めた二人（背景：聖帝十字）は無視す
る事にした。

あーあーあー俺には何も聞こえない。何も見えない。
あ、画面端で投げたあー。
お、良い感じにHIT数を重ねて羅漢撃…これは…いけるか？いく
のか？いったあああああつ！

【魔法の数字27】

出たあああああつ！

全国のジャギ使いが目指す最終形態来た！これで勝つる！

そして最期は勿論…

超ガソフイニツシュ死んだあああああつ！！

いやー、良いもの魅せて貰ったわー。

てか天使も悪魔も強すぎだろ…いくら世紀末だからってヤリコミが
恐ろしいw

そして我が脳内G」

死ぬ前に良い思い出が出来たよ…

色々と話が脱線しすぎて軽く横転していたけど、俺も男だ、覚悟は
決まった。

さあ、姉者との話を始めよう…

……いきなり串刺しとか…そんな事ないよね？

紀霊「姉者ー、入るよー」

扉を軽くノックしてそのまま姉者の部屋へと入り込む。

華雄「紀霊か?! ちよつとま」割と整理された室内、月刊「猪突
猛進」のみが置かれている本棚、壁に設置された武器及び突き出た
仕込み槍、そして上半身裸の姉者。

…ん?

上半身ハダカノアネジャ?

紀霊「……………」

華雄「……………」

互いに沈黙

紀霊も華雄も互いに思考が停止したまま見つめあつ…

先に正気に戻つたのは我等が主人公、紀霊だった。

紀霊「(ま、まずい! これはヤバイ…)」

俺姉者の部屋に入る。

姉者着替え中。

ラッキースケベ!

や、やばいって! 死兆星が輝いているジャギの相手がトキイだった
時くらいに死が約束されたこの状況。
なんとかしてこの場を乗り切らなきゃ…

数少ない脳細胞をフル活用し今の状況に適切な行動を考え出す……
……………はっちやけた!

俺は未だに茫然自失としている姉者を見て一呼吸。

紀霊「姉者…肌綺麗だね。」

………

また沈黙。多分俺の言葉が姉者の脳内で現在処理中なのだろう。
ん？なんでこの間に逃げないのかって？

逆にここで逃げたら姉者が剣振り回して追っかけてくるのは目に見えているだろう？

まあ、俺の脳内は

【移動した方がよさそうだ！】
って何度も何度も叫んでいるんだけどね…

華雄「…き………」

あ、姉者が動き出した。

右手に剣を握り締めて…左手は服を持って胸を隠して…

華雄「紀霊貴様ーっ！！」

やべっ！選択し間違えた！？

俺は即座に反転。成るべく姉者から遠ざかるように全力で走り出す。

華雄「死ねっ！貴様は長く生き過ぎた！」

後からは顔面がトマトみたいに真っ赤な姉者が剣を構えて俺を追い

かけてきた。

紀霊「てか、姉者それ真剣！それで切りかかられたら俺死ぬから！」

華雄「死ね！貴様は死ななければいけない人間なんだ！」

姉者元気付けに来てなんで殺されなきゃあかんのよ？しかも散々話題に出ていた仕込み槍なら兎も角姉者自身にだと？！
御免被るわ！！

紀霊「てか姉者！落ち着いてくれ！胸隠しきれてないからそれなんとかして！」

先ほどから、姉者を見れば微妙に見えるんだよね…近所の人に見られたら姉者が色々和不味い事になると思うんだ。

華雄「だっ、誰の胸が無いだとおおおっ！！私だってまだ…胸は揉めば大きくなるとも言っしまだ未来はあるんだ！紀霊…それを否定した貴様には死あるのみ！…キレイ…キサマヲコロサナケレバ…キサマヲコロス…」

聞き間違いで俺の明日が無い。

…これ以上何も言わない方がイイノカナー？

まったく…胸の話で揉めるのは御免だぞ俺は…

憤怒の化身と化した姉者は全力疾走で絶賛逃亡中の俺に徐々に迫ってくる…

開始から5分ほどリアル鬼ごっこの会場となっていた廊下から庭へ

と進路を変える。

庭に行けばもしかしたら武器があるかもしれないし廊下だと追い込まれたら殺られるしな。

丁度良く庭先に出た俺は木や壁を上手く使い立ち回る。そのためか先程よりも姉者との距離が離れて少しだけ余裕が出来た。

茂みに潜り込み、その勢いのまま木によじ登る。

流石に姉者相手でもこれなら時間稼ぎになるだろう。

華雄「その程度で…私から逃げられると思っているのか？」

！？

首元に突きつけられた剣…なんで…ナンデ姉者が俺ヨリ先二木ノ上二居ルンデスカ？

華雄「随分と不思議そうな顔をしているな。簡単な事だ、木に飛び乗っただけだ。」

どんな脚力しているんだよ…

俺は投降の意思表示。即ち¥（＾０＾）ノ

華雄「さて、言い残す事はあるか？」

あの後姉者は俺を片手で抱えて庭に降り立った。

だからどんな筋力ですか貴方は…

後、胸が当たって微妙に柔らかいですご馳走様でした。そもそも服着てください。なんで俺の顔に胸を押し付けたんですか？…正直首

絞められて苦しかったです。

そして現在、何故か姉者の部屋に強制連行されて床に正座中です。

華雄「さて、何がしたかったんだ？最期にそれ位は聞いてやろう。」

紀霊「姉者が最近元気なかったから心配になって部屋に来たんだ。全面的に俺が悪いから姉者には申し訳なかった。ごめん。」

どう考えても俺が悪いもんね。ここは素直に謝るのが普通だろう。

はあ…、流石に首と胴体がパージしたら俺も死ぬだろうな。

諦めつつ目を閉じ姉者からの一撃を待つ。

華雄「……………」

沈黙、そして姉者が剣を振りかざす気配を感知し、俺は息を吐く。

姉者が剣を振り下ろした音がして

ゴチン！

頭に鈍い痛みが走りました…

紀霊「づう……」

痛い…頭抱えながら床でプルプル震えている情けない姿だというのが自分でもわかる。

華雄「今回はこれで許してやる。しかし次同じ事をしたならばその首が飛ぶと思え。」

どうやら剣の腹で叩かれたみたいですよ…痛い…けど…これで済んでよかったです…

頭を擦りながら俺は姿勢を整えて姉者を見上げる。

紀霊「すまない姉者、次は気を付ける。」

華雄「紀霊でなければ問答無用で首を刎ねていただろう。それと紀霊！」

…もう一度あの言葉を言え。」

あの言葉？
胸？

紀霊「あの言葉って？」

本気で解らん。

華雄「つ／＼／＼ 部屋に入ってきた時に私に言ったことがあっただろつに！」

顔を真っ赤にした姉者がそっぽ向きながら言う…はて？

言葉？…ああ、成る程。

紀霊「姉者」

華雄「なんだ？」

少しの間を置き、もう一度あの言葉を声にする。

紀霊「姉者の肌、綺麗だね。」

華雄「つうううう！？／＼／ 言っんじゃない！」

湯気が出るほどに全身赤くしていた姉者の取った行動は俺を殴る。ですた。…殴られるのも慣れてきたなあ…殴られて意識飛ぶの何回目だろ？
てか、体から本当に湯気って出るんだね…

目が覚めると…

何故か仕込み槍が突き出した天井が見えました。

華雄「起きたか紀霊…良かった。」

俺が起きたのに気が付いたのか、俺の額に手を当てながら心底安心するような表情を浮かべた姉者。額を撫でる手が妙に心地よかった。

紀霊「姉者、ありがとう、大丈夫だよ。」

華雄「いや、此方こそ済まなかった。痛い所は無いか？」

そういつと更に俺を撫でる姉者。優しいなあ…良いなあ…ついつの…

紀霊「大丈夫だよ。」

そう言いつつ起き上がり、寝台に腰掛ける俺を見た姉者は隣に座る。

少しの沈黙。けど心地良い空間。

先に口を開いたのは姉者だった。

華雄「実はな…」

続く。

人の話は聞いておいて損はない。(後書き)

今回はここまでです。

ここで区切るなwと言う異論は認める。

次は来週の更新ですが作者のテンションや忙しさ次第です。

御意見、ご感想お待ちしております。

振り返る事は出来ても帰れない。(前書き)

おーし、短いしご都合主義だが何とか投稿w

振り返る事は出来ても帰れない。

華雄「実はな」

そう言つと姉者は一呼吸置いて次の言葉を紡ぎだした。

華雄「実は最近、お前を見てると変なのだ。」

…は？

変…？

紀霊「変とは具体的には？」

変といきなり言われても対応に困る…俺姉者に何かしたっけ？

…もしかして姉萌え属性がばれた？それとも姉者が夜にしているお月様に愚痴る（胸の悩み）ところを隠れて見ていたのが知られたか？

華雄「自分でも良く解らんのだが、お前を見てみると時々自分の制御が効かなくなつて…気が付けばこの前のようにお前に暴力振るつたりしていたんだ…」

あー…解らん…

えーと…元気な姉者は弟を見るとついつい殺したくなっちゃうんD

A …？

いやいやいや、どんだけ危険な病気よそれ。精神系か？精神なのか？取り合えず他にも何かあるか聞いてからでも対応は遅くないはずだ…

紀霊「その衝動以外に何か症状は？」

華雄「他にか…紀霊が頑張っている姿とかを見ると嬉しくなってきた私も頑張ろうって思ったりもする。後、稀に凱乾様の胸に視線が行っている紀霊を見ると気分が悪くなるな。」

さて、一つ訂正させていたただこうか…俺は凱乾様の胸に目が行った事など無い!…多分。

しかしまあ、姉者の元気の源になっていたらそれはそれで嬉しいのだが…つーか姉者。胸にとことん劣等感あるのね…

なんで女の子って胸とか体重とか凄い気にするのか解らん。

前世でも「お前は乙女心が解っていない。」って言われた事あるけど男なんだから解る奴の方が凄いわw

紀霊「まあ、姉者を元気付けているなら良いんだけどさ…」

どうにも返答に困るもんで頭を掻きながら答えておく。

しかし

華雄「だからなのだ…」

紀霊「へ？」

華雄「だからなのだっ!」

姉者は急激に声を荒げて話し続ける。

華雄「紀霊が私を姉と呼んで慕ってくれている。それが私にとって嬉しいし私も紀霊を大事に思っている! だから今まで紀霊に私がしてきた行いが許せんだ!」

紀霊「…」

華雄「凱乾様も大事だ、凱乾様には恩義もあるし私にとっては師で

もあり母と呼んでも良いだろう。

私は凱乾に今まで護られてきたようなものだからな。だが紀霊は違う。私にとっては護るべき弟なのだ。

なのに護るべき者に暴力を振るう自分が！

成るべく普段どおり振舞うようにしていた、だがそんな自分が許せないしそれでも慕ってくれている紀霊を見ていると苦しいのだ…」

俺は無言で唯姉者の独白を聞いていた。

経験上、こういう状態の人を相手にした場合、下手に口を出せば逆効果になる可能性は極めて高いと思ったからだ。

それに、俺自身が姉者自身の言葉を聞きたかった。

…俺って馬鹿だよなあ…

姉者がこんなにも苦しんでいるなんて…知らずに思いつきり馬鹿やっていたとは…

軽く今までの自分に自重しろと殴りたくなる衝動を感じつつ、姉者に目を向ける。

そこには

涙を

流した

姉者が

俺を

見つめていた…

華雄「…」

紀霊「…」

互いに沈黙。

姉者が何を考えているかは判らないが、今俺がしなければならぬ事がある。それだけは解る気がした。

なんでかは自分でも解らないけれど

姉者の両肩に手を置き

姉者を抱きしめた。

華雄「つな!?!?!」

振りほどこうともがく姉者。だが、いきなりだった為か力は入っておらず俺の腕の中で暴れる程度。

振りほどかれて堪るかと言わんばかりに力を籠めて姉者を更に抱きしめる。

すると姉者は急に抵抗を弱め大人しくなる。

紀霊「姉者…」

丁度俺の肩に姉者の顔が乗る形だったため姉者の耳元は直ぐ真横。耳に息が触れたのか俺の眩きにビクッと反応する姉者。

紀霊「俺って人の考えとか理解できない方だから…姉者が話してく

れて本当に良かった。」

華雄「…」

姉者は無言のままだが構うものか。姉者が自分の本心を言ってくれたんだ！俺も本心を言うのみだ。

それに、俺は女の涙を見るのが一番嫌なんだよ！

紀霊「俺はね、自分に正直で常に真っ直ぐ進んでいる姉者も俺に優しくしてくれる姉者も好きだ。

勿論凱乾様も好きだけど、姉者が一番好きだよ。

姉者が俺に乱暴している自分を嫌うって言うなら、俺も協力するか。乱暴な事とか色々二人で改善して行こうよ。

凱乾様だっけと協力してくれるよ？」

今、自分の中で言える最大限の言葉を姉者に伝える。

紀霊「俺は、これからも姉者が好きだよ。」

振り返る事は出来ても帰れない。(後書き)

もう少し幼少期編が続きます。

もう少しで本編キャラの登場か…書くの大変そうだな…

御意見、ご感想お待ちしております。

どうしてこうなった？（前書き）

難産な上にカオス…どうしてこうなった？

どっしてこうなった？

やあ、凱乾だ。

紀霊を華雄の部屋に向かわせてから半刻程経過したんだが…

【紀霊の悲鳴が聞こえない】

うーん…仕込み槍程度だったら回避されるか？

いや…新作の罫ならばきつと殺してくれるはずだ…

私は紀霊の悲鳴が聞こえてくるのを、今か今かと待ちながら酒を煽った。

（姉者の部屋）

さーで、なんか非常に腹立つような気がするがそんなことはなかったんだが…

紀霊「なあ、姉者…」

姉者を抱きしめてから既に3、40分は経過しただろう。

流石に姉者も落ち着いたみたいで暴れる事もなくなったんだが…

華雄「なんだ？」

紀霊「そろそろー離れようよ…ね？」

紀霊「…嫌だ。まだこのままが良い。」

姉者はそう言っていると俺の背中に廻っていた腕に力を籠める。

…姉者の性格がおかしくなりました…

なんて言うか…

【俺の知っている姉者じゃない…】

どうしてこうなった？

どうしてこんなことになった？

脳内独り会議でも開会して打開策（現実逃避）でも考えるか？

華雄「…か？」

紀霊「ん？」

姉者が何か言ったみたいだが、脳内独り会議で乱闘騒ぎがあったから聞いてなかった…脳内会議も考え物だな…

って何故か俺の胸に顔を埋め、上目遣いで俺を見つめる姉者を視線が合う。

華雄「紀霊は私とこうやっているのは嫌なのか？」

……………姉者のキャラ違うね？

こういう甘えキャラって未登場ですけど呂布さんのキャラだよな？
ナンデ姉者がソナナコトオー？

そして、なんでこういう展開になっているの？前話の展開はこの
イスカンダルに旅立った？

戻って来い。地球よりも俺がピンチだ…

そもそもなんで俺はここにいるの？

俺はどこ？ここは誰？

しかし…一つだけ本心から言える事がある。

【俺の姉者がこんなに可愛いわけが…ある！】

良いよね！年上の姉属性が実は甘えてきますって！

しかし…このままでは姉者も俺も脳内桃色フィーヴァータイムが継続してしまう。

ここは一つ、心を鬼にして…理性よ！欲望に打ち勝ってくれ！

理性「どうやらここまでようだ…」

欲望「テンハノカマエ！テンハノカマエ！」

ちよw

理性「なんでサラダバーしようとしてるの!？」

早いよ！早すぎるよ！執念足りてないよ!？」

大会なの!？」^{ピンチ}大会なの!？」

理性「サラダバツ！」

欲望「お前もまた強敵…」^{とも}

おいっ理性！何しに来たんだよお前！

紀霊「嫌じゃ無いよ。それと、姉者の髪の毛ってサラサラで綺麗だよね。触っても良いかな？」

俺の馬鹿ーっ！

なんで？なんでなの俺のマウス！？

本音と欲望に忠実過ぎて執念足りてるよ！

自分のことなのに清清しいったらありやしないよ！

華雄「ん、紀霊なら触っても良いぞ。／＼／」

姉者「っ！お願いだからこれ以上俺を誘惑しないで！

欲望「ほああああっ！」

欲望さんが高まりすぎて上半身裸になった！

そつと姉者の髪に手を置いてみる。

…………… ナデナデ

触れた瞬間にふわつとしたさわり心地、艶やかな髪質、撫でた際に流れるような動きで元に戻る。

…無茶苦茶撫で心地いいんですけど…

紀霊「姉者の髪の毛、触ると気持ち良い…」

なんだかともルネサンスな気分…

欲望「ユクゾツユクゾツユクゾツユクゾツユクゾツハァーんツユク

ゾツユクゾツツッタァユクゾツユクゾツユクゾツ」

おい、その存在自体がバグ…高まりすぎだ…

まあ…姉者って…核兵器以上に危険な兵器でね？

華雄「紀霊の撫で方、気持ち良いな…もっとしてくれ／＼／」

予想以上にMAP兵器でした…いや、ヒゲのガンダムかもしれない。

紀霊「やれやれ、我俣な姉者だ…」

俺の理性がサラダバーして欲望はマイムマイムで荒ぶる中、姉者の気が済むまでこのままで居た方が無難である事は確定的に明らかであると思います。

そんな言い訳をしつつ力を籠めて姉者を抱きしめ、更に髪の毛を撫で続ける事にした俺が居た。

??「桃色フィーヴァータイムウツ！継続う！！」

作者【その後半刻ほど二人の桃色フィーヴァータイムが継続した為割愛する。 キングクリームゾン！】

あー…ども、紀霊です。

先ほどと同じく姉者の部屋で二人つきりなんだけど…

やっとこさ姉者が甘えるのを止めてくれました。

まあ、止めてくれたきっかけが…ねえ…

↓紀霊の回想入りまーす↓

↓桃色フィーヴァータイム中↓

仕込槍「横から来るぞ！気をつけろっ！」

なんと壁から仕込槍さんが突き出してきました、俺の頬を掠る。

華雄「よ、よくも紀霊をつー！！」

姉者が槍をへし折ったと思えば、窓の外へとグングニル致しまして…

横槍「It can't fly!!」

…横槍さんは犠牲になったのだ…

ふぉ～えぼ～（-_-）ノシ

伝統のカナダライ？「タライ 落とす 私 コーメイ」

何がスイッチだったか知らないがタライみたいなものが落ちてきて俺の頭にクリーンヒット。

いや…あんまり痛くないんだよね…

窓の外にタライを投げ飛ばし、姉者は俺に話しかけてきた。

華雄「紀霊！無事か!？」

涙目の姉者に少しグツとくるが表情に出さず頬を拭う。あー軽く血が出てらw

紀霊「大丈夫だ、問題ない。」

心臓はドラムマニア並のリズム刻んでますけどね。

華雄「血が出ているじゃないか！ さあ、私の膝の上へ!!」

何故に？

…紀霊の回想終わりまーす…

何が何だかわからないうちに…頭を掴まれて、姉者の膝に頭をシューッ！！

姉者の機嫌が【超 エキサイティング!】

…姉者は心配症だなあ…

そついや、前世で【お父さんは心配症】ってマンガは面白かったなあ…少女漫画とは思えない程のギャグで好きだった…

華雄「ん／＼／＼ 紀霊、痛いところがあつたら私に言うんだぞ」
姉者のキャラ崩壊から目を背けていたが…現実見ないとなあ…
デレ？ 姉者まさかのデレ期到来？

本来の任務である「元氣付ける」って成功は成功だけど…「こうかはばつぐんだ！」+「きゆうしょにあたった！」並み若しくはそれ以上の効果出してないか？
それにしても…マジで仕込槍が設置されている部屋って…なんで姉者はここで生活できるんだらう…

さつき出てきた槍からは殺氣感じたし…オレノキノセイダヨネ？
さて、そろそろ状況を打破しなければ…

紀霊「姉者、怪我也大丈夫だしそろそろ自分の部屋に戻るよ。」

華雄「何故帰る必要がある？ 何故ここに居てはいけない理由がある？ 今日はこの部屋で寝れば良いだけの話ではないか！」

紀霊「よし姉者、時に落ち着け。」

その提案は殉星の漢じゃなくても誘惑に負けそうだからね？
この時代に胸に七つの傷を持つ男を出現させるわけにはいかないからね？

作品のジャンルが別になるからね！？

紀霊「姉者、流石に今日は帰るよ…」

だからね、そんな涙目で俺を見ないで！心が、心が痛い！

あーもう、幾ら子供だからって男女が一緒に寝るとか…添い寝するかしないかを理性が2ラウンド連続でサラダバー決めかねないから勘弁してくれ。

何か打開策は無いか？

1 頭脳明晰（笑）な紀霊は突如名案を思いつく。

2 仲間？（凱乾様）が助けに来てくれる。 高確率で敵になる可能性大

3 現実是非情である。

…取り合えず2は無いな。

あの凱乾様が助けに来てくれる訳が無い。
姉者の部屋に設置してあった罠の数々がそれを証明してくれるし…

更に言うところの選択肢を取ったら今までの展開的に色々と不味いと思う。

頭脳明晰では無いけどなんとかして打開策…あ…

紀霊「姉者…」

華雄「紀霊…？」

すうつと息を吸い込み思いついた秘策を放つ。

紀霊「^{すう}頭だ。」

華雄「へ？」

いきなりの事にキョトンとした表情の姉者…当たり前である。

紀霊「俺の真名、家族以外では姉者に預けるのが初めて。」

華雄「へ？あ、え？へう？／＼／」

だから姉者…それ違う人…

紀霊「戸惑うかもしれないけど、姉者になら預けても良いって思ったから…預かってくれるかな？」

これぞ起死回生の一手！

【真名預けてドサクサにまぎれて明後日に向かって全速前進！】作戦…苦し紛れの手だし超展開だとかのツッコミは止めてもらいたい。

華雄「わ、わかった…紀霊のま、真名は確かにあずひやった…」

姉者…言えてないって…

紀霊「真名も預けたし俺はそろそろ退散するよ。じゃ姉者今後ともよろしくねー」

そう言っつてすぐさま入り口に向かい部屋を出る。

出た瞬間、俺は速攻で自分の部屋に走り出した。

まあ、なんか恍惚の表情で天井眺めてたし追っってくる事は無いだろうが年には念を入れてっつてやつだ。

自分の部屋の前で姉者の部屋を一瞥、2、3分様子を見たが…追っってくる事はなさそうだ。

溜息をつきながら部屋に入る。

なんかもう…どっと疲れた…

あーもう、早く寝て明日に備えたい…

華雄「おかえり顕／＼／」

.....

紀霊「間違えました。」

部屋から出て深呼吸。

スーハースーハー…

よし、落ち着いた。あれは幻覚でここは俺の部屋。

あれは姉者なんかではなく幻覚…そう幻覚なんだよっ！（涙目）

ガチャリ（オープンザ扉）

扉を開けて部屋に入る。

うん、俺の部屋だ。

華雄「おかえり顕／＼／」

うん、幻覚だマジ幻覚だ。

頭を抱えて幻覚を排除する方法を考える。

…メダパニって殴られれば解除されるんだっけ？

それともマヌーサ？

いや、新手のホログラムかもしれん…

華雄「いきなり部屋から出るのでびっくりしたがそういうことだったのか。納得したよ。」

えーと納得したらば消えてきれ幻覚。

俺は魔法のマツシユルームや幸せになれるとおう謳い文句の白い粉は使った覚えは無いし使う気も無い。

華雄「たしかに私の部屋だと罾があるから頭も落ち着いて寝られなものな。自分の部屋と一緒に寝たいならお姉ちゃんに言ってくれば喜んで来るのに…あ、それから私の真名は慧。お互い初めて同士だな／＼」

真名的な意味で。てか真名的な意味だと信じたい。

…幻覚であつて欲しかった…

もしかしてさっきの真名預けるって選択肢も間違っていたの？どうということなの？馬鹿なの死ぬの？

『おーい、紀霊。』

ん？

『皆のアイドルしんちゃんだぞ』

しんちゃああああんっ！？何？1話振りの登場だなおい！
つてことは脳内？脳内に語りかけているってアレか？

『しょうゆつことだぞ、色々と混乱しているみたいだから説明しに来てやったぞ感謝しろ。』

有り難いけど感謝したくない気もするが、取り合えず三行で説明頼

む。

『真名貰う華雄

蝶 エキサイティング

紀霊の部屋へと突貫工事』

…おk把握。

俺は地雷の上から上へと八艘飛びしてたのか…

良く見たら壁に人の形した穴空いてるし…

姉者は俺の布団の上に座って両手広げているし…

紀霊「どう收拾付けろって言うんだよこれええええっ！」

凱乾の罨やその他諸々により、夜の長安に紀霊の空しい叫びが響き渡ったとき。

どうしてこうなった？（後書き）

投稿遅くなるわ色々と酷いわで何か…申し訳ないです。

大体の流れは出来ているのに一向に話が進まない…

いきなりですが、キャラ設定等も公開した方が良いでしょうか？

それらも含めて

御意見ご感想お待ちしております。

それぞれの闘い方（前編）（前書き）

まず始めに…

先週更新すると言っておきながら更新出来ずすいませんでした。
理由は後書きで説明します。

それぞれの闘い方（前編）

やあ、凱乾だ。

いやー…紀霊ならやってくれと信じていたよ。

華雄からほのかにどころか思いっきり香る乙女 臭！

いやーしかも姉と弟だよ！？

弟子です。

これは心に来ないわけが無い！

うんうん、華雄も私と同じでやっぱり女の子だな。

昨日一昨日よりも良い顔しているし動きも格段に違う。

そして何より、紀霊に対する態度が…

なんか隙を見ては磁石みたいに紀霊にひっついてるんだが…まあ、
見ている分には面白いし放っておこう。

…俺には、微かな希望があった。

昨日の一件から一夜明けて修行が始まったら姉者も何時もどおりに
戻るかな？って期待していたんだ。

それなのに…部屋に追い返して大急ぎで壁の修復して、部屋で凱乾
様の悪口言ったら言ったで槍が壁を突き破ってくるし…

なんなんだよこんちくしょう（；；）

朝起きたら姉者が俺の頭抱いて寝てるし、しかも力強いから動けな
いし…

何がと言わないが当たって痛かったんだぞ！

今だって…

華雄「頭、今日の鍛錬は私に付いてくるんだぞ！！　もし紀霊が付いて来れないようなら…手を繋いで私が引つ張ってあげるから安心して良いぞ。」

こんな感じですよ。

しかも手を繋ぐと言うよりは現在進行形で姉者が俺の手を掴んでいる…引つ張り回されるの確定ですね。わかります。

紀霊「姉者…流石にそれは勘弁してくれ…」

姉者のペースで引きずり回されたら夕方には体半分失いかねん。

後、凱乾様。

珍味奇天烈かつ腹の立つ目と笑みを止めて下さい。

見てると「おい、そこに座れ…。」って感じに画面端で投げたくなる…まあその後に大魔法発動できる人なんて滅茶苦茶限られてるけどね…

～～城門～～

何だかんだで城門の外に来た俺達

恐らくエンドレスランニングが今日の内容だろう。

…なんか…凄く久しぶりにコレやる気がする…

凱乾「それでは一周したら私と一騎打ちな。じゃ、行ってこい。」

凱乾様の言葉が合図となり俺は走り出【グワシッ】す？

1：腕を掴まれた。 2：誰に？

3：ジョインジョイン

4：アネジャア

5：。。。（；）

華雄「さあ、ユクゾツ」

紀霊にはこう聞こえました。

刹那、衝撃を受けながら姉者に引きずられる俺。

紀霊「ちょ！どこの運送会社社長か姉者は！？ あ、姉者！離

してくれ！このままじゃ俺がセンターマンになってしまっつー！」

しかし悲しいかな…

更に力を籠めて紀霊を掴み、ついでに加速した華雄の脳内は…

〔華雄脳内開始〕

紀霊「姉者、俺はこれからも姉者について行く。…だから…離さないでくれよ。」

やたらとキラキラした紀霊の言葉を受けていた。

〔華雄脳内終了〕

華雄「分かっている。紀霊…」

紀霊「分かってくれたか姉者…。なら手を放して…」

ああ…やっと放して貰える…

若干涙目になりつつあった紀霊は華雄の言葉に安堵した。

…だが

華雄「この手を離すもんか!！」

紀霊「真っ赤な誓いいいいいいいい!？」

現実には非情にも紀霊を裏切ったのであった。

やあ、今日二度目の凱乾だ。

今日の鍛錬…慧が一番に挑んでくるのは簡単に予想出来た。彼女は最初から最後まで全力疾走で私に挑んでくるからな。

だが、全力疾走で紀霊を引きずる慧が来そうな場合はどうすれば良いのだろうか…？

まあ紀霊だしその内回復するだろう。

紀霊め、華雄の真名を決めた挙げ句交換するなんて…

なんでそんな面白そうなことゴホンゴホン…大事な事に私を除け者にするから見かねた神様が可愛らしい私の為に天罰を下したに違いない!

これに懲りたら私との真名交換を早く済ますんだな!

朝の内に紀霊と凱乾の真名交換は済んでいます。

しかし、昨日の一件から仲間外れにされたら凱乾はへそを曲げてしまったらしく華雄は真名で呼ぶが紀霊は真名で呼ばないという子供みたいな真似をしています。

華雄「香ウキ(凱乾の真名)様!いざ尋常に勝負!！」

気が付けば、凱乾の目の前まで来ていた華雄が剣を握りしめ構えていた。
もう片方の手には未だ我らの主人公がボロ雑巾の如く握りしめてられている。

凱乾は額に手を置き溜め息一つ

凱乾「取り敢えず紀霊を解放してやれ。一騎打ちはそれからだ。」

華雄はそう言われると紀霊を掴んだ手に目を向ける。

華雄「顕ー！？大丈夫か！？走っている間にやられたのか！？誰だ！一体誰にやられたんだ！」

鏡を見る。

幸いなことに紀霊は10分程で復帰したらしい。

復帰した際、紀霊が「あ、帰って来れた。」などと呟いており凱乾は非常に焦ったとかなんとかか。

紀霊「痛つつ…」

現在俺は姉者による市外引き回しから解放されて

華雄「だからな、凱乾様に勝つにはやはり力で攻めるべきだと私は思っんだ。」

姉者と併走しています。

勿論手は掴ませて居ませんよ？

また数秒間も体が宙に浮くスピードで走られたら溜まったもんじやないからね。

紀霊「姉者…：そう言いながら何度負けた？」

華雄「百より先は数えておらぬ。」

紀霊「…：ただ正面から力押しすれば勝てるほど香様は甘くないだろ
うに…。」

華雄「ならば顕はどう攻める？」

そう言われると紀霊は数秒程思案顔で黙る。

そして華雄に顔を向け口を開いた。

紀霊「凱乾様の闘い方は言うとなれば守りの型。ならば攻め形を変えつつ戦う複合した戦い方が良いかもしれない。」

華雄「顕…。」

華雄は真剣味を帯びた表情で紀霊を見つめる。

紀霊「どうした姉者？」

華雄「さっぱり分かん。」

その言葉を聞いた瞬間

ズザザザザー

俺は盛大にズッコけた。

真面目な表情だったので身構えいた分：損した：

俺は他人から見れば若干疲れた表情を浮かべていただろう。ゆっくりと立ち上がり砂埃を払う。

華雄「大丈夫か頭！痛いところがあったらお姉ちゃんがしっかりちやっかり一日中看病してあげるからな。」

紀霊「大丈夫だ問題無い。」

立ち止まっても仕様がなかったので走り出す。

姉者も大丈夫とわかり併走し始めた。

：姉者：怪我が無いって言った時なんで残念そうな表情だったん？

気を取り直して

～～～紀霊説明中～～～

闘い方には基本的に攻めと守りの二つがある。

闘いとはその割合を如何に調整するかが大事であり例を上げれば姉者の場合攻めと守りの比率が10：0又は9：1の完全にガンガン行こうぜ！タイプ

凱乾様は2：8だったり4：6だったりするが攻めても4：6、現時点では守りを重視していると見て良いかもしれない。まあ一番問題なのは力量差だがね。

力量に差があれば割合なんぞ意味が無いが、力量が同じ同士だと割と大事だったりするんだ。

他にも絡め手など様々な闘い方があるが、今回は一番の基本について説明したよ。

くく説明終了くく

華雄「成る程、闘い方の相性を考えてみるのも大事か。」

紀霊「ま、姉者みたいに自分を貫くのも良いと思うが参考程度に
て訳だ。」

凱乾「で、どう戦えば私に勝てるって？」

野生の凱乾が現れた！

周りを見回せば、スタート地点かつゴール地点でもある城門に俺達
が居る。

…解説に集中し過ぎたためか、どうやら一周走り終えていたみたい
だ…

凱乾「良く言うよ。私の前まで走ってきたと思ったらそのまま慧に
話し続けていたし、私が呼んでも見向きもしないし…」

集中力さん…本気だし過ぎです。

凱乾「んで、どっちが先かな？なんなら2人で来るかい？」

華雄「勿論私からっ」

紀霊「姉者！提案がある！！」

武器を構えた姉者を制止し凱乾様をちらりと見る。

華雄「なんだ頭？私は早く乾様様に挑みたいんだ。提案があるなら

早くしてくれ。」

猪突猛进状態一歩手前の姉者を宥めるように俺はゆっくりと喋り出す。

紀霊「ここは力を合わせて闘おう。」

～後編に続く～

それぞれの闘い方（前編）（後書き）

先週、更新が終わってから急に忙しくなった事と作者の遅筆が一番の原因です。

見てくださっている読者の皆様、遅くなって申し訳有りませんでした。

次の更新も若干遅くなりそうですが宜しければこれからも宜しくお願ひします。 m ((m

柳

それぞれの戦い方（後編）（前書き）

友人「俺は明日明後日！人間を辞めるぞおおーっ！柳いいいつ！」

俺「何をするだあーっ！！」

（本日の友人との会話より抜粋）

早くも投稿出来た。

変態紳士沈没戦艦BOTUさん、とんぷーさん、逆お気に入り登録有難うございます。

後書きもお読み下さい。

それぞれの戦い方（後編）

凱乾「ほお。」

あの華雄に対して共闘を申し出る…か。しかし華雄は自分の武に誇りを持っているから受けるかどうか…面白そうだし様子見とするかな。

華雄「紀霊…二対一と言うのは…卑怯ではないか！」

紀霊の提案に対して慧は憤りを露わにしている。

まあ、分からんでもないね。慧は文字通り正面突破、正々堂々だからなあ。小さいながらも武人って訳か…
うーん…紀霊はどう言いくるめるか…

紀霊「しかし姉者。俺達と凱乾様を比べたら決定的な違いがある！
それは…」

一呼吸置いて紀霊は叫んだ。

紀霊「それは…経験、体格、闘い方そして何より…実力が足りない！」

華雄「だからと言って！」

華雄の声を遮るように紀霊は声を張り上げる。

紀霊「ならば姉者に聞こう。姉者は戦場において志半ばで倒れる事

を望むのか？」

華雄「闘いの中で死ぬは武人としての本望！」

二人の口論は激しさを増していく中、凱乾だけは黙ったまま二人を眺める。

紀霊「ならば凱乾様が先に戦場で果てたら姉者はどうする？姉者は悲しまないのか？」

華雄「悲しまぬ訳が無かるう！香様は私にとって母と同じだ。そして頭は弟以上に想っているんだぞ！！！」

凱乾「慧……」

華雄が自分の事を其処まで慕ってくれている事実には凱乾は照れくさそうに頬を掻く。

紀霊「だったらどんな手を使っても生き延びるべきでしょ？勝てば良い、生き残れば良い！それが全てだ！」

確かに紀霊の言うことにも一理ある。

幾ら奇麗事を並べたりしても【勝てば官軍】敗者には悪の烙印が押されるだけで戦乱の世に卑怯だとうだと考えたら何も出来ない。

華雄「……………」

一理あるが故に、華雄も紀霊が言いたいことは理解できた。

しかし、武人としてのプライドが華雄の心にある以上華雄も二つ返事で返す訳にもいかなかったのだ。

凱乾「二人とも其処まで!!」

このまま続けても事態は平行線のままだと感じた凱乾は二人を止める。

凱乾「このままじゃ互いに水掛け論で埒があかん。確かに慧の言っている事も紀霊の言っている事も間違っていない。だが、互いの視点が違うから纏まることは無いぞ。」

華雄の主張は武将個人の考え方であり武人と武人同士の闘いのため、あくまでも個人の視野。だからこそ正々堂々に見える。

反対に紀霊の主張は組織的な、言ってしまうえば勝利する事を前提とした考え方で卑怯、冷徹とも言える。

殆ど極論に位置する二人の主張が真つ向から対峙するのは当然と言えた。

参ったな〜

二人共間違っていない分白熱したわけだし…困り果てた私は

凱乾「紀霊、慧はお前の案に反対のようだし…ここは退いてくれな
いか?」

比較的考え方に柔軟性がある紀霊に対して譲歩するように話してみた。

紀霊「……………」

凱乾「紀霊、頼む。」

紀霊「…分かりました。姉者、姉者の主張は確かに正しい。だが全員が全員、それを受け入れられる訳では無いと言ったことを覚えておいて欲しい。」

紀霊はそう言った後、一步後ろに下がる。恐らく自分が退きますとの意思表示。

凱乾はそれを見て頷き、華雄は未だに納得いかぬと言ったことが見て取れる表情ではあるが槍を構えて大きく一振り。いつでも凱乾と戦闘出来る体勢に移る。

凱乾は剣を構えて華雄を見やる。

凱乾「さて、始めるとしよう。今日は徹底的にしごいてやる！」

~~~~~夕刻~~~~~

城門を一瞥すると肩で息をする華雄と紀霊

それに比べて凱乾は剣の腹で肩を叩き二人を見つめる。

凱乾「まったく…慧！私と慧の実力は全く違う。勝ちたいと思うなら自分の武以外にも色々な事を取り込んでみる！それが自分の成長にも役立つ、自分を貫き通すのはそれからでも遅くないぞ？」

それと紀霊！お前はもう少し個人を出せ。慧とまでは言わないが自分を貫いてみる。今のままだと全体優先のまま流され続け、集団の一兵卒と同じく命令に従うだけの歯車と一緒だ。」

二人「……………」

二人はうつ伏せ状態のまま無言で凱乾の話聞いていた。

凱乾「お前等は考え方を半分ずつにすれば丁度良いんだ。…少しそこで頭冷やしてきなさい。私は先に帰る。」

凱乾は武器を収め、城の中にスタスタと入っていった。

残された二人は力を振り絞りうつ伏せから仰向けに体勢を移行、朱色に染まった空を眺め呼吸を整える。

…あゝ…息が全然整わん。つか凱乾様…敢えて決定打を出さずにジワジワと攻撃するとか…幸い急所は外してくれたみたいだが良くて全身打撲だろこれ…。

顔を動かすのも躊躇うほど消耗したためだろうか、姉者の姿は確認できないが恐らく俺と同じ状態だろう。せえせえ言ってるし…

………

あれから五分程経過しただろうか…

立つて歩く程度ならなんとかなるだろうがもう少しこうして居たいし先程の口論のせいだろうか、互いに沈黙まま…謝らなければいけないなって思うが………

「華雄」

「紀霊」

凱乾様…沈黙が………痛いです。

気まずい…非常に気まずい…

え？

どうするのコレ？

正直この空気耐えられないんですけど？

【お〜い紀霊！】

この無邪気系ロリ声…しんちゃんか！？

【当たりだ。いや〜なかなか格好の良い台詞じゃないか。あれだ、邪鬼眼ってやつなんだらう？】

疼いて無いのに厨二認定！？

【確かどんなに腕の良い医者でも完治することは不可能な人類史上最強の病だって話だな。】

いやいやいや、不治の病的な所は認めるけど厨二病は医者がどうこう出来るモノじゃないし…  
そもそもどこで知ったの？

【神界図書館の第一種危険度精神疾患関係の欄に厨二病特設コーナーがあつてそこで知ったんだ。】

何その御大層な名前は…

【第一種危険度って言うのはネクロノミコンやデスノートと同等の扱いを受けたモノに付けられる総称だな。】



前世の厨二病な皆さん、どうやら厨二病は神様の間ではバカみたいに危険な病らしいです。

【危険だぞ〜神様だって発症例があるらしいし。ま、死に至る訳では無いから発症しても言動がおかしくなる程度らしいぞ？】

…しんちゃん…んで用事は？

色々と耐えきれなくなった俺は露骨に話題を変える。

【ああ、弟がお前に興味があるらしく今度話がしたいって言っていな、今度紹介するって知らせるのが目的だ。】

ふむふむ、ある意味俺がこの世界に来た元凶さんね。承知した。宜しく言っておいてくれ。

【伝えておくぞ。じゃ、今日は帰るからな。これからも頑張れよ〜】

なんつーか…色々と大変な事を喋るだけ喋って帰ったな…

しんちゃんとの会話…正味五分位か？

華雄「顕…」

やべ…

しんちゃんとの会話に集中してて周り見てなかった…

紀霊「すまん姉者、少し呆けていたみたいだ。」

華雄「成る程な。だから呼んでも反応が無かったわけか…」

すいません、神様（幼）と話していました。なんて言えないよ…

紀霊「それで姉者、話とは？」

露骨二話進メル俺！

華雄「先程の件、すまなかった。」

……なん…だと？

姉者から…謝った…口論の時に譲らなかった姉者がか…

華雄「考えてみれば凱乾様の言うとおりで。本来なら私が退くべきだったが熱くなりすぎて紀霊に退かせてしまったな…すまなかった。」

…俺も何ガキみたいに意地張ってるんだ…姉者だって自分から折れてくれたんだ…

紀霊「姉者…、俺こそ悪かった。姉者には姉者の考え方があるのに俺の考えを押しつけてしまった。ごめん。」

痛む体に鞭を打って姉者の方を向き頭を下げる。

華雄「ま、待て！私が悪かったんだから。私こそすまん！」

姉者も慌てた様子で起き上がり頭を下げる。

紀霊「いや、俺が悪かったんだよ。」

華雄「だから悪いのは私だと言っているだろうに！」

紀霊「いや、俺だって！」

二人「……………くくっ」

睨み合う中、二人はほぼ同時に笑った。互いに凱乾様から言われたことを思い出し、また同じ事を栗か返していたからだ。

華雄「これではまた香様に動けなくなるまでやられてしまうな。」

毎回動けなくなるまでやられるのは二人とも御免と言う訳だ。

紀霊「ならば姉者。俺から提案だ。」

ニヤリと言った表現が似合う笑顔で華雄に話しかける紀霊。

対する華雄は何か感じとったのか、此方もニヤリと言った表現が似合う笑顔で紀霊を見やる。

華雄「ほう、下らぬ提案ならば却下だぞ？」

お互い、次に言う言葉は既に決まっている。

紀霊「ここは互いに悪かったと言うことで収めないか？」

この紀霊の提案に

華雄「その妙案委細承知した。」

華雄は即答した。

そう言うと二人は笑い合いながら立ち上がる。

華雄「さて、顕。そろそろ帰って食事の準備をしなければな。」

体に付いた誇りを払いながら二人の帰りを待つであろう師を思い浮かべる。

紀霊「早く準備しなきゃ香様がへそを曲げるな…」

一瞬その姿を想像し、苦笑を浮かべながら城門をくぐり抜ける。

華雄「余りにも遅かったら明日は今日以上に厳しいかもしれないな。」

そう言われて今日の鍛錬を思い出すと紀霊はため息一つ

紀霊「そいつは勘弁願いたいね。姉者、さっさと帰るとしよう。」

そのまま二人は街中を歩く。

あれだけ痛かった体は今不思議と心地が良い程度に感じるのは恐らく心境の変化によるものだろう。

二人は夕方の賑わいを見せる街中を並びながら歩く。

特に会話を交わすことなく歩くなか、ふと紀霊が口を開ける。

紀霊「姉者。」

華雄「なんだ顕？」

少しの沈黙の後、

紀霊「これからもよろしく。」

紀霊はその一言を言うともた口を閉ざす。

華雄は微笑みを浮かべながら

華雄「此方こそよろしく。」

と返す。

気が付けば、手と手が触れ合う位に二人の距離は縮まってどちらからともなく手を繋ぎ歩く。

さてさて、師が待つ家に帰るとしますかな。姉者に凱乾様、それにしんちゃん。

まだまだ先は長いしいつどうなるかなんて分からないけど、これからもよろしく。

~~~~~  
ジョインジョインジョインキレイ

幼少期編

完~~~~

それぞれの戦い方（後編）（後書き）

今回の話は如何でしたでしょうか？

前編、後編共に展開に難ありのなんかイイハナシダナー的な纏めになっけています。

初期のタイトルは

【これからもよろしく。】

だったのですが、投稿するときに気が付いた事

前編のタイトル…変えたの忘れてた…

（（（。。。；）））

進め方考えている途中にタイトル変更していたのを忘れて別タイトルで投稿するところであつた…危ない危ないw

さて、今回で幼少期編は終了となり次回からはちよいちよ小話を入れるか本編に入るか若干思案中です。

どっちが良いですかね？

御意見、御感想お待ちしております。

今年最後の（前書き）

深夜のコンビニにて
タクシー待ちの最中

友人「来ないな」

柳「まあ、もう少し待つさ。」

後輩（女）「あ！」

街路樹を見た後輩が声を上げる。

友人「どうした？忘れ物か？」

後輩（女）「柳さん聞いて下さい！
ヘタリアのギル×菊で良いシ
チュエーションが出来たんですよ！」

柳「お前は何で街路樹からその発想が浮んだんだ？」

そんな作者の年末。

今年最期になるであろう投稿です。

週2更新したいとか言っているのに更新出来ず…

もう少し書き溜めようかな？

今年最後の

ども、紀霊です。

早いもので修行を始めてから既に二年経ちました。え？いきなり年代が変わり過ぎだって？

【細けえことはイインダヨー】

しんちゃん曰く、三行で説明するとすれば…

クリスマスは孤独にモンハン！

友人「本編いつちやえ」

柳「おk」

だつてさ…

いやー…ここ数年で色々大変になったんだよね…

家の家事分担が

姉者　：1割8分

俺　　：8割

凱乾様：2分

…俺の負担について語りたいたのだが…これ以上家事増やされたら堪ったものじゃない。

へたな事は言えないけども、家事負担割合的に俺の家事スキル上昇率がマツハなんだが…

後凱乾様、下着くらいは自分で洗ってください。

それと姉者！

ドサクサに紛れて俺の服を持っていかないでね？

それまだ洗濯終わってないんだから汚いし、何より俺の着替えが減る。

それに何で自分の下着を俺の部屋に置いていく？

あれか？洗っておけてか？

だったら全部洗うときに出してくれ。じゃないと二度手間になるだろうに…まったく。

あー…軽く愚痴が零れたな…

まあ、たかが数年されど数年。あの修行に耐えてきたんですよ。

いや〜転成するとき身に付いた経験10倍があって助かりましたよ本当…

アレのおかげで辛かったのは半年だけ、慣れもあるだろうし楽では無いけれどかなり成長したと思う。

え？

どの位成長したかつて？

取り敢えず、凱乾様に7：3で有利が付く位には強くなったかな。

俺の有利が判明したときの凱乾様の表情といたら…俺の成長が嬉しいけど、それよりも負けた事が悔しいって感じてゾクゾクしたね

えw

ん？

ああ、姉者？

姉者はー

華雄「何を呆けているんだ頭。早く構えろ。」

紀霊「あ、すまん姉者。始めるとしようか。」

実は今、姉者と手合わせやるところなんですよね。

まあ、話はその後でとしましょうか。

華雄と紀霊

両者が構えたのを確認して凱乾は声を張り上げる。

凱乾「では…始め！」

合図と共に華雄は間合いを詰めるために地面を蹴る。

紀霊は合図と同時に槍を数回突き出す。

華雄「ちいつ」

軽く舌打ちしつつも飛び退く華雄。

それに合わせるように踏み込む紀霊は刺突を繰り返す。

華雄「はっ。」

体勢を崩したまま大斧を振り槍を弾き飛ばす。そこは流石の怪力と言ったところだろう。

紀霊「マジか…」

腕に若干の痺れを感じつつも振り払われた槍を使い片手で振り切る。

華雄はまだ体勢を整えきっておらず避ける事も叶わない。だが華雄の顔には笑みが浮かんでいた。

華雄「甘いぞ頭」

片手で振り切ったため威力は両手持ちに比べたら低いものの割と力を籠めた一撃の筈だった。並みの武将ならしとめることが出来る一撃、幾ら姉者でも避けると思っていた時期が俺にもありました…

けど今は思いません。

だって姉者は槍を片手で止めるんだもん…

華雄「まだまだだな頭」

姉者はそう言うのと片手で大斧を振る。

ヤバい、槍ほとんど動かないし…どんだけ力あるのよ姉者…

しゃあない、アレやるか…

華雄「（勝った。）」

私はそう思いながら紀霊目掛けて得物を振るう。

その瞬間、私の体が宙に浮き衝撃が走る。

見えるのは青空と逆さになった頭の勝ち誇った顔だった。

華雄「…？」

紀霊「腑抜けたか？姉者…」

凱乾「……」いやはや…慧の大斧に当たる寸前、頭が槍を離し慧の手を掴んで背負い…投げ飛ばした…か。
こんな技教えた覚えは無いんだが…

だが勝ちも勝ちだ

凱乾「其処まで！頭の勝ちだ。」

なかなかどうして成長してるじゃないか私の愛弟子達よ。

紀霊「姉者、立てるか？」

華雄「背中を打ったが問題ない。だが…負けてしまったな…」

紀霊「こっちは冷や冷やしたぞ…まさか片手で止めるとは思わなかった。」

そう言いながら手を差し出す紀霊と差し出された手を掴む華雄。

華雄「次は負けんぞ願」

華雄は立ち上がると同時に紀霊に言う。

紀霊「そいつは怖い。お手柔らかに頼みたいもんだ。」

姉者…ダイヤ的に6：4で姉者有利だから毎回油断出来んのよ…

一撃一撃が重いしガンガン来るし…攻撃一発喰らうとそのまま持つて行かれるってさあ…しかも大斧なのにスピードやたら速いし…

アレか？

コレがジョインジョインアネジャアって奴か？

おいおい…その内縮地とか使われたらナギツじゃねえか…。そうなのたら9：1で俺の圧倒的な不利確定だな

なんか…姉者ならその内使えるようになりそうだから困る…

華雄「しかし先程の技は一体何なのだ？」

一本背負いです。(キリッ)何て言えたら楽だけどそれで通じるわ

けないしな…

紀霊「…俺が考えた相手を投げ飛ばしたり、関節を逆方向に曲げたり絞殺する戦い方の技だよ…」

外史だから影響出ないと思いますが色々嘔吐してます俺…

凱乾「ふむ、色々考えているんだねえ、感心感心。」

凱乾様は納得したようで頷くが、姉者は若干…

華雄「うゝ…」

唸らんで下さい姉者…逆に可愛いから無視しように無視出来ん…

華雄「頭の添い寝が…私の楽しみが…散った。」

…やっぱりか…

俺と姉者の手合わせにはルールがある。

- ・命は取らない。
- ・負けても文句は言わない。

とどこまで結構普通なんだが…

- ・手合わせ前の野試合禁止
- ・知らない相手を煽らない
- ・商人さんの台車が来たら道を空ける。

・勝者は敗者に一つだけお願い事が出来る。
・敗者は【その願いに反逆する！】はできないが、異議申し立ては可能。

…途中なんか変だし最期の二つ…

早速、香様に異議申し立てしたら

凱乾「なんか脳裏にティーン！ときたからこのルールで行く。というか私がルールだ！」

…黄色い救急車よ…次元を越えてこの人を搬送してくれ、頼む！

つーわけで姉者が手合わせで勝つと大体いや、添い寝ALLという俺が非常に寝れないシチュエーションが出来上がってしまうわけだ。

あれから二年だよ？

成長するんだよ！？

俺も身長や体格が良い感じに成長してるんだよ！？

14歳だよ！？思春期真っ盛りよ？

姉者的には【弟は思春期】
だよ！？

2つ年上の姉者と添い寝とか…抱き枕にされるとか…これどんな拷問？

姉者も俺も年齢が年齢だから止めてと言っても聞かないし、香様は香様で、「けしからん！もっとやれ！」って煽るし…

姉者も一部を除いて色々成長してるから寝れる理由がねえよ！

紀霊「悪いな姉者、今日は勝たせてもらった。」

いや、本当心底安堵しました。

凱乾「んで紀霊、お願いはどうするんだ？」

紀霊「今日の家事手伝ってください。」

勿論即答さー

だって今日俺が担当するのは
料理、洗濯、風呂炊き、買い物に薪割り！

…俺はどごその弓兵か？

華雄「…そんなので良いのか？」

姉者ーあからさまにがっかりしないで下さい。

凱乾「ん？風呂で背中流せとか今夜俺の部屋に来いとか言わないのか…詰まらん…」

香様ーあなたは色々自重しろー。そんなんだから貰い手になっ！

瞬時に飛び跳ねて回避する。

先ほどまで俺が居たところに短刀が何十本も地面に刺さっていた。

…投げたモーションも無かったんですけど…

凱乾「何か言いたいことがあるそうだったか？…死ぬ覚悟があるなら言ってみろ、この凱乾に対してなあっ！！」

アンタはなんで某カリスマ吸血鬼みたいになってるんだよ！！

凱乾「と、冗談はここまでにして」

いや、目がマジでしたしそもそもJ〇J〇立ちしてましたよね？

凱乾「華雄と紀霊の二人に買い物頼みたいんだが行ってくれないか？というか行って来い。」

買い物か…確か昨日切干大根作ったから予備が無くなってたし干肉の貯蔵も余り無いな。

あー金かかる…

肉屋のおっちゃんに頼み込んでくず肉大量に買い込むか？

多少の野菜なら自宅で栽培できるけど肉はどうにもならんしなー。
r z

紀霊「色々と買い込むと思いますけど大丈夫です？」

主にお金的に

凱乾「お客様来るから一応頼んだものが買える分は残して置けよ？それと多めに渡すから偶には楽しんで来い。そういう意味を籠めて

るんだから早く着替えてきなさい。」

紀霊「解りました。姉者、先に言って門の前で待ってるわ。」

そうと決まればスタコラサッサだぜい。

待ってるよー食材！

顕は行ったな…よし。

凱乾「あ、慧。ちよつと良いか？」

そう言つて慧を手招き。

凱乾「いやね、顕の事なんだけどもねー、今日は二人つきりで楽しんできなさい。逢引なんて久々なんじゃないかなあ〜」

華雄「なっ／＼／ 香様!？」

おーおー顔真つ赤にしちやつてさ〜

乙女してるなー慧。

凱乾「いやね、お前達二人を見てると楽しくて楽しくて…あ、そうそう。これは忠告だけど顕に早めに睡つけておいたほうが良いよ？あいつは素で世話焼きだから他の女に盗られるかもしれないよ？」

と華雄の耳元で続ける凱乾。

本当に見事な煽りっぷりである。

華雄「他の…?」

凱乾「これからどこに仕官するにしてもどこもかしこも女だらけでしょ。それと頭の好みは多分年上だから仕官先の先輩と仲良くなつてーとかあるかもしれないわよ？」

それを聞いた華雄は

華雄「仕官先の女…仲良く…」

徐々に機嫌が悪くなっているのは誰が見ても明らかである。

凱乾「いやね、私好みで育ててもいいかなーって考えたりもしたんだけど、慧が頭と仲良く過ごすのを見てねー。それに友人の息子に手を出すのってちよいと罰が当たるかなーって思ったわけだ。慧は頭のお姉さんなんだろう？丁度頭の好みなんだし頑張れーって応援してるわけだよ私は。」

【キリッ】、この効果音が似合いそうな顔でサラッと見逃さない発言があつた気がするが、凱乾のその一言を聞いて華雄は放心状態となり独り言を言い始めた。

華雄「好み…私が…頭の…：…：／／／」

華雄はその後、放心状態から戻ってくるのに10分ほど掛かった拳句に凱乾に手を借りながら自室に戻ると思い出したのか

華雄「~~~~~っ！！／／／」

寝具の上で枕を握り締めながらゴロゴロ回って居たそうなの。

「その頃の主人公」

(、>、)

紀霊「…姉者はまだか？」

今年最後の（後書き）

今年最期の更新は本編の始まりを意識しました。

とうとう次回、本編キャラの登場を予定しています。

明日…仕事か…

ガンバロorz

それでは皆さん、良いお年を。

謹賀新年（前書き）

友人「なんでお前ってジャギ使ってるの？辛くね？」

柳「好きだから。」

そう言いながらAC北斗をする作者。

そんな作者の元旦。

あけましておめでとつございます。

今年も【真・恋姫十無双〜ジョインジョインジョインキレイ〜】を
よろしく願います。

…なんとか今日に間に合った…
連続投稿！！

謹賀新年

紀霊「さて、姉者。取り合えずどこ行こうか？」

どもつす。結局姉者を一時間ほど待っていました紀霊です。

今は当ても無く姉者を街をぶらぶらしているんですけども

華雄「……………紀霊が一緒なら…どこへでも」

俺に決めると仰るか？

なんとなく嫌な予感がするのは俺だけか？

紀霊「そうか、じゃあ飯でも食べる？」

そう言つて俺は食事処を指差すとただ姉者は頷く。

…ここまで大人しい姉者つて初めてだな…

華雄「……………」

紀霊「ん、そうした姉者？」

店に入るため歩き出したが、姉者だけ立ち尽くしたまま動こうとしない。

紀霊「姉者？早く行かないか？」

取り合えず姉者の元に戻り尋ねると、何故か無言で手を差し出す。取り合えず握手握手つと。

華雄「違っつ！」

何故か振り払われて怒鳴られました。

紀霊「えーと…どうすればいいんだ姉者？」

うーむ、つい反射的に握手してしまったな…
人の目も痛いし引っ張っていくか。

紀霊「取り合えず行こう。」

再度姉者の手を取り歩き出す。

華雄「あ／／／」

ええい！恥ずかしいっいたらありやしない。はやく店に入らないと悶え死ぬわ！

そう思いながら華雄の手を引き店に入る紀霊。

無論、周囲の人が笑みを浮かべて温かい目で見ていたのは言うまでもない。

まあ、一部女性が悶えていたのは見なかったことにしておこう。鼻血出てるし…

店員「いらっしやませー2名でよろしいですか？」

紀霊「はい、お願いします。」

昼食には少し早いがそれなりに多い客入りのようだが、2、3名用

の小さい食卓に案内される。

紀霊「さ、座るか姉者。」

そう言いながら華雄の手を離し座るよう促す紀霊とあからさまに残念そうな顔で渋々席に着く華雄。

紀霊も座りまずは注文と相成った。

華雄「私は炒飯にするが、頭はどうする？」

紀霊「んー…俺は肉まん一つで良い。」

そういうと華雄は店員に注文する。

店員が去り、料理が来る待ち時間なのだが二人とも喋らないという微妙な間が生まれていた。

紀霊はこの間が嫌なのか

華雄に対し質問を投げかける。

紀霊「そう言えば姉者、香様のお客様って誰なんだろうか？」

よく考えたら俺が修行してきた2年弱、お客様なんて2、3人位しか見た事無いんだよね。

しかも素性不明だし。

華雄「ふむ、香さまへの来客は久しぶりだな。以前来た人と言えば大概が長安の太守か洛陽の將軍等だな。」

何そのVIP…知事とかが訪問してくるようなもんじゃん…

…そっぴや香様って元々近衛兵や警護兵の武術師範だったな…それ

ならお偉いさんが来てもおかしくないな…

店員「お待ちせしましたー」

そんな会話をしていたら出来上がった料理を持った店員さんが近づいて来た。

店員さんは肉まんと炒飯を食卓に置き一言

店員「それではごゆっくりして行ってね」

やたらと殴りたくなる表情で厨房へと戻っていった…

まあ、料理も来だし食べるとしよう。

姉者もそう思ったのか炒飯に手を付け始めたので、俺は肉まんを手に取り、姉者に合わす様にゆっくりと食べる。

んー肉まんがぶまいです。

華雄「顎、それで足りるのか？」

と姉者がいきなり聞いてきた。

確かに姉者から見れば肉まん一つで足りないんだろっな。つか炒飯と肉まんを比べりゃそら足りんわ。

紀霊「足りるわけでは無いが夕飯までの繋ぎ程度で十分だよ。」

なるべく食材買う為のお金に廻したいってのが本音だがそれは内緒だ、其処まで喰いたいわけでもないし問題ない。

俺がそう答えたら姉者は少し思案顔で黙りこくる。

華雄「し、仕方の無い奴だ。」

姉者はそう言うのとレンゲに炒飯をのせて俺に突き出すと

華雄「…喰え。」

この一言である。

……………！？

んーと…俗に言う…【あーん】って奴か？

って客と店員、こっち見んな！バルス（目潰し）喰らわすぞ！？

視線を姉者に戻すと、顔を真赤にして俺に突き出したレンゲがプルプル震えている…しかも微妙に涙目＋上目遣いで早く喰え！と視線で訴えてきている。

姉者どれだけ可愛いのか！？やるの？やらなきゃダメなの！？

欲望「可愛いは正義…良い時代になったものだ…」

ですよね！欲望さん！！

紀霊「あ、あーん…」

食べました…炒飯食べているはずなのにやたらと甘い…周りで2828している奴等は後でバルスな。

華雄「旨い…か？」

紀霊「あ、うん…旨いよ姉者。」

華雄「そうか／＼／＼ あ、あーん／＼／＼」

結局、公開処刑並に周囲からの視線を受けながらも、姉者から【あーん】攻撃を何度も受けました。
…炒飯ぶまいです。

~~~~~市場~~~~~

食堂出たよ、買い物だよ、色々疲れた紀霊だよ！

現在は：公開処刑イベントをクリアして早5分、色々あったけど市場で買い物中。

香様から頼まれた品物は

- ・お酒
- ・つまみ
- ・お菓子

以上3つで、店に行ったら既に予約されていたため代金の支払いと運ぶだけーとなった訳なんだけども…

店員「ああ、凱乾様のお屋敷ですね？全部届けておきますのでご安心ください。」

買い物に来た目的が崩壊しました。

と言う訳で姉者と色々な店を冷やかしかし中ってな感じですよ。

俺はさっさと帰りたいんだが姉者もやはり女の子。買い物が高い…

それとね…

華雄「見る頭、新作の武器が売っているぞ！」

槍を片手に俺を呼ぶ姉者。

危ないから振り回さないでねー

周りの人達悲鳴上げながら凄い勢いで逃げてるからねー

まあ、姉者嬉しそうだから俺としては良いんだがね。

華雄「おお！ 本屋に【月間 猪突猛進】が置いてあるぞ！」

そう言っただけで本屋へ一直線に走り出した姉者。

…よほど嬉しいんだろうね。

あ、姉者にぶつかっただお兄さんが綺麗な放物線を描きながら吹っ飛んだ。

…ハイワダナー

華雄「見る頭！ あの武将は弱そうだが持っている武器はかなりの

業物だぞ！」

その人は長安の軍事を担う將軍さんですからねー。

ほら、武器だけ褒められた將軍さんがこっち睨んでいるからねー。  
お願いだから下手に騒がないでねー！！

華雄「頭、其処で軍の訓練をやっているぞ！何れは軍を動かしてみたいものだな。」

やっってるねー訓練…

あ、顔なじみの兵隊さんたちが手を振ってくれたから振り返しておこう。

いやー姉者活き活きしているのは良いんだけどここ城外だよね？

紀霊「姉者あ…」

華雄「む、どうした？さてはお前も混じりなくなっただか？」

紀霊「違っわ！！なんでさっきまで市場に居たのに城外に出て訓練の見学しているんだよ！そもそもなんで見る店や嬉しそうになる点が色々ずれているん！？」

槍に剣に訓練だあ？なんで軍事メインなの？

てか何だよ【月間 猪突猛進】って！

一度姉者の部屋で読んだけどさ…

【無敵槍が怖くて突撃出来るか！ 騎兵による騎兵の為の突撃戦法 特集】

…とか誰が書いたんだよ！？

確かに勉強にもなるけどさ、そこまで需要無いだろっよ…誰得よ？

それと本屋のおっちゃん！

店主「来たか華雄ちゃん…最後の一冊…きっちり護り通したからな…」

一仕事終えた男の良い笑顔って感じで姉者に話しかけてたし姉者もちよくちよく買っているみたいだし…

姉者の部屋に堪り過ぎて【月間 猪突猛進】専用の本棚作ったのは俺なんだからな！

姉者のお願いだから断れなかったけど作るの大変だったんだぞ！

俺の偏見かもしれないが、少しは髪飾りや服に興味を持ってもいいんじゃないかな？

買い物に来て軍の調練見学するとか…目的が180度反転しすぎだ…

華雄「これが普通じゃないのか？」

俺は姉者と一般人の常識の認識について小一時間程問い詰めたい！

紀霊「服とか髪飾りとかに興味持たんのか姉者は…」

なんだろうっねこの疲労感…

華雄「髪飾りなぞ動く時に邪魔になるだけだし服ならば凱乾様が用意してくれるから問題ない大丈夫だ。」

紀霊「それは問題だらけで大丈夫じゃない気がするが…」

何その服はお母さんが用意してくれたの来ているから服に興味持たない10代の言い訳…

俺は溜息一つ吐いてやるせなく咳く。

紀霊「姉者もお洒落すればもっと可愛くなると思うんだがあっ!？」

咳いた瞬間、胸倉を掴まれて宙に浮く。

華雄「頭…今何と言った？」

姉者…首絞まる!苦しいって!!

紀霊「姉者…く、首絞ま」

華雄「答えろ! わ、私がお洒落すれば何だって?」

意識が飛びかけているが力を振り絞り答える紀霊。

紀霊「あ、姉者がっ…お洒落すれ…ばっ…もっと…可愛、いと思う…」

それを聞いた華雄は顔を緩ませながら

華雄「そ、そうか! / / / 頭がそう言うならば、今後考えない事も無いぞ! / / /」

た、頼むから…今すぐ俺の首を解放することを考えてくれ…  
あ…苦しく…無くなって来た…

ん、ここは?

??「よう起きたか紀霊」



…誰だお前は！

??「裸Ｙシャツの少女を姉に持つ男…スパイダーマツ!!」

本当に誰だ!!

どこからとも無く東映のBGMが流れるが無視だ無視。

っていつかさっきの台詞で見当付くから困る…

紀霊「あんたがしんちゃんの弟で俺がこの世界に転生された原因の一つか…始めましてだ。」

取り合えずしんちゃんの弟だしおとやんって呼ぼう。

てかこいつ、会いたいって言うておいて二年ぶりの初対面か…

おとやん「いや、すまん東方やったりニコニコ見てたらお前のことすっかり忘れてた。」

よし、俺はお前が泣くまで殴るのを止めない!

おとやん「待て待て待て!ほら、神と人間じゃ体感時間が違うんだからニコ動でアイマスとか見ると時間忘れるんだって!」

…体感時間違うのは把握したが忘れるなよ…

紀霊「成る程、どうでもいい情報を有り難うな愚民さん。」

そんな姿勢を取るおとやん。…こいつ…中々やりおるな。

おとやん「いや、良いけどよ。姉貴から人間1人恋姫の世界に転生させるって聞いた時には驚いたわ…」

紀霊「ああ、確かに驚くよな…」

二人「恋姫の外史が本当に存在したって事にな。」

無言…

どちらからともなく手を差し出し力強く握り合う。

おとやん「今度、酒でも飲みながら語り明かそうや。」

紀霊「ああ、お前とならいい酒が飲めそうだ。」

そう言つと二人は笑い合う。

おとやん「お、そろそろ時間だな。じゃいい加減姉者さんを安心させてやれや。」

紀霊「ふむ、心なしかフラフラしてきた…じゃまた今度だな。」

そう言つと手を軽く上げておとやんに振る。

おとやん「おう、暇な時には話でもしよう。」

おとやんも軽く手を振り。そこで俺の意識は無くなった。

次に目を開けたとき

華雄「頭…やっと起きたか…」

紀霊「只今、姉者。」

俺の頭を膝に乗せている姉者が見えました。

いや、普通に返事返す俺も俺だが首絞めておいて起きたか。は無いでしょ姉者。

紀霊「姉者、俺に何か言う事は？」

華雄「すまなかった。それともう少しこのままでいても良いか？」

よし、起きよう。直ぐ起きよう！

紀霊「解れば宜しい。次は気をつけてくれ。」

そう言い跳ね起きる。

華雄「あう…」

はい、残念そうな顔しない。取り合えず市場に戻るよー。

すたすたと歩く俺に追従する形で渋々姉者も市場に向かって歩き出す。

ん？

市場から僅かに見える裏道に長安では見かけない顔の二人が何かに追われているのか、必死に逃げているところを見つけた。

華雄「顕…あれは…」

姉者も気が付いたようで訝しげに二人が逃げた裏道を凝視していると

華雄「！」

剣を持った男が五人、恐らく逃げている二人を追っているのだから…

紀霊「姉者、助けに行こう！」

華雄「無論だ！」

紀霊と華雄の二人は、先ほどの男達を追いかける。

何進「だ、大丈夫か董卓ちゃん！」

董卓「ぜいつ、はあっ」

私達は狭い裏路地を必死で走りぬく。

何進さんと一緒に見回っていたら…怖い男の人達に囲まれて…

霞さんはその場で足止めするから逃げろって言われて逃げてたら…

何進「くっ、董卓ちゃん。すまねえ俺のせいで…」

董卓「そんなつ、裏路地を見たいって言ったのは私です。私のせい…っ!？」

二人は足を止める。

開けた場所だが今来た道以外に出口が無いのだ…

しかも…

ならず者1「へっ、待ってたぜえ！」

モヒカンA「ヒヤッハー！女だあー！」

ならず者2「野郎の方は身包み剥いで殺しちゃまええ！」

待ち伏せされていたため前にも後にも怖い人が…

何進「ちい！かくなる上は…」

何進さんは剣を抜き男達に構える。

男達は複数で何進さんを包囲するようになり、何進さんは私を庇うようにじりじりと動いている。

私はただ震えるだけで…

せめて董卓ちゃんだけでも助けたかったが…悲壮感しか無いが男達を睨みつけ、切りかかる為の覚悟を決めた時…

紀霊「おい、お前等…」

ならず者3「ああ、なんだあつああ!？」

男達の後ろから声が聞こえたと思ったら、その内の1人が吹っ飛んだ。

そこに居るのは…少年？

ならず者4「なんだてめえ！」

紀霊「つてみる…」

モヒカンB「は？なんつてか聞こえねえよ！」

そういつてモヒカンBは剣を振って紀霊に襲い掛かるが、その剣を奪い取られた拳句投げ飛ばされる。

紀霊「おい、お前等…」

モヒカンC「て、てめえっ！」

剣を握り締めて少年は前を見据え、こつ言い放った。

紀霊「俺の名を言ってみろお!!！」

謹賀新年（後書き）

つ、疲れた…

とんぷーさん、ジョニー高橋さん。ご感想有り難うございます。

今年も執筆頑張っていきますよー

次回更新は少し遅くなりそうですが、これからも作品、作者共々よろしく願います。

御意見、ご感想お待ちしております。

おいおい…あの日か？（前書き）

数年前の友人の部屋にて、

某18禁パソゲーのカタログを見ながら呟く作者

作者「そっぴや気になる18禁ゲーがあるんだが…」

友人「お、何よ？」

作者「ほれ、こいつ。」

友人「……………なあ……………」

作者「なんぞ？」

友人【マジで考え直してくれ！！】

作者が買おうとしたゲームはヒロインの3分の2が男の娘と言つ18禁ゲー

そんな作者と友人の日常。

今週の更新出来ました、予想以上に長くて吃驚。



おいおい…あの日か？

紀霊「俺の名前を言ってみろおっ！！」

そう叫んだ男の人は見た目15、6歳といったところだろうか…

握り締めた剣を後から来た少女に手渡し、ならず者達を次々と薙ぎ倒しつつ私達を庇うように位置を移動する。

さーて、注意をこっちに向けたのはいいが…ショットガンなんて持ってないし…

ならず者A「ああ？手前の名前なんか知らねえっての！」

デスヨネーw

取り合えず姉者もおるし手っ取り早く倒しちゃおうか？

まあ、俺も姉者も既に殴ってるんだけどね…

モヒカンA「手前っ！ぶっ殺されてえっ！あだだだだっ！」

モヒカンが振り上げた右腕の手首を掴んでくるっ！一回転。あら不思議！擦れちゃった！

紀霊「はいはい痛いですねー、んじゃ眠っつけ。」

そう言いながらモヒカンの後頭部に手刀を一撃。

するとモヒカンは「あがっ」とか言いながら地面に倒れる。

ならず者A「ぎやあああああ！」

お、姉者も暴れるねー…

つて姉者ー？

なんでならず者さんは股間を押さえてプルプル震えているのかな、かな？

あれですか？男にとっては最大の急所への一撃ですか？

姉者の力で股間攻撃とか…

ならず者さん…俺は今、貴方に対して猛烈に同情するよ…南無。

そう言いながら襲い掛かるならず者バルス（眼球デコピン＋後頭部へのし手刀）を食らわす俺と的確かつ力強くモヒカンの股間を蹴り上げる姉者。

4、5人倒した頃だろうか

ならず者V「て、手前ら！動くんじゃねえ！」

声が出た方を見ると…追われていた少女を腕で抑えて剣を喉元に当てるならず者の姿。

てかV!?

いや、何人居るんだよならず者!?

あー…まあ、いいや。

紀霊「おい、取り合えずその手を離せ。」

見回せば少女と一緒に居たおっちゃんはず者×2と対峙、姉者

は背後に悶える男の山があるけれど…

華雄「卑怯なっ！」

いや、姉者の攻撃も男からしたら物凄く卑怯だからね？

何進「しまった…」

おっちゃん、あんたは悪くないけれどこの状況はよろしくないな…

動きを止めた俺等三人を見てならず者は下品な表情を浮かべる。

ならず者V「へっ、動いたらこいつの命はねえぞ？」

そう言われて悔しそうな表情を浮かべるおっちゃんと姉者。姉者に至っては齒軋りまでしている。

その二人を尻目に俺は

ならず者Vに向かって歩みだす。

華雄「なっ！？」

何進「！？」

ならず者V「て、手前っ！ こいつの命が惜しくねえのか！？」

何進さんが男の人達と対峙していて、私は怖くて壁際で震えていた。先ほど助けに来てくれた男の人も女の人も次々と倒している…

私は怖くて怖くて、知らずの内に何進さんから離れていたようだった

た。

それに気が付いたのは男の人に乱暴に掴まれて、喉元に剣を当てられた時だった。

紀霊「ほう？やった瞬間あなたは両目を潰された拳句股間を蹴り上げられるわけだ。」

そう言いながら助けに来た少年が剣を拾い、私のほうに歩いてくる。

華雄「なっ！？」

何進「！？」

ならず者V「て、手前っ！こいつの命が惜しくねえのか！？」

男の人はそう言って私を乱暴に抱き寄せる。

何進さんも女の人も男の子の行動に驚愕の表情だ。

紀霊「何度も言わせるな、その娘を殺したらあなたには盾が無くなる。そうなれば俺は喜んであなたの耳を削ぎ、目を潰し、股間を蹴り上げた拳句に腸を引きずり出してやるよ。」

笑顔でそう言いながら男の子はゆっくりと近づいてくる。

ならず者V「くっ来るなあ！」

ならず者はそう言いながら董卓ちゃんを引いて後退する。

あの坊主…ならず者を刺激してどうする気だ？

ああ、コンチクシヨウ！

俺にもっと武があれば董卓ちゃんもこんな目に合わなかったのによお…

ならず者が退いても頭はゆっくりと歩むを進める…

…頭の事だから何か考えがあるんだろうが…人質を取られると身動きが取れん…ここは頭を信じて

あの卑劣漢を蹴り上げる用意だけしておこう。

紀霊「どうしたあ？このまま下がったら壁にぶつかるぜ？」

そう言われてならず者は後ろを振り返る。

後には壁など無くただ木材などが置かれている光景が見えるだけ。

紀霊「はい、残念でした。」

ならず者が前を見ると先ほどから恐怖を感じた少年が目の前に…いるではないか…

俺は女の子を掴むならず者の腕を握り、間接部分にある筋肉の付け根を指で押しつぶす。

勿論もう片方の手で剣を握った手首を押さえてあるよ？

ならず者V「ぎいつ！？」

姉者ほどではないが、俺も力はあるほうだ。普通の人間が押ししても痛い部分を今までアホみたいな修行してきた俺が押す…まあ、痛みはご想像にお任せしますってやつだわな。

痛みの為か人質にしていた女の子を掴む力が緩んだようで、即座に

女の子を抱き寄せてならず者から奪い返して距離をとる。

紀霊「ごめんな、怖い思いさせて。」

女の子をそつと降ろして頭を撫でてあげる。

董卓「へう／＼／／」

言葉が出てこない位怖かったんだろうな…

うへえ…今更ながら凄い罪悪感感じるわー俺…

ならず者V「てっ、手前ーっ!!」

董卓「あ、危ないっ！」

あ、変に悩んでたからならず者の事忘れてた…

って俺に剣振りかぶってるし!?

ええい南無三!

振りかぶった腕を右手で掴み、左手は相手の脇に肘を入れ、後は…

相手の力を利用して投げるだけ!

紀霊「そおいつ!」

ならず者V「あわびゅ!？」

一本! ウエイ!

ならず者V「ゲツッ!ち、チクシヨウ覚えてやがれ!」

明らかに小物の捨て台詞を言いながら来た道に向かって逃げ出すな  
らず者V。

けど

華雄「…下衆が！」

既に姉者がならず者の退路を塞いでいた。

ならず者V「退きやがれっ！」

華雄「せめて奥義で葬ろう…！」

姉者の蹴りが股間にシュートツ！

男の心情的に物凄く…嫌です…

ほら…おっちゃんも顔が青ざめてるし…

それと姉者、それは北斗神拳とちゃう、羅漢仁王拳や…男にとって  
禁じ手の意味で…

そんな奥義だったら時の皇帝じゃなくても禁ずるわー…

ならず者はならず者で泡吹いてるし…南無…

なんとも言えない沈黙…

何進「いや、すまないな嬢ちゃんに坊主、お陰で助かったよ。」

凍った空気（男限定）を破ったのは助けたおっちゃんだった。

華雄「いや、無事で何よりです。なあ頭。」

姉者はさも当然のように受け答える。

紀霊「同感だね。」

華雄「だがな、何時まで引っ付いている気だ頭？」

董卓「へうっ!?!」

未だ落ち着かないのか俺の腕に抱きついてプルプル震える少女。何この小動物…

姉者「何でか知らんが睨みすぎだ、怖がられてこの子も抱きしめる力強くなってるし…」

何進「あーどちらも落ち着いてくれ。」

話が進まない判断したのだろう、おっちゃんが仲裁に入り姉者も女の子も少しは落ち着いたようで、片方は睨むのを止めてもう片方は俺から離れる。

紀霊「おっちゃんの言うとおりだ、このまま居ても厄介事が増えそうだし人通りの多いところに出よう。」

そう言っつて今まで通ってきた道を指差して進むように促す。理解したのか三人共頷き周囲を見渡し歩き出す。

念のため俺が先頭に立ち姉者が後ろ、二人を護るように歩く途中、ある意味一番重要なことを思い出した。

紀霊「姉者」



華雄「む、なんだ頭？」

物凄く聞きにくいことだが、明日は我が身。あのことを聞いておかないと怖くて寝れんからね…

紀霊「さっきの股間への蹴りなんだが…まさかと思うが…誰に教わったの？」

華雄「香様だが？」

あんのアラサートラブルメイカー…

姉者と一騎打ちしたときに使われたら…トキ（修羅）VSジャギ（モヒカン）並の不利が付くじゃねえか…

華雄「なんでもこの技を受けた相手は痛みにした打ち回るか、悶えながらも幸せそうな顔をするかのどちらからしいが、頭はどっちだ？」

純粹な姉者に何教えてんだあの人は！？

てか姉者も信じて実践しない！

そして俺はその技を受けたくないし見たくない！

肉体的にも精神的にもその攻撃は来るんだよ…

紀霊「俺はその技を受けたくないし、…前者でありたい。」

華雄「そうか、さっきのならず者の何人かは何故か笑顔を浮かべ、腰を突き出して向かって来たぞ？なんなのだあいつ等は？」

紀霊「…姉者…そいつ等については忘れる…」

そんな紳士情報聞いただけ…精神的に疲れる…

何進「なあ、坊主に嬢ちゃん。」

紀霊「はい？なんさねおっちゃん？」

何進「お前さんたち、香の弟子かい？」

姉弟「！？」

華雄「何故その名前を！？」

驚き、おっちゃんに詰め寄る姉者。

何進「だあっ！？ お、落ち着けよ嬢ちゃんっ！ 今日訪れる予定  
だったんだよ俺等は！」

はいな？

おっちゃんは今何ていった？

今日訪レルお客様デスカコノ二人ー？

??「見つけたでえ！観念しいやー！！」

前からいきなりの怒号、振り返ろうとしたら後頭部に衝撃を受けて  
意識なくなりました…

華雄「頭！！？」

何進「ちょ！坊主、無事か！！」

董卓「だ、大丈夫ですかーっ！！」

紀霊の後には恐らく目の前の関西弁の少女が投げたと思われる桶が転がっている。

張遼「助けに来たで何進のおっさんに月うち！さっさとそいつしはいたるから待っときい！！」

何進「お前、何考えてるんだよっ！この坊主はなあ　っ！？」

行き成り出てきてそんな事を言う張遼に驚きを隠せないが誤解を解こうとする何進と

董卓「し、しっかりしてくださいー」

紀霊の頭を抱えながら涙目で紀霊に呼びかける董卓

だが、華雄の様子に騒がしかった三人が黙る。

華雄「……………私ノ頭ヲ……………」  
ス……………」

思わず何進と董卓、そして張遼ですら息が詰まる程の空気…

華雄は光を無くした目で張遼を捕らえると、無言で飛び掛かり、華雄が猛攻を加える。

張遼「つちい、やるやないかい！」

防戦一方の張遼は毒氣づく。

屋根伝いに飛びつつ華雄の猛攻を回避する張遼。

先ほどまで張遼が居た場所を素手で壊しつつ張遼を追う華雄。

何進「だあーっ！！どうしろっっていうんだよこの状況！！」

頭を抱えて叫ぶ何進。

紀霊「あー…久々の黄泉返りだ…」

董卓「大丈夫ですかあ…血が出てますよお（涙目＋震えた声）」

起き上がり頭を掻くと手にべっとりとした血が付いている…

何進「大丈夫なのか坊主！？」

紀霊「んー…怪我でもしたんじゃないですかね？」

そう答えながら屋根の上に上り姉者の痕跡を見つめたため息。

何進「いや、なんでそんな他人事みたいに言えるんだよ…」

董卓「う、動いちゃダメですよ！」

下からはおっちゃんと女の子の声。だけど今は気にしてられない。

紀霊「取り合えず姉者とあの人しょつ引いて来ますんで待って下さい。」

そう言つて比較的安全な足場を選んで二人に近づぐため飛ぶ。

紀霊「ったく厄日かなんかなのか今日？」

まったく…どうなつとるねん！

ウチが防戦一方なんて…ほんまに賊かいな？

華雄「オイツメタ…」

張遼「っ！」

気が付けば城壁を背負う状況…攻撃を回避する事に集中しすぎたためだろうか…

張遼「月うち…何進のおっさん…ウチはここまでかもしれんわ…」

そう言いながらも槍を構える点を見れば心はまだ折れていない。と思ひ笑つてしまう自分。

だが、そう簡単に勝てるとも思わない。

張遼「しゃあない、かかつてきいや！」

そう言いながら突きを連続で繰り出し攻撃する。

しかし

【バキッ！】

繰り出した槍を片手に掴み腹部へ拳を入れられる。

張遼「ガッアア…」

とてつもなく重い一撃、後に飛ぶことで威力を和らげようとしたが、そんな試みなど無駄に過ぎない。と思い知らせる程の力…

張遼「あ、あ…」

もうダメだ…今の一撃で体の力は入らず此方を見下す敵すらはつきりと見えない。

華雄「…顕ノ仇…」

そう言つて右手を構える華雄。

張遼「（ごめんな月…）」

華雄の拳が振り下ろされたの感じ目を瞑る。

【勝手に殺してくれるなよ姉者。】

張遼「？」

一向に來ない止めの一撃と男の声に目を開ける張遼。

目の前には

先ほど自分が桶を投げつけ、倒れたはずの少年が当たる寸前の拳を掴んでいた。

張遼「あ、あんた…は…」

紀霊「あ…：すまない、少し遅れてしまった。それと…：少しの間失礼。」

そう言うと少年は動きを止めた少女を抱きしめて頭を撫で始めた。

華雄「あ…：ああ…：！頭…：よ、良かったあ…：良かったあ…：」

抱きしめられ、撫でられる事で正気に戻ったのか少女は少年に体を預けて泣き出した。

紀霊「あ…：この通り生きてるからさ、てかそう簡単に死んで堪るかって。心配させてごめんな姉者…：な？泣き止んでくれないと俺が困るよ。」

華雄はそのまま10分程泣いたと思ったら急に意識を失って倒れる。恐らく張遼と戦った疲れと精神的な疲労が限界に達したのだろう。

紀霊「さて、お待たせしましたってか？大丈夫ですか？」

張遼「少し休んだからなんとか意識あるわ。あんさんこそ大丈夫かいな…：血い出とるで？」

そう、張遼ですら心配するほど大量の血を少年は流しながら立っていた。

紀霊「…いや、怪我させたのはあんただろーが…」

そう言われて気が付いたように申し訳なさそうな顔をする張遼。

紀霊「まあ、取り合えず戻って誤解解いて貰うのと姉者とあんたの治療せねばな。」

張遼「!?!」

紀霊「申し訳ないが姉者も運ばねばならんでこれで我慢してくれ。」

左手を腰に廻されて、肩に担がれる。

張遼「ななななな、なにすんねん! / / /」

紀霊「だーから、さっきも言っただろうに…揺れるから舌嚙まない様に気をつけてくれ。」

張遼「はあ!?!? ってアホー!」

右肩に華雄を担ぎ、左肩に張遼を担ぎながら屋根伝いに飛ぶ紀霊、その間張遼が何かを叫んでいたようだが、紀霊は無視を貫き飛んでいった。

その後、張遼の誤解が解けて平謝りされつつも華雄と張遼の治療を続けようとした紀霊が、騒ぎを聞きつけた凱乾によって止めを刺され、何進と董卓が慌てふためき絶叫していたそうなの…

ああ、勿論10分程で紀霊は息を吹き返しましたよ。



なんでも

【閻魔に説教喰らってた。】

と疲れた表情で呟いていたそうなの

おいおい…あの日か？（後書き）

前書きの作者の日常は殆どが作者と友人との日常を書いています。

因みにその友人は現在、作者の一番近くにいる読者です。  
友人よ、いつも有り難う。

そして読者の皆様方に感謝。

この作品を読んでいただいて有り難うございます。

来週の更新は若干遅れる可能性があります、活動報告はなるべく更新するようにしますので宜しければご覧下さい。

御意見、ご感想お待ちしております。

大將軍と太守様。(前書き)

まず始めに、今週の投稿遅くなりました…すみません…

今回の【作者の日常】はお休みします。

エ？イラナイッテ？

そんな事より気が付いたら総合でPVが76、192アクセス、ユ  
ニークが10,051人を越えている！？

この小説にこんなに読む人いたって…嬉しすぎる…

次の更新についても若干遅くなりそうです。

## 大將軍と太守様。

何進「改めて自己紹介だな、俺は何進。一応大將軍だ。」

董卓「私は西涼太守を任せられました董卓と申します。」

……俺死ぬかも……

いや、大將軍を「おっちゃん」呼ばわりして太守様を危険な目に合  
わせて……普通に首から上がパージしても文句言えないっしょ……

凱乾「いやー久しぶりだな何進。それと初めまして董卓殿。」

董卓「は、はい。凱乾殿の御武名は以前より何進將軍より聞いてお  
ります。」

軽い感じに挨拶する香様と小動物みたいな感じに震えてお辞儀する  
董卓様。

姉者と俺は香様の後に並んで立ってその様子を眺めていたのだが、

何進「いやーしかし、お前さんの弟子は中々に強いな。お陰で俺も  
董卓ちゃんも助かったよ、ありがとな嬢ちゃんに坊主。」

そう言っって笑う何進將軍と頷く董卓様。

姉者と俺は香様の後に並んで立ってその様子を眺めていたのだが、

凱乾「ああ、そうだ。私の弟子を紹介しよう。」

そう言うとまず姉者に手を向ける。

凱乾「私の愛弟子、華雄だ。この年で私に打ち勝つ程には武を持っているよ。慧、自己紹介をしなさい。」

華雄「はっ、私の名前は華雄、字は乾香と申します。先ほどは失礼しました。」

そう言い頭を下げる姉者と俺に手を向ける香様。

凱乾「こっちは紀靈。姉弟子と同じく私に勝つ程度には武を持っているし意外と頭も良いんだし、家事も出来る。正に一家に一台いたら助かるような奴だ、主に私が。ほら頭！何か言いなさい。主に私の可愛さとか可愛さとか若さとか。」

紀靈「…紀靈、字は周英と申します。姉者と共に香様の元、修行中の若輩者です。それと…コウサマハカワイイデスヨ？と一応言っておきます…」

凱乾「なーんか納得いかないんだがなあ〜頭う〜」

…あんたの「若い」ところはその精神年齢だけだろ…  
いや、違うな。訂正しておく、「幼い」の方がしっくりきますね！。  
てか俺の自己紹介の時だけなんで自分の若さと可愛さアピールさせるんよ？

何進「ふむ、華雄嬢ちゃんと紀靈坊主か、先ほどの事は気にしなくて良いぜ。こっちは助けられた側だし何より、大將軍って畏まられ

るのは苦手だな。」

髭に手を添えながら良い笑顔で姉者と俺に話す何進將軍。

董卓「私もあのままだったら命の危険も有りました、それを助けていただいた身なので気にしないで下さい。」

そう言うてにこやかに微笑む董卓様。うーむ、明らかにろりゝんな見た目

なのに俺より年上って……なんか年上に見えんが……ウチの凱乾さんじゅうななさいよりも色々納得出来るから良しとしよう。

…何進って正史でも演義でも恋姫でも駄目將軍呼ばわりされていたが…なんつーかな…むっちや親しみやすいおっちゃんんだけど…それと董卓は董卓でまんまだなー…大方、裏路地で苦しんでいる人達が居ないか確認したいとか言っであんな事になったんじゃないかな？

太守と漢の將軍が護衛1人連れて出歩くとか柄の悪い人からしてみれば

どうぞ私を有情破顔拳で【ちにゃっ】としてくださいって言うているようなもんだぞ…

何進「いやーすまんかった。俺と董卓ちゃんて軽く視察してたんだが、護衛もつと連れてくれば問題なく終わったんだろっが…」

ウェイ…予想通り過ぎて怒る気力も沸かねえ…

董卓「何進將軍は悪くないです…私が無理言ってしまったせいで…」

何進「いや、董卓ちゃんは悪くないよ。全部俺が悪かったんだって。」

あー…このままだと責任の所在云々で水掛け論的な流れになるな…

紀霊「お二人方、僭越ながら私の意見を述べさせていただきます。」

結論が出なくて揉めるの見てるのも嫌だし、ここは何とか納得してもらおう。

もし、納得してくれなかったら…高町式交渉術とか…やったら俺が死ぬなあ…

紀霊「起きてしまった事の責任はこのままいつでも平行線、ならば互いに悪かったという事で収めることをお勧めします。それに、起きてしまった事を責めるよりも同じ過ちを繰り返さぬように対応を考える方が有意義だと考えます。まあ、何はともあれ無事に済んで良かった。それで良いじゃないですか。」

うーむ、我ながら言葉遣いに違和感あるな…

凱乾「ふふっ、紀霊の言う事も一理ある。何進將軍、董卓殿、ここは紀霊の献策を採択されては如何かな？というかしろ何進。」

香様ーアンタナイスサポートかと思いきや最後強制してるよー？相手大將軍だよ？

何進「お前…いや坊主の言うとおりだが…うーむ…」

あ、悩んでる。まあ、悩むよね普通…

凱乾「良いからしろ、じゃないとお前の恥ずかしい過去を高札に箇条書きで記すぞ？こっちは聞きたい事があるんだよ…」

ちよー！完全に脅迫しとるよこの人！しかも過去を高札に記すとかあれやん…自分の黒歴史を他人に見られるとかおかんにエロ本見つかる並にトラウマになるよそれ…

何進「だあああつ！わ、解った。董卓ちゃん！ここは互いに悪かったという事で！これ以上この話については対応策の話以外はお仕舞い！」

何進將軍…色々とウチの師匠が…申し訳ないです…

凱乾による説得（はく）により、紀霊の案を採り話を終わらせようとする何進。

董卓「え、で、でも…」

何進「デモもストも革命も無い！頼む、俺の世論とか生活とか色々な意味でヤバくなるのは避けたいんだ！」

董卓「へう…解りましたあ…（涙）」

納得せずにいた董卓を必死に説得（？）する何進の気迫に負けたのか、その案に渋々ながらも賛成してくれたようだ。

しかしその光景は、必死の形相で美少女に迫るおっさんと言う何かと不味い状況だった。

後に、何進が凱乾によってその話で弄られる事なのは言うまでも無い。哀れ何進のおっちゃん。



凱乾「いやー、美少女に必死の形相で迫る大將軍の中年。中々にいい弱みが手に入った。でかした頭！」

紀靈「そいつはどうも。出来ればもう2、3個は弱みを握りたいところですが、何かありませんか？」

何進「ちよ！待て凱乾に坊主！何不穩な会話してんだよ！！助けてくれ嬢ちゃんと董卓ちゃん！」

微妙に黒い主人公とその師の会話にツツコミを入れつつ董卓と華雄に助けを求める何進。

しかし助けを求められた二人は

董卓「へう、紀靈さんってそんなに強いんですか…」

華雄「ああ、更に戦略や内政では私より遙かに勝るぞ。流石は私自慢の頭だ！」

と、こんな感じに話す華雄の弟自慢を興味深々で聞いている董卓。何進のSOSコールなぞ今の二人に届くはずも無く、哀しいほどに、何進は独りであった。

凱乾「あ、そう言えば何進が大將軍に成り立ての頃にやらかした事とか中々に面白かったぞ。」

紀靈「ほう、天下の大將軍がやらかした事。ですか、今後の為にも是非とも聞いておきたいものですね。」

何進「黒っ！なんか紀霊の坊主が黒いよ！てか凱乾！止めてくれえ  
っ、頼む！張遼ー張遼！助けて張遼ー！」

涙目になりながらも最後の砦、張遼を呼ぶが、離れた馬屋にいる張  
遼にその声が届くはずも無く遼来々とはならなかったとさ。

その後、紀霊は何件か何進のやらかした話を聞いてみたが、その殆  
どが自分の師である凱乾が元凶であると把握したため、何進に同情  
しつつ、この空間の收拾に当たったそうなの。

紀霊「將軍…ウチの師匠が色々と…すいません…」

何進「いや、もう良いんだ…イインダヨ…（涙）」

大將軍と太守様。（後書き）

とんぷーさんとジョニーさんの励ましが無かったら今日更新できなかった…本当この二人には感謝です。

何より読者さんが待っていて下さるのが物凄く…大きいです。

さて、また作品を書く作業と中野TRFにてコインを入れて為す術無くやられるだけの作業に移りますかな。

対トキ戦は本当にコインを入れるだけのゲーム

増えるモノ（前書き）

友人（シン使い）「柳のジャギに負けっぱなし…」

柳（ジャギ使い）「そりゃウチも頑張ってるからねー」

友人「ジャギは強キャラ（キリッ）」

柳「ねーよw」

今週の作者の日常はとあるモヒカン勢の方との会話をお送りします。

今週の更新…

いや、まあ…宦官や將軍名に手こずったw

## 増えるモノ

凱乾「んで何しに来たんだお前？用がないならさっさと帰れ。」

何進「待てや！それが久しぶりに会いに来た友人に対して言う言葉か！？」

机に肘を付き何進を見る凱乾と疲れたといった表情で息を荒げてゼエハア言っている何進。

何進「大体お前…いや、言うだけ無駄だって事を今思い出したよ…」

溜め息を吐きながら凱乾と向かい合う位置に座り、俺達を一瞥する。

何進「ああ…すまないが三人とも、ちよいと外してくれないか？」

どうやら込み入った話のようで、董卓様は「わかりました。」と一言。姉者から視線を感じ姉者に無言で頷く。

華雄「わかりました。香様、私と頭は董卓に屋敷を案内してきます。行きましよう、董卓様。」

姉者は董卓様を先導するよう扉を開けると俺に目配せしつつ退室した。

俺も將軍と香様に一礼し姉者の後を追うようにそそくさと部屋を出る。

凱乾「…予想は付くが、話とは？」

三人が去ったのを確認し今までのふざけた空気は無くなり二人の顔には笑顔は無く、何進に至っては若干の緊張さえ見られる。

何進「お前の予想通りだと思う。また十常侍の連中が良からぬ事を考えているらしい…」

十常侍、何進と同じく漢の帝【靈帝】に仕える身分だが何進とは決定的に違う部分がある。

### 【宦官】かんがん

帝に常に付き添う言わば世話役兼相談役な一面を持ち、何進のような帝の親戚ですら簡単に入りに出ない場所に自由に出入り出来る権利を持ち他の朝臣よりも帝に近い位置に存在する。

しかし、その権利の代償として己の生殖器を取り除かなければならなく自分の子孫を残せない。

名を残す事、家を存続させる事に重点を置く意味使命感じみた思想が広まっている中華において、彼らは見識あるものから批判の目で見られる事も多いがそれでも権力を求めて「宦官】になる者は多い。

何進は、妹が靈帝に嫁いだ言わば外戚。しかも妹が産んだ皇太子【劉弁】の叔父にあたり次の帝に劉弁を押す劉弁派である。

しかし、劉弁が帝となることで何進の権力が強大になると困るのは十常侍。

自分達の権力を死守するべく劉弁の妹である劉協を次の皇帝に…と

劉弁、劉協の二人は意思と関係無く権力争いに巻き込まれる状況に朝廷は陥っていた。

権力の中枢たる朝廷が混乱すれば政治は腐敗する。

漢王朝も例に漏れず腐敗の道に一步一步近づいている状況であり今回何進が凱乾の下までわざわざ訪ねてきた大きな理由であった。

凱乾「んで私に愚痴でも聞けと？」

何進「愚痴なら皇甫規や朱雋にでもするっての…解ってるんだろ？」

凱乾「私は腐った連中の巢窟に戻る気は無いよ。まあ、私はお前が最悪の事態を避けようと必死になるのを見てたからな…精々助言位はしてやるさ。」

そう言つて紀霊に勝つてきて貰つた酒を取り出す。

凱乾「さて、あのクソ爺共の企みとやらを肴に一献やりますか。」

杯を差し出す凱乾とそれを苦笑いで受け取る何進。

何進「趣味の悪い肴だなあ…だから貰い手見バワツ！」

凱乾「何〜聞こえんなあ〜」

見れば何進の顔にめり込んだ杯が一つ。

何進「おまつ、一応俺大將軍なんだが…」

凱乾「私の知ってる限り皇后の着替えを覗く大將軍なんぞ居ないぞ？」

何進「あれはお前が妹が危篤とか嘘言っただからだろうが！」

凱乾「アレー？ソウダツタカナ？」

何進「だーあつ！杯持って振りかぶるな！分かった分かった！さっきの言葉は取り消すって…」

凱乾「そうそう、人間素直が一番。まったく…可愛らしくて可憐な乙女たる私が悪趣味なんて失礼しちゃうよ。」

そう言いながら杯を机に戻す凱乾だが、

何進「お前…確か三十あばばばばっ!？」

何進の余計な一言により腰に携えていた剣（鞘付き）で何進の腹部を連続突き。

何進は何かを言いかげながらも食卓に突っ伏しピクピクと痙攣している。

凱乾「烈、覚えておきな。女は齡17になったらそこから何年経とうと17なんだよ。」

何進にそう言い放ち酒を注ぐ凱乾。

何進「ああ…そっぴやお前はそんな奴だったな…てか俺の真名…覚



えていたのか…」

なんとか回復した何進は若干腹をさすりつつ注がれた杯を手取る。凱乾「そりゃね、何はともあれ数年振りに訪ねてきた友と杯交わせるんだ。取り敢えず乾杯といこうか。」

何進「まったく…おまえさんにやかなわんよ、乾杯。」

二人しか居ない部屋の中、杯と杯がぶつかる音が小さく響き、二人は酒を呷った。

~~~~~中庭~~~~~

華雄「さて董卓様、ここが屋敷の中庭です。ゆっくりするにはもってこいの場所ですよ。」

董卓「ありがとございます華雄さん。少しゆっくりしたいですね。」

確かに落ち着くからねこの雰囲気となれば、

紀霊「ならお茶と茶菓子を用意してきます。姉者、一旦抜けるよ。」

華雄「わかった。」

董卓「あ、二人とも待って下さい。」

姉弟「何か？」

流石のシンクロ率、この数年の生活は無駄ではなかった。

董卓「私のことは月^{ゆえ}って読んでください。様付けは余り慣れていませんし…お二人になら預けても大丈夫だと思いましたが…」

もじもじしながら俺等に向かって小さな声で喋る董卓様。

紀霊「では月ちゃんって呼ばせてもらいます。」

我ながら適応早っ!?!?
って感じだねー

華雄「颯!?!? 幾らなんでもそれは馴れ馴れしすぎるだろうに…」

流石は姉者、目上の人への対応とかそこら辺は真面目だな…兵法とか内政とかの勉強は不真面目だけどね!

紀霊「んー、まあ、言われた本人が嫌なら呼び方変えるけど、月ちゃん的にはどうよそこらへん?」

まあ、俺としても少し馴れ馴れしいかなーとは思っけど、月ちゃん見てたらちゃん付けしなきゃいけないって俺の魂が…叫んだんだよ姉者…許せ。

董卓「へう…【月ちゃん】ですか…/ / / 紀霊さんなら構いませ
ん / / /」

Do-Dai姉者、本人が了承してるんだし納得するしかないよね

？俺自身も驚きだあ。
それと月ちゃんが頬染めてるのって…美少女が更に可愛く見えて最強に見える…

紀霊「だそうだ姉者、それと月ちゃん、俺の事は顕と読んでくれ。」

華雄「…むむむ…仕方ないか…。月様、私のことは慧とおよび下さい。後頭、夜に私の部屋に來い、というか持っていく。」

紀霊「げ…また何かさせる気が姉者…」

実を言うと、この数年の間、一週間に一度の感覚で姉者の部屋に呼び出される事がある。

大概が【月刊 猪突猛進】の話題から入ってタイミングを見計らった用に本題を切り出す姉者。

膝枕の練習するから膝を貸せーとか頭貸せーとか、耳掻きしてくれとか…1分間に【お姉ちゃん】と100回連呼する練習とか添い寝に子守唄、部屋の掃除と何でもござれな本題おねがいを出されたもんだ…

華雄「ああ、女癖の悪い弟分に少し姉が至高の存在と洗の…教育せねば。」

待て、今物凄く危険な言葉が！？

紀霊「時に落ち着け、姉者。俺は異性を口説いたことも無いし姉者が目上だとは知っている。だから洗脳は」

華雄「聞く耳持たん！私も慧ちゃんとか慧お姉ちゃんとか言われたい！ただし顕限定に限る！」

【はなしのつづるあいてではない！】

おし、ここは…

紀霊「月ちゃん、俺は茶菓子とお茶持つてくると張遼さんも連れてくるから結構時間が掛かる！その間、姉者をよろしく！」

董卓「え？ま、待つて下さい！今の慧さん物凄く怖いですう…へう…慧さん、なんで私の肩を掴むんですか！？顕さん助けてください…いいいいいい」

華雄「いや、少しその顕の事で話し合う必要が有りそうなので…無礼を承知でこのような事をしました。…安心してください、ここならば邪魔は入りませんよ？」

…助けたいのは山々だが、元より茶菓子とお茶と張遼さん、この用事が終わらない限り俺はゆっくりと出来そうも無いのだ。それに姉者の事だから危害を加えるような真似はしない…と思う…そう思いたい…。

紀霊「姉者ー、あんまりオイタしたら姉者の茶菓子だけなんだかよく解らない物体にするからなー」

華雄「安心しろ顕。私が話したい事は主に顕の事でそれ以外の何者でもないからな。」

歪みねえな…姉者…

そう思いつつ隠れて二人を見ていた俺だが、

華雄「あいつは だよ。」

董卓「そ、そうだったんですか！？それだと私は…へうう」

華雄「いやなに、あいつは 好きなだけでそこまで それに年
に甘いと見た。」

董卓「それなら…私にも が」

何言ってるか聞こえんが、まあ問題なさそうだな。

さて、張遼さん探して台所行くか。

俺は取り合えず馬屋に向かいながらどんな茶菓子を出すか。それと
今日は来客もいるからどんな料理を出すべきか？そんな事を考えな
がら歩いていた。

~~~~馬屋~~~~

馬屋、普段は2匹しか居ないのだが、来客の馬が3匹…ウチの2匹  
とじゃれ合う様な雰囲気を感じる。仲いいなーお前ら…

んで目的の張遼さんはっと…

紀霊「張遼さん…居ないのか？」

おかしいな？気配はするが返事が無い…つー事は…隠れて様子を見  
られてる？

んー見つけるの面倒くさいし…アレしかないな…

紀霊「張遼の姉御ー！！どこですかー？」

張遼「誰が姉御やー！」

上空から誰かがそんな事を叫びながら落ちてくる。まあ、声聞いているから判別余裕でした。

紀霊「張遼の姉御見ーつけた。次は姉御が鬼ね？」

張遼「しもた！折角隠れてたんに…しゃあない、ほんなら10数えんで？いーち、にーって何鬼ごっこしてる流れになつとんねん！！」

流石姉御！ノリツツコミとか俺に出来ない事をやってのける！

張遼「そこに痺れんでも懂れんでもええ！」

しかし何故知っているんだ？いや、まあ、恋姫故致し方なし…だな。

紀霊「つー訳で、かくかくわくてかという事で呼びに来たんですよ。

」

張遼「そういう事かいな、わかったわ…とその前に…」

姉御が自分の偃月刀を手に取る。

張遼「これな、ウチの愛刀【飛龍偃月刀】って言うねん。」

ほうほう、俺も自分の武器欲しいな…三尖刀とか…  
それよりも…嫌な予感しかないのは気のせいかな？

紀霊「いい武器ですね。てか姉御その武器どうするんです？」

張遼「…まあ、あんさんに姉御って言われるのも悪くないからもう何も言わんけど…取り合えず中庭で一戦やらへんか？」

どうみても最悪の展開です。有り難うございました。

紀霊「いや、お断りし」

張遼「あ、問答無用で強制やで？」

…姉者と月ちゃんのいる中庭に持っていく茶菓子とお茶以外に、持っていくモノが一本増えました。

## 増えるモノ（後書き）

いやー…出来が悪いったらありやしないw

まあ、董卓や張遼、何進が出てきた時点でお分かりの読者様も多いでしょうが、もう少しすると後漢を揺るがしたあの乱が勃発します。

そしてその時の姉者と主人公は…

まあ、続きをお楽しみにつて奴です。

PVとユニークを見てJINRO吹いたw

評価もどんどん増えてるし…良いのかな…こんなに評価してもらって…

御意見、ご感想お待ちしております。



姉者と姉御の違い（前書き）

友人「携帯壊れたorz」

柳「あーららw まあ、俺も壊れてるしなあ」

友人「お前の携帯は使い過ぎなだけだろ…」

柳「携帯電話は音楽聞けてネット見れば十分、電話なんぞ使わん（キリッ）」

友人「それは携帯電話じゃねーよw」

因みに作者の携帯は使用してから5年目位。  
電池パックが2時間もたなくなってますが元気です。

最近、難産が続くw

## 姉者と姉御の違い

紀霊「つー訳で、」

張遼「審判宜しくなく華雄ちん。」

中庭にて、何故か意気投合しまくっていた姉御と月ちゃんに俺と姉御は審判を無茶振りし間合いを取る。

華雄「ふむ、構わんが頭よ…そんな装備で大丈夫か？」

姉御：飛龍偃月刀

俺 …素槍ひのしのほし

紀霊「大丈夫じゃないが問題無い。」

我ながら言ってることは無茶苦茶だがなんとかなるとか考えている自分がいる。てか槍がこれしか無かったんだよね…

紀霊「準備は良いぜ姉御！」

張遼「よっしゃ！かかって来いや！！」

華雄「それでは…始め！」

姉者の合図と共に動いたのは姉御。  
いきなり奇襲とは…きつついなあ…

張遼「そりゃあっ!!」

物凄い速さで突き、払い、突きの三連撃を繰り出してくる…姉御程では無いが十分に重く、何より香様より速い攻撃の数々…俺は受け止めつつも無意識のうちに舌打ちをしていた。

紀霊「ちいっ!」

隙を見計らい、牽制の突きを入れて姉御から距離を取る。

なんつー速さだ…張遼つーたら神速だとは知ってたけど…やはり見ると聞くとは違うか…

張遼「ええなあ!ええなあ!華雄つちと言いい紀いと言いいワクワクするわ」

紀い?

…あ、俺か…随分と斬新な呼び方だなおい…

紀霊「ワクワク?」

張遼「そや、昨日は華雄つちとやったけど華雄つち素手やで!?

素手なんにウチの事負かしたる位やから武器持ったらもつと強いんやろうな…って思うとるんよ。」

紀霊「あー…」

確かに姉者は強いけどさ…、この人は…昨日の今日で俺とやり合うとか…普通養生しようとか考えるものでね?

それともアレか？

「俺より強い奴に会いに行く。」  
ですか？

どこの求道者だっつーの…

張遼「それにな、紀いに興味沸いたんよウチ。」

董卓「!？」

紀霊「興味？」

槍を構えたままではあるが、姉御の話に耳を傾ける。

張遼「そや、紀いなウチの…」

華雄「其処までーっ！」

姉者は物凄いで俺と姉御の間に入り手合わせの終了を宣言する。

紀霊「どうしたんだ姉者？」

華雄「どうしたもこうしたも無い！手合わせは終わりだ暴力反対！」

紀霊「ちよ、姉者何言ってるの!？」

姉者が暴力反対を訴えるとか…違和感しか無いぞ？

董卓「私も反対です！手合わせはおしまいにしてゆっくりお茶でものみましよう。」

月ちゃん…君が反対なら仕方ない…のか？

月ちゃんの命令なら姉御は退くしかないだろうし、俺も姉者の意見だから逆らうと後が怖いし…

張遼「華雄うち…ウチの事…嫌いやろ？」

華雄「お前は一緒に居て気持ちのいい奴だが、それとこれとは別だ！」

つて姉者に姉御ー！？

なんで臨戦態勢取ってるんよ！？

紀霊「姉者っ！さっき言っていた暴力反対はどこいった！？」

華雄「そんなもの私の辞書には無い！」

うわぁ…言い切りやがったよこの姉…。

張遼「分かり易くてええやん、ほんじゃ一丁昨日の決着付けたるか武器持って来いや。」

華雄「勝った方が正義…良い勝利になったものだ…」

いや、どこのkingよそれ。

張遼「始まる前から勝利宣言かい…安心しいウチが正義さかい。紀い！さつさと片付けてくるさかいウチの分も用意しといてな〜」

華雄「なっ！…躰うっ！！布団を敷いて待っている！直ぐ【躰の姉】たる私が添い寝に行くから安心して待っているが良い！」

紀霊「姉者、まずここは屋外でそもそも日も落ちていないのに寝る訳無いだろう。」

張遼「添い寝かいな!？」

驚く姉御と謎の勝利に浸った表情をした姉者。

華雄「添い寝なんぞいつものことだ。何れは風呂も一緒に…と考える居るのだが顕の奴…なかなか隙を見せんだ。」

紀霊「物凄く遠慮したいのだが…」

以前から入浴時に嫌な予感とか誰も居ないのに視線感じたり、湯上がりに服が一部無くなってたり夜中に俺の部屋で啜り泣く女の声は姉者だったのか…

道理で変だと思ったよ…

張遼「ん…せや!紀い…ウチが勝つたら一緒にお風呂入らへん?ほら、ウチと華雄の違いが一目でわかるで?」

紀霊「姉御、絶対この状況楽しんでるでしょう…それと違ってたて、俺的には大差無いんだがなあ。」

董卓「ですよね!大事なのは大きさは無いですよね!顕さんは流石です!」

月ちゃんが嬉しそうに俺の手を取る。

華雄「流石は我が弟だ、小さいは小さいで魅力的だと理解している

な！よしお姉ちゃんが撫でてやるう！」

姉者は俺の首に抱きつく形のまま頭を撫でてくる。

姉御は何か凹んどるし…

はて、小さいのが魅力？

ああ、月ちゃんか。

紀霊「月ちゃんはまだまだ此から成長すると思うぞ？ 姉者も成長の幅は人それぞれだから気にしなくても良いのでは無いか？ 姉御も姉者と同じだけど、姉御が一番大きいんだっただね。 けど、後数年したら俺が一番大きくなっていたいものだ。」

三人「「「え？」「」「」

紀霊「ん？」

…沈黙。

先に口を開いたのは

張遼「紀い、一応聞いておきたいんやけど…成長するんはどこや？」

紀霊「一応って…大きい小さい騒いでたのって身長のことじゃ無かったのか？」

紀霊のこの一言により、誰とは言わんが二人が落胆し、一人は呆れ顔となってしまう。

紀霊「まさか違ってたとい」

華雄「いや、会ってるぞ！そ、そうだよな！私と張遼殿の身長差は大差が無いからま、まだ私があ…ある…な…」

董卓「そうですよね慧さん！ま、まだこれからですよ…ね…」

どこからか、木か何かだろうがバキツと折れる音がやたらとはつきり聞こえてきた、人の気配とかは無いけど一応警戒しておこうかな？

張遼「華雄うち…苦労しとるんやな…」

華雄「…ああ。それとその華雄うちと言つのをやめてくれ。慧と呼んでくれて構わん。」

張遼「ならウチは霞で構わんで？慧ちーと紀いにもウチの真名預けるわ。」

あれ？

姉者と姉御のピリピリした感じ無くなったし…いつの間に真名交換の話になったんよ？

…ま、良いや。

下手に突っ込むと俺が被害被るし、女の子の会話はよう解らんとあるからな…

紀霊「さて、お茶のおかわりでも用意しますかな。」

華雄「まあ、待て頭。」

姉者に何故か右肩を掴まれた。



つてか痛い！痛い！凹む！

紀霊「姉者…痛い痛い！あだだだあつ！」

や、やめてくれ姉者！俺の右肩のライフが0になってしまっ！

華雄「いやなに、簡単な事だ。私の質問にちゃんと答えてくれれば放してやるぞ？」

なら早よ質問してくれ！なんかこのままじゃ肩が秘孔突かれた音出しそうだから！

華雄「…何故…霞の事を姉御と呼んでいるんだ？」

一瞬の沈黙の後、姉者と目が合う。

姉者「なんか目から光が無くなってるよ？」

けど、そんな姉者もなかなか可愛いので良いっちゃ良いんだけどね、俺の本能が警鐘鳴らしてるから元に戻って欲しいかなー

紀霊「なんか姐さんとか姉御って呼び名にティンと来たから呼んでいるんだ。」

董卓「確かに呼ばれてそうで違和感ないですね…。」

月ちゃんは納得したようで何よりなんだが、

張遼「要するにウチも紀いの姉って事やな！紀い〜ウチの事お姉ちゃんと呼んでみてくれへん？ な！な！」

姉御…を…お姉ちゃんだと？

紀霊「いや、姉御は姉御と呼びます…」

お姉ちゃんとか恥ずかしくて呼べんわ…

それに…呼んでみたいけど…肩が…自分の肩の方が…大事です。

華雄「…そうか、よし顕。少し私の部屋でお話しようか…大丈夫だ、顕は私に身を委ねれば良いのだから安心しろ。」

紀霊「若干怖いのだが…一体何をするつもりだ姉者…」

内容によっては主に俺の理性がガードクラッシュしてしまうんだが…

張遼「お、慧ちー。ウチも混ぜてくれへん？」

姉御ー！

火にガソリン撒かないで！！

只でさえ姉者の相手ですら一杯なのに…って姉者！引つ張るな！担ぐな！拉致するな！

華雄「霞、ここからは私と顕の話になるので遠慮願う。それではっ」

紫色のオーラを出す姉者は二人を置いて俺を担いだまま歩き出す。気分は売られていく子牛だなまったく…

担がれた状態のまま、取り敢えず月ちゃんと姉御に手を振ると姉御は何故か合掌していた。

華雄（+紀霊）が去った中庭にて、口を開いたのは張遼だった。

張遼「月うち…今日は宿に帰るか？」

董卓「そう…ですね。何進將軍はまだ話中でしょうし…私達だけで帰りますか。」

二人はそう言うとは何進、紀靈の二人を見捨てそそくさと馬屋に向かった。

〳〳その頃の何進〳〳

凱乾「ほらほら、飲め〜」

何進「ま…待て…もう飲め…ん…」

既に何瓶空けただろうか、食卓の上だけでなく床にまで瓶が転がっているところを見れば相当な本数だとは理解出来る。

何進「だ、誰か…助け…」

凱乾「こら、まだ私の話は終わって無いぞお！ 話聞いて居なかった烈は一瓶一気の刑に処す〜飲めー！！」

…哀れ何進。

因みに何進が潰れた後もそれに気が付かない凱乾は朝まで飲みつつ色々愚痴ったそうな。

〱華雄の部屋〱

華雄「到着！」

勢い良く扉を蹴り飛ばして中に入る姉者。  
後で扉修理するの俺なんだろうな…

紀霊「毎度の事だが元気だよな姉者…。それといい加減降ろしてくれ…」

姉者は、「それもそうだな。」と呟き俺を…何故布団の上に降ろす？  
確かに床に落とされるよりも痛くないから嬉しいけどさ…

紀霊「んで姉者よ、本題に入ろうか。」

華雄「む、ばれていたか…」

そりゃねー、本当に暴走した姉者なら周囲を見ずに行動するだろうし。

何より部屋までの壁ぶち破いて最短距離で突撃するだろう？

紀霊「なんとなくだな。」

華雄「では言うでしょう、私は月様に仕官するぞ！」

…わーお…

華雄「月様の民を想う気持ちがあり、何より平和を願う気持ちに共

鳴したのだ。故に香様にこの事を話し次第月様に仕官するつもりだ。」

流石は姉者、唐突な発言内容と言い行動と言い、やる事が違う…。

紀霊「ふむふむ、俺には予め言っておこうと考えたわけか。」

華雄「そうだ、色々と下準備があるだろうし行き成り言われてもお前も困るだろう？」

ん？

…待て。

紀霊「姉者…仕官するのは姉者だよな？」

姉者は当然と言った顔で言い放つ。

華雄「そうだ、仕官するのは私だが顕も連れて行くことと思ってな。

ああ、言わなくても解っているよ顕…。」

何故よ!？

一応文句は聞いてくれるみたいだからなんとか説得できる余地はありそうだけど…

華雄「もし、お前が他に道を探したならそれはそれでしょうがないからな…。」

あ、姉者が優しい…

御免姉者…疑って悪かった…

紀霊「姉者…」

華雄「そうなれば私の持てる限りの力を使い何としてでも阻止するから安心してくれ!!」

紀霊「…姉者、実は俺のこと嫌いだろ？」

華雄「冗談だから気にするな、本音を言えば一緒に来て欲しいがな。」

んー、姉者が原作通り行っているとすれば、今後を考えると一緒の勢力だと…何か手でも考えておくかな。

紀霊「まあ、見識を広めたいから色々周ってみたいし、数ヶ月位客将として世話になるかもしれんね。」

今はまだあの乱が起きてないし、暫くは様子見したいのが本音ではあるがな…

華雄「そうか」

そんなに落ち込まれるとなんか罪悪感沸いてくるんですけど…

華雄「さて、そろそろ本題に入るか。」

……………え？

紀霊「今のは本題じゃないのか…」

華雄「こんなもんおまけだ！それよりも霞を姉御と呼ぶとは…胸か

？胸が一番大事なのか！？ ……少しなら…私だって…」

自分の仕官先の話をおまけ扱いしてるよこの人！  
しかも胸って何さ？

確かに姉御と姉者の差はあるかもしれないが気にするようなモノなのか！？

華雄「頭にとって、誰が一番至高の姉か…私がきつちり教え込んでやろう…ふはははは！！今夜は寝かせんぞお！！」

紀霊「おっちゃーん！姉御ー！た、助けてくれーっ！！だ、だれかむぐっうー！？」

～次の日の朝～

董卓「顕さ～ん…生きていたら返事をしてください」

張遼「紀いに何進將軍大丈夫かいな…」

そんな事を呟きながら凱乾の屋敷に入る張遼と董卓。

何進は直ぐに見つかったものの、二人は酒盛りしていたであろう部屋  
の惨状を見て絶句し、凱乾及び何進の放置を決定。  
見なかったことにした。

二人はもう一人の遭難者(?)を探すべく屋敷を捜し歩く。

数分後その遭難者が見つかった。

もう1人の遭難者は台所にて朝食の準備をしている最中で、二人に気づくと普通に挨拶をしてきた。

紀霊「お、月ちゃんに姉御か、おはよう。」

昨日と変わらない紀霊を見て安堵した二人。

張遼「紀い、良かったわ、無事だったんやな。」

董卓「無事で良かったです…心配したんですよ…」

紀霊「いや別に死んだとかそういうわけじゃないんだから…」

流石の紀霊でも死にそうな状況ならこっちは言わんだろう。

張遼「しっかし慧ちーに何されたん？ほれほれ、お姉さんに言ってみいゃ」

紀霊の頭に腕を廻し、胸を押し付けるようぐいぐいを動かして反応を見る張遼と胸の部分を若干怨念染みた視線で見つめる董卓。しかし、紀霊の次の言葉に彼女達の安堵は瓦解した。

紀霊「姉者？アア、姉者ハカワイイデスヨ？」

石のように固まる二人、何故固まったか理解していない紀霊。



紀霊「ん？俺何か変なこと言ったか？」

張遼「紀い！あかん、しつかりせい！戻って来い！！」

董卓「だ、駄目です！正氣に戻ってください顕さぐん！」

そう言いながら両肩を揺する姉御と俺の腕にしがみ付いて泣いている月ちゃん。

…何故泣かれた？

その後二人は、紀霊に近づこうとする華雄をことごとく阻止し、常に傍で紀霊に呼びかけたそう。

その甲斐あってかどうかは知らないが、紀霊の言動は夕方には戻ったとのこと。

紀霊「いや、今日の姉御と月ちゃん…なんかおかしかったんだが？

何かあったのかな？」

しかし当の本人はまったくもって理解していない。という事をここに記す。

## 姉者と姉御の違い（後書き）

とうとう姉が増えた主人公。

更に明かされた姉者の士官先を聞き、紀霊も自分の将来を考え始める。

さてさて、どうなることやら…

御意見、ご感想お待ちしております。

## とある兵士の報告書（前書き）

これは本編では無く番外編に当たる作品です。

本編にちよいちよい出てきた兵士からの視点。を書きたくなくて投稿しました。

リアル事情の為遅くなり、しかもこのような作品の投稿になってしまいました…

待っていて下さった読者の皆さん、すいません…

本日の「作者の日常」はお休みします。

## とある兵士の報告書

これは長安所屬のとある守備隊兵士の業務報告から文章を抜粋したものである。

年春

洛陽にて親衛隊の武術師範をされていた凱乾様が長安に帰郷。どうやら師範を辞めて永住するようだ。

隊長からの返答

高名な御方故粗相の無いように注意する事。  
時間を見つけないで挨拶に行くでしょう。

年春

前日報告した凱乾様と遭遇。

1人の少女を連れて買い物中のように入ったばかりの新兵が「娘さんですか？」

と質問

「私の子持ちに見えるかーっ!!」

と叫んだ凱乾様により城壁に殴り飛ばされ城壁に人型の凹みを作られた。

その新兵はその後何食わぬ顔で警邏を続行、因みに無傷です。現在その凹みは長安の新名所として人気を集めている模様。

隊長からの返答

…後で菓子折り持って謝りに行ってくる…  
それとその新兵は何故無傷なんだ？

城壁については修理せずそのまま名所として活用せよとの大守からの命令が達せられたので放置。

年夏

城外にて凱乾様と少女を発見。

どうやら少女は凱乾様の弟子と推測される。

鍛錬中らしく少女は馬と縄で繋がれて引きずられていった。あの時の凱乾様の目は明らかに少女を見て楽しんでる目だった。追記として

春に記述した新兵がまた凱乾様により投げ飛ばされる。

今度は城外だったため城壁に損害無し。新兵は無傷でその後元気に任務を遂行。

隊長から返答

死人が出ないことを祈る。

新兵に関しては一度医者に診て貰うように伝える事。

年夏

城壁に沿い外周する少女を発見。

よく見たら凱乾のお弟子さんで名前は「華雄」と言うらしい。

鍛錬の最中らしく何度も走っている姿を確認。

何故か非番の新兵（面倒なので兵Aと記載）まで途中から鍛錬に参加していた。

一周する度に凱乾様と一騎打ちをする鍛錬らしく、勝てば鍛錬終了。負ければ外周と言った内容とのこと。その後何度か胴体着陸で自分

達の前まで飛んでくる兵Aと走ってくる華雄ちゃんを目撃。

夕方、日が暮れるまで華雄ちゃんと兵Aは外周していたのを確認し報告します。

追伸

兵Aは診断の結果、健康そのものだそうです。

隊長からの返答

華雄ちゃんには鍛錬頑張つて欲しいものだ。

兵Aについては何がしたいのか解らんが取り敢えず誤診した医者呼んでこい。

年秋

付近の森林から立ち上がる煙を発見し現地に行くと凱乾様と華雄ちゃんを発見。

なんでも焼き芋の最中らしく事情を説明するとお詫びに焼き芋を頂いた。焼き芋ぷまいです。

焼き芋が熱かったのか頬張つた瞬間に「熱い…」と涙目になる華雄ちゃんが可愛らしかった。萌ゆる！

その後兵Aと凱乾様による焼き芋争奪戦が開幕。

凱乾様の南斗水鳥拳に対し兵Aは南斗爆殺拳で対峙。結果は言うまでもなく兵Aが「どんからがっしょん」と焚き火に向かって転倒し敗北。

追伸

お土産に焼き芋貰つたので食べて下さい。

隊長からの返答

兵Aは自爆だから無視するとして、華雄ちゃんの件は他の隊長と大守が聞いたら羨ましがらるだろう。焼き芋美味かったが華雄ちゃんの涙目が見れなかった事が残念だ。

年冬

凱乾師弟が城壁で散歩している場面に遭遇。

凱乾様の提案により何故か華雄ちゃんと凱乾様相手に雪合戦開戦。  
30対2の戦いながら完敗しました。

兵Aは毎度の如く凱乾様により投げ飛ばされた挙げ句雪だるまにされて放置。

面白そうだったので見張り任務の兵士に監視を要請し任務継続。

雪合戦が思いの外楽しかったので他の警邏の連中にも話して実施。

現在、長安守備軍で密かな流行となっています。

追伸

兵Aは二日後に自力で脱出し任務に復帰。

健康状態異常無し。本人曰わく「心頭滅却すれば雪も温泉。感覚は投げ捨てるもの（キリッ）」

隊長からの返答

雪合戦に俺も呼べよ！

雪合戦観戦が民衆の娯楽となってきたらしく、隊対抗で雪合戦大会を上層部が企画中なので我が隊でも訓練項目として組み入れるように。

それと、兵Aは本当に人間か？

年冬

以前隊長が言われていた通り、太守様主催の各警備隊対抗雪合戦大会が開催された。

来賓として華雄ちゃんと凱乾様が特別参加していたためか兵士達の士気上昇を確認。

我が隊は隊長指揮のもと、奮戦。兵Aの投石器による援護射撃の甲

斐もあり優勝し特別試合で凱乾様、華雄ちゃんと対戦。

短期で突撃してきた華雄ちゃんが可愛らしくて攻撃できず失格者続出。

兵Aは相変わらず凱乾様との一騎打ちに挑み敗退。

「南斗人間砲台！」とか叫びながら投石器で自らを射出。

着地の際頭から雪に埋まるよう突き刺さっており、何故か両足が天に向かって伸びていた。

凱乾様が呆れたように兵Aを見ていたことをここに記す。

隊長からの返答

皆雪合戦ご苦労だった。

各隊長と太守様が華雄ちゃんの活躍にご満悦だったみたいで我等に褒美をくれたので後で取りに来るように。

太守様が「来年は私も参加して華雄ちゃんの雪球をこの顔につ！」といきり立っていたので来年も開催される模様。

各自鍛錬するように。

兵Aは今回の活躍が認められ昇進する予定と本人に伝える事。

後、凱乾様との一騎打ちや本人の行動が長安の名物と化しており、

太守様から一言

「けしからん、もっとやれ。」とのこと。



## とある兵士の報告書（後書き）

今回の報告書は紀霊登場前の長安をメインとしています。

作者としては話し進めたいですが忙しさ＋スランプで筆が…

何か良い解消法は無いでしょうか？

御意見、ご感想お待ちしております。

姉者の行く道、俺の行く道（前編）（前書き）

友人と買い物中にチヨコを見て一言。

柳「後輩（男）にドッキリでチヨコ渡すか。」

友人「良いねえ、やるか！」

この一言がきっかけで後輩（女）を仕掛け人にした【ちょっと早いけど、バレンタインチヨコドッキリ2011】が実行に移される事に…

企画・発案：柳

チヨコレート製作：柳

後輩（男）への調整：友人

後輩（女）への調整（依頼）：柳

目標（後輩男）へのチヨコ手渡し：後輩（女）

作ったチヨコ

後輩（男）用

後輩（女）用

友人用

取り合えず友人のは豪華にしておいた。

手に入れたもの

・後輩（男）の驚く顔

・後輩（女）の驚く顔 作者が手作りしたと伝えずWドッキリ仕掛けました。

・小説のネタになりそうな友人達との会話

・思い出

そんな作者と友人の日常

…前書き長いよ！何やってんの俺！？

今回は前後編に分けてみようと思います。

前編はメタ発言が多いのと出来が悪いかもしれません…

姉者の行く道、俺の行く道（前編）

華雄「香様、仕えたい御方を見つけました。」

姉者が香様に自分の道を報告したのは月ちゃん達と会ってから4日目  
の事だ。

月ちゃんと姉御、それに何進のおっちゃんにはお願い（イロイロ）  
したので隣の部屋で待機してもらっている。

凱乾「それは董卓度の事だな？」

…おっちゃん…選択肢にすら入ってないのかよ…

華雄「その通りです。董卓様の下、私は乱世に身を立てたいと思  
います。」

凱乾「そかそか、まあ、慧なら大丈夫か。」

そう言くと香様は立ち上がり姉者を抱きしめる。

姉者も無言で抱きつき返し、香様は姉者の頭を撫でる。

互いに無言。

無言ではあるが、俺には二人が心で会話しているみたいで、まるで  
本当の母娘ように見えた。

凱乾「さて、早速董卓殿に娘の事を売り込むとしようかな。慧、行

くよ。」

香様は姉者を伴い隣室に向かった……………俺…いや、  
今回は空気で居よ。

そもそも俺が居ても姉者の話だし空気になるのは止む終えない。

紀霊「お茶の準備とか昼食の仕込みでもしてよ…」

姉者達が居なくなった部屋で独り言を呟いた俺は台所に向かって歩  
き出す。

～～隣室～～

凱乾「と言うわけで、うちの慧を配下に見ないかい？武ならそ  
んじよそこらの武将じゃ相手にならない位だし、何より人を裏切らな  
い真つ直ぐな性格だから信用出来ますよ。」

何進「いや…随分と軽いなおい。」

香と華雄の嬢ちゃんが部屋に入ってくるなり経緯を説明したんだが  
…香の奴らしいけど…勧め方が軽すぎる気がする…

凱乾「いや、堅いの嫌だし。それに分かりやすくして良いだろ？」

確かに分かりやすいと言えば分かりやすいが、何進はどこか納得行  
かないようだ。

凱乾「何進は放っておいてだ、董卓殿の答えを聞きだせ」

その言葉を受けて全員の視線が一箇所に集中する。

それは勿論董卓であり、本人はその視線を感じつつ思案にふける。

~~~~~その頃の紀霊~~~~~

紀霊「いざ進めや〜キッチン〜」

昔見ていたアニメの歌を呟きながら台所に入る。

紀霊「読者さん！キッチンですよキッチン！」

おとやん「軽くメタ発言すんな馬鹿。」

む、これはこれは…数話振りの登場となる上に姉は姿が描写されているのに自身の描写が無いおとやんじゃあるまいか。

おとやん「軽く輪廻一周さすぞ？」

そう怒るなって、友人の「おとやん要らなくね？」の一言で存在消されかけたけどまた出てこれたやん。

おとやん「俺って…一体…」

けど友人から受けた次の一言

友人「おとやん男だろ？別に描写要らないと思う。てか野郎の描写なんぞ要らん！妹を出せ（キリッ）」

の一言で描写無くなったんだがね！

ねえ（N）、描写決まっていたのに出されなくなるって

どんな（D）

気持ち（K）？

未だに描写書かれていない主人公より先に描写される筈だったのに
…NDK？

おとやん「無茶苦茶腹立つな…お前…」

前回出番無かったからな、機嫌も悪くなるわな…
んで、おとやんはどうしたんよ？

おとやん「いや…お前に言いたいことが合っつてよ。」

言いたいこと？

おとやん「おうよ、この世界についてなんだが、恋姫の外史的な位置にある。」

恋姫の外史？

いや待て、恋姫自体が三国志の外史って位置に有るのに恋姫の外史って何よ？

おとやん「簡単に言えば大元である恋姫無双の世界では紀霊と言う
武将は表舞台に出ることはなかった。それに比べてお前はどっ見ても表舞台に出そうな流れでよ、そこんとこ少し調べてみたら案の定
【恋姫無双の外史】って位置にこの世界は有るんだよ。」

…って事は…

例えば俺が黄巾の乱で黄巾側に付いて戦った挙げ句に皇帝殺したり…

本来なら最後に残るはずの3君主を事前に配下として組み込んで中原の覇者になっても…

おとやん「やりたい放題出来るって訳だ。それによ、特殊な転生って形ではあるけどお前はこの世界に生まれているもんで、元々居るって世界が認識してるんだ。だからか修正とかも働かないって寸法だ。」

なんつーフリーダム…原作バイバイにも程があるだろ…

おとやん「伝える事は伝えたし、そろそろ引き上げるわ。」

ちよいと待ておとやん、頼みがあるで聞いてくれ。

悪いが毎月タバコ送ってくれないか？

おとやん「あん？それは構わねえが未成年だろお前…」

転生前は成人してるから問題ない。

つー訳でウinstonの6mmを1カートンで毎月四回、計4カートン頼む。

あ、付属のライターも付けてくれ。

1カートンはタバコ1箱×10で1カートン纏めて買っと大体オマケでライターが貰えます。

おとやん「4カートンって…吸いすぎ」

よし、最近君の弟が見た目幼女な姉を調教するゲーム買ったとしんちゃんに報告しよう！

おとやん「是非提供させて頂きます！後アレは登場人物全員18歳以上です！」

素直で宜しい。それとそれに関してはこっちの世界も人の事言えない…か…

主に何処かの慌てふためく炉利軍師二人組とか…
つかなんで軍師組は見た目幼女多いんだよ…

おとやん「俺は全然構わん！寧ろもつと増えろ！」

…しんちゃん…弟の事、絶縁した方がいいんじゃないのか？と言いたいけれど俺は我慢するよ？

つたく、何はともあれ頼んだぞ。今から料理作るんだからそろそろ引っ込んでくれ。

おとやん「あー…そろそろモヒカン大会の生放送始まるし、んじや行くわ。」

生放送…羨ましいけど欲を言えば出たい…

畜生、死ぬって分かってくればもつと頻繁に行ってたのになあ…

と元の世界で遣り残した事を後悔しつつもきっちり食材を用意するあたり紀霊はこの世界に馴染んでおり、用意する様は完璧に主夫である。

〱〱凱乾達の居る部屋〱〱

先ほど凱乾が董卓への返事を求め、董卓は無言のまま華雄を見つめる事数分。

皆が董卓の口が開くのを待っていた。

董卓「…私なんかの下に来てくださるのはとても嬉しいです。恐らく乱世は今後激しさを増していきます。民衆の皆さんが笑って暮らせるようにするには慧さんのような人が私には必要です。…慧さん、此方からもお願いします。私の下に来てその武勇を振るっていただけませんか？」

しっかりと意志の籠った目で華雄を見つめ、口を開いた董卓。

その口からは華雄にとって最高の結果が返ってきた。

その言葉を聞き華雄は瞳を潤ませながらつつも瞬時に跪いて顔を伏せ、臣下の礼をする。

華雄「姓は華、名は雄、字を乾香、そして真名は慧。この華雄、董卓様に忠義を誓います。どうかこの武勇を貴方様の為にお役立て下さい…」

「これからは、その武で私を支えてください。」と華雄の手を取る董卓。

その姿を見て凱乾は満足そうに唯頷く、その表情は我が子が行く道を決めた事への喜び。そこに別れへの悲しみ、寂しさは見当たらない、純粹に華雄の事を喜ぶ母の顔であった。

その凱乾を見てやれやれと思いつつ新たな主従に祝福せねばと考える

る何進。

下手すりゃ今日も香の愚痴聞きかな？と心の中で愚痴りつつ【ま、今日位は付き合ってやるか】とか思っているあたり、凱乾が華雄をどう思っているのか何進なりに気遣っているみたいだ。

それに気づいたのか張遼は何進の肩を叩き、「頑張つてきいや」と満面の笑み。同僚が増える事が嬉しいのか彼女も上機嫌なのが窺える。

紀霊齡十四

華雄齡十六

後に董卓軍屈指の猛将と呼ばれる「華雄」将軍が生まれた瞬間であった。

姉者の行く道、俺の行く道（前編）（後書き）

チョコ作りが思いのほか楽しかった。

作者はケーキなら作れますが、クッキーやドーナツ等のお菓子が作れない：ホットケーキ作ると甘いお好み焼きになるお；；

なるべく早めに後編を出せるように頑張ります。

御意見ご感想お待ちしております。

姉者の行く道、俺の行く道（後編）（前書き）

俺「一九字牌が無い手役がタンヤオって言うて…」

後輩（女）「えっところですか？」

友人「柳、この場合の待ち牌なんだけど」

俺「あー、これだと3面待ちで当たり牌によっては点数上がるな。」

後輩（女）が麻雀に興味を持ったようで友人と3人で雀荘に行き授業してみた。

後輩が異様なまでにハマってしまいゲームも買うそうで…

…後輩に麻雀を紹介しなきゃ良かったかも…

そんな作者の日常

さて、今回の作品は何時もより長いです。

お待たせしてしまい申し訳ありません。

姉者の行く道、俺の行く道（後編）どうぞご覧下さい。

後書きにアンケートがあります。ご協力お願いします。

姉者の行く道、俺の行く道（後編）

紀霊「豚挽き肉に　豚挽き肉に　豚挽き肉に　ねっちゃんぐつち
よん捏ね回す」

台所にて何故か藁人形が脳内に浮んできそつな気がする曲を替え歌
にして歌う紀霊。

その手には豚挽き肉と轆き終えた小麦粉が交じり合っている。

紀霊「ウェーイ、ハンバーグモドキの出来上がりだ。」

おとやんが引込んでから、俺は台所で黙々と「ハンバーグのような
モノ」を作っては焼き、作っては焼きの作業を繰り返す事1時間、
俺は名状し難いハンバーク（笑）を皿にのせ野菜を盛り付ける。後
は御飯だけどー…炊き上がってはいるけど少し蒸す時間が欲しい。

となれば…

紀霊「一度様子でも見に行くか…」

俺は呟きながら軽く片付けをする。

包丁を仕舞ってつと…手を洗い台所を出る。

…その時の紀霊は姉者達が気になって居たのだろうか、其処に隠れ
て居た気配に気が付かず暢気に紀霊は台所を後にした。

台所を出て廊下を歩く。目指すは香様達のいる部屋だ。

紀霊「さて、予想通りなら姉者は…」

予想通り、いや、原作通りなら姉者は月ちゃんの配下になるな…

となりやあ…

??「おぶらばっ!」

紀霊「何だ!? 新手の奇襲か!？」

姉者達の居る部屋から何かが庭に飛んでいく。

しかも俺の目の前で壁を突き破ってだ…

紀霊「何なんだよ…っっておっちゃん!？」

庭にうづくまるのはボロ雑巾みたいになってピクピクしている何進だった。

紀霊「お、おっちゃんっ何があったんだ!? 傷は深いぞ! ガツカリしろ!」

何進「そ、そこは…傷は…浅い…ぞしっ、しっかり…しろだ…ろ…」

よし、ツッコミ出来るなら大丈夫そうだな。

紀霊「問題ないみたいで安心したよ。何があったのさ?」

何進「これが大丈夫に見えるか!？」

見えます。だって吹っ飛ばされたのに数分で怒鳴りつつ自分で立てる位回復してるんですもの。

紀霊「んで、おっちゃん…何やらかしたんだよ…」

何進「なんで俺が原因みたいな感じで聞くんだよ…」

紀霊「だってさあ…」

そう言っておっちゃんが飛んできた方向、皆が居た部屋の入り口を見る。

何進「うへえ…」

香様が見テレウー…もとい睨んでれう〜

つか姐者も姉御も月ちゃんも…見てるって言うより睨んでるし…

紀霊「おっちゃんは…例えばだけど、俺が吹っ飛ばされた上でこの状況なら誰が原因だと思う?」

何進「……………間違い無く坊主です…」

紀霊「でしょ?」

自分でも納得出来るから悲しくなってくる…別の意味で納得いかな…

張遼「おお紀い、どこ行つとったん?取り敢えず其処のボンクラの傍に居らんでこつち来いや。」

華雄「霞に同感だ、顕一早くこつちに来るんだ。出来れば私の胸に飛び込んで来い。」

姉御：何があつたか知らんがボンクラは言い過ぎだろつよ…それと姉者、両手広げてスタンバイしないでくれ。それ見たら体が勝手に動きそうになつたのは…怖いから皆には秘密だ。

董卓「何進さん…流石にどうかと思います。」

凱乾「烈：お前は私を怒らせた…故にかかつてくるがいい…デクにしてやるつ。」

月ちゃんまで非難するとか…相当だなこりゃ…
それと、香様自重。

怒り心頭なのは分かるが主人公と偽物のセリフ混ぜた上にアレンジは解りにくいですよ？

紀霊「本当に何したんだよおっちゃん…」

何進「いやな…」

何進のおっちゃんの話 요약すると

・華雄が仕官出来て嬉しい反面別れが来る事が寂しい香様

・気を遣つておっちゃんが

何進「香に涙か…鬼の目にも涙だな。いやーお前が泣くなんて年食つたんだなあ」

と笑いながらからかったらしい…

今まで皆感動的な空気だったのにおっちゃん言葉一つでぶち壊し
…それ皆怒るわ…

紀霊「おっちゃん、空気嫁。」

何進「おっ俺は唯場を和ませようとしただけであって」

紀霊「その結果がこれだよ！」

そう言つて4人を見やる。

皆さん明らかにおっちゃんを睨みつけているし、香様に至っては俺が居なかつたら剣でも投げてきそうなかんじだし…普段なら俺が居ても嬉々として投げてくるだろうが、そういうおふざけをするような場面じゃないし姉者と香様にとっては特に大切な事だから…

まあ、おっちゃんなりに和ませようとする考え方は大切だけど、【時と場所と場合に相手】が悪すぎだ…気持ちは判るので一応おっちゃんの味方しておこう。

紀霊「おっちゃん、今回はおっちゃんが悪いから素直に謝っておいたほうが良いと思う。」

何進「坊主の言つとおりだな…」

紀霊「四人とも、おっちゃんだつて悪意あつて言つた訳じゃないんだからおっちゃんがきっちり謝るだろうし…許してあげてくれないかな？」

未だにおっちゃんを睨み続ける4人に対しなるべく穏やかな口調で話す。

正直今の4人に近づいたらおっちゃんが完全に攻撃されるだろうし……何より怖い。

話し終えた時におっちゃんに目配せし、謝るよう促す。

何進「香、嬢ちゃん無礼な事言つてすまなかった。董卓ちゃんに張遼も気分悪くしてしまつてすまねえ……」

4人「……………」

誤るおっちゃんに対し4人は無言で唯睨むだけ。
むう、もう一押ししておくか？

紀霊「その代わり、おっちゃんには俺のほうから色々とおハナシしておくからさ。姉者の仕官祝いの料理も作つてあるし皆で食べようぜ。おっちゃんには俺の手伝いしてもらつて連れて行くけど、姉者達は食卓で待つてくれ。それじゃ！」

俺は若干早口で捲くし立てつっおっちゃんの襟首を掴んで台所に引き摺って行く。

何進「ちょ、坊主く、首：絞ま！」

ここは料理で1クッション置いて……ついでにおっちゃんに手伝わせる事で誠意を表させる作戦で行こう！

名づけて

【命（自分の）を大事に！】

いや、8つの冷めた瞳で睨まれるとか…命の危険感じるって…
そんな恐怖から逃れる為だ、おっちゃんが何か叫んでいるけど気に
せず連れて行くでしょう。

そう思いながら早足で台所に向かう紀霊と段差や柱にぶつかりなが
ら引き摺られて行く何進を見つめる4人。
最初に口を開いたのは張遼だ

張遼「いつてもうた…慧、どないする？」

華雄「頭が居なければ完全に…とは行かないが許してなかったら
な…何よりこれ以上拗らせるより頭が作った料理が大事だ。」
凱乾「昔からあんな風に気を遣おうとして自爆していたからなあい
つ…本人も謝つたし頭の料理に免じて許してやるか…」

と溜息を吐く凱乾…

その言葉を皮切りに四人は居間へと向かい歩き始めるのだった。

〃〃台所〃〃

その頃台所の入り口に到着した紀霊は…

紀霊「おらあつ！」

何進「あわびゆ!？」

何進を壁に叩きつけていた。

何進「痛たたた…あ、え?台所?」

紀霊「起きたかおっちゃん…これで起きなきゃバニコン（AC北斗では一般的なコンボ）からの千手殺で最後にキン肉ドライバーで起こそうと思ったのに…」

何進「いやそれ死ぬから！起きるところか永眠するから！」

紀霊「おっちゃんなら大丈夫だって、もっと自分に自信持てよおっちゃん！」

（キリツという表現が似合いそうな笑顔である意味無情な事を言い放つ紀霊。

何進「そんな自信持ちたくないわ！」

まあ、そんな事で納得のいくわけが無い何進が叫んだ時

ガタタツ

と台所から微かな物音が発せられたのを紀霊の耳は聞き取った。

紀霊「誰だっ！」

瞬時に台所に踏み入り部屋を見渡すと

紀霊「げ…」

何進「どうした坊主？行き成り大声上げて台所に入るとか何かあったのか？」

言葉を失い立ちすくむ紀霊に対し、物音に気が付かなかった何進は

暢気に台所に入室。

紀霊「無い……」

何進「は？」

紀霊「俺の作った料理が無くなってるんだよぉ……！」

そこには紀霊が先ほどまで作っていたハンバーグモドキと愉快的な野菜達が綺麗さっぱり無くなっており、皿しか残っていない状態であった。

何進「うわぁ……なんだってこんなことに……ん？」

紀霊の言葉を聞き、事情を把握する何進はふと物陰から生える紅い草のような塊が目止まる。

何進「なんだこりゃ？」

観音開きの扉からはみ出た紅いモノはどうやら毛の固まりのようだ。

何進「おい坊主……」

紀霊「あああつ！今から作り直すにつて……なんだよおっちゃん？」

二人「……………」

何進に指差されたところを見れば殆ど使っていないはずの戸棚の扉に挟まれた紅色の毛……時たまピョコピョコ動いている光景。

明らかに何かいる。

そしてその何かは高確率でハンバーグモドキを食べた犯人であろう。

恐る恐る手を伸ばし扉を開ける紀霊、その扉の向こうには

??「もぐもぐ…ん？」

紅い色の髪の毛をした女の子が

??「……………」

紀・何「……………」

紀霊が作ったハンバーグモドキを手に持ち頬張っていた。

??「……………もぐもぐ」

紀・何「食べるの再開するんかいつ!!」

少女食事中、紀・何啞然中

紀霊「えーと…お嬢ちゃん？」

??「恋…」

二人「へ？」

恋?「恋の名前…呂布。」

呂布？

おいおい…なんでどうにもこうにも董卓軍縁の将と縁があるのかね？
確かに長安は西涼寄りだからわかるけどさ…いや、この際後回しで
良いから優先すべき事は…

紀霊「おっちゃん！その部屋に豚肉があるからそれで料理作れる
か？」

何進「へ？いや、そこらの奴よりは作れると思うが…」

流石は経験者！豚肉限定なら頼もしいなおっちゃん！

紀霊「なら豚肉をひき肉としてそこにある小麦の粉と一緒に混ぜ合
わせてくれ！俺はこの子を香様達に預けたら直ぐ戻ってくるよ。」

呂布「どこ、行くの？」

ハンバーグモドキを食べ終えたのか、紀霊を見上げる呂布。自分の
ことが会話になっているためか興味心身だ。

紀霊「っとそうだそうだ。呂布ちゃんて良いんだよね？」

微かではあるが頷いたのを確認し

紀霊「俺の名前は紀霊。良い子にしてたらさっきの御飯持っていく
から今から連れて行くお部屋で待っていてくれるかな？」

先ほどとは違いしっかりと頷く呂布を抱き上げて台所を出る。

紀霊「え〜と、呂布ちゃん…なんであの〜飯食べちゃったのかな？」
そもそも何でも居るんだ？

呂布「恋、お腹空いてたから…紀霊が作った料理…美味しかった。」
うん、単純かつ明快な答えを有り難う。俺の知りたい答えじゃ無かったけど嬉しいよ。っと着いたか…

左手で扉を空けて部屋に入り一言

紀霊「香様、少しこの子をお願いします。」

四人「!？」

ん？なんでそんなに驚くん？

華雄「顕…」

紀霊「どうした姉者、そんなに肩震わせて…料理ならもう少しで来るから待ってくれ。」

華雄「誰との子だ？答える！」

紀霊「その発想は飛躍しすぎだろうっ！…」

俺に見た目十歳越えてる子が居たらそれこそ有り得んだろうっ！…

凱乾「落ち着け慧。あの子は顕と私の子だ。」

紀霊「何バカ言ってるのこの人！？見え見えの嘘だよそれ！」

取り敢えず呂布ちゃんを床に下ろして姉御と月ちゃんに一言話す。

紀霊「恐らく迷い込んだんだと思う。お腹空いていたのか料理殆ど食べちゃってたから今は作り直し中でね、それまで預かって欲しい。」

香様と姉者には話は通じない。てか一騎打ち始めてるし…

紀霊「ほんでは…サラダバツ」

姉者達に見つからないように隠れて避難、目指すはおっちゃんがいる台所だ。

紀霊「悪いおっちゃん、待たせたね。」

台所で奮闘してくれたおっちゃんに声をかける。

何進「おう坊主、残った豚肉で作ったがこれで大丈夫か？」

おっちゃんが作ったハンバーグモドキを見て一安心

紀霊「おっちゃん…上出来だよ。」

俺が作ったハンバーグモドキと殆ど同じ物がそこにはあった。ご飯も炊いてあるから後は野菜を添えるだけだ。

紀霊「野菜盛りつけるから少し休んでよ。」

おっちゃんはその言葉を聞いて近くにあった椅子に腰掛ける。

姉者達も居ないしあれ話しておくか…

紀霊「なあおっちゃん…頼みがあるんだが…」

何進「なんだ坊主？無茶な願いじゃなきやあなんとかすんぜ？」

姉者の道は決まった。

外史とはいえ大元は同じ、このまま行けば反董卓連合がいずれ結成されるだろうしそうなたら姉者は…

俺は…姉者を助けたい。

だから、遠回りだけど

紀霊「後数年したら…仕官させてくれないかな？」

俺は姉者と違う道を行くよ。

姉者の行く道、俺の行く道（後編）（後書き）

新キャラ登場と紀霊の進路が確定しました。

さて、ここで少しアンケートを取らせて頂きます。

紀霊の武器と言えば【三尖刀】ですよ？

恋姫の世界では各武将の武器に名前が付いているので

例

華雄：金剛大斧

紀霊の武器名を募集したいと思います。

【三尖刀】の【三尖】は必ず付けておきたいと思しますので、
【三尖】を付けた名前を募集します。

御意見、ご感想と共に武器名お待ちしております。

姉者の起こし方（前書き）

友人「そっいやR15ダグ付く内容だっけ？」

柳「付くような内容書いてないからねー」

友人「書いてみ？俺にだけ見せてくれればいいから。」

数日後

柳「書いたから作品見ろ。」

友人「そんな事より麻雀やろうぜw」

柳「お前…タンヤオでハコるわ…」

ハコる：プレイヤーの持つポイントを0にすること。又はされる事。通称ハコテン

そんな作者と友人の日常

近作はR15…付くのかな？

紀霊の武器名募集中

詳しくは第22話姉者の行く位置、俺の行く道（後編）の後書きを
ご参照下さい。

姉者の起こし方

紀霊「後数年したら…仕官させてくれないかな？」

紀霊の口から放たれた言葉に何進は自分の耳を疑った。

何進「ぼ、坊主…お前…今なんて…言った？」

紀霊「取り敢えず落ち着けおっちゃん。俺はおっちゃんに仕官させてくれって言ったんだよ。」

先日何進は分かった上で凱乾に復職を求め、断られた。

もし断られたとしても事態は悪くならず、上手く行けば助言位は貰えるかとは考えていたし実を言えば華雄や紀霊を見て配下になりたいと思ったりしていた。

しかし、自分のような奴にわざわざ仕官する訳が無いと早々に見切りを付けて華雄が仕官に成功した際には純粹に喜んだ。

ところがだ、華雄の弟分である紀霊。

彼が仕官を申し込んで来た。

董卓と何進を君主として比べたら十中八九…いや、満場一致で董卓が優秀だと皆言うだろう。

良いの俺こんな幸せで？

俺死ぬの？

明日辺りぽっくり逝っちゃうの？

紀霊「…おっちゃん？」

何進「(。(。)」

…ダメだこりゃ…放心してら…

紀霊「…取り敢えず刹活孔でも打ち込んでみるか…」

暫く音声のみでお楽しみ下さい。

ジヨインジヨインジヨインキレイ

デデデデザタイムオブレットビューションバトールワンデッサイダステニー

ナギツペシペシナギツペシペシハアーンナギツハアーンテンシヨール
ヒヤクレツナギツカクゴオナギツナギツフウハアナギツゲキ
リュウニゲキリュウニミヲマカセドウカナギツカクゴールハアール
シヨウヒヤクレツケンナギツハアアアアキーンホクトウジヨウダ
ンジンケンK・O・カシンハナゲステルモノ

バトールワンデッサイダステニー

セツカツコーハアアアアキーン テーレツテーホクトウジヨール
ガンケンハアーン

FATAL K・O・セメテイタミヲシラズニヤスラカニシヌガヨ
イウイーンキレイ (パーフェクト)

何進「うわらばっ!」

紀霊「さて、起きるまでに準備しとくか。」

痙攣しているおっちゃんを尻目に俺は作業を再開する。

~~~~~

何進「んあ…」

紀霊「正気に戻れたかおっちゃん？」

数分後、ご飯をお櫃に移し替えながら目覚めた何進に声をかける紀  
霊。

見れば盛り付けは殆ど終わり、後は運ぶだけの状態である。

何進「坊主…、体のあちこちから悲鳴が聞こえるんだか…」

紀霊「あれだけぶち込んでおいたのに体痛い程度って…流石はおっ  
ちゃん…次はバスケしてみるか…」

何進「ねえ！俺一応大將軍だぞ！？偉いんだぞ！？仕官する人に暴  
力振るうってどうなんよ！」

紀霊「おっちゃん故に致し方無し！（キリッ）」

何進「凄い爽やかな笑顔で言われたよ！…俺に何か恨みでもあるの  
か坊主…」

紀霊「先程姉者達の感動した雰囲気ぶち壊しておいて心当たりが無  
いだけでも？姉者達程では無いが俺も怒ってるんだよね〜」

何進「……………スイマセンでした…いや本当…スイマセン…」



ついさつき自分が仕出かした失敗を話題に出され平謝りするしか無い何進。

それに対する紀霊は溜め息混じりに何進の方に振り向く。

紀霊「おっちゃんは変なところで危機感無いところが最大の欠点だな…さっきの話の続きなんだけど、仕えるに当たって何個か条件があるんだ。」

何進「欠点言うな…てか仕官する側から話持ち掛けておいて条件とか…何よ？」

紀霊「悪いね、俺は以外と我が儘なんだよね。んで、条件だけ…洛陽では香様の弟子つてのを伏せる事。それと姉者達には内緒にしておいた方が良いと思う。」

一つ目、これは師である凱乾や姉者達に対する自分なりの配慮。

醜い権力争いが嫌で静かに暮らす香様なのに弟子が洛陽に…しかも何進配下として…となれば下手すれば香様や姉者、仕舞いにや月ちゃんにまで被害が及ぶ可能性がある。香様の弟子だと名乗ればそれはそれでやりやすいだろうが、危険を避けるためにも隠しておいた方が無難だからだ。

二つ目はおっちゃんと俺の危機回避のため。

せつかくおっちゃんの仕出かした爆弾解除に成功したのに…そこに新たな火種（俺の仕官）投下となれば…天地を砕く姉者の剛拳を受ける羽目になるだろうな…

何進「それが条件か？随分簡単な事何だが…」

紀霊「俺がおっちゃんに仕官したって姉者や香様に言った時の事想像してみてくださいよ。」

その言葉を聞いて想像したのだろうか、顔を青くして肩を震わせ始める何進。

何進「…絶対言いません…互いの為に…」

紀霊「解れば宜しい。互いの為に…」

互いに手を取りしつかりと握る。

紀霊「今すぐって訳には行かないから後二年位したらおっちゃんの下に行くよ。その時は宜しく。」

何進「此方こそ宜しく。じゃあ香達に飯持っていくか。」

おっちゃんという言葉が合図となり料理を運び始める二人。

すたこらさつさと運ぶ事数分、姉者達の待つ部屋まで到着する。

紀霊「姉者ー俺だー扉開けてくれー」

華雄「……………」

反応が無い。皆の気配は確認出来るし姉者に至っては扉の前に居るみたいなんだが…

紀霊「姉者ー俺だー結」

華雄「その言葉に嘘偽りは無いな！」

…凄い勢いで扉が開きました…と続きます。

紀霊「構重いから開けて欲しい。と言おうとしたが…言い切る前に開けてくれた姉者は優しいな〜有り難う姉者。」

そう言うとそそくさと料理を運び込む。

姉者は硬直しているが料理優先、そのまま待っていたら俺の命と料理が危ない。

おっちゃんと俺で持ってきた料理、反応は人それぞれだが呂布ちゃんだけ異様に目をキラキラさせて涎垂らしている。

呂布「紀霊…食べて良い？」

紀霊「待て待て呂布ちゃん、頂きますは皆席に着いてからね。後、涎垂れてるぞ…」

そう言いながら涎を拭き取って頭を撫でる。

呂布「…ん／＼／」

嫌がってはいないようで一安心。天下の飛將軍（予定）から嫌われるとか嫌すぎるからねえ…

紀霊「姉者を起こしてくるからそれまで良い子で待っていてくれるかな？」

呂布ちゃんがコクリと頷き肯定を表したのでまた頭を撫でる。

数回撫でたところで反転、姉者に近づく。

紀霊「姉者…固まってるし…しゃあない…」

反応がない華雄に対し紀霊は華雄の耳元に顔を近づける。

紀霊「姉者、朝だよ起きて。ふう〜」

と言いながら華雄の耳に優しく息を吹きかける。

華雄「あっ／＼／＼」

紀霊「よし、起きた。」

華雄「う、顕…耳は弱いん…だって…知って、る…クセに…卑怯だぞ…／＼／＼」

紀霊「姉者はこうしないと起きないだろ…。さあ、飯食おうって皆さんどうしたの？」

紀霊の視線の先には

董卓（。。。）

張遼（。。。）

何進（。。。）

とした三人の表情と

呂布「？」

状況を把握していない呂布

凱乾「2828」

している凱乾

の五人が居た。

張遼「あ……………」

紀霊「あ？」

張遼「阿呆かーっ!!」

流石は張遼、我にかえった瞬間に華雄と紀霊に対しツッコミを入れる。

張遼「なんやねん！戸惑う事無く慧の耳元で甘い声に甘い吐息？姉弟やる？姉弟なんやろ！おかしいと思わんのかい！」

華雄「何を言ってるんだ霞？何時もの事だ何処から見ても普通だろうに。まあ、紀霊に起こされるのは…癖になるがな／／」

紀霊「そうそう、姉者と寝ると先に起きるの俺でさ、毎回この方法で姉者を起こすんだよ。」

紀霊の発言を聞き絶句する何進、顔を赤くして俯きながら「私も…」と呟く董卓。

姉御こと張遼はと言えば

肩を震わせながら

張遼「間違つとる…絶対間違つとる…」  
と嘆き呟いていた。

三者三様の反応を見せる中、凱乾が口を開く。

凱乾「そう言えば慧、顕とは【寝た】のか？」

「またもや爆弾投下である。しかも核爆弾並みの威力を持っていると推測されるだろう。」

華雄「？ 香様は私と顕が寝ていることを知っているのでは？」

董卓・張遼「!?!」

驚きを見せる二人を尻目に溜め息を吐く凱乾。

凱乾「そう言う意味じゃなくてな…耳貸して。」

と手招きして華雄に対し紀霊達には聞こえないようになにやら耳打ちをしている。

凱乾「がこう夫の言で子作」

華雄「な!?!?!?!?!」

凱乾「更に 服 着たま とか外 に で 」

華雄「あびよれ！？／／／／／／／」

その様子を見ながらも配膳したり董卓や張遼に水を配ったりしていた紀霊が何進に一言

紀霊「なあ、おっちゃんよ…」

何進「なんだ坊主…」

紀霊「俺…嫌な予感しかしないんだけど…逃げていい？」

董卓「駄目ですよ、それより早く食べましょうよ。」

張遼「あかんやろ。てか紀い、今度ウチにも添い寝してくれへんか  
く？」

呂布「紀霊…沢山食べてもいい？」

何進「すまねえ…俺は何も言えねえ…」

紀霊「……………まあ、香様と姉者の分は残しておいて、先に食べますか。姉御、俺が無事明日の朝日拝めたら添い寝付き合います。後呂布ちゃん、俺の分上げるから食べて良いよ。」

話し込む凱乾と華雄を放置し、紀霊達は食べ始める。

董卓や張遼にハンバーグモドキはそこそこ好評だったようだが…

呂布「これ…紀霊が作ったの？」

紀霊「いや、俺が作ったのは呂布ちゃんが最初に台所で食べた奴だよ。これはおっちゃんの作った奴だね。」

そう言いながら呂布の口を拭う紀霊と心地よさそうに拭かれる呂布

呂布「紀霊の作った奴の方が美味しかった。後、恋って呼んで、恋の真名だから。」

紀霊「ほいほい、んじゃ俺は顕って呼んでくれや。」

ほのぼのとした空気を醸し出す二人を見て微笑む董卓と横で若干落ち込んでいる何進

何進「はははは…まあ、坊主には勝てないって解ってたけどさ…」

張遼「まあ…頑張りい…」

その後、料理が足りなくなり紀霊が追加で作ったハンバーグモドキを食べて

皆「さっきの料理より美味しい。」

と追撃される何進が居たとか…





## 姉者の起こし方（後書き）

後数話で姉者も…

姉者が去ってからも暫くは長安に留まる事になります。

そして

とある兵士の報告書？

をその内上げます。

紀霊の武器名は現在候補として3つ出ています。

武器名を見て思う。

皆さん姉者好きすぎw

作者も好きですw

そして姉者の愛されっぷりが嬉しい。

紀霊君主人公なのに姉者の人気にNDK？

とある兵士の報告書？（前書き）

柳「重大な事に気が付いた。」

友人「何よ？」

柳「この作品、プロット通り行けば50話どころか100話越すぞ……」

友人「…精々頑張って苦しめ、俺は俺妹の作品執筆とPSPで忙しいんだ。」

柳「俺だってアイマスとドリームクラブやりたいわ！充電器貸せ！」

そんな作者の日常

お待たせしました、とある兵士の報告書？です。

## とある兵士の報告書？

これは長安所屬のとある守備隊兵士の業務報告から文章を抜粋したものである。

x年春

冬に行われた雪合戦の成果により兵Aが昇任、私の1階級下となりました。

兵Aに今後の抱負を聞いたところ

兵A「部下にも南斗人間砲台を習得させる。」

とか言っていたので本人を投石器で城外に射出しておいた。

30分後に何食わぬ顔で帰ってきて私に一言

兵A「警邏異常なしです。」

とのこと。

隊長からの返答

兵Aを飛ばす際は、人や建物に当たると危険です。周囲に注意して人の居ないところに放ちましょう。

x年春

警邏中、茶屋でのんびりしている凱乾様と華雄ちゃんを発見。自分

の隊に兵Aが居ない事を確認してから話しかける。

凱乾様と少し世間話をしている間にふと発見。

華雄ちゃん：お茶が熱かったのか舌を出して涙目である！  
見れば私と共に来た兵士数人が鼻を押さえて俯いている…

危険を感じ、すばやく撤退。

あれは…兵器です。

隊長からの返答

今度から警邏に俺も行く。

それまでに華雄ちゃん達の予定を確認しておくように。

×年夏

隊長から命令されていた凱乾様と華雄ちゃんの予定ですが、調査していた何人かが襲撃されました。

目的は調査資料のようで恐らく長安守備隊内の他部隊のようです。

このままでは調査に支障が出ますので至急対策をお願いします。

隊長からの返答

この報告を受けて各隊長と太守を緊急招集した会議が開かれた。

犯人は捕まり太守と隊長達直々の拷も：御仕置きを受けているだろう。

案件は隊長達の迅速な動きで解決されたが、その後半日に及ぶ【どの隊が調査するか】を決める会議が開催された。

そろそろ第四回の開催なのでここで返答を終了する。

×年夏

そろそろ兵Aにも報告書を書かせようと思い書かせてみたところ。

文頭に【読んで見る。】

と書いて残りの文書を楔形文字くさびがたもじで書き始める。

取り敢えず、近くにあった銅製の硯（硯）で頭部を強打しところ硯が砕けた。

兵A「微妙に痛いんですから止めてください。」

…隊長、兵Aを殴っても平気な硯をください。

隊長からの返答

…それは私の硯だ…

それと兵Aを殴っても平気な硯は存在しないと思う。

後、兵Aに伝言を頼む。

来月の俸給から硯代は天引きしておく。とな。それと投石器で飛ばしとけ。

×年秋

我が隊最大の謎

【兵Aの耐久力】

について検証を実施したところ

打撃：投石器による射出

投石による大岩直撃両手両足を拘束しての長安城壁から強制サラダバー

結果

着地点が凹む

大岩が割れる

生きてる

以上の結果、兵Aは無傷

色々試した結果

剣による斬撃と槍での刺突攻撃で兵Aは負傷

攻撃は通るようだが治癒力が高いようで一時間程経つと傷口が塞がっていた。

本人曰わく「無茶苦茶痛い。」

最後に、凱乾様による関節技四十八手の御披露目となり凱乾様が動く度に兵Aの絶叫が長安に木霊した。

兵A曰わく「死ぬかと思った。」

兵Aはその後警邏の為に投石器で出発

本日も異常無し。

隊長からの返答

痛みを感じるとは…兵Aも人の子だった訳か…

最近大守様より

「今日は兵A飛ばないの？」  
と聞かれた。

理由を聞くと、長安の住民や大守様は兵Aは警邏に行く度に飛んでいる思っているらしいので今度から毎回射出するように。

×年秋

警邏中に空を飛ぶ物体を発見。

また兵Aかと思ったが、着陸の際痛がっていたため別人と判明  
急ぎ救助に向かうと最近新しく入った新兵でした。

何事かと事情を聞こうとしたところ、兵Aが長安城内から射出され  
目の前に着陸。着陸の際両手を真横に広げる謎の姿勢であった。  
聞けば新兵は兵Aの部下らしく、射出及び着陸の訓練との事。  
新兵をよく見たら痛がってはいるものの外傷は見られなかった。  
取り敢えず兵Aを地中に埋めて警邏に戻った。

本日も平和、異常無し。

隊長からの返答

…兵Aに部下持たせれば少しは人間に戻るかと思っただが…私の選択  
が間違いだっただよう。

新兵も兵A側に近くないか？



追伸

兵Aを呼んだら地中から出てきたのはそう言う訳か…

x年冬

雪がちらほらと降る長安、警邏中ふと空を見上げたら兵Aと新兵（今後兵Bと記す。）が同時に飛んでいった。

近くの住民から

「たーまやー」

「かーぎやー」

と掛け声が聞こえた。

何かが間違っている気がする。

その後、兵Aと兵Bから警邏異常無しと報告を受ける。

兵Bが以前より生き生きとしているように見えたのは私だけだろうか？

隊長からの返答

兵Aと兵Bが飛ぶ長安の空…  
なあ…常識ってなんだっけ？

兵士からの返答

隊長、私に聞かないで下さい。

x年冬

今年も始まった雪合戦大会

今回、華雄ちゃん凱乾様に加えて噂を聞きつけたのか何進大將軍が遙々觀戦に来ている模様。

暇なんだなーと思いつつも昨年と同じく優勝目指して気合いを入れる我が隊。

新規参加の大守様率いる部隊を加えての白熱した大会となった。

今回は兵Aが指揮する投石器（雪玉仕様）隊が後方から隊長率いる前線部隊を援護する重爆撃作戦を敢行。稀に兵Aと兵Bが敵陣に飛んでいったが上々の戦果を上げる。

結果

我が隊は二連覇を達成し凱乾様華雄ちゃん師弟との特別試合を行うことに。

去年の復讐に燃えるのか兵Aが凱乾様に一騎打ちを申し込む。凱乾様は快諾し私達は華雄ちゃんと対峙することに…

試合開始の際、兵Aが

兵A「この試合の間：私は人間辞めるぞおー！！」

兵B「先輩っ！？何をするだぁーっ！！」

それ以外の全員「いや、お前人間じゃ無いから。」

会場からの総突っ込みを気にすることなく凱乾様に挑む兵Aしかし南斗聖拳では凱乾様を倒すことは出来ず敗北。

私達の方も華雄ちゃんに雪玉を当てるわけにはいかず敗北。笑顔の華雄ちゃんが可愛くて一部白雪が赤く染まっていた。

隊長からの返答

兵Aはその後罰として展示物の雪山に完成させる部品である頂上用の氷を運ばされていたな…

今回の雪合戦は会場全員の心が一つになった良い大会だった。

少し貧血気味なので私はそろそろ休む。

とある兵士の報告書？（後書き）

報告書もまだ書くつもりです。

バトン周ってききました

出来次第上げますのでご覧下さい。

引き続き武器名の募集と御意見、ご感想をお待ちしております。

さてさて…（前書き）

友人「なあ…」

柳「ん？」

友人「お前、華雄と恋ちゃんの2828が書きたいって言ったよな？」

柳「ああ、言った。」

友人「それでコレ？」

柳「俺も迷った、だから読者さん達に判断を委ねたい。けど、俺は書きたかった（キリッ）」

投稿遅くなりました…

しかも今回は…自分で読者さんの反応が怖いw

わてわて…

姉者と俺が【朝まで鬼ごっこ】を繰り広げてから2日、俺は姉者の荷物整理や恋ちゃん料理作りで忙しなく動き回っていた。

おっちゃんは仕事があるため昨日長安から出発、前日にしこたま飲まされたのか青い顔で洛陽を目指すおっちゃんの姿に月ちゃんと俺だけが心配しつつの見送りとなった。そして、姉者が出立する前日の朝…

紀霊「……………」

華雄「…うむ…顕う…」

呂布「すうすう…」

紀霊「……………またかよ…」

今日は姉者の送別会と恋ちゃんの歓迎会をやるから宴会用の料理作るために少し早めに起きてみた。

そうしたら、左側で俺の首に手をまわす姉者が抱きついている。右側は右側で恋ちゃんが抱っこちゃん人形の如く脇腹に張り付いている。

…この二人、昨日も居たよな？一応侵入者用に罫仕掛けておいたはずだけど……………おk把握した。

俺は確か部屋の入り口に罫を仕掛けておいたはず。罫の状況を確認してみても作動していないし、よく見れば壁に人が通れるくらいの

大ききの穴が開いている。

…どう考えても姉者が壁を打ち破って侵入してきたんだな…後で修理するの俺なんだが…

紀霊「取り合えず起きてくれ二人ともー。」

華雄「ぬうゝまだ…寝る…」

呂布「恋も…」

紀霊「…恋ちゃんはまだ年下だから許すとして、姉者…姉として起きるべきではないのかな？ああ、俺は壁壊された事については別に何も言わないよ。ただ少しばかり【姉者の起こし方】を変えることにしたよ。」

俺は早口でそう捲くし立てると顔を姉者の方に向けて目標を定める。狙うは姉者の耳、姉者は防御も出来ずに隙だらけ。頭を動かさし一気に目標との距離を詰める！相手との距離は互いの吐く息が感じられるほど近い。

紀霊「（この間合いなら！）」

俺は目標の耳に

姉者の耳に

渾身の一撃を叩き込む！

かぷっ

華雄「ひうううううつ!? xjbくわ !!!!!// // // //  
// //」

姉者の耳を痛みを感じない程度に弱く噛む。だがここで更に追撃を叩き込む!

紀霊「はねひゃ、ほひろ〜ほひなひゃほのままはむそぉ〜(姉者、起きろ〜起きなきゃこのまま噛むぞ〜)」

噛んだまま耳元で囁く。姉者が暴れ出したら危ないが、姉者を起こした時の反応を考えれば…

華雄「あうつ 顕う…んっ// // //」

硬まったままプルプル震える姉者

紀霊「はらにふいへひ〜(更に追撃〜)」

噛んだまま喋りながら姉者に抱かれている左手で太ももを優しくなぞる。

姉者の太ももをなぞる場合、指先のみで触れるか触れないかと言うくらいに優しく触るのが重要でコレを姉者にする…

華雄「ひうううううっ// //」

俺の腕を抱きしめていた力が緩む。恐らく姉者の力が抜けたのだから。自分の腕を動かし自由になった事を確認する。

紀霊「さあ姉者、これに懲りたら起きるんだ…って姉者?」



華雄を見ると顔を紅く染め、息を荒くしながら放心している。

紀霊「……やり過ぎたかな？」

そう思いながらも幸せそうな表情で寝ている姉者を見ていたら起こすのは可愛そうだと考え始めたので布団を掛けなおしてやる。

脇腹に恋ちゃんがくっ付いたままだが止む終えまい、このまま台所に行くとしよう。

紀霊「とは言ったものの、流石にこの状態じゃ動きづらいわな……」

台所に向かいつつ、恋ちゃんを起こすために呼びかける。

紀霊「恋ちゃん起きろ〜」

呂布「……や……恋起きてない。」

……いや君完全に起きてるよね？

つても無理矢理剥がせば………うん無理。

だって可愛いし力強いし体重軽いし、さっきより力入れて抱きついてきているんだよね……。けど、このまま料理作れないしな……。よし

紀霊「寝てるならしょうがない。けど恋ちゃんが腕に抱き付いていたら恋ちゃんの朝ご飯作れないな〜どうすれば良いかな〜？」

呂布「!?!?………」

俺の言葉を受けた恋ちゃんはそのままよじ登り脇腹を足で固定、首に腕をまわしておんぶの状態となる。

…そうきましたか…両手空いたから確かに料理作れるけどさ、見た目【おかん】だよなこれ…

紀霊「14歳で母となる。」

紀霊「…色々言いたいけど朝ご飯作るっ…」

~~~~~おかん朝食準備中~~~~~

紀霊「よし、こんなもんだろ。」

白菜のおひたしにニラ玉子、ついでに汁物。そして大量の白米。これだけあれば大丈夫だろう。後は…

紀霊「恋ちゃん、いい加減寝た振り止めないか？」

その言葉を放った瞬間、恋ちゃんの体がビクリと動く。

呂布「……………」

紀霊「……………あ、あんなところに肉まんが沢山ある!」

呂布「どいっ?」

そう言っってキョロキョロと辺りを見回す恋ちゃん。

紀霊「よし、起きたね。」

呂布「…あ…」

俺の嘘に騙されたと気が付いたようで、呟く恋ちゃんは

紀霊「くぎゅうううううう！？」

俺の首に抱きついていて細い腕で力一杯締めてくる。

呂布「紀霊、嘘ついた…恋も慧みたいに起こして欲しかったのに…
嘘ついた…」

苦しい！苦しいって！

呂布「恋に嘘つく頭なんて嫌い。」

ヤバイ！これは久々に…意識…が…

~~~~~

????「おや？久しぶりな顔が来たねえ。」

ここは…ああ、確かに久しぶりだな…

紀霊「お久しぶりです小町の姉さん。」

ここは

小町「頭の字がここに来るって事は、またお前さんの姉にやられたのかい？」

死者が最初に集う河原

紀霊「いや、今回は新しく入った妹弟子ですよ。ちよいとからかいましたら物凄い力で絞め落とされましたね、いや絞め落とされるのも久々で懐かしい気がしますよまったく。それと姉さんが起きているとか：明日は地震か天変地異か：」

笑いながら切り株に腰掛け、今回の送られ方を小町姉さんに話す。

小町さんは数年前に香様に弟子入りして以来、何度と無く遊びに来させてもらっている賽の河原の死神で、魂を運ぶ渡し守を行っているらしい。しかし正直言うと何十回も遊びに来ているが、この人が起きている事なんて5回に1回程しか見たことが無い。見たとしても体外はサボって酒盛りか上司の人に説教されているかのどちらか。

だが、今日見た感じはきつちり仕事をしているように見えて正直言うと違和感しかないのは俺だけだろうか。

小町「あのなあ、あたいが何時もサボってるように見えるかい？」

紀霊「見えます。以前俺を自分の家に連れて行った拳句に酒のつまみ作らせて、閻魔様に散々説教されていたじゃないですか。それ終わるまでに姉さんの散らかしたゴミ掃除とか脱ぎっぱなしの服洗濯したり姉さんと閻魔様の夕飯準備したりしていて割と大変だったんですよ？」

まあ、その後に閻魔様から「貴方はデリカシーがなさ過ぎるのと女性に良いように流されすぎる。」って説教喰らったけどさ…

小町「あー…そんな事もあったねえ…まあ今は非常事態でね、ちょいとお前さんに構ってる暇はないんでね今日は帰っておきな。」

小町さんは担いだ鎌を揺らしながら左手をヒラヒラ振って帰るようにジェスチャーする。その瞬間後から引っ張られるような感じを受けて理解。

紀霊「ありゃ、時間みたいですね。今日のところはお暇しますけど次ぎ来た時は何あったか教えてくださいよ。」

そう言つて小町さんに手を振り引っ張られる感覚に身を委ね、目を閉じる。

そしてふと思う。

紀霊「賽の河原の描写意味なくね？」

柳「どうせ死にかけるなら描写した方が良いじゃん。」

紀霊「いや、まあ、うん…一応前々から出てたからね…姉さん…」

無駄に出て来てベタな発言をする作者に呆れつつ、徐々に光が強くなり意識が遠のく。幾度と無く体験した黄泉返りだ。

そして段々と体の感覚が戻り始めて…両耳に生温かくヌメツとした感触が………脳みそでも垂れてんのか？

??「はむっ ほきろっふふ。(起きろ顕)」

この声…姉者だな、しかし声が近すぎる気が…

??「うふふ、ほひへ…れるっ ( 顛、起きて… )」

右側から恋ちゃんの声…?

こっちもやたら近い… ……って!?

目を開けて第一声

紀霊「いや待て!なんぞ!?!」

俺の右耳を姉者が

俺の左耳を恋ちゃんが

【甘噛みしている】

え?何なんなのこの状況?

紀霊「ちょ!待て二人とも!殿中で御座る!殿中で御座る!」

【きれいはこんらんしている!】

取り急ぎ跳ね起きて二人と距離を取る。

二人に対峙するよう向き合い場合によっては直ぐ逃げられるような体勢を取る。

紀霊「なんの真似だ姉者と恋ちゃん!?!」

華雄「何って… 顛の真似じゃないかノノノ」

呂布「……」

顔を赤らめながら当たり前のように喋る姉者と、同じく頬を染めながらコクコクと頷く恋ちゃん。

紀霊「真似つて二人とも……」

華雄「いやな、今日の顛は……は、激しかったぞ／＼／＼ あんな風に噛まれたら癖になってしまっただけではないか馬鹿者　／＼／＼」

いつもの姉者じゃない!?

呂布「恋も……顛に慧と同じ起こされ方したかった……けど顛起こしてくれないから……その後肉まんの嘘つかれて……顛気絶した……だから恋が起こそうとしたら……慧もするって……」

……こうなったのって……俺の肉まん（うそ）が原因？

華雄「さあ、顛。さっきの続きとそれ以上の事を……／＼／＼　とにかく私の部屋に来い！」

呂布「恋も……一緒。」

恐らく先ほどの事以上を期待し、じりじりと近寄ってくる華雄。彼女は何か手を出し指を奇妙に動かしている。呂布は呂布で紀霊と華雄が今から二度寝すると勘違いして一緒に……と言っている。きつと……

紀霊は……





さてさて…（後書き）

【姉者の起こし方】を見てやりたくなってしまった。…これはセーフなのだろうか？

御意見、ご感想お待ちしております。 武器名の募集をしたところ、色々な武器名を頂きました。その内、その武器名のどれかを投票してもらおう形で決めたいと思いますので、その時はよろしくお願います。

激流に身を任せ…（前書き）

友人「麻雀やるうぜ！」

柳「夜中に部屋来たと思ったら何寝言言ってるんだ馬鹿野郎…俺は朝から仕事だったの…」

友人「ならラーメン食いに行こうぜ。」

柳「お前もう帰れ！」

つい先日夜中に起きた作者の日常

…眠い。

最新作です。

後、数話だけちょいエロ的だったり2828系な表現が続いたりすると思われます。

文章構成が最近酷い…気分転換に温泉でも行ってみようか…

後書きにアンケート有り。

激流に身を任せ…

とある一室、廊下から大きな音が聞こえてきたと思っただら、勢い良く扉が開き華雄が入って来る。

華雄「霞、頭を見なかったか!？」

どうやらここは張遼にあてがわれた部屋のように、中では張遼が武器の手入れの真つ最中だった。

張遼「慧かいな、一体どないしたん？」

いきなり入ってきた華雄に驚きながらも理由を尋ねる張遼。

華雄「実はな、頭を捕まえれば添い寝に起こしあい、願わくばそれ以上…／＼／＼という事なんだ。」

そういう華雄だが、そもその前提として紀霊本人が了承していない事は言うまでも無い。

張遼「なんや、そういうことかいな。ええなあ、慧はもう未来の旦那が確定してるようなもんやしなあ…」

張遼はそう言いながら武器を仕舞って布団に寝転ぶ。

華雄「旦那か…ああ、必ずや頭を私の婿にしてみせる／＼」

多少鼻息を荒げながら興奮した様子で正々堂々と言い放つ華雄、その姿が妙に清々しいと思えるのは気のせいだろうか？

張遼「慧が嫁に行くんと違うんかい！まあ…気持ち解らんでも無  
いけど…そや慧、ウチも顕欲しいんやけど…側室でええから顕分け  
てくれへん？」

ニヤニヤとからかうような顔をしながら華雄に喋る張遼。恐らく華  
雄の反応を楽しむために行った言葉だろう。

だが

華雄「ふむ、顕が良いなら問題無いぞ。」

張遼「そか〜ならウチも顕を婿にするかな〜……………つて何や  
つて!？」

華雄から返ってきた答えが予想の正反対な事に驚く張遼。

華雄「少し前までの私なら断固拒否しただろうが、香様に正妻とし  
ての余裕と度量について教わったからな。顕が側室を何人持とうと  
私が顕の一番で有れば問題無い。そう悟ったんだ。だから霞、お前  
が顕の側室になることには反対しないさ。」

今までで確かに張遼の言葉に顔を紅く染め、慌てふためいていたで  
あろう。しかし華雄の顔を見れば自信や余裕といった様子が窺える。

華雄「それでは顕を探さねばならないから私は失礼する。顕を見つ  
けたら私に一報頼んだぞ。うーっーっー！どこだーいい加減  
観念してお姉ちゃんと寝るんだー！」

呂布「慧…顕居た？こっちは居なかった…」



張遼「目え…覚まさんかい!!」

パァーンッ!!

紀霊「へぶらあっ!?!」

乾いた音と醜い断末魔が部屋に響く。

紀霊「痛つつ…あれ…姉御?ここは誰?俺はどこ?」

パァーンッ!?!

紀霊「もるすあっ!?!」

今度は下段から打ち上げるような一撃が紀霊の顎にクリーンヒット

紀霊「割と痛え?!って姉御?武器変えたの?凄いい合ってるよ。」

張遼「こないな武器で戦う武将がどこにおんねん!!」

パァーンッ!!

紀霊「あぶらかたぶらあっ!?!」

再度袈裟切りで紀霊の脳天に衝撃を与える張遼。

張遼「正気に戻れたかいな?」

そう聞く張遼に頭と顎を抑える紀霊が口を開く。

紀霊「いや…正気も何も…てか姉御、何その姉御の為にあるような道具？」

そう、紀霊からしてみれば張遼が持っているハリセン。何故張遼が持っているのか？

そして何故そこまで似合うのか？

更に言えばどうやって胸の谷間に収納していたのか？

紀霊が疑問に思つのもしょうがないとしか言いようがない。

張遼「これか？これ拾い物なんよ。ウチ持つと妙にしっくりきてなんか頭の頭ど突くんに使わなあかん！って思つて使つてみたっちゆう訳や。」

紀霊「……さいですか…って…これからどう…しよう？」

今、紀霊の頭を支配しているのは先程の会話と姉者の色々な表情。

張遼「ええ加減諦めて慧に婿入りすれば良いんちゃう？」

紀霊「そうですよねえ…何で婿入りかは知りませんが…」

そうは言うが、嫁にしる婿にしる二人の関係は今までと余り変わらない気がする。と口には出さないが張遼は思っている。変わったとしても華雄が今まで以上に紀霊とベタベタしたがるだろう。

張遼「もうアレや、慧があんなつたのも頭の責任つて事で…男ならスパッと婿入りせい！」

紀霊「……………わかりました、姉者の事探してきました。」

紀霊自身が迷う理由、今姉者と夫婦になると言うことは己の考えた何進に仕えてからの計画の障害になる可能性もある。

紀霊本人も姉者と夫婦になりたいと思っっている、しかしその部分と華雄に迫られると紀霊は逃げる事を繰り返したためか、訳の分からない張らなくても良い意地というものが紀霊の中にずっと前から芽生えていた。

精神年齢三十代（笑）のくせして十代半ば位の男の子いや、下手すれば小学生がやるような事を紀霊はやっていた訳だ。  
そこに痺れもしないし憧れも無い、あるのは呆れのみである。

張遼「あーちよい待ちいな。」

紀霊「姉御？」

起き上がるうとした紀霊の背中にに手回し布団に押し倒し、張遼自身も紀霊の横にそのまま寝転がる形をとる。

張遼「いやあな、三日くらい前に約束したやんか、頭がウチと添い寝して更には起こしてくれるーで。」

【姉者の起こし方】を参照下さい。

紀霊「あゝ…そんなのもありましたねえ…んで今…ですか…」

張遼「そうや、…まあ今回はこれで勘弁したるさかい。ほら、頭にとって慧が正室ならウチは未来の側室やし。一つ予行練習ちゅう事で昼寝位ええやろ？」



耳元でそう呟きながら紀霊の体に華雄を上回る二つの膨らみをゆっくりと押し付ける張遼。

紀霊「姉御、近いつて…つか姉御も本気？」

張遼「いや、何となく勘でな、慧なら頭も必然的なものやろうけど、早めに唾付けとかんと後からだ動いたんじゃウチやとどうにもならん気がしたんよ。」

紀霊は背中に回された両手に籠もる力が強くなるのを感じた。姉者もそうだけど、姉御も結構、直球勝負なんだな…こんなとこまで来て、逃げますだなんてやれるわけないし、俺もきっちり答えるべきなんだろうな。

紀霊「…俺には女心なんて解らんけど…姉者も姉御も大切には変わらないよ。餓鬼だけど姉御が良ければ…これからもよろしくお願いします。」

俺は姉御をしっかりと見つめて言い放つ。

最初こそ激流に身を任せ同化…するしか無いか…位にしか考えて居なかった。

このまま流されても良いかな…とか考えていた。けど、月ちゃんと姉御、そして姉者、恋ちゃん、まだ見ぬ董卓の皆が今後どんな目に遭うかを知っている俺は改めて思ってしまう。

月ちゃんを泣かせて良いのか？

姉御を曹操に渡して離れ離れにされても良いのか？

嫉妬や欲望で罪無き兵士が戦っても良いのか？

俺は…このまま…何進のおっちゃんの下に行っても良いのか？

そんな悩みが頭をよぎり始めるがなんとか振り払う。

今は眼前の問題を解消するのが先決だ。

さて、一眠りしたら…姉御起こして、姉者を探すのでしょうか。

…とはいえ、姉御の肌とか二つの柔らかいモノとかが当たった状態で昼寝か…激流に身を任せてどうかしてしまいそうだよまったく…

そう心の中で愚痴りながらも、既に寝始めた姉御の顔を見つめ、溜息一つ目を閉じる。

俺もとうとう婿入り…か。

激流に身を任せ…（後書き）

御意見、ご感想お待ちしております。

さて、ここより下は…

紀霊の武器名についてアンケートご協力下さい。

以前募集したのですが、以下のような武器名頂きました。

まあ、この中からどれが良いか回答していただければありがたいです^^

武器名と簡単な理由を付随します。

三尖北刀：北斗ネタが多い小説の為

三華尖：姉者姉者姉者姉…（以下、華雄への愛が止まらなかった為省略）

三尖靈華：紀霊の霊と我らが姉者華雄の華で三尖靈華。

海王三尖：海王が思いついたとの事。（確かに言われて見れば似てるかも。）

この4つの内、どれかにしようと思います。

紀霊の武器名はこれだ！というのが有りましたらお答えいただけると嬉しいです。

姉者と俺の…【前編】（前書き）

3月7日、地元へ帰省してきたモヒカン勢の友人（シン使い）との  
会話

友人「お久しぶりです柳さん。最近ジャギ使い始めましたよ。」

柳「おお、って壁コンもきっちり出来てるのねw」

友人「柳さんが使うジャギの壁コンはどんな感じですか？」

柳「ウチの場合は、2Cバニから近D遠DでJBJDの立ちAから  
JBJDの繰り返しだね。大体11〜12HITでノックバックす  
るからブースト使ってコンボ数伸ばすことあるよ。」

A：弱パンチ B：弱キック C：強パンチ D：強キック 2：  
レバー下方向 J：ジャンプ

友人「じゃあバスケは？」

柳「出来るかつ！出来るもんならやりたいわ！」

友人「ですよねーw」

因みにこの友人、おとやんのモデルでもあります。

後書きに次回予告とアンケートがあります。  
ネタ

姉者と俺の…【前編】

時間は昼を回った位だろうか、張遼の部屋で寝ていた紀霊は目を開けて窓から漏れる光に目を向けて現在の時間を推測する。

紀霊のすぐ右横には

張遼「すうすう…」

今にも肌と肌が触れ合いそうな距離で張遼が心地良さそうに寝息を立てている。

紀霊「さて、この状況…取りあえず何とかせねばな…」

紀霊が置かれている状況を確認すれば

張遼が紀霊に背中に腕を回し、抱き付き密着した状態である。

寝息が首筋に当たったり、太ももが微妙に絡まった状態が何時までも続くと紀霊の理性的によろしくない。と判断したのか身を振り何とか抜け出そうとするが…

紀霊「…動くalmazいか？」

以下紀霊の頭の中

紀霊忝式「どうすれば良い！姉御が剥がせないぞ！」

紀霊忝式「無理矢理剥がしてみてはどうだ？」

紀霊参式「馬鹿やろう！無理矢理剥がすなんて姉御に優しくないだろつか！」

紀霊四式「力づくで姉御を……………フヒヒヒ」

紀霊伍式「……………四式…貴様…」

紀霊陸式「関節を外しての脱出は出来ないか？」

紀霊漆式「無駄だ…姉御が背中にまわしている両腕で密着度が偉いことに…」

紀霊捌式「ああ、姉者のスベスベとした肌触りや触れたら壊れそうな柔らかさとは違い、サラリとしながらもしつとり感と程よくムチムチした弾力…最後に言うとなれば、姉者では味わうことが出来ない二つの肉まん…」

その言葉を聞いて、玖式と四式が立ち上がり、捌式を睨みつける。

紀霊玖式「ほう？姉者の胸が無いと申すか…どうやら死にたいようだな…」

紀霊四式「ああ、玖式…俺も手を貸そう。」

紀霊捌式「フハハハハ！果たしてこの俺を倒すことが出来るかな？」

玖式と四式の殺気などどこ吹く風よと笑い飛ばす捌式紀霊

紀霊玖式「ほざきやがれいっ…！」

紀霊伍式「やれやれ、2対1は卑怯だねえ…捌式、助太刀するぞ。」  
睨みあう紀霊×4とそれを見て呆れる紀霊壹式は溜息を吐くとそつと呟いた。

紀霊壹式「お前等…少しは仲良くしろよ…」

呆れつつも戦況を見守る壹式の肩に何かが乗っかる。壹式が振り返ればそこには参式の姿があった。

紀霊参式「あいつ等がグダグダやっている間、時間の無駄だから姉者は俺が貰っていくね。」

親指を突き立て、片目を閉じた妙に腹立たしいスマイルを浮かべた参式はそう言い放つ。

紀霊貳式「なら俺は姉御を貰うとしよう。」

それに便乗する形で顎に手を置いて思案顔からとんでも発言を繰り出す貳式

紀霊壹式「いや待てコラ…」

当初の目的はどこに行ったのだろうか…九人の紀霊が本来話し合うべきは現状打破のはず。  
しかし

紀霊漆式「取り敢えず、姉者と同じ起こし方すれば良いんでね？一応姉御婿なんだし無理矢理引き剥がすよるかは怒られる可能性は低

いだろっし。」

漆式を除く全員「その発想はあった。」

紀霊壹式「…てかよ、姉者以外にこの起こし方するのって初めてだよな?」

紀霊玖式「まあ、やるだけやってみよう。取り敢えず耳は頂いた。」

紀霊四式「なら俺は臍を…」

紀霊貳式「太ももは任せろ!」

紀霊壹式「…もう好きにやれよ…」

壹式紀霊は頭を抱えて投げやりに言い放つ。

更に言えば此処までのやり取り僅か2・7秒である。

紀霊「やれやれ…」

右手を太ももへ

左手を臍へ

顔を耳へそれぞれ近付けて



ピクンッ！

太ももにふれた瞬間、姉御の体が飛び跳ねる。

張遼「っはっ、あっあかんで…／＼／」

臍周りに優しく指を這わすと。ピクピクと震えて身を擦る。

張遼「ひうつ…助平やなあ…／＼／」

…オキナイナー…もう声掛けるか…

紀霊「…姉御…起きて…太陽が西から上がったよ？」

張遼「んなアホなことあるか！」

流石は姉御、ツッコミは条件反射だな

紀霊「はい起きた。おはよう姉御、昼寝はおしまいって事で。」

紀霊はそう言いながら布団から出て行こうとするが…

張遼「なあなあ顕…慧にやってた耳にふう〜で息吹きかける奴…ウチにはやってくれへんの？」

紀霊「…いや、起きてる人にやるのはちょっと…」

その言葉を聞いた張遼は紀霊の体に抱き付き、耳元で囁く。

張遼「これでどうや、やってくれるまで離さんで〜」

紀霊「駄々っ子かあんたは！」

張遼「ええやん減るもんでもないし。やってくれへんかったら抱き付いたまま大声で慧呼ぶで？」

…姉者が来る……テレッテーされてそのまま連れて行かれる事は確定的に明らか…

紀霊「やります！やらせていただきます！」

張遼「そうそう、素直が一番や。」

観念したのか紀霊は張遼の耳に顔を近づけて一吹き、耳朵をはむっ

張遼「ちょ！いきなっ！あっ／＼／＼」

よし、拘束が解ければこっちのモンだ！

張遼の力が緩んだ瞬間に布団から飛び起きて窓を開けると紀霊は張遼を向く。

紀霊「姉御、取り敢えず今日はここまで。後、正室側室は置いといて…まだ結婚は時期焦燥だと思っから、婚約者って事で宜しく。」

流石に職も安定性も無い現状で結婚したとか…俺自身納得できん。当初の目的を反董卓連合を何とかすると決めただしここで甘えに逃げたら男としてどうなのよ？

張遼「なんやそれ？まあ、顕が時期尚早って言うのも解るしウチは唾付けておけば今んところええか…」

なんか…御都合主義だが、納得してくれたみたいだし良いとしよう。  
ケラケラと笑う姉御だが

張遼「けどな…」

紀霊「ほへ？」

…次の一言に戦慄を覚えた。

張遼「もし…ウチを捨ててもしたらな…例え地の果てだろうと追っ  
ていって顕スタスタに殺してウチも死ぬから覚悟しい。」

…姉御の…顔は笑っているけど…目に殺気があるのは俺の錯覚だよね？

その身に纏った黒いオーラも錯覚だよね？

張遼「ま、顕ならずウチの婿になるって信じるから……なあ顕？」

紀霊「あ、うん…そこら辺は大丈夫…カナラズムコイリシマスンデ  
…」

姉御は俺の返事を聞くと

張遼「よっしゃ、ならボサツとしとらんで早よ慧を安心させて来い  
！」

普段の姉御に戻り、何時もの笑顔で俺を送り出してくれる。  
俺は窓に手を掛けて外を確認する。

外から姉者の声が響く。意外と近くにいるのかもしれないな…行くか。

とその前に姉御に一言

紀霊「んじゃ俺行くわ。そだ姉御。」

張遼「なんや？」

紀霊「姉御って臍周りとか太ももが弱いんだね、触った時の反応が可愛かったよ。」

それだけ言うと即座に窓から外に出て走り出す。姉御が「このドアホー！」とか叫んでいるが振り返らず壁を飛び越える俺は姉者を探すため、ついでに言えば宴会の食材調達するために市場に向かって歩き出した。

〓張遼の部屋〓

張遼「はあ…」

先程紀霊が出て行ってから急に広く思える部屋…

張遼「可愛い…か…」

頭に可愛いと言われた…

今まで可愛いなんて縁のないと思っ… たんに…

紀霊「姉御、可愛いよ。可愛いよ。可愛い（エコー）」 張遼の脳内紀霊です。

張遼「くくく／／／／／」

布団を握り締め顔を紅く染めた張遼が声にならない言葉を出しながらゴロゴロ転がる姿がそこにはあった。

くく市場に向かう道くく

市場に向かう途中、やることなく暇な紀霊は

おとやん「お前もエライ事になってんな…パルって良いか？」

紀霊「そんな事言ってる時点ですんじゃねえか…てか姉御だけどさ…」

おとやんと脳内で会話していた。

おとやん「馬鹿野郎、お前イメージすんじゃねえ！って怖っ！」

理由は不明だが、おとやんと脳内で会話している時に紀霊がイメージしたりするとおとやんにまで見えてしまつと言う仕様バグがある。そのため先程紀霊が見た姉御の表情がおとやんにも鮮明に見えてしまう訳だ。

紀霊「そうか？ヤンデレって結構可愛いだろ？流石に最初は驚いたがよ…」

おとやん「お前…好きなジャンルもしかして？」

紀霊「大概は大丈夫だかヤンデレが一番好きだな。なかなかどうしてリアルに居ないのが残念でならないがね。」

おとやん「大概で特について…まさか姉貴も守備範囲なのか!？」

今直ぐにでも紀霊の胸倉を掴みかねない勢いで迫るおとやん（脳内です。）

紀霊「年齢的にセーフてはいえ幼児を守備範囲に入れるのはどうかと思うぞ…子供の世話好きだし可愛いとは思うが…」

おとやん「てめこの野郎！姉貴デイスってるのか!！裸Yシャツに合法ロリだぞ！普通ならティン！と来るべきだろそこは…」

紀霊「おい神（笑）、発言が色々と危ないし矛盾してるぞ…てか一番着いたし帰れ。」

おとやん「バカ言え、お前に【俺の姉貴がこんなに可愛い108の理由】を聞かせるまで帰るわけには行かん!」

紀霊「語ったらお前の姉貴に弟のDドライブ除くように伝えよう。」

おとやん「……………サラダバー!」

少し無言になったおとやんはいきなり走り出したと思えば跳躍し、そのまま空のあなたに飛んでいった。

紀霊「…そこは飛び降りるべきだろ…」

心の中で呟きながら市場に並ぶ食材を物色し始める紀霊。

商人「お、紀霊君買い物かい？」

見知った顔の店主が紀霊に話しかけてくる。

紀霊「はい、今日は宴会があるもので…これに書いてある奴を屋敷までお願いします。」

商人「酒と食材か…また随分な量だなあ…まあ大方呂布ちゃんの胃袋行きだろう？少しオマケしとくよ。」

紀霊「すみませんね毎回毎回…」

気にすんな！と豪快に笑う店主に一礼し紀霊は店を後にしようとした時

兵士1「あ！紀霊君発見！合図を送れ！」

兵士2「了解！」

警邏中の兵士と鉢合わせしたと思えば…いきなり叫ばれた…なんか旗振ってるし…

紀霊「は？」

兵士1「大人しく捕まって貰おうか紀霊君、大丈夫…身の安全は保証する。」

そう言いながら紀霊にじりじりと近寄る兵士達

紀霊「やれやれ、どうしてこうにも厄介事ばかりやって来るのやら……」

兵士の間をすり抜けて屋根に飛び乗るとそのまま走り出す。

兵士1「逃げたぞ追え！華雄ちゃんから多少の攻撃は大丈夫だって許可が出る。少しくらい死んでいても生き返るから思いっきり殺れ！」

紀霊「待った！さっき安全は保証するって言っていたよね!？」

兵士2「逃げなければ、ね！悪いけど華雄ちゃんのお願いだから君を捕まえて華雄ちゃんと呂布ちゃんに【ありがとう。】って感謝される為にも捕まってくれ！」

兵士2は叫びながら槍を振りかざす。紀霊はそれを避けながら屋根から屋根へと飛び移る。

紀霊「やっぱり姉者の仕業か！つか仕事してください！」

兵士1「華雄ちゃんと恋ちゃんのお願いは何事においても最優先事項！これ長安守備隊の常識也！」

紀霊「んな阿呆言つて……っと危なっ！」

兵士1から放たれた矢を掴みつつ兵士2の槍を回避する紀霊。

市民「紀霊君良いぞ〜頑張れ〜」



市民「久しぶりに大立ち回りだねえ…あたしやワクワクしてきたよ！」

商人「さあさあ張った張った！紀霊君は逃げられるか、それとも長安守備隊のお縄につくのか！早い者勝ちだよー！」

紀霊「畜生！平和だな長安！」

かくして、紀霊1人对長安守備隊二万人と華雄、呂布の猛将二人の壮絶な鬼ごっこが始まった。

もう少し続きます。

紀霊「続けるのかよー！」

柳「うん、次話投稿まで頑張って逃げる。俺は帰省して来てるモヒカン勢とガチ闘ってくる。」

紀霊「待て柳！って何か兵士が大量に来た！？取り敢えず退散つー！」

姉者と俺の…【前編】（後書き）

この次回予告はネタです。CVは千葉 繁先生、BGMは愛を取り戻せでご想像下さい。

（BGM）テ〜テレッツ！テレッテー！

逃げる紀霊に迫る無数の兵士、その猛攻をなんとか回避しつつ華雄を探し、長安を駆け抜る！だがっ紀霊の行く手を阻む無数の影が其処にはあつたあ！！

次回！真・恋姫十無双〜ジョインジョインジョインキレイ〜【姉者と俺の…【後編】】

華雄の叫びが、紀霊の心を揺るがす！

紀霊「姉者の叫びが俺を呼ぶ…」

〜以下アンケートです。〜

紀霊の武器名についてアンケートご協力下さい。

この中からどれが良いか回答していただければありがたいです^^

武器名と簡単な理由を付随します。

三尖北刀：北斗ネタが多い小説の為

三華尖：姉者姉者姉者姉…（以下、華雄への愛が止まらなかった為省略）

三尖靈華：紀靈の靈と我らが姉者華雄の華で三尖靈華。

海王三尖：海王が思いついたとの事。（確かに言われて見れば似てるかも。）

この4つの内、どれかにしようと思います。

紀靈の武器名はこれだ！というのが有りましたらお答えいただけると嬉しいです。

御意見、ご感想お待ちしております。

姉者と俺の…【後編】（前書き）

柳「そっぴゃ最近感想聞いてないけど作品読んでる？」

友人「ああ、お前以外の恋姫作品読んでるよ。」

柳「手前…」

友人「だっぴゃお前の小説、作品名で検索しても出てこないんだもん。」

柳「作者名で検索すれば出るだろうに…仕舞いにゃ泣くぞ？」

友人の携帯だと作品名やジャンルから私の作品が表示されない不思議。

けど作者名では出てくる…何故に？

今更だけど

累計PV：201,936アクセス

累計ユニーク：22,570人

突破！？有り難う御座います！！

評価やお気に入り件数も徐々に増えていて嬉しい限りです^^

後書きに次回予告とアンケートがあります。

姉者と俺の…【後編】

紀霊「…ちい…」

兵士「どこに行った？探せ！」

木材置き場に身を隠し周囲を警戒しつつ座り込む。

紀霊「何なんだ今回？守備隊動員するとか姉者も無茶しやがる…」

そう愚痴りながら荷物を確認する。手持ちの荷物で使えそうな物は…

財布 短刀 くじけぬこころ

これ位である。

紀霊「少々心許ないな…しゃあない調達すつか。」

紀霊は手始めに置かれていた縄を小さく纏めて腰に装備すると身を屈めながら1人で周囲を見回す兵士に近づき

兵士「むぐつ！？」

紀霊「ごめんなさいね、しばらく寝ていて下さいな。」

口を塞ぎ後頭部に手刀を一撃入れると意識を失う兵士

紀霊「さて、剥ぎ取り剥ぎ取り。」

【兵士の剣を手に入れた。】

【携帯食料を手に入れた。】

紀霊「槍が無いのは不満だが短刀よりマシだな…さて、どこに」

華雄「顕ー！！」

長安中に響くかと思える程の大音量。

紀霊「姉者…か。」

華雄「訓練所で待つ！私の顕なら必ず来ると信じてるぞ！だから捕まれ！」

紀霊「やれやれ…」

柄を握り締めて剣を抜く。

紀霊「信じてるぞ！か、言ってることは矛盾してるし…俺1人捕まえるのに軍隊動員してやることかねえ…」

兵士「居たぞ！」

隊長「捕まえろ！相手はあの紀霊君だ本気でかかれっ！」

周囲を十数人の兵士達に包囲される。それぞれが剣を抜き、槍を構え、弓を引き絞って紀霊に狙いを定める。

紀霊「精々面白おかしく抵抗してやるか。姉者ー！！」

姉者に届くように声を張り上げて叫ぶ

紀霊「俺を捕まえないなら軍隊五万は連れてこい！」

姉者と会って話したいことはあるが、多人数戦は良い経験になりそうだしね。何より…

兵士「隊長！紀霊君を捕まえた際には是非人間砲弾の弾丸にさせて下さい！」

隊長「兵Aと兵Bが居なくなっってから誰も飛ばなくなっただけだから許可する！」

兵士「ヒヤッハー！久しぶりに長安の空を人が飛ぶぜー！」

捕まって人間砲弾の弾丸なんてなりたくねえ！

何なんだよ兵Aって！

投石機で空飛んでたとか聞くし…非常識の固まりらしいし…

兵士「紀霊君、私の見立てでは君も兵Aや兵Bと同じく素質が有るはずだ。いや無きや駄目なんだ！」

紀霊「そんな素質要らんから平穩をくれ！」

隊長「私達に捕まったら君に拒否権は無い。大人しく飛びたまえ。」

紀霊「断固拒否する！」

兵士「ちねい！痛っ！？」

突き出された槍を掴み剣の腹で腕を殴る。殴られた兵士は槍を手放し後退る。

紀霊「槍有り難う御座います。先に攻撃してきたのはそつちですからね。覚悟してください。」

剣を納め両手でしっかりと槍を握り締め兵士達を睨む紀霊。

睨まれた兵士達はたじろぐが

隊長「臆するな！相手は1人、此方は十人以上だ！いくら凱乾様の弟子だろうと勝てるぞ！」

隊長さん、そう言うのが敗北フラグって言うんです。

紀霊「命取る気は無いけど多少の怪我は覚悟してくださいよつと。」

言うが否や弓を構えた兵士の鳩尾を槍で突くと隣にいた兵士の足を払い転倒させる。

兵士「あだっ！」

奇襲な虚を突かれたためか呆気に取られる兵士達を尻目に崩れた包囲から走り出し脱出する紀霊。

逃げる際にちゃっかり槍をもう一本頂戴しているあたり流石である。

隊長「くっ！銅鑼をならして味方に伝える！それから負傷者の手当急げ！」



我に返った隊長の指示に兵士達は負傷した兵士に向かう者、銅鑼まで走る者と命令を遂行し始める。

ジャーン！ジャーン！ジャーン！

城内に響く鐘の音を聞きながら訓練所を目指し走る。

兵士「来たぞ！訓練所にたどり着かれる前に殺れ！」

紀霊「もう少し行けば訓練所だったのに……てか捕まえるって話がな  
んで殺すに変わってんだよ！」

次から次へと湧いて出てくる兵士達を打ち倒し、弓を回避しつつ進む紀霊

女の子「右よ！」

住民の言葉を聞き右を見ると

兵士「てりゃあ！」

上空から槍を突き出す兵士の強襲。

紀霊「甘い！」

紀霊は敵兵の槍を払い、己の槍で殴り飛ばす。

男の子「左だっ！」

その言葉通り左を向くと

敵兵「ふんもつふ！」

距離を詰めた敵兵が紀霊を袈裟切りにしようとして

紀霊「南無三！」

ベキツ！

その剣を白刃取りし、膝を使って刀身をへし折ると掴みかかって背負い投げで投げ飛ばす。

兵士「ぐっ…兵Aさえ居てくれれば…」

紀霊「また兵Aか！何者なんだよ本当！あ、教えてくれてありがとうね君達…って囲まれたか…」

??「流石と言うか未恐ろしいと言つべきか…」

紀霊「っ！？貴方は…」

何時の間にか、今までの比では無い数の兵士に囲まれていた紀霊。ふと見ると、兵士の中から細身の男と見覚えのある女の子が歩み出る。

大守「そう、私が大守です。」

呂布「ぐすっ……顕…居た…」

長安の統括者である大守と涙目で紀霊を見つめる呂布である。

紀霊「いや、知ってますから。お久しぶりです。この前は貴重な書物をお貸して頂き有り難う御座いました。それと恋ちゃん…後で美味しい料理作るから機嫌治してくれない？」

大守「これはご丁寧に…流石は凱乾殿だ、礼節をきっちり教えてらっしゃる。」

互いに挨拶し一礼する姿は平和そのものだっただろう…

隊長「大守様！何ほのぼのした会話してるんですか！今の紀霊君は拿捕対象なんですよ！」

紀霊を多数の兵士が包囲している状況でなければだが…

大守「わかってますけど、紀霊君の挨拶が礼儀正しくてついつい…。さて紀霊君、君が捕まったら投石機で飛ぶと聞いたもので…大人しく投降して頂けると私としては有り難いのですが…」

紀霊「そんな約束した覚えは有りませんよ…」

大守「そうなのですか？折角投石機も多数用意したのに…」

そう言いながら横を見る大守、その目線の先には兵士達の手によって、投石機が展開されていた。

紀霊「どおりでさつきから色んなところに設置されてたんですか…」

実は紀霊がここに来るまでに何基か街中に設置及び射出準備が整っ

て居たのを見かけていたがまさかの太守命令とは思いませんでした。

紀霊「……………（投石機か…………）」

太守「急に大人しくなっただけでどうしたんです？まさか投石機に乗る気になったとか？」

紀霊「…自分の手で飛んで良いなら飛んでも良いですよ？」

太守「本当ですか！？是非是非飛んで下さい！」

兵士「ヒャッハー！投石だあ〜っ！」

兵士「人間砲弾もあるぞあ〜っ！」

太守を皮切りに紀霊の飛ぶ発言に沸き立つ兵士達。

紀霊「…この人達…官軍だよな？」

太守「皆さんお静かに！」

騒ぎ出した兵士に手で合図を出しながら太守は紀霊を見つめる。合図を受けた兵士達は投石機までの道を空ける。

太守「さあ、どうぞ。因みに着弾点は城外であちらにも兵士達が控えていますから逃げられませんからね？」

紀霊「準備の良いことで……………」

ゆっくりと投石機に近寄り投石を置く部分に飛び移る紀霊。

見守る大守と兵士達は飛ぶ瞬間を今か今かと紀霊を見る。

紀霊は固定の為張られた縄を一瞥してから射出先を見つめ目を閉じる。

紀霊「……………準備は確かに良いんですが…俺言いましたよね？」

大守「いきなり何を？」

大守が聞いた瞬間

目を開いた紀霊は剣を抜き叫び

紀霊「俺を捕まえたかったら軍隊五万は連れて来いってね！」

縄を断ち切り自らを射出する。

兵士「おおっ！！」

兵士「やった！」

紀霊の射出を見て喜び騒ぐ兵士達

だが

紀霊「おらあっ！！」

空中にいる紀霊が槍を投擲

その槍は

ガシッ！

とある建物に突き刺さる。

大守「（なんで槍を投げた…？…確か紀霊の装備は槍一本と剣、それに……！）しまった！追え！紀霊君を追うんだ！」

大守がいきなり叫んだ事に兵士達は驚くが、何故紀霊を追うよう指示したのか直ぐに理解する。紀霊が放った槍から紀霊に向かって一本の縄が延びており、予測された軌道を大きく下回っていることに気が付いたからだ。

紀霊「（若干博打だったが…縄と槍があつて良かったな。お陰で城内に落下するよう軌道修正出来たし逃げれたよ。）」

両手で縄を握りしめ急降下する俺は大守の叫びを聞きながら適当なタイミングで手を離す。

どうとも言い難い難い浮遊感を感じながらも着地体勢を取り

ドオオオオオン！！

着地の際は受け身を取りつつ転がることで衝撃を和らげる。

紀霊は立ち上がり剣や槍が壊れてないか確認しつつ埃を払う。

紀霊「痛っ…まあ、初めてにしては上出来過ぎだな。…そう思うだ

る？」

ニヤリと笑う紀霊の先には

華雄「……………ああ…そうだな。」

紀霊「約束通り来たぜ姉者。」

槍を握り締め紀霊を見つめる華雄の姿がそこにはあった。

~~~~~

紀霊「約束通り来たぜ姉者。」

空から降ってきた私の弟分…

姓は紀、名は霊、字を周英、真名は…顕。私にとっては弟弟子であり本当の弟のようであり、そして…私の一番大切な…

華雄「待ちくたびれたぞ顕。」

…大切な人

紀霊「ちよいと二万人の兵士と追いかけてこしててな、良く動員出来たね…」

華雄「昔から長安の人々には良くしてもらっていてな、顕探すのを手伝って貰ったんだ。それよりも顕、私と本気で手合わせしてくれ。」

それと訓練所には私以外は入ってこないようにさせて貰ったから安心しろ。」

紀霊「…だから訓練所に来いって言ったのか…」

華雄「最後にお前と闘っておきたくてな、勿論負けた方は勝った方のお願いを一つ聞く。」

紀霊「どんなお願いでも必ず…だよな姉者。」

互いに槍を構えて何時でも攻撃できる体勢を取る。

華雄「ああ、何時ものやり方だ、てりゃ！」

刹那、華雄から放たれる突き

紀霊「よっと」

槍先をずらして攻撃を受け流す紀霊

華雄「流石に読まれていたか…」

即座に体勢を立て直す華雄に対しその場で構えるだけの紀霊

紀霊「そりゃあね、何度手合わせしてると思ってたんだよ…」

華雄「百より先は覚えておらん。それよりも行くぞっ！」

槍を回転させて突撃してくる華雄に対し紀霊は

紀霊「姉者の攻撃が激流ならば：俺は静水に成れば良い…」

華雄から放たれる攻撃を見切り、最小限の力をもって回避を繰り返す紀霊は華雄からすればただ空を切る感触でしかない。

華雄「相変わらず飄々とっ！少しは打ち合おうと思わんのかっ！」

華雄の足を払う攻撃に後方に跳躍しながら紀霊は答える。

紀霊「俺は相手に合わせて戦い方を変えてるだけだよ姉者。それに姉者の攻撃を受け止め続けたら俺がもたんよ：激流を制するは静水って奴だ。」

華雄「ふんっ！小賢しい！激流を制するは静水なら静水を動かすのも激流だと教えてやる！」

更に力強く速い連撃を繰り出す華雄、紀霊は攻撃を受け流そうと動作に移るが

紀霊「くっ！」

繰り出す毎に速く、強力に、若干変則的になっていく華雄の攻撃に
ピッ

紀霊の頬に僅かながらも切り傷が付く。

華雄「ふっ、静水とやらはどっした頭！」

今まで掠りもしなかった自身の攻撃が当たった。この事実には華雄は

息を荒くしながらも笑顔である。

紀霊「……………」

はしゃぐ華雄とは対照的に無言で傷口を指でなぞり指に付着した血を見つめる紀霊。

紀霊「……………やれやれ……………」

華雄「この勢いでこのまま倒すっ！」

動かない紀霊にとどめの一撃を放つ華雄

ガキンッ！！

華雄「何っ!?!」

華雄渾身の一撃を左手に持った槍で受け止める紀霊。渾身の一撃だったためか、驚きを隠せない華雄

紀霊「…姉者、今度はこっちの番だ……………」

すかさず剣を抜き華雄に切りかかる。

華雄「ちいっ！」

舌打ちしつつ後転で避ける華雄に槍で追撃する紀霊に

華雄「まだだっ!?!」

槍で受け止め罅迫り合いに持ち込む華雄。

紀霊「ちっ！」

華雄「くっ！」

互いの顔が触れるほどの距離、互いの力が拮抗する身動きの取れない状態になる。

紀霊「流石に押し切れんか…」

華雄「当たり前だっ…力で私に勝てると思っな！」

ジリジリと押され始める紀霊

徐々に均衡が崩れ始めるなか、更に力を入れる華雄だが

紀霊「待ってたぜ…姉者。」

そう呟いた紀霊は槍を手放して華雄の腕を握る。

華雄「なっ？」

力を入れていた華雄は勿論体勢を崩しすかさず紀霊は体を入れ込み華雄を投げ飛ばす。

華雄「しまっ！」

綺麗な一本背負い投げが決まり、華雄が目を開けると…

紀霊「腑抜けたか？姉者。」

馬乗りになり剣を首に当てる紀霊がそこに居た。

華雄「この前と同じく…負けたか…」

己の敗北を悟り目を閉じる華雄。しかし、不思議と悔しさは無い。

紀霊「前と同じ勝ち方でどうにもすまんね…けど、姉者と俺の一騎打ち…楽しかったよ。」

華雄から離れて剣を納めると紀霊はその場に座り込む。

紀霊「あゝ暫く姉者とは闘いたくねえ…」

華雄「む、私と闘うのがそんなに嫌なのか…」

紀霊「違う違う、あんな大軍に散々追い回された挙げ句に空飛んで最後にや姉者と一騎打ちだぞ？これから帰って宴会の料理も作らなくちゃあかんし…体が幾つ有っても足りんわ…」

手を横に振り違つと強調しながら朝からの出来事を思い出す紀霊。

華雄「むう…頭が私に捕まらないのがいけないんだぞ。少しはお姉ちゃんの言うことを聞け馬鹿者。」

紀霊「獲物狙う鷹みたいな眼をした人に追いかけて逃げない奴がいるか？それはそうと姉者、お願いについてなんだけど…何にするつもりだったんだ？」

予想は付くんだがな…と思つても口には出さない。

華雄「…聞いても怒らないか？」

紀霊「怒る理由が無ければ怒らないし、俺が滅多に怒らないのは姉者も知つての通りだろ？」

華雄は「あう／＼／＼」とか口ごもりながらも顔を赤らめる。

華雄「ほ、本当に怒らないん…だな？」

無言で頷く紀霊を見て華雄は一度深呼吸して

華雄「頭に…／＼／＼わ、私のむむむ…婿につ…来いって…言つつもりだった…／＼／＼」

婿に來い以降の言葉は小さく尻すぼみながらも紀霊には確かに聞こえた。

紀霊「…成る程。（予想通り…か）」

紀霊の薄い反応に華雄は何を思ったのか飛び起きて紀霊の胸倉を掴む。

華雄「何なんだその反応は！？もう少し顔赤くするとか普段みたい
に冗談だと軽く流すなりしてくれ！あ、出来れば顔赤らめてくれた
方が私は断然嬉しいぞ！」

紀霊「だあっ！落ち着け姉者！」

紀霊の声に我に帰った華雄は胸倉から手を離し力無く脱力する。

華雄「まあ…負けたから意味のない話だがな…」

あからさまに落胆する華雄を見つつ、紀霊は頭を掻きながら立ち上がる。

紀霊「んじゃ勝ったんで俺からのお願い言っよ？」

華雄「ああ…料理だろうと洗濯だろうやるさ…」

座り込んだまま力無く答える華雄の手を取り紀霊は言う。

紀霊にとっても華雄にとっても一生で一番忘れられないであろう台詞

紀霊「姉者、俺の嫁になって下さい。」

続く。

姉者と俺の…【後編】（後書き）

この次回予告はネタです。CVは千葉 繁先生、BGMは愛を取り戻せでご想像下さい。

（BGM）テ〜テレッ！テレッ！

ついに紀霊の口から放たれた言葉に涙を浮べ喜ぶ華雄う！

そして待つ華雄の宴会に向けて台所に立つ紀霊い！

紀霊と華雄の長い夜が今、幕を開けるっ！！

次回！真・恋姫十無双〜ジョインジョインジョインキレイ〜【長き夜】

月夜の下、華雄と紀霊二人だけの酒宴が幕を開ける！！

紀霊「台所に立つのは俺1人で十分だ…」

〜以下アンケートです。〜

紀霊の武器名についてアンケートご協力下さい。

この中からどれが良いか回答していただければありがたいです^^

武器名と簡単な理由を付随します。

三尖北刀：北斗ネタが多い小説の為

三華尖：姉者姉者姉者姉…（以下、華雄への愛が止まらなかった為省略）

三尖靈華：紀靈の靈と我らが姉者華雄の華で三尖靈華。

海王三尖：海王が思いついたとの事。（確かに言われて見れば似てるかも。）

この4つの内、どれかにしようと思います。

紀靈の武器名はこれだ！というのが有りましたらお答えいただけると嬉しいです。

御意見、ご感想お待ちしております。

とある兵士の報告書？（前書き）

地震直後

友人「無事か柳!？」

柳「こつちは生きてる。だが実家は……」

友人「お前の実家って確か……」

柳「ああ、岩手の宮城寄りだ。」

地元の友人や家族との連絡も取れなかったりとライフラインも十分ではない状態。
無事は確認出来たけど、未だに寒い夜に不安になる人も多いと思います。

後書きにアンケート及び重大発表が有ります。出来れば目を通していただけると幸いです。

とある兵士の報告書？

これは長安所属のとある守備隊兵士の業務報告から文章を抜粋したものである。

x年冬

兵Aと兵Bに転属の話が舞い込んだとの噂が流れる。

兵Aに直接聞いたところ

兵A「次の春には恐らく転属になる。」

とか言った後警邏の為射出されて行った。

長安から二人が居なくなる事実には驚きを隠せず他の隊にも動揺が広がっている模様。

隊長からの返答

話は聞いている…、出来れば長安に残って欲しいが我々の我が儘で兵Aを縛る訳にもいかないからな…
今の内に兵Aと兵Bの思い出を作るようにして2人を気持ち良く送ってやるうじゃないか。

年春

兵A兵Bが徐々に身辺整理を完了させて転属準備が終わり始める。

市民にも話が広まったのか寂しがる声がちらほら聞こえてくる中、何時も通り笑顔で空を飛ぶ2人に今までの思い出が蘇る。

しかし、冷静に考えれば考える程兵A兵Bは長安に溶け込んで居る。
…悲しくなつて来たので私も投石機で空を飛んでみた。

着地に失敗したものの、兵Aの見ていた世界が少しだけわかった気がする。

診断：右足骨折により全治1ヶ月

隊長からの返答

何やってんの!?

何やってんの!?

話聞いて心配したんだぞ!

俺らと兵Aじゃ体の造りが違つんだから同じ事を出来るわけ無いだろつに…

年春

兵Aと兵Bが出立する日、長安を挙げて大守様主催の記念式典が催される。大守様の挨拶、兵Aと兵Bの挨拶が終わり兵Aたつての希望により凱乾様と最後の一騎打ちを行う。

長安に響く兵Aコールの中、キャメルクラッチが決まり兵Aの勝利
…有終の美を飾っていた。

最後に、兵Aと兵Bは投石機に乗って一言

兵A B「長安守備隊は…永遠に不滅です！皆さん！本当に有り難う御座いました！最後の射出、とくと御覧あれ！」

そう言つて城外に射出されて行く2人を、私達は何時までも見つめていた。

隊長からの返答

その後兵Aと兵Bの荷物が有るのに気が付いたお前…荷物を投石機で射出していたもんな…

大守様が

「なんともあ奴らしい終わり方だ」って爆笑してたし…

しかし、なんとも長安が静かになったもんだ…

年夏

凱乾様の所に新しいお弟子さんが入ってくる。

名前は紀霊、凱乾様のご友人の御子息でまだ12歳の可愛い男の子でした。

こんな子があの修行を…と思うと若干同情を覚えます。

隊長からの返答

凱乾様曰わくかなかに有望な少年らしいな。けど何故か彼は苦勞しそうな感じを覚えたよ…

年夏

共に修行するためか、華雄ちゃんと紀靈君を度々見かけようになる。

紀靈君は不慣れながらも何とか修行について行くのがとても微笑ましい。

本日の警邏異常なし。

隊長からの返答

あの修行に付いていくが…
もしかしたら…いや、俺の思い過ごしか？
取り敢えず大守様と他の隊長達とで華雄ちゃんの修行姿見に行つてくる。

兵士からの返答

隊長、仕事して下さい。

年秋

凱乾様の下着が盗まれた事件が発生。
女の敵は殺せー！と憤慨する凱乾様の指揮により長安にて狩りが始まる。

取り敢えず見かけた男を尋問することにした。

隊長からの返答

なんで俺まで尋問されなきゃいけないんだよ！

てか凱乾様は「私みたいなか弱い女の子を狙う変態めー！」って言うてたし…

×年秋

凱乾様指揮の下、通称【変態狩り】が続く長安ですが、未だに犯人が捕まりません。一部女性兵士が紀霊君に尋問と言つ名の悪戯をするため紀霊君を追い回すがなかなか捕まらない模様。

隊長からの返答

…哀れな…

犯人は早く捕まってくれ…じゃないと俺の胃が保たない…

×年冬

今年は雪合戦大会に紀霊君も参加

我が隊は兵Aと兵Bが居なくなつた影響もあり予選落ちに…

華雄ちゃんの雪玉を浴びる機会が…orz

隊長からの返答

泣くな…俺だつて泣きたいの堪えているんだ…

しかし、華雄ちゃんと紀霊君の二人が凱乾様に挑む姿に観衆は沸き

立っていたな…

大守様が幸せそうな表情で鼻血出してたけど、隊長達は放置してたし気にしないことにする。

とある兵士の報告書？（後書き）

↓以下アンケートです。↓

紀霊の武器名についてアンケートご協力下さい。

この中からどれが良いか回答していただければありがたいです^^

武器名と簡単な理由を付随します。

三尖北刀：北斗ネタが多い小説の為

三華尖：姉者姉者姉者姉：（以下、華雄への愛が止まらなかった為省略）

三尖靈華：紀霊の霊と我らが姉者華雄の華で三尖靈華。

海王三尖：海王が思いついたとの事。（確かに言われて見れば似てるかも。）

この4つの内、どれかにしようと思います。

紀霊の武器名はこれだ！というのが有りましたらお答えいただけると嬉しいです。

御意見、ご感想お待ちしております。

【作品の更新について】

災害の為、岩手に行っ てきますので、暫くの間作品の更新が
できない状態となります。

更新を楽しみに待つ てくださいる方々には申し訳有りませんが、地
元の人を助けたいので暫くお休みします。

本当に申し訳有りません。

長き夜【前編】（前書き）

友人「お、お帰り。実家大丈夫だったか？」

柳「幸い家が傾いた程度で済んだ。家族も無事だったよ。」

友人「そりゃ良かったな。沿岸の方は酷いみたいだが…」

柳「ああ、休み貰えたと週末からボランティアに行ってくる。」

友人「そうか…必ず生きて帰って来いよ！」

柳「わかってるっての…」

そんな作者の今週

【長き夜】は最初一話に纏めるつもりでしたが長くなりそうだったので、前後編にしました。

武器名決まりました。

詳しくは後書きで。

長き夜【前編】

紀霊「姉者、俺の嫁になって下さい。」

姉者の手を取り勇気を出して言った言葉

おいおい姉者…、ぼけーっとして何も反応しないのは勘弁してくれよ…

俺だって台詞反芻して結構恥ずかしいって思ってるんだからよ…

紀霊「姉者…返事くれると有り難いんだが…」

華雄「ひゃい！？／／／／ あの、その…顕…さん？」

紀霊「落ち着け姉者。」

華雄「いや、だって…あう…その…はう…」

紀霊「やれやれ…幸い人は居ないし…」

姉者の頬にそつと手を添えて顔を近づける。

華雄「顕…わ、わた…んっ／／／」

互いの唇が優しく触れる程度のキス

華雄は最初、何をされたかわからない状態だったが徐々に力が抜け、目を細めて紀霊にされるまま体を預けて自ら唇を押し付ける。

紀霊は華雄の背中に左手を回し抱き寄せて右手を頬から離し、華雄の頭を優しくゆっくりと撫で回すと華雄は軽く体を震わしつつもされるがままだ。

互いの息が感じられるキスが数分間そのままの状態が続いただろうか、紀霊がゆっくりと唇を離し始め、唇と唇には艶めかしい糸が引かれている。

華雄「ぷあ…//」

離れて行く紀霊に残念そうな表情を浮かべる華雄。

紀霊「落ち着いたか姉者？」

紀霊のその言葉を聞き

華雄「……………！？//」

自分が今どんな状態に居たのかようやく理解したようだ。

華雄「う、頭！？さっきの言葉、いや、そもそも今の接吻は！あああうううう////」

自分がおかれた状況と先ほどのキスを思い出した華雄は顔が熱くなるのが解る。事実華雄の顔は湯気が出るほどに顔を赤らめており言葉にならないうめき声を上げている。

紀霊「落ち着けと言うとるに……」

プロポーズして更に唇まで奪った張本人である弟分はどうして落ちて着けと言えるのだろうか？

華雄「お、落ち着けと言われたとて…んむっ」

再度唇と唇が触れ合い二度目の接吻、華雄がまたもや脱力し倒れ込みそうになったため紀霊は慌てて抱き寄せる。

紀霊「大丈夫か姉者？」

心配そうに華雄を見つめる紀霊だが

華雄「…大丈夫だ頭…あの川を渡れば良いのだろうか？」

惚けた表情でとんでもない事を口走る華雄に慌てて叫ぶ

紀霊「如何姉者！その川を渡らず真っ直ぐ帰ってこい！ああもう、小町さん！この人現世に速く追い返して！」

くその頃訓練所の外ではく

隊長「ええい貴様等！紀霊君は今この中何だぞ退かないかっ！」

兵士雷「否！何人たりとも」

兵士風「通すことまかりならぬとの達し故に！」

訓練所に入るための門に大守率いる軍勢は同じ長安守備隊の一員である双子の兵士に進軍を阻まれていた。

大守「う〜ん…私の命令でも通してくれないかな？」

隊長を手で制し、大守は一步前に出ると兵士に話しかける。

兵士風「大守様が言ったのでは無いですか…」

兵士雷「華雄ちゃんと恋ちゃんのお願いは長安において最優先事項と…我等はその命令に服するのみ。」

大守「いや〜華雄ちゃんのお願いなら仕方ないか、んじゃ被害出た兵士の手当てとかしておこ〜」

言うが否や反転、兵士に命令し始める大守

隊長「大守様！っ!？」

暢気な大守に叫ぶ隊長の声が悲惨だったのは言うまでもない。

〜訓練所内〜

紀霊「んで、落ち着いたか姉者？」

若干頭を抱えつつ華雄を見やる紀霊

華雄「ああ…大分落ち着いた…」

落ち着いたと言いつつもほのかに顔を赤らめてちらちらと紀霊を見る華雄

華雄「で、だ顕…先程の事だが…」

紀霊「ああ、今はまだ婚約って形になるけども姉者の返事が聞きたい。」

華雄「あう…こ、婚約か…／／／」

紀霊「そうそう、俺まだ14歳だし将来がまだ不安定だからね、取り敢えず婚約って形にしとこうかと思っただ訳よ。」

紀霊の言葉を受けて更に顔を紅くし俯く華雄は若干もじもじしつつ

華雄「なら…もう一度…もう一度さっきの言葉を…言ってくれないか？」

紀霊「……………改めて言うとなると割と恥ずかしいんだけど…」

華雄「うゝ顕…お願いだから、私はもう一回聞きたいんだ…」

涙目で紀霊に縋りつくように言い寄る華雄を見て、紀霊は深呼吸を一回すると、華雄を見つめる。

紀霊「あゝ…姉者、俺の嫁になって下さい。」

再度紀霊から放たれた告白に華雄は

華雄「も、もう一度大きな声で！」

紀霊「俺の嫁になつて下さい！」

華雄「……勿論だ！なる！寧ろ嫌だと言われても嫁に行くぞ！！／／」

紀霊の告白に間髪入れず返事をした華雄は感極まったのか紀霊に力強く抱きついてクルクル回りだす。

華雄「あははは 頭〜お姉ちゃんか頭のお嫁さんだぞ〜。あ、此からは頭つて呼び捨てでは無く【アナタ】とか呼ぶべきなのか！？ああっ！？そうだ頭、ここここ、子供は何人…欲しいのだ？頭が…の…望なら…何人でも良いぞ／／」

紀霊の腕を掴み、笑顔を浮かべて物凄い力と速度を出しながらグルグル回る華雄。

腕を掴まれている紀霊は当然…

紀霊「あ、姉者！お落ち着け！頼む！やめてくれえっ！！」

地に足が着かない状態で振り回される訳で…

華雄「子供の名前はやはり2人の名前からが良いか！？ああっ考え出したら止まらんっ！こんなに嬉しい事は無いぞ頭！万歳〜」

紀霊「姉者あつ！手ええええええええっ！」

おとやん「お、新記録。」

見事な放物線を描き訓練所の壁に飛んでいく紀霊を眺めながら、おとやんはそう呟きつつメモ用紙のような物に紀霊が飛んだ距離を書き綴る。

何だかんだ言いつつも前回から紀霊の告白を見守っていたおとやんだが、今回の出番はここだけである。

おとやん「ってここだけかよ!？」

~~~~~

意識が徐々にはっきりしてくる…なんか頬に撫でられてるような？

紀霊「んあ?」

華雄「気が付いたか頭。」

俺が地面に寝ていて姉者の顔が上下反対で…後頭部に柔らかい感触…ああ、膝枕か。

華雄「その…すまん。つい、浮かれすぎた…」

姉者は申し訳なさそうな顔で俺を覗き込む。

紀霊「いや、大丈夫だよ。案外俺の体は頑丈に出来ているみたいだし…」

よっと一声、勢い良く起き上がって姉者に手を差し出す。

華雄「本当に頑丈だよ、先程訓練所に入るときのは投石機だろう？」

紀霊「ああ、兵隊に囲まれたからひとつ飛び。って感じたね。訓練所に近付ければ良いかな。って思ってたけど、運良く到着したから良かったよ。隙有りっ」

華雄が紀霊に差し出された手を取り立ち上がった瞬間、紀霊は華雄を引き込んで抱きしめる。

華雄「なっ 頭／／／」

紀霊「んー…抱き締めたくなつたからやってしまった。姉者が嫌ならやめるけど…離れる？」

華雄の耳元で呟きながら抱き締める力を強くする紀霊。

華雄「……………嫌な訳が無いだろう…馬鹿者／／／」

お返しとばかりに抱き締め返す華雄は紀霊の背中に爪を立てる。

紀霊「っ…姉者？」

華雄「ふふふ…頭…私の頭…ああもう、頭はお姉ちゃんのモノだつて証きざしを付けてしまいたいぞ／／／」

立てられた爪が徐々に力を増していく感覚を背中で感じる紀霊。

見れば華雄の目はどこことなく焦点が合っておらず光が失われている。

紀霊「傷は勘弁願いたいぞ…それにそろそろ帰って料理作らなきゃ宴に間に合わないよね。」

華雄「…それもそうだな…仕方ない、今はこれで我慢しよう。ん…」

華雄から紀霊へのキス。

軽い唇の触れ合いでは無く紀霊の頭をしっかり腕で固定して行く、深く、熱く、荒いキスを紀霊にぶつける華雄とそれに応えるように抱きしめる力を強くして華雄を受け止める紀霊。

実時間はほんの十秒程だが、2人にとってみればとても長いキスに思えたのだろう。

密着していた2人だが、どちらからともなく力を抜き体を離す。だが2人の距離は互いの息が感じられるほど近く、目と目を合わせて見つめ合ったまま止まっている。

紀霊「さて、帰りますか。」

華雄「ああ、帰るか。」

発した言葉はそれだけ、訓練所の出口に向かう2人の手は硬くしっかりと握り締められていた。

~~~~~市場~~~~~

紀霊「なあ姉者。」

華雄「なんだ顔？」

市場を歩き凱乾宅を歩く紀霊と華雄。
不意に紀霊が華雄に話しかける。

紀霊「その…あれだ、なんか自然に手繋いでしまったが…離しちや駄目かな？」

そう、市場を歩く2人は訓練所からずっと手を繋ぎっぱなしであり、市場は夕暮れ時が近いいためか人が多くなり始めている。これだけ言えばわかる人も居るだろう、「長安の住民が2人を見ている。」ということに…

華雄「駄目だ、屋敷まで手を繋ぐって決めた以上離すことは許さん。」

紀霊「何時決めたよそんな事…てか思いっきり見られてるから割と恥ずかしいんだが…」

華雄「さつき決めた。それに見られて恥ずかしい。と考えるのでは無く、寧ろ見せ付けてやるつ。と考えれば良いだろう？私は恥ずかしく無いし寧ろ嬉しいと思う。」

紀霊「随分と凄い逆転の発想だな…」

そう呟きながら、紀霊は少しでも早く屋敷に帰ろうと早足になろうとしたとき…不意に華雄が足を止める。

華雄「頭は…私と手を繋いで歩くことは嫌か？…嫌でも私は離さんぞ…離すなんて嫌だから…」

紀霊が振り返ると、若干うつむきつつじっと紀霊を見つめる華雄が

そこに居た。

繋いだ手には先程よりも力が入り、離さないという華雄の意思表示を感じ取れる。

紀霊「…ハア…、（姉者には勝てんな…）嫌なら最初から繋いでな
いって…」

紀霊の言葉を聞き、パツと表情を明るくする華雄は

華雄「そうかそうか！頭は素直じゃ無いな〜まったく世話の焼ける
弟だなあ。私が素直な頭になれるように頭を撫でてやるうな。よし
よし」

そう言いながら市場のド真ん中で紀霊のを後ろから抱き締めると、

ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ
ナデナデナデ

紀霊の頭を撫でまくり始める。

紀霊「ちょ姉者！ここ市場のド真ん中だからっ！てか力強っ！？俺
が外せないだけの力ってどういうこと！？って皆さんこっち見てる
し！止めて！そのニヤニヤな表情腹立つから止めて！」

華雄「見せ付けてやれって先程も言っただろっ頭〜。それとこの力
の源は頭への私の愛故に致し方なし！見せてやるう！我が全身全霊
のナデナデを！」

そう言いながら抱き締める力と撫でる速度を速める華雄

紀霊「愛ならばしょうがない…って納得できるかつ！」

住民：愛野破亜斗「愛なら納得だね！」

住民：Mr・破亜斗「愛なら仕方ないですねえ」

紀霊「なんであんた等が納得してるんだ!？」

市場のド真ん中で始まった紀霊と華雄の夫婦漫才を笑いながら見守る住民達、今日も長安は平和であった。

~~~~店の影~~~~

兵士1「…くっ、隊長！紀霊襲撃の許可を!!」

隊長「ならん！そんな事したら華雄ちゃんが悲しむだろうがっ!!」

今にも剣を抜いて紀霊に襲いかかろうとする兵士に一喝する隊長だが彼もまた、剣を強く握り締めている。

兵士2「2人共血涙流すほど悔しがらないで下さいよ…」

いきり立つ2人を呆れ顔で見つめるもう一人の兵士は紀霊と華雄の夫婦漫才にさほど興味を示していない。

兵士1「お前はベタベタしてる2人を見て何も思わんのか!？」

兵士2「いや、俺恋ちゃん派なんで。」

隊長&兵士1「このロリコンめっ!?!」

.....今日も長安は平和で.....ある？

## 長き夜【前編】（後書き）

作者は今週末から暫く執筆する隙が無くなりますが、今週中に後一話投稿したい考えです。忙しくて無理な場合はごめんなさい。

アンケートで募集した紀霊の武器名ですが、一番投票の多かった

### 【三華尖】

に決定した事を御報告します。

武器名を考えて頂いた皆様及び投票してくださった皆様、本当にありがとうございます。

この武器で紀霊君には今後も暴れて貰います。

本当にありがとうございます。

御意見、御感想お待ちしております。



長き夜【後編】（前書き）

友人「そついや恋姫のネットゲ有るけどやらないのか？」

柳「華雄居ないから余りやる気出ない。」

友人「華雄好きすぎだろお前…あ、そうそつこれやるよ。」

柳「これは…G-SHOCK？」

友人「お前29日誕生日だけどボランティア行くだろ？丈夫だし行つてからも使える物つて考えた結果これにした。…少し早いけど、誕生日おめでとう。」

柳「馬鹿やろう…こんな良いもん…ありがとよ…」

柳「けどよ…」

友人「ん？」

柳「俺にフラグ立てる暇有つたら彼女作れ！それに何か今生の別れみてえじゃねーか！！」

友人「お前もう死んでしまえ！！」

そんな作者と友人の日常

## 長き夜【後編】

~~~~~凱乾邸~~~~~

紀霊「や、やっと着いた…」

華雄「むう…あつという間に着いてしまったか…まあ良い頭、宴会の料理を作るんだったな？私も手伝うからさっさとやってしまおう。」

手を離しつつ台所に向かおうとする華雄を紀霊が制止する。

紀霊「待て姉者、料理は俺一人で作るから恋ちゃんや姉御達と待っていてくれ。」

華雄「何故だ？2人でやった方が早く終われるだろうに…」

立ち止まり紀霊を見ながら疑問を口にする華雄。

紀霊はその疑問に対し、頬を書きながら答える。

紀霊「そりゃ姉者の送別会だからね…俺一人で料理作りたいと思っ
てたんだよ…」

その言葉を聞いた華雄は、目を潤ませてすぐさま紀霊に抱き付こうと飛びかかる。

華雄「ああもう！可愛すぎるぞ頭！そんなお姉ちゃん思いな頭にはお姉ちゃんがちゅーしてやるっ！」

紀霊「ええい姉者！時間無いから後でにしてくれ！」

紀霊は予測していたのか瞬時に避けて台所に走り出す。

紀霊「んじゃ料理楽しみに待っててくれ〜」

台所に転がり込むような勢いで入っていく紀霊の後ろ姿を眺めつつ華雄は若干残念そうな表情を微笑みに変えながら呟く。

華雄「まったく…お姉ちゃん思いな弟を持って私は幸せだぞ／＼」

微笑みを浮かべ華雄は凱乾や董卓の下に向かい歩き出し、ぼそりと一言。

華雄「まだ時間はある、夜は長いから…覚悟しておけよ頭？」

〜〜台所〜〜

紀霊「うへえ…」

市場から届けられた食材を確認していた紀霊は急に悪寒が走り奇声を上げる。

紀霊「嫌な悪寒だなおい…っ今は料理だ。しっすこんおとやん、出ておいで〜出ないと臍物をほじくるぞ〜」

おとやん「グロっ！？原作の微笑ましさを投げ捨て過ぎたる…！」

紀霊の脳内に響くおとやんの声、呼ばれて早々叫ばなければならぬ
い彼もまた大変である。

おとやん「んで何よ？ノベマス見てる最中だったのに…」

紀霊「Google先生開いて中国料理のレシピ探せ。」

おとやん「あの、俺ノベマス見てるんですけど…」

紀霊「拒否した場合、君のPCモニターとHDに指で北斗七星の形
に七つの穴を空けてやるう。」

おとやん「任せとけ！炒飯から満干全席まで何でも来いや！」

紀霊「素直でよろしいおとやん。」

姉者のために手段を選ばない紀霊…今回の紀霊は外道（今はおとや
ん限定）である。

おとやん「んで開いたけど…」

おとやんの言葉を聞き、紀霊は包丁を逆手で持つと肉の塊に近づいて

紀霊「ジョイヤー！」

肉に包丁を突き刺して頭に布を巻き始める。

紀霊「さあて、ユクゾツ」

瞬時に火を起こし、右手にお玉を持ったままもの凄い勢いで動き始

める紀霊

おとやん「早ええ……」

その速さに時折数人の紀霊が同時に作業しているかの錯覚を覚える
おとやん

紀霊「ヒヤッハー！俺の包丁さばきは見切れても体さばきまでは見切れまい……」

ヒヤッハー！ヒヤッハー！イーヒヒイ！ヒヤッハー！ハーンホ
クトウジョウハガンケン…ハーン！！

~~~~~一時間後~~~~~

紀霊「上手に焼けました」

包丁を握りしめた左手を高く挙げて一仕事終えた紀霊がそこにいた。  
紀霊の後ろには豪勢かつ山のように大量の料理が置かれている。

おとやん「いやおかしいつて！料理の最中にドラム缶ハメやあぐら  
ビームしたりする料理がどの世界にあるんだよ！しかもこの量料理  
するってなったら一時間程度じゃ作れねえだろが！！」

紀霊「姉者の為なら音速だつて越えてみせる（キリッ）」

おとやん「キリッじゃねえよ！」

紀霊「聞き分けの悪いおとやんには…やはり七つの穴を……」

おとやん「ア、アネキニヨウジガアツタノワスレテター。ソロソロオレハタイジヨウスルゼイ！」

紀霊「……………逃げられたか……………」

呂布「……………逃げられた？何に？」

いきなり後ろから声をかけられ瞬時に反転する紀霊、その先には頭を傾げたまま紀霊を見つめる呂布が台所入り口に立っていた。

紀霊「恋ちゃん……………気配消すの上手くなったな……………。さっきのは独り言だから気にしなくて良いよ。ささ、料理出来たし運ぶの手伝って貰えるかな？」

誤魔化すように呂布の頭を撫で、話題を変える。

誤魔化しは効果があったようで呂布の興味は既に料理に集中している。

この男、露骨過ぎる。

呂布「恋、頭のお手伝いする。早く運ば？」

呂布はそう言うつと料理の載った食卓を軽々と持ち上げて歩き出す。

その様子を見た紀霊は

紀霊「……………恋ちゃん……………俺や姉者より力有るんでね？」

料理の八割を一人で運んでいく呂布に紀霊はそんな事を呟きつつ用意した全ての酒を持ち上げて呂布の後を追った。

~~~~居間~~~~

紀靈「ちわゝ、酒持ってきたよ」

酒瓶を担いだまま部屋に入る紀靈を出迎えてくれたのは

董卓「あ、顕さんお疲れ様です。」

紀靈「月ちゃんやほゝ。俺なんかより恋ちゃんが頑張ってくれたよ。」

董卓と

凱乾「顕遅い！早く酒寄越せー！」

紀靈「やかましいわアル中！！」

手足をジタバタさせながら酒を今か今かと待っていた凱乾であった。

因みに華雄に張遼と呂布は現在残りの料理を運搬中でここには居ない。

凱乾「いやゝこんな美少女がアル中な訳がないだろう？董卓殿を見習って少しは私を敬え、そして酒くれ。」

紀靈「はいはい、月ちゃんは美少女だし香様は黙っていれば綺麗なのに美（の）少（ない）女ですねゝ姉者達が来たら始めますんでもう少しだけ我慢してくださいね？」

~~~~30分後から~~~~

凱乾「それではっ！慧の門出を祝う宴会の始まりだー！！野郎共酒を持ってー！」

紀靈「野郎って俺しかないが…ま、いいか。」

全員が手に飲み物を持ったことを確認し凱乾は叫ぶ。

凱乾「慧の門出を祝い…乾杯！！」

全員「いえーい！」

皆一斉に杯を高く上げて交え、宴の開幕とばかりに凱乾、張遼の二人が一気に飲み干す。

凱乾「ぶはーっ上手い！もう一杯！いや、もう瓶ごと持って来ーい！」

張遼「おお、中々上手い酒やんけ！顕、酌して〜な」

開始早々宴会の趣旨なぞどこ吹く風よ。とばかりのテンションで騒ぎ始める二人の下に紀靈は酒瓶を一つ持っていく。

紀靈「はいよーどぞどぞ。飲むのもいいけど程ほどでお願いしますよっ。」

呆れ半分にそう言いながら張遼の杯に酒を注ぎ込む。



注ぎ終えた後、急に紀霊の耳元に顔を寄せた張遼は凱乾には聞こえないような小さい声で呟いた。

張遼「そや顕、慧とは上手くいっただんかいな？」

紀霊「ま、なんとかかんとかってどこですかね？色々と疲れましたが悪い事にはならなかったかと…」

同じく凱乾に聞こえないよう小さな声で答える紀霊

張遼「そか、ならええねん。ほら凱乾殿はウチが相手しとるさかい、慧のそこ行って来いや。」

そう言うと紀霊の肩を軽く叩き笑顔を浮かべた張遼は凱乾の元へと近づいていくと

張遼「凱乾殿、ウチと飲み比べせえへんか？」

凱乾「ほお、面白い！受けて立つー！！」

二人で飲み比べを始めだした。

紀霊「…やれやれ、恩に着るよ姉御。」

紀霊は、そう呟いて飲み比べを始めた二人を見つつ、他の面子へと歩き始めた。

董卓「あ、顕さん」

華雄「おお、来たか颯。」

呂布「……………」

近づいてくるのがわかったのか挨拶をしてくれる董卓と華雄、呂布は料理を頬張り続けていて紀霊が来た事に気が付いていないようだ。

紀霊「香様と姉御はあんな感じだけど、月ちゃんと姉者も楽しんでいる？それと料理は口にあつたかな？」

董卓と華雄の対面に座り取り合えず呂布の口元を拭いながら話す。

華雄「ああ、今までのなかで最高の料理だぞ。流石は颯だ、こんな料理を毎日食べていたなんて私は果報者だな。」

董卓「そうですね。私こんなに美味しい料理食べたの初めてです。今度機会があれば作り方とか教えていただけますか？」

呂布「颯の料理、世界で一番美味しい…恋が保障する。」

三者二様の答え方だが、皆気に入ってもらえたようで満足といった表情を浮かべる紀霊。

紀霊「3人とも有り難う。まあ、今は料理に酒を楽しんでくれよ？俺は少しやる事があるんでもう少ししたら席外すよ。」

適度に料理を摘みつつ酒をチビチビと飲みながら次から次へと空になる呂布の前にある料理の載っていた皿を新しい料理に取り替える紀霊

華雄「料理の追加でも作るのか？確かに恋はまだまだ食べるだろうが十分な量はあると思うぞ？」

紀霊「いや料理は良いんだけどさ…酒の追加しなくちゃね…」

紀霊の視線の先には

凱乾「ヒヤッハー酒だーっ！！」

張遼「料理も有るでえー！！！」

互いに大きな酒瓶を一つずつ手元に置きながら、高らかに杯を交わしている二人の姿が其処に居た。

董卓「…後酒瓶って何個あるんですか？」

紀霊「今日買ってきたのと屋敷に有ったの合わせると…あと1瓶と半分つてとこだな…」

華雄「この勢いだと明らかに足りんな…」

呂布「頭、これおかわり。」

紀董華「…はあ…」

紀霊「んじゃ行っってくるわ。」

華雄「気をつけていけよ？」

董卓「此方は頑張りますんでお任せ下さい。」

紀霊「なるべく早く戻るからそれまでお願いするよ。んじゃ行つて来る。」

市場に向けて屋根伝いに飛び進み始める紀霊を華雄と董卓は手を振り見送った。

~~~~~

紀霊「おっちゃん！酒瓶4つ急ぎで頼む！」

空から着地し、店主に注文を繰り出す紀霊に対し店主は

店主「あいよ紀霊君、今用意するからちよつと待つててくれや。…
ほいお待ちどうさま！！」

そう言つと、近くにあつた布を勢い良く剥ぎ取る。

そこには台車に載せられた酒瓶が4つ綺麗に固定されていた。

紀霊「はやっ！てか何で準備されてるの！？」

店主「ふふふ、お得意様のご要望位見通せないようじゃ商人失格だぜ紀霊君。さあ、急ぎみただし御代は後で良いから持つてった！」

紀霊「商人つて凄いな！取り合えず台車と御代は後で持つてきます
！」

あいよ。と笑顔で返す商人に一礼し、台車を押して市場を走り出す。

紀霊「はい、台車通りまーす。道空けてくださいねー。」

未だ人通りが多い市場だが、紀霊の言葉に皆が台車の通り道を空けてくれる。流石は最強キャラ【台車】である。

紀霊「流石は台車だ、人ごみなんて何とも無いぜ。」

そう言つて更にスピードを上げて屋敷まで一気に走り抜ける。

~~~~~

凱乾「遅い頭！」

張遼「おお、顕ええタイミングで酒持ってきたなあ〜そろそろ空になりそうだったんよ。」

世紀末台車のお陰で予定した時間よりも早く戻つてこれた紀霊を待ち受けていたのは、元から用意されていた酒瓶を殆ど空にした凱乾と張遼である。

紀霊「ザルだなあんたら…酒は置いておくんで後は好きにしてください。」

空になった酒瓶の残骸を見て心底呆れたように二人に言い放つと自身の部屋に向かつて歩き出す。

紀霊「なんかもう…異様に疲れた…後片付けするのも俺だし…なんか泣きたくなつてきたが、取り合えず部屋の修繕せな…」



だが、後悔も反省もしていないぞ、私は前を向いて突撃するのみだ  
！」

堂々と叫ぶ華雄の言葉に、我に返り壁に空いた穴から先を恐る恐る  
見ると…

紀霊「うわぁ…」

絶望を隠すことなく顔に出す紀霊、何故ならば宴会をしていた部屋  
から紀霊の部屋までの間に存在する壁という壁全てが壊されていた  
からだ。

華雄「頭のためなら壁なぞに私は止められん。それに寢床なら私の  
部屋があるから大丈夫だ、問題無い。さあ今宵は月も綺麗だし屋根  
の上で飲むぞ！お姉ちゃんについて来い！！」

紀霊の腕を掴み、引きずりながら部屋を出る華雄。

紀霊「いや出るのは扉！？入ってきたのが壁なら出るのも壁にしよ  
うよー！」

哀れな事に、華雄の暴走で壁は犠牲になったのだ。

紀霊「壁エ…って姉者！俺を抱きかかえて何をアーツ！」

華雄は紀霊をお姫様抱っこで抱えたまま屋根に飛んだだけです。

~~~~~屋根の上~~~~~

華雄「良い月だな…」

紀霊「そーですね…」

そう言うと華雄は杯の酒を煽る。

華雄「皆でわいわい賑やかに飲むのも好きだが、こつやつて静かに
頭と飲むのも悪く無い…いや良い！」

紀霊「そーですね…」

月を見上げながら返事をしつつ紀霊も自分の酒を一気に煽る。

華雄「…無理やりだったこと怒っているのか？」

先程から空返事しか返さない紀霊を見やり若干不安そうな表情を浮かべる華雄。

流石の彼女も自分の暴走で紀霊が怒っているのでは？と不安になったのだろう。

紀霊「…いやもう大丈夫だよ。それに、姉者がこつなのは今に始まった事じゃないから怒りは無いさ、それ込みで好きになったんだしさ…」

紀霊のその言葉に

華雄「つ／＼／」

顔を赤らめる華雄

華雄「…やはり頭はズルいな、私をこんなにドキドキさせて…悪い

弟だまったく／＼／」

華雄はそう言うと、杯を持たない左手で紀霊の手を取り、自分の胸に持っていく。

華雄の胸に触れた紀霊の手はドクンドクンと動悸する華雄の心音を確かに感じている。

紀霊「姉者：俺は本当に悪く弟かな…」

杯を置き、左手で華雄の肩を抱き寄せる。

2人の顔は互いの息が感じられるほど近く、体が触れることで体温が感じられるほど密着する。

華雄「ああ、お姉ちゃんをこんなにドキドキさせて…本当に悪い弟で、私の伴侶で…私にとって最高の弟だ。／＼／」

紀霊「なら良かった。俺にとっても姉者は最高の姉で…俺の嫁だ。」

見つめ合い、どちらからともなく始まる唇を合わせ、舌を絡ませる熱く長く濃厚なキス。

2人共、もはや自分達以外の何も目に入らないとばかりに抱き合っていて、紀霊が華雄の頭を撫でればお返しとばかりに抱きしめる力を増す華雄。

華雄「ぶはあっ、…頭とのキスが本当に癖になってしまったぞ／＼」

紀霊「ん、姉者は癖にならなかった方が良かった？」

華雄の顎に垂れる混じり合った唾液を拭いつつ意地悪く聞き返す紀
霊に

華雄「そんな事、決まっておろう。癖になって良かったぞ馬鹿者/
／／」

その答えを聞いた紀霊は華雄の頬を撫でて微笑みつつ、華雄に言う。

紀霊「もう自分を押さえきれんぞ姉者：」

更なる段階へと上る言葉、その言葉の意味を感じ取った華雄はコク
リと頷き不敵な笑みを紀霊に向ける。

華雄「来い頭、私が全部受け止めてやる。だから全てお姉ちゃんに
ぶつけて良いんだぞ／／」

月明かりが照らす屋根の上で2人は再度唇を合わせて激しく奪い合
うようなキスを繰り返す。

2人を見守るは、ただ優しく月明かりを照らし続ける月だけであっ
た。

長き夜【後編】（後書き）

今回の執筆に使用したBGM

ニコニコ動画より

【ヤンデレの妹に死ぬほど愛されようが北斗する中野TRF修羅たち】

【ヤンデレの幼馴染が相手でも自重しない中野TRF幼稚園北斗組】

…なぜこんな内容が出来たし？
セーフだよね？よね？

さて、ボランティア行ってきます。

別れの時（前書き）

帰ってきました。

【小説家になろう】よ…私は帰ってきたあああつ！！

お待たせしました最新作です。

別れの時

窓から柔らかい日差しが溢れる室内、小鳥の囀りを目覚ましにうつすらと目を開く…自分の部屋とは若干違う天井と匂いに部屋を見渡すと

紀霊の部屋にある本棚ならば孫子の兵法や孟子といった書物が並ぶ棚には、月刊【猪突猛進】に【騎兵戦術書】、誰が書いたのか【華雄新書】が並んでおり床には突き出た仕込み槍が数本あることから誰の部屋か紀霊は理解する。

紀霊「（ここは…姉者の部屋か…って確か…）」

寝起きで回らない思考が徐々にクリアになっていき、昨日何があったかを思い返し自分の横を見やると

華雄「んむ…」

心地良く寝ているのか、紀霊の腕を抱き締めながら寝ている華雄がそこに居た。

紀霊「…寝てるとこ起こすのも悪いか。」

華雄を起こさないよう静かに腕を抜き、床に散乱していた自分の服に袖を通す。無論、華雄の衣服は畳んで華雄が起きたとき目に見える場所へと置いて紀霊は華雄の部屋を出て歩く。

紀霊「眠気覚ましに顔洗って…ついでに体も拭くか。」

朝日や外の静けさから予測するにまだ人が起きて行動するには少し早い時間、香様や姉御が起きる前に朝食の準備や宴会場の片付け、下手すれば二日酔いの介抱までと紀霊のやることは多い。幸い普段から朝食の準備やその日の準備を行っている習慣ためか、起床時間は何時もと余り変わらず他の住民が起きるには二時間ほどの余裕があるため一先ず井戸に向かい顔や体を拭いて台所へと向かい食材を見やり呟く。

紀霊「昨日の残りは無いだろうしな…ご飯炊いて大根の葉茹でたりの軽めで良いな。」

米を研いだり小刻みに包丁を動かしたりして台所で朝食を作り終えた紀霊は宴会場へと足を運ぶと…

紀霊「……………」

扉を開けた途端に感じた酒臭さに散乱した杯や食器を見て言葉を無くす紀霊。

凱乾「も、もう一杯…」

張遼「まだや…まだ行ける…ウチは行くんや…あの高みへ行く…ん…や…」

呂布「顛…おかわり…」

董卓「うう…私じゃ止められませんよう…こんなダメダメな私は天井裏に籠もってメソメソ泣いてれば良いんです…」

そこには床に寝そべった4人の屍が盛大な寝言を言っていたのだから絶句するのも無理は無い。

紀霊「…飲みすぎだし高みってどこよ姉御、恋ちゃんは夢の中でも食べてるし…月ちゃんは何がどうすれば其処までネガティブになるんよ…」

寝言だとわかっていても突っ込まざる得ない状況に紀霊は頭を抱えて盛大に溜め息をついて静かに動き出す。
とりあえず散乱した酒瓶や皿を纏めて台所に持っていき、次に部屋の窓を開けて換気と太陽の光を入れた後、全員を各々の部屋に運ぶ。

紀霊「さて、全員部屋に寝かせたけど朝食は無駄になっちまったな…」

台所で皿を洗って酒瓶を纏めて台車に乗せた後、庭で休息を取る紀霊は大きく深呼吸、音の無い静かな空間に響く自分の音…次の瞬間

静かに両手を前に突き出し、親指を折って中腰で静かに目を閉じる。

その構えは、妬み、憎しみ、怒り、哀しみを超越して初めて会得できると言われる北斗神拳奥義【北斗羅漢撃】の構え…

見よう見まねではあるがこの構えを朝早くに行う事が紀霊の日課で、何れは習得したいと始めたのは二年前、最初は構えの維持ですら苦戦していたが今となっては構えたまま瞑想すら行える程に上達したのだ。

ドクン ドクン ドクン

自分の鼓動を、息づかいを感じ取る中、心を平静に保つよう徐々に意識を集中させると

段々と今まで聞こえなかった小さな音

微風の囁きや虫の動く音、はては部屋で寝ている華雄達の寝息までもが聞こえてくる。

構えを組んだ紀霊を中心に、様々な場所に張り巡らされた根のようである。事実、現在の紀霊は自身の感覚が非常に鋭敏になっている。何時から構え、何時間が経過したのかといった時間の感覚は既に無い紀霊だが、徐々に増える生活音が辛うじて今の時間を知らせてくれた。

人の動きが活発になり始めた中、一つの声に紀霊は思考を取り戻し目を開け呟く

紀霊「姉者が起きたか…」

華雄に出す朝食を用意するため、構えを解いて立ち上がり台所に向かう。華雄の事だから自分がこの時間にどこにいるかなぞ当たり前のように知っているだろう。

まあ、自分が何時どこに居ても姉者なら直ぐに突き止めるだろう。という考えが浮かんできて苦笑を浮かべる紀霊。

紀霊「信用…いや、願望かねえ？」

ふと思えば自分も随分と姉者に依存しているものだ…

だが悪い気がしない。そんな事を考えつつ、最愛の姉に出す料理を

準備する紀霊の顔は優しく微笑んだ表情であった。

~~~~~

紀霊「おはよう姉者、朝食は出来ているし食べようか。」

華雄「あ、ああ…おはよう顕／＼」

紀霊の言葉に大人しく席に座る華雄の前に用意した朝食を差し出して自身は華雄の対面に座り箸を取る。

華雄「なあ顕…」

紀霊「頂きます。…何だ姉者？」

返答して、野菜を口に含みながら華雄の目を見る紀霊に

華雄「…昨日の顕は…激しかったぞ／＼」

紀霊「…改めて言われると恥ずかしいんだが…」

口に含んだ野菜を吹き出しそうになったのをなんとか飲み込み、顔を赤らめながら返答した紀霊を見た華雄は微笑みながら次の言葉を繰り返す。

華雄「いやな、颯の男らしさと言えば良いのか…もう、なんて言えば良いのか…思い出したら恥ずかしいじゃないか馬鹿者」

顔を綻ばせながら嬉しそうに箸を進めていた華雄は野菜を摘みと紀霊の眼前に突き出す。

紀霊「……………やらなきや駄目？」

華雄「拒否はさせんぞ？ほらあ〜ん」

そう言いながら紀霊の口元に更に箸を近づける華雄を見て回避は不可能と悟ったのか、紀霊は素直に口を開き野菜を食べる。

華雄「うむ、以前もしたがやはりあ〜んは良いな！美味しかったか？」

紀霊「上手いよ。…姉者、何故目を閉じて口を開けっ放しにしている…」

明確な意志表示ではあるが、とりあえず聞いてみた紀霊

華雄「…お返しはしてくれないのか？」

紀霊「…やるからあからさまに残念そうな顔をしないでくれ…ほら、あ〜ん…」

野菜を摘み華雄の口元に持っていくと

パクッ

待ってましたとばかりに勢い良く口に含む華雄の顔は満面の笑みだ。

紀霊「人が居たら恥ずかしくて死にそうだ…」

華雄「良いじゃないか、それに…今日からは暫く会えないのだから…これ位欲を出しても罰は当たらん。」

その言葉を聞いた紀霊は若干自分が言った事に後悔を覚える。

【今日は姉者出立の日】

出立は昼なので今が事実上一緒に過ごせる僅かな時間なのだ。

紀霊「…すまん姉者、姉者の気持ち分かってなかったわ…」

華雄「今顕と一緒に居れるから構わんさ。あ、水をくれ。」

紀霊「ほいほい、この後お湯沸かすけど先に入りなよ。俺はその間に片づけしとくからさ。」

華雄の杯に水を注ぎ込み自分の食器を片づけ始める紀霊

華雄「なんだ、一緒に入ってくれないのか？」

紀霊「あー…姉者、大変魅力的な誘いだが、一緒に入っている間に香様達起きたらどうすんよ…」

若干戸惑いを感じつつ受け答える紀霊の様子に満足気な笑みを浮かべる華雄は

華雄「ふふっ、冗談だ。私が本気で入るなら2人っきりの時に無理やり頭を入れるだろうっ?」

紀霊に向ける華雄の微笑はどこか余裕すら感じられ、その笑みには女の魅力すら覚える。

そして

【姉者が冗談で自分を混浴に誘う。】

今までの華雄では到底する事無い行為に紀霊は戸惑ってしまった訳だ。

紀霊「まあ…姉者ならそうするわな…。つか姉者、雰囲気が何時もと違ってるが…」

華雄「私を変えたのはお前だろうに…。さて、洗い物は私がするから頭は湯を沸かしてくれ。」

紀霊「はいはい」

華雄「返事は一回だぞ、ほらほら私の夫になるんだしっかりしろ！」

急かすように手を叩く華雄にため息一つ、台所を出て風呂釜に向けて歩く。

紀霊「やはり姉者には勝てんな…」

紀霊はそんな事を呟きながらも風呂釜の前に立って、薪を積み上げると火種にする薪を手に持ち、ライターで着火を行う。

紀霊「この瞬間ときを待っていたのだ…」

その台詞と共に火を風呂釜に投げ入れた数十分後、

紀霊「温度は上々、姉者ー！沸いたから入れるぞ」

華雄「すまん、先に入らせて貰うぞ。」

紀霊「遠慮無くどうぞ」

華雄「あ、顕なら覗いても良いからな？何なら入ってきてても良いぞ？」

紀霊「…遠慮しときます。」

~~~~庭~~~~

華雄が入浴中の内に、庭で洗濯物を干す紀霊の下に

凱乾「お、顕」

ようやく起きた凱乾が庭にいる紀霊へと近づいてくる。

紀霊「こりゃまた遅いお目覚めで…軽めの食事なら準備してありますよ？」

呆れ顔で食事の事を話す紀霊の言葉を遮るように

凱乾「昨夜はお楽しみでしたね！」

紀霊「……………バレテラ」

ニヤニヤ顔で紀霊を見る凱乾に引きつった顔で凱乾を見る紀霊

凱乾「私はお前達の師匠だぞ？てか二人見てたらわかりそうなもんだしな」夫婦爆発しろ！！」

紀霊「あんたそれ言いたいだけだろ！！」

凱乾と紀霊の言い合いの中、商人が台車を引きながら屋敷入ってくる。

商人「ちわゝ凱乾様、例の物もってきやした！」

凱乾「お、御苦労！」

商人は台車に乗っている【ある物】を凱乾と紀霊の間に置く。

紀霊「…予想はつきませんが、これは何ですか？」

凱乾「多分予想通りだろうが慧が来てからのお楽しみだ　おゝい慧
！こつちに来ーい。」

その言葉を受けて庭に華雄がやって来る。微かに香る良い匂いとまだ乾ききっていない髪が風呂上がり後直ぐに来たのだと理解できる。

華雄「香様、何でしょうか？」

凱乾「お前に渡したい物があってな、董卓殿達も起きたようだし丁度良いだろう。」

凱乾が指差す方向を見やると

張遼「あ、あかん…頭痛に目眩に吐き気…グラグラするわ…」

董卓「うう…頭が痛いです…」

呂布「頭…お腹空いた。」

二人は頭痛のため頭に手を当て、一人は空腹のため腹に両手を当てながら紀霊達の方へと向かってくる。

紀霊「…取り敢えず水とおにぎり用意してきます。」

~~~~~紀霊介抱中~~~~~

董卓、張遼、呂布の三人が一先ず落ち着いた時を見計らい凱乾が【ある物】を華雄に手渡す。

凱乾「私から慧に…師匠から弟子への最後の餞別だ、中を見てもみる。」

華雄「では！」

バサアツ！！

その言葉を合図に布を剥ぎ取る華雄が握るは

董卓「大…斧？」

紀霊「（やっぱりか…）」

その武器は長柄で

その斧は大きく、見る者全てに重厚感を感じさせ

その大斧を握る華雄の存在感をより一層に際立たせる。

凱乾「その武器の名は【金剛爆斧】、慧を見てきた中でこの武器が一番合つと思っただんで前から武器屋に頼んでおいた一品物だ、この武器で暴れてこい！」

華雄「香様…この武器、有り難く頂戴致します！」

真剣な表情で凱乾に礼をする華雄と笑顔で返す凱乾。これだけ見れば良い師弟なのだが

華雄「後…香様より先に伴侶見つけて申し訳有りません！」

凱乾「よし慧、ちよつと城外出る！」

先程までの笑顔とは若干違う笑顔、しかも額に青筋を立てた凱乾が城の外に親指を指す。

華雄「望むところです。金剛爆斧の威力を確かめると私の頭にちよつかい出せないように全力で行きます！」

対する華雄も不敵な笑顔を浮かべて歩き出す。

二人が去った庭に残された四人は

董卓「うう…どうすれば…」

紀霊「アレが二人なりの別れ方だろうし、お昼には帰ってくるよ。  
…多分」

張遼「面白そうやしウチ見に行ってくるかな〜それとも慧居らん内に頭とゆっくりするんもええな！」

紀霊「見に行くのも良いけど出立の準備出来てるのか姉御？後二時間ほどで出立の時間だろ？」

呂布「頭、お昼寝しよ？」

紀霊「ちよっとお昼寝には早い時間だしお昼ご飯とお弁当の準備しなきゃいけないからね、姉者の見送り終わるまで我慢して欲しいな。」

心配する董卓に安心を、樂觀的な張遼には急かすように、我関せずな呂布には頭を撫でながら言い聞かせた紀霊は城外を見やる。人々の歓声が屋敷まで聞こえ、二人の一騎打ちが始まった事を知らせてくれる。

紀霊「(さて、帰ってきた二人にはお説教かな?)」

紀霊はそう思いながら残った洗濯物を干し、昼の準備を始めた。



凱乾「董卓殿、慧を宜しくお願いします。」

董卓の馬に近づき凱乾は一礼、董卓も頷き応える。

董卓「凱乾殿の【愛娘】、確かにお預かりしました。」

董卓と凱乾のやり取りを見ていた顕の下に馬から下りた張遼が歩み寄る。

張遼「なあなあ顕」

紀霊「姉御どうしたんぐつ!？」

頭を掴まれ唇を奪われる紀霊

周りからは「おお」といったざわめきが聞こえる中、数秒の後に張遼が唇を離す。

紀霊「姉御…いきなり何よ?」

張遼「いやほら、慧ばっかり良え思いするんも不公平やん。ウチもこれ位やってもええやんかノノ」

仄かに頬を赤らめながらはにかむ張遼は乗馬し紀霊を見つめる。

張遼「ウチも顕の妻やって事、忘れたら承知せんで!」

張遼はそう言つて馬を翻し董卓の下に歩み寄つていく。刹那、下馬した華雄が紀霊に突進し、腕を振るいながら叫ぶ

華雄「顕! ! ! 齒食いしばれ!」

その勢いと形相に思わず目を閉じ齒を食いしばる

紀霊「んぐう! ?」

紀霊の目の前に来た瞬間

紀霊を抱き締めて紀霊の唇を奪う。

兵士達「あがあああああつ! !」



その二人を見て血涙を流しながらのたうちまわる兵士達。

兵士達の阿鼻叫喚の中、先の張遼のキスを大幅に上回る時間の後に唇を離す華雄。

紀霊「あ…ね…じゃ？」

不意の事に動転した紀霊を余所に赤くした顔で紀霊の頭を撫でる華雄

華雄「行つてきます。のチューだ、お、お帰りのチューは頭からするんだぞ！お姉ちゃんとの約束だ！！／／／」

恥ずかしさを隠すためか、それだけ言うと猛ダツシユで乗馬して行く華雄の後ろ姿を眺める紀霊は

紀霊「…やれやれ…最後の最後まで姉者らしい…姉者ーっ！行つてらっしやい！！」

華雄「ああ！行つてきます！！」

その言葉を合図に馬を走らせる董卓一行を

俺は

地平線に消え行くまで見つめていた。

紀霊「また直ぐにでも逢えるさ姉者…さあて…」

後ろを向けば守備隊の兵士達が抜刀し俺の様子を窺っている。わざわざ待っててくれたのは有り難いけどさ…

紀霊「俺を捕まえたいなら…軍隊五万は連れてこい!!」

屋根に飛び乗り長安の街を走る。

相変わらず市民は捕まるか捕まらないかで賭博始めてるし、香様は何故か守備隊の指揮執ってるし…恋ちゃんも槍振り回して追っかけてくるけど…

紀霊「姉者はもう…追っかけてはくれんからなあ…」

隣から居なくなっただ愛しい姉を想い、紀霊は今日も長安を跳ぶ。

【長安少年編 完】

別れの時（後書き）

今回の話…テンション高いな私…w

御意見、御感想お待ちしております。

紀霊「話すって大事だね…」（前書き）

友人「お、おかえりー」

柳「ただいま〜とりあえず実家帰る準備せな…」

友人「帰ってきてそうそう大変だな…そんな柳を敢えて飲み誘おう！」

柳「もはや突っ込む気力も起きん…」

結局飲み連れてかれた…

〜そんな柳と友人の日常〜

テンション高いままに連続投稿です。

紀霊「話すって大事だね…」

~~~~~凱乾邸~~~~~

呂布「……………」

紀霊「……………」

昼下がりの庭、俺と恋は互いに無言で槍を構え対峙する。中央には香様が二人を見つめ大きく息を吸い込み、叫ぶ瞬間をじっと待っているんだが…

凱乾「始め!」

その言葉を合図に動き出す二人の姿は重なり合う。

紀霊「…くっ」

呂布「……………」

凱乾「ほう…」

重なり合った二人は互いの槍を押し拮抗状態となって動かない。

呂布「顕…力凄い。」

紀霊「いや…油断したらこっちが負けるのに強いつて言われてもねえ…隙有りっ！」

瞬間、紀霊は槍から力を抜き体をずらす。

そうなればバランスを崩す呂布は

呂布「…わかってた。」

予想していたようでバランスを保ちながら紀霊の胸倉を掴み投げ飛ばし、投げ飛ばされた紀霊は槍を手放してしまいながら放物線を描く。

紀霊「やっば！」

受け身を取りつつ向かってくる呂布を確認し、すぐさま左手で剣を抜いて呂布に構える。

呂布「ふんっ！」

紀霊「そいや！！」

目にも留まらぬ速さで刺突を繰り返す呂布。だが紀霊はその軌道を捉え、避けた瞬間に槍を斬り落とし呂布に追撃を加える。

呂布「っう！！」

避けきれず、腕で防御しつつ後退した呂布は剣を抜いて紀霊に飛びかかる

呂布「頭…倒す！」

呂布と紀霊、互いの剣が打ち合った瞬間

パキーン

紀霊「嘘？マジか！？」

二人の力に耐えきれなかったのか、紀霊の剣が折れてしまった。呂布と拮抗状態を作れる紀霊だが、得物がそれに耐えきれなかったら戦い続ける事は出来ても不利でしかない。

呂布「恋の勝ち。」

紀霊の喉元に剣を突きつけながら微笑む呂布

凱乾「そこまで！ … 詰めが甘いな頭、何故槍を斬った後の追撃を緩めたんだ？」

紀霊「負けた… か。やれやれ、追撃する瞬間に恋の顔見たら体が勝手に… 言い訳でしか無いですけどね。」

凱乾「妹分には手を出せない… と？ 甘いな頭、小豆に塩少々と砂糖多めに入れて煮込んだ後焼いた餅と絡ませる位に甘い！お前は身内に甘すぎる！」

紀霊「それ普通に美味そうですね… あゝ恋、今度作ってやるから涎拭け。まあ香様、身内に甘いって指摘は甘んじて受けときます。」

そう言いながら恋の涎を拭う紀霊

華雄が董卓に仕官して二年、今や紀霊も十六歳となり立派な若者へと変貌を遂げていた。

先程の一騎打ちは呂布との修行として行っていたもので

呂布「頭、恋勝ったからお願い聞いて。」

ルールは勿論、華雄と行っていた当時のままだ

紀霊「やれやれ、掃除に洗濯、料理に添い寝、なんでもどうぞ。てかさっきの槍さ、無茶苦茶殺気に溢れてたんだが…下手すりゃ一生動けない怪我しかねないから危ないんだけど…」

呂布「大丈夫、そうなったら恋が一生面倒見てあげる。それよりお願いは…今日、お風呂一緒／＼／」

紀霊「そんな怪我は勘弁願いたいし男としてどうなんよ？それとまたかよ…この前も同じお願いだったな、幾ら俺が恋の兄貴だからって年頃の女の子が「なら私が恋の代わりを」黙れ女の子（偽）、とにかく！他のお願いにしないか？」

紀霊の提案に呂布は首を横に振りながら答える。

呂布「駄目…、一緒にお風呂入った後はお餅食べる。」

紀霊「なんか一つ増えとるし！？だからお風呂は駄…」

呂布「（ウルウル）？上目遣い+涙目」

この呂布を見た紀霊の顔は引きつり、少しの間硬直する。恐らく彼の脳内には【どうするアイフル】と流れている事だろう。

紀霊「……………目とは言わないが、今回だけだからな…」

呂布「（ブンブン）？物凄い勢いで首を縦に振る」

凱乾「（毎度毎度同じ様な事繰り返して飽きないもんだ…）」

そんな二人のやり取りを呆れ顔で見つめながら凱乾は屋敷の入口に人の気配を、商人や市民といった気ではなく、恐らく武芸者の類が来たのだと感じ取る。

凱乾「頭。」

紀霊「あいさ、お出迎えして来ますわ。」

凱乾と同じく感じた紀霊は恋の頭を撫でて門に向かう途中、耳に
来客者の声が入ってくる。

??「頼もーう！元【宮廷警護兵武術師範】凱乾殿にお目通り願
いたい！」

門の入り口に居るのはやはり武芸者であり、武芸者を視認した紀霊
は近寄りながら声を掛ける。

紀霊「はいはい、今出ますんでもう少し音量落として貰えませんか
ねえ？御近所さんに迷惑掛けるのは忍びないんで。」

??「む、これは失礼した。貴方が凱乾殿で？」

音量を落として答える武芸者と対峙する紀霊

その武芸者は白を基調とした妙に露出具合の高い衣服、そして背中
に背負う一本の槍が一目を惹く美しい女性であった。

年は紀霊と同一年位であろうか？

瞳はまるで清水のよう澄んでおりその表情は自信満々にも人を喰っ

たようにも見える。そして外見を見た紀霊はこの武芸者が誰なのか理解した。

紀霊「残念ながら俺は貴女の会いたい人の弟子でして、姓は紀、名を霊、字を周英と申します。」

??「む、それは失礼、私は姓を趙、名を雲、字を子龍と申す。」

【常山の子龍】

【五虎將軍】

【虎威將軍】

上げればキリがない二つ名を持ち、名將と言われた趙子龍。その人物がそこに居る。しかし悲しいかなこの世界の趙雲は女の子、これが男の趙雲ならば会えた事に感動を覚えたであろう紀霊だが、今日の前に居る趙雲には面倒事が増えそうだと嫌な予感しかしなかった。

動揺を表に出さぬように注意しつつ

紀霊「どうぞお入り下さい。師の下に御案内します。」

そう言いながら庭へと歩き始めた。

~~~~庭~~~~

紀霊「名様御案内しました〜と。」

凱乾「ご苦労顕、恋の相手でもしておいてくれ。」

その言葉を受け呂布の隣へと移動した紀霊は趙雲と凱乾を見やる。

凱乾「それで、私が凱乾だが貴殿は？」

趙雲「姓は趙、名を雲、字を子龍と申します。今日来た理由は凱乾殿に一手御指南願いたいと思ひ来た訳です。」

趙雲は一礼し自己紹介と自分が来た理由を話す。

…やっぱりこの手の来客だよな…。香様の名声の高さ故か、倒して自分の名を上げよう！って挑んでくる武芸者は今までに何十人居たことか…。そしてそのたびに相手させられるのは…

凱乾「よしわかった。顕、相手してやれ。」

大体俺に振られるんだよね…

趙雲「なっ、凱乾殿は私を愚弄するつもりか!？」

そりゃあ趙雲さんも怒るよ。

凱乾「大丈夫、大丈夫。そいつ私より強いから。」

趙雲「あんなに隙だらけですぐ倒せそうな男が凱乾殿より強いと？  
冗談はよして頂きたい。」

その言葉、俺が怒るよ？よし闘おう。今すぐ闘おう。って恋が袖を  
摘んで俺を呼ぶ…何よれ…

呂布「…頭、私にやらせて…」

そこにはどす黒い闘気を放ち趙雲を睨みつける呂布が居た。  
自分の兄弟子を馬鹿にされて頭に來たのだろうか？握り締めた槍が  
メキメキと音を立ててへし折れていく。

このままでは呂布が暴れると判断した紀霊は宥めるように呂布の頭  
を撫でて、諭す。

紀霊「…落ち着け恋。ここで恋が闘って勝っても趙雲殿の俺に対する評価は変わらない。寧ろ妹弟子に代わりに闘わせたって下がるかもしれないし、ここは俺が闘うから応援しててくれると嬉しいよ。」

呂布は闘気を収め、嬉しそうに撫でられる。だが時折趙雲に向ける視線は鋭く敵意が感じ取れる。

呂布「頭、恋に応援されると嬉しい?」

紀霊「うんうん、嬉しいよ。嬉しすぎて趙雲殿倒しちゃう位に頑張っちゃうかも。」

紀霊の言葉を受けた呂布は両手を握り締め、紀霊をやる気の籠もった表情で見る。

呂布「恋、頑張って応援する!」

その言葉を聞いて頭から手を離し槍を握む。

趙雲「私を倒す…か、寝言は寝てから言って貰おうか紀霊殿。」



紀霊「俺の寝言よりも相手の力量を計れないその目を医者に診て貰った方が良いと思うぞ。ほれ、医者なら屋敷出て少し歩けば直ぐの場所に居る。さっさと診察受けに帰れ。」

右手の親指を立て、屋敷の門方向に向ける紀霊。

紀霊の挑発に趙雲はあからさまに不機嫌だと顔を引きつらせる。

趙雲「面白い冗談だな紀霊殿。」

紀霊「なんだ、目だけで無く耳も悪いのか？若い身空で大変だねえ

…」

趙雲「……………」

紀霊「……………来いよ。」

無言で睨み合う中、紀霊の言葉を合図に二人の闘いが始まる。

【ザタイムオブレトビューションバトワンデッサイダステニー】

先に動いたのは趙雲、槍を片手に颯爽と紀霊の懐に入り込み喉に向かつて突きを繰り出す。

趙雲「貫った！」

だが、彼女の繰り出した突きは虚しく空を突く。

趙雲「なっ!？」

そこに居たはずの紀霊が一瞬にして消えたのだ、驚かない人間の方が少ないだろう。

紀霊「どこを見ている！」

上空から聞こえた紀霊の声に上を向くと趙雲に向かって蹴りを繰り出している紀霊の姿がそこにはあった。とっさに槍で防御する趙雲だが

趙雲「ぐうっ!？」

槍で防いだにも関わらず、攻撃の重さに後退を余儀なくされる。そしてバランスを崩した趙雲に、

紀霊「確かにあなたはそこの武芸者より強いと思うよ……」

更に追撃を繰り出す紀霊。

よく見れば頬に微かな切り傷、趙雲の最初の一撃を完全には避け切れていなかったのだ。

趙雲「ま、まだっまだ終われん！」

横方向に回転することで攻撃を回避した趙雲は反撃に転じる。

紀霊「だけどさ……」

趙雲の攻撃を簡単に受け流す紀霊は呂布をちらりと見る。

どこから持ってきたのか紀と書かれた旗を必死に振り回して応援している呂布、その姿に微苦笑しながら槍を振るう。

紀霊「あんなに応援されたんじゃ負けられないんだよね！」

突き出される槍を掴み、趙雲の手を自身の槍で叩く。

趙雲「つうつ！」

叩かれた痛みのため槍を手放してしまった趙雲の喉元に槍を突きつけ紀霊は高らかに宣言する。

紀霊「悪いが俺の勝ちだ。もう一試合するかい？その時は一撃入れるだけだがさ。」

自らの敗北を悟ったのか下を向きうなだれる趙雲、兄弟子の勝利が余程嬉しいのか旗を折れんばかりに振る呂布

そして

凱乾「なんでその実力をさっきは出せなかったんだか…そこまで！  
頭の勝利とする。」

呆れた表情で紀霊を眺め、闘いの終結を宣言した凱乾

紀霊はと言えば

紀霊「痛つう…無想流舞の鍛錬もつとしないと反動で死ぬなこりゃ

…」

反動に苦しみつつも趙雲の下に歩み寄る。

紀霊「さて趙雲殿、槍をお返しします。」

趙雲「……………」

無言で俯く趙雲にどこか怪我させたのか？と心配にもなり恐る恐る声を掛ける。

紀霊「……………あの～趙雲殿？」

なお無言の趙雲が何とか聞き取れる程度の声量で呟く

趙雲「……うした。」

紀霊「はい？」

ビクビクしつつ聞き返す紀霊だが、次の瞬間

趙雲「惚れ申したーっ!!」

趙雲はそう叫び、紀霊の手を両手で強く握る。

紀霊「何!?何ぞ!?!」

予想外の事態故に、驚きを隠せない紀霊を余所に趙雲はまくし立てるように話し始める。

趙雲「紀霊殿、いや主!先程の無礼お許し下さい!」

紀霊「へ?あ、はい。寧ろ俺の方が酷いこと言ってた気が…」

趙雲「いえ!私からすれば主の罵倒は至福故に御安心あれ!寧ろもつと下さい!」

紀霊「高らかに宣言する事じゃねえからそれ!!てかその呼び名とさっきの言葉は何なんだよ…」

頭を掻き面倒臭そうに言う紀霊に臣下の礼をとりつつ嬉しそうに言う。

趙雲「実は今まで私は負け知らずでして、各地を旅して高名な武人と手合わせ願ひ悉く打ち倒して来ました。お恥ずかしながら世の高名な武人はこの程度かと天狗になっておったのです…」

凱乾「ふむ、そう言えば高名な武人を次々と打ち負かす武芸者がいるってこの前聞いたな。んで天狗の鼻をへし折ったのが…」

趙雲、凱乾、呂布が一斉に紀霊を見やる。

紀霊「…俺？」

信じられないと言わんばかりの表情で自分を指差す紀霊

凱乾「この流れでお前以外誰が居るんだ？」

趙雲「その通り！その武力、纏めてその他諸々！その全てに惚れ申した！是非是非私を主の部下に！」

紀霊「だから近所迷惑だから叫ぶなっつーの！何だよその他諸々つて！？明らかに思い付かなかったから纏めました的じゃねえか！だ

あーっ恋待て！槍を趙雲殿に向かって投げんな！今日の夕食にお餅出してあげるから落ち着け！」

趙雲にツッコミを入れつつ呂布から放たれた槍を掴み趙雲を庇いながら事態の収束に努める紀霊

凱乾「まあ良かったじゃ無いか顕、お前もそろそろ世に出るって言ってたろ？仕官前から良い部下に入ってたじゃないか。」

紀霊「アンタは余計な事言っただけでた「顕………ヴァイ、ナンデシヨウカレンサン……」

凱乾に助成を頼もうとした紀霊を呂布のどす黒い闘気とトーンの下がった声が遮る。その闘気を受ける紀霊は後ろに居る呂布へと恐る恐る振り返ると

呂布「恋……顕が行くって聞いてない……。行っちゃって、本当？」

目の光を無くし、薄く笑った呂布が紀霊に向けてゆっくりと歩み寄る。

実は紀霊、十六になったため近々長安を出ようとしていた。凱乾には話をしていた紀霊だが、呂布に言つと呂布がゴネる可能性があったために言うのを先送りしていたのだ。



…完全に紀霊の判断ミスである。

紀霊「いや、その、近々出る予定では居ただけど……黙っててごめん。」

弁解は不可能で紀霊は事実を話して謝る他に術は無い。紀霊から事実を聞いた呂布は

呂布「駄目…駄目駄目駄目！恋嫌！頭は恋とずっと一緒！」

そう叫び目に大粒の涙を浮かべて紀霊に抱きつく呂布

その光景を見た凱乾と趙雲は

凱乾「あゝあ…泣かした。いけないんだいけないんだ、師匠に言つてやる」

趙雲「我が主は女泣かせか、いやはや我ながら大変な人物を主にしたものだ…」

と思いきいの感想を述べたそうなの。

紀霊「師匠はあんだたろーが！！つか趙雲殿は既に部下になった気  
でいるし！？いだだだだだっ！？恋っ！肋骨が！肋骨折れちゃう！  
」

呂布「折れちゃえば…頭は行っちゃわない。」

ミシミシ…ボキリ ゴキッ

紀霊「ばっ！ばわっ！！」

この日長安守備隊の業務日誌のタイトルは、

【長安の昼下がり、響き渡る紀霊君の断末魔】

だったそうなの。

紀霊「話すって大事だね…」（後書き）

虎威將軍の二つは趙雲が軍中で呼ばれた二つ名らしいです。五虎將軍と違い、割とマイナーなのかな？

御意見、御感想お待ちしています。

… 以前やった次回予告、復活させようかな？

そもそも後書きを読んで下さる人が何人いるのか…

明日か明後日には投稿出来るよう頑張ります。

そろそろ往こうか…（前書き）

これで連続投稿は終わりです。

最近原作の投げ捨て方が酷くなったような…（汗

そろそろ往こうか…

~~~~紀霊の部屋~~~~

紀霊「ふう…恋の奴少しは手加減しろよ…」

自分の部屋で荷物を整理する紀霊、その姿を見ればあちらこちらに包帯が巻かれている。

理由としては紀霊の出立を嫌がる呂布が度々襲撃を加えて妨害した結果であり、その度に紀霊は何回肋骨を折ったことか…

趙雲「自分の大切な兄弟子が居なくなるとなれば何としても食い止めた方がいいのが人情でござろう。妹弟子の可愛い我が儘に振り回される主を見ていて私は楽しいはずぞ。」

紀霊「我が儘だってわかるからこそ困ってるんだよ…肋骨完治に二日いるんだぞ？って待て…」

この部屋に居ないはずである趙雲の声が聞こえた方向を見ると

紀霊「星…、何故俺の部屋の天井に穴が空いていて何故お前の顔がそこから見える…」

上を見上げた紀霊の先には、丁度人一人通れるほどの丸い穴から顔を出す趙雲の姿

趙雲「いや何、主の部屋には罨が多くて侵入出来ませんでしたので私専用の侵入路を構築したまです。」

紀霊「アホだろお前！侵入しようとしなくて普通に突っ込んでこいっの！ てか降りてこい！」

怒鳴ったため肩で息をしながら睨みつける紀霊の下に素直に降りて跪く趙雲は目を細め嬉しそうな表情を浮かべる。

趙雲「うゝむ、やはり主の罵倒は心地良う御座います。ささ、至らぬ部下に仕置きを！さあ！」

紀霊「喧しいわ変態！取り敢えず空けた穴の修理して来いっ！！」

趙雲「承知！鼠一匹程も通さぬように致しましょう。」

趙雲は一礼して跳躍すると器用に天井の穴へと入り移動していった。

紀霊「まったく、何なんだよ彼奴は…」

趙雲と紀霊が一騎打ちをしてから一週間、その間趙雲は紀霊がどこに居ようが文字通り入浴中だろつと就寝中だろつと常に付きまとい紀霊を【主】と呼んでは罵倒され悦ぶ光景が毎日続いた。

最初の数日間は趙雲の部下志願を拒否し続けた紀霊だが、流石に根負けしたのか主従関係については凱乾の策略もあり真名交換をさせられ激流に身を任せてしまった。結果、先程のような趙雲の忠誠心から行われる奇行に苦勞しつつ出立の準備を行い今に至る。

因みに最後まで駄々をこねた呂布は紀霊の肋骨を犠牲に何とか説得が成功し、明日の出立がようやく決まったのだ。

紀霊「いよいよ明日か…」

ふと初めて長安に来たときを思い出す。

紀霊「来て次の日には香様に殺されかけたっけ…」

次に思い出すのは修行風景

紀霊「最初の一年間は香様に殺されかけて三途リバーに送られまくったな…」

次々と六年間の思い出が紀霊の脳内を駆け巡る。

紀霊「…よく死ななかったな俺…」

最後に六年間の思い出の中で一際目立つ四年間、姉弟子で婚約者でもある華雄との思い出を再度思い浮かべて目を閉じる。

紀霊「姉者、そろそろ俺も往くよ…」

目指すは洛陽、大將軍何進の下

紀霊が16歳になってすぐに何進から届いた竹簡を床下から取り出して荷物に入れた後呟く。

紀霊「待たせたなおっちゃん、約束果たしに往くぜ…」

粗方の荷物を纏め終えた紀霊は趙雲が穴を塞いだのを確認した後、夕食を四人で囲む。

華雄の時紀霊が作ったような豪華さは無いが、呂布の指に絆創膏を巻かれている姿を見た紀霊にとって何にも勝る御馳走であったのは言うまでもない。


~~~~紀霊の部屋~~~~

紀霊「星、俺は今機嫌が悪い…何故か分かるか？」

紀霊の部屋、入浴を終えた紀霊は機嫌が悪そうに寝具に座って趙雲を睨む。

趙雲は趙雲で床に正座させられ紀霊を見つめ話を聞き入る。

趙雲「ふむ、主の機嫌が悪いのは…」

紀霊「悪いのは？」

趙雲「今宵の夕食にメンマが出なかった事ですな！水臭いですぞ主、言っただけで下さればこの趙子龍が秘蔵のメンマを献上したと言うのに！」

紀霊「違うわ！俺の入浴中に乱入して来た事だ！！何が「お背中流し致します。」だ！騒ぎ聞きつけた恋に奥歯砕かれた挙げ句に三途の川送りにされたじゃねえか！！」

よく見れば紀霊の体のあちこちには黒く内出血した部分が見え隠れしている。

趙雲「いや、流石は主の妹弟子、鬼神の如き強さですな！」

紀霊「確かに強いのは認めるが俺が求めてる答えそこにねえから！  
明らかに見るとこ間違っつてんじゃねえか！！主人に危害加える忠誠  
心の高い部下なんぞ聞いたことねえよ！！」

【姉者の起こし方】の時、紀霊は何進のおっちゃんに様式美をぶち込んでいます。

趙雲「むむむ！言われてみれば主の言うとおりで…至らぬ部下で申し訳御座らん。仕置きを要望する！」

紀霊「何がむむむ！だ！明日出立なんだからこれ以上問題起こさないでくれよ…とにかく今日は休んで明日の朝出るからな！後、仕置きはしないから…！」

趙雲「承知。うゝむ、主の困り顔なかなかの物で…白米三杯はいけませんぞ。」

紀霊「お前もう帰れ…！」

趙雲を部屋から追い出した後、紀霊は倒れ込むように横になる。

紀霊「疲れた…」

そのまま眠りに就こうかとしたとき扉の向こうから声が聞こえる声に体を起こす。

呂布「頭、まだ起きてる？」

紀霊「恋か？入って良いぞ」

紀霊の言葉を受けて入って来た呂布だが扉の前から一向に動こうとせず口を開く。

呂布「この一週間の事、謝ろうと思って…本当にごめんなさい。」

どうやら呂布は自分の我が儘で紀霊に怪我を負わせてしまったことを後悔しているのか、謝りに来たようだ。

紀霊「ん、良いよ。言ってなかった俺が悪いんだし気にすんな。」

紀霊は気にしていないようで手をヒラヒラ振りながら答えるが

呂布「ううん、気にする。何時も顕、恋に一杯優しくしてくれる…」

俯きながら呟く呂布は更に言葉を続ける。

呂布「でも、もう大丈夫。恋、顕に怪我させない。」

紀霊「あゝそりゃ俺の体に優しくして助かるわ…一時期恋に嫌われてるかと思ったよ…」

呂布「別に…顕の事嫌いになった訳じゃない。どっちかって言うと…／＼／」

微かに頬を赤らめて小声で呟く呂布の言葉を紀霊は最後まで聞き取れなかったため聞き返す。

紀霊「あゝすまん、最後の方聞き取れなかったからもう一回頼む。」

すると呂布は首を横に振り言う。

呂布「…何でもない。それよりも今日の夕御飯どうだった？恋頑張った。」

呂布の言葉に今日の夕食を思い出す。まだまだ向上の余地は十分にあるが普通に食べれる腕であり何より…気持ちも籠もっていて兄弟子として非常に嬉しかった。

紀霊「美味しかったよ。恋もこれから料理作る回数増えると思うし、このまま行けば良いお嫁さんになると思うよ。」

【まあ、恋を嫁にする奴は取り敢えず一回マダンテ喰らわすがな。】  
と思いつながら紀霊は本心からの言葉を口に出す。

呂布も褒められて嬉しいのか

呂布「嬉しい／＼／」

と顔を赤くして笑顔を浮かべ寝転がる紀霊へと近寄る。

紀霊「もし恋の料理を不味いと言った奴が居たら俺に知らせな、そいつに刹活孔ぶち込んでやるから。」

そう言って呂布の頭を撫でる。

髪をクシャクシャと撫でる子供に対する撫で方、しかし呂布は嬉しそうな顔を浮かべ紀霊に抱き付く。

紀霊「おととと…恋？」

呂布「今日、頭と寝る。」

戸惑う紀霊を余所に布団に潜り込む呂布は再度紀霊に抱き付いて目を閉じる。

紀霊「やれやれ…。おやすみ、恋。」

妹弟子が最後に見せた可愛い我が儘、兄弟子としては答えぬ訳にはいかない。と割り切った紀霊はもう一度呂布の頭を撫でて自身も眠りに就く。

~~~~~紀霊の部屋（夜中）~~~~~

呂布「ん…」

目を擦り隣を見る呂布。

隣には自分の兄弟子が微かに聞こえる寝息を立てている。

呂布「顕…」

紀霊の頬を指で数回つついて寝ていることを確認すると呂布は紀霊の顔をずいっと近寄ると首筋に口付けをそつとする。

呂布「恋ずつと一緒…。ね、【お兄ちゃん】」

そう呟いた呂布は紀霊に口付けを交わした後、密着するよう抱き付いて眠りに就いた。

~~~~~ 凱邸玄関（早朝）~~~~~

人がまだ起きない程に早い朝、微かに朝焼けが長安を照らす中で紀

霊と凱乾、自身の馬を引く趙雲、凱乾に寄りかかり半分寝ている呂布が立っていた。

紀霊「さて、往くか…。星、準備は出来てるか？」

趙雲「何時でも行けますぞ。」

凱乾「ま、城門までは見送りするから安心しろ。ほら恋、歩くぞ〜」

凱乾は歩かせるために呂布の肩を揺すり起こす。

呂布「ん…」

目を擦り、ふらふらと城門に向けて歩き出す呂布。それに続くように三人は市場通りへと歩き出す。

少し歩くと、市場に入る角へと差し掛かる。角を曲がれば城門までは真っ直ぐ歩くだけ。四人が角を曲がった瞬間

住民達「紀霊君出立おめでとー!!」



兵士「ヒヤッハー！元気でやらねえと承知しないぜー！！」

城門まで通りの両脇に並んだ大勢の人

紀霊「っ…こんな朝早くに大の大人が大勢集まって…」

紀霊は完全に予想していなかった。

まさか自分の見送りに来る人がこんなにも大勢居る。予想していなかったからか

目頭が熱くなり少し視界が歪みながらも通りを歩く。

紀霊「本当っにここの住民達は明るくて…直ぐ俺の事、賭の対象にして…兵士は兵士で俺の事追いかけて回してさ、こんな早くに集まって俺なんかの見送りしてくれて…馬鹿だろ本当…」

凱乾「ふむ、確かに馬鹿ばかりだな。だが…こんな馬鹿達、お前は嫌いか？」

凱乾の言葉に歩みを止めた紀霊は、大きく息を吸い込み叫ぶ。

紀霊「大っ好きだよ馬鹿やろう！！」

長安に木霊するほどの音量で叫んだ紀霊の言葉を聞いた馬鹿達はどうと歓声を上げる。

趙雲「主、目が兎のようだぞ?」

紀霊「うるせえ…これはアレだ…砂埃にやられて充血してんだ。」

そう言う紀霊だが、今朝の長安は無風であり砂が舞うには程遠い。

趙雲「ほうほう、主がそう言うならそう言うことにしておこう。」

それを分かった上でニヤニヤ顔で追従する趙雲

紀霊「そのニヤニヤ顔を止める。縛って馬で引きずんぞ!」

趙雲「馬で引きずられるのは勘弁願いたいが、主に縛られるのは大歓迎ですぞ。」

紀霊「……もう良い。」

これ以上問答しても不利になるだけと判断した紀霊は会話を断ち切り城門へと向かう。

紀霊が皆の見送りを受けつつ城門に到着すると

大守「紀霊君、とうとう君も世に出るのだね…」

紀霊「大守様：今まで色々とお世話になりました。」

待っていた大守に今までの感謝を述べて長安を見る紀霊に凱乾が話しかけてくる

凱乾「さて頭、私から最後の餞別だ。」

商人「紀霊君、これをどうぞ。」

二年前、華雄に【金剛大斧】を持ってきた商人が布にくるまれた武器を紀霊に、艶やかな黒毛の馬は手綱を趙雲が代わりに受け取る。

紀霊「…開けます！」

バサアツ！！

力強く布を剥ぎ取ると、

柄は紫色一色

刃は白く、穂先は三つ

正史及び演義で【紀霊】が愛用したと言われる

### 【三尖刀】

凱乾「その武器は数年前に流れの刀匠が商人に宿代代わりに渡したらしく、刃が三つの珍しい武器でな、刀匠の名は【東風】とんぼう、武器の名を【三華尖】さんかせんと言う。今まで扱える奴が居なかったらしいが…お前なら使いこなせるだろう。」

商人「馬の方は名を【夜雲】、闇夜に流れる雲のように速いからその名が付けられた駿馬さ。」

凱乾の言葉を聞いた紀霊は目を閉じ槍を一振り。

ヒュッ！

紀霊から数歩の位置に居る趙雲にすら微かにしか聞こえない風切り音

次に紀霊は静かに目を開けると【夜雲】近づく。

紀霊は夜雲と目を合わせ見つめ合う。

見つめ合う事十数秒、夜雲が紀霊に向けて頭を垂れ、紀霊はそつと夜雲の頭と首を撫でる。

紀霊「香様：夜雲と三華尖、確かに頂戴しました！」

凱乾に向けて紀霊は一礼した後、颯爽と夜雲に騎乗する。右手で手綱を握り締め、左手には朝日を受けて紅く輝く三華尖。

その姿に長安へと来た当初の幼さは無い。

凱乾「なかなか良い武者っぷりじゃないか、偶には連絡入れてくれよ？」

呂布「頭格好良い／＼」

紀靈「まあ暫くは無理ですが落ち着いたら手紙でも出しますよ。恋、元気でやれよ？」

紀靈の言葉に力強く首を縦に振る呂布を見た後、再度見送りに来てくれた皆を見て大きく息を吸い込む。

紀靈「それじゃあ…行つてきます!!」

皆「行つてらっしゃい!!」

紀靈は馬首を翻し

紀靈「星、往くぞ!遅れんなよ?」

そう叫ぶと荒野に向けて走り出す。

趙雲「御安心あれ我が主、この趙子龍どこまでも主に付いていきましょうぞ!」

趙雲も紀霊を追うように馬を走らす。

長安を出て馬を走らす紀霊の行く末を知るは…大地を煌々と照らす  
太陽か？それともどこまでも続く青空か？

答えは誰にも解らない。

ただ一つだけ解ることがある。

この時より紀霊は乱世に立つ数多の一人、乱世は戦乱と言つ渦に変わ  
り紀霊を巻き込んでいくのだろう。

そろそろ往こうか…（後書き）

ヒッハー！！

連続投稿もこれで終わりだぜい！

いや〜筆が進む進むw

次回からは更新間隔戻ります。

そして、紀霊の武器名を下さった人達と投票して下さった人達、この作品を読んで下さっている読者の皆様に感謝です！！



前進しない者に明日は無い【前編】（前書き）

友人「そっぴゃ小説のダグってさ」

柳「ん？」

友人「アレって読者が編集出来ねえのか？」

柳「出来ねえな確か…編集出来たら面白いんだがな。」

友人「募集してみたらどうよ？」

柳「…その発想は無かった…あ、それロン。タンヤオピンフドラ」

友人「清一色が…てか親流された…」

「そんな作者と友人の麻雀格闘倶楽部」

と言っわけでダグ募集します（笑）

前進しない者に明日は無い【前編】

荒野を馬で歩く二つの影

二人とも背中に槍を背負い、男は黒馬、女は白馬に乗り洛陽を目指し旅の途中であることが解る。

男の名は紀霊、洛陽に居る大將軍の何進下を目指し馬に揺られる。  
女の名は趙雲、自ら望んで紀霊の部下となり主に付き従い洛陽を目指す。

長安を出て二週間、二人は立ち寄った村に賊が居れば討伐し、居なければ働いて路銀を稼ぎつつ旅を続けていた。

紀霊「なあ星、最近山賊討伐の頻度増えてないか？」

趙雲「言われてみれば…私が依然旅していたときでも四つの村で一つでしたが…」

紀霊「今まで立ち寄った村の数は二十八、その内山賊討伐の依頼があったのは十八…ここは世紀末か何かか？」

疲れたとあからさまに表情に出す紀霊だが

趙雲「現在山賊討伐十連続で、今二十九番目の村を発見した訳ですが、如何しますかな？」

紀霊と趙雲の視線の先には中規模程度の村があった。

紀霊「路銀は一応余裕あるしいい加減記録更新は勘弁願いたいな…  
取り敢えず行ってみるか。」

頷いた趙雲と紀霊は馬を走らせて村へと向かう。

二人を出迎えたのは…

村人「これはこれは旅のお方、ようこそ儂等の村へ。」

村人「あゝら、いらっしやい！何も無い村だけどゆっくりしていいよ！」

村に入るなり笑顔を浮かべた村人の歓迎を受ける二人、取り敢えず村長の家を教えてもらい馬を進める紀霊と趙雲はこの村の違和感に気がつく。

趙雲「主…」

紀霊「分かってる、どうやら厄介な事になるなこりゃ…」

二人が感じた違和感

それは村人が住んでいる家や馬屋などが焼け焦げている所が多数あり村の地面には蹄の跡が多数残っていた。

状況から見るに

【山賊に襲われた】

しかもごく最近にだ。

それだけならば二人はほかの村でも見たことはある。

それだけならば二人はここまで違和感を感じはしない。

もっと異常なのは

【会う村人全員が全員、笑顔しか浮かべていない。】

山賊にごく最近襲われた。当然被害が有るのだから笑顔でいれる村人は殆ど居るわけが無い。

だからこそ二人はこの村の違和感に不安を覚えながらも村長の家へと歩を進めた。

~~~~~村長の家~~~~~

村長「ようこそ旅のお方、私がこの村の村長です。」

目の前には村長と名乗る初老の男性、この男性もやはり笑顔で二人を歓迎する。

紀霊「歓迎、心から感謝します。私の名は紀霊、隣は旅仲間の趙雲と言います。」

村長との挨拶後、多少の談笑を交わしつつ紀霊は違和感について切り出す。

紀霊「ところで村長、来る途中に山賊に襲われた後が有りましたが……」

村長はその言葉を聞いて笑顔の度合いを更に増す。

村長「ああ、あれですか……心配要りません。私が考えた妙策でこの村で殺された者はありませんから。」

趙雲「妙策……とな？」

死人が出ていない妙策に趙雲は興味津々で聞き返す。その妙策を村長が言おうとした瞬間

村人「村長、山賊が来ました……」

村人らしき男が村長の家に山賊の襲来を伝える。

村長「丁度良いですな、窓から隠れて見ていて下さい。決して外へは出ませんようお願いします。」

そう言くと村長は村人と共に外に出て行く。

紀霊「新記録更新…か、取り敢えず賊の規模確認するぞ。」

趙雲も頷き、二人は窓から外を覗き見る。

賊「ヒヤッハー！」

賊の頭「おい村長！出せるだけの食料と金目の物持ってこい！！！」

賊の数は三十騎程度、それぞれが馬に乗り剣を振るって好き勝手に壺などを壊しまわる。

紀霊「……………」

趙雲「なっ…何故…！」

趙雲が驚愕するのも無理はない。

賊の蛮行に対して村人は

【村長以下全員が笑顔で賊の行為を見つめている】

そして村人が運んできた食料と金品を各々が持ち帰ろうとした賊の一人が叫ぶ

賊「頭あ！高そつな馬が二匹居ますぜ！」

趙雲「私の白雲と主の夜雲!?!」

嫌がる夜雲達を無理矢理引いている賊の姿に立ち上がるうとする趙雲

だが、趙雲の腕を押さえて紀霊は無言で制止する。

賊の頭「ああん？おつ、良い物見つけたじゃねえか！連れて帰って売っ払えば暫く遊べるぜえ〜よし帰るぞ！」

賊達「ヒヤッハー！」

砂埃を立て、村から強奪した物と夜雲達を連れて引き上げる賊達、その姿を笑顔で見送る村人達

紀霊は賊が居なくなったのを確認すると無言で外に出て村長に近づく。

紀霊「……………これがアンタが言った妙策か？」

村長「おお紀霊殿、その通りです。抵抗すればそれ相応の被害があります。ならば抵抗せずに歓迎して食料を渡してしまえば良いわけで「賊に抵抗しようと言う奴はいねえのか？」…へ？」

趙雲「主…」

紀霊が怒っている。

趙雲はその事に感づき焦る。自身が何かしたときに怒るような起り方では無く初めて見る本気の怒り、無表情な紀霊の顔が趙雲の焦りを更に加速させた。

紀霊「この村で…賊に抵抗しようとした奴は居ないのか？」

村長「あ、ああ…一人おりました。両親を賊に殺されたためか最後まで妙策に従おうとしなかったので…賊に差し出しました。」

紀霊「…確かに妙策だろうよ…反吐が出るくらいに愚かな妙策だ。」

村長「は？何をいアガアツ！？」

紀霊の怒りを理解出来ない村長は聞き返そうとした瞬間、紀霊に殴られる。

紀霊は次に、村長を殴られても笑顔を崩さない村人に近寄る。

睨みつける紀霊に対して睨みつけるられる村人はそれでも作り笑顔を崩さない。

紀霊は村人の中から一人の男の子を掴み持ち上げる。

男の子「ひっ」

小さく悲鳴を上げるものの笑顔を崩さない男の子に紀霊は話し掛ける。

紀霊「…怖いか？」

男の子「……………コクコク」

紀霊の気迫に恐怖で声が出ないのか頷く男の子

紀霊「なら何故笑い続けられる？答える…」

趙雲「主お止め」黙っている星「……………承知。」

紀霊の行為を止めようとした趙雲だが紀霊の言葉に押し黙る。

紀霊「もう一度聞く、何故笑い続けられる？」

男の子を掴む腕に力を入れて更に高く上げる紀霊

男の子は涙目になりつつも壊れた笑顔で答え始める。

男の子「そ、村長が笑顔で抵抗しないでいけば…へ、平和に暮らしていけるって…」

紀霊「君はこの村が平和だと思うか？悔しく思わんのか？俺から見れば略奪されて、人が殺されても笑顔を作って生活する平和なんざ平和と何か認めねえ…俺は認めねえぞ！！」

紀霊の叫びに返すよう、男の子は笑顔を崩して叫ぶ！

男の子「悔しいよ！！こんな生活なんて嫌だよ！！けど…何も出来ないんだ…よ…」

ボロボロと涙を流し叫ぶ男の子、その顔には笑顔は無く顔をクシャクシャにしながら泣いている。

紀霊の頬に男の子の涙がボトボト落ちてくる。まるで今まで押し込んでいた感情全てを出しているような大量の涙。

紀霊「出来るさ」

男の子の慟哭、それを聞いた紀霊は先程とは違う優しい声で呟くと男の子をゆっくり降ろす。

紀霊「今君は出来たんだよ…」

男の子「？」

優しく微笑み男の子の頭を撫でる。男の子は何がなんだか分からないといった表情できよとんとする。

紀霊「君は今笑顔を作ること止めれた、自分の思いを出すことが出来た。何も出来ない？違うね、君は何もしなかっただけなんだよ。悪かったな怖い思いさせちまってさ…」

男の子に喋り終えた紀霊は村人を一瞥して叫ぶ

紀霊「こんな小さな子供が出来た事を大の大人が何故出来ない！！あんた達も心の奥では思っているんじゃないか？こんな生活嫌だつてよ…」

戸惑う村人達に紀霊は言葉を続ける。

紀霊「俺達はこれからさっきの賊を徹底的に潰す…この村をどこうるかにはあんた達次第だ。」

紀霊はそう言って賊が帰っていった方向に振り返る。

紀霊「星、直ぐ出るから支度しろ。」

趙雲「既に出来ております。」

紀霊の命令を予期していたのか用意を終えた趙雲が歩み寄る。

紀霊は頷き村を歩き出すが、ふと止まり後ろに立ち竦む村人に話し掛ける。

紀霊「最後に一つ…前に進まない者に明日は無い。何もしないで…ただ生きるだけのあんた達はもう、死んでいる。」

紀霊はそう言つと再び歩を進め村を出る。

~~~~~荒野~~~~~

蹄の後を追いかけて歩く紀霊に、ふと趙雲が話し掛ける。

趙雲「変わりますかな？」

あの村の事だろう、紀霊は懐からタバコを取り出して着火、一吸いした後返答する。

紀霊「変わるさ、村人達の目…死んだ魚みたいだった但至少づつ生気が戻ってきている感じがしたからな。」

趙雲「流石は主。と言ったところですか？」

尚もタバコを吸いながら歩く紀霊は灰を落とす。

紀霊「遅かれ早かれ変わってたさ…俺はきつかけを作ったに過ぎん。それより星、今回は徹底的に殺るが良いか？」

趙雲「余り気は進みませんが、今回ばかりは事情が事情故仕方ないかと…」

その言葉を受けタバコをもみ消す。

紀霊「苦労かけて悪いな。」

趙雲「私としては、主らしくもない殊勝な言葉より何時もの罵倒が欲しいところすな。」

紀霊「お前本っ当に歪みねえな…」

~~~~~賊の本拠地（夜）~~~~~

城壁に槍を持った賊が二人、松明を持ちながら歩く。

モヒカン1「あゝ、見張りなんざやってらんねえ」

モヒカン2「だがよう、やってねえとお頭に雷落とされるぜ……」

モヒカン1「んなこと言ってもよゝあ、そついや今日の戦利品に良い馬が有ったらしいな？」

恐らく紀霊の夜雲と趙雲の白雲だろう。

モヒカン2「おうよ、ありゃあ相当高値で売れるだろうなあ。」

紀霊「ほう、その馬はどこに繋いであるんだ？」

モヒカン2「確かお頭の馬屋に二匹とも……誰だつてめ」

相方とは違つ声に叫ぼうとしたモヒカンだが、その言葉を最後まで言うことは無かつた。

紀霊の三華尖により首と胴体が別離してしまつたからだ。

もう一人のモヒカンも言葉を発する前に趙雲の槍により物言わぬ死体と化している。

紀霊「今の俺は機嫌が悪い、泣こうが喚こうが許しはしねえ……」

紀霊はモヒカンの槍を手に取ると、遠くに居るもう一組の見張り目掛けて二度投擲

放たれた槍はモヒカンの的確に心臓を的確に貫いて相手の息を絶つ。

紀霊「星、賊は殺せ。女子供はこっちに危害加えない限りは助け出せ。」

眼下に広がる賊達の宴、今日村から奪つた品物で一杯やっているのだろうか？

趙雲「承知、こちらには気付いていないよつで……主は如何致しますか？」

紀霊「俺も星と似たような行動だが…ちよいと真正面から暴れに行く、俺が暴れ始めたら星は隠れつつ行動してくれ。」

趙雲「囹ですか…主自ら囹にならんでも…」

紀霊「あゝ無理無理、今の俺に隠密行動出来るほどの冷静さはねえよ。それにお前に危ない真似させる気にはならねえんだよ…」

タバコを口にくわえ下品な笑い声を上げる賊達を見下しながら言い放つ紀霊

趙雲「言いたい事は多々ありますが、部下を守って自ら戦闘に立つのは主としてはどうなのでしょう？」

紀霊「俺は別に総大将とか君主になる気はねえよ、二番手や三番手で好き勝手やってるほうが性に合う。っといい加減にお喋りは止めて…ちよいと暴れてくるわ、後は頼む。」

それだけ言うとタバコをくわえたまま城壁を飛び降りて賊達目掛けて歩き出した紀霊の背中を見つめながら趙雲は呟く。

趙雲「さて、私も主の命を果たすのでしょうか。」

槍を握りしめゆっくりと歩き出した趙雲は闇の中へと溶けていった。

~~~~~宴の場~~~~~

モヒカン1「ヒヤツハー酒だーっ！」

焚き火を囲み、好き勝手に飲んだくれる賊達

モヒカン2「今日は大獵だったなあ〜暫くしたらまた襲いに行こうや。」

モヒカン3「おっ良いねえ〜久しぶりに女の心臓を的にして弓矢で競うか？」

モヒカン1「おうよ、この前は負けたが今度は俺様が貰うぜえ！」

モヒカン2「やめとけやめとけ、てめえの下っ手糞な腕じゃあ何人的にしても足らねえよ。」

モヒカン1「ああん？下手くそかどうか今見せてやるうじゃねえか！」

モヒカン2の言い方にカチンと来たのか立ち上がり建物の中に入っていくモヒカン1、暫くして出てきたモヒカン1の手には首輪と鎖に繋がれた一人の少女が無理矢理引きずられてくる。

少女「……………」

モヒカン2「お、おい、そいつは確かお頭のお気に入りじゃあ…」

どうやら少女は賊達の頭から気に入られているらしかったが

モヒカン3「良いんじゃねえか？この前お頭に怪我させた挙げ句に脱走しようとしたんだしよ〜」

そのために鎖で繋がれたまま監禁されていたようで、散々痛めつけられたのか体のあちこちに殴られた後や赤く腫れた痣が見える。しかし、今にもモヒカン達に飛びかからんばかりの目が未だに心が折れていない証拠であろう。

モヒカン1「あ〜ん？なんだその目はあ！〜！」

鎖を強引に引かれて地面に倒れ込む少女、それでもモヒカン達を睨みつけるその眼光は濁ることはない。

モヒカン1「はっ、死にてえみてえだから丁度良い！」

モヒカンは睨みつける少女を柱にくくりつけて動けないように縛った後、少し離れて弓を引き絞る。

モヒカン3「ヒヤハハハハ！一発で殺せるに明日の朝飯賭けるぜえ」

モヒカン2「無理無理、俺は当たらないに賭けてやんよ！」

モヒカン1の行動が余程おかしいのか下品な笑い声を上げるモヒカン2と3、周囲のモヒカン達も大笑いしながら事を見ている。

モヒカン1「けっ、心臓に当ててやんよー!!」

ヒュッ

モヒカンが放った弓は少女に当たらず

モヒカン3「ぐえっ!?!」

モヒカン3の胸に突き刺さる。

モヒカン2「てめえっ!仲間は何しやがるっ!」

モヒカン1「お、俺はあのガキ狙ったんだ!」

真後ろにいるはずの仲間に当たったことに驚きを隠せず騒ぎ出すモヒカン達、不意に的となった少女の方から声が聞こえて皆が一斉に声の方を見る。

紀霊「ほお、ちゃんと心臓に当てたじゃねえか…おめでとつ。」

そこには槍を握りしめた若者が立っており、モヒカン達を見下した目で見つめていた。

モヒカン1「だっ誰だてめえは!」

モヒカン1の言葉を合図にそれぞれが武器を取り紀霊に対峙する。

紀霊「俺の名なんざあの世で閻魔に聞け…。」

言つや否や槍を振るって暴れ始める紀霊はモヒカンの頭を跳ね飛ばし、胸を貫いて瞬く間にモヒカン達五人の命を奪う。

その勢いに残ったモヒカンは焦りを隠せず大声で叫ぶ。

モヒカン達「て、敵襲！敵襲！！」

その言葉に続々と紀霊の周りに武器を持ったモヒカンが駆けつける。その数は百人程に膨れ上がり遠くでは銅鑼の音が聞こえる事からまだまだ数は増えるだろう。

数の優位に先程の焦りを忘れ下品な笑いを浮かべるモヒカン達、だが紀霊はモヒカン達を無視して少女の拘束を解いて優しく抱き締める。

紀霊「…取り敢えず動けるか？」

少女「…はい」

先程の恐怖から体が震わしながらも何とか答える少女。

紀霊「助けるの遅くなって悪かったな…もう大丈夫だ、俺が守ってやるから安心しとけ。」

少女「あ…／＼／」

優しく落ち着かせるように少女の頭を撫でつつそっと抱き締める。

紀霊「少しの間、モヒカン達成敗すっからさ、周りに注意しながら隠れてくれ。」

切りかかってきたモヒカンの肩を切り裂きながら少女に優しく諭す紀霊、少女も頷き落ちている剣を拾い上げて構える。

紀霊「…闘えるの?」

少女は数日間まともな食事をしていないであろう、だが闘志の籠もった目が少女の意志を現していた。

少女「闘います。一緒に戦わせて下さい!」

次々と襲いくるモヒカンを一刀のもと斬り伏せる紀霊は溜め息一つ



紀霊「やれやれ、無茶はしないでくれよ？」

少女「はい！」

少女は切りかかってきたモヒカンの剣を自分の剣の腹を使い走らす。滑るように軌道をずらされたモヒカンの腹にそのまま斬りつけ、モヒカンは物言わぬ屍と化した。

紀霊「へえ……」

相手の攻撃を受け止める。では無く受け流す。剣初心者なら受け止めるだけでも精一杯だが…この様子ならもう少し戦闘に集中しても大丈夫だな。

紀霊はそう思うとモヒカン達を見やる。既に二十人は倒したが先程よりも人数が増えている。

紀霊「ゴキブリの類かこいつらは…っと、アレやりますかな…」

槍を握り直すと紀霊は跳躍、モヒカン達に向かい槍で無数の突きの雨を降らす。

その槍は偽りの北斗神拳を

千の槍を

主の言葉により放つ

紀霊「北斗…千手殺…！」

次回に続く。

前進しない者に明日は無い【前編】（後書き）

いや〜思うように筆が進まん（汗

3連続投稿の反動が来たか？w

前書きの通りこの作品のダグを皆さんから募集したいと思います。

条件

・ダグは十文字以内でお願いします。

御意見、御感想お待ちしております。

柳の独り言（前書き）

ちよっとした柳の独り言ですw

## 柳の独り言

この話は作品の設定とか補足を話していく【柳の独り言】です。

そんなもの興味無いぜ！って方は戻る事をお勧めします。

それでは柳の独り言、ハージマールヨー

1：作品名について

投稿の際、作品名どうしようか悩んでいたのですが…

取り敢えずAC北斗練習しようと思っただけじゃなかった時に…

ジョインジョインジョインジャギイ

キャラクター選択音

柳「ティーン！ときた！」

…その結果、このようなタイトルになりました。

2：何故紀霊を起用したのか？

最初は高順で執筆していたのですが…他の作者さんが高順で恋姫投稿していた為に紀霊になりました。

因みに主人公最終候補は孟達、劉封、公孫越、そして紀霊でした。

因みに

劉封の場合は劉備が姉で天然な姉を助けて徐々に成長していく王道的な展開

孟達の場合は黄忠が姉（血縁、義理等では無し。）で割と暗め？

公孫越の場合は公孫讚が姉で普通の姉と優秀（異常）な弟のちよつと普通じゃない姉弟関係

こんな感じに書く予定でした。…何この姉づくし？

んで姉の友人も姉に近い形で描いて姉〃ヒロインをとりましたが、やはり華雄が好きだったため紀霊を採用。

武將的にも紀霊が一番好きだったのも理由の一つ。

高順で描こうとした理由は董卓軍と絡ませ安かったという安直な考えです（笑

3：北斗又は南斗の技を使うのか？

勿論使います（笑）

既に兵Aが南斗投石拳の伝承者として作中で暴れているのは皆さんご存知の通りです。

紀霊は秘孔を突けませんので今の所似非北斗神拳を使います。南斗聖拳は秘孔とかあんまり関係無いから出しやすいんですよね（笑）

因みに秘孔は突けるようになります。

4：ほかの作品は書かないのか？

実を言えば東方で幻想入りの作品を以前書いていました。まあ投稿していませんが（笑）

ストーリーとしては

ピリヤード帰りに主人公とその友人が幻想入りし、財政難に陥った紅魔館を立て直す。ルーンファクトリー（牧場物語の姉妹作）をベースに展開されるほのぼの系執事ストーリー（グサリも有るよ！）でした。

この作品は姉属性付与展開は無い…と信じたい（笑）

因みに読者様から質問等を頂ければ可能な範囲内でお答えします。  
と言つより質問をガンガン下さい（笑

それでは今回はここで失礼致します。



オマケ【紅白従姉弟の普通(?)な乱世】(前書き)

読者様から見たいとのリクエストがあつた公孫?【従姉】、公孫越【従弟】をオマケとして投稿します。

完全に本編には関係ない展開ですので見たくないって人は【戻る】を押してください。

オマケ【紅白従姉弟の普通(?)な乱世】

公孫越「あゝ…今朝も早よから政治の仕事…つまらん。」

とある執務室、やる気なさげに呟く少年が書簡に目を通している。  
少年の名前は公孫越、字を烈徳、真名を紅蓮と言い自分の従姉が治める幽州で  
姉の配下として日々を過ごす少年である。

俺は今朝届いたばかりの報告書や街の問題点などを記した報告書を  
眺めつつ改善点等を書き連ねていると…

ドダダダダダダダダッ！！バゴォーン！！！！

公孫越？「こーうれえええーんっ！！」

廊下から何やらエライ勢いで近づいてくる足音が来てたかと思えば  
扉がぶち破られる。

公孫越は溜息を吐きながら扉をぶち破った人物を見やると

普通な感じの髪型で

平均的な大きさな胸で

どうみても百人が百人【普通】と評価するであろうオーラを纏う

公孫越「まったく人が仕事している時だつてのに…出来れば普通に  
入ってきて欲しいんだがな姉貴。」

俺の従姉である公孫？が肩で息をしつつ俺を睨んでいた。

~~~~~  
【紅白従姉弟の普通（？）な乱世】~~~~~

公孫？、幽州の太守で俺の主で従姉。一応俺の主君で幽州の民なら
【普通の人】と聞かれたら姉貴を即答するほどの有名人だ

特に苦手な事も無く太守を普通にこなせる實力を持っているんだが、
昔から貧乏くじ引きまくりな苦勞人でとにかく普通。

けど、普通な姉貴が普通じゃない登場の仕方をしたのは何か訳があ
るはずだ…

公孫越「んで姉貴、普通な姉貴が普通じゃない驚き方してるんだか
ら何かあつたんだろ？話してみてよ。」

公孫？「普通普通って連呼するなっ！って紅蓮！わ、私の下着を盗んだろ！？返せ！！」

下着？俺が盗んだ？

公孫越「いや、姉貴の下着って普通な感じの白色無地じゃん。てか俺ならタンスごと盗むけど？」

公孫？「いや、盗まれたのはこの前勇気だして買った黒の紐…って何言わすんだ馬鹿！／＼／」

姉貴が自爆した恥ずかしさの余り暴れ始め、机の上にあった書簡やら何やらが盛大にばら撒かれ…床に散らばってしまっ。あ

あ、仕事が増えた…

公孫越「…ふむふむ、黒のひ「わーわーわーわー！」別に恥ずかしがる事もないんでねえの？」

公孫？「馬鹿っ／＼／ 恥ずかしいに決まってるだろうが！！」

顔を茹蛸みたいに真赤にした姉貴が床に落ちている筆やら書簡やらを俺に投げってくる。…うん、やっぱり姉貴を弄るのは楽し

いな。

うーん、姉貴の下着ねえ…確か…

俺は、投げつけられる物を弾き落としたり回避したりしながら昨日の記憶を追いかけて一つの答えにたどり着いた。

公孫越「つつとつとつと、多分その下着なら昨日姉貴が着けてそのままだぞ？」

公孫？「……………はあ？」

辺りに投げるものがなくなったのか、俺の剣を投げつけようとしていた姉貴は俺の言葉に一時停止

公孫越「嘘だと思っなら確かめてみて？俺は部屋出とくから。」

それだけ言って、硬直したままの姉貴の横をすり抜けて部屋を出ると辺りを見回して即座に廊下を走る。

そう、俺が思い出した答え…

昨日姉貴と飲んでた時、酔いつぶれた姉貴ほったらかして紐の下着を発見した。

酒の勢いもあったのだろう、俺は面白半分で姉貴の下着を剥ぎ取って酔いつぶれた姉貴の下着を摩り替えた。

俺が走り出した数秒後、俺の名前を怒り気味に叫ぶ姉貴が剣を振り回して追いかけてくる。

公孫？「こーうれええええん！！！」

公孫越「ハハハハハ、摩り替えておいたのさ！ってごめん姉貴！お願いだから剣は投げないでっ！！！」

公孫？「五月蠅いつ／＼／　お前なんか死んじゃえば良いんだっ！！！」

結局、姉貴の鬼ごっこは3時間も続いてしまい俺の仕事は増える一方であった。

~~~~紅蓮の部屋~~~~

公孫越「あゝ仕事減らんし頬が痛い……」

公孫？「うつさい！平手打ちで許してやったんだから感謝して仕事しろ！」

公孫越「いや仕事はきちんとこなすけどさ。…なんで姉貴は俺の膝に座って仕事してんのさ。」

公孫？「こっここが一番落ち着くんだから良いだろ別に！／＼／それより仕事！「いや、仕事も何もこれじゃ出来」なら肩揉

むなりなんなりして私を労え！」「へーい。」「」

俺は力なく返事をして取り合えず姉貴の肩を揉み始める。別に姉貴肩こつてる訳でもないのになんで毎回やらせんだ？肩凝ら

ない程普通な胸なのに…

俺と姉貴の、何時もの如く普通な一日…

公孫越「ああ、何か面白い事でも起きないかなあ…」

膝に姉貴を乗せたまま俺は窓の外に広がる青空を見つめる。

俺はこの時知らなかった。

幽州城外

「???」あ、ここだよここ！白蓮ちゃんに紅蓮君、元気にしてるかなあ〜」

「???」桃香様！いきなり走られては危険です！」

「???」大丈夫だよ愛紗ちゃん、こんな何もない所で転ぶわけなキ



ヤッ!？」

どんがらがっしゅん

????。「にやははははは、愛紗の言ったとおりになったのだ。」

????。「痛たたた…けど白蓮ちゃんと紅蓮君に会えるならこの位平気平気!さあ、二人に会いにいこー!」

幽州を訪ねてきた3人から始まる乱世を…

オマケ【紅白従姉弟の普通（？）な乱世】（後書き）

普通じゃない事も毎日繰り返せば普通に思えてくる。そんな感じに作りたかったんだけど…どうなんだろうw

御意見、ご感想、ご質問お待ちしております。

前進しない者に明日は無い【後編】（前書き）

友人「実家帰ってくるー」

柳「ヴえ！？いや、新幹線動いてないだろ！？」

友人「安心しろ、日本海ルートで12時間程かけて帰る…」

柳「帰りは？」

友人「…帰りには新幹線が動いていると信じたい…」

因みに友人が帰ってくるのは28日、だが新幹線完全復旧は29日と判明…

柳「…南無」

今回はギャグ多めです。

前進しない者に明日は無い【後編】

紀霊「北斗…千手殺!!」

その攻撃は空から降ってくる雨のようにモヒカン達へと降り注ぎ、  
繰り出される槍は無数が増えて自分達目掛けて落ちてくる。そんな  
錯覚を覚える程に速い突きにモヒカン達は

心臓を貫かれ

右肩を抉られ

鼻より上が消し飛び

次から次へと倒れていく。

技を出し終えた紀霊は元だ場所に着地すると倒れたモヒカン達を見  
る。

紀霊「…初めて実戦で使ったにしては上出来か？」

紀霊の目の前には先程まで下品な笑みを浮かべていたモヒカン達三  
十人程が屍と化し無言で地面に倒れており周囲は血の海と化してい  
た。

その光景を見た残るモヒカン達は…

モヒカン「ばつ化物だ…俺は逃げるっ！」

モヒカン「待てっ俺も連れてけ！！」

鬼神の如き紀霊に恐れをなしたモヒカンの一人が武器を捨て逃げ始める。一人逃げ出せばもう一人、また一人と次々に逃げ始めるモヒカン達。こういった烏合の衆は一旦崩れると脆いもので、百人は居たであろう人数は瞬く間に半分以上が紀霊に背を向けて逃げ出す始末。

だが、

紀霊「そんな大人数を逃がす気は無いつての…」

紀霊は槍や剣を拾うと自分に背を向けるモヒカン達目掛けて次々と投擲し始める。

モヒカン「あびゅー！」

モヒカン「へぶらあっ！？」

紀霊が投擲した武器は次々と逃げ惑うモヒカン達に突き刺さり、逃げ切れた者は片手で足りる程しか居ない。

モヒカン「こつ降伏だ！降伏するから命だけはっ！！」

紀霊「今まで散々罪のない村人襲った奴がどの口でそんな事言えるんだか…降伏しようが許さん。生き残りたいなら逃げ切るか俺を倒して掴み取れや…」

降伏の申し出を一蹴した紀霊はモヒカン達に絶望を与え、三華尖を振るい屍と血の海を増やし続けた…

十分後、おびただしい数の屍の中に物悲しげな表情を浮かべながらタバコを加える紀霊と肩で息をしながら紀霊を見つめる少女だけがその場に立っていた。

紀霊「すまんな怖い思いさせて…」

少女「いえ…助けて頂いて有難う御座います。」

気丈に礼を言う少女だが、その顔には疲労の色がはつきりと出ており立っているだけで精一杯だと言うことが一目でわかる。

紀霊「今から仲間と合流するが、歩けそうも無いみたいだし少しの間我慢してくれ。」

少女へと歩み寄った紀霊はそれだけ言っただけで少女を抱きかかえる。所謂お姫様だっこだ。

少女「なになん？何を！？」

紀霊「立っているのがやっと思いたいんでな…あんまり喋ると舌嚙むぞ？（ん？この子…）」

少女を抱きかかえた紀霊は屋根に登り、趙雲と別れた城壁に向かって屋根から屋根へと飛び跳ねて移動し始める。その間に少女が何か言っていたみたいだが聞き取れなかったのでそのまま城壁に飛び乗ると

趙雲「お待ちしておりましたぞ主。」

既に戻っていた趙雲が紀霊を迎える。

紀霊「悪いな星、待ったか？」

趙雲「いや何、主からの放置ぶれいと思えばこゝそんなん良いから夜雲と白雲は？」…既に城の外に…それと主、私という者が居りながら新しい娘を捕まえてきたのですか？」

愛馬の安否を確認した紀霊は趙雲の言葉に

紀霊「お前は一度口を針で縫え。ってすまんすまんすっかり忘れてた。」

空気と化していた少女を優しく降ろして軽く頭を撫でる。

少女「あ…はい、有難う御座います／＼」

趙雲「むっ、そのような娘より拙者に愛を！拙者なら罵倒に緊縛、何でも「いらん誤解招く前にこの子に服と剣を見繕ってこい変態！」主の命なら今すぐに！」

言うや否や城内へと飛び降りて行く趙雲、微かに「主の罵倒…濡れるっ！！」とか何とか聞こえる趙雲の声を無視しながらタバコをくわえて腰を下ろすと思いついたように少女に顔を向け話し始める。

紀霊「まったく、モヒカン相手するより疲れるな…遅ればせながら



自己紹介だ、俺の名は紀霊。んでさっきの変態は趙雲って俺の連れだ。」

少女「姓を楽、名を就、字は子玲と言います。紀霊様、助けていだいて有り難う御座いました。」

紀霊「あー良いよ良いよ気にするな。そか楽就って名前かーって楽就!？」

手をヒラヒラ振りながらタバコを吸おうとした紀霊だが、少女の名前を叫んぶと楽就の両肩を掴む。

楽就「え?いや、紀霊様近いっ顔近いですって!!」

いきなりの事に驚いて混乱する楽就。だが、紀霊はそんなこと気にする事無く言葉を続ける。

紀霊「君の名前…もう一度言ってくれ。」

楽就「ががががが、楽就です!//////」

〜【楽就】〜

紀霊と同じく袁術配下の武将で、主な戦績は曹操から侵略された際に敗北し処刑された。

…これ位しか知らんが、なんでこんなところで会っくんかな？

ってこれアレだよな？仲間にしておけばかなり楽だよな？（まともな人間的な意味で。）

紀霊「マジか…つかなんであんなここに居たんた？あいつ等に拉致されたんなら村まで送るけど…」

楽就「あ…その…実は村長の妙策に反対したら売られてしまいました…」

あの村の子だった訳か…もう少し村長に南斗迫破斬とか南斗凄気網波とか色々打ち込んでおくべきだったかな？

紀霊はゆっくりと深呼吸を1回、改めて楽就を見やる。

おかつぱに近いさらさらした黒髪、月ちゃんに似た可愛い顔つきと星よりも細い華奢な体、俺の肩より若干低い身長…150cm位かな？

楽就「あの〜紀霊様…」

ジロジロと見られたせいか、若干頬を染めて目を逸らした楽就に紀霊はふと我に返る。

紀霊「ああ、すまんすまん。しかし…あの村長のところか…」

楽就「ご存知なのですか？」

紀霊「ん、実はな…」

〜〜紀霊説明中〜〜

楽就「そんな事が…」

紀霊の説明を受けた楽就の顔には若干の戸惑いが見て取れる。

紀霊「一応聞くが、村に戻るか？」

楽就「……………」

紀霊の言葉を受け静かに首を横に振る楽就、それを見て紀霊は更に質問を重ねる。

紀霊「ならどうする?」

楽就「わかりません、行くアテなんてありませんし…」

自分を売った村に帰っても元通り接する事なんて出来ない。家族の居ない今、自分の居場所なんてどこにも無い。

命は助かった。だが、自分には何も残っておらず…まるで暗闇の中一人ぼっちで居るような感覚を感じる楽就。

だが、

次に紀霊が楽就に投げかけた言葉は楽就に一筋の光をさした。

紀霊「ならよ楽就、俺と共に来ないか?」

楽就「え?」

紀霊「どうせこのまま立ちすくんでいても何にもならん。前に進まなきゃ明日は無いんだしさ…。それに、正直言つと俺はお前が欲しい。」

立ち上がり楽就にそつと手を差し伸べ紀霊。

楽就「僕なんかですか？」

紀霊「ああ、さっき見ても思ったがお前なら鍛錬積めば良い武将になれると思う。それにまともな部下が欲しいんだよね。」

楽就は、苦笑いしながら左手で頬を掻く紀霊を見つめ信じられないといった表情を浮かべている。

楽就「武将、ですか？」

紀霊「ま、武将云々の話は別として、これから何するかも決めてないんだろ？もし俺等と旅して自分のやりたい事が見つかったらそれやっても良いんだしさつと楽就殿？」

話している途中、聞いていた楽就はいきなり紀霊に抱きついた。

どうしたのか？と聞く紀霊の胸に顔を埋め、楽就は声を震わせなが

ら眩きです。

楽就「…良いんですか？僕みたいなのが一緒にしても良いんですか？」

抱きついてきた楽就が微かに震えており、声も若干涙声になっている。その事に気づいた紀霊は静かに楽就の頭に手を置いて優しく撫でながら声をかける。

紀霊「良いも何も俺から誘ったんだ、ご同行願えるかな楽就殿？」

楽就「ヴぁい…。い、一生付いていきます…」

抱きしめる腕に力を更に入れて答えた楽就は今までの事が蘇ったのだろうか、涙をポロポロ流しながら泣き始め、紀霊は落ち着けるよう優しく頭を撫で続けた。

〳〳10分後〳〳

紀霊「落ち着けたか？」

楽就「は、はい／＼／＼ お見苦しいところをお見せして申し訳有り

ません…」

泣く事で少しは楽になったのだろうか、10分間ずっと泣いた樂就はある程度落ち着けたことで冷静さを取り戻すと自分が紀靈に抱きつきっぱなしだった事を思い出し慌てて紀靈から離れて今に至る。

紀靈は別に気にしたようで、大丈夫大丈夫と諭した後樂就に背を向ける。

紀靈「ま、人間だし泣くのは当たり前だ…んで星、いつまでも見えないで出て来い。」

樂就「え!?!」

紀靈の言葉に驚き周囲を見やる樂就、すると服を集めにいつていたはずの趙雲が二人から少しは慣れた場所でふて腐れたようにこちらを見ていた。

趙雲「むう…」

二人に気づかれた趙雲はにやにやとした表情を浮かべながら紀靈に近づいてくる。樂就は、趙雲の手にしっかりと握られた剣と服、そして縄を見て「縄?」と疑問に思いつつも服と剣を受け取る。

紀霊「お疲れ。取り合えず楽就殿には着替えてもらって…って星、なんで俺に縄を渡す？」

趙雲は何故か紀霊に縄を手渡し、自らの両腕を紀霊の前に出す。

趙雲「楽就殿ばかりずるいですぞ主、拙者も主の褒美が欲しゅう御座います。ささ、拙者に愛を！」

しなをつくり、更に両腕を突き出す趙雲に紀霊は溜息一つ

紀霊「お前な…取り合えず楽就殿が着替えるから席外せ。」

趙雲「む？ 普通男である主が席を外すべきでは？もしや主、拙者をのけ者にして楽就殿とよろしくやろうと！？」「いやおま」そんな事言わずに緊縛、鞭に首輪となんでもござれな拙者が居るではなむぐっ！？」

物凄い勢いで色々やばい事を口走り始めた趙雲に対し紀霊は即座に趙雲の口へと縄をまわし、余った部分で両腕をきつく縛る。

趙雲「?????????!」



縛られた趙雲は状況が把握できていないのか紀霊と自分を縛る縄を交互に見つめ…

趙雲「ふあむ（わん）」

何を思ったのか四つんばいになり紀霊を見上げる。

紀霊「言いたい事は色々有り過ぎるんだが落ち着いて聞け。楽就殿、すまんが自分の性別をこの変態に教えてやってくれ。」

目の前の珍妙奇天烈な光景に目を奪われていた楽就は紀霊の問いかけに我に返る。

楽就「ほえ！？ え？僕男ですけど？」

趙雲「ふおへ？（ほえ？）」

楽就からの突然の宣告に驚き呆ける趙雲、紀霊はやれやれと呆れた表情で趙雲を縛る縄を解き趙雲を立たせると肩をぽんぽんと軽く叩く。

紀霊「つーわけで、星には席を外していただきます。」

紀霊に押されるようにして楽就から離れた場所に移動した趙雲は座り込み顎に手を置きながら、「あのように可愛らしい楽就殿が男の訳が…」とかぶつくさ呟いていたそう。

紀霊「星―もう戻ってきて良いぞー。」

数分後、紀霊の言葉に我に返った趙雲は二人の元へ歩み寄ると先ず楽就を見やる。

趙雲「むう…（どうみても男のようには見えん…）主、楽就殿が男だと何時お知りにな？」

楽就「あ、僕も思いました。今まで女性に間違えられていたのでなんでわかったんだらう？つて。それと僕の名をお預けします。彩あやつて呼んで下さいね。」

趙雲の知る限り楽就が男だと分かる様な話は一切出ていなかった。ならば何故紀霊は楽就の性別を知っていたのか？それを趙雲が疑問に思うのも当然である。

紀霊「ほいほい彩ね。ここに彩連れてくる時になんとか違和感感じてな、なんか女の子以上に女の子してるなーって。何故分かったのかは俺にもわからん。」

紀霊が何故判別出来たのか？聞いた趙雲と楽就はおろか判別した張本人さえも良くわかっていなかった。

趙雲「納得いきませんが、考えるだけ無駄なのでしような…」

考える事をやめた趙雲を他所に紀霊は槍を背負い楽就に話しかける。

紀霊「さて彩、俺の真名は顕だ。これから宜しく頼む。」

楽就「はい、此方こそよろしくお願いします顕様。この楽就、顕様に着いていきます!」

紀霊「目指すは洛陽。今日はこの城から離れた場所で野宿するぞ。星、夜雲達を城門付近まで連れて来てくれ。俺と彩は彩用の馬を調達してすぐ行く。余り長いしいたい場所でもないからな…急ぐぞ!」

趙雲「承知!」

樂就「わかりました！」

新たな仲間を加えた紀霊は、旅の目的地【洛陽】にむけて再び旅路を歩き出す…

目指すは洛陽、大將軍何進の下へ…

~~~~翌日の昼~~~~

賊の拠点となっていた古城、昨日の火事により半分以上が焼け焦げた状態になっている。当然紀霊達の影などどこにも無い。

????「しっかし…賊討伐に来て見たら既に崩壊状態…か。」

誰も居ない筈の古城を眺めつつ一人の女性が呟く。

女は髪の色は紅、腰まで掛かるほど長い髪を靡かせ腰には双剣を携

える。

また、女の後ろには「漢」と「朱」の旗を靡かせた軍勢が静かに彼女の号令を待っている。

ふと、女に近づいてきた兵士を見やる。報告だろうか？

兵士「朱儁將軍！捕らえた賊から情報を入手しました！」

朱儁「うむ、内容は？」

兵士「昨夜、少年が1人乗り込んできて賊共の次々と討ち取ったと
のことで、その賊はなんとか逃げ切れて今に至る。だそうです。」

兵士の報告を聞いた女性は顎に手を置き、目を細めながら古城を見やる。

朱儁「うーん…その少年の行方とかわかるかな？」

兵士「確証はありませんが、皇甫嵩將軍の隊より早馬で来た文書に
このようなモノが…」

女性は兵士に差し出された竹簡を読み始めたと思っ たらまた首を傾
げて考え始める。

兵士「將軍、如何なされました？」

朱儁「いやこの紀靈って青年で間違いないと思うんだけど、ん〜…
紀靈…紀靈…どっかで…あ！」

何かを思い出したのかぼん と両手をあわせる朱儁。

兵士「その青年の名前がどうかしたのですか？」

朱儁「思い出した思い出した、大將がそろそろ来る〜とかまだ来ない〜とか言ってた仕官予定の子だよ。そうかそうか、行き違いになったのか〜。手合わせしてみたかったな…」

1人呟く朱儁は馬を反転、目の前で待機している自分の部下に大きな声で号令を発する。

朱儁「我が隊はこれより隊と合流する！全軍反転！皇甫嵩隊目指し
行軍開始せよ！」

その号令を受けた兵士達は一斉に反転、すぐさま隊列を整えなおし
行軍を開始する。

朱儁自身も馬を走らせゆつくりと歩み始める。

朱儁「ま、紀靈君とやらが大将のそこ向かってるなら…その時手合
わせすりゃいいや ああ、ちょっとわくわくしてきたかも！」

…どつやら紀靈は、洛陽に到着しても平穩には暮らせそつもなさそ
うだ…

~~~~~次回【洛陽編】スタート~~~~~

前進しない者に明日は無い【後編】（後書き）

出来は良くないし難産だし…けど次回、やっと洛陽編！  
久々におっちゃんを書ける！

多分黄巾の乱が始まるのは、フラグ回収とかフラグ建設とか色々済ませてからになります。

【御意見】、【ご感想】、【ダグ】、その他諸々お待ちしております。  
す。



**とある兵士の報告書【西涼編】（前書き）**

即興ながら西涼に行ってしまった姉者の話です。

さて、次は何の番外編を書こうか…

とある兵士の報告書【西涼編】

年夏

洛陽より董卓様が御帰還。

父君の後を継ぐために大守の印綬を授かってきたようで我々としては安心して配下に入れる。

護衛の張遼殿の他に新しく仕官してきた武将を紹介された。

美人だが胸が無いのは非常に残念だ。

↳隊長からの返答↳

董卓様は人望が有るし幼い頃から我等と接してきた故に我々としては娘みたいなものだしな。

俺達も仕えがいの有る御方だよ本当…

後、お前：胸が残念って董卓様も同じだと言いたいのか馬鹿やろう  
！！

そんな事言う馬鹿者は…馬に引きずられて轢死しろ！

年夏

新たに加わった華雄將軍が賊討伐で初陣を飾る。

俺達兵卒の指揮はまだまだ未熟だが張遼將軍に劣らない武勇、冷静ながらも敵を飲み込む気迫に俺は心ときめいた…

胸が無いと今まで興味が無かった筈なのに…華雄將軍のクールな外見、得物を振るう姿、透き通るような白い肌…そして、スラリとした小鹿のような美しい御見脚…踏まれない！

これが…変？

（隊長からの返答）

それはお前が変なだけだ。

変と恋の漢字も分からんのか…

## 年秋

華雄將軍、張遼將軍の活躍により西涼周辺の反落は鎮圧される。めでたいことなのだが最近華雄將軍に元気が無い…

張遼將軍曰わく弟子が恋しいらしく寂しさを募らせているらしい…華雄將軍には申し訳無いが弟君を殺したい…

「隊長からの返答」

俺もその話は聞いた。

以前華雄將軍の寢室前を通った時、部屋の中から

華雄「顯…お姉ちゃん寂しいんだぞ馬鹿者…」

と言った華雄將軍の声を聞いた。

華雄將軍が早く元気になってくれる事を切に願う。

## 年秋

以前まで元気が無かった華雄將軍が今日は非常に上機嫌だった。

聞いてみたところ、弟君より手紙が来たようで弟君の事を嬉々として語ってくれた…妬ましい。

それだけでも妬ましいのに聞けば膝枕やあぐんに一緒に昼寝!?

挙げ句には華雄將軍と張遼將軍は弟君と婚約してるだとか…

クールなイメージのあった華雄將軍が弟君の話の時は恋する乙女に

なっていて驚いたのに更に驚かされた…

ちよつと藁と釘買ってきます。

↓隊長からの返答↓

この話を聞いて俺も買って来ようとしたら城内の市場ではどこもか  
しこも売り切れ…

俺の分も頼む。

年冬

雪がしんしんと降り積もる中、部隊の再編成が行われる。

私は華雄將軍の部隊に引き続き配属、気分は勝ち組だ。

その後クソ寒い中、警邏中に城外にて華雄將軍を発見

降り積もる白雪と白銀に染まる大地を背に空を眺める華雄將軍、ま  
るで景色に溶け込んでしまいそんな儂さが美しかった。

けど華雄將軍の口から弟君の名前が呟かれた瞬間、警邏隊全員の人に嫉妬の炎が燃え上がり寒く無くなった。

ムシャクシャしたので最近賊が住み着いたと噂の廃村に警邏隊全員で襲撃を実施、賊を全滅させて帰還。

↓隊長からの返答↓

…でかした？と言えば良いのか判断に困る…本来なら命令無視の独断専行で処分だが董卓様からお礼を言われたから許す。

年冬

今年も早いもので後一週間程

今年は賊の被害も少なく割と平和だったような気がします。  
来年は董卓様の理想に近づけるよう平和を守っていききたい。

華雄將軍が俺達に手料理を作ってくれた。

旨すぎて皆が争うように料理を奪い合うと

華雄「また来年も作ってやるから少しは仲良くせんか馬鹿者共…」

俺達は華雄將軍の手料理のためにも、平和を命がけで護っていき

い。

（隊長からの返答）

途中まで良いこと言っているって涙出そうになった俺が馬鹿だった…

まあ、結果的に董卓様のためになるから良いけどよ…取り敢えず、後一週間平和を護って気持ち良く新年迎えるぞ！

**とある兵士の報告書【西涼編】（後書き）**

本編は頑張って制作中…けどまだ半分w

御意見、御感想、ダグ応募お待ちしております。



続・紅白姉弟の普通(?) な乱世(前書き)

またもや即興w

リクエストがありましたので続編です…なぜ続いたし？

続・紅白姉弟の普通(?)な乱世

〔幽州城内〕

姉貴が俺の膝上で仕事した次の日、俺は昨日の残った仕事と今日持つてこられた案件をせっせと処理していたところ…

兵士「公孫越様、少々宜しいでしょうか？」

兵士が俺の部屋に入り一礼、なんだ？また災難でも有ったのか？つか何で大守の姉貴じゃ無くて俺の所に持つてくるかね…

兵士「公孫…大守様は忙しそうでしたので公孫越様へと思ひまして…」

こいつ今姉貴の名前言うとしたけど出てこなかったな…兵士にすら名前を忘れられる姉貴…NDK？

公孫越「いや、別に良いけどさ…取り敢えず話してくれ。」

姉貴の名前をちゃんと云えない奴なんてよく居るし一々突っ込んでいたらキリがない。取り敢えず話進めましょ…

兵士「実は先程から門の前で【白々（ぱいぱい）】ちゃんに会わせて欲しい。と願い出る三人組が居まして…城のどこを探しても白々と言う者は居ないと言っても聞かないのです…」

白々？…まさかね

公孫越「その人達の外見は？」

兵士「天然っぽい巨乳で「あ、その人なら姉貴の友人。取り敢えず今から行くわ。」…承知しました。」

さて、なんでまたあの人がここに？

同窓会の誘いか何かか？

取り敢えず上着を羽織り門へと急ぐ。門に着いて三人組とやらを見渡すと

劉備「あ、紅蓮君久しぶり〜元気してたかな？」

公孫越「劉備先輩！お久しぶりですって何でここ…」

劉備の指が唇に止まり言葉を中断する俺に対し

劉備「もぉっ、めっ！だよ紅蓮君。昔みたいに呼んでくれなきゃめっ！」

と拗ねたように頬を膨らませる劉備先輩：昔みたいに…か

公孫越「わかったよ…桃香姉とうかねえどうしてこんぐっ！？」

またかよ！つか今度はヤバいつて！

顔に当たる柔らかい2つの桃：桃香姉の抱き付き癖がががが…

劉備「うんうん、やっぱり紅蓮君にはそう呼んで貰うのが一番だよ  
けど大きくなったね〜昔は丁度良かったのに今じゃ飛びつかなき  
や抱き付けなくなってるんだもん：お姉ちゃんより大きくなったら  
抱きつけ無くて困るよう…紅蓮君は意地悪だね〜」

いや意地悪で身長変えられないからっ！って苦しいっ良い匂いだけ  
ど息出来ない！

死ぬっ！俺死んじゃう！

何とか手足をばたつかせ意思表示を試みたものの…

劉備「あつ紅蓮君も嬉しいんだね！そう言う可愛い所は変わって無  
いな〜よしよし、お姉ちゃんが撫でてあげるね」

公孫讚「紅蓮〜ここに居るって聞いたんだが…し、食事作っただ  
が一緒にどうだノノノ…って桃香どうしてここに！？っておい  
馬鹿紅蓮！桃香から離れる馬鹿っ！ノノノ」

颯爽と姉貴登場

姉貴は俺の腕を取り自分の方に引っ張るが、姉貴…普通の胸が俺の  
腕に普通に当たってるって…あ、浮いてきた…

姉貴、頼むからもう少し普通の助け方…をして…く…れ…………

劉備「あ、白々ちゃん久しぶり〜紅蓮君、見ない内に格好良くなっ  
たね。白々ちゃんも鼻高々かな？」

公孫讚「あ、当たり前だっノノノ 紅蓮は私の弟だが鼻屑目に見て  
も格好良く…って何言わせるんだ桃香！それに私は白々じゃなくて  
白蓮だ！…」

紅蓮を挟んで（文字通り）昔の話に花を咲かせ始める公孫讚と劉備

既に紅蓮の意識は無く両手をブランと垂れ下げるだけとなっており…

関羽「桃香様！公孫讚殿！このままでは公孫越殿が危険です！」

見かねた関羽により紅蓮は解放されることになる。

劉備「大変！人工呼吸しなくっちゃ！紅蓮君をこっした責任は私に有るんだから私がするね！」

公孫讚「待て桃香！それなら姉である私が！」

変な言い争いを始めた二人を余所に

張飛「お兄ちゃん大丈夫なのか？」

公孫越「く…空気…って、旨…いんだな…」

辛うじて自力で息を吹き返した紅蓮はそのまま意識を手放した…

続・紅白姉弟の普通(?) (な乱世) (後書き)

御意見、御感想お待ちしております。

さて、次はヤンデレか本編か…



楽就「頭様っ！洛陽ですよ洛陽！」（前書き）

友人「GWだなー。」

柳「だねー。」

友人「今年のGWも休み無しで仕事だな俺等。」

柳「あ、俺GWの間実家帰る。」

友人「……………この裏切り者めええええっ！！！」

柳「殴るな！首絞めるな！ざまー見ろ！」

…その後数発程殴られました。

微妙に痛いw

今回若い子置いてけぼりのネタがあります。  
後書き読んで頂ければ幸いです。

**楽就「顕様っ！洛陽ですよ洛陽！」**

楽就が仲間に加わってから2日間、俺たちは今洛陽の城門前に立っていた。

紀霊「やっと着いたか…異様に長かったように思える…」

長安から洛陽まで賊討伐やらなんやらしていたが二週間程度の短い旅のはずだった。

趙雲「主…取り合えず中に入りましょうぞ。」

はずだったんだ…

紀霊「までや星。」

この変態がいなければ…

紀霊「取り合えずその首につけた縄を外せ…」

~~~~~ジョインジョインジョインキレイ【洛陽編】~~~~~

大きな門と高くそびえる城壁、そして門から見える活気付いた場内

樂就「わあ… 顕様！人があんなに！！凄いです洛陽ですよ洛陽つ！！」

こういう時にはしゃぐのはやはり小さな村出身の樂就。見るもの全てに対し、まるで新しい玩具を手に入れた子供のような反応を示している。

紀霊「あんまりはしゃぐなよ〜転ぶぞ？」

趙雲「いやはや彩は見ていて微笑ましいですな。」

苦笑しながら樂就を見守る紀霊と笑顔で見守る趙雲の2人ははしゃぎながら先行する樂就を追って洛陽に入城。入城後、紀霊は改めて周囲を見渡す。

長安も大都市故に人も規模も相当高い水準にあつたが流石は洛陽、長安を遥かに超える規模で道行く人もかなりの人数である。

趙雲「いやはや流石は洛陽、活気づいて居りますな。そうそう主、今宵の宿は如何致しましょうか？」

大通りを歩きながら紀霊に今後の予定を訪ねる趙雲に紀霊は樂就を眺めつつ

紀霊「ん〜取り敢えず宿はいいや、今日は訪ねようと思つところが有るからな。あ、彩こけた。」

趙雲「見事なまでに綺麗な転び方ですなあ、ではこのまま向かうので？」

紀霊「ま、そうなるな。彩ー！」

立ち上がり服の埃を払っていた樂就は紀霊の言葉を聞いた途端、紀霊の方向に向かって走って来る。

樂就「お待ちせしました！なんででしょうか顕様？」

紀霊の前に来た瞬間笑顔で紀霊を見上げる樂就。多分だが彼女（？）に尻尾があれば千切れんばかりに振られていただろう。

まるで人懐っこい子犬が目の前に居るような感覚に紀霊はついつい樂就の頭を撫でる。

樂就「わふう　顕様の手…気持ちいいです／＼／」

紀霊「そりゃ良かったがそろそろ行くぞ？」

と頭に置いた手を離し紀霊は歩き始める。趙雲、樂就の二人も紀霊の後を追うように再び足を動かし始めた。

趙雲「そう言えば仕官先に心当たりが？」

紀霊「行けば解るさ。ま、面白いおっちゃんだから退屈せずに済みそうだしさ。」

~~~~~何進の屋敷~~~~~

豪華に裝飾された大きな屋敷、門の前には数人の衛兵が詰めており外見を見るだけでも身分の高い御仁の屋敷だと趙雲、樂就は思った。

何故こんな場所に自分達は居るのだろうか？

そもそも誰の屋敷なのか？

今日こそ主に縛ってもらえるだろうか？

趙雲の頭の中には現状を理解しようと必死に考える中、紀霊はとい  
うと…

紀霊「すいません、將軍にこの札と紀霊が来たとお伝えください。」

衛兵「ん？何な…失礼しました！今すぐお伝えしますので少々On  
e moment、please（お待ち下さい）…！」

衛兵に何進の書簡と自分の名前を伝えていた。

衛兵は最初、なんだこの餓鬼は？的な視線を紀霊に投げ掛けていたが…書簡を見た瞬間顔を青くして平謝り、混乱しているのか明らかに別の国の言葉を叫びながら屋敷の中に駆けていった。

趙雲「主…ここは？」

紀霊「ん、何進大將軍の屋敷だけど？」

星彩「？（口）」

紀霊「え？何でそんなに驚いてるのよ？」

楽就「だだだ、だつて聞いてませんよ！？」

紀霊「うん、言っていないからね」

実は、二人の驚く顔が見たかった紀霊は敢えて二人に目標は洛陽とだけしか伝えなかつたのだ。  
この男、割とSである…

趙雲「主…意地が悪う御座いますぞ…」

楽就はおるか趙雲すらも驚く事実は案の定二人の慌てる様を紀霊に見せる。

紀霊は紀霊でしてやったりといった笑顔で二人を見つめていた時、衛兵は息を切らせながら紀霊達の下へと走ってくる。

衛兵「お、お待ちせいたしました…大將軍がお待ちですのでどうぞお入り下さい！」

ふと門を見れば開いており紀霊の下へと来た衛兵以外は全員整列して待機している。どうみても紀霊の出迎えのようであるが、無名の紀霊を迎えるには盛大過ぎる対応に紀霊は溜め息を吐くと呆気に取られる趙雲、楽就に声を掛ける。

紀霊「星、彩、入るぞ〜付いて来い！」

趙雲「へ？お待ちを主！」

樂就「ふ、二人とも置いてかないで下さい」

紀霊の声に我に返った二人は、先に屋敷へと入っていった紀霊を追いかけ走り出した。

~~~~屋敷内~~~~

屋敷の外見と同じく豪華な内部、様々な調度品や内装の高級感。流石は、大將軍の屋敷といったところだろう。

敷地内に入った紀霊達を待ち構えていたのは

何進「坊主っ！待ってたぞーっ！！」

紀霊「よーお、おっちゃん久しぶりーって…」

両手を広げ紀霊に迫り来る何進大將軍（笑）だった。

紀霊「星、彩、下がってる…」

言われた通り少し後方に移動した一人が見たのは

紀霊が拳を構え

迫り来る何進に対し

紀霊「風殺…金剛拳！」

拳を振るう紀霊の姿であった。

何進「来るのがあああああつべひゆ!？」

拳から放たれた物凄い風圧で紀霊に近寄る前に壁へと吹き飛ばされる何進。何進が吹き飛ばされたのを確認して構えを解く紀霊。

楽就「顕様!?!? 大將軍に何やってるんですか!？」

趙雲「大將軍すら殴るとは…ご無事ですか大將軍?」

見ていた二人は最初何が起きたのか理解出来なかった。

当たり前である。

大將軍を吹っ飛ばした。

普通に考えて打ち首ものの暴挙を目の前にいる自分の主がしでかしたのだ、部下である二人が焦るのも無理はない。

取り敢えず樂就は紀靈に詰め寄り、趙雲は介抱のため何進に駆け寄る。

何進「お…う、大丈夫だ。って坊主、俺の扱い…酷くね？」

埃を払いつつゆっくりと立ち上がる何進は苦笑いしながら紀靈を見る。

紀靈「ごめん、悪いとは思った。けど髭面のおっさんが涙と鼻水垂らしながら両手広げて迫ってきたら俺じゃなくても殴ると思う…」

紀靈の言葉通りに頭の中でイメージした趙雲と樂就は口には出さないものの【確かに…】と密かに同意する。
さて、言われた本人は…と言うと

何進「うへえ…そりゃあ俺でも殴るな…」

吹き飛ばされた本人なのに紀霊の言葉に堂々と同意してしまった。

樂就「同意しちゃうんですか!？」

何進「いや、だってさ俺そっちの趣味ねえし…って坊主、この嬢ちやん達は？」

樂就と普通に会話して気が付いたのか何進は紀霊に付き従う二人について紀霊に聞いてきた。

紀霊「俺の仲間です…二人共自己紹介してくれ。」

趙雲・樂就「わかりました。」

~~~~~少女二人(?) 自己紹介中~~~~~

何進「へえ…坊主も隅に置けねえな。こんな可愛い嬢ちゃん二人仲間にするとかよ〜華雄嬢ちゃんが知ったら殺されるんじゃないかねえか？」

紀霊「姉者なら大丈夫だが…自分が姉者に殺される想像がしやすい

つて事実には悲しくなるな…」

取り敢えず紀霊は椅子に座り、茶を飲みながら趙雲と樂就を仲間にした経緯を何進に話していた会話の中、樂就が紀霊に質問を投げかけた。

樂就「顕様、顕様のお話に出てくる姉者って人はどういう人なんですか？」

趙雲「お、それは私も興味有りますな。」

趙雲も気になっていたのか便乗してくる。

何進「なんだ華雄嬢ちゃんの事、話していないのか？」

紀霊「ん、確かに話した事無かったな…姉者は俺の姉弟子でさ、今は西涼の董卓軍に居るんだ。文字通り一直線って感じの人で武勇に優れた人だよ。」

趙雲「ふむふむ、主の姉上は董卓軍に仕官されているのか…」

樂就「きつと顕様みたいに格好良い女性なんですね。」

二人の反応を見て嬉しかったのだろう。紀霊は更に話を続ける。

紀霊「姉者は格好良いのもあるが可愛いぞ？後は俺の婚約者って事位かな？」

ガタタツッ！！

紀霊が最後に言った言葉に趙雲と楽就は驚愕の表情を浮かべ、椅子から立ち上がる。

紀霊「ん、どうした星、彩？」

何進「…なあ坊主…華雄嬢ちゃんが婚約者って…本当か？」

立ち上がっている二人を横目で見ながら引きつった笑みを浮かべ、何進は紀霊に聞いてきた。

紀霊「嘘言っでどうするんよ…因みに姉御も婚約者だ。」

次の瞬間

趙雲・樂就「その話！もつと詳しく！！」

紀靈「ヴェー！？何、何ぞ！？」

鬼神の如き勢いで詰め寄る趙雲と樂就、いきなりの事に慌てふため  
く紀靈。

何進はやっちまったと心の中で舌打ちしながら頭に搔く。

樂就「頭様！僕もつとその話聞きたいです！」

趙雲「ささ主、じっくりねっとり話していただきましょうぞ！」

普段と違う二人の様子に混乱しながらも紀靈はなんとか落ち着かせ  
ようとした時、

衛兵「大將軍、朱儁將軍と皇甫嵩將軍がお目通り願いたいとの事  
です。」

空気を読んでか読まずなのか衛兵が紀靈達の部屋に報告に来た。

何進「ん、彼奴等確か賊討伐の途中じゃ？まあ良いや、坊主を紹介したいし通せ。」

紀霊「（あれ？チャンスでね？）星、彩、お偉いさんが来るみたいだしこの話はまた今度って事で今は落ち着け！」

流石に洛陽を代表する二將軍の来訪のためか紀霊に言葉に二人はしぶしぶ引き下がる。

数分後、二人の女性が扉を開けて入ってきた。

何進「ようお前等、討伐は終わったのか？」

何進の言葉に黒髪の女性は紀霊をちらりと一瞥しつつ何進に向かい報告を始める。

朱雋「実はな大将、簡単に言うと賊は私達が行く前に壊滅していた。多分だけどそこにいる坊や…【紀霊】って名前じゃないかな？」

何進「ああ、坊主の名前は確かに紀霊だがどうかしたのか？」

何進の返答をに二人の將軍は頷き更に続ける。

皇甫嵩「周辺の村から聞き込みをしたころ、ある村で彼が賊を退治しに行つたつて情報を手に入れたんですよ。」

何進はそれで納得したようので手をポンと叩く。

何進「成る程、討伐行つたは良いが先に坊主が暴れてくれたつて訳か、相変わらず無茶してんなあ坊主。」

無茶。と言つ割には嬉しそうな表情で紀霊を見やり肩をバンバン叩く何進。

紀霊「あゝ…確かにやつたけどさ…ここにいる星と彩の活躍あつてこそ出来たんよ?」

肩を叩かれながらも自分の仲間である趙雲、樂就の兩名に顔を向けて、手柄は自分だけでは無いと主張。しかし、先に樂就が仲間になつた経緯を聞いていた何進に通じるわけは無く。

何進「なーに謙遜してんだよ、一人で百人近く打つ飛ばしてんだろ?十分坊主が一番手柄だろつての!」



とか言いながら紀霊の肩を叩く力を更に加える。  
それを見た朱儁は皇甫嵩に視線を合わると紀霊の目の前へと歩み寄る。

朱儁將軍は俺の目の前に来ると、長い黒髪を一度掻き揚げてから俺の目を見つめながら手を出す。

俺は香様よりも長い髪の毛と控えめな胸を除けば似た雰囲気を感じてしまう。

朱儁「朱儁、字は公偉だ。大将の下で將軍やらせてもらってるよ。」

次に喋るのは朱儁將軍の隣にいる眼鏡をかけた微妙に釣り目な茶髪でショートカットの女性、背は朱儁將軍や俺と比べても低いが朱儁將軍よりも自己主張の激しい胸囲、短パン(?)っぽいズボンに茶色のタンクトップみたいな服の上に上着を羽織っている。

皇甫嵩「同じく大将の元で將軍させてもらってます。皇甫嵩、字を義真と言いますよーよろしくお願いしますね紀霊君。」

と自己紹介の後手を差し出された。

俺は朱儁將軍、皇甫嵩將軍の順に握手を交わし自己紹介を済ませた直後、朱儁將軍からある提案をされた。

朱儁「賊を百人斬り伏せた坊やの実力が見たい。つーわけで手合わせしようぜい」

~~~~中庭~~~~

有無を言わず俺を引きずり出した朱雋將軍は簡単な準備運動を行っている。俺はというと…

皇甫嵩「取り合えずこの槍を使ってください。私が開発した試作品の戟だけど性能は悪くないはずだよ。」

と戟を渡される。握ってみたら確かに悪くない感触なんだけど…なんでボタン付いてるんだ？

皇甫嵩「それはこの戟が最大の秘密兵器、どうしてもピンチになったら相手を突いた時に押してみてね。」

紀霊「はあ…？まあ、使わないで済む事を願いますが…」

朱雋「準備はいいかー坊主、大将の号令で始めるぞー！」

既に抜刀した双剣で素振りを繰り返す朱雋將軍に対峙しつつ無言で構える。おっちゃんは両者の準備が出来たと判断し咳払い。片手を振りかざす。

何進「んじゃまあ坊主、災難だと思つて諦めてくれ。両者構えつ！
……………始めつ！！」

先に動いたのは朱雋、攻撃範囲で戟に劣る双剣は利点を最大限に発揮しなければならぬ至近距離に詰めなければならぬため当然といえは当然である。だが

紀霊「突っ込んでくる人の対処は馴れてんだよっ！」

予想していた紀霊は戟を振るい距離を詰める朱雋を牽制、回避する朱雋の隙を窺いながら徐々に間合いを広げる。

朱雋「ありゃ、やっぱりばれてたか。ま、構わないけどね。」

ヒュッ！

紀霊「なっ！？」

朱雋は戟を避けながら紀霊に向けて左手の剣を投擲、予想だになかった反撃に紀霊は体勢を若干崩しつつも戟を回転させて迫り来る剣を弾く。

朱雋「作戦通り」

投擲された剣に集中してしまった紀霊が次に見たのは、いつの間にか間合いを詰められており、嬉しそうに剣を斬りつける朱雋の姿

紀霊「げっ、マジか!？」

即座に後方へと飛び退く紀霊だが気が付くのが遅かった。

朱雋の剣が横一文字に紀霊の胸を斬りつけ、紀霊は自身の胸に激痛が走るの分かる。

趙雲「主!？」

紀霊「…(こりゃしくったか?)」

後方に飛び退いた紀霊の胸には

横一文字に切り裂かれた服の隙間から見える紅い液体。

楽就「頭様?血が!？」

横一文字に切り裂かれた切り傷。傷は浅く斬られた部分も少ないのだが、朱儁は明らかに【斬る為】に攻撃した。武に関してはこの中で一番弱いであろう何進ですらその事を理解できる。

朱儁「ありや？悪い悪い、避けなかったか…ちよいと本気で斬り付けすぎたか？」

何進「お前何やってんだ手合わせだろこれ！中止だ中」おっちゃん！止めないでくれ。」はあ？」

中止を宣言しようとした何進を止めに入る紀霊、傷を負った張本人が何を？と思ったが、何進の見た紀霊の顔は

紀霊「朱儁將軍は俺を試すつもりで斬り付けたんだろうよ。なら避けられなかった俺が悪い。それに、この程度の傷で負けにされるのは納得いかんって…ねえ、朱儁將軍？」

紀霊の言葉を聞いた朱儁は

朱儁「へえ、軽い奴かと思っただけど割と骨のある坊やだね。お姉さん気に入っちゃったかも」

互いを見つめ楽しそうに笑っている。

何進「なんだってありゃ…」

そんな二人の様子を見た何進は頭を掻きながら溜息一つ、高らかに声を上げる。

何進「止めて悪かったな、再開といこうや！」

まるで子供が友達と楽しく遊んでいる。そんな顔しやがったら中止なんて言えねえじゃねえか…

何進から出された再開の合図、次に動いたのは紀霊だった。

紀霊「次は俺の番だ、朱儁將軍。これを受け切れたら大したもんですよ…」

朱儁「ほう、おもしろい。やってみろ！全て受けきってみせるわ！」

双剣を構え紀霊に対峙する朱儁。だが、その場から動く気は無く紀霊の攻撃を全て受けきる意思表示。

俺は槍を後に引き、前傾姿勢で構える。

パキーン！

紀霊「ハアハアツ…くそつこの戟じゃ耐え切れんか…」

肩で息をし、よろめきながらも朱雋が吹っ飛んだ壁を見やる。

壁は崩れその影響から舞い立つ砂埃で朱雋の姿は確認できないが千首龍撃のダメージはあるはずだ。そう考える紀霊の後から不意に趙雲が声を荒げる。

趙雲「主、後ろですつ！！」

紀霊「何っ！？つぐはあっ」

後ろを向いた瞬間、足を取られて紀霊は地面に倒れこむ。

倒れこんだ紀霊が咳き込みながら見たのは

朱雋「いや、流石に痛かったよ。流石、凱乾殿の弟子だけあるねえ

…けど私の勝ち」

紀霊に馬乗になり、喉元に剣を突き立て爽やかな笑みを浮かべる朱雋將軍その人であった。

紀霊「…ええ、俺の負けです。」

朱雋「いや、危なかったよ。坊や…紀霊だったね、お姉さん気に入っちゃったよ？よし、君には特別に称号をあげちゃおう！」

朱雋はそう言うと皇甫嵩に目配せをし、皇甫嵩は胸の谷間から数枚の紙を取り出すと何進と趙雲、そして紀霊に手渡す。

立ち上がり、皇甫嵩から手渡された紙に目を通す紀霊は驚愕の色を浮かべ

紀霊「ちょ！これって」「さあ、BGMかもーん！」「」

パチン

朱雋が指を鳴した瞬間、どこからともなくドラムロールが聞こえてくる

朱雋「長安で鳴らした私達は大将の目に留まり洛陽へと転属となった…」

皇甫嵩「けどそんな事でへこたれる私達じゃありませんよ」

朱儁「天候さえ良ければ気分次第で何時でも飛んでみせる常識知らず」

皇甫嵩「ダメージを無効にし更なる進化を遂げるべく飛躍しまくる」

朱儁・皇甫嵩「私達投石野郎兵チーム!!」

てっぺんてっぺんてっぺん てっぺんてっぺんてっぺんてっぺんてっぺん
BGM：特攻野郎Aチーム Theme)

朱儁「私はリーダー朱儁將軍、通称【兵A】。着弾点割出と着地の名人、私のような射出回数千回越えの猛者でなければ常識外れの曲者どものリーダーは務まらない！」

何進「俺は何進、通称【大将】。自慢の役職に、兵士は皆イチコロさ。権力かざして兵士から軍資金まで、なんでも揃えて見せるぜ。」

皇甫嵩「私は先輩と同じく將軍の皇甫義信、通称【兵B】。チーム一番の巨乳。投石器開発は頭脳と技術力の高さでお手の物ですよ」

「
趙雲「お待たせ申した、趙子龍だ。通称【兵M】、槍の腕前は天下有数！ 真性？変態？その通り！！」

紀霊「紀周英、通称【兵C】。拳法の凡才だ。大將軍だってぶん殴って見せらあ。けど、姉者達だけは勘弁な！！」

朱雋「私達は非常識の通らぬ世の中に敢えて挑戦する頼りになる投石射出の」

五人「投石野郎兵チーム！！」

皇甫嵩「飛びたい時は、紀霊君に言ってくださいね？」

紀霊「あんたが兵Aと兵Bだったのかよ！！つか変なチームに勝手に入れるんじゃねええええつ！！」

とか言いながらもきつちりポーズを決めている辺りこの男も大概である。

さてさて、洛陽においても紀靈の苦勞は増すばかりなのは確定的に明らか。
これからどうなることやら…

~~~~~その頃の楽就~~~~~

楽就「クスン、僕だけ除け者にされた…」

と庭の棲みに屈みながらのの字を書いている楽就が居たそうなの。

頑張れ楽就！いつか良い事あるさ！！超頑張れ！！

楽就「顕様っ！洛陽ですよ洛陽！」（後書き）

Aチームは兵Aと兵Bを考えた時にずっとやりたいと思っていたネタでした。

あの番組は名作です（キリッ

そしてあの二人が帰ってきた！！

判らない人は【特攻野朗Aチーム】をGoogle先生かニコニコ動画で検索し見てみると分かります。

~~~~更にやらかした別パターン~~~~

華雄「一番身近な異性として鳴らした私たち姉だが、弟は姉としか呼んでくれず我慢できずに弟の布団に潜った。」

張遼「けどそんなことでへこたれるようなウチ等やあらへん！」

華雄「弟さえ居れば理性次第で何時でも一線を越えてみせる倫理知らず」

公孫讚「【姉弟】を【恋人】にし更なる関係を望むべく巨悪な世間を粉碎する」

劉備「私達……」

四人「弟愛^{ぶしこん}武將、姉チーム（しすたーず）！！」

てっれてっーてっれてっー てれてっーてっれれれっー（
BGM：特攻野郎Aチーム Theme）

華雄「私はリーダー、華雄。通称【姉者^{あねじゃ}】。突撃と頭を愛でる名人、私のように引っ張っていく姉でなければ頭の姉は務まらない！」

張遼「ウチは張文遠、通称【姉御^{あねい}】や。自慢のツツコミに頭は大概ボロボロや。自慢の胸で誘惑からハリセンの収納まで、なんでもやってみせるで！」

劉備「お待たせっ劉備だよ。通称【桃香^{ついかね}姉】。胸の大きさは天下一品。ナデナデ抱きつきっ 紅蓮君可愛いなっ！」

公孫讚「公孫伯珪、通称【姉貴】。全て平均だ！それでも剣だって投げてみせるぞ？ けど黒の紐だけは勘弁なっ！／／／」

華雄「私達は弟愛を許さぬ世の中に敢えて挑戦する頼りになる至高の姉こと」

四人「弟愛武将姉チーム！」

華雄「助けが欲しい時は、いつでもお姉ちゃんに言うんだぞ」

てーてーてーでん

~~~~~お終い~~~~~

∴時々自分の発想がわからない。

何故こんな事思いついたのだろうか…（汗

御意見、ご感想お待ちしております。





|| || || || || || || || ||

GW後

柳「という事があったのさ。普通だよな？」

友人「妹居ないけど敢えて言わせろ、異常だろそれ…」

柳「兄妹だから普通でろ？あ、ツモ。親の倍満」

友人「二つの意味で納得いかねえ！！つてか東1局だぞ！？」

そんな作者のGWとGW語の友人との日常。

更新遅くなりました、今回難産です（汗

## 空気は個性（キリッ

~~~~投石野郎兵チーム発足から数時間後~~~~

それなりに広く豪華な部屋、俺はおっちゃんや星達と食卓を囲み、手に持った杯を上げるのを今か今かと待ち構えていた。

何進「んじゃお前等、坊主と嬢ちゃん二人の仲間入りを祝い…乾杯
！」

おっちゃんの言葉を合図に皆高らかに杯を掲げ、各々の杯とぶつけ合う。そう、楽しい楽しい宴会じゅんくの始まりだ。

五人「乾杯っ！！」

乾杯をあげた後は各人が好き勝手に料理をつまみ、酒を飲み楽しむ。一応俺らの歓迎会つてこともあり、朱雋、皇甫嵩両將軍も参加しているわけなんだが…

朱雋「なあ紀霊坊や、大将の部下なんかより私の部下にならない？私のところに着てくれたらいろいろ優遇するよ」
それに特典も大将のところより断然良い！」

何進「ちよ衛！俺から坊主奪おつとするんじゃねえよ！」

何故か俺に寄りかかりおつちゃんではなく自分の部下になれ。と勧誘してくる朱儁將軍。

そしておつちゃんはおつちゃんて狼狽してるし…

紀霊「おつちゃん落ち着け。まあ、特典つてのを聞くだけ聞いてみるとして…朱儁將軍は真名をおつちゃんに預けているんで？」

食卓から立ち上がり朱儁將軍に抗議するおつちゃんを宥めつつ、朱儁將軍の言う特典に多少の興味もあつた俺は取り合えず聞いてみた。俺の反応にニヤリと笑う朱儁將軍は開口一番

554

朱儁「おつと、その前に…坊やとの真名交換を済ませようか。私の真名は衛、受け取り拒否は許さん。つーわけでお前の名前を言ってみろおつ！」

と杯を置いて自分の胸元に手をかけて…

紀霊「って待てーい！！なぜ自分の胸元を開こうとするーやめいっ！」

咄嗟に衛さんの両手を掴み、行動を制止する俺。自分の行動を阻止された衛さんは俺を睨む様になりつつ声を荒げる。

朱雫「なんだよお〜坊や。私の胸じゃ不満か？あん？やはりあれか、坊やも胸か！胸があつたほうが良いって言う助平だつてか！？」

どうやら相当酔っているようで…つか、まだ杯2、3杯しか開けてないよなこの人？

どうにか落ち着かせようと口を開こうとしたとき、不意に皇甫嵩將軍がこちらに歩み寄り口を開く。

皇甫嵩「先輩落ち着いてください。幾らなんでも酔いすぎですよ〜。

「
どうやら皇甫嵩將軍は衛さんと違い暴走していないようで、衛さんを抑えるのを手伝って

皇甫嵩「それに紀霊君が先輩の小ぶりな胸なんかに興味持つわけありません。紀霊君は私のような包容力豊かな胸に興味があるんです、そう、私のように！ あ、紀霊君。私のことは弥依やいって呼んでくださいね〜」

くれるどころかなんかガソリン大量にまき始めたんですけどこの人

！？しかもさりげなく真名名乗ったよ！？

朱雋「ふんっ！寝言は寝て言え弥依。そんな年を重ねることに垂れる脂肪の塊なんか紀霊が興味を持つ訳なかるう。それに無いほうが動きやすい！」

皇甫嵩「そうですねー、確かに大きいといろいろと不便があまりますし…まあ、先輩には解らない悩みばかりでしょうけど。それに胸は母性の塊、お姉さんの象徴！弟属性の紀霊君が興味を持たないわけがありません！！！」

すいませーん、俺を勝手に弟属性にしないでください。いや別に姉が嫌いと言うわけでは無くてですね、周りに何故か姉属性しか居なかったわけではい。決して俺と柳が姉好きと言うわけではなく…

朱雋「坊やは確かに弟っぱいな。なあ坊や、私の事^{えいねえ}衛姉^{えいねえ}って呼んでみる。」

皇甫嵩「紀霊君、私も呼んでみて〜お願い」

紀霊「なによ衛姉、弥依姉？（キリッ）」

んでまあ、話続けると俺は姉好きの称号が欲しいわけでもなんでも

無くて、つまり…

楽就「顕様ー！！」

今度は何だよ！って彩？

楽就「えへへー 顕様の背中」

喧嘩している衛姉と弥依姉を他所に考え事をしていた時、背中に飛びついてきた彩。俺はいきなりのことに戸惑いながらも後に顔をむける。

紀霊「彩…お前どうして酒臭っ！！」

顔を少し後に向けただけでも香ってくるアルコール臭、どう考えても飲みすぎているようだ…

楽就「もう、僕は臭くないですって〜嗅いで見てください！絶対良い臭いしますから！」

俺の言葉が気に入らなかったのか、俺の首に手を廻して更に密着してくる。

当然近ければ近いほど臭いも近づいてくるわけで…

紀霊「こらっ、抱きつくな馬鹿っ！ 普段のお前は別に臭くないからっ！ 今まさに酒臭いだけだから！」

当然酒臭さも増すわけで…

楽就「お酒ー？ 変な事言わないで下さいよ、僕が飲んでるのは蜂蜜水ですよ？」

そう言いながら楽就は俺の正面に来るように位置取る。条件反射なのか、つつ楽就を抱き上げる形を取ってしまった俺の様子を他人が見れば

椅子に座る俺の上でお姫様抱っこされている楽就。

にしか見えないわけで、っーか蜂蜜水？…マサカネー

趙雲「主、いや、申し訳ない。彩がこれ程までに酒が駄目とは…」

紀霊「やはり貴様か！！」

嫌な予感というものは何時の世でも殆ど当たるわけで…ってか、こ

の馬鹿どうしてくれよう？

紀霊「星：お前後でお仕置きな。」

趙雲「おお！是非是非お願いいたす！」

…最近コイツには何しても悦ぶだけな気がしてきたんだが、俺の気のせいかな？

紀霊「…とにかく彩寝かせてくる。おっちゃん、後宜しく。」

俺はおっちゃんに一言、周りを見渡す。

俺が彩に気を取られている隙に言い争いを再開した衛姉と弥依姉。

朱雋「いや、それはおかしい。ペガサス流星拳の姿勢はこうだった
！」

皇甫嵩「何言ってるんですか先輩！もう少し腕の位置を上げないと
小宇宙が高まらないじゃないですか！」

先ほどから縄を手にどこか遠くに居るような感じに妄想している星。

趙雲「あぁっ／＼／＼ 主、もっと打って下され…」

存在感薄すぎて「あれ、いたの？」としか言いようがないおっちゃん。

何進「坊主酷っ!?!」

……………何この力オス？

取り合えず衛姉に弥依姉、それはペガサス流星拳の構えとちゃう、
廬山昇龍覇の構えだから！

そして星、お前読者からも自重しろって言われてただろっに…いい
加減帰って来い！

ついでにおっちゃん、俺の思考を読むな!!

紀霊「あーもう…、取り合えず彩寝かせてくるから少し席外す！お
っちゃん！何処か空いてる部屋ある？」

何進「それなら坊主と嬢ちゃん達用に3部屋用意してあるからどれ

でも好きなとこ使ってくれ。」

紀霊「あい、ちよいと行ってきます。」

おっちゃんから部屋の位置を確認した俺は、混沌とした宴会場から逃げるように廊下へと歩き出す。

彩は勿論先ほどと同じお姫様抱っこ。酔っているはずなんだけど…さっきより首に廻された腕の力が増したのは気のせいか？
つか、こいつ酒に弱いのか？

楽就「顕様〜犬ですよ犬〜」

紀霊「犬なんざどこにも居らんがな…」

楽就「え〜顕様の目の前にいるじゃにやいですか〜」

彩はそう言い笑いながら自分を指差す。

紀霊「…お前が犬？」

いや、まあ、確かに子犬チックなところは有るけれど…

楽就「そうへすよ、僕は犬で頭様がご主人様。知ってまふか？犬つて忠誠心が高いんれふよ」

おーい呂律回ってねえぞー…

紀霊「まあ、主人と部下つて上下関係だから似てるけどさ…確かに忠誠心が高いのは知ってるがそれがどうした？」

聞き返した俺に笑みを見せながら彩は更に続ける。

楽就「だから僕も…忠誠心が高いんですよ。もう一生付いていきますからねご主人様 明日から修行よろひくお願いしまふ」

そう言つと彩はそのまま目を閉じて小さく寝息を立て始めた…どうやら寝むってしまったようだ。

ご主人様ねえ…彩がこんなに酒に弱いとはね、いやはや怖いもんだ…お、部屋発見。

行儀は良くないが、足で扉を開けた俺はゆっくりと寝台に彩を降ろして掛け布団を寝かしてやる。

紀霊「今はゆつくり休みな、明日から仕事に修行と大忙しだからな。まあ、彩だけじゃなく俺もいい加減強くないとな…」

彩の額に頭を置いて優しく撫で付ける。まったくもって手のかかる部下ですこと…

まあ、もう一人の部下へんたいに比べれば全然可愛いものだから良いんだけどね！

彩の額から手を離し、音を立てないように部屋を後にした俺は廊下を歩く途中、ふと月を見上げ今日の事を思い返す。

おっちゃんへの仕官が無事成功したこと。

二人の將軍との出会い。

彩の修行の事。

そして、俺の心の中で一番燻っている事項

【朱儁將軍に完敗した。】

紀霊「もっと強くないとな…」（おとちゃんいるか？）「

おとちゃん」(おつよどうした?)「

衛姉、勝手な俺ルールで悪いんだけど…衛姉倒せなきゃ姉者を助けるなんて出来ないって決めました。

ま、こんなところで躓いてるようじゃ今後勝ち残る事なんて出来ないでしょうし…

紀霊「(…北斗神拳を習得したい。)

だから、衛姉に勝つ為の手段は選びませんよ?

空気は個性（キリッ）（後書き）

遅筆＋多忙でここまで遅くなるとは（汗）

今回は某聖帝様の影響か文章がいつもと若干違います。（柳の思い
過じじじゃなきやイイナー）

五月の更新については若干遅めになりますが、早く掻き揚げたいジ
レンマもある…（笑）

御意見・ご感想お待ちしております。

目指せ！

マスター！！【前編】（前書き）

仕事が終わりに速攻で柳の部屋を訪れた友人は開口一言

友人「柳ー麻雀やろうぜ！」

柳「え？いや、俺執筆中…」

友人「もう後輩二人は準備してるぞ早くしろ。」

柳「既に俺は強制参加だった訳か…今日だけだぞ。」

その日…柳大爆発！

～次の日～

柳「よし、大体出来たから仕上げを「柳ー麻雀やるぞお！」またか
！」

友人及び後輩による強制連行

柳「ツモ、大三元」

3人「マジか!？」

その日は結局負けただけ役満上がったから満足w

〈そんな柳と友人の日常〉

原作で彼女達のファンの方ごめんなさい。完全に原作キャラが破顔拳されました(キリッ)

目指せ！

マスター！！【前編】

「～～～將軍府～～～」 府とは役人の職場でここでは大將軍何進以下將軍達の職場だと考えて下さい。

紀霊「…」

俺は今、將軍府の廊下をひたすらに歩いている。

何進のおっちゃんに仕官して2週間、大將軍副官として起用された俺はおっちゃんに上申されてくる書簡の処理に終われる毎日で、星や彩は兵士の訓練、警邏等の手伝いをしつつも稽古に励む日々を過ごしている。

しかし、流石は大將軍ともなると毎日毎日大量の書簡が来て欲しくもないのに来る訳で、最初の頃は悪戦苦闘しまくりだったなあ…まあ、重要案件以外は俺が確認して印綬押せとか無茶を言うおっちゃんのせいでもあるんだがね…。

ん？そんなに忙しいならなんで廊下なんか歩いているんだって？

その理由は、俺の手にある二つの書簡。この書簡を提出した人物の下に向かっていている最中なんだよ。

歩く事十数分、とある執務室に辿りついた俺は大きく深呼吸を1回する。

紀霊「ここが衛姉の部屋か…」

扉に掛けられた木札に記された文字は【朱雋の部屋】。

俺はその木札を確認して扉を開けると中に入る。中に居るのは…

朱雋「お、どうした顕？」

皇甫嵩「あ、顕君おはよー。どうしたのかな？」

ご存知兵A、Bこと洛陽を代表する二將軍が机を挟んで座っていた。やはり弥依姉もここに居たか、丁度いい。そう思いながら俺は二人の間にある机へと書簡を二つ置いて口を開く。

紀霊「衛姉、弥依姉。何この書類？」

俺が机に置いた二つの書簡、二人がおっちゃんに上申しようとした案なんだろうけど…

朱雋「何って、私の出した洛陽守備軍の再編成案だろ？」

皇甫嵩「こっちは私の兵器開発費の申請書です。何か問題があったの？」

俺が置いた書簡に心当たりがあった二人、それぞれが自分の出した案を口にするんだが：何か問題があったの？といった表情で俺を見てくる辺り自覚なし。か：

紀霊「なんで投石器専門部隊の総数が二万とか阿呆な数字になってんだ衛姉！それに弥依姉、来月の兵器開発費の予算を申請するのはいいが今月の三倍ってどういうことだ！！」

文句があるから俺はここに来てるわけなんだがね。

洛陽守備軍の総数は近衛兵二万と予備兵約三万を除いても五万はいる。何をどうしたのか衛姉は自分の配下部隊の一部を既に投石器専門部隊として運用しておりその数は三千程度、それが二万に膨れ上がるとなれば総兵力の四割を投石器部隊が占めることになり言うなれば高さ10mに張られた一本の縄の上でリンボーダンスを踊るほどにバランスが悪い。もっと簡単に言えば某有名RPGで勇者以外を遊び人で構成しているのと似たようなものだ。

弥依姉が申請した先月の兵器開発費は恋の食費半年分、三千人規模の軍隊が約二ヶ月間を余裕で運用できる額である。来月分として申請された額を単純に計算しても恋の食費1年半分、三千人規模の軍隊が約半年運用できる程に巨額な資金。

仕事に慣れ始めたばかりの素人目からしても、正直二人の提案は無茶振り過ぎておっちゃんに通せるような書簡ではない。だから俺は本人達に問いたただそうとこうやって足を運んだわけなんだ。

朱雋「えー良いじゃん二万くらい。どうせ洛陽の守備とか周辺の賊退治にしか使わない兵力なんだしさ。」

皇甫嵩「お願い顕君！その予算が通らないと新しい投石器の開発が出来なくなるんだよう〜」

紀霊「駄目なものは駄目です！」

ふて腐れたように頬杖をつきながら俺を見る衛姉と俺に両手を合わせて拜んでいる弥依姉。だが、俺が妥協するわけにもいかないため駄目なものは駄目ときっぱり言い聞かせる。

すると衛姉が不意に立ち上がったと思ったら俺の右腕を抱きしめて耳元に顔を寄せる。

朱雋「なあ顕、お姉さんのお願ひ。聞いてくれないかなあ〜？聞いてくれたら、今夜辺りにでもお姉さん色々と頑張っちゃうんだけどな〜」

紀霊「はあ？」

衛姉に意識を集中していた為気が付かなかったのだろうか、左腕に

柔らかい感覚を感じて左を向くと何時の間にもやら弥依姉が衛姉と同じく俺の耳に口を近づけていた。

皇甫嵩「顕君が私のお願い聞いてくれたら…私の事好きにしても良いんだけど／＼／＼ お願い…聞いてくれないかな？」

紀霊「ちょ！弥依姉まで何やってんだ!？」

俺の右腕に伝わる感触は健康的で滑らかな肌触り、程よく肉付き張りの良い衛姉の太腿。そして左手にある感触は、少しの振動でも崩れてしまうのではないかと心配になる程に柔らかくて温かい弥依姉の両胸。

A・B「ね、顕。お・ね・が・い」

二人の声が重なって発せられ、俺は脳内に直接問いかけるような感覚を覚える。だが、

紀霊「……………ふん!」

両腕に絡みつく二人を振りほどいた俺は瞬時に二人の耳下を指で突く。

朱雋「うおっ!？」

皇甫嵩「きゃっ!？」

振りほどかれた二人は、疲れた瞬間小さく悲鳴を上げる。そして次の瞬間、自身の体に起きた異常に気が付いて大きく狼狽し始める。

朱雋「か、体がつ？」

皇甫嵩「わ、わた私浮いてるっ?!」

立っている事すらままならないのかそのまま床にへたれ込む二人。俺は突き刺した指と床に倒れた二人を交互に見ながら効果を確信したので衛姉、弥依姉を担ぎ上げて仮眠用寝具に優しく寝かしつけて書簡を手にとって部屋の扉を開けて二人の方を向く。

紀霊「二人には平衡感覚が一時的に麻痺する秘孔を突いた。多分だけれど力が入らないまま宙に浮いてるような感じになってるんだと思う。：衛姉の案は却下、弥依姉の予算は先月と同じ額に修正しておくからそれで勘弁して頂戴。それと、俺だから冗談で済むだろうけどそんな事他の男にやったら勘違いされて面倒な事になると思うよ。ま、一時間ほどで元に戻ると思うからそれまで反省しておくこと。んじゃ二人ともまたね。」

俺はそれだけ言つとさつさと元来た道をゆつくりと歩き出す。既に時間は昼に近く、その日一日の書簡は緊急の物以外は午前中に提出される。大体の書類は採決までしてあるから今日の書類仕事は弥依姉の予算請求を修正するだけで終わりのはずだ。昼飯時までに終わらせてさつさと飯でも食いに行こう。

紀霊「まったく、自分の執務室で仮眠取る時とか昼飯の時しか安らかに過ごせんのか俺は…」

俺は弥依姉の書簡を読みながら修正箇所を考えつつ執務室へと足早に歩き始めた。

~~~~~紀霊の執務室~~~~~

紀霊「んでだ、何でお前がここにいる…」

安らげるはずの執務室、誰にも邪魔される事無く自分の仕事に没頭できるはずの執務室、ちよくちよく仕事が終わらなくて残業してそのまま次の日の仕事を行って最長7日は籠った執務室、俺のテリトリ―たる執務室に今正に異物が混入していた。

趙雲「何故ここにいるとは…部下が主の部屋に来る事が何か問題おありで？」

星彩コンビこと真性な方、趙雲が何故か俺の執務室に居たんだよね…

紀霊「別に報告とかそういうのなら俺も咎めはしないんだがな、何  
でお前は俺の執務室にある寝具に裸で寝ているんだ？服着ろ。」

俺が入ってきた瞬間、体にシートっぱいものを巻きながら「お帰り  
なさいませ主、縄にする？鞭にする？それともぜ・ん・ぶ？」とか  
言ってきたやつだ。

趙雲「むう、主には遊び心というものが足りませぬぞ／＼」

紀霊「それは遊び心じゃなくて邪よこしまな心だ。んでお前と彩は午前中は  
稽古、午後はお前が警邏担当だったよな？何かあったのか？」

稽古が終わったならば彩も一緒に居るはずだ。てか一緒に居てくれ  
たらこの馬鹿はこんな奇行に走らずに済んだはずだ。

趙雲「いや、少しやり過ぎまして、気絶してしまいましたので屋敷  
で休ませております。」

紀霊「そういうことか、ならしゃあねえや。だからってお前が阿呆



な事して良いわけじゃないんだがな。ここ職場だぞ？お前は何も思わないのか？」

趙雲「何時人が入ってくるか分からない危機感のある状況での情事は刺激的だと聞いたもので、我慢できずやりもつした。無論反省も後悔も御座らん！」

紀霊「少しは反省しろ！取り合えず手を出せ、足も出せ！」

俺は星から縄を奪い取って両手両足を縛り上げる。縛る途中、星の息がどんどん荒くなっていったがそんな事は無視だ無視！

ついでに余った縄で馬鹿の口を縛り声を出せなくしてと…後は布団を被せて

変態「むーむ、んうっ／＼／＼」

紀霊「また帰ってきたときに裸でいるとか勘弁だから縛っとく、取り合えず飯食って帰ってきたら開放してやるからそれまで反省しておけ。」

それだけ言っただけで何か言いたそうな星を無視し財布を持って部屋を出る。木札を【不在】に変えた俺は市街地にある適当な食堂目指して歩き始めた。

~~~~~洛陽市街~~~~~

漢王朝最大の都市、首都洛陽。その市街地を俺はぶらぶらと散歩をしている。

星みたいに行きつけの酒屋やメンマが旨い店を持たない俺はその日の気分に合わせて適当な店に入る事が多い。今日の気分は少し歩いてみたかったのもあって先程からぶらついているのだが。

女の子「や、止めてください」

モヒカン「うるせえ！お前等は黙ってシヨバ代払えば良いんだよ
！」

モヒ…カン？「ああん？最近だらしねえなあ？」

どうもならず者に絡まれている三人の女の子にエンカウトしてしまっただ…つか後者のモヒカンなんでパンツ一丁なんだよ…

女の子2「いきなり出てきてシヨバ代払えなんて、ふざけないで下さい！！」

モヒカン「ふざけてないっての〜なあ、兄貴！」

モヒパン「ほいほいちゃーはあん？」

あちゃー、こりゃ面倒な奴等に絡まれたんだなあの子達、つかパンツ一丁の変態はちゃんと喋れよ。しかも舎弟のモヒカンもなんて言葉通じてるんだよ！

モヒカン「ほら見る、兄貴もシヨバ代大人しく払うなら痛い目にはあわせないって言ってるんだぞ？さっさと払いやがれ！」

女の子「凄いです！モヒカンのおじさんは変態さんの言葉が分かるんですね！あれ？そういうことはモヒカンのおじさんも変態なんでしょうか！？」

モヒパン「アーツ！？」

モヒカン「てめ、このガキ！兄貴が変態ってショック受けてんじやねえか！謝れ！兄貴に謝れ！」

あ、ショック受けたんだ。てか変態って言われたくないなら服着れば良いのに…っと近寄りたくは無いが目の前で乱暴事起こされると明日の書簡増えそうだし、俺自身嫌だから助けるか。

俺は周りに集まる人ごみを掻き分けながら女の子とモヒカンの間に立つよう移動する。

モヒカン「なんだあてめえ？俺等の邪魔すんじゃないやねえよ！」

紀霊「いや、主にその変態が目にも毒過ぎて無理。それに可愛い女の子達脅してお金巻き上げるとか、見逃せるわけ無いじゃん。ここじゃ兵士達に見つかるしさ、こっちこいよ。」

俺は路地裏を親指で指すジエスチャーをして裏路地に入る。それにモヒカン二人に女の子三人も後に続く。いや名前知らないけど女の子達、隙出来たんだし逃げようよ…なんで素直に君達まで付いて来ちゃうかなあ…

~~~~少々お待ち下さい~~~~

アタアツ！ホア〜アチョーウ！北斗、虚無指弾！

モヒカン「げふらっ！？」

モヒパン「お〜うっ／／／」

紀霊「数日間の記憶を失って、変な声出して顔赤らめてんじゃねえ変態！つたく、君達無事か？」

モヒカン達の顔に突き刺した指を抜きながら女の子達の方を振り返る。

女の子「あらあら〜有り難う御座いました〜なんとお礼を言っていないのやら。」

女の子2「危ないところを有り難う御座いました。しかし、指先一つで倒すだなんて気孔の達人か何かなんですか？」

女の子3「お陰で助かりましたー！…うっうっ！ありがとう御座います。」

いや、別にお礼は良いんだけどさ〜俺自身もストレス解消したかったし。

紀霊「無事で何より。ってそだ、取り合えず事情も聞きたいし昼飯でも一緒にどうかな？勿論俺の奢りだ。」

俺はそう言って表通りへと歩き出す。後からは「あらあらどうしましょつか〜」や「うっう〜！久しぶりに温かい御飯が食べられます！」、「そんな、助けてもらって上にご迷惑じゃ…。」といった声が聞こえてくる。∴何故だろう、目から汗が出てきそうな悪寒よかんがする。

目指せ！

マスター！！【前編】（後書き）

さあ、後編を各作業に戻るんだ！

とここでアンケート。

ちよいちよい本編の合間に番外編を挟むのが柳の息抜きなのですが、次はどういった番外編がいいでしょうか？

それとも素直に本編進める馬鹿柳！と言われてしまっんでしょうか？

それも含めて御意見、ご感想お待ちしております。

【50万アクセス記念】番外編 KOF VS 北斗 時空を超えた闘い（前巻）

この作品はナム豆サトシ拳社友者先生の連載作品『烈火の拳聖』

魔法少女リリカルなのはStrikers』とのクロス作品となっています。

社友者先生、15万アクセスおめでとう!!



~~~~何進の屋敷【紀霊の部屋】~~~~

紀霊「ああ、今日も今日とて衛姉達のやらかした後始末に星のお仕置き…疲れた。」

最近では俺の業務は増える一方、主な原因は勿論兵A Bコンビがやらかした事案処理と俺の部下、星彩コンビの修行。つーか衛姉達自重しろよまったく…

紀霊「まったく、星は縛っておいたから邪魔は来ないだろうしさっさと寝よ。」

俺は寝具に倒れこみ目を閉じる。よほど疲れていたのだろうか、すぐさま睡魔に襲われて意識を手放してしまった。

????「つ…頭！」

女の人の声、俺の名前を呼んでいるようだが生憎俺は眠いんだ。もう少し寝かせてくれよ…

紀霊「ん、後三時間…」

僅かに口を動かしてそう答えた俺はそのまま寝返りを打つ。

???「まったく…こうなればアレで起こす他あるまいな。」

起こす？俺を？おいおい、俺は自分が寝ている所を邪魔されるのが大嫌いなんだよ？

俺を起こしなしたらそりやもう暴れるよ？「ねみいよ〜！」とか言いながら暴れちゃうよ？

だが、そいつは俺の威嚇（っても口に出しては無いが）を無視して耳元に気配が近寄る。って耳元!？

???「頭、起きないとお姉ちゃんが食べちゃうぞ?」

その言葉とともに俺の耳をペロリと舐め。吹きかけられた息と舐められた感触に全身にゾクツとした悪寒が走る。

紀霊「つゝう！誰だこんな姉者みたいな事やりやがるのは!！」

すぐさま跳ね起きた俺は気配から飛び退いてそう叫ん…だ…

紀霊「あ…ねじゃ…？」

華雄「私みたいって顕にこんな事して良いのは私位なものだろうに…なあ顕？」

俺の姉弟子で、

婚約者で

最も愛しい存在がそこに居た。

~~~~~【50万アクセス記念】番外編 K O F V S 北斗 時空  
を超えた闘い~~~~~

西涼に拠点を置く董卓軍の將軍として活躍する姉者。洛陽の大將軍の元で副官として働く俺。  
現時点では出会うはずも無い俺と姉者が出会う。本来なら有り得ない事実に俺は多少混乱していたのかもしれない。

え？董卓軍が洛陽に来るとかって報告も受けてないし…

そう思いながら周囲を見渡す。

紀霊「ここっておとやんと会う夢の世界？ってことはおとやんの仕事か？」  
顯「いや、でもそんな事をして何の意味があるって…」

華雄「うーっーっー！」

紀霊「へ？ほびゅらっ！？」

考え事に浸っていた俺に姉者が抱き付いてくる。いや、ごめん。無視したのは悪かったけど姉者もこの状況を不思議に思おうよ…

華雄「ふふふ…ああ、この抱き心地に匂い。久しぶりの顯だあゝ／＼」

姉者は俺の胸に顔を埋めて左右に振りながら抱きつく力を更に強める。姉者の髪から香る甘い匂いと細く柔らかい感触に俺も俺でなんかどうでも良くなり始めてしまい…

しんちゃん「おお！甘い甘いぞこの空間！」

おとやん「くそっ！リア充爆発しろ！！」

そうになったのを邪魔してくれた姉弟。激振孔でも突いてやろうかこいつ等…つかしんちゃん久しぶり〜姉者の体を抱き寄せて頭を撫でながら出歯亀している二人を睨みながらこの状況について質問を投げかける。

紀霊「んでおい、どうしてこうなってるのか説明しろおとやん。」

おとやん「悪い悪い。一言で言つとお前等には一時的に別の世界に飛んでもらうからよろしく。」

紀霊「はあ?」

いきなり姉者も呼んでおいて何言ってるんだこの神(笑)は…てか姉者、首筋に何回もキスしないで。それくすぐったいって。取り合えず姉者を引き離しつつ更に話を続けようとした俺に

おとやん「つとそろそろ時間だからいつてら〜」

その言葉を合図に俺と姉者の体が光りだす。って姉者!呆けてないで少しは慌てようよ!!

おとやん達が見えなくなっていく中、どうしようもなくなった俺は有りつ丈の音量を籠めて叫んだ。

紀霊「しんちゃん！！おとやんのDドライブの中見てみる！きつと面白いものが見れるぞ！！」

てめっ何言つてやがる！とかわかつた」といった声が微かに聞こえる中、俺は白い光の中に包まれていった。

次に目を開いた時、俺が見た光景は…

多くのカメラや観客らしき人間達、そして湧き上がる歓声に揺れ、己の上で闘う戦士を今か今かと待ち構えている闘技場だった。

状況を把握し切れていない俺は周囲を見ながらふと自分の服に違和感を覚える。

紀霊「此处は？ うわ、これってケンシロウの服じゃん？と姉者の方は何時もと変わらないみたいだが…」

赤いシャツの上に両肩にプロテクターの付いた黒い革のベストを着こみ、同色の皮のパンツをはいていた。右前腕部には黒いアームガード、左には包帯が巻かれているこの服。どうみても世紀末救世主です。有り難う御座いました。姉者は姉者で何時も通り綺麗だし…どうなつてんだこりゃ？

華雄「どうしたのだ、顕？何時も冷静で居ると私に言っているお前  
が取り乱したりして…」

紀霊「いや、いきなり訳の分からない場所に連れてこられたら普通  
はこうなるって姉者。」

長安に居た時と変わらぬやり取り。少し安心してしまつ自分も自分  
だが、動じない姉者もどうかと思うぞ俺は…

姉者と二人、そんなやりとりを交わしている中、不意に声をかけら  
れる。

???「あ、あの。すいません？」

女の子の声？そう思い、見やった女の子は…

紀霊「嘘だろ？ギンガ・ナカジマじゃん」

リリカルでナツクルな少女でした。

華雄「顕、誰だその女は？まさか浮気っ？私というものがありな  
からお姉ちゃんは悲しいぞー！」

紀霊「違つつて！そんなんじゃねえよ姉者！」

姉者に弁解をいれる俺に、また声をかけてきた人物。この声は男の声か？

キョウ「ギンガの事を知ってるんですか？」

紀霊「うわっ、草薙京？本物？燃え太郎さん？」

あの留年の代名詞！？フライ揚がった人！？何ここ！？なんなの！？

キョウ「草薙京？誰ですか？それ。俺の名はキョウ・アーデルハイド。ドっていいですけど」

草薙京を知らない？アーデルハイド？何かが変だ？って考えても解らんなら聞くしかあるまい。

紀霊「アーデルハイドはルガールの息子の名前だろ？」

いや、しかし1人はKOF、もう1人はリリカルなのは。俺と姉者は恋姫だし…なんなんだどこかに共通事項があつてなのか？そもそも何故ここに呼ばれた？此処って確か97のステージにあつたよな？それに草薙京のそっくりさんとリリカルのギンガの存在。俺達が



いた世界とは異なる場所なのか？

わからん、分からん事だらけだ…

華雄「おい、顕！あの男から話しかけられているぞ！名前を教えてください  
欲しいそうだ。」

思考の渦に身を投じた俺だが、不意に掛けられた姉者の声に意識を戻す。

紀霊「うおっ？ごめん姉者。俺の名は紀霊つていいいます。字は周英つていうんですけど。お二人は……、キョウ・アーデルハイドさんとギンガ・ナカジマさんで間違いない？」

キョウ「はい、そうです。所で、紀霊さんは何故俺達の事を？」

嘘は言っている空気じゃないし本当っぽいな…まあ、俺みたいに転生者がいるならそっくりさんが居てもおかしくは無いか…だが、後で確認する必要は有りだな。

紀霊「いや、知り合いに似ていただけだ。それにしても名前まで同じって不思議な事があるんだな？はははは……」

ギンガ「あの、そちらの女性の方は？」

ギンガさんが俺の横にいた姉者に尋ねる。

華雄「やっと私の番か。無視されているのではと不安だったぞ。私は華雄という。字は乾香だ。華雄と呼んでくれて構わん。私は頭のお姉ちゃんであり婚約者だ」

キョウ「華雄さんですね。俺の事はキョウって呼んでください。よろしく願います。それで、お二人は次元漂流者なんですか？」

まさか草薙京の口から次元漂流者の単語を聞くとは……って事はリリカルなのは寄りなのか燃え太郎は？

華雄「次元漂流者？何だ、それは？私はあまり難しい事は分からんのだが」

まあ、姉者に解る訳無いだろうし俺が答えるしかないか。

紀霊「ああ、俺が答えるよ。キョウ君、俺達は……」

取り合えず俺の知っている範囲でだが、第97管理世界の出身（多

分)であり現代から1800年程昔の人物である。ということは伝えた。勿論姉者には聞こえないようにだ。聞いても信じられるものじゃないしあちらの二人も半信半疑だったようだがどう考えても不思議なこの空間が何よりの証拠となって納得してくれたようだ。つかそれより信じられないのが…

紀霊「何だって？キヨウは20歳じゃないし、ダブってもいないのか？」

彼が高校留年もしていないし俺よりも年下だったって事だった。納得いかねえ…。

さて、自己紹介もおえた事だし彼に聞きたい事があつたんだよねー

俺はキヨウ君に近づいて他の二人には聞こえないように囁く。

紀霊「あんたも転生者か何かか？」

キヨウ「転生者？何ですか？それ」

キヨウ君は嘘言ってる感じはしないし…俺が心配性なだけか。

紀霊「違うのか。いや、何でもない。忘れてくれ」

それから四人で何気ない雑談をしていた。ついても会話の主軸は女性陣で…仲良くなっているのは良いんだけど何時の時代も恋の話は盛り上がるようで、俺と姉者の馴れ初め。そして告白の台詞：今思うとかなり恥ずかしいんだなそれ。何この公開処刑？ それと姉者よ、告白のシーンを再現しようとか言わないでくれ。まあ、そんな会話から逃げるようにタバコを探そうと服を手探りしていたら

紀霊「何だこれ？」

上着のポケットから白い封筒が一つ出てきやがった。どうやらキョウ君の上着にも同じものが入っていたようで、俺たちはその封筒の中身の手紙に目を通す。

『キングオブファイターズに参加いただき、ありがとう。君達にはここで対戦を行ってもらおう。武器やそれぞれの特殊技能の使用も許される。時間は無制限だ。どちらか一方が戦闘不能となればこの勝負は終わる。それぞれ一回だけ、ストライカーという助っ人に5秒間力を貸してもらおう事が出来る。君と一緒に此処に来たパートナーがストライカーだ。この世界から出るためにはこの戦いを行ってもらわなければならない。勝敗に関係なく、終了後はもとの世界に帰れるので心配しないでくれ。健闘を祈る。BYE』

中にはそう記されていた。

紀霊「Rって、ルガールかよ？つか俺がKOF？良いの！？草薙京と闘えるとか夢みたいなんだけど！？」

キヨウ「紀霊さん、KOFという物を御存じなんですか？あと、草薙京って？」

むう、KOFを知らないって完全に【なのは】寄りなんだろうな…

紀霊「KOFは対戦型格闘ゲームってやつだ。この世界は其れを再現されてるみたいだ。草薙京の事は、お前は知らない方が良い」

まさか自分と同じ格好をした人間がその主人公的な立場にいるなんて聞いたら…後その人留年してるとか色々ネタはあるけどキヨウ君が聞いてもどうしようもないだろうしな、黙っておく事が吉かねこりゃ。

アナウンス『キヨウ・アーデルハイド様、紀周英様。ステージにお上がり下さい。ストライカーの方もお願いします』

不意に会場にアナウンスが流れ俺たちはステージに移動しながら対峙、まだ始まる前なので多少言葉を交わす余裕があるようだ。

紀霊「へえ、こんな作りになってたんだな。2Dじゃ分かりにくかったぜ。キヨウ君、どうやら此処から出るためには俺達は戦わなくちゃいけないらしいし。正々堂々、勝負しようぜ！」

キヨウ「はい、紀霊さん。一つ良いですか？俺は魔導師で、魔法を使えますけど紀霊さんは大丈夫ですか？見た感じ、何か拳法を使われるようですけど。獲物もないですし」

やっぱり魔法使うのかよ、炎だけでも厄介そうなのに……  
大丈夫だと答えようとした俺だが、姉者の言葉に遮られた。

華雄「頭を甘く見るなよ！頭は万夫不当の豪傑で私の自慢の弟だぞ  
！！！」

キヨウ「じゃあ、俺も一人の拳法家として『草薙流』で戦わせてもらいます。」

おいおい、姉者も過大評価しすぎだしキヨウ君も真に受けちゃってるよ……火傷程度で済むのか俺？といっても、そう簡単に勝たせる気は毛頭ないけどね。

紀霊「やれやれ、褒めすぎだ姉者。まあ、それなりにやるほうだからキヨウ君、遠慮せずにかかってこいや。」

俺とキヨウ君は互いに構えて開始の合図を待ち、姉者とギンガちゃんにはステージ脇で二俺たちを見守っている。

華雄「頭！！負けたら承知しないぞ！！危なくなったら、お姉ちゃんがスト何とかとして頭の事を助けてやるからな！！」

姉者は何処からか大斧を取りだし俺に声援を送ってくれる。…それなら俺の三華尖があっても良かったんじゃないの？

一方のギンガちゃんもリボルバーナックルを装備してキョウ君に声を送っているし…なーんかどっちも負けられないって気分になるな…

ギンガ「華雄さん、ストライカーです。キョウ君頑張ってね！勝ったらキスのご褒美をあげる」

華雄「そ、それなら頭！お前が勝ったらお姉ちゃんは抱きしめて接吻をして撫で撫でしてやる！！」

ギンガ「じゃあ、私は……、キョウ君が勝ったら膝枕を！！」

華雄「むむむ、何をおおお！！」

ギンガ「うう、負けませんよ！！」

姉者とギンガちゃんは俺たちそっちのけでヒートアップしているよ  
うで、その後も勝利のご褒美に何をしてやるかで競い合っていた。

しかし、最後の方にはとても人前では言えないような事も口にして  
いた後に二人とも気付いて赤面し、黙り込んでしまった。

紀霊「応援してくれるのは嬉しいけど……」

キョウ「この場には俺達以外も居るってことに気付いて欲しかった  
ですね」

互いに苦笑い。だが、最愛の人の声援というものはやはり良いもの  
で俺もキョウ君もやる気十分。後は開始の合図を待つだけだったそ  
の時、それまで演奏されていた『ケチャ』が突然止まりシンセサイ  
ザーとギターによるBGMに切り替わる。

紀霊「お、この曲は『ESAKA』じゃねえか？ 雰囲気が出て来た  
ぜ。ごほん、っん、っん。あー、あー。これで良いか」

俺はのどの調子を整えて低い声を出す。

アナウンスから『ザバトルオブレトビューションデッサイドオブデ  
ステニー』という声が聞こえる。メーカーが違うと突っ込みたかつ  
た俺だが即座に「転龍呼法」で体に力をみなぎらせる。

この技は普段制限される人間の潜在能力を100%発揮させるもの  
でこれで準備は完了、キョウ君も準備万端の様だしやるとしますか。



キヨウ「行くぜ！」

紀霊「キヨウと戦うならこのセリフだな！すぐ楽にしてやる！」

それから俺たち二人の対決が始まった。

キヨウ「喰らえ！！！」

キヨウから放たれた地を這う炎『闇払い』。それに対する俺は素早い腕の振りで鎌鼬を作り出す。

紀霊「烈風拳！じゃなかった、伝衝烈波！！！」

キヨウの炎と紀霊の鎌鼬が互いに相殺し合う。だが、相殺するのを見る前に紀霊は空中に飛び上がって次の攻撃、十字型の衝撃波をキヨウに放つ。対するキヨウは其れを『鬼焼き』で迎撃する。

紀霊「南斗爆星波！！ぐわっ！！！」

キヨウ「うおおおりゃあ！！！」

キヨウの攻撃が勝ったようで爆星波を打ち消しながら紀霊に直撃する『鬼焼き』、しかし紀霊は後ろに反転し着地を取る。

紀霊「『鬼焼き』か。優秀な対空技だぜ。」

俺の呟きに何何を思ったのかキヨウ君は手を止めて話しかけてくる。

キヨウ「紀霊さん、『草薙流』を御存じで？」

紀霊「ああ少しばかりね。(『闇払い』を使っている所を見ると、95以前をベースにしてるみたいだな。なら接近戦で流れを掴むか。)  
行くぜキヨウ！」

キヨウ「はい!!」

紀霊「ユクゾ!!」

俺は掛け声と共にキヨウ君の方へ一瞬で距離を詰める。

『北斗無想流舞』、発動後の隙が非常に少なく拳句にどのような攻撃もつなげる事が出来る一種のバグ技だ。移動しながら目にもとまらぬ程のスピードでキヨウ君に下段からの抜き手を放つ。だが、流石は草薙流、キヨウ君に俺の攻撃は阻まれてしまう。だが、更には高速移動を続ける。上下左右、縦横無尽に動き回り、キヨウ君のガードの隙間に確実に攻撃を通す。俺は、徐々にではあるがキヨウ君

へのダメージを蓄積させていった。このまま優位を保つてと思っ  
ていたんだけど…

華雄「出た！あれは頭の『ナギッ』！」

ギンガ「恐ろしい技ですね、『ナギッ』って…」

外野である姉者とギンガちゃんの会話に俺は動きを止めざる得な  
かった。

紀霊「姉者！これは『ナギッ』じゃないって前にも言っただろ？  
行くぞって』言ってるんだけど。ギンガちゃんも勘違いしないでね  
！！」

幾ら違うと言っても聞いてくれない姉者、ギンガちゃんに間違っ  
た知識でこれが『ナギッ』と言う技だと思われたら…と思うとつい  
いッッコミを入れてしまう。

ギンガ「でも『ナギッ』って聞こえましたよね華雄さん？」

華雄「そうだな、ギンガ。確かに『ナギッ』って聞こえたよな？」

よし、悟ろう。哀しくは有るが、幾ら訂正しても無駄だ。

紀霊「はあ。もう『ナギッ』で良いよ」

俺は二人の言葉にため息をつく。つーかこんな事やってる間にキョウ君は回復が出来たようで構えを取っていた。ちと失敗したな…

キョウ「凄いスピードでしたね。じゃあ、こっちから行かせてもらいます!!!」

紀霊「おっし、来い!!」

キョウ君は両手に炎を纏わせ俺の下に駆け寄る。早いな、ガードが間に合わなかったか…

キョウ「ふんっ、ふん!! てりゃ!! ボディーがガラ空きだぜ!! 真っ赤に燃えるおお!!」

まずは『八拾八式』、しゃがんだ状態から起き上がりつつのジヤブ、更に『荒咬み』から『七瀬』という連続技に繋ぐ。其れは俺の体の中に浮かせ、とどめとばかりに『琴月』の炎に包まれる。つて待て待て待て! 仕様が違うだろ!!?

紀霊「ぐわっ！どういうことだ？『荒咬み』を使うなら『闇払い』は使えない筈。って今はそんなこと考えている暇はねえ！！」

ラツシユを喰らった俺だが致命傷は回避できたためまだ動ける。俺は自身の優位を立て直すべく『北斗無想流舞』でキヨウ君に近付いていった。少しは目が慣れたのか、キヨウ君は俺の動きに合わせて『七拾五式』を放ってきた。けど甘いね。

紀霊「北斗破流掌！！」

キヨウ「うわっ？」

すかさず当身技『北斗破流掌』により壁際に吹き飛ばす。さーて、ここからは俺のターン！って奴だ。

紀霊「ナギツペシツペシナギツハーンナギツペシカクゴハーントウケイコホウナギツ！」

出来る限りの力で確実にダメージを積み重ねていく。壁に叩きつけられる反動でキヨウ君の体は地面に近付くがこんなところで終わらせるほど俺は甘くない。再びキヨウ君の体を浮かせて

紀霊「『北斗千手殺』！！」

全攻撃が当たり今までの攻撃が合計で27発ヒットした所でキヨウ君への攻撃を切り替える。地面に叩きつけるようにしゃがんだ体制から拳を放つ続ける。そう、百烈だ。キヨウ君はバスケのボールをドリブルしているかの様に地面と紀霊の間をダムダムと効果音を鳴らして行きかう。

ギンガ「キヨウ君！！たああ！！ストームトウス！！」

そんなキヨウ君の危機にギンガちゃんが助けへと入る。飛び蹴りだけでも痛いつてのにおまけの『ストームトウス』を喰らってしまった。攻撃に集中しすぎてたしストライカーの存在忘れてたわ…

ギンガ「大丈夫？キヨウ君」

見ればギンガちゃんはキヨウ君を助け起こしている最中で

キヨウ「ああ、助かったぜ。ありがとな、ギンガ。紀霊さんは今まで戦った中で一番強い相手だ…」

ギンガちゃんはすぐにステージ脇へと戻っていったけど厄介な流れだなおい…

紀霊「ストライカ か、忘れてたぜ。」

立ち上がりキヨウ君を見ようとした俺だったが、キヨウ君の姿は既に無い。嫌な予感がして至近距離に目を移すと…

キヨウ「受ける!!」

既に構えに入り俺に照準を合わせるキヨウ君。

紀霊「（これって、何だったっけ？）取り敢えずガードだ!!」

俺の知らない技、対策も何も思いつかない俺は即座にキヨウ君の攻撃に備える。

キヨウ「このブロ…!!!!!!!!」

キヨウ君から放たれる『百八拾弍式』。その攻撃は最大限まで高められ、俺のガードを貫いて大きな衝撃を伝えてくる。

紀霊「がはっ！そういえばそんな技あったな。ってっわ？」

宙に浮きながら技の名前を思い出した俺だが、追撃を放つキヨウ君

の姿が目に入る。

紀霊「(やっべー!)」

キヨウ「うおおおおー!」

キヨウの体から噴き出る炎、その炎は紀霊にダメージを与え、そして紀霊の身を焦がさんとばかりに最大の攻撃を放つ。

キヨウ「喰らいや! 顕!! お姉ちゃんが助けてやるぞ!! とおりやああああ!!」「ぐわっ!!」

キヨウが『大蛇薙』を放とうとした瞬間、華雄がキヨウに向け斧による斬撃を放ち、技の発動を阻止することに成功する。

紀霊「あ、姉者?」

華雄「ああ。私が付いているぞ。だから、顕。負けるな!!」

それだけ言うと華雄もステージ脇に跳躍して戻っていく。だが、その姿に紀霊は今まで以上の力が湧き上がって来るのを感じた。



紀霊「ああ、そうだ！姉者が居る限り、俺は負けない。キョウ君、行くぜ！」

キョウ「この勝負俺が貰います！！」

それから二人は至近距離で殴り合う。もはや技など存在しない赤子同士の戦いだようで、まるで北斗の長兄と末弟が繰り広げた死闘を思い浮かべるような錯覚を周囲の皆が感じていた。

ギンガ「キョウ君！負けないで！！」

華雄「顕！！負けるなーーー！！」

外野にいる二人も声援を飛ばしている。互いの恋人が心配なのか、握りこんだ拳は白くなっておりただひたすらに二人の戦いを見つめる。

その殴り合いはしばらく続くかと思われた。しかし、紀霊はキョウの攻撃の一瞬の隙を突き『刹活孔』を放つ。だが、本能なのだろうか、それとも愛なのだろうかキョウは『刹活孔』を紙一重で避けると紀霊に向けて己の持つ最大の力を紀霊に放つ。

キョウ「喰らい…やがれええええええええつ！！」

その炎は敵を燃え尽きるまで焦がす炎

その拳は強敵とてに放つ渾身の一撃

『大蛇薙』

その炎が紀霊を包み身を焦がす。その拳が紀霊に直撃し吹き飛ばす。燃やされ、吹き飛ばされた紀霊は体を微かに動かしながらも立ち上がることは無い。その姿にキョウは拳を握って炎を高く燃やす。

キョウ「俺の…勝ちだっ!!」

倒れこむ紀霊に、共に闘ってくれたギンガに、見守る観客に宣言するよつにキョウは言い放つ。

刹那の静寂、だが次の瞬間静寂を突き破る大歓声が闘技場に木霊してアナウンサーが試合終了を告げる。

紀霊「つうく、負けたよキョウ君。」

紀霊に歩み寄ったキヨウは手を伸ばし、彼の手を掴み助け起こして言う。

キヨウ「今回は勝ただけです。紀霊さんが『刹活孔』でしたっけ？あれされそうになった瞬間ギンガの姿が浮んで…そしたら体が動いてました。」

紀霊「いやはや…愛だねえ。まあ、次やる時は勝たせてもらおうよ。」

キヨウ「そう簡単に勝たせませんよ。」

互いにニヤリと笑う中、不意に紀霊の体が光始めた。其れは華雄も同じのようで、闘いが終わった事で元の世界に変える時が来ているようだった。

それから紀霊は華雄に肩を借り二人で寄り添う。見送るキヨウとギンガに紀霊は一言

紀霊「楽しい時間だった、また勝負しようなキヨウ。それと…ご褒美おめでとう」

キヨウ「ちよっ紀霊さん！」

ギンガ「ご、ご褒美：／／／」

慌てふためく二人の反応にしてやったりと笑顔を浮かべた紀霊はそのまま言葉を続ける。

紀霊「そだ、二人には俺の真名を預けよう。俺は顕。今度会った時はそう呼んでくれ。」

華雄「私も二人に教えよう、慧だ。今度は私とギンガで手合わせしてみたいものだな。」

ギンガ「えっ？あ、はい！是非お願いします慧さん。」

紀霊「じゃあ、ふたりとも元気だな。」

キョウ「はい、顕さんも慧さんもお元気で！」

ギンガ「またお話ししましょう！今度は私と華雄さんで勝負ですね！」

俺たちはキョウ達と言葉を交わしたのを最後に光に包まれる。

目を閉じつつも互いにしっかりと抱き合いながら光の中を進む俺と姉者。

紀霊「悪いな姉者、あんなに応援してもらったのに負けちゃった。」

華雄「構わん、どんなに負けようが私の中では中華一は頭だ。頭…、また…逢えるよな？」

この夢から覚めれば二人とも西涼と洛陽、また離れ離れの生活が始まる。次に逢えるのは何時かなんて俺にもわからない。けど俺は姉者にこう答える。

紀霊「必ず逢えるさ。今度は夢の中なんかじゃなくて…恋や香様の居る世界でちゃんと逢えるさ。」

徐々に薄れていく意識、そして無くなっていく姉者の感覚。だが、また必ず逢える。その言葉を胸に前を向いて進むだけだ。

そして完全に意識が無くなって行きそこで俺の記憶は閉じた。

紀霊「夢…な訳ないな。」

鳥達のさえずりの中、差し込む朝日に腕を照らし見る俺は確かに有る証拠を確認していた。

5cm程に広がった火傷、キョウ君から最後に喰らった『大蛇糞』を防ごうとした際に出来たものだ。

まあ、それ以外におとやん達の仕業でもあるから現実だとは理解できる。

紀霊「まあ、久々に姉者と逢えたし…強敵も出来たから良しとするか。さーで、今日も仕事頑張るぞー！」

夢の中での闘い『KOF』は幕を閉じた。しかし俺と姉者は時空を超えた強敵を手にしたのだった。

柳の方ではキョウ君の勝利を描きました。紀霊の勝利が見たい方は社友者先生の作品をどうぞ。

さてさて、そろそろ本編の投稿もしたので執筆に戻ります。

恐らく今週中には投稿できると思いますのでもう少しお待ち下さい

^^

御意見、感想お待ちしております。

目指せ                    マスター！！【後編】（前書き）

友人「何このページ数…」

柳「知らん。書いてたらこうなった。」

友人「お前趣味関係だとガチで能力上がるよな…」

柳「それは世間一般人の人皆がそうだと思うんだが…あ、次の麻雀取り敢えず調整しといたぞ。」

友人「お、サンキュー。流石は麻雀受付係だ仕事が早い」

柳「なんで毎回毎回俺が場所やルールの調整するんだよ…そんな係は謹んで辞退させ」だが断る。「…よし殴らせる。」

〳〳そんな柳と友人の日常〳〳

今回は長いです。そして気が付いたら五十万アクセス及び五万PVを越えている…

この小説こんなに読んで貰って良いのだろうか？w

今回登場する数え役萬しすたあずの三姉妹は完全オリジナルキャラとなっております御了承下さい。



## 目指せ

## マスター！！【後編】

~~~~食事処~~~~

表通りに出た俺達は適当に近くの食堂へと足を運んだ。

店主「へい、らっしゃい！！」

威勢の良い店主の掛け声に軽く会釈し空いている席に三人を座らせる。

紀霊「さて、まず自己紹介かな。俺の名前は紀霊。つい二週間位前に洛陽に来た新参者さ。」

まずは俺の自己紹介が会話の始まりとなり、俺より年上そうな女性が俺に話しかけてくる。

女性「本当に助けていただいて有り難う御座いました、私達「数え役萬 姉妹」（かぞえやくまん・しすたあず）というアイドルをやっています、私が長女てんぽー天和です。」

と、長髪の天辺にアホ毛の生やす笑顔が優しい天和さんが俺にお辞儀をしてきた。

天和さん、胸が弥依姉並に大きいわけで…お辞儀されると目のやり

場に困るといふか何といふか…

「つか雰囲気からおつとり系な人だなくアレか？全男子の憧れと言われる天然おつとり系お姉さんをそのまま反映してF91にすればこの人みたいになるんですか？

取り合えず俺は「ご丁寧にどうも。」と返答する。天和さんと俺の会話が終わったのを見計らってか俺と同じ位の年齢だろうか、若干藍色の長髪の女の子が口を開く。

女の子1「私は次女^{チーほう}地和、主に歌い手を担当しています。」

深々と礼儀正しく頭を下げる地和さん、ついつい釣られて俺もお辞儀。うーん、堅苦しい挨拶とかは余り好きではないんだがまあ良いや。

俺は頭を上げて地和さんを見やる。天和さんと同じく長髪だが、紫に近い色合いだった天和さんと違い、青色に近い色合いのすらっと伸びて綺麗な地和さん。

天和さんをおつとりした美人とすれば、地和さんはクールビューティー。この一言が似合うような女性だ。

女の子2「はい、次は私の番です！」

無言で考え込みそうになった俺を思考の海から引き摺り戻したのは明らかに俺より年下であろう女の子。

女の子2「私は人和^{れんぼ}って言いますっ！踊りやお財布係りなんかもや

「つちゃってますよー！さっきの紀霊さん格好よかったです！」

元気一杯の自己紹介をしてくれたのは三女人和ちゃん。二人の姉と違い髪型はツインテールで太陽のように明るい橙色の髪、そして見るもの全てに元気をくれそうな心の底から滲み出ているような笑顔。なんつーか、妹？孫？

見ている側からすれば微笑ましくて何かしてあげたくなるような可愛い女の子。俺はそんな印象を人和ちゃんに覚えた。

紀霊「ふむふむなるほ…」

って待て俺、

【数え役萬 姉妹】

【天和】 【地和】 【人和】

【アイドル】

…マサカネー？こんな虫も殺せないような子達がアレの元凶な訳無いわー。

つーか、きつと名前が同じなんだようん！きつと人違いだよねバーニイ！人違いだと言ってよバーニイ！！

つて落ち着くんだ俺、おとやんから聞いた限りだと【数え役萬 姉妹】の長女は胸が大きくて天然。

次女はスレンダーで割と我侷。んで三女はお財布係兼マネージャーだった気がするんだが…

駄目だ、情報が断片的過ぎて確証が持てん。くそ柳め、自分が『恋姫十無双（PC）』しかやったことないからって訳の分からん事しでかしやがって…

あかん、これ以上考えると柳に刹活孔を打ち込む作業をしたくなりそうだ…頭の中の雑念を振り払った俺は改めて三人を見る。

天和「？」 天然そうだしどうみても胸がF91。

地和「??」 胸は姉者より…ゲフンゲフン、我侷って言うよりは歌に関してストイックそうだな。

人和「????」 御財布係でマスコットっばい。

いや、人和ちゃんのキーワード途中「マ」しか合っていないし…まあ、人違いだろうし！取り合えず確認ダケシテオコウカナ？

紀霊「失礼ながら…えーっと、君達の姓って張じゃないかな？」

三姉妹「!？」

目に見える彼女達の動揺…マサカネーヒトチガイダヨネー？

紀霊「更に言つと…天和さんの名は角、地和さんの名が宝で人和ちやんが梁で合ってるかな？」

天和「あらら〜当てられちゃいました」

地和「ど、どうして私達の名前を知っているんですか!？」

人和「あう〜、紀霊さん凄いです！私達の名前びつたしかんかんれす！」

それぞれの反応は違つがもう解つてしまった。ああ、なんで嫌な予感的中率高いのかなあ…
俺の目の前に居る三人は、後に後漢を揺るがし崩壊の元凶となった事件【黄巾の乱】の首謀者である張角、張宝、張梁の三人である。つて取り合えず言い訳言い訳。

紀霊「いやね、前に管路つて预言者が「歌や踊りを得意とする三姉妹がいずれ中原を席卷するだろう。」つて预言したと聞いてね。(何故だ？何故こうなった?)」

顔も居場所も知らないが管路さん、勝手に名前出してごめんなさい。けど、こうでもしないと張宝さんが俺を睨みつけてくる未来が安易に想像できるんで勘弁してください。

地和「予言…ですか？」

お、信じてるっばい？いいや、このまま押し切っちゃえ。

紀霊「そうそう、管路って割と有名な預言者らしくてさ」

人和「ということは私達トップアイドルになれるんれすか!？」

なんとか言いくるめようとする俺に割り込んできた人和ちゃん。舌足らずなのか呂律回ってないよー？一部のお兄さん達が大喜びしちやうよー？

紀霊「いや、その…」

天和「あらあら、そうすれば私達の生活も少しは楽になるわね。天井の有るお宿にも泊まれるかしら？」

にこやかな笑みを浮かべ特徴的な間延びした口調で喋りながら俺たち

の会話に混ざる天和さん。

人和「天和お姉ちゃん、生活が楽になったらもやし食べ放題ですよ！うっうー！はーいたーっちー！」

生活が楽になると想像した人和ちゃんは余程嬉しいのだろうか、俺たち全員にハイタッチをしてはしゃいでいる。…何でだろ？微笑ましくて笑顔なはずなのに…視界が歪むのは何でだろ…？

紀霊「地和さん…」

地和「え？あ、何でしょうか紀霊さん？」

連和ちゃん的笑顔を直視できなくなった俺は地和さんの手を両手で掴んで口を開く。

紀霊「色々…お疲れ様です。せめて今日位…今日この時間位は御飯食べて皆で楽しんでください！親父さん！！金は俺が払うからこの店で一番旨いもの出してくれ…！」

俺の言葉に目頭を押さえながら鍋を振るっていた店主の親父さんは鉢巻を捻り、袖を捲り上げて俺等に背中を向ける。

店主「グスツ、任せとけや坊主！俺っちの腕にかけても洛陽一旨い物喰わしてやらあ！！」

そついうや否や鍋を置いて包丁片手に物凄い速さで動き出す店主。
親父さん…熱い！熱いぜあんた！！

地和「え？あ、あの？」

戸惑う地和さんを他所に天和さん、人和ちゃんの二人は旨い物と聞いて心躍らせて歌い始めた。俺的には微笑ましいから眺めていたいところだけど…聞きたい事があるからね。

紀霊「親父さんに任せておけばきつと旨い物が出てくるさ。んで、一番聞きたかった事なんだけど何でモヒカン達に絡まれていたの？」

歌い続ける天和さんと人和ちゃんをそのままに、あの時の状況を確実に説明できそうな地和さんへと質問を投げかける。笑顔で歌う二人に苦笑いしながらもゆっくりと説明をし始めた。

簡単に纏めると

昨日洛陽に到着した三人は大都市に夢を抱きながら路上でのライブを敢行！

しかし立ち止まる人も少なく収入は雀の涙程度。

それでも今日も頑張ろう！そう意気込んで活動していたところモヒコンビとエンカウント。んで俺がブスリとほあたあ！して今に至る。という訳だそうで…

見てくれる人が少ないねえ…

俺は改めて三人を見やる。

外見は明らかに人の目を惹くだろうし、キャラはそれぞれ確立していて重複はない。って事は活動内容に問題ありか？まあ、そこは見えないと何とも言えないが…

紀霊「この後も路上で活動を？」

地和「はい。歌や踊りが収入源ですし、私は歌う事が好きなんです。

」

そう言い切る地和さんの表情は恥ずかしがりながらも笑顔で…本当に良い顔をしている。何かに熱中している感じが俺には少し羨ましく、そして眩しく感じてしまった。

紀霊「本当に歌が好きなんだね。凄く良い顔で笑ってて可愛いや。」

地和「え？／＼／＼か、可愛いだなんて…わたっ、私無愛想ですしそんな事有りませんよ！／＼／＼／＼／」

俺は地和さんの言葉を聞きつつタバコを取り出そうと…して止めた。彼女達の前で吸うようなものじゃないし我慢できるさ俺。頑張れ俺！

店主「待たせたな！家族用特盛炒飯に家族向け焼売、ついでに特上の豚肉を使った野菜炒めにフカヒレスープでい！！」

ドン！ドン！！ドーン！！と言った擬音の似合いそうな勢いで店主が豪快に並べていく特大級の料理達。シンプルで食べやすく見た目も香りも食欲をそそる豪華な料理の数々に皆が目を奪われる。流石は店主、洛陽一の旨い物を出すと豪語しただけあるようだ。

人和「はわ！すっごく美味しそうです！お姉ちゃん！紀霊さん！早く食べましよう！！」

待ちきれないとばかりにぴよんぴよん飛び跳ねている人和ちゃん。ありゃりゃ…涎なんか垂らしちゃって、余程夢中なのか気が付いてないな。

紀霊「まあまあ、人和ちゃん落ち着いて。ほら涎拭かなきゃいけないからじっとしててね？」

長安で恋にやっていたためだろうか、俺は馴れた手つきで人和ちゃ

んの口元に垂れる涎を優しく拭い、落ち着くように頭を撫でる。

人和「あう／＼／＼／＼／」

天和「あらあら、まるで紀霊さんがお兄ちゃんみたいで微笑ましいわ。」

兄ねえ…まあ、恋は妹弟子だから確かに俺は兄みたいなもんか。それに、人和ちゃんって恋より年下っばいし何故か世話焼きたくなるんだよな…
うくん…もしかすればこれだから俺は苦労するのか？

紀霊「ははっ、人和ちゃんみたいな妹がいたら兄冥利に尽きるでしょうよ。まあ、俺にも妹みたいな子が居たからつい人和ちゃんと重ねちゃったのかもしれないや。御免御免、ささっ、食べよ食べよ。」

天和「はい、頂きます。」

地和「い、頂きます紀霊さん…」

人和「店主のおじさん！紀霊さん！ありがとうございまーっす！！」

「はい、おあがんなさい。」と軽く返答する俺と腕を高く上げて「気にすんな！」と威勢良く返事を返す親父さん。俺たちの見つめる中、三姉妹は楽しそうな笑顔を浮べて所々で会話を交えた楽しい昼食を味わっていた。

人和「ご馳走様でした！本当美味しかったです！お米食べたのなんて数ヶ月振りでも美味しくかったです！」

天和「そうね、最後に食べたお米って確か3粒だったかしら？本当久しぶりだね」

地和「…姉さん、人和。恥ずかしいから止めて…／／／」

…良かった。本当に食事奢ってよかった！

今の俺なら將軍府の予算を弄繰り回してでも彼女達に食事を奢ってもらいたい。

本当にそう思えるほどに俺は…良かったはずなのに…目から冷却液出てるんだよ…

店主「嬢ちゃんたち！坊主！ウチの店でよければこれからも来てくれや！」

親父さんも俺と同じように目から迸る生理用食塩水…うん、俺これ

からこの常連になる。

紀霊「取り合えず君達の活動見たいし、そろそろ行こう。」

地和「はい、私達の歌と踊りを是非見て行ってください！」

俺たちに手を振って見送る親父さんと店を後にして人通りの激しい市場へと足を運ぶ。

紀霊「ここでやるの？」

天和「はい、ここなら人も多いですし頑張りますよ」

人和「お姉ちゃん、準備できました！」

地和「わかったわ連和。紀霊さん、私達の活動…見ててくださいね！姉さん、人和！行くわよ！」

地和さんの掛け声と共に人通りの中、彼女達のライブが始まる。

最初に柔らかい歌声で人目を集める天和さん。笑顔で元気一杯の踊りを繰り広げる人和ちゃん。そして、水のように澄んだ美しい歌声

で存在感を高める地和さん。

だが…最初は立ち止まっていた人々は徐々に徐々に歩みを再開し彼女達の空間を後にする。それでも、それでも彼女達は止まる事は無い。歌い、踊り、人々に今出せる最高の自分を出している。

紀霊「……………」

確かに彼女達の歌や踊りは惹かれるものがある。けど何か足りない。いや、足りない部分は多分解る。しかし、彼女達はそれを気が付くだろうか？認めるだろうか？
今のままでは彼女達はダイヤの原石。何かきっかけがあれば皆が欲するほど光り輝く宝石になれる…

見たい。

彼女達が宝石になる姿を俺は見たい。

今日出会ったばかりのでいきなりこんな事思うのは変だけど

俺は…

彼女達をプロデュースしたい。

そんな事を考えながら彼女達の歌を聴いていた時、下品な怒声が彼女達の歌声を掻き消す。

モヒカン「おうおうおう！何俺等に許しも取らずこんな所で下手な歌披露してんだあ？」

モヒパン「オーウ…」

本日二度目の登場、モヒコンビことモヒカンとモヒパン。それに後に控えているガタイのいい男…
本当に空気読まない輩だな…

地和「あ、貴方達さっきの!？」

モヒカン「さつき？手前等みてえな青く臭えガキなんざ見るの初めてだつての！なあ兄貴！」

モヒパン「ホイホイチャーハン？」

そう言いながらモヒパンはパンツの紐の一部分を引っ張ってパチンと弾く。

モヒカン「ほら見る！兄貴だって手前等の事なんざしらねえそつだ。」

…本当になんで会話通じるんだろうか？まったくもって解らん。さて、また記憶でも飛ばすか。そう思い前に出ようとした俺だが、それより先にモヒコンビの後に居た男が前に出て口を開く。

???「まあ、まてお前等。」

モヒカン「わ、若頭!？」

不意に二人の前から出てきた男…この時代には不釣り合いなつなぎの作業服を半分だけ開いた格好で開いた部分からは…下にあるはずの服はなく引き締まった筋肉が露になっている。

紀霊「(へ…変態だーーーーーっ!!)」

俺は声は上げないものの心の中で大絶叫。うん、あれだよな？公園のベンチに座って獲物を待つハンターだよなあの人？

俺の心の動揺なぞ露知らず。若頭と呼ばれた男は話を続ける。いや、地和さん辺りは疑問に思おうよ！叫ぼうよ！

若頭「まあ、俺等も出て行けとか言いたくないんでな。ここは穩便に場所代って形で手を…打たないか？」

あかん、打たないか？がヤラナイカ？に聞こえてしまった…っていうかまた場所代払えとかかよ…

手で金のジェスチャーをしている若頭に耐え切れなくなった俺は野次馬を掻き分けて怯える地和さん達を庇うように立ちはだかる。地和さん達がボソリと紀霊さん…とか呟いているが後ろは向けない。だって若頭に背中向けるのは怖すぎるんだもの。

モヒカン「ああん、なんだ手前は？」

若頭「まてやモヒ、どうもこのお兄さんはこの御嬢さんたちの知り合いみたいだし…ウホッ」

モヒカンを静止して話し続けようとした若頭だが、途中で何か奇声を上げたかと思えば紀霊を見つめて黙り込む。目と目を合わせ、睨むように見つめる紀霊の背筋に一筋の汗が流れ落ちていく。

若頭「場所代の請求は無しだ。」

地和「えっ？」

突然の若頭の言葉に戸惑いながらも安堵の表情を浮かべる三姉妹。だが、次の言葉に彼女たちの表情は凍りつく事になった。

若頭「その代わりに、お兄さん、俺と一夜：やらないか？」

紀霊「断るに決まってるだろうが！！俺はノンケだ！！」

若頭「おいおい、俺はノンケだって構わず喰っちまう男なんだぜ？お兄さんみたいな良い男：逃すほど馬鹿じゃないんだ。嫌といっても連れて行かせてもらうさ。」

そう言いながらつなぎの前を更に開けた若頭は紀霊にじりじりと近づいていく。

紀霊「北斗神拳奥義：北斗虚無指弾！！」

瞬時、若頭の頭に指を突き刺す紀霊、つい数時間前にモヒコンビに喰らわせた秘孔を再度振るつ紀霊。

若頭「おふう／＼／」

モヒカン「わ、若頭っ！」

紀霊「だからなんでお前等は変な声上げるんだよー!!」

その場に倒れこむ若頭を放置し残ったモヒコンビと対峙する紀霊、モヒコンビもモヒカンは短剣を抜き、モヒパンはレスリングの構えで紀霊の様子を窺っている中、いきなり聞こえた第三者の声によりこの喧騒は終わりを告げる。

楽就「こらーっ!!喧嘩しちゃ駄目でしょーがっ!!って顔様!？」

紀霊「彩…か？助かった！二重の意味で!!」

その声の主は警邏の兵士を引き連れた楽就、彼女も彼女でまさか喧嘩の当事者が自身の主とは思ひもしなかつたのか驚きながらも紀霊の後で怯えている三姉妹を見てすぐさま状況を理解する。

楽就「皆、その場に倒れている人と剣抜いてる人、それに変態の三人を捕まえて下さい！」

兵士達「イエス！ユアハイネス！」

一斉に返事をして若頭達を捕らえる兵士達、その姿は無駄の無い洗練された動きなのだが、返事の仕方が無駄に格好よくてそっちが気になってしまう紀霊。だが、思い返したようにモヒコンビに近づいて北斗虚無指弾で気絶させる。

紀霊「しっかし助かったぜ彩。けど午後の警邏って星の仕事だろ？なんで彩がやってんの？」

本来なら趙雲が担当のはずなのに彼女の姿はどこにも見当たらない。それに楽就は午前の稽古で休んでいたはずなのだが…

楽就「それが…星さんどこいったかわからなくなっちゃって…僕が変わりに警邏しているんです。」

紀霊「あ…」

楽就の言葉に街に出る前の事を思い返す。執務室に星を縛りっぱなしで放置したままだったのだ。

紀霊「いやー悪い悪い。そっぴや星の事縛って執務室に放置してたの忘れてた。」

楽就「えーっ！見つからないと思っただら…しっかりお願いしますよ
頭様。」

事実を聞いた楽就は肩の力を抜いて溜息を吐く、だがそれと真逆の
反応を見せる兵士達が紀霊の手を取り語り始める。

隊長「紀霊様有り難う御座います！！お陰で楽就様との警邏をする
事が出来ました！なあ、お前達も同じだろ？」

固く握手をする兵士の言葉に「そうだそうだ！」や「男の娘な上司
…大いに結構！！」といった声が他の兵士達から聞こえてくる。そ
の中には感謝の言葉はあれど、怒りは恨みの声は無く皆歓迎してい
るようであった。

隊長「では、我々はこの無礼者の聴取がありますのでそろそろ失礼
します。楽就様！ご命令を！！」

兵士達「ご命令を！！」

楽就「え？あ、はい。じゃあ帰るよ！それじゃ頭様、早く星さん開
放してあげてくださいね。」

一斉に命令を求められた樂就は戸惑いながらも警邏隊を率いて街中を闊歩していく。その後姿を見つめながら紀霊は

紀霊「色々問題は有りそうだが…まあ、ちゃんと命令聞きそうだし放っておこう。」

そう呟いている途中、肩をトントンと叩かれて後を向く。叩いたのは地和であり、何か言いたそうな感じで紀霊を見つめている。

地和「あの…紀霊さんって…お仕事は何をしているんですか？」

警邏隊やそれを率いる武将らしき女の子から様を付けられる。どう考えても身分のある人だと言うのは明らかなのだが、地和はどうにも信じられないのか紀霊に再確認の意味で聞いてみた。

紀霊「ん〜、一応大將軍の副官やってる。」

地和「だっ大將軍!？」

予想以上の身分の違い。役人だとは思ってもそこまで思っていなかった地和は素っ頓狂な声を上げて驚いている。

天和「あらう私達物凄い人にご馳走になっていたのね」

解っているのか解っていないのか、天和は地和とは違い笑顔を崩すことなくこやかな表情のままだ。

人「大將軍って偉い人なんですよね？って事は紀霊さんはすつこく…偉い人？」

そもそも大將軍は偉い人。としか認識していない人 and 至っては解っていないようで両手を頬に当てて思案顔を浮かべている。

地和「だだだだだだつ大將軍の副官様とは知らずとんだ無礼をつ！お許し「いやいやそんなの要らんから。」…へ？」

慌てふためいて頭を下げる地和の言葉を遮った紀霊は更に続ける。

紀霊「俺はそういつた官位とか気にしないしそういつた対応って堅苦しいから嫌いなんよ俺。今までどおりでお願いっ。」

そう言いながら頭を下げる紀霊。その姿には全員唾然とした表情を浮かべている。それもそうだ。庶民で旅芸人なんかやっている自分達とは天と地程の違いがある人が自分達に頭を下げている。どこか

らどつ見ても滑稽なこの光景に地和は思わず噴出してしまつ。

地和「ぷっ…クスクス。」

紀霊「おいおい、笑うことは無いだろうよ〜」

地和「すみません…だって…紀霊さん必死すぎて…くっ」

釣られるように天和、人和も笑う。それを見た紀霊も笑う。何時の間やら夕日に染まる洛陽の市場の中心で笑い合う4人だが、暫く笑いあつた後他の人たちの目に気が付いて恥ずかしさから赤面する地和により人目につかない路地裏へと引き摺られていった紀霊。そしてそれに追隨する天和と人和。

顔を紅くしたままの地和を見てニヤニヤしている天和とニコニコしている人和、この姉妹達を見て紀霊は思う。多分地和さんは弄られ役なんだろうな…と。

そんな三人を見やりながら邪魔が入りすぎて言えなかった事をやつと口にする。

紀霊「なあ、俺に君たちの…プロデューサーをさせてくれないか？」


~~~~何進屋敷前~~~~

三姉妹と別れた紀霊は執務室に戻り開放した趙雲と共に何進屋敷前まで帰ってきていた。

因みに、執務室に戻った際に見た彼女は息を荒くして目の焦点も合っていない状態で惚けており時折甘美からなのか甘い声を上げており、「これそっという作品じゃねえから！」と叫ぶ紀霊に秘孔を突かれて正気に戻るという自重の欠片も無い状況を繰り広げて今に至る。

趙雲「いやはや何度昇り詰めた事か…正直数え切れませんぞ」

紀霊「いや聞いてないし話さなくて良いからそんな事。それよりさつさと入るぞおっ！？何だ？何なんだっ！？」

屋敷の中に足を踏み入れた紀霊、その紀霊の体にいきなり二本の縄が絡みついて紀霊の体を宙に浮かす。

訳も解らず叫ぶ紀霊に対し、どこからともなく笑い声が聞こえてくる。

????「何だ？何なんだ！？と聞かれたら！」

????「答えてあげるが世の情け！」

笑い声の方向、それは屋根の上から聞こえてくる。敵の正体を一目見ようと体を振る紀霊の先には

朱雋「朱雋！」

皇甫嵩「皇甫嵩！」

変なポーズを取りながら名乗る朱雋と椿の花を口にくわえた皇甫嵩が更に名乗りを続ける。

朱雋「洛陽の空を跳ぶ投石野郎兵チームの二人には！」

皇甫嵩「ブルースカイ、青いお空が待ってます！」

楽就「にゃ…にゃ…んてにゃ／／／／／」

そして隠れていたのだろうか、猫耳を装着した楽就が顔を赤くしながら決め台詞と某喋る化け猫ポケモンのようなポーズを放つ。

恥ずかしいならやらなきゃ良いのに…と思いつつも猫耳が似合いつぎに逆に怖い楽就には何も言わず、首謀者である二人を睨みつけながら紀霊は叫ぶ。

紀霊「まったく彩は可愛いから良いとして、衛姉に弥依姉！懲りてないようならまた秘孔でお仕置きすんぞ！！」

お仕置きという単語が出た瞬間、「拙者っ拙者にも！」と反応する趙雲を無視した紀霊に対し朱雋はニヤリと笑いながら言い返す。

朱雋「ふん、あの不思議な技の効果、確か一時間だって頭は言ったよな」

紀霊「確かに言ったけどそれが何だったの…」

朱雋「私達五分位で元に戻ったぞ！！あの位なら全然耐えられる！！」

紀霊「マジか！？秘孔の効果減少とかマジもんの化け物じゃねえかアンタら！！」

皇甫嵩「ふっふっふっ縛られて抵抗できないのにまだそんな事言うんだね頭君は、これはお仕置きが必要ですね先輩」

朱雋「ああその通りだ弥依！さあ〜て頭、私達に美味しく頂かれろ」

屋根から飛び降りた二人は手を妖しく動かしながら紀霊にゆっくりと近づいていく。

紀霊「まつ待て！話せば分かる！助ける星！」

紀霊の言葉に趙雲は静かに首を横に振る。

趙雲「出来ませぬ主、今回拙者は朱雋將軍の味方をします故に（キリッ）」

紀霊「星っお前もか！？つか鼻血出しながらそんな顔されても全然凛々しくないからね！？彩っ！助けてくれええっ頼むっ！」

樂就「頭様に可愛いつて言われた…／＼／＼　えへへ…／＼／＼」

紀霊「おいいいっ！？男だろお前っ！！」

叫ぶ紀霊だが無情にも二人の手が紀霊の体をがっちりと掴む。

いつの間にやら縄は紀霊の体だけに巻かれておまけとばかりに趙雲

により両手両足を縛られた紀霊、当然もがいても無駄な抵抗でしか無い。

皇甫嵩「ふふふ…対顕君用に開発した縄ですからそう簡単には千切れませんよ」

紀霊「そんな無駄な物に金使うから予算無くなるんだろ弥依姉！ちよ！引きずるなって！たっ助けてくれええ姉者あああああつ！…！」

だが紀霊の叫びは虚しく洛陽の空に響くだけ。

哀れなことに紀霊は三人に引きずられながら屋敷の中へと姿を消していった。

~~~~~西涼~~~~~

兵士「將軍をお止めしろー！！」

華雄「ええいどかんかつ！顕が私の助けを必要としているんだ！！」

兵士「また弟君かよ畜生！！弟君爆発しろー！！」

華雄「頭！っ！！うーっーうううううっ！！」

西涼に華雄の悲しき叫びだけが響き渡る。

結局は騒ぎに気付いた張遼により事態は収束するのだが後の調査で兵士約七千二百が華雄を止めに入って傷を負ったそう。

~~~~~宿屋~~~~~

比較的安くないが三姉妹からすれば十分過ぎるほどの部屋。

人和「わ！ 布団ですよ布団！」

部屋に入るなり寝具に飛び込んでしゃいでいる妹を見ながら天和も寝具をポンポンと叩いて目を細める。

天和「そうね、ここ最近薫ばっかりだったからちょっと違和感感じちゃうかもしれないわね、ね、地和ちゃん？」

地和「……………」

妹に同意を求めようとした天和。だが、同意を求められた地和は答えず無言のまま。それは紀霊と別れた後からずっとである。

地和「……………姉さんと人和は良いの？」

無言だった地和は、不意に天和へと問いかける。おそらく紀霊に言われた事についてだろう。

「君達には足りないものがある。」

「今のままやっていたらトップアイドルにはなれないと思う。」

「もしよければ…俺に君たちの活動を任せてくれるなら俺は君達をもっと高みに連れて行ってみせる。」

「明日、昼飯を食べた親父さんの店で待ってる。もし君達が俺を必要としないと判断すれば無視してくれても構わない。」

そう言うつと紀霊は人和に懐から取り出した財布を丸ごと渡し

「別に返せとは言わない。今日はこのお金でちゃんとした宿にとまってゆっくりと考えると良いよ。」

啞然とする三人を尻目に紀霊はその場から離れ人ごみの中に消えていった。

慌てて財布の中を確認した人和の声により他の二人も正気に戻る。人和が驚くのも無理は無い。紀霊から渡された財布には、彼女達は今居る宿屋に数週間は余裕で泊まれる程の額だったからだ。大慌てで紀霊を探す三姉妹だが、紀霊の姿はどこにも無く。取り合えずは紀霊の言つとおり宿屋に宿泊する事にして今に至る。

天和「良いも悪いも…私は紀霊さんに任せてみようかなって思うの…」

人和「私もお姉ちゃんと同じです。」

地和「そう…けど私は認めたくじゃ無いから。其処だけは解つておいてね。」

地和はそれだけ言つと空いている寝具に入り込み日頃の疲れからだろうか、数分後には寝息を立てて完全に寝入ってしまった。ふと人和を見れば久々にまともな寝具で寝れただろうか、それとも姉と同じく疲れからだろうか解らないが掛け布団も掛けずに寝てしまっている。

天和「あらら。」



天和は人和に掛け布団を掛けて二人を見やる。

天和「まあ、明日からは紀霊さんにお任せね。」

彼女もそれだけ呟いて物音を立てぬように寝具に入り目を閉じる。

さてさて、彼女達三姉妹と紀霊の出会いはどうな物語を紡ぎ出すのか？

それは次回のお楽しみ。

と言う事で…今回はこの辺で失礼致しましょう。

目指せ                    マスター！！ 【後編】（後書き）

よし、次の執筆は明日から。

三姉妹のキャラ崩壊が激しいけど大丈夫だろうか？

ダメだったらと考えたらアミバ様に足の治療される並みに怖いですw

御意見、御感想お待ちしております。

楽就「ご主…顕様がプロデューサーっていう仕事を始めるみたいです。」（前書

友人「お前…どっか具合悪いの？」

柳「違う…」

友人「じゃあそんなに落ち込んでどうしたんだよ？」

柳「スランプなんだよ…何時もの書き方が出来ないし筆も進まない。

」

友人「そうか、じゃあ気分転換に麻雀やろうぜ！」

柳「この所休みの度にお前が麻雀に強制連行しているのは俺の気のせいかな？」

友人「良いから準備しろ。」

…結局負けましたw

遅くなってしまい申し訳ありません。かなりのスランプで今回はクオリティ低いですorz

楽就「ご主人様様がプロデューサーっていう仕事を始めるみたいです。」

誰かが俺を呼んでいる…

揺らすなつて、肉体的にも精神的にも疲れて眠いんだからよ…

????「おい…起きろ。」

ガスッ！

紀霊「ぜぶらあっ!?!」

脇腹に走る鈍い痛みに眠気が吹き飛んでいく。

なんとか手で押さえつつこの痛みの原因を視界に移すと

おとやん「やっと起きやがったか…」

見下すような目で俺を見つめるおとやん…「…」とは夢の中か…」

紀霊「…もう少し優しく起こせよ。」

脇腹をさすりながら愚痴る紀霊に対し

おとやん「姉貴なら優しく起こすが野郎なら蹴った方が早いからなほれ、頼まれていた本の続きだ。」

と即座に返答するおとやん紀霊に一冊の本を放り投げる。

紀霊は落とさないようにしっかりと受け止めて本の表紙を確認する。

【凡人にも使える北斗神拳〜経絡秘孔編三の巻〜 著：アミバ】

紀霊「お、サンキュー。これで突ける秘孔がまた増えるぜ。」

一目見ただけでは明らかに紛い物の類に入るであろうこの本、中に記された秘孔の数々は本物で丁寧な戦闘用から医療に使える秘孔までかなり分かり易く纏められた内容になっている。

巻数が進むにつれて難易度は上がっていき、一番始めに読むであろう一の巻は大体が医療用や比較的難易度の低い秘孔が記されている言わば【入門編】となっているのだ。まあ、入門編の最後には激振孔が記されているのだが明らかに入門編で覚えるような秘孔では無いだろうが…

そして、本を開いた1ページ目には必ず著者であるアミバの写真と「俺は天才だ〜！」と直筆のサインが全巻共通で付いている心憎いサービス付。

紀霊「これが全五巻完全限定生産。」

紀霊に続けるようにおとやんは更に口を開く

おとやん「更に今なら木人形が二体付いて驚きのこの価格！」

だが、紀霊は手を突き出して更に畳みかける

紀霊「おっつとおとやんさんまだあります！この番組放送終了後から五分以内にお電話頂いたお客様にはなあと！これであなとも世紀末、ヒッハー！モヒカン衣装セットと武器をプレゼントしちゃいます！！」

どこから取り出したのか、紀霊の手にはやたらとトゲトゲしい装備品の数々と装備のトゲトゲしさを更に増す棘付き棍棒。

おとやん「これはお買い得ですね！さあ、今すぐお電話を！」

紀霊が出した装備品にわざとらしく驚いたおとやんが締め言葉と言った途端、どこからともなくナレーションが流れ始める。

ナレーション「0120〜\*\*\*\*\*〜神会〜文化センタ

」

ナレーションが終わって数秒間の間を置いた紀霊とおとやん、そして先に口を開いたのは紀霊だった。

紀霊「よっし、何時ものお約束も終わった事だし……」

俺は本を開き新たな秘孔に目を通し、おとやんは木人形の電源を入れてスタンバイする。

おとやん「何時でも突けるぜ！」

紀霊「あいよ、んじゃ龍領、明見と牽正辺り覚えるたら技の鍛錬やつぞ〜。」

木人形に向けて人差し指を突き刺した紀霊、彼の北斗神拳はおとやんの協力により日に日に習得を早めていった。

~~~~~

樂就「んう…」

微かに聞こえる鳥の囀り…

樂就「（朝か、起きなきゃ…）」

目を擦りながら朝日の差し込んでいるであろう室内を思い浮かべながら目を開けた僕は、目の前に居たとんでも無い人物に己の目を疑った。

紀霊「すう〜んむ〜」

樂就「（あぶ × ！?）」

自分でも何を言っているか解らないような悲鳴を心の中で叫んでしまふ。だって目が覚めたら顕様の寝顔が目の前に広がっていたんだから当然だ。

樂就「（なっ、なんで顕様が寝ているの!? しかもここ僕の部屋だよね?）」

なるべく動かないように周囲を見渡せば、壁に立て掛けてある僕の

剣や机の上にある警邏の報告書が目に入り自分の部屋であることは明らか。

ならなんで顕様が居るのか？

寝起きで回らない頭を必死に使い、昨日寝る前に何が起きたのか徐々に思い出していく。

そう言えば、昨日は…

~~~~昨夜、楽就の部屋~~~~

必要最低限の生活用品しか置かれていない質素な部屋の中、僕は愛用の剣を手入れしながら夜と過ごしていた。

楽就「はあ…」

無意識に吐き出される溜息、もう何度手入れ中についたことか…。けど原因は解っている。衛さん達に無理やり着けられた猫耳と衣装、それを見て顕様に言われた言葉…

紀霊『彩は可愛いからいいとして…』

楽就「つう／＼／」

思い返すだけで顔が熱くなり夕日のように真赤になっているのが解る。あの時は顕様に褒められた嬉しさの余り自分の世界に入ってしまったためか気が付いたら皆居なくなっていた…恐らく顕様は、衛さん達に連れ去られてそのまま…

衛さん達の様子から見てもや…やっぱり男女の営み…なのかな？ / /

楽就「…顕様 / /」

生まれ育った村の人たちに裏切られ、賊の皆捕らわれた僕は何時殺されてもおかしくない状況で実際に殺されかけた…

あの時あの場所に顕様が居なかつたら、顕様や星さんと洛陽に来る事も楽しく過ごす事も…あの時顕様が手を差し伸べてくれなかつたら僕はここに居なかつたんだろうな…

あの日顕様に手を差し伸べられて、僕は顕様に一生忠誠を誓おうって心に決めた。勿論僕は男だし顕様も男、顕様もそれを解っているしその上で僕を信頼してくれていると思う。

けど…

楽就「ご主人様あ… / /」

そう考えているのに、そう考えていたはずなのに、顕様を思い浮かべると頭の中が顕様で一杯になる。

柔らかい笑顔、苦笑いする顔、タバコつてのを吸いながら雲を眺めている横顔、風に靡くさらさらした黒髪、毎朝早く起きて拳法の修練をする姿、三華尖を振るい闘う勇姿、星さんをお仕置きする時だけ冷徹になる瞳

様々な顕様が浮んでは僕の頭の中を占領していく。

何ですか？

貴方の声を聞くとほっとするんです。

貴方の笑顔を見ると僕も釣られ笑顔になるんです。

貴方の事を考えると胸が苦しくて辛いんです。けど顕様と一緒に居るのが凄く楽しいんです。

楽就「顕様、教えてください…」

僕は何か精神的におかしくなっただんですか？こんな僕じゃないです…顕様に出会ってからの僕は僕じゃないんです…

~~~~~十数分後~~~~~

楽就「駄目だ、もう寝よう。」

考え始めたら武器の手入れなんて手につきやしない。それを実感した僕は頭を切り替えて寝ようとん剣を仕舞ったとき、窓の方からドンドンと壁を叩く音が聞こえるのに気が付いた。

楽就「?????」

なんだろう?また衛さん達が変な行動でもしてるのかな?と考えながらも確認の為窓を開けた瞬間、僕の部屋に飛び込んできた人影に驚愕と悲鳴をあげそうになった。

紀霊「すまん彩!匿ってくれっ!!」

そう言いながら微妙にはだけた格好で窓を閉める顕様…

楽就「うええええっ!?!顕様なっ何でここに!?!」

先程まで僕の頭の中を占領していた張本人、顕様が僕の部屋に…なんだ?!

紀霊「いやよゝ悪い悪い、衛姉達に俺の貞操が奪われかねん危機だったんでな…気絶させて逃げてきたんだよ。ガチで焦ったわ…」

楽就「え？ああ、成る程…」

だから服がはだけてチラチラと肌が見えるんだ…

無事逃げられたと安堵する顕様の表情とちらちらと僕の目を惹き付けて止まない肌交互に見ていた僕は、ふとあることに気が付いた。

楽就「あの…顕様、その傷は？」

僕が指摘したのは顕様の胸を真一文字に伸びる傷、顕様の肌を見るのは初めてだけど、僕の目はどうしてもその傷に目が行ってしまっていた。

紀霊「あー、この傷か？洛陽に来た初日さ、衛姉に勝負吹っ掛けられた時に斬られた傷が残ったんだよね…」

衛さんと…

洛陽に来た初日を思い出すのは戟を振る衛さんと戦う顕様の姿、負けちゃったけど格好よかったな／＼／

あの時の顔様を思い出すとまた熱くなってきそうだったので、慌てて会話を再開する。

楽就「そ、そう言えば顔様はどうしてここに？」

そう、僕にとって一番気になる疑問。何でこの部屋に来たのか？僕の質問に顔様は苦笑いをしつつ頭を掻きながら僕に答えてくれた。その答えは僕に衝撃を与えるには十分すぎる破壊力を持った言葉：

紀霊「実はさ、悪いんだが…今日ここで寝させてくれ！」

楽就「へ？」

寝る？誰が？顔様…が？つて僕の部屋で！？

ままま、待つて下さい顔様！僕まだ心の準備も出来てませんし体だつてまだ汗臭いかもしれないですよ！？

ああ、もう！こんな事なら念入りに洗つておけばよかった…絶対汗の匂いとかするよ僕…

紀霊「ああ、勿論俺は床で良いからさ。彩は俺を気にせず寝てく」
駄目です！！」「…れ？」

楽就「床で寝るなんて余計に疲れるだけです！それに僕の寝具なら顕様と一緒に寝るぐらいの余裕ありますし、それにそれに…ああ、もう！顕様が寝具で寝てくれないなら僕も床で寝ますよ！？」

自分でもなんでこんな大胆な言葉が出たのか解らない。けど

紀霊「へ、あ、はい。（まあ、男同士だし問題ないか。）」

顕様と一緒に寝れるという事実に見得した僕、心の中で衛さん達に感謝しながらも気が付いたら一緒に寝具で横になっていて…

楽就「そのまま気絶しちゃったんだ僕…」

ああ…僕の馬鹿！顕様と二人っきりでお話できる機会だったのに何で気絶

紀霊「んむう…」

…しちゃうね、うん。顕様の寝顔見るのなんて初めてだしこんなに密着しているんだもん。

寝顔を見つめながら自分でも解るくらいに激しい鼓動を抑えようと必死になる僕に寝相なのか寝ぼけてなのか顕様が腕を動かして僕を

抱きしめる。

少しでも動けば唇が触れてしまいそんな距離…そんな至近距離に引き寄せられた僕は…

楽就「(ぎゃおおおおおんっ!?)」

心の中で良く解らない事を叫びながら…また意識を手放してしまっ
た…

~~~~~

紀霊「んむ?」

差し込む朝日と小鳥の泣き声を目覚ましにゆっくりと目を開ける。  
そっぴや昨日は彩に匿って貰ったんだっとな…

頭を掻きながら横を見る。

楽就「え…えへ、えへへへ／＼／」

…なんか幸せそうに寝てるから起こすのも可愛そうだな。



紀霊「ありがとな彩、一足先に仕事行くわ。」

彩の頭を優しく撫でてからゆっくりと起き上がり、彩を起こさないように部屋を出て自室に向かい着替えと財布やら荷物を手に入れた俺はまだ人の通らぬ早朝の洛陽を歩く。

紀霊「さーて、午後からプロデューズ。仕事早めに終わらせるか！」

~~~~~紀霊出勤中~~~~~

執務室の中、昨日提出された書簡と今朝届いたばかりの書簡の処理をこなす俺は衛姉から提出された書簡を見た瞬間また溜息をつく。

紀霊「守備軍の訓練項目に『投石器からの跳躍』を正式に組み入れたい…か…」

昨日の今日でこの人は…

紀霊「却下に決まってるだろ衛姉…」

未だ俺の寝具で寝ているであろう衛姉を思い浮かべながら不許可の印を押して返却用の箱に放り込む。

紀霊「つたく、今度腹下す秘孔でも突いたろうかあの人…ん？」

ふと、書簡の山の中に一際目立つ装飾が施された書簡が目にとまる。なんだこりゃ？

紀霊「差出人は…袁本初お？」

おいおい、内容見る前から嫌な予感しかしねえぞこれ…
そう思いながらも取り合えず文面に眼を通す。まあ、俺も少しはまともな提案だと期待したのだが要約すると

【洛陽守備軍は装備が地味ですので金色の鎧にして私が指揮するに相応しい軍隊にしたい。 by袁本初】

だとさ…

紀霊「…馬鹿かこれ？」

訳の分からん提案してくんなよお姫さん…てかあんたは守備軍所属

じゃなくて親衛隊所属だろうに…

勿論却下。

紀霊「まったく衛姉と同じような思考した提案書があるとはね…」

呆れながらタバコに着火、落ち着くよう務めながら残った書簡を処
理に集中した俺はそのまま昼飯時までに仕事を終わらせて彼女達と
の集合場所に向かう。目指すは大衆食堂【洛陽一番】

紀霊「さーで、来てくれていると良いんだがねえ…」

取り合えず紀霊プロデュース、【黄巾の乱勃発防止活動】の開始さ
ね。

さてさて、どうなる事やら…

楽就「ご主…顕様がプロデューサーっていう仕事を始めるみたいです。」（後書

台本書きから小説書きに変更しようとした結果行き詰ってこんな駄
文が出来上がったよ！

しかも更新週一でやりたかったのに…orz

なんとか元に戻せるように頑張ってみます。

御意見ご感想お待ちしております。

趙雲「主がプロデューサーという副業を始めたとのこと。

…そんな事より拙者を

執筆中…

p r r r r r …

ちらりと画面を見ると友人の名前

柳「……………（無視）」

十分後…

友人「柳ーっ！てめー電話出るや！」

柳「五月蠅い、黙れ、帰れ！」

友人「なんだよー折角麻雀の誘いに来たのに。」

柳「（だから無視したんだろうが…）」

つい先日まで休日は全て友人と麻雀（強制連行）…

うん、麻雀は好きだけど毎週やられるとキツイ（笑）
そして今日もやらされた（涙）

（そんな柳と友人の日常）

趙雲「主がプロデューサーという副業を始めたとのこと。…そんな事より拙者を

洛陽の繁華街に店を構える大衆食堂【洛陽一番】、昼飯時とあつて
混み合う店内で昨日と同じ席に座つて料理を待つ俺。

三人「……………」

そして俺の目の前にこれまた昨日と同じ座に座りながら俺を見る三
人。

俺を見つめる六つの瞳にはそれぞれが戸惑いと不安が見て取れる。
だが、微かに希望をほのめかしているように見えるのは俺の頭が都
合よく解釈しているからだろうか？

紀霊「さて、料理が来る前に少しばかり説明しようかね。」

地和「あのう、紀霊さん「プロデューサーです。」…プロデューサ
ー。」

紀霊「はい、何でしょうか地和さん。」

地和「昨日といい今日といい、…プロデューサーって具体的に何をす
るんですか？」

ふむ、やはりそうくるか…。まあ、昨日初めて出会った男にいきなり君達のプロデューズするとか言われても戸惑うだけだな。

だが、俺はやると言ったら7割はやる男。取り合えず説明していくか。

紀霊「簡単に言うとプロデューサーってのは、君達【数え役萬しすたあず】の歌や踊りの練習、それと活動内容を指示する人さ。勿論それだけじゃない。君達が活動しやすいように舞台を用意したりするのも俺の仕事ってわけ。」

人和「良く解らないですけど要するにプロデューサーは私達の先生ってわけですね！」

紀霊「当たらずとも遠からじ。まあ、似たようなもんだから正解。人和ちゃんは賢いなあ〜」

人和ちゃんの頭を撫でると「はう〜」と呟きながら嬉しそうに撫でられる人和ちゃん。うん、孫が好きな御爺ちゃん御婆ちゃんの気持ち少しだけわかった気がする。

つとつと、地和さんが鋭いまなざしで俺を睨んでるから話の続きつと…

地和「そんな事言われたって私達「良いじゃない地和ちゃん。」姉

さん!？」

と思ったら俺に反論しようとした地和さんを制止する天和さん。俺は何も口を閉ざして二人の成り行きを見守る事にして再度人和ちゃんの頭を撫でる作業を再開する。

天和「どうせこのままやって行っても変わらないなら紀霊さんに任せてみるのもいいと思うわよ。」

人和「私も天和お姉ちゃんの意見に賛成です！」

俺に頭を撫でられて猫みたいな顔になっていた人和ちゃんも天和さんの意見に賛成なのか両手を挙げて元気よく挨拶。うん、元気が良くて可愛いからもっと撫でておこつ。

地和「くっ…二人とも。紀霊さん!二人が言うなら従いますが、もし聞くに値しないと判断したら私は私で動きますからそのつもりで居てください!」

納得してくれたのは良いのだが、地和さんからの信用皆無なんだな俺:まあ、結果出して納得させなきゃいけないんだからしょうがない。いっちゃしょうがない。

紀霊「だから、プロデューサーだったの。まあ、任せておけ。」

さあて、プロデューサーでも始めますかな

【趙雲「活動一日目〜二日目でございます。」】

紀霊「今日は踊りについて皆の実力を見ていきます。指摘事項があればその都度言いますので修正できるよう頑張ってください。」

三人「はい！」

~~~~~紀霊指導中~~~~~

紀霊「天和さん足運びが少し遅い！もう少しテンポ良く！ 人和ちゃんも逆に早すぎ！元気良いのはいいけど徐々に早くなっていてズレが始めてるからもう少し抑えてね。地和さんは集中しすぎて二人と合わさってないよ！周りにも目を配って！」

三人「はっ、はい！」

紀霊「んじゃ今指摘された場所を各自意識しながらもう一度最初から流すよ〜」

【何進「活動三日目〜四日目だぜ〜」】

紀霊「本日につきましては表現力についての鍛錬を行います。」

地和「どういった内容ですか？」

表現力と聞いてどのような鍛錬を行えば良いか戸惑う三人に対して紀霊は懐から一冊の書物を取り出す。

その書物の表紙には【忠犬八千公（三国志版）】と書かれており、彼が一晩で書き上げた渾身の作品だ。

紀霊「それでは、聞いてください…【忠犬八千公】。」

~~~~~  
一時間後~~~~~

紀霊「この物語はここで御終い。八千公が天に召された後ご主人様と逢えたかどうかは誰も知らない…」

人和「ひつぐ…八千公が可哀想れす…」

天和「うう…」

地和「…くっ」

紀霊が本を閉じ、三人を見やる。人和はやはり感受性豊かな子供だからか悲しそうに泣き続け、涙を拭ってあげている天和も目には涙を浮かべているなか地和だけは背中を向けて静かに自分の涙を拭いている。

そんな三人を見つめながらも紀霊は再度、懐から新たな本を取り出し開く。

紀霊「感動しているところ悪いんだが、次の作品は【母を訪ねて三千里】だ。ユクゾツ！」

【楽就「活動五日目〜六日目です！」】

紀霊「今日は歌の鍛錬するから各自の歌を効かせて欲しい。」

地和「一番手、地和。行きますっ！」

~~~~~地和熱唱中~~~~~

紀靈「ふむ。」

地和さんの歌声は澄んだ水の如く清らかで思わず聞き入ってしまう  
美しさ…顎に手を置き唸っている俺に、歌いきったからか爽やかな  
表情を浮かべた地和さんが俺の元に近寄ってくる。

地和「如何でしたかプロデューサー？」

紀靈「地和さんの歌は凄く綺麗で聞き入ったよ。いい歌声だね。」

自分の自慢である歌を褒められたからか照れくさそうに笑う地和さ  
ん。だが、褒めて終われる訳ではない、歌に関しては言う事無いん  
だがねえ…

紀靈「けどね、歌が好きなのは解るけど踊りや笑顔を疎かにしてい  
る分ちくはぐになってるかな。言ってしまうえば総合能力が無い。」

地和「なっ…」

紀霊「まあ、其処についてはおいおい直していこうか。んじゃ次天和さんお願いしまーす。」

【朱雋「活動七日目だってさ。それより弥依、今度頭の寝込み襲わないか？」】

大衆食堂【洛陽一番】の店内に俺たち4人はいる。お昼前でまだ客が入ってきていないため店内は空いているが今回は食事をしに来た訳ではない。

紀霊「えー、今日は営業の方やって頂きます。」

人和「はい、プロデューサー！営業って何やるんれすか？」

俺の言葉に勢い良く手を上げて質問してくるやよ…もとい人和ちゃん。やはり彼女は元気があって見ていてホッとするな〜

紀霊「今日の営業は…ここ【洛陽一番】のお手伝いをしながら歌や踊りでお客さんを楽しませます！」

実は昨日、店主の親父さんに提案して許可が下りたからこそ出来る

営業。つかここ以外に営業できそうな場所が無いってのも悲しい事実なわけですが…何はともあれお客さんと接しながら歌や踊りを披露する事で知名度を上げていくのが本日最大の目的である。

天和「あらら、今日は忙しい一日になりそうですねえ。けど店主さんにはお世話になっていきますし頑張らせていただきます」

紀霊「俺は厨房に入るけど変なお客さんに絡まれたりしたら真っ先に呼んでくださいな。さーて、親父さん。やりますか？」

店主「おうよ！天和ちゃん達が手伝ってくれるんだから気合入れていくぜい！」

そして迎えた昼飯時…

紀霊「炒飯3丁お待ち！人和ちゃんお願いね！！」

人和「任せてください！」

親父さんと共に厨房に立つこと30分、さすがは昼飯時ともあってかなりの数の料理を作り続ける俺の耳に地和さんの叫びが入ってくる。

地和「な、何をするんですか！！やめてくださいっ！」

「???」「いいじゃねえかよぉ〜俺達は客だぜい」

「…やれやれ、何が起きたか知らんがトラブルか。」

紀霊「親父さん、悪いけど少し抜けるわ。」

店主「おうよ坊主、遠慮はいらねえからやっちまいな。」

「いいのかよ…」

紀霊「…せめて外に出てからにするよ。」

直ぐ様地和さんの方へと駆け寄ると以前記憶を消したモヒコンビが地和さんの胸を触ろうとしたらしく…こいつらトコトン縁があるな…とりあえずあのつなぎを着たおっさんが居ない分やりやすいんだが懲りねえなーこのコンビ…

まあ、天和さんじゃなく地和さんの胸に目を付けたその着眼点は評価に値するがこのまま問題起こされると色々迷惑だからね、毎度お馴染みのアレやっておきますか。





私達姉妹を助けてくれて食事や宿まで提供してくれた人。

私達の活動を見て言った一言が「これじゃ駄目だ。」って否定して「俺がプロデューズする。」と言った人。正直私は出会って数時間ほどの関係なのにこの人は何を言っているんだろって戸惑った。

私自身、今まで姉妹だけでやってきたのにいきなり出てきた男にアレコレ言われる筋合いは無いし私達の今までが否定されるような事に反対しようとした。

けど、天和姉さんと人和が賛成してしまい、それにこれ以上生活が悪くなることもないと自分に言い聞かせ、姉さん達が賛成するならと渋々彼に従うことにした。

…いや、本当は違うのかもしれない。私だって今までのやり方で良いのか疑問に思っているところもあった。けど今まで三人だけでやってきたこと、私自身自分の歌に自信を持ってやってきたから認めたくなかった。

彼の指導で活動してまだ数日だが、プロデューサーは私達のことを思っただけで行動してくれている。

自身の仕事を午前中に終わらせて午後は私達と共に行動し、大將軍の副官という地位にいながら私達と一緒に大衆食堂の厨房で働いて私達を守るために闘うプロデューサー

本当ならこんなところで働く身分じゃないのに…本来なら私達と関わるような暇はないはずなのに…

なんでプロデューサーは私達なんか普通に関わってくるのだろうか？

私には理解できないし姉さんも人和も解っていないだろう。

けど、

地和「プロデューサー…」

もう少しだけプロデューサーを信じてみよう。

疑わずに素直に指摘も聞いていこう。

そしてプロデューサーに…

地和「（必ず、プロデューサーの手で変わった私達を見せてみせます。）」

681

~~~~~

モヒカン「あぶばー!?!」

モヒパン「おう…」

指を引き抜いて倒れ込むモヒコンビを見下ろしながら溜息を吐く。

紀霊「こいつらの記憶奪うのこれで何回目だよ……」

若干エンカウントの多さに呆れつつもこの二人を放置するわけにはいかず、どこか適当な場所に置いてくるしかないのだが…確かこいつら地和さんの胸揉んだって言うってたよな？

紀霊「んじゃ剥ぎ取るか。」

PTが全滅したら所持金が半減するのはお約束だもんね？多分数多の勇者達も雑魚敵や魔王に搾取された道だし彼らにとっても良い勉強代になるだろう。まあ、記憶消してるから勉強も糞もないけどね。

紀霊「お、意外と持ってる。」

~~~~~紀霊剥ぎ取り及び生きて屍搬送中~~~~~

紀霊「只今戻りました」

天和「おかえりなさいプロデューサーさん。」

店に戻った俺を出迎えてくれるのは天和さん。モヒカンとガチムチの二人のガチムチを不法投棄してきた事で精神的苦痛を味わった俺にとつては癒しの女神にしか見えない。ま、三姉妹全員癒やしの女神なんだけどね。

店主「お、坊主。怪我はないようだな？」

紀霊「いや、すまないね親父さん。怪我はないしそれより忙しい時間に抜けちまって悪かったな。夜はきっちり働くから勘弁してくれ。」

店主「おうよ！四人にや期待してるぜ！！」

その日の夜、【洛陽一番】は美人三姉妹の噂を聞きつけた男性客により創業以来最高となる売上を叩き出した。また、紀霊により記憶と財布の金額半分が失われた男性客も多かったそうなの。

【皇甫嵩】「あ、良いですね。じゃあ縄とか薬とか用意しておきま  
すね先輩。あ、ついでに活動八日目らしいですよ？」【

紀霊「えー、今日は待ちに待った本番です。七日間の成果を存分に  
出して来てください。」

炒飯を頼張る人和とそれを和かに見る二人に対し俺は本日の予定を  
発表したんだが…

地和「へっ！？ きききききき聞いてませんよそんな話!？」

天和「あらあら〜今日は上手くいくかしら?」

人和「おじさん、もやし炒飯の御代わりお願いします!」

なんとも三者三様の反応を見せてくれること。つか、話聞いてくれ  
よ。昨日の夜話しただろうに…

紀霊「一応昨日の夜話はしておいたはずだぞ…」

地和「そう言えば言っていたような…」

人和ちゃんは良いとしても地和さん…君にはきちんと話したはずだ  
つたんだがね。まあ、心当たりあるみたいだし今思い出してもらえ  
たから良いとしよう。

紀霊「本番は一時間後だからそれまで各自準備をしっかりとるよう  
に。」

プロデューサーはそれだけ言うと直ぐ様店の外へ…タバコとかいう  
物を吸うためだろう。

私は残された姉と妹を見やる。

天和「あらあら早く準備しなくちゃね。」

人和「うっうー！私もこれ食べたら準備れす！」

緊張感の欠片もない二人に頭を抱えなくなったが、残された時間は  
少ない。私は頭の中を切替えて姉さん達に激を飛ばす。

地和「姉さん！人和！三十分で着替えや化粧、その他諸々の準備終  
わらせるわよっ！そして残った時間で本番の流れ通して万全の調子  
に持っていきますよ。ささ！てきばき動く！」

私の言葉に急かされたのか何時もの動きよりも若干、ほんの少しだ  
がテキパキと動き出す姉と妹…

こうしては居られない。私だって準備してプロデューサーに最終調整を手伝ってもらわねばいけないからだ。

そう思いながら直ぐ様【洛陽一番】の二階へと駆け上がり置かせてもらっている衣装や化粧箱を使って大急ぎで準備に取り掛かるのだった。

~~~~~本番寸前~~~~~

洛陽の市場通り、さすがに昼飯時ともあって人の流れは多く夕方と同じくらいの人集りの中、俺は彼女達の前に立ちニヤリと微笑む。

紀霊「さーて、三人とも楽しんでおいで。変な奴らが来たら俺の方で事前に処理するから安心してくれ。」

三人「はい!」

再度彼女達の顔を見やる。

うん、全員気合はいつって良い顔してるよまったく。周囲警戒なんて仕事放り出して観客になりたいって思うくらいだ…

紀霊「うん、じゃあいつてらっしやい!」

俺の言葉を合図に彼女たちのステージが始まる。

天和「皆さんこんにちわ」

地和「私達」

人和「数え役満しすたあずっというアイドルやってまーす！」

急に出てきた三人に興味の目を向ける市民達、彼女達も自分達に視線が集中しているのを察知すると直ぐ様次の行動に移る。

地和「私達の歌と踊り…聞いてください。」

人和「いきまーっす！」

そして奏でられる音に流れる歌声、その歌声も踊りも以前見た時よりも華がある。

紀霊「（そう、そうだ…）」

天和さんの踊りはテンポが治っている。

人和ちゃんは全体的に纏まってきている。

そして…

地和「く」

彼女の歌が冴え渡る。

三人が三人、バラバラのように見えて調和が取れていて全部が綺麗に見え、さながらそこに咲くのは三輪の華。観る者すべてを魅了する華がそこにある。

次に徐々に増えていく人集りに目を移す。

最初から見ていた者、騒ぎを聞きつけ集まってきた者その全員が三人に魅入って途中で離れるものなど殆どいない。以前は五、六人が最後まで聞いていたら良い方だと聞いていたが、今見ている人の数は五十人は下らないしさらに集まってくるだろう。

紀霊「っと、あのコンビがまた来やがった…俺もお仕事お仕事っと。」

~~~~~

地和「ありがとうございます！まだまだいきますっ！」

天和「お次は私が歌います。皆さん聞いてください〜」

まだまだ彼女たちのライブは続く。俺はその間彼女たちの害になりそうな市民にはお眠りいただく事になっているんだが…

???「うおおおおおおおっ！！てんほーさーああん  
！！」

やったら身分高そうな奴が天和さんの名前を絶叫しているんだが…これは眠らせたほうが良いのだろうか？彼女達に近づいてどうこうつてのはしそもないから放っておいても良いんだが…腰に付いている紋章、あれ文政府の紋章だよな…

???「姉は至高の存在だあああっ！巨乳なら尚良しっ！！」



………孔子の子孫がこんなとこでなにやってんだよ！！開祖が見たら泣くぞ多分！！

紀霊「此方こそ失礼しました。孔子の子孫とは露知らず「ああ、いってそんなん。ご先祖様と比較されたくねーからさ、年近いんだし気楽にいこーや。」…あいよ。」

なんつーフランクさ…

孔融「あ、取り敢えず自己紹介は後にして今は天和さんの応援しねーとー！」

いや、まあ、野郎よりはアイドル優先したい気持ちはわかるけどさ…ん？あ、いいこと思いついた。

紀霊「孔融殿、彼女達の事で提案なん「承った！！」はやっ！まだ内容話してねえよ！！って取り敢えず彼女たちに近づいて悪さしようとする奴がいたら何としても阻止してくれ。理由はあとで話す！」

孔融「おっしやっ！そんぐらいお安い御用だ紀霊殿。ついでに合法的に人殴れる！」

紀霊「いやこれ合法じゃねーから！」

けど彼はきっちり仕事（殴打）してくれてました。

洛陽の市場通りは熱狂と歓声、そしてアイドル達の歌声に包まれた。その中で動くは紀霊と孔融。そして、三姉妹を眺める二人の影…

男の子っぽい女の子「凄い…プロデューサー…、僕も彼女達みたい  
に輝けるんでしょうか？」

観客から少し離れた場所から三姉妹を眺める二人、

社友者P「…これが【数え役満しすたあず】か…くっそ、負けてら  
れないな。」

彼らもまた頂点を目指す駆け出しアイドルと新米プロデューサーの  
新人コンビ。

社友者P「よし！明日からの鍛錬内容を変更して少しでも早く彼女  
達に追いつくぞ真！」

だが、このコンビ

真「はいっ！僕ガンガンやっちゃいますんでよろしくお願いします  
プロデューサー！」

何れ【数え役満したあず】と肩を並べるアイドルと名プロデュー  
サーになることを誰も知らない。

趙雲「主がプロデューサーという副業を始めたとのこと。…そんな事より拙者を

まず先に【修正報告】

【増えるもの】の回で記述していた劉協の性別を修正しました。

弟 妹

【続・紅白姉弟の普通（？）な乱世】の主人公の真名を修正しました。

続きまして

社友者先生、作中出演の許可を頂いてありがとうございました。や  
つとこの回で出すことができました。

携帯電話先生、新キャラ【孔融】のモデルにすることを許可して頂  
きありがとうございました。

7月まで忙しいためバトンや他の先生が書かれた作品を読む機会が  
減りますがなんとか更新していこうと思います。

ご意見ご感想お待ちしております。

孔融「どつやら俺は【数え役満しすたあず】のプロデューサーと知り合ったら

友人の部屋にて

友人「なあ、柳。」

柳「ん？」

友人「お姉ちゃんつても悪くないんだな…」

このとき柳に電流走る…！

柳「目を…目を覚ませーっ！」

友人「いやさ、お前の作品もあるけど色々あつて年上の女性…いいな。」

柳「おまつ！妹はどうした!？」

友人「妹も好きさ、けど姉も嫌いじゃないぜ（キリッ）」

その後、友人のDドライブに入っている年上の女性がヒロインのアニメを全て削除しようとしたところ、普通に蹴られました。

~~~~~そんな友人と柳の日常~~~~~


孔融：お前の書きやすさは兵A並だ！

孔融「どつやら俺は【数え役満しすたあず】のプロデューサーと知り合ったら」

【洛陽一番の2階】

紀霊「えー皆さん、お疲れ様でしたー。」

ライブを終えた三人に労いの言葉を口にした俺に対し

地和「あの、プロデューサー…」

若干戸惑い気味の地和さんが視線を俺の横に起きながら何か言いたそうにしている。

…うん、言いたいことは何となく解る。

そう思いながら俺も視線を横に移すと

人和「うっうー！大成功の記念にはいたーっちー！」

孔融「はいたーっちー！いえーいー！」

ハイタッチを交わしている人和ちゃんと孔融殿

天和「あらあら、すっかり仲良しさんね。」

そして笑顔で二人を見守る天和さん。

孔融「そうっすね。けど俺は天和さんとも仲良しさんになりたいもんです。いやはや、三人に出逢えた今日に感謝感激だよ本当。」

天和「うふふ、なら私達も仲良しさんになっちゃいましょうか？」

孔融「なら仲良しさんの証に…はいたーっち!!」

褒められたのが嬉しいのか照れながら答える天和さんとテンション高めにハイタッチする孔融殿。なんっーか、馴染みすぎだろ…

地和「あの人…誰なんですか？」

ごもつともな意見、しっかし人和ちゃんも天和さんにも紹介してないんだがな。普通にあっち向いてほいやってるし…

紀霊「取り敢えず紹介するわ…三人共ー！楽しんでるとこ悪いんだ

けどこっちに来てくれ。」

俺の言葉にあっち向いてほいを中断した三人は俺と地和さんに近寄って来る。

紀霊「んじゃ紹介するわ。途中からこの人は俺の仕事手伝ってくれた人でな、文政府の孔融殿だ。」

孔融「今回飛び入りで参加させていただいた孔文學です。真名は慎しん、気軽に槇ちゃんって読んでください。」

孔融殿は三人に一礼、自分の名前と真名を紹介…っておい。

紀霊「待て孔融殿。」

孔融「いや、慎で良いよ。俺と紀霊殿の仲じゃないか」

仲って出会って数時間ってレベルじゃねえぞ!?

出会って数時間でそんなに仲良くなれる奴なんて見たことねえよ!

紀霊「…考えるだけ無駄か。慎、俺は黙って言う。」

孔融「うつつ？どう書くんだ？」

顕の漢字がわからないのか訪ねてくる慎に対し、俺は適当な書簡に自分の真名を書いて見せる。

孔融「なんだ顕けんだろこれ。」

紀霊「ちげーよ、顕うつつだ。」

孔融「良いじゃん愛称みたいな感じでさ。こっちの読み方なら一字分少なくなるし読みやすいだろ？」

人の真名を読み方変えて愛称にするとか名前間違っただけで覚えられていと勘違いされても仕方ないぞ？
「うーかこいつ」「うつつ」「って読むのが面倒だからって」「けん」って言うてるだろ絶対…

紀霊「普通に俺の真名を言ってくれ…っど？」

少々呆れつつ檣と話していたところ、後ろから肩を捕まわれて思わず振り向く。振り向いた先に居たのは

地和「プロデューサー……」

紀霊「ん？どうした地和さん？」

俯いているので表情は見えないが何やらお怒りのご様子でプルプル震えていらっしやる…俺なんかしたっけ？

地和「慎さんって孔融ってお名前なんですよね？」

紀霊「あ？うん。確かにそうだけど？」

地和「何でもっと早くに言わないんですかーっ！ー！」

地和さん大爆発！って何？なんぞ？

孔融「あゝあ頭けん、やっちまったな！」

天和「あらあら、何時も鍛錬に厳しいプロデューサーさんも地和ちゃんの前じゃ形無しですね。」

いや、その二人！ほのぼのしないで俺を助けようよ！ていうか助けてください！

人和「慎さんって偉い人なんれすか？」

地和「偉いも何も孔子の子孫よ！そんなに高貴な方だったのを言わないなんてプロデューサー！一歩間違えれば私たち捕まってもおかしくないんですよ？」

よくわかってない人和ちゃんに対し榎の説明をする地和さん。ああ、そついや言つてなかったな…けど、俺が悪いのか？

孔融「ああ、天和さんに人和ちゃん。俺つてさご先祖様の事とか気にしないから別に畏まつたりなんか必要ないからね。それより料理も来てるんだし仲良く食べよう〜んんじゃ頭けん後はごゆっく〜」

慎は慎で天和さんと地和さんにだけフォロー入れてるし…慎！俺にもフォロー！フォロープリーズ！！

紀霊「ま、まあ、慎もああ言っているんだしさ。俺たちも三人に混ぜて食事「言い訳無用！そこに正座！！」…はい。」

言われるままに床に正座。拒否？無理無理、だって体が勝手に動いたんだもん。

地和「大体貴方は始めてあったときからそうでした、良いですか？貴方は自分の身分について特に気にしていないようですが私たちがら見たら偉い人なんですよ！さっきまで親しくしていた人が実は偉い人だったなんて知らされるこっちの身にもなってください！」

~~~~~30分後~~~~~

地和「今回の件も同じです！良いですか？榎さんが自己紹介するまで黙っているのではなく貴方自身が軽く説明してくれば私だってこんなに怒りませんよ。なのになんですかあの体たらくは、それで私たちのプロデューサーと言えるんですか？言えませんか？御自身でも自覚されたんですしたら直すよう努力してください！折角私のプロデューサーとして認め…な、なんでもありませんっ！／／／とにかく！、今後は注意してください！」

紀霊「ハイ、ワカリマシタ…」

やべえ…途中から湖上に浮かぶ船が頭の中一杯に広がって気がついたら説教が終わってた。

うん、足しびれて立ち上がりたくない。



地和「それじゃ姉さん達と一緒に料理を楽しみましょう。立ってますか？」

紀霊「うい、手貸してくれると助かる。」

地和さんの手を借りながらよろめきつつもなんとか立ち上がった俺は先に料理を食べているであろう天和さん達の下に近づいて…

人和「お兄ちゃんっ!!！」

紀霊「へぶらばっ!?!」

行った途端に人和ちゃんのロケット頭突きを腹で受け止める。効果は抜群だ!しかも鳩尾だから急所に当たった!!

地和「人和!?!」

何が起きたのか理解できずに居る俺達だが、そんな俺達の目にとつて更に驚きの光景が目に入ってくる。

天和「うふふ…これね?これがいいんでしょ」

孔融「ちょ！まっ天和さっ！むぐぐぐっ！！」

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

俺の鳩尾に人和ちゃんが頭突きしてきたかと思ったら

慎が天和さんに頭を捕まれて天和さん自ら【自分の胸に慎の顔】を埋めるように抱きしめている！

な…何を言ってるのか　わからねーと思うが

俺には何が起きているのかわからなかった…

頭とダメージを受けた胴体がどうにかなりそうだった…

ご乱心とか大暴走じゃ考えられない

そんな甘いもんじゃあ　断じてねえ

もっと恐ろしい【F91】の片鱗を慎は味わってるぜ…

地和「ねっ、姉さん！何しているんですか！？」

流石は地和さん。俺が言いたいことを代わりに言ってくれるなんて…そこに痺れる憧れ…ちょ、人和ちゃん！頭グリグリ止めて！それダメージじわじわくるから！

天和「あら？地和ちゃんもする？」

地和「しませんっ！」

天和「あら？そっか、地和ちゃんは慎ちゃんじゃなくてプロデューサーさんにしてあげたいんだもんね。けど、地和ちゃんじゃあプロデューサーさんも物足りないんじゃないかしら？」

地和「くっ！プロデューサーは関係ありませんし姉さんは私に喧嘩売っているんですか!？」

紀霊「地和さん落ち着「プロデューサーは黙っていてください!」…っい。」

なんだろう、最近流される頻度が高くなってる気がする。もうちょい強引にいったほうがいいのかな俺？

少し凹んでいた俺を尻目に天和さんに説教をしようとした地和さんだが

天和「まあまあ、地和ちゃんも飲みなさいって」

地和「姉さんっ！？何を飲ませんぐうっ！？」

慎を開放した天和さんは地和さんを捕まえて右手に持った瓶をまるまる地和さんに飲ませ始める。

ん？飲ませる？って待て待て待て！まさか！？

いやな予感がした俺は人和ちゃんをおぶりながら床に倒れこむ慎の元に駆け寄る。

紀霊「おい慎！まさかあれ酒か！？」

孔融「う、顕うつつ…」

紀霊「おいしっかりしろ！」

荒々しく息をしながら倒れこむ慎を起こしつつ、服を軽く緩めてやる。つたく、死ぬんじゃないぞ…

孔融「巨乳の姉こそが正義…いい時代になったものだ…」

訂正、やっぱり死ぬ。

紀霊「秘孔【新？中】！」

孔融「あがつ！？ 顕っ！何をするだぁーっ！？」

やかましいわ！俺の真名をやっと呼んでくれたのに死に掛けたからって心配したのに開口一言がアレかよ！

紀霊「お前と俺とでは致命的な違いがある。それは理性…自制心だ！」

孔融「何を言うか！俺以上に自制心と理性を持つてる奴なんてそうそう居ないぞ？」

お前の言う理性と自制心はルビが「欲望」と「自重しなさ」だろうが…まあ、良い。

紀霊「ほう、なら試してやろう。」

もう一度【新？中】を突いた俺は慎をそのままに天和さんの方を向く。相当飲まされたのか地和さんは床に座り込んでおり天和さんは新たな瓶を開けてラッパ飲みをしている。どんだけ飲むんだよあの人…

紀霊「天和さん！慎は貴方達が歌っている間ずっと天和さんの名前を叫んで応援していました。ついでに言うとな和さんみたいな胸の大きいお姉さんが大好きらしいです！」

孔融「ちよ！おまつ何事実話してるんだよ！」

天和「あらら、慎ちゃんはお姉ちゃん好きですか。ほらほらお姉ちゃんですよ」

身動きのできない慎を天和さんの下まで運んであげる。すると、さつきよりも深く力強く抱きしめた天和さんによりまたもや胸の谷間に埋まっていく慎の顔。慎、精精足掻いて見せる。まあ、今度は助けんから安心して地獄を見てくるといいたさ。

最初は止めるように天和さんへと話しかけていた慎だが、一分と持たぬうちにヒヤッハー！とか叫び始める。流石は「【理性と自制心の塊（笑）】だ。

さて、次は…

紀霊「人和ちゃん…は寝ちゃってら。」

俺の背中に張り付いたまますうすうと寝息を立て可愛らしい寝顔を見せる人和ちゃん。流石に13歳にお酒はきつかったようで…つか天和さん、自分の妹にお酒飲ませたらあかんでしように…

俺は起こさぬよう優しく頭を撫でながら近くにあった寝具に寝かすつけてやる。

紀霊「まったく…恋を思い出しちまったや。」

離れてまだ数ヶ月と経っていないが甘えん坊で食いしん坊な妹弟子と人和ちゃんをついつい重ねてしまう。けど思う。恋に頭突きされたら人和ちゃんの比じゃない。たぶんされた瞬間俺の腹に風穴開いてる気がする。

人和ちゃんを寝かしつけた俺は残る問題。そう、天和さんにより酒を飲まされているであろう地和さんの介抱をするために彼女に近づく。その横では憤が変わらず天和さんの胸の中でぐったりしているが無視だ無視。

紀霊「つと、地和さん無事か？」

地和「ぶ、ぶろでゅーさー…」

ほんのりと上気して赤くなった顔、そして吐く息は酒臭く口元も緩んでいるが、なんとか受け答えは出来る様で少しほっと

地和「ちーちゃんね、とつぶあいどるになりたいの。」

出来そうもないなこりゃ…

紀霊「地和さんって酒入るところなるのか…」

地和「だめー、ちーちゃんって呼んで？」

アルコールって怖いわく、普段しつかりものの地和さんが幼時退行おこしてら…ああ、明日の朝飯なんだろうな？

目の前の惨状に軽く現実逃避を起こしていた俺だが

ぐいっ

紀霊「へ？」

地和「ちーちゃんって呼んでなきやいや〜！」

俺の頭を両手でつかんだ地和さん、何を考えたのか天和さんと同じ



く俺の頭を……って待て待て待て！  
ちよっ！当たってるから！

紀霊「ちよっ地和さん！」

地和「えへへ／＼／ お姉ちゃんみたいに胸ないけど私もぷろでゅ  
／＼にやる〜」

いや、やるっていうか既にやってるし!?

紀霊「憤！助ける！」

唯一の助け舟であろう櫃、だが、俺が見たのは

孔融「……………」

天和さんの胸の中で既に物言わぬ死体と化している憤の姿であった。  
いや、まあ、息はしてるしなんか幸せそうな顔しているからたぶん  
生きているよ？  
けどね……

地和「ぷろでゅ／＼さ、ちーちゃんも抱っこ」

せめて俺を助けてから死んでくれ!!

~~~~~翌朝~~~~~

人は激しく酔った際に記憶が飛んでしまうことがあります。

その例として五人の人物を次に挙げましょう。

一・記憶が飛んでしまうタイプ

人和「うっうー！ 昨日の夜美味しい物食べたはずなのに思い出せないねす…」

そう言って少し悲しげな表情を見せる人和ちゃんと

孔融「いやさー、昨日酒飲んだせいか変な夢見たよ。え？どんな夢かって？なんかさ、体は動かないんだけど、俺が空中に飛んでいてやたらと柔らかくて暖かい雲に包まれる夢なんだよ。雲なのがいい匂いだっかし…っーか雲に匂いつてあんのか？」

と爽やかに語る孔融。

二・しっかり残るタイプ

天和「あらら／＼／＼ わ、私ったら槇さんになんて事を…／＼／」

地和「…／＼／ 恥ずかしくて死にたい／＼／」

昨夜自分達がしでかした痴態を思い出して赤面する天和と地の二人。

三・飲んでも余り酔わないしきっちり記憶もあるため事後処理に回るタイプ

紀霊「いやさ、天和さんもちーちゃんも酒の席だったんだからそこまで気にしないで…」

地和「ちっ、ちーちゃん！？／／／／／」

いやはや酒の力とは下に恐ろしきかな。

孔融「酒は飲んでも飲まれるな。つてな」

紀霊「お前が言っつな…」

孔融「どつやら俺は【数え役満しすたまず】のプロデューサーと知り合ったら

本当は怖いお酒の話。いかがだったでしょうか？

さてさて、遅筆ですが次は早く出せるようがんばります。

…けど忙しいんだろうなあ（泣

御意見、ご感想お待ちしております。

華雄「頭がプロデューサーという仕事を始めたらしい。頭…、お姉ちゃんのプロ

柳「【涼宮ハルヒちゃんの憂鬱】の森さんは可愛いと思うんだが、特に4巻。」

友人「いきなり何言っただお前…」

柳「ばっか！森さん年齢不詳だけど明らかに高校卒業してるよね？その人が高校の制服着てハルヒの格好してるんだぞ！しかも恥ずかしくているところが可愛いじゃないか！」

友人「…あー、お前そっちな…」（若干遠のく）

柳「遠のくな馬鹿。ってお前は年下だったな…」（若干遠のく）

友人「一応年上も有りかなー？って思い始めたけど基本年下だな。」

柳「相容れねえな俺たち…」

友人「まっただ。」

~~~~~そんな作者と友人の日常~~~~~

今回は戦闘回になるのかな？

そして孔融君がいつの間にか伝承者？になったようです。

華雄「頭がプロデューサーという仕事を始めたらしい。頭…、お姉ちゃんのプロ  
歓声に沸いたライブと混沌に満ち溢れた酒宴の日から一日、彼女た  
ち三姉妹には明日までゆっくり休んで貰い次の鍛錬への英気を養っ  
てもらいたいものだ。

ん、俺？

昨日も今日も普通に仕事ですけど何か？

だってさ、俺休むと衛姉達勝手に書類通しちゃうんだもの。あの二  
人に隙なんて見せてられない訳よ。

まあ、今日の仕事は終わったし星達の鍛錬に混ざろうと思って庭に  
来たのはいいんだが…

朱雋「さあ来い慎坊！どこからでもどうぞ」

孔融「しゃああああおらああああっ！！」

双剣を構えた衛姉と鉤爪のついた手甲を両腕に装着した慎が対峙し  
ているんだが…

楽就「慎さんも衛さんも頑張ってくださいね」

趙雲「ふむ、愼殿がどこまで戦えるか…」

いや待て星彩コンビ。君たちは何普通に観戦しているんよ？てか何故愼の真名を知ってるのさ？

紀霊「星、彩…何あれ？」

観戦に夢中になる彼女たちの横に付けて俺も戦い始めた二人を眺める。おお、愼の奴割とやるじゃん。

趙雲「おお、主。今日の仕事は終わったようですね。」

紀霊「ああ、だからお前たちの鍛錬に混ざろうとしたんだが…」

楽就「見てのとおり衛さんと愼さんの手合わせですよ。」

うん、手合わせなのは見ればわかる。けどわざわざ説明してくれてありがとうな彩。

紀霊「てかお前ら愼と知り合いだったのか？」



樂就「あれ、ご存知ありませんでした？慎さんは結構前から將軍府に遊びに来てましたよ。」

……………マジで？

紀靈「俺は二日前に知り合っただが…あいつ將軍府に来てたのかよ…」

え？あんなに騒がしい奴なら会っていたら絶対覚えてるぞ多分。

趙雲「主は普段執務室に籠っておりますからな、会う機会がなかったとしてもおかしくありませんな。」

…籠りつきりつてのに否定できんのが辛いが…お、決着付くなアレ。

孔融「南斗迫破斬！！」

朱雋「飛んでけええええっ！！」

双剣を振り下ろす衛姉の一撃と下から振り抜くように爪を振るう慎、そして二人の攻撃が触れ合った瞬間

孔融「えんだあああああつ!!」

力負けしたのだろう、衛姉の攻撃によって慎が俺たちの目の前を飛んで行きそのまま…

紀霊「いや…」

どんがらがっしゃーん

孔融「そげふっ!?!」

壁に向かって慎をシュートオツ!

哀れなことに慎にぶつかってしまった壁さんがボロボロに…おいおい慎、そこは「ユリア」って叫ばなきゃ駄目だろ真名的によ。てか何で南斗孤鷲拳使えるんだよお前…

朱雋「南斗聖拳を用いてもこの朱雋に勝つことは出来ん!! おつ、良い弟 どうだ頭、私と一戦やらないか?」

そりゃあんたはそのポジションだろうよ衛姉。つか会った瞬間に言う言葉がそれか?もつと普通に挨拶とか出来んのか?

紀霊「衛姉、壁の修繕どうすんだよ…」

朱雫「大丈夫大丈夫、意外となんとかなるもんだぞ？と言っわけ  
頭、手合わせ終わったらでいいから頼んだぞ。」

紀霊「結局俺か！」

俺は便利屋か何かかっての…

孔融「ってーか俺を心配しろーっ！」

紀霊「やかましいわっ！お前の心配よりも俺の仕事が増えた事のほ  
うが一大事だ！！」

孔融「ひっど！俺とお前は友じゃなかったのか！？」

友だろうと強敵とせだろうとお前の心配はしない。だって掠り傷程度で  
済んでるみたいだからな。  
それよりもまずは…

星から差し出される三華尖を握り締めて衛姉に対峙するように動く。

紀霊「んじゃ、勝ちますかね？」

壁の修繕は後で慎にでもやらせるとして…最近手合わせとかしてなかったからな。良い運動だ運動。

軽く三華尖を振るいながら朱雫に不敵な笑みを見せる紀霊、本人のやる気は十分といったところだがそんなやる気を挫く様な横槍が趙雲達から飛んでくる。

趙雲「そうは言いますが主…」

楽就「確か衛さんと顕様の対戦成績って五戦五敗ですよね…」

孔融「じゃあ今日で6戦6敗か。顕乙！」

けらけらと笑う孔融と苦笑いを浮かべる星彩コンビ、その三人をげんなりした表情で眺める紀霊はため息ひとつ、ぼそりと呟く。

紀霊「やる前から負けにすんじゃねえよ…木人形にしてやるーかま  
ったく…」

朱雋「なあ、頭。どうせだったら賭けでもしないか？」

紀霊「賭け？またろくな事にならない気しかないんだけど…」

どうせ衛姉の事だから…書簡通せとかそんなところだろうけどさ

朱雋「私が勝ったら今度出す書簡に無条件で許可をする。私が負けたら壁の修繕は償がやる。どうだ？」

ほーら予想通り。

紀霊「ok。」

孔融「ちょ！俺の意思は!？」

お前の意思なぞ知らん。

朱雋「ええ、なあ償。私からのお願い…駄目？」

孔融「衛さんみたいな美人のお姉さんのお願い断る奴なんてそいつは男じゃねえ！！もちろんやらせていただきます！！」

…了承した俺も俺だが快諾するこいつもこいつだと思つのは俺だけか？

朱儁「んじゃ、試合開始」

その言葉とともに剣を紀霊に向かって投げつける朱儁、明らかな奇襲である。だが、

紀霊「その位は読んでたよ衛姉。」

紀霊は即座に三華尖ではじき返す。奇襲が通用しないと考えていたのは朱儁も同じなのか、はじき返された剣を掴むと即座に駆け出して間合いを詰める。

朱儁「まだまだいくよ〜とわったったった？」

それすらも読んでいたのか朱儁の軌道の先に牽制の突きを繰り出して間合いを広げる紀霊。

紀霊「それも読んでた。(やつべえ…結構ぎりぎりだったな今…)」

体勢を立て直した朱雋は即効は効果なしと判断したのか今度はじりじりと間合いを詰め始める。しかし紀霊の得物は槍、攻撃範囲の大ききさでは不利なためあまり近寄ることも出来ない。しかもあの槍は

朱雋「やはりその槍…厄介だよまったく…」

紀霊「まあ、衛姉にダメージ与えられる貴重な攻撃手段だからな。」

僅か、僅かではあるが何故か彼女の体に傷をつけることが出来た武器である。

紀霊にとってはリーチが短いものの小回りが良い双剣と朱雋の頑丈さは脅威。まだ攻撃力は低いから助かるものの無理やり突っ込んでこられて攻撃を重ねなれると確実にダメージを受ける。しかし朱雋に反撃してもほとんどダメージを与えることは出来ない。それゆえに僅かでもダメージを与えられる三華尖の存在に朱雋は警戒しているため紀霊の対朱雋戦において命綱とも言える。

逆に朱雋からすれば間合いは広いものの懐に入ってしまったえばいいだけの話。だが、三華尖は自分にとって脅威であり、もし懐に飛び込んだとしても秘孔を突かれたら行動不能になる場合もある。

要するに紀霊はあるていど槍で牽制しているだけで朱雋の動きを封じることが出来るようになったのだ。

だが、紀霊と朱儁には大きな違いがある。

朱儁「それじゃ私から行くよー」

再度紀霊の懐に向けて突撃、しかも今回は双剣で紀霊の槍を受け流しながら完全な成功を見せる。

対する紀霊も迎撃とばかりに秘孔を突こうと腕を振るうが

朱儁「このときを待っていたのだーあ！」

紀霊「わぷっ!？」

顔を勢い良く横に振り、己の髪を紀霊に当たるように振り回す。そう、長髪である朱儁だからこそ使えた目潰しだ。この奇襲は効果観面、紀霊の指は空を切る。

紀霊「衛姉、何をするだあーっ!？」

朱儁「未熟者！勝てばいいんだ何を使おうがっ!！」



紀霊の抗議に反論しながら剣を振るう朱雋。髪の毛が目に入ったのか目は閉じたまま、なんとか防御で凌いでいる紀霊。そのまま何度か攻撃を防御していた紀霊だが不意に動きを見せる。

紀霊「北斗破流掌！」

視力が回復していないはずの紀霊がまさかの当身、予想していたなつた朱雋はそのまま壁に吹き飛ばされる。

哀れ壁、朱雋にぶつかってしまったためにもはや壁と言っているのか躊躇ってしまう程の壊れようである。だが、当の本人朱雋は

朱雋「いやー、まさか反撃されるとはね…お姉さんちょっとびっくりしたよ〜」

平然と立ち上がり埃を払っている。こいつの体は本当にどうなっているのだろうか？

紀霊「俺のほうじゃ驚きだったの…：そこまですて書簡通したいのかよ？」

両目を閉じてはいるが確実に朱雋の方向に構えながら答える紀霊。

朱雋「そりゃね、私の中に諦める（趣味限定）って言葉は無い。それに手合わせだからって気を抜きすぎた頭が悪い。」

紀霊「ふむ、勉強になりましたと。ああ、そうそう衛姉。さっき衛姉は「何を使おうと勝てばいい。」って言ったよね？」

朱雋「ああ、言ったぞ。なんだいい手でも思いついたのかあっ!？」

返答していた朱雋だが、言葉の途中で急に腹部を押さえながら苦しみ出す。

孔融「ちょ、え？病気！？誰か医者呼んで来い！良いか、姉は国の宝だ！一人でも失うことはご先祖様の名に賭けてこの孔文挙がゆるさねえ!!」

朱雋の苦しみ方を見て急病に陥つたのだと判断した孔融は大慌てで趙雲、樂就に支持を出し始めている。  
だが、

紀霊「とりあえず落ち着け馬鹿。」

孔融「まそつぷ!?!」

いつの間にか後ろに回りこんだ紀霊に背中を蹴られ地面とキス。よほど綺麗に地面とキスしたのか地面には孔融の顔が綺麗に跡になっている。

紀霊「ありや俺の秘孔で発動した効果だ。」

孔融「へ?じゃあ解除できるの?やれ!速くやれ!ハリー!ハリー!」

紀霊の言葉を受けて即座に立ち上がった孔融は紀霊の胸倉を掴んで揺する。

紀霊「わかってるってーの。衛姉、負けを認めてくれるなら打ち消すけど…どうする?」

紀霊は胸倉を掴まれたままの状態で地面に膝をつける朱雫へと顔を向けて負けを認めるかどうか聞いてみる。

朱雫「ううゝ…私の負けでいいから早くなんとかしてくれ願う」

体質なのかチートなのかは良くわからないが、秘孔の効果が半減する朱儁ですら相当に苦しんでいるところを見ると相当強力な秘孔を突かれたのだろう。朱儁の降参宣言に頷いた紀霊はそつと近寄って腹部に指を突き刺す。すると先ほどまで脂汗を流して苦悶の表情を浮かべていた朱儁の顔が穏やかになったと思っただけならそのまま紀霊の胸に倒れこむように意識を手放す。

紀霊「ふむ、衛姉にも効果ありか。ま、意識失っただけだから問題ないだろうし星、彩、すまないが衛姉を寝具に寝かせてきてくれ。」

紀霊の命令に星彩コンビは無言で頷くと朱儁を肩で担ぎ、屋敷の中に入ってしまった。その後姿を見ながら紀霊は

紀霊「……………衛姉に命の別状は無い。と言っても聞きそうに無いなお前は。」

と言いながら後ろを振り返る紀霊の前には

孔融「ああ…連チャンになって悪いが殴らせやがれ。ちよいとぶつつんきてるんだわ俺…」

両手に鉤爪の付いた手甲を装備して紀霊を睨む孔融が構える。

紀霊「：お前の腕で俺は倒せんがそれでもやるか？」

孔融「無論。」

孔融の目に迷いは無く、ただまっすぐに紀霊を睨みつける。  
最早戦いは避けられぬ。紀霊はそう感じたのだろう。左手に力を入れ直し三華尖を握りなおす。

紀霊「やれやれ…しょうがねえな。かかって来いや慎。」

三華尖を構える紀霊を確認した孔融は姿勢を低くして叫ぶ

孔融「孔文挙…参る！」

：頭と慎、今二人の戦いが幕を開ける。  
圧倒的な武力の前に孔融は紀霊に打ち勝つことは出来るのか。そして孔融は戦いの果てに何を見るのか。

さあ、次回も孔融の活躍に期待して次を楽しみに待つとしましょうか。



張遼「なあなあ頭、懸ばっかじゃなくウチのプロデュースもしてくれへん？」

友人の車の中で

柳「あ、音楽かけていい？」

友人「いいぜー。」

自分のプレイヤーを接続し、再生開始…

【ヤンデレの妹に死ぬほど愛されようが北斗する中野TRF修羅たち】

友人「…別のしる。」

柳「へーい。」

【ヤンデレの幼馴染みが相手でも自重しない中野TRF幼稚園北斗組】

友人「だから別の!!」

柳「我俣だな…癒されるのに(´・`・´・`・´)」

【ヤンデレの妹に死ぬほどウザいホームドラマ】

友人「なんでヤンデレと北斗しかかけねえんだよ!!」

柳「俺のプレイヤーは8割が北斗とヤンデレ及びアイマスで構成されているんだよ!」

その後、結局アイマス系の曲を流すことで落ち着きました。

~~~~そんな柳と友人の日常~~~~

投稿遅れました。しかも長いしネタ不足かもしれません…

張遼「なあなあ頭、懸ばつかじゃなくウチのプロデュースもしてくれへん？」

キレイ ヴァーサスウ コウユウ

【ザタイムオブレットビューションバトワンデッサイダステニー】

孔融「でええやあーッ！」

紀霊「捉えられまい…」

爪を振りかざし飛びかかってくる慎に対し俺は北斗無想流舞を使い後方へと後退。そのまま三華尖を繰り出して反撃を行う。

736

紀霊「喰らいやがれっ！」

ガギンツ！！

しかし俺の攻撃は、慎の手甲により防がれる。って防げるの！？

紀霊「はあ！？」

孔融「その程度か頭！…沈め！」

驚きを隠せずにいる俺に対し慎は俺の足元向けてスライディング。直ぐ様横に回避した俺だが、立ち上がった慎の攻撃を受けきれず頬に掠り傷を付けられる。

紀霊「ちいつ、ちつたあ文官らしくしろつての！」

反撃に三華尖を横薙ぎ、だが俺の攻撃は空を切り裂く音しか生み出さない。

孔融「そういうのを偏見って言うんだよ馬鹿！俺みたいに歌って戦える文官が居てもいいじゃねえか！」

紀霊「お前何時歌ったよ！？」

即座に無想流舞で慎の攻撃範囲外に後退、しかし慎は俺に左腕を振りかざしながら叫ぶ

孔融「多分明日辺り！ 伸びる孤手甲！！！」

そして俺の方に爪を振りかざしたかと思えば爪だけ飛んでって飛んできたよあの爪!?

紀霊「何か飛んできた!? 爪だけ飛ばすとかなんつー非常識な攻撃だよおい!」

奇想天外な慎の攻撃に俺は回避を忘れて三華尖で叩き落とす。しかしその判断は間違っていたようで

孔融「隙ありだあああつ!」

懐に入り込まれ慎の右爪から繰り出される連続突き。そこまで早い突きでは無いので落ち着いて交わしつつ三華尖を右手に持ち替えた俺は、突きを繰り出した慎の右腕に指を突き入れる。

紀霊「うらあつ!!!」

孔融「痛ってえ!あだだだだだだつ!?!」

痛みに攻撃を続けることができなくなったのだろう、慎は苦悶の表情を浮かべながら後ろに後退。そして俺を睨んでいるが状況を把握しようとしているのだろう。先ほどとは違い攻撃してこない。

孔融「…頭、お前俺の体に何をした？」

ふむ、流石に気付くか…

紀霊「いやなに簡単なことだ。お前の右腕は…お前が力を込めれば込めるほど激痛が走るようにした。これが俺の使う秘孔って奴だ。」

孔融「激痛が走るように…ってそんな事有り得ないだろ…」

そら普通はそつだ。それこそ幻術や仙術の類と思われてもしょうがないからな。だがよ

紀霊「おいおい、世の中有り得ないって事が有り得ないんだぜ？世界は広い。衛姉と弥依姉みたいに本当に人間か疑いたくなるような人も居るし星みみたいな変態も居る。なら俺みたいに相手の体に異常を起こす拳法使いがいてもおかしくはないだろ？ほれ、今解除してやっから手合わせは仕舞いにしようや。」

世の中、常識よりも非常識の方が多し。そもそも常識なんていう自分の括りで考える事自体間違っているかもしれないがそれでも自分の許容範囲を超えたら驚いてしまうのは人間ならしょうがないことだ。まあ、俺は衛姉や弥依姉と違って普通の人間。つーかもう少し常識と平穩をくれ！なんで非常識の塊に囲まれて生活してるんだよ俺…

孔融「畜生…負けだよ負け。あー衛さんの仇取れないまでも一撃当
てたかったな。」

両腕に装着した手甲を外し、左腕で頭を掻きながら愚痴る慎を横目
に右腕に突いた秘孔の効果を解除。
痛みを感じなくなったのか効果を確認するように腕を回す慎に口を
開く。

紀霊「俺に一撃当てたかったら衛姉に攻撃当てれるようになってか
らな。ま、それでもお前は強い方だよ。星には敵わんだろうが彩辺
りとはいい勝負しようだぜ？」

孔融「周りにいる人俺より強い人ばかりだから実感ねーよ。つかさ、
衛さんに突いた秘孔ってのはどんな効果だったんだ？」

そう言われ、先ほど運ばれていった衛姉を思い返す。今思えば割と
鬼畜な効果だったかもしれない…

紀霊「あれを突かれた人間は強烈な腹痛と便意に襲われる…これだ
け言えば解るだろ？」

強烈な腹痛と便意、体験したことはないが相当に嫌な組み合わせだ

と我ながら思う。慎も俺と同じ考えなのか苦虫を噛んだような表情で俺を見ている。

孔融「えげつねえ…流石は頭、汚い。鬼畜にも程があるだろ…」

紀霊「言うな、俺だって「御免遊ばせ！」…んだよ今度は？」

慎と話し込んでいた最中、俺の会話を中断させた声の主は…

孔融「あれ？姫さんじゃん。どうしんだろ、真昼間から將軍府何かに来てさ？もしかして…サボリ？」

金髪にくるくる縦巻きロールなチヨココロネ…じゃなかった。なんかやたらとロールの掛かった髪型でド派手な衣装。見るからに俺にとっては迷惑な客であろう袁家の姫君、【袁本初】。その彼女は何かは知らんが護衛であろう少女を二人引き連れながらずかずかと俺たちのいる方向へと歩いてくる。取り敢えず俺が言えることは

紀霊「取り敢えずお前と違って仕事はしていると思うぞ？」

主に護衛の二人が…とは言わないでおくがな。

袁紹「あら、孔融さん御機嫌よう。こんな所でお会いしますとは奇遇ですわね。」

孔融「よっ姫さん。なんか將軍府に用事け？」

軽く手を挙げる孔融、四世三公の名門袁家当主にすらこのノリ…流石は孔子の子孫ってとこなのだろうか？

袁紹「ええ。孔融さんは紀霊って名前の人、ご存知ありませんの？私、その人に用事があつてきたのですわ。」

どうやら彼女、俺に用があるらしく…俺？なんかしたっけ？

孔融「頭か、なら今日の前にいる何か変なの口にくわえている男が紀霊だが？」

慎は俺を指さし姫さんに俺を紹介…っていいのかわらんが取り敢えず挨拶しておこう。

紀霊「はじめまして、袁紹さん。俺が貴女の探している紀周英です。」

姫さんに一礼、挨拶は良好な人間関係を構築する上での基本。正に挨拶するたび、友達増えるね。ってのは間違いじゃないはずだ。

袁紹「そう、貴方が紀霊さんですの…この私を辱めた罪、その命で償っていただきますわよ！」

そう言いながら抜刀、俺に切りかかる……（・3・）アルエー

紀霊「っておiiiiiiiiiiii！なぜ俺を切ろうとする！？」

何が挨拶する旅友達増えるね！だ！！ 挨拶したら命減るところだっ
たぞこんちくしょー！！

ACの嘘つき！何が魔法の言葉だ！！

袁紹「なぜですって！折角私が直筆で書きました提案書をよりにもよって即日不許可で返されたのですよ！なんで私の高貴で天才的な提案が却下されなきゃならないんですの！？」

紀霊「へ？書簡？…あの書簡か！！」

そついやこの人洛陽守備軍の装備が金ぴかやらなんやら…

紀霊「っておい、そういやなんであんな訳の分からん書簡をウチ（将軍府）に出したんだよ！あんな親衛隊所属だから宮務府に提案書出せばいいだろうがっ！！！」

宮務府：主に帝の住む宮殿内での公務を行う役所で帝の身の回りの世話や報告、帝から出される命令の下達などが主な仕事。また、帝直属の部隊である親衛隊はこの府に所属しており命令系統が違う。親衛隊は主に帝の警護を任務としている。

袁紹「あちらの石頭達に私の妙策が理解できるわけないでしょう！私寛大ですから今からでも許可するなら許して差し上げますわよ？」

剣をしまう様子もなく不遜っつーか偉そうな顔をしながら俺に提案してくるお姫さん…護衛の二人は申し訳なさそういつの間にか戻ってきてた星と彩に挨拶してるしさ、俺も俺でつい構えたけど…お姫さんの腕で勝てる要素あんのか？

孔融「ちよーっと待った〜！！！」

紀霊「慎？」

袁紹「孔融さん？」

どうしようもなくなり始めていた俺と姫さんの間に割って入る慎、止めに入ってくれるなんて流石は孔子の子孫ってところか？

孔融「己の欲望を巡って剣を取る男女：喧嘩あ？死闘あ？手合わせえ？？ 大いに結構！少年少女よ闘えいっ！」

【チキチキ 手合わせ三本勝負！ グサリ、ブスリもあるよ！】

孔融「ルールは簡単、袁紹チームから三人と紀霊チームから三人出し合って手合わせさせる。んで姫さんが勝ったら頭が姫さんの書簡に許可印を押す。紀霊チームが勝ったら姫さんは書簡の件を諦める。」

袁紹「構いませんわ。ま、名家である袁家の当主である私たかが大將軍副官である紀霊さんに負ける要素などどこにもありませんもの。」

そう言いながら護衛の二人になにやら命令し始める姫さんを背に星と彩、そして慎が円陣を組んで何やら話している…なんで円陣なんよ？

趙雲「ほう、袁紹殿はあのように言っていますが…慎殿、別に全員

倒してしまっても構わんのであろう?。」

楽就「頭様を馬鹿にするって言うのなら負けるわけにはいけません
!。」

孔融「落ち着いてくれよ星さんに彩ちん、これは点取りだからさ
全員倒すつてのは無理だつて。まあ、先鋒は護衛のどっちかだし二
人に護衛は任せるわ。俺は大将として姫さんと闘うからさ。」

紀霊「…どうしてこうなつた?つーか慎、なんでお前が出る話にな
つてんだよ…。」

孔融「お前出たらそれこそ指先一つで終わるだろうが。姫さんの事
だからそんな負け方したら強引になかつたことにしそつだからな。
その点、俺だつたら姫さんに勝つてもそこまで文句言われない程度
の実力だしさ、何より暴れ足りない。」

おい、最後本音出てるぞ。そして星、お前の台詞からは何故か敗北
フラグの香りしかしないんだが…

紀霊「結局お前は闘いたいただけだろ…一つ言っておくが負けたら承
知しないからな。」

孔融「ま、星さんと彩ちゃん居るし大丈夫っしょ。姫さーん！そつちは順番決まったか？」

顔だけ姫さんの方向に向けた慎の言葉に「勿論ですわ！」と答える姫さん。…どう考えても主導権慎が握ってるな、面倒だし観戦してよ。

【第1試合 ブンシユウ ヴァーサスウ チョウウン】

趙雲「我こそは常山の子龍！いざ尋常に勝負！」

文醜「あたいは姫の部下、文醜！負けたら姫に何言われるかわからないから…勝たせてもらおうよ！」

大剣対槍か、普通なら攻撃の早い星が有利だがな…あちらさんの実力はまだ未知数だからなんとも言えんな…

タバコを吸いながら観戦している俺の目の前で文醜が大剣を振るい連続攻撃を繰り出し、対する星は飄々と回避しながらチマチマと槍で反撃。確実に相手へのダメージを蓄積させる。つーか闘い方ってその人の性格諸に出るんだな…

文醜「ちいつ、姫、無理ですよこんなの、避けられる度に揺れてる

「んですよ？なんの嫌味だーって感じですよってこれ」

そして大剣娘、お前は何を言っている。

袁紹「何言ってるんですの猪々子さんっ！いいですこと！絶対に勝ちなさい！勝たないと後で酷いですよっ！！」

更に姫さん、なんつー無茶振りをしているんだ…っってもアレの本人からしてみれば応援みたいなもんだらうな。

紀霊「どれ、俺も星の応援でもするかな。」

孔融「お、俺の時にどんな応援するか期待しておくぜ」

紀霊「お前の時は野次飛ばしてやるから安心しろ。さて、星っ！お前が勝てたなら…亀甲縛りの刑を執行してやるよ。」

孔融「…それ、応援なのか？」

若干引きつた笑みで俺に質問してきた慎に対し星を指さす。

趙雲「主に…縛られる！？ うおおおおおおおっ！！敵
将文醜！この勝負必ず勝たせてもらおう！絶対にだ！！」

紀霊「効果は抜群だったみたいだな。」

孔融「鼻血出しながら笑ってるんだけど…良いのか？」

楽就「まあ…星さんですから…」

絶叫するやいなや鼻血を出しつつつけたまま笑顔で槍を振り回して攻撃する星。いやー…俺が星と戦ってる最中に星があんなだったら逃げ出したいだろうな…

文醜「ひっ姫…！！ あたいもう無理っ無理ですって！怖すぎますよこんなの…！」

大剣娘：乙。なんとも可哀想な気がするがあんな奇天烈提案に許可なんぞしたくない。まあ、俺が押したところでおっちゃんが許可するとは思えんがおっちゃんの仕事増やすのはあまり気が進まないんでね。大人しく負けてくれる…と？

数分間攻撃を続けていた星と回避し続ける大剣娘、しかし星の動きが鈍っていくのに気がつく。

趙雲「むう……」

そして数分後…

文醜「もういい加減終わりにしたいよ斗詩くってあれ？」

趙雲「む、無念……」

不意に膝を地に付けて苦しそうな表情を浮かべる星…どうしたってんだ？

紀霊「つちい…勝負あり！大剣娘の勝利とする！…星っお前大丈夫か！？」

これ以上やらせるとマズイと判断した俺は試合の終了を宣言して身動きできない星を抱き上げると日の当たらない屋根のしたに座らせてやる。星が俺に抱きついたままだが今はそれどころじゃない。なんだ？熱中症かなんかか？

紀霊「星、お前体調悪いならやる前に言えっの馬鹿…無茶させてすまねえな。」

気だるそうではあるがなんとか受け答えできるのか俺の首に両手を回したままの状態で口を開く。

趙雲「主、申し訳ありませんぬ……」

紀霊「いい、無理に喋るな……ゆっくり寝て休め。」

趙雲「主に縛られると思うとつい血を流しすぎたようで貧血でござる……」

紀霊「よし、永遠に寝て休め。」

おデコにデコピンを軽く食らわせてそのまま放置、既に戦っている彩の応援をすべく元いた場所に座り込む。

孔融「あれ、星さん放っておいて良いの？」

紀霊「大丈夫だ、問題ない。それよりも彩の様子はどうか？」

大槌を振り回す苦勞してそうな女の子に頑張っつて剣で攻撃している

彩を見る。まあ、当たらなければどうということは無いつて感じか？

孔融「ま、武器の相性的には彩ちゃん有利かな。まだ実力的には彩ちゃんは不利だけど…彩ちゃんにも何か応援とかご褒美とか言っただけは勝つんでね？」

紀霊「俺の一言で勝てるほど戦いは甘くないだろ…まあ、ちょうど考えていたのがあるし応援してみるさ。」

そして頑張つて攻撃と回避を続ける彩に向かい口を開く。

紀霊「彩ー！勝つたら今度温泉連れて行ってやるぞー！」

楽就「温…泉…？ ……絶対！絶対に勝ちますっ！勝つまで続けますっ！！！」

今まで大槌を回避しては攻撃する。といった消極的な戦い方から一変、大槌娘に攻撃する暇を与えない勢いで戦いを進めていく彩。その勢いに押されたのか徐々に被弾して倒れ込む大槌娘。思ったんだが、姫さんの護衛二人組みはなんであんな重い武器しか使わないんだ？星や彩はどう見ても力つてーより速さや技巧だし…完璧に相性悪いだろうな…そして姫さんも…

チラリと慎を横目に見やると、なんとも活き活きした表情で爪を磨いて自分の出番を待っている…さて、初見の姫さんがどこまで戦えるか…

顔良「うう…姫…ご免なさい。私の負けです」

孔融「おっ!?!」

不意に上がる大槌娘の申し訳無さそうな敗北宣言に目を向ける…何時の間にやら倒れ込んで喉元に剣を突きつけられている大槌娘…実力的には彩より上だと思うが、ダイヤ通りにならないこともあるって事か…ま、これで残るは

袁紹「なーにやってますのまったく!こうなれば私自ら勝つしか…」

孔融「ヒヤッハー!! 俺の出番だあーっ!!」

慎と姫さん、この二人に任されたわけか…慎に任せていいものか迷うが、本人殺る気みたいだしなあ…それよりも

紀霊「彩、よく頑張ったな。」

勝利を収めた彩の頭を撫でて労う紀霊、撫でられた彩は顔を赤くしながら両手を胸の上で合わせている。多分尻尾があればちぎれそうなほどブンブン振っているに違いない。

楽就「あ、あの顕様っ！ご褒美の…／＼／＼」

彼女が聞いているのはもちろんご褒美の温泉、しかし…

紀霊「ああ、温泉な。今度皆で行こうや。」

紀霊のこの一言に楽就は固まってしまう。

楽就「え？あれ？二人だけじゃあ…」

本人からしてみれば二人だけで…と思っていたのだろう。しかし紀霊は皆と言った。

紀霊「二人…ああ、流石に星も連れていかないとな。ハブるのはあんま良くないし。ま、男は俺と彩だけになっちまうがそこは勘弁してくれ。」

楽就「そ、そうですか…（あれ？待って…顕様は男は僕と顕様だけ

…）」

今度は楽就に電流走る。固まったり電流走ったり何かと忙しい気がするがそこは気にしないであげるとしよう。

男は僕と顕様だけ 衛さんや星さんは女湯に投げ捨てるもの。 要するに男湯で顕様と二人つきり…

楽就「そんなことないですっ！すっごく嬉しいですよ顕様！！」

紀霊「へ？え？ああ、喜んでもらえるところからも助かるよ…てか、お前も鼻血出てんぞ。休んどけ。」

不意に明るい笑顔を見せたと思えば鼻血とドバドバ出して喜ぶ彩に若干引きつつ、星の隣で休むように指示。さて、慎は…

孔融「ふふふ…何回目か死ぬかな？」

袁紹「ちよっ、ちよっ」と孔融さんっ！貴方文官ですよね！？何故そんなに強いんですの！？」

爪を振るい、獲物を甚振る獰猛な獣のような慎の攻撃に辛うじて防

御や回避で対応している姫さん。つーか慎は明らかに甚振って楽しんでるよアレ…

孔融「文官だから弱いなんて誰が決めたー！俺だって兵4、5人位なら纏めて対処できる程度にゃ強いんだよー！衛さんや顕の強さが異常なんだー！」

紀霊「いや、衛姉はともかく俺は割と普通だと思っただが…」

孔融「うるせー！一人で賊1000人皆殺しに出来る奴が普通な訳あるかーっ！！」

いや、その程度だったら姉者や姉御も可能だし割と出来る奴多いぞ？それと最大で二万人二人を相手したこともあるんだが…言わないでおいたほうがいいな。

袁紹「ちよつと孔融さんっ！私を無視して話を進めないでくださりませす！？」

紀霊との会話に集中したためか袁紹が不意打ち気味に出した攻撃を防ぎきれず後退する孔融、口の中が切れたのか血の混じった唾を吐き捨てながら袁紹を睨む。

孔融「そうだった…姫さんと戦ってる最中だったもんな。姫さん、俺の一撃受けてみるやーっ！！伸びる孤手甲！」

紀霊と戦った際に出した爪を飛ばす攻撃を繰り返す孔融、だが、今日の袁紹は一味違う。どうして出来たのかわからないが咄嗟に袁家の宝刀で爪を防御。しかし…

孔融「掛かった！掴め孤手甲っ！！！」

孔融の声を合図に爪が稼働、そして防御していた剣を掴み袁紹から取り上げてしまう。

紀霊「いや、マジでどんなギミックだよその武器…！」

袁紹「わ、私の武器がっ！？」

もはや勝負はついた。しかし試合終了を宣言しようとした俺の声を遮る叫びが更に続く。

孔融「止めだ！貫け孤手甲！！！」

紀霊「ちょー！おまつー！！！」

残った爪を武器を失った袁紹に向かって射出する孔融。対する袁紹は

袁紹「いやあああああつ!!」

自身に迫り来る爪を前にし、回避することも出来ず目をつむり固まつて悲鳴を上げる。

大剣&大槌娘「姫ー!？」

ザシュツ!

ポタリ、ポタリと血が滴る音がする。

しかし袁紹に痛みはなく、恐る恐る目を開けてみると...

紀霊「……………もう良い、ここまでだ。」

袁紹を庇うように前に立ち、爪を右手で受け止めている紀霊の姿が

其処にはあつた。

その右手には爪が刺さり、赤く大粒の雫となって地面に落ちる血…

袁紹「…え？ 紀霊…さん？」

袁紹の声に反応したのか、顔だけ後ろに向けた紀霊は静かに口を開く。

紀霊「姫さん、怪我はないか？ 悪かったな止めるの遅くなって…」

袁紹「そ、そんなことより貴方怪我を…」

袁紹にそう言われ、自分の右手に突き刺さる爪を見る紀霊はそのまま爪を抜いて孔融に向かって投げ返す。

紀霊「この程度、数時間もすれば動くようになる。それより慎！手合わせは終了だ。」

頷く孔融は投げ返された爪の鎖を巻いて元の姿へと戻す。それを確認した紀霊は右手を見せないように隠しながら袁紹へと振り返ると頭に左手を置く。

紀霊「姫さん、すまないが貴女の負けだ。それと、今更になってしまったが俺が姫さんの提案書を不許可にした理由…聞いてくれるか？」

紀霊のこの言葉にただ頷く袁紹。頷いたのを確認した紀霊は更に言葉を重ねる。

紀霊「姫さんは元々高貴で美人さんだからさ、別に装備を黄金色に纏めたりなんかしなくても姫さんが率いているだけでその部隊は輝いて見えるんだ。だから不許可したって訳。」

袁紹「え…あの／＼／」

紀霊「つーわけで、姫さんも納得してくれると嬉しいんだがね…（頑張れ！頑張れ俺の口！こんなことで袁家に睨まれたら面倒なことしか起こらん！）」

追撃とばかりに頭を撫でながらなるべく優しい笑顔で袁紹を見つめる。

袁紹「へ…あうう…／＼／ あ、貴方様がそこまで仰るのですたら…／＼／ 私が何も言えるわけありません事／＼／／／／／」

紀霊「流石は袁家の御当主、聡明であられる。さて、立てますか？
（しゃーおらあああぁっ！！上手く言いくるめたGJ俺！）」

袁紹の頭に置いていた左手をそつと離し、そのまま差しのべる。袁紹はゆっくりとその手を取り立ち上がると紀霊に一礼し、

袁紹「…私、本日はこの辺で御暇させていただきますわ。きつ紀霊様、ご迷惑をおかけしました／＼」

それだけ喋ると護衛の二人の元へと歩いていくと何かを指示、支持を受けた大剣娘と大槌娘は俺らに一礼するとそのまま外へと向い歩いていった。

紀霊「やれやれ」、嵐のような人だったな。」

孔融「そういう割には嫌そうな顔してないよなお前。っとさっきはすまねえ、右手大丈夫か？」

去っていく三人組を見つめていた俺に、いつの間にか接近してきた慎が話しかけてくる。

紀霊「まあ、迷惑な事起こすってとこを除けば割と好きなタイプだな。右手は後で治療しておくから問題ない。」

正に愛すべき馬鹿ってやつなのかなんなのか？多分本人は割りと優秀なはずなんだが性格がそれを邪魔しているんだらうか？さて、それよりも…

紀霊「さて、俺は弥依姉にでも治療してもらったくからお前は壊れた壁完璧に直しておけよ？」

孔融「え！？俺だけでアレ直すの！？」

紀霊「元々衛姉との約束でお前が直すことになっていたのであるが、ま、頑張れよ」

それだけ言つと背中を向けて去っていく顕…畜生！衛さんのお願いじゃなかったら脱兎のごとく逃げ出しているのに…

孔融「くっそー！顕の阿保ー！シスコンー！爆死しろおおお！」

顕と共に治療を受けに行ったのか、星さんと彩ちゃんが居ない庭で俺は叫ぶ。

しかし虚しいかな、叫んだところで誰も来ず俺は一人壁の修理を始

めるのだった…

その後、治療を終えた紀霊が作ったオニギリを貰い、そのまま壁の修理を手伝ってくれた…このツンデレ糞野郎っ！！

紀霊「いいから手を動かせ馬鹿。」

【市街地】

袁紹「く」

人が行き交う中、三人は馬に乗り自分たちのいる宮務府を目指し進む。

顔良「ねえねえ、文ちゃん。私達負けたのに…麗羽様の機嫌良く良くないかなあ？」

負けたというのに鼻歌交じりに終始笑顔を見せる自分達の主君に若干恐怖を感じるのか、馬を寄せ合いながら袁紹に聞こえないように会話を繰り返す二人

文醜「斗詩もそう思うか？実はあたかも思ってたんだよ…姫、いいんですかあの提案？」

ここでその話ができる文醜、流石はというか空気読めと言えばいいのか…

袁紹「いきなりなんですの猪々子さん。あの提案でしたらもう気にしなくても良いんですのよ。それよりも…紀霊様の方が重要ですわ。」

顔良「紀霊様って…あの観戦していた人のことですよね？」

文醜「ああ、姫の事助けるとき凄かったよな…あの人の。あの距離からいきなり瞬間移動したんだもん。絶対強いよあの人の…」

袁紹「うふふ…紀霊様…／＼／」

紀霊の名前が出た途端、また思い出したのか二人を置いてどこか遠いお空に飛んでいってしまった袁紹。その顔は笑顔なのだが、傍から見たら怖くて近づきたくないといったところだろう。

事実護衛の二人すら若干距離を置きながら袁紹の後を追従している始末。尚、この光景は三人が宮務府に到着するまでの20分間ずっと続いたという…

【翌日・朝「何進の屋敷」】

紀霊「やれやれ、昨日は疲れたな…」

昨日のことを思い出しながら井戸から水を汲み、顔を洗う。

紀霊「今日くらいは静かに過ごして…彼女達の様子見なきゃな。つと手拭い…どこだ？」

目をつむったまま横にあるはずの手拭いを見つげるため手探ししている

??「はいどうぞお」

誰かはわからないが手拭いを手渡され、顔を拭く。視界がはっきりしたので礼を言おうと口を開いたら…

紀霊「お、これは失礼。ありがとうございます…す?」

??「いいえ〜どういたしましてよおん」

筋肉隆々で

ハゲなのに変なツインテールをしていて…

口紅がついている

妙にクネクネしているし、何故かメイド服を着ている

貂蝉「ああん、私の可愛いからってそんなに見つめちゃイヤン」

歩く精神的ブラクラ、貂蝉が立っていた…

張遼「なあなあ頭、懲ばっかじゃなくウチのプロデュースもしてくれへん？」

さあて、番外編も書くとしても、少しペースを上げねば…

この作品は半分は姉、残り半分は北斗とアイマス。そして作者のノリによって構成されています。

「ご意見」「感想お待ちしております。」

とある兵士の報告書（前書き）

久々の報告書シリーズを更新いたします。

さあ、次は番外編？本編？どっちだろ？

とある兵士の報告書

○年夏

我らがアイドル華雄ちゃんが西涼の董卓軍に仕官するとの噂が立つ。最初は根拠のない噂だと思っていたがどうも事実のようで守備隊の一部が自棄を起こしている模様。今後何かしらの問題が起きる可能性もありますので注意が必要と考えます。

↓隊長からの返答↓

（ ー、ー、ー ）フーン <良いんじゃないの？

↓兵士からの返答↓

貴方が自棄になってどうするんですか…

○年夏

華雄ちゃんと呂布ちゃんが隊本部を訪問。何かと思いつつも、守備隊総動員で太守様のお菓子とお茶を盗み出して二人に御もてなしを行う。

二人見たさに集まってくる馬鹿共を投石機で飛ばしつつ要件を聞いたところ、顔を赤くしながら紀霊君探すのを手伝って欲しいとのこ

と。

また 紀 靈 君 か ！ ！

と思いつつも長安守備隊全兵士の出撃準備が整ったことをここに報告します。

↓ 隊長からの返答 ↓

よし、見つけ次第捕縛及び投石器で打ち出すように。太守様と他の隊長達が準備でき次第俺たちも指揮を執るため出撃する。それまでに紀靈君を見つけておくように。

○ 年 秋

守備隊 2 万を総動員した紀靈君撲滅戦も失敗に終わり、拳句の果てに華雄ちゃんが西涼へと旅立ってしまった夏から暫く経過しましたが新たな問題が発生。

兵士達の間で華雄ちゃん派と呂布ちゃん派の対立が激しくなってきたようです。

事の発端は一部の華雄ちゃん派兵士が呂布ちゃん派へと鞍替えをした事に華雄ちゃん派の兵士達が私的制裁を行なったようです。

現段階では大きな事件等はまだ起きていませんが早めに対策を考えるべきと思います。

↓ 隊長からの返答 ↓

呂布ちゃんが可愛いのは認めるが華雄ちゃんから鞍替えする軟弱者がまだ居たとは…見つけ次第投石器を使い射出することを許可する。愛が足りんぞ！

く兵士からの返答く

隊長、お願いですから止めてください。

○年秋

とうとう華雄ちゃん派と呂布ちゃん派の兵士間で武力衝突が勃発。幸いなことに死者は出ていないものの、本来の任務に支障をきたします。早急に事態の収束が必要かと思えます。

く隊長からの返答く

そんなことより呂布ちゃん派の隊長達をギャフンと言わせる良い策は無いか？

く兵士からの返答く

ギャフンは死語です隊長…

○年冬

内乱一步手前まで発展した攻防戦ですが、見かねた紀霊君の武力介入により終息。

対立していた兵士達が紀霊君を見た途端、「よくよく考えたら華雄ちゃんも呂布ちゃんも独占している紀霊君が俺たちの真の敵じゃね？」と考えが一致したらしく団結して紀霊君に襲いかかる。だが、紀霊君は襲いかかる兵士一人一人丁寧に撃退。途中何人かは鞠のようにダムダムと弾んでいた光景を見ていたところ、長安市民には意外にも受けが良かったようで歓声を浴びていました…

〈隊長からの返答〉

信じられるか？ 紀霊君の攻撃ってリズム感抜群なんだぜ…
今後アレは二度と喰らいたくないの注意することにするよ。そういやアレ今後刑罰の一つとして正式に組み込もうって話が出ているんだが…

〈兵士からの返答〉

そう言えば隊長も弾んでいた一人でしたね、そもそも紀霊君の目の前で「華雄ちゃんは俺が愛でるっ！」なんて言うから逆鱗に触れるんですよまったく…

〈隊長からの返答〉

だって俺からしてみれば娘みたいなもんだもん！愛でて悪いか！？
むしろ悪いのは紀霊君だっ！！

↳ 紀霊からの返答

どうやら空高く弾みたいようので…

↳ 兵士からの追悼

隊長…骨は捨てておきますんでご安心ください。

× 年春

以前から議論されていた紀霊君による刑罰執行法「はすけ罵巢蹴」が長安御当地処刑法に正式追加されました。

この刑罰、本人が拒否するかと思っていたら意外とすんなり請け負ってくれた。なんでも呂布ちゃんの食費で割と苦勞しているらしい…

この話が広まって今後受刑者が増えないか心配だ…

↳ 隊長からの返答

よし、ちよつくら罪人捕まえてくる。処刑する人数が増えれば呂布ちゃんのお腹も膨れるはずだし皆も人を見たら取り敢えず捕まえて罪を吐かせるように。

く兵士からの返答く

もう貴方が受刑してください。

とある兵士の報告書（後書き）

報告書シリーズはネタ出しから投稿まで30分程度で済むというお手軽作品（マテ

）ご意見感想お待ちしております。

【番外編】司馬朗の人物資料集（前書き）

今回の番外編はキャラ設定（？）として作成したものです。
作者的にはちゃんとしたキャラ設定でも良かったのですが柳のノリ
でこうなりました。

尚、この作品は対象キャラの一日を紹介しております。

【番外編】司馬朗の人物資料集

僕の名は司馬朗、字を伯達。

今貴方が読んでいるこの書の作成者であり内容は僕が趣味で書いているある人物の一日です。

今はまだ趣味の範囲ではありますが、何れ後世に残る資料の末端に加わってくれば…と思いつつ書いておまして、よろしければ貴方もこの資料を読んで感想等を頂ければ幸いです。

では、今回の資料をどうぞ。

彼の名は孔融、字は文舉という。

齡は17、今は首都洛陽において文政府の役人として朝廷に仕える身。一応僕直属の部下といった形になる。

まだ世に出て数年だが、彼の名を洛陽、いや、この国において彼の名を知らない人の方が少ないだろう。

【孔子20世の孫】

そう、彼はかの有名な孔子の子孫である。本人は偉大な祖先の名前を出すことを余り良しとしないがそれでも彼には何時も祖先の影がつきまとう。

今日は、後方からひっそりとそんな彼の一日に迫っていきたいと思

う。

【朝・自宅】

彼の朝は意外と早い。寅の刻の中刻（朝五時頃）に一度起きたと思つたら卯の刻（朝六時頃）まで二度寝する。目をこすりながらも井戸に行き顔を洗っていると何を思いついたのか、近くにあった棒で地面に何かを書き始めた。

書き終えて満足がしたのかウンウンと頷いた彼が準備のため居なくなつた際に確認してみると

【姉×巨乳＝正義】

とやたら達筆に書かれていた。：僕にはさっぱりわからない。

その後出勤準備を整えると卯の刻中刻（朝七時頃）には文政府に向けて登庁。移動は馬を使い。途中朝市等で朝食であるう肉まんや小籠包、また茶菓子を購入。二、三度欠伸をしながらもそのまま文政府へ。

【午前・文政府】

辰の刻（八時頃）、登庁した彼は己の執務室である政令課へ。先に来ていた人達に挨拶を交わしながら本日の業務を確認。

恐らく午後は予定が入っているのだろう。業務時間（午前中）に終わらせる事の出来る量だったのか、ほっと安堵の表情を浮かべていた。…今度から仕事の量を増やしてやるのかな？

【巳の刻中刻（午前十一時頃）・文政府】

孔融「終わったー！！」

本日の担当業務が終了したのが余程嬉しいのか筆を握り締めたまま両手を上に伸ばして背筋を伸ばす。途中長官や將軍達とのお茶会や隠れて兵器開発の設計図を書いていたようですが…まあ、ちゃんと仕事もできていますし問題無しとしましょう。それよりも…

盧植（北中郎将）「お、慎坊。仕事お疲れさん！ほれ酢昆布やるから喰いな。」

北中郎将：簡単に言つと宮殿の守備隊指揮官の一人。將軍位とは別物だけど軍を率いる点は同じ。勿論エリートなので出世街道まっしぐら。

楊彪（現文政府長官、後に三公を歴任）「あら慎ちゃん、お仕事頑張ったね〜偉い偉い。」

三公：後漢における政治の三代最高位。「司徒（行政担当）」、「司空（軍事担当。別名「司馬」）」、「太尉（監察及び政策立案担当）」の総称。

孔融「じっちゃん、ありがとう。頭と一緒に喰わせてもらつよ。

長官、仕事終わったんで俺將軍府に行ってきます!」

盧植「なんだ、また紀靈って奴に稽古付けてもらうのか?ま、気合入れてやってこいや。」

楊彪「まあ、それは大変ね。慎ちゃん、包帯とかは用意しておくから夕方には帰って来なさいね?」

孔融「いや、今日こそはボロボロにされないよう闘うって、長官も俺子供じゃないんですから、ま、いつてきまーす。」

長官と盧植殿は孔融を完全に孫扱いしているんですが…しかしここで思案に耽る訳にもいかないので対象の調査を続行する。

【正午・將軍府】

孔融「頭ーっ、飯作ってくれー。」

紀靈「へいへい…」

対象は將軍府に来るなり恐らく同い年の少年に声をかける。

少年の名前は紀周英、1ヶ月前から將軍府で大將軍副官として勤務しており無位無官ながら『あの』右車騎將軍【朱儁】と左車騎將軍

【皇甫嵩】の二人を止めることのできる唯一の存在だと噂される。大將軍に左右車騎將軍が無茶苦茶な提案を出すからこそ彼には頑張って欲しいところだ。しかし今回は孔融の調査を優先、何れは彼も調査することしよう。

車騎將軍：反乱の征伐軍指揮を主な任務とする將軍位で大將軍、驃騎將軍に次ぐ將軍位。要するに無茶苦茶偉い。

紀靈殿の手料理を食した孔融は將軍府の庭へ、どうやら紀靈殿と武芸の稽古でも行うようだ。

孔融は最近武の鍛錬に熱心だとは聞いていたが…文官なのだから最低限の武は必要とはいえ何も武官に挑むことはないと思う。

ああ、勿論僕は文官一筋なので武は必要としません。自慢になってしまいますが司馬家は有能な文官を多く排出した名家と言われてまして武は余り得意ではないのですよ。まあ、例に漏れず妹や弟も文官として教育されてきましたし司馬家ではそれが当たり前なんですよ。

けど、弟の司馬進だけは舞や踊りに惚けていて文官としてある程度は良いんですがどうにもこうにも…
僕も父上も文官としての才能が余り感じられない弟には口煩く言っただつもりなんですがある日家を出ていつてしましまして、今はどこにいることやら…

つとついつい身内の恥を晒してしまったようですな失礼。いやはや、妹弟のことになるとついつい口が軽くなりまして…それでは対象の調査に戻るとしますか。

どうやら孔融は紀靈殿に技を教えてもらっているようです…【なんと

せんしゆりゆうげき】やら【なんとごとくとけん】という技を鍛錬している模様ですね。

まったく、武の鍛錬をする暇があるなら文を高めればいいのに…孔融にも困ったものですね。時代は武よりも文を必要としているんですと何度言ったら分かることやら…

その後数時間程紀霊殿との鍛錬は続きましたが僕は武に興味がないので割愛させていただきました。まあ、強いて言うならば最後に紀霊殿と手合わせした孔融が鞠みたいに弾んでいたってことでしょわか？

【未の刻中刻（十五時頃）・市場】

対象は鍛錬を終えた後、紀霊殿と共に市場のとある食堂へ。

そこで女の子三人組となにやら話し合いをしたあと人通りの多くなつた市場にて先ほどの美人三姉妹が舞や歌を披露。紀霊殿は三人の警護役なのか周囲を監視しつつならず者らしき男を発見したら背後に回って投げ捨て、また背後に回っては投げ捨てていた。ある意味彼の動きは美しいのだが、投げ捨てられたならず者の山を見ると朱儁將軍達を止められるという話にも納得がいく。

恐らく孔融も紀霊殿と同じく警護に回っているのだろうと探してみると

孔融「うおおおおおおおつ！ てんほーさーんつ！

！ エルツ、オウツ、ヴァイ、イイツー！ てんほーさーんつ

！ ほらお前らも気合入れて叫べ！…」

天和親衛隊と思われる人々「はい隊長!!」

孔融「馬鹿もんっ！返事の前と後ろにサーと付けんかっ!!」

親衛隊「サー・イエツ・サー!!」

孔融「ようし、ならば彼女の名を叫べ！俺たちの愛を見せつけて差し上げる!!」

…意外と早く見つかった。

舞や歌を披露する彼女達を眺める人だかりの最前列で2、30人の男達を従えて彼女達の応援をしている孔融、…君は一体何をしているんだ？

その後も延々と彼女達の応援をしていたのだが、ある程度片付けてきた紀霊殿に発見されると背後に回られて投げ捨てられた。その後壁に何度も叩きつけられていたのが衝撃的だったが孔融があんなに自分を出せるとは…舞や歌に関する評価を改めないといけないかもしれない。

【酉の刻（十八時頃）・市場のとある食堂（二階）】

舞台が終了し成功を収めた三人と紀霊殿に連れられて孔融は打ち上

げに参加。

最初こそほのぼのと今日の舞や踊り、それに紀霊殿の警護について反省点上がる中、皆に酒を配って回る孔融。

皆酒とは気がつかずに飲んでいたが徐々に酔いが回ったのだろう、目を覆いたくなるような惨劇が僕の目の前に広がっていった。

紀霊殿が必死に事態を収集しようとしていたが所詮は焼け石に水。年長者であろう女性に抱きしめられる孔融と二人の女の子に絡まれている紀霊殿に合掌しながら本日の調査を終了する。

【総評】

以上が孔文挙の一日です。

彼はまだ十七歳ということもあってまだまだこれからが楽しみな部下なだけに私としても調査しがいのある結果となりました。

彼は非常に天真爛漫で己の欲求に素直、しかしその性格が災いすることはなくむしろ好意を持つ人は多いですし、長官と盧植殿のようなご年配の方には孫のように可愛がられています。

そんな一緒にいる人を明るいきもちにしてくれるところが彼の一番の魅力かもしれません。

この資料を読んだあなたももし僕の資料に興味をもたれた方は是非とも私の執務室を訪ねてください。

粗茶と少しばかりの茶菓子、そして僕の調査資料をご用意してお待ちしておりますよ。

【番外編】司馬朗の人物資料集（後書き）

司馬郎 しはらう 字：伯達 はくたつ 真名：謎明 めいみょう

名家司馬家の長男。尚下に妹弟がおりそれぞれが優秀とされ人々は兄弟を【司馬八達】として称える。尚、司馬郎は弟の司馬進を身内の恥と言ってはいるが司馬家の基準がおかしいだけ。しかし兄や父から文官の才能無しとのレッテルを貼られたため周囲の人からも余りいい評価はない司馬進。それでも人々から八達の一人に数えられるのは名家への遠慮から。司馬郎：グレて良いぞ。

現在は文政府において孔融の上司として仕事を行う。正直エリートだから出世街道まっしぐらな人。尚、人を観察し資料に纏める（勿論無許可）といった趣味を持つ。今回柳により番外編の語り部として登場。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

【番外編】司馬朗の人物資料集？（前書き）

友人「暑い…柳…素麺作ってくれ」

柳「…昨日作ったから残ってない。」

友人「え…じゃあ冷麺作ってくれ。」

柳「…悪いが粉から作るやり方しか知らんぞ？」

友人「寧ろ粉から作れるお前が凄えよ…」

…そんな柳と友人の日常…

さて、今回は誰が調査の餌食になったのやら…

【番外編】司馬朗の人物資料集？

おや、ようこそ僕の執務室へ。

この前お読みいただいた資料に興味を持たれたようですね。さて、粗茶と少しばかりの茶菓子をご用意いたしましたのでゆっくり資料を読んでみてください。

今回の調査対象は將軍府所属の【大將軍副官】紀周英殿ですね。尚、彼は正式な官位を持ってはいません。

出身は荊州、年齢は一六歳。僕独自の情報網で彼の家族関係等色々調べたところ面白い事実が判明しました。

父親は元【羽林中郎將】紀迅殿と判明。紀迅殿は賊討伐戦に参加中負傷しその後官位を返上したと聞きますが…紀靈殿はそのことを知らされていないようですね。

また、十歳の時には父親の戦友である【元親衛隊武術師範】凱乾殿に弟子入りすべく単身長安へ。弟子入りの際に先に弟子入りしていたのが現在董卓軍を代表する猛将【牙門將軍】華雄殿であり彼女を姉弟子として慕う。

詳しいことは不明ですが、華雄將軍とは恋人同然の関係だという情報もあります…それなら紀靈殿は董卓軍に仕官しているでしょうから信憑性は薄いと思われる。尚、数年後には【西涼太守】董卓殿や長安太守殿と交友があった様子。この経歴を見れば彼が無位無官ながらも大將軍副官に抜擢されても納得がいきますね。

それでは彼の一日の流れを見ていきましょう。

【寅の刻中刻（午前四時）・何進大將軍邸】

彼の朝は異様に早く、屋敷の誰よりも早く起きる彼の一日は庭での鍛錬から始まる。

まず最初は彼が愛槍を振るうことから始まり次にどう聞いても「ナギツ」にしか聞こえない瞬間移動を繰り返す。ここでは通称「ナギツ」と呼ばせていただきましょう。

「ナギツ」を使いながらの攻撃をなんども繰り返した後、彼は中腰になり手のひらを前に見せるよう突き出した状態で親指を曲げて目を閉じる。不思議な格好ではあるが嫌な予感がした僕は即座に対象から距離を取る。

なんとか対象を視認できる距離は保っているものの、この距離では満足な調査は出来ない。近づきたいのだが、僕の推測ではあの構え中の紀霊殿は感覚が鋭利になっていると思われる。だとすれば迂闊に近づいても調査に支障をきたすので今は構えを解くまでは様子見に徹しよう。

【卯の刻中刻（午前六時頃）】

紀霊「さて、食事でもつくるか…ユクゾツ」

まさかあの構えを一時間も取り続けるとは…構えを解いた彼はそのまま台所へ瞬間移動。恐らく食事で作るのだろう。ふと思っただがあの姿勢を取り続けて彼は疲れないのだろうか？

疑問に思いつつも調査再開、手馴れた手つきで瞬間移動しながら料理する彼を見てみると何となくだが彼が今までどのような生活を送ってきたのか予想できる…苦勞しているんだろうな彼。

その後、可愛い女の子二人とオマケで大將軍と一緒に食事しながら談笑。盗聴の結果、可愛い女の子の片方は男の子で或ことが判明し僕は驚きましたよ本当…彼は生まれてくる性別を間違えたと言わざるおえないでしょうね。まあ、男の子だからこそ良いつて人もいるんでしょうし僕も同感です。

【辰の刻中刻・將軍府の紀靈専用執務室】

紀靈殿よりもあの子を調査したいのが本音だが、一度調査を始めたら終わるまで続けるのが僕の流儀。口惜しいが紀靈殿の調査を続行する。

対象は机の上に山積みとなっている書簡を眺めて溜息一つ、なにやら煙を立てる白い棒を口に加えながら書簡整理を行なっていく。しかしあの書簡の量、僕や孔融の一日に扱う書簡の量を遙かに超えているんだが…まあ、大將軍に来る提案書等は紀靈殿が一括管理しているとの話らしいし無理もないのかな。

次々と書簡を処理していく紀靈殿だが、黙々と処置し続けた甲斐あつてか残るは一つ。しかし、最後の書簡を読んだ際に彼の動きは止まり、頭を抱えて不許可の印を力強く押していた。

またもや朱儁將軍から無茶な提案書が来たのか？と思いつつも紀靈殿が退室した隙に確認したところ…

題名：奇異カラクリ製造所の設立

内容：情熱と熱意、更には自重しない精神と奇抜な発想を持った人間を集めた武器製造所を設立したい。

【ぼくのかんがえたさいきよーぶき】とかを募集して作ってみるのもいいかもしれない。

つーわけで頭、許可の方よろ。

差出人：孔文拳

：申し訳ない紀霊殿、あのお馬鹿さんには色々説教した上で暫く仕事の量増やしておくから少しは気を晴らしてください。

【正午・市場通りの食堂】

最初は將軍府で孔融を待っていた（処刑的な意味で）紀霊殿だが、何時まで立っても来なかったので市場通りの食堂へ。孔融の調査時にも会っていた三姉妹と共に食事。食後は食堂の庭を借りて歌や踊りの鍛錬をしていた。ふと長髪で細身の女の子の歌声に聞き入っている内に、幼い頃勉強が終わったさいに弟が歌や踊りを僕達兄弟の前で披露していた思い出が蘇る。…あの時は父も僕も下らないと決めつけて愚弟を叱ってはいたが…まさか昔を思い出すとは参ったなあ…愚弟は今どこで何をしているだろうか？妹も心配しているというの…

【申の刻中刻（午後五時頃）・市場通り】

三姉妹と別れた紀霊殿はそのままブラブラと市場通りを散歩。適当に店を見て歩いて回っている彼だが

紀霊「ん、姫さんか。仕事お疲れ様です。」

袁紹「あ、あら紀霊様。御機嫌よう。／＼／＼」

文醜「あ、瞬間移動の兄ちゃんじゃん。ちいっす。」

顔良「ぶ、文ちゃん、そんな挨拶紀霊さんに失礼だよ…：すいませ
ん紀霊さん。」

紀霊「いや、変に敬語使われても嫌だし構わないさ。寧ろ名門袁家
の人間にこんな口きいてる俺の方が問題だぜ？」

袁紹「そんな事仰らないで下さいまし。それに私のことは麗羽^{れいほ}とお
呼びくださいな／＼」

紀霊「…まさか姫さんから真名貰えるとはな、なら俺も頭って呼ん
でくれ。」

ふむ、袁紹殿とも知り合いとは紀霊君の交友範囲は一体どうなっ
てるんでしょうか？

それに、大將軍副官とはいえ無位無官の紀霊殿に様をつけるとは…
紀霊殿はそれほど信用されているのか尊敬されているのかそれとも、

彼女もやはり女だったと言うわけでしょうかね？いやはや、おもし
るそうもとい興味深い。これは是非とも調査が必要かもしれませ
ね。

その後袁紹殿から夕食の誘いを受けた紀霊殿だが、後日改めて。と
断りをいれる。残念そうな袁紹殿の顔はなかなか見れるものではな
いので紀霊殿には感謝せねばなるまい。

何進將軍の屋敷に帰った対象はそのまま食事作りを開始。なぜ女中
達に作らせないのであるのか？彼女達の仕事も手伝ったりしているみ
たいだし彼女達も彼女達で

女中（二十四歳 優しいお姉さん系）「紀霊君、この味噌汁は味
大丈夫かな？」

紀霊「ん、美味しいですね。良いお嫁さんになれると思いますよ？」

女中（二十四歳 優しいお姉さん系）「もっつ／＼／ お姉さんの
事からかったらダメでしょ／＼／ 責任とってもらっちゃうぞ？」

女中（二十一歳 クールなお姉さま系）「紀霊君、君に荷物運びを
手伝って欲しいんだが今は大丈夫か？」

紀霊「あー、荷物の置き場所さえ教えてもらえれば俺がやっておき
ますよ？そういう力仕事は俺に任せてくださいって。綺麗な手が荒

れちゃいますよ?」

女中(二十一歳 クールなお姉さま系)「む…/ / / 何時も何時もすまないな。」

紀霊殿も自ら進んでやるのは良いことだと思っ…けど女中達も何故遠慮しないんだろうか?

それと今回調査して思ったのだが、彼はどうも孔融とは違った意味で年上に好かれるのだろう。

何進大將軍は仕事のためか夕食は二人の部下といつの間にか混ぜてきた先程の女中の五人で食べていた。…女中と一緒に食べるというのはなかなか珍しいと思いつながら僕も台所より失敬した紀霊殿の料理を夕食として頂くことに…美味しいじゃないか。

その後は食後の片付けをして入浴となったが特に何もなし。あの子が入浴していたなら僕もやる気を出すが紀霊殿のみとなると需要は袁紹殿位ですので別の資料として保存しておきましょう。そのほうが高く売れ…失礼、口が滑りました。

まあ、その後対象は部屋に戻って寝るだけのはずだったんですが…

趙雲「主、夜の奉仕に参りました。」

紀霊「要らん、帰って寝ろ。」

趙雲「まあそう野暮を言わずに…据え膳食わねば男の恥と言つては
ないですか。」

紀霊「お前そういつことばっか言ってるどマジで嫁の貰い手無くな
んぞ…」

趙雲「何を言われますかな主。それがしの貰い手は既に決まってお
りますぞ?」

そう言つて寝具に座る紀霊殿の前に四つん這いになつた趙雲殿は更
に言葉を続ける。

趙雲「例え地の果てだろうと拙者は主に付いていくと言つたではな
いですか。拙者は全てを主に捧げております故。主、拙者を…んっ
／／／」

おお、なんか良くわからないけど紀霊殿が接吻を…これは退散した
ほうがいいかな?

紀霊「…後悔すんなよ?」

趙雲「自分で選んだ道故、後悔などありませぬ。」

ふむ、これ以上は流石に邪魔しちゃ悪いかな。残念ながら男女の営みを覗く趣味は有りませんし…今回の調査はここまでにしておきましよう。

【総評】

さて、最後は予想できない展開になってしまいました。が紀霊君の調査はこれで終了となります。

無位無官ながら大將軍を支える事務能力、そして朱儁將軍達を抑えられる程の武力。武人としての評価は勿論文官としてもある程度やっいていけるあの才能は十分すごいことだと思います。あの年で部下が二人居て、年上への気配りも出来る。更に家事まで出来るのは僕の家にも一人居て欲しい人材ですね。

彼はまだ十六歳という若さでした。かりしており孔融と同じく将来有望な人材であることは間違いありません。また、周囲の人間が派手であり目立つ方ではありませんしきつと自分が一番であるよりも二番手、三番手として動くタイプなのでしょう。

味方に居ると派手さは無いが抜群の安定感で支えてくれるのに加え、いざというとき心強い。逆に敵に回られたら厄介な障害になりうる性能を持つ。以上が紀霊君を観察した僕なりの評価となります。

この資料を読んだあなたももし僕の資料に興味をもたれた方は是非とも私の執務室を訪ねてください。

粗茶と少しばかりの茶菓子、そして僕の調査資料をご用意してお待

ちしておりますよ。

それではまた御会い出来るその日まで…

【番外編】司馬朗の人物資料集？（後書き）

暑い日が続きますね。皆さんお体壊さぬようにお気を付けください。

ご意見ご感想お待ちしております。

紀霊「なんで厄介事は頼まないでもやって来るのに平穩は来ないんだろっ…」

柳「あ〜づ〜い〜」

友人「言うな。余計に暑くなる…そんなに嫌だったらネカフェでも行けば良いんじゃない？」

柳「つつか何でお前は俺の部屋に居んの？」

友人「涼みに来た。(冷凍庫より勝手にアイスを取り出す。)」

柳「ジメジメ湿っぽい日に部屋に野郎二人とか…泣けるぜ。」

友人「お前一人だと執筆しつつニコニコ見ながらコンボ練習ししかないだろ…」

〈そんな柳と友人の日常〉

さて…あの人の登場です。

紀靈「なんで厄介事は頼まないでもやって来るのに平穩は来ないんだろっ…」

紀靈「…やれやれ…最後の最後まで姉者らしい…姉者っ！行ってらっしゃい！」

華雄「ああ！行ってきます！！」

あの言葉を交わした別れから二年間。愛する顕と別れ、住み慣れた長安から西涼に移った私は董卓様の下で騎都尉として働き始めた。

騎都尉：騎馬隊の指揮官。この作品では騎都尉が常時指揮できる兵力は千単位で將軍副官扱い。將軍は將軍位にもよりますが最低でも常時三千人を指揮します。

因みに張遼は既に將軍で華雄にとって直属上官になります。

799

勿論騎都尉程度で満足する私ではない。早く將軍に昇格して顕を迎えに行かねばと奮起。

弟愛ばわくを使い何とか半年で將軍に昇格出来たから顕を迎えに行こうとした矢先…西涼各地で漢に対する反乱が勃発。顕を迎えに行きたかったのに…

とはいえ董卓様を悲しませる輩は倒さねばなるまい。それも董卓様に反抗する気が無くなるほど徹底的にな…

けてして顕を迎えに行くの邪魔されて機嫌が悪い訳じゃ無いからな？

華雄「全軍突撃いいいいいい！私と頭の邪魔をした賊だ！容赦は要らんぞおっ！！」

兵士「しゃあおらあああああつ！！（畜生！俺達だつて邪魔してえよおおおっ！！）」

兵士「將軍！華雄將軍が配下を率いて敵陣に突撃を開始しましたっ！！！」

張遼「はあっ！？三千人で一万の敵に突撃とか何考えとんねんっ！？ああもつつしゃあない！ウチらも突撃や、慧を援護すんで！」

まあ、霞の援護もあり反乱軍は壊滅。色々文句は言われたもの…

華雄「長安よ！私は帰ってきたあああああつ！！！」

張遼「いきなり何絶叫しとんねんっ！」

パシーンッ！！

つい嬉しさがこみ上げて絶叫した私に霞がハリセンを振り下ろす。
うむ、痛くはないし顕に会えると思えばこの程度気にするまでもない！

華雄「しかしな霞、顕に会えるのだぞー！」

そう、私と霞は1ヶ月の長期休暇を許されて長安へとやって来た。
理由は勿論十六歳になった顕を董卓様に仕官させるためだ。

顕が仕官すれば騎都尉として私の副官…うむ！上司と部下って関係も悪くはないな！！

張遼「気持ちちは解らんでもないけどなあ…別に顕逃げる訳や有らんし、はしやぎすぎて疲れるのもアレやで？」

華雄「ふん、疲れたら顕に沢山甘えるし愛でれば癒されるし問題無い。」

それに顕に会うのは二年振りだからな、格好良く成長しているんだろうな…けど甘えてくれなくなったらお姉ちゃん複雑だぞ顕？

顕の奴私が出来たって解ったら飛びついてくるかな？ああもう想像したら顕に抱きつきたくなつたぞ顕！

兵士「あれ？華雄ちゃんじゃないか！久しぶりだね」

華雄「おおっ、守備隊の皆さんお久しぶりです！」

見回り中だったのだろう、声を掛けてきたのはお世話になった長安守備隊の人達。ああ、この人達も元気そう良かった…

隊長「華雄ちゃん…二年で將軍に昇格したんだって？おじさん嬉しいよ…」

兵士「あはは隊長ももう私達華雄ちゃんなんて言えませんか。これからは華雄將軍って言わなきゃいけないですよ」

華雄「いやいや、將軍なんて呼ばずに今まで通り呼んでください。その方が私は嬉しいです。」

その後も私の話を聞いてくる守備隊の皆さんに今までの事を話す私は聞きたかった事を彼らに話す。

華雄「そう言えば、頭はどうしてますか？」

しかし、頭の事を話した途端

兵士「あ、ああ〜紀霊君ね…」

隊長「罵素蹴コワイ罵素蹴…」

隊長に至っては不思議な言葉を呟くし…頭が何かやったんだろうな。

兵士「隊長は紀霊君にトラウマ差し込まれたからね…そんな事より
華雄ちゃん、落ち着いて聞いて欲しいんだ。紀霊君は…」

【凱乾邸】

凱乾「ふむ…のどかだな。お茶も旨いしやはり平和がいちば【壁】
どんがらがつしやあああああんっ!!！」

華雄「香様あああああああっ!!！」

凱乾「壁がああああっ!?!私の平和ーっ!?! って慧、何故ここに
?」

華雄「うっうっうっ　　×T? \ (^| ^) /」

凱乾「落ち着け。何を言っているのかさっぱり解らん。」

張遼「ちいーっす。香様元気しとったかいな？」

凱乾「お、霞。お前までどうした？つか慧はさっきから拳動不審なんだが何があつたんだ？」

凱乾が指指す先を見れば華雄が百面相を繰り広げて踊る姿。現代風に言うならばゲッダンにしか見えない踊りを踊る華雄に張遼は溜め息を吐きながら

張遼「なあ香様、頭が長安を出たってほんまかいな？」

華雄「うーっーっーううううっ!!」

【凱乾邸・居間】

凱乾「成る程、頭が長安を出て1ヶ月は過ぎたが慧達のところには行

つてないか、星も居るから迷うことは無いだろうが… 顕なら変な事に巻き込まれてそうだな。」

張遼「その趙雲って奴は顕の部下かい、仕官する前から部下持つとか流石つちゆうか無謀つちゆうか…」

取り敢えず積もる話もあるうと居間でお茶と茶菓子を囲む凱乾と張遼、肝心の華雄と言えは

華雄「うう… 今頃顕は迷子になって一人寂しく私の名前を呼んでいるかもしれない… 待ってるよ顕！ 今お姉ちゃんが助けに行くからな！」

呂布「恋も顕心配。… 顕の事恋が助けて一杯撫で撫でもらう。」

先程帰ってきた呂布と共に旅支度を始める有り様。そんな二人を見た張遼は溜め息混じりに口を開く。

張遼「二人共ちったあ落ち着かんかい。今さっき迷うことは無いって香様も言っとなやないか…」

凱乾「そうそう、顕が迷子なんかになる奴だと思っつか？」

凱乾の言葉に張遼はうんうんと頷き華雄と呂布は渋々ながらも納得するが、次に凱乾が投げかけた言葉により終息しかけた混乱が更なる混乱を呼び起こすことになる。

凱乾「まあ、あるとしたら…私達の知らないところで色々な女にちよっかいかけて宜しくやってるんじゃないの？例えば…」

【イメージ】

樂就（イメージです。）「顕様っ（抱きっ）」

紀霊「つと。なんだ彩、甘えん坊だな」（撫で撫で）「

樂就（あくまでイメージです。）「えへへっ／＼／＼今夜はもっとな…甘えちゃいますよ？／＼／＼」

紀霊「つたく、明日も寝不足かねこりゃ。」

そう言いながらも頬摺りしてくる女の子（？）をお姫様抱っこすると自身の部屋へと紀霊は姿を消した。

【現実】

華雄「頭うううううううっ!? そんなの嫌だぞ頭う…」

呂布「そんな奴…恋が殺す。」

張遼「ちよっ、落ち着かんかい!」

凱乾の話聞いた途端、泣いて落ち込む華雄とどす黒い闘気を発する呂布を何とか宥めようと必死になる張遼。そしてそれを見て笑う凱乾という何ともカオスな光景が広がっていた。

さて、その頃紀霊（主人公）は…

【洛陽・何進邸】

紀霊「んでだ、おっちゃん…あのナマモノは何さ?」

紀霊が指差す方向には

ナマモノ「〜」

ミニスカメイド服を着用した貂蟬：普通の状態でも気持ち悪いがミニスカメイドはその気持ち悪さをより一層際立てる調味料ならぬ劇薬である。

昨日までは居なかったナマモノがいきなり屋敷で働き始めた。その世界七不思議の原因を探るべく、紀霊は上司である何進に現在拷も…もとい質問をしていたのだ。

何進「ねえ、今拷問って言おうとしたよな！？俺久しぶりの登場なのに扱い酷くね！？」

紀霊「良いから早く説明してくれおっちゃん。早くしないと星一つ奪うよ？」

何進「しかも坊主怖いこと言ってるし！？だあ〜っわかったわかった、アイツはよ…」

紀霊「アイツは？」

紀霊にずいっと近づかれ若干顔が引きつる何進だが

何進「い、いや、昨日仕事帰りにたまたまみつけてな…行く宛も無
いって話だから屋敷に住まわせてやるうかと……………駄目？」

紀霊「……………ジョイヤーツ！」

掛け声と共に紀霊のボディブローが何進にヒット。何進はそのまま
壁に向かって吹き飛ばされて小さく唸る。ついでに言うなら彼の星
が一つ消えた。

紀霊「何捨て猫ついつい拾ってきたみたいな感じなんだよ！捨てて
こい！今すぐ元の場所に戻してきなさいっ！！」

何進「そっそんなっ…それじゃ貂蟬が可哀想じゃねえか！アイツは
良い奴なんだよ…頼む坊主。ここは見逃してくれよ」

拝み手で紀霊に頭を下げる何進。その姿は情けなく最早上司と部下
の関係はこの二人には無い。有るのはおかんと子供と言う奇妙な光
景であった。

だが、

紀霊「はあ、おっちゃんに其処までされたら文句言えんよ…よくよ
く考えたら何か問題起こすわけじゃ無いしな。」

何進「何進様倒されたら彼の徳かそれとも情けなさからか強く言えなくなる紀霊は少々承知するが」

何進「本当か坊主！いや〜アイツ割と可愛いだろ？」

紀霊「その質問には同意しかねるっ！！」

もう一度星を奪ってやるのか？と紀霊が構えを取った瞬間

孔融「お〜い頭〜」

紀霊「ちっ、何だよ朝っぱらから…愼ともう一人？」

その頃長安では…

華雄「頭〜っ…頭はお姉ちゃんより年下が良いのか？若い方が好きなのか！？わ、私だって胸の大きさなら恋とそこまで変わ…ら…ない…んだぞお…お姉ちゃんじゃ…駄目なのか…ぐすっ」

張遼「自分で言って自爆しとつたら世話無いつちゅーに…」

呂布「恋これ以上胸大きくならなくて良い…」 呂布はまだ原作の
姿形まで成長していません。

何故か紀霊の好きな胸の大きさは小さい。との結論に…恐らく彼女
達の中では年下〓胸が小さい。なのだろう。

張遼「いや…取り敢えずどうするん慧。顕居らんし西涼帰るか？」

華雄「何故霞は落ち着いて居られる!？」

最愛の弟が居ないという事実冷静さを失った華雄は親友であるは
ずの張遼を敵を見るかのごとく睨みつける。しかし張遼はどこ吹く
風とばかりに敵意を受け流し言葉を続ける。

張遼「安心しいや慧。顕はウチらを捨てるような詰まらん男じゃあ
らへんつて。」

紀霊に対する張遼の信頼。

張遼「それにウチとの約束破ったらどうなるか顕が一番よー知ってるさかい…顕は必ずウチらの前に現れる。ま、女の勘って奴やな。なんやねん、慧に恋も顕が今少しの間居ないくらいでそんなウジウジしよって…顕の正妻って言うんなら自分の夫位信用してやらんかい！恋も顕の妹なんやろ？なんや？自分の兄貴が信用できへんのか？」

張遼の言葉に無言だが力強く首を横に振る恋。そして華雄は…

華雄「……………すまん霞。私としたことが冷静さを無くしたようだ…。」

張遼の言葉が聞いたのか素直に頭を下げる華雄とそれを見た呂布も頭を下げる。そんな三人を凱乾は微笑みながら

凱乾「ま、私も霞に同感だ。今は自分の職務をきちんとこなすんだ慧。待ってればあの馬鹿は必ずやってくるさ。」

凱乾の言葉に三人は頷き、先程までの動揺が嘘のように皆笑いあう。そしてひとしきり笑った後に口を開くのは華雄だ。

華雄「ふふっ、なら今回は一週間程長安でゆっくり過ごそう。顕に会えない間は顕の布団や服で我慢するでしょう。」

呂布「駄目…頭の布団も服も全部恋の。」

凱乾「あゝ…そついや頭の部屋つて今恋が使つてるんだつたな。」

華雄「なつ！？ズルいぞ恋！！頼むつ、一週間いや三日だけで良いから頭の布団使わせてくれえつ！！それと服を何着か譲ってくれつ！！頼むつ！！」

紀霊のためとはいえ躊躇なく妹弟子に頭を下げる華雄…今の華雄を配下の兵士が見たら卒倒するであろう。

張遼「なゝにしとんねん。まったく…恋ー、ウチにも頭の服一着分けてえな！」

華雄に呆れながらもちゃつかり自分の分まで催促している張遼。

そんな三人のやり取りを見てニヤニヤと笑う凱乾。

しかし呂布が放った言葉に

呂布「……………恋も西涼に連れていってくれたら服は譲ってあげる。」

三人「え？」

三人は驚愕の声を上げる事しか出来なかった。

【洛陽・何進邸】

その男は丸眼鏡を掛けた細身の長身で知的な雰囲気醸し出していた。表情は穏やかで常時緩やかな笑みを浮かべている。

司馬朗「初めまして紀靈殿。僕の名前は司馬伯達、孔融の上司をやっている者です。」

紀靈「初めまして、紀周英です。…それで、司馬八達の長兄が俺に何の御用で？」

司馬朗「そんなに身構えないで下さい。実は君にしか出来ない依頼が有るんですよ。」

いきなり訪ねて来て【初めまして】と挨拶した相手に君にしか出来ない依頼…か。この人は俺を知っているだろうよ…じゃなきゃ初対

面の相手に依頼なんぞ出来ねえ。司馬朗…敵意は無いみたいだが用心しておくべきだな…

紀霊「依頼…ですか？」

司馬朗「そう、君には…」

その男の願いとは

司馬朗「洛陽のどこかに居る僕の弟を探して欲しい。」

次回に続く。

紀霊「なんで厄介事は頼まないでもやって来るのに平穩は来ないんだろう…」

今日も仕事〜

明日も仕事〜

日曜に月曜も〜仕事だけ〜

泣かない…俺は泣かない…

御意見御感想お待ちしております。

紀霊「兄より優れた妹なぞ…いや、俺9…1付けられて殆ど詰んでるんだけど…」

友人「柳ー」

柳「ん？どうした？」

友人「ハンバーグ作ってくれ。ほれ材料。」

(友人)つ【焼肉用お肉のパック(鶏)】

柳「せめて豚肉か牛肉持って来い…あと作り方はノリだぞ？」

友人「お前もせめて料理本見るよ…」

柳「なんとなく作るから後は超常現象的な何かに期待しよう。」

友人「いや、料理しろよ。」

くそんな作者と友人の日常く

物凄い…難産です。

紀霊「兄より優れた妹なぞ…いや、俺9…1付けられて殆ど詰んでるんだけど…」
物心付いた時から歌や踊りが好きだった。

兄弟も姉妹も多く、皆で勉強をし終わった後にはよく歌ったり踊ったりしたっけ…

けど、

父「そんな下らぬものにのめり込む暇が有るなら勉強に励め馬鹿者」

兄「社：我が家にはそんなものより勉強が大事なのは解るだろ？そんなんだから周りに落ちこぼれなんて言われるんですよ？」

そんな俺をばつさりと切り捨てる父や兄。そんな二人を真似してか、それとも俺を落ちこぼれと判断したのだろうか…他の兄弟からも見下される日々は直ぐに始まった。

けど、あの人とその幼なじみだけは違った…

姉「大丈夫だよ〜ちゃん！や〜ちゃんの歌や踊りは勉強なんかよりも凄いものだよ。お姉ちゃんが保証する！」

幼なじみ「神様は同じ才能を与えない。社君には社君の才能があるんだよ？だから君は自分の道を歩いていけば良い。枢くるろも私も物言わぬ書簡より君の歌や踊りが大好きだ。」

兄弟の中でも一番優秀と言われている姉、そして才女と周りからは評価される姉の幼なじみ。

彼女達二人だけは俺を庇い、他の兄弟と違って馬鹿にするわけでも無く歌や踊りを認めてくれた。

俺を認めてくれる二人は尊敬出来る。けど幾ら勉強を頑張っても幾ら歌や踊りを披露しても…何時まで経っても【司馬八達の落ちこぼれ】と呼ばれ続け、逆に姉は【司馬家八達の中でも一番優秀】と評価されるように…

それでも俺を庇う姉の存在は有り難かった。

けど…姉の才能に嫉妬する自分が居て

それが苦しくて…苦しくて

ああ、

こんなにも苦しいのなら…

こんなにも悲しいのなら…

姉など、

姉など要らぬ…

そんな考えが浮かんだ日、俺は家を出て見知らぬ土地に居た…ああ、空腹で倒れ込んだところをお師さんに助けられたんだっけ？そして今は…

?? 「社兄やじょう！社兄やじょうつてば！！」

体を大きく揺すられる感じに段々と意識がはつきりしていき…

?? 「ん…真？ つてことは夢か…」

真「大丈夫？また魔されたり泣いたりしてたけど…」

目を開けば心配そうな表情で俺を覗き込むしょうね…おほん、少女

は俺と共に旅をする相方でもあり俺がプロデュースするアイドルの
卵。

??「大丈夫だ心配すんな。」

そして我が師でもあるお師さんの一人娘で…

??「つーか真、お前また俺の布団入って寝てたろ…」

真「…ナンノコトカナ？」

世話の焼ける妹分だ。

あくまでやっていないと惚ける真、目が泳いでんぞ？

呆れつつも真の額にデコピンを一撃入れる。ペシッっという快音を響かせる俺の指と額を抑えて震える真。しまったな…寝起きだから力加減間違えたか？

真「社兄の馬鹿ああっ！僕みたいなか弱い女の子に手上げるなんて最低だよっ！」

??「お前がか弱い？寝言は寝て言え、お前南斗鳳凰拳伝承者の娘

だろうが…」

真「父さんが伝承者だからって僕が強いわけじゃないよ！そもそも鳳凰拳の伝承者候補は社兄でしょ？」

襲ってきた賊の正中線に4連突きの手入れる奴がか弱いなんて言わせねえぞ… っても真自信は強さは雑魚程度なら倒せるレベルだし、俺を基準にしたらか弱い方なんだよな…

??「あゝ悪かった悪かった… ほれ、デコ見せてみ？」

これ以上言い返しても口喧嘩は収まらねえからな、さっさと飯食って活動したいし大人しくさせとくか…

真「へっ？えっ？」

真の額に優しく手を置いて… ゆっくりと撫でていく。

ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ
ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ

これぞ南斗鳳凰拳奥義【凸撫十字拳】、鉄すら切り刻む南斗鳳凰拳

の手刀を使い対象の額を十字に撫でて精神を落ち着かせる…この奥義を受けたものは…

真（猫口）「えへへへへ／＼／」

このように猫のような口になって心が落ち着く。とはいえ真以外にすることがないから他の人間がどんな反応をするか見当もつかん。つとそろそろいいか…

???「つたく、とろけてる場合か…ほら、今日も活動開始すんぞ。活動開始中はちゃんとプロデューサーって呼ぶように！」

真「へへ／＼／」

???「……………南斗鳳凰拳奥義」

真「はっ!? わわっ、わかりました！ わかりましたからっプロデューサー！ だからその指を向けなくてくださいっ！」

社友者P「…まあいい。行くぞ真！」

真「はいっ！ 今日もガンガンいっちゃいますよ」

さあ、【数え役満したあず】を越えて…トップアイドルに向かつて制圧全身あるのみだ！

~~~~~ジョインジョインジョインキレイ【社友社を探せ！】~~~~~

【將軍府・庭】

紀霊「弟さんを探せ？」

確か慎の上司で司馬朗とかいったよなこの人？初対面の人間に会ったことも無い人を探せとか…何考えてるんだ？

司馬朗「ええ、名前は司馬進。司馬八達の六人目にして唯一の弟ですが、お恥ずかしいことながら落ちこぼれの愚弟でして…」

司馬朗は本当に残念そうな表情で語ったのちにため息を吐く。対する紀霊はタバコを加えたまま司馬朗をじっと見つめて口を開く。

紀霊「…落ちこぼれねえ？」

司馬朗「はい、司馬家は数多くの文官を排出した所謂名家です。しかし、弟だけは歌や踊りに興じて学問を疎かにしておりました。弟には僕も父も口酸っぱく学問をするよう注意したのですが、耐え切れなかったのか六年前、12の時に家を出て行方知れずだったんですよ。御陰で弟を溺愛していた妹の司馬懿は引きこもって病氣と偽り仕官しませんし、けどつい先日、弟らしき人物を見かけたのですよ。その時は残念ながら「グダグダした前置きはいいからアンタの弟さん見つけて俺にどうしろと?」……」

放っておいたら延々と話続けると感じた紀霊は司馬朗の説明に割って入る。自分の上司に親友がそんな態度をとって驚くのは勿論：

孔融「ちよつ… 顕、流石に失礼だと思っぞ?」

孔融その人である。そして何時ものごとく空気と化した何進は何も言わず事態をじっと見届けているのみだ。

司馬朗「構いませんよ文學。僕も要点を簡潔に言うことは大切だと思いますし… 申し訳ありません紀靈殿。僕の悪い癖でして兄弟の話になるとついつい口数が増えてしまっんですよ。さて、本題を言いますと… 弟を見つけて河代の実家に帰るよう伝えていたきたいのですよ。しかし伝えても拒否するでしょうから方法は問いませんで生きた状態で連れて行っていただきたいのです。」

紀霊の態度をものともせず、改めて以来の内容を明かす司馬朗、その表情は淡々としておりどこか事務的な部分が目に見える。

紀霊「要するに、縛り上げて実家まで送り届けろってか…ずいぶんと弟思いなお兄さんだこと。」

司馬朗「ははは、これは手厳しいですね。紀霊殿に依頼するのは筋違いになりますがその分報酬は弾ませていただきます。」

そう言つて司馬朗は懐から大人の拳位に大きい布袋を取り出して紀霊に見せるよう揺らす。恐らく中に入っているのは報酬であろう金品、それも一年は遊んで暮らせるであろう額なのを何進は直ぐに理解した。

恐らくは本来の報酬に加え河代と洛陽間の旅費。そして…

何進「（口止め料…か。）」

司馬家の問題を他人に任せることとそれを口外しないようにと…自分から話しておいて都合のいいことかもしれないが司馬朗にとっては自分ではなく紀霊の方が適任と判断したのだらう。だが、

何進「（けど、坊主だもんな）そんなもん通じるならとつくのとう

に衛や弥依の色仕掛けに陥落するだろうし…）」

何進は何となく紀霊が報酬を受け取らない気がしてならなかった。  
そして案の定

紀霊「その報酬は要らん。」

司馬朗「いらない。ですか？」

紀霊は大金の入った報酬には目もくれず司馬朗の目の前に移動。そして

紀霊「その代わりにあなたに頼みたいことがある。」

司馬朗「頼みたいことですか。僕に出来る範囲でよろしければ…可能な限り善処します。」

司馬朗の言葉を聞いた紀霊は一度タバコの煙を吐き出すと、司馬朗に向かい口を開いた。

紀霊「いやなに、簡単なことだ。一発蹴らせる。」

司馬朗「え？」

司馬朗は予想しない答えに何が起きたかわからない。だが、紀霊は司馬朗の答えを聞く前に右足を曲げて司馬朗の腹部めがけて横蹴りを繰り出す。

紀霊「馬鹿者おっ！！」

元々文官である司馬朗は回避することもできずに5m程吹き飛ばされる。立ち上がらずに苦悶の表情を浮かべて紀霊を睨む。

孔融「ちょ！頭何やってんの！何やってんの！？」

何進「おいおい坊主、そこらへんで納とけつての……」

孔融は司馬朗の元へ駆け寄り肩を貸しながら紀霊に叫び、何進は紀霊の肩に手を置きながら宥める。やはりこうなったかと内心思いながらも何進はこれ以上紀霊が暴れないように注意しつつも司馬朗を見やると司馬朗は孔融の肩を借りながらなんとか立ち上がるが一体何がいけなかったのか理解できないよう。困惑の表情がありありと見える。

紀霊「司馬朗：あんだ長兄だろ？」

未だに拳を強く握り司馬郎を睨みつけながらも紀霊は静かに喋り出す。質問を投げつけられた司馬朗が無言で頷くのを見ると紀霊は更に喋り出した。

紀霊「兄ならば、弟妹を守るものだろうが：学問が出来ないから司馬家の恥さらし？落ちこぼれ？ふっざけんな！！12歳で家出するなんざそこまで追い詰める手前と手前の糞親父の方がよっぽど恥晒しだつての。兄なら下を守りやがれ！例え親を敵にまわそうが兄弟を守れなくて何が兄だ！兄弟で弟妹を守るのは兄と姉しかいねえ。たとえ弟妹の方が優れていようと兄つてのは兄貴らしくねえといけねえんだよ…なあ、司馬朗。あんたは弟を導こうとしたことは認める。だが誤った導き方をしたのは結果が物語っているだろうが…」

紀霊の言葉に無言を貫いていた司馬朗だが、俯きながら小さな声でつぶやく。

司馬朗「……………紀霊殿の言つとおりかもしれませんがね。けど、もう遅いんですよ。」

恐らく司馬朗自体心の何処かで罪悪感と言うものを感じていたのかもしれない。本当に恥さらしだと思っていれば依頼などせず放置するか、若しくは依頼内容が【洛陽から追い出せ】になっていたかも

しれないのだ。本来長男はその家を継ぐものとして家を守る責任がある。司馬進に名家という重圧があったようにもしかしたら司馬朗にも長男としての重圧があったのかもしれない。本人の才能に関係なく強制される文官としての才、名家故に集まる周囲の目、そして当然のように求められる結果。

もし、司馬朗達に名家という縛りが無かったら…このような結果にはならなかったのかもしれない…

紀霊「おい、後悔すんのはまだだぜ？」

司馬朗「何を…」

紀霊「後悔つてのはな、死ぬ直前にするもんだ。それまでは必死に足掻いて足掻いて最期に後悔無く死ぬるようにするもんじゃねえかな？報酬はたしかに頂いた。弟さんは司馬朗殿の元に連れてきてから河代に送り届けるからよ、弟さんが目の前に居たとき…どうするかは司馬朗殿次第だ。」

そう言うと紀霊は市場に向けて歩きだし、【ナギッ】という音だけを残して姿を消した。

孔融「あいつ、【ナギッ】で移動しやがった…便利すぎるだろあの技…って先輩、大丈夫すか？」

司馬朗「ええ、大丈夫ですよ文挙。大分手加減してくれたようですし余り痛みはありません。」

そういつて腹部を摩って見せる司馬朗に安堵の表情を浮かべる孔融、そして二人を見守っていた何進が二人に向かって口を開いた。

何進「まあ、司馬朗殿も慎坊もあいつのこと許してやってくれや。坊主自身兄でもあるし兄弟とかは大切な存在だって考えてるみたいだしな…」

孔融「あー、なんか妹とか居たら溺愛してそう…」

司馬朗「面倒見が良いのは知っていましたが…今回は怒りに触れた僕が悪いんですよ。紀靈殿を恨む気はないのでご安心ください。それよりも文挙、紀靈殿に伝言をお願いします。」

【市場通り・洛陽一番前】

紀靈「ユクゾツつと着いたか…」



さて、司馬進殿を探すにあたって重大なことに気がついた。

紀霊「情報収集せねば…」

それはね

紀霊「地和さん達にも色々聞きたいが…名前しかわからんもんな、  
どんだけ詰んでるんだよこの依頼…」

名前と年齢しか情報がない。っていう事実さ。

紀霊「兄より優れた妹なぞ…いや、俺9…1付けられて殆ど詰んでるんだけど…  
うゝむ、柳の作品らしさが出てないような…

【柳の作品らしさの定義】

- ・姉
- ・北斗ネタ
- ・メタ発言
- ・名状しがたい何か

ご意見ご感想お待ちしております。

続々・紅白姉弟の普通(?) (な乱世) 前書き

不意に考えついたのでこちらを投稿。

…なんかこれ別物として連載したほうが良いような気がしてきた…

w

続々・紅白姉弟の普通(?)な乱世

桃香姉が姉貴を訪ねて来たのがつい先日、なんでも義姉妹の関羽殿に張飛ちゃんを引き連れて乱世を救う力を手に入れる為らしいが、桃香姉って割と間の抜けているところ有るからなあ、取り敢えず関羽さんが苦労する姿しか浮かばないぜ…

まあ、姉貴も頼ってきた親友を無碍にするような小さい人間じゃないし三人を快く迎え入れた。俺としても一時的にはいえ優秀な人材が居てくれるのは有り難いし賑やかなのは良いことだ。

そしてまた姉貴達との普通な1日が幕を開ける…

【紅蓮の部屋・朝】

音を立てぬよう静かに扉を開けて忍び足で中に入る。

劉備「紅蓮君朝だよ、お姉ちゃんが添い寝しにきたよ、」 (小声)

紅蓮君に聞こえないほど小さい声で呟いた私は標的…じゃなかった、寝具に眠る人を確認。

んっふふっ紅蓮君ったら鍵も掛けずに不用心なんだからっもし変質者が入ってきたら大変なのに…

これはお姉ちゃんとしてしっかりお説教しなきゃいけないよね！さあ〜紅蓮君、寝具の中でしっぽりねっとりお説教だよ〜

布団に手を掛けて一気に引き剥がす。

劉備「紅蓮君っ、先ずはおはようのちゅっが挨拶の基本だ…よ？」

公孫越「むにゃ…」

公孫讚「すうすう…」

白蓮ちゃん！？あれ？昨日白蓮ちゃんの部屋で私と一緒にお酒飲んで酔いつぶれて寝ちゃってたよね…？

なんで紅蓮君の真横で抱きついて寝てるの？あ、取り敢えず私も反対側占領して抱き付いてっ…あううっ／＼／

やっぱり紅蓮君の抱き心地は最高だよ。暫く会ってなかったけど格好良くて可愛くて私好みの男の子に育ってるなんて…やっぱり紅蓮君はお姉ちゃん思いの良い子だなあ。

おはようのちゅっは出来なかったけど…今日は添い寝だけで我慢しよ〜

【紅蓮の執務室】

関羽「おはよう御座います紅蓮ど…また桃香様と白蓮殿ですか？」

今日も紅蓮殿の政務を手伝いに来た私だが、部屋に入ったら紅蓮殿がぐったりしながら政務を行っていた…理由は判る。

公孫越「愛紗さん…おはよう御座います。予想通りつーか予想以上つーか…起きたら姉貴と桃香姉が両脇で寝てた。多分まだ寝てると思う。」

関羽「桃香様…あれほど言ったのに…。申し訳ない紅蓮殿。」

幾ら幼なじみの紅蓮殿だからといって遠慮するように私が進言しても桃香様はどこ吹く風、ほぼ毎日のように何かしらのちよっかいを紅蓮殿に加えていた。

以前は紅蓮殿が入浴中に乱入したり、白蓮殿と馬で巡察している紅蓮殿の後ろに乗ったり…夜中に紅蓮殿の添い寝を巡って白蓮殿と紅蓮殿の部屋で言い争ってみたりと正直紅蓮殿の邪魔をしているようにしか私には見えなかった。

そのたびに紅蓮殿は二人の仲を取り持ったり残った仕事を朝までに

片付けたりしているから私が朝手伝いに来ると疲れ果てて居るなんてよくある光景だ…

公孫越「いや構いませんよ愛紗さん。桃香姉は俺を労ろうとやってくれてるだろうし…嬉しくはあれど蔑ろになんてしないって。」

それでも桃香様の行動になんの嫌悪感も抱かない紅蓮殿…本当に良くてきた御仁だ。

紅蓮殿を見ていた私は無意識のうちに右手を紅蓮殿の頭に置いて…

なでなでなでなでなでなでなで…

公孫越「…あの〜、愛紗さん？」

関羽「……………はっ！？もももも申し訳ない紅蓮殿！赤連殿を見ていたらつい…／／／」

私としたことが、なんたる事だ…紅蓮殿の疲れた表情を見ていたら手が勝手に動くとは…

関羽「いやあの…紅蓮殿の疲れが少しでも取れれば良いかと思って

… 赤連殿に迷惑を掛けてしまったようで申し訳ない！」

ええい、私は赤連殿の手伝いに来たのに逆に迷惑を掛けてしまうとは… 不覚！これでは桃香様と同じではないか！？

公孫越「… もう一度お願いしても良いですか？」

関羽「へ？」

赤連殿の口から出た言葉に呆気に取られる私は硬直したまま聞き返してしまふ。今赤連殿はなんと言った？もう一度？

公孫越「関羽殿の手、優しくてなんか安心するっていうか… 疲れが取れるっていうか… 姉貴達に撫でられたときと同じで暖かいんですよ。愛紗さんが良ければもう一度お願いしても… 良いですかね？」

関羽「わ… 私としては赤連殿の疲れが取れるんでしたらよ、喜んで  
／／／」

私の言葉を聞いた赤連殿は私に向かい軽く頭を下げる。紅い髪の毛が私の手を誘うように揺れて… またもや右手が勝手に赤連殿の頭に…





赤連殿の寝顔を眺めながらボソリと呟いた私は再度頭を撫で始める。赤連殿には、せめてこの一時だけでも穏やかに休んでもらいたいものだ…

【赤連の執務室（外）】

劉備「…愛紗ちゃんに赤連君取られたああああ…ああ！今すぐ愛紗ちゃんと交代したいけど今入ったら赤連君が起きて仕事始めちゃうかも…」

公孫讚「桃香：今は大人しく仕事しよ。な？」

劉備「白々（ぱいぱい）ちゃんは赤連君独占されて悔しくないの！？こんなんで仕事やっても身が入らないよ〜」

公孫讚「いや私白蓮だって。仕事に身が入らないのは何時ものことだろ…赤連は今夜私の部屋で仕事を手伝わせる予定だから今は我慢するぞ。」

劉備「あ、ずるいつ！だったら私も一緒に仕事する！」

公孫讚「いやいや流石に客人の桃香に夜遅くまで仕事手伝わせるわけにはいかないからな。私と赤連だけで十分だから桃香は安心して寝てくれ。」

劉備「いや、私も赤連君と一緒に良いよ！」

【赤連の執務室（中）】

関羽「桃香様、白蓮殿。後でお説教しますので覚悟しておいてください…」

外から執務室を見ていた二人の会話はどうやら丸聞こえだったようで、紅蓮の頭を撫でながら今日という今日は自分の主とその友人に嫌と言うほどのお説教をしよう。だがそれまでは赤連殿が起きるまではこのまま…と考えている関羽がいたとさ。

その後、公孫讚と劉備の二人は関羽により三時間正座のまま執務。という処刑を執行されたとか…

張飛「にやははは、二人とも自業自得なのだ。あ、お兄ちゃんおかわり！」

公孫越「ほいほい。午後も兵士の調練頼んだぜ？」

続々・紅白姉弟の普通(?)な乱世(後書き)

一応【紅白姉弟】は本編の設定とは完全に無関係な番外編となっております。

【報告書】や【人物資料】、【柳の独り言】と違い本編に絡むことのないものですが…どうしましょうかね？

ご意見ご感想お待ちしております。

紀霊「…ウォーリゴホンゴホン…司馬進を探せ！」（前書き）

友人【モヒカン・シン使い】「お久しぶりです柳さん！」

柳【種朶・ジャギ使い】「おひさー！来たぜTRF！！」

友人「柳さんが来ると言うことで…」

柳「お？何かあるん？」

友人「トキ仕上げときました！！」

柳「ジャギでどうやって勝てと!？」

~~~~~  
そんな柳（弱キャラ）と友人（存在自体がバグ）の日常【某TRF編】~~~~~

現在TRFに来て北斗やってます。

ラオウの目押しと立ち回りを少しだけ教わりました。けどメインキヤラはジャギな柳です。

紀霊「…ウォーリゴホンゴホン…司馬進を探せ！」

【市場通り・洛陽一番】

開店前で静まり返った店内に足を踏み入れて辺を見渡す。

紀霊「ちいーす、親父さんいるー？」

店主「おう坊主、今日は早かったな。」

親父さんの声は厨房から、そして二階から

地和「あ、プロデューサー。おはようございます。」

普段着ている服とは違い割烹着を着て箸を持った地和がトタトタと降りてきて紀霊に笑顔を見せる。普段のクールなイメージとは違い家庭的な雰囲気醸し出す地和を見た紀霊は

紀霊「…どしたのその格好？」

紀霊の質問に地和はクルンと一回転して見せると袖を摘んでポーズング。

地和「店主さんのお手伝い中でして…似合ってますか？」

紀霊「良いね。ちーちゃんは可愛いお嫁さんになれるぞ。」

地和「ちーちゃん！？それに可愛いって／＼／」

紀霊による【ちーちゃん】ぶっぱ。やはり司馬朗との一件で色々と心情がおかしくなったのだろうか？そして呼ばれたちーちゃんこと地和は何時もと違う紀霊に赤面しつつも狼狽するという忙しい状態だ。

紀霊「H A H A H A…琥珀さんは可愛いなあ」

地和「し、しっかりとくださいプロデューサー！っていうか琥珀って誰ですか！？何時ものプロデューサーに戻ってください！！」

地和は紀霊の両肩を掴んでグラグラと揺らして必死の説得を試みるが紀霊はただただ外人のように笑い返すだけだった。

【十分後】

紀霊「いや〜悪い悪い、自分を見失ってたわ…」

地和「しつかりしてくださいプロデューサー…とはいえ司馬朗さんを殴るだなんて…もう少し別の方法は無かったんですか？」

紀霊「あ〜無理だわ。話聞いてたら無性に蹴りたくなつたからさ…まあ、そういうことでして暫くは三人で頑張ってもらえるかな？」

まあ、ぶつつんしちやつたのはしょうがない。その代わりに司馬進って野郎を探し出して司馬朗殿の目の前に連れていけば良い話だな〜ってノリで終わってくれるだろうし…それよりもだ、俺が司馬進を河代まで連れていくことになったら…申し訳ないが地和さん達には暫くの間自分達で動いてもらうことになるって方が重要だ。個人的には野郎なんかよりも彼女達を優先したいんだよね…

地和「了解しました。今まで三人でやってきたんですから、プロデューサーが戻ってくる間ならなんとかしますよ。」

紀霊「いやそう言われても心配しちゃうんだよね〜。悪い男に声かけられてそのまま…とかさ、俺が居たらそんな男は蛇狼撃で吹っ飛ばすんだが…」

そう言っつて地和さんに向けて貫手の素振りを見せる。そんな俺の姿

に地和さんはクスクス笑いながら奇妙な事を聞いてきた。

地和「ふふ、プロデューサーってもしかしてお姉さん居ますか？」

お姉さん？いやさ、実姉は居ないがお姉さんの人は…

【紀霊から見た姉属性持ちの人物】

・華雄：言わずもがな。

・張遼：同上

・趙雲：一応一つ年上、けど変態。

・朱儁：現在二十四歳、勿論姉。夜中に寝室に忍び込んでくることがある。

・皇甫嵩：現在二三歳、偶に添い寝する程度の姉。

・小町：年齢不詳、久しぶりに名前が出た人。世話のかかる姉貴分だけど滅多に会わない。

…うん、割と居たね。

紀霊「意外と居るもんだな…」

地和「居るんですか…そんなとこまでそっくりなんですな。」

コックリア、間違えた…そっくりさん？まあ、世の中には自分に似た顔の人が三人は居るって言うからな…旅の途中に出会っていたり

してもおかしくはないな。

紀霊「俺のそっくりさんか…どこで会ったの？」

地和「いえ、会ったというか…そっくりではないのですが、私達の弟に似てる場所があるんです。」

紀霊「弟？三姉妹ってだから三人だけだと思ってたんだが…」

弟さんねえ…俺みたいにも何も苦労してるところでも似てるのか？つかあの三人が家族だなんて、なんとという勝ち組…

地和「いいえ、人和と私の間に一人居たんですよ。何時も私達にべつたりで【お姉ちゃんや人和にまわりつく悪い虫は俺が駆除するっ！】ってのが口癖でしたね。」

いや勝ち組なんてチャチなもんじゃ無かった。何そのシスコン、怖い。

紀霊「そりゃ随分とお姉ちゃんと妹思いな弟さんだこと…ふと思っただがそんな弟さんなら地和さん達の旅に同伴するって言うと思っただが？」

地和さんの話を聞く限りどう考えても同行するだろう。けど同行していれば俺が三人のプロデューサーをするって時に俺の事殺しに来てると思うんだが……

そんな疑問を地和さんに聞いてみた瞬間、先程までの穏やかな表情から一変して暗い表情を浮かべる地和さん。どうも俺は地雷を踏み抜いたのかもしれない……

地和「二年前……村を襲った賊に……その時両親も殺されました。」

しくつたなこりゃ……俺が踏み入って良い部分じゃなかった……

紀霊「すまん、悪いことを聞いた。」

地和さんに向かって即座に頭を下げる。この程度の事で地和さんの悲しみが無くなるわけではないだろう。だが、聞かなくてもいい事を聞いてしまい地和さんに暗い表情をさせてしまった。何やってんだ俺……

地和「……………大丈夫ですよプロデューサー。」

紀霊「へ？」

下げた俺の頭にぼんと手を乗せた地和さん。見上げればまるで、弟を優しく諭す姉を思わす表情で俺を見つめ、優しく頭を撫で付ける。

地和「弟は最期にこう言いました。【例え肉体が無くなっても、俺の魂はお姉ちゃん達と何時でも一緒にいる。】って。だから話すことが出来なくても、見ることも触ることも出来なくても私の心の中にあの子は生きてるんです。それに今私は凄く充実しているんですよ？なんでかわかりますかプロデューサー？」

紀霊「…なんで？」

地和「姉さんが居て、人和が居て…慎さんも店主のおじさんも居ます。そしてプロデューサー、貴方がいるから毎日が楽しいんです。」

そう言っつて両手を頬に添えた地和さん。その表情も瞳にも悲しみは見えなくて優しさが見えてくる気がする…

紀霊「…地和さん。」

地和「プロデューサー、地和って呼んでください。」

目と目が合う。

どちらからともなく顔が近づいていき

頬に当たる吐息が徐々に強くなっていき

??「こんにちわーっ！開店してますかー？」

突然聞こえてきた声に俺も地和さんも後退る。

地和「は、はいっ！申し訳ありませんもう少しで開店ですて…中で少々お待ち頂くことになりましたがよろしいでしょうか？」

突然の来客。暖簾はまだ掛けてないがそろそろ開店時間だったこともあり混む前に入ろうとした客だろう。なんかあのタイミングは悪意を感じるが…取り敢えず親父さんの手伝いでもしておくか。

地和「お客様、何名様でしょうか？」

司馬進「まったく、幾ら腹減ってるからって彷徨十字鳳使って入店する事ないだろうが…あ、二名で頼む。…って【数え役満しすたあず】の地和!？」

ん？地和さんを知ってるのか？良いね良いね、だいぶ知名度が上がってきたんじゃないの？つとあの男性なんか気になること言っていたが…ま、良いか。

真「本当だよ社兄！あの、握手してください！」

地和「え？あの？」

突然握手を求められて戸惑う地和、有名になったのは良いがまだまだ突発的な事態への対処は苦手なようで…手助けしてやるか。

司馬進「こら真、相手が迷惑がっているんだからやめろ。お前もアイドルの端くれならいきなりこんな事されても戸惑うだろ？」

真「あ…っつ、御免なさい！」

地和「いえ、行き成りのことで驚いただけだから気にしないで。それよりも貴女もアイドルなの？」

ほう、凜々しい感じの雰囲気で判別出来なかったが…女か。彩の同類とは対をなすタイプだな。つーかあの子もアイドル？ライバル登場なの？アイドルの究極舞踏会で最後戦うの？

真「はい！僕は真つて言います。地和さんみたいに女の子らしいアイドルになるのが夢なんです！」

社友者P「俺は社友者^{サウザー}P、真の担当プロデューサーをしている。」

地和「私は【数え役満しすたあず】の地和です。歌で皆を笑顔に出来るようなアイドルになるのが目標よ。…そして庭の入口で煙の出る白い筒を銜えているのが私のプロデューサーです。プロデューサー！話に混ぜてくださいよ…！」

色々邪魔になりそうだったから退散してたのに呼び出された！？ああ…店内じゃ吸えないから退避してたのに…

火を揉み消して三人の元に向けて歩き出す。見れば真とか言う少女は…2のまこりんじゃん！？なんで2なんよ！？つーか男の方！なんか若いときの鳳凰拳伝承者っぽいな！

顕P「どうも、先ほどご紹介に預かりました顕^{まっく}Pと申します。【数え役満しすたあず】の担当プロデューサーをさせて頂いております。

「
そう言いながら二人に向かって軽くお辞儀。うん、同業者と会うのは初めてだが仲良くなっておいて損はない。それに二人とも常識人

な感じするし、数少ない常識人枠の確保もせねば…

社友者P「いや、まさか【数え役満しすたあず】の地和さんとそのプロデューサーに会えるとは…」

真「凄い偶然だよね社兄、僕テンション上がりっぱなしだよ！」

えーと真ちゃんだっけか…テンション上がるのはいいんだが何故社友者Pの背中をさつきから叩いてるのよ？

社友者P「顕P、此奴は浮かれると俺の事殴る傾向がありまして…その、気にしないでくれ。」

どうやら俺の視線に気がついたのか社友者Pは苦笑しながら説明してくれた。うん、取り敢えず常識人枠から一人減ったな。

紀霊「まあ、浮かれる気持ちもわからなくないんで…っとそついや天和さんと人和ちゃんは？」

地和「姉さんと人和なら買い物に行ってるはずですが…」

紀霊「ありゃ、じゃあ俺と入れ違いか？」

地和「三時間前に……」

紀霊「幾らなんでも遅すぎだろそれは!！」

いや、女の子の買い物は長いのが普通だって聞いたけどさ! 幾らなんでも遅すぎね?

地和「姉さんは迷子になる事がありますから……。まあ、人和も一緒にいるから大丈夫ですよ……。……多分。」

多分!?! ねえ今多分って言ったよね!?!

紀霊「色々言いたいことは沢山あるが……戻ってこれるの?」

もしかして司馬進探索と同時並行で天和さん達の搜索もしなきゃいけないの? 無理だよ? 司馬進探すのでさえ詰んでるのに……

地和「大丈夫です。それよりも立ち話もアレですからお二人を席にご案内しておきますね。プロデューサーは料理の方お願いします。」

紀霊「あ、はい。」

地和に言われた通り厨房に移動した紀霊だが、既に厨房に立っていた人物を発見。この店の店主である親父さんだ。

店主「…そろそろ店開けようかと思うんだが今日は止めだ。」

紀霊「ヴェ！？なんでさ？」

今日は開店しない。という親父さんだが、手に持った包丁で食材を切る動作をやめない。

店主「地和ちゃんにはここ毎日店の方手伝って貰ってたからな。今日は坊主も居るし仕事仲間も居るんだろ？たまには仕事しないってのも良いもんだぜ？」

紀霊「…やれやれ、じゃあお言葉に甘えて…今日のお代は俺の方で出すんであの三人に美味しいもの作ってもらえますか？天和さんと人ちゃんが帰ってきたら二人の分は俺が作るんで。」

俺の言葉に包丁を手でクルンと一回転、そのまま鍋に食材を流し込んだ親父さんは振り向かずに答えてくる。

店主「あいよ、他の店の飯より上手いって絶対言わせる物作るから安心しな。ほら坊主、お前も戻った戻った！」

…背中で語る男ってのはこういう人を言うんだろうか？親父さんに深々と一礼した俺は三人の待つ席に向かって踵を返す。多分真つて子が地和と話し込んでいるだろうし地和さんも天和さんや人和ちゃんとは違うアイドルとの交流で何かを得てくれればいいな…まあ、楽しくおしゃべりするだけでも色々良い影響でるだろうさ。

そう思いながら三人の元に向かって近寄った時

顕P「お待たせ〜」プロデューサー！！」「…どうしたの？」

地和「真にプロデューサーの強さを教えてあげてください！」

…訂正しよう。どうも俺にとって悪い方向で影響が出てしまったようだ。社友者Pの方も真ちゃんから似たようなこと言われてるし、嫌な予感しかせんぞこの展開…

次回に続く。

紀霊「…ウォーリゴホンゴホン…司馬進を探せ！」（後書き）

久々の次回予告 CV：千葉さん

【己がアイドルの為】。紀霊と司馬進、二人のプロデューサーが運命に導かれえ今激突！
命を賭けたあ大勝負にいくただ見守るだけしか出来なあい地和と真！
意地と意地があぶつかりあう二人の内、最後まで立っているのはど
つちだあく！？

次回、ジョインジョインジョインキレイ！

【受けてみよ我奥義！】

紀霊「おい司馬進、俺の名を言ってみろ…」

「ご意見」「感想お待ちしております。」

紀霊「受けてみよ、我が奥義！」（前書き）

中野TRFより帰省後は実家にて過ごしていた柳ですが…

遅筆にさらに磨きが掛かりました。

更新遅くなりまして申し訳ありません。最新話をどうぞ。

紀靈「受けてみよ、我が奥義!!」

【店の中庭】

俺と社友者Pは五歩程離れた状態で対峙。本当なら將軍府でやりた
いところだが…

真「社兄！ 顕Pなんて軽く殺っちゃえ！」

地和「プロデューサー！ 何時ものように勝ってください!!」

この二人がヒートしすぎて將軍府に移動させてくれないんだよね…
つーか真ちゃん、言葉的に自分のPに人殺させようとしてないか？

社友者P「真の奴、負けん気が強すぎるだろ…」

顕P「地和…意外と熱くなると周り見えないんだな…」

真ちゃんと地和は俺達の応援をしつつ犬のように睨み合っている…
対峙してるの俺達のはずなんだがあっちの方が戦闘に発展しそうじ
やね？

社友者P「…顕P、申し訳ない。」

顕P「いや、互いに苦労しますね…」

先程よりもヒートアップしたアイドル二人に溜息を吐くだけのプロデューサー二人、どうしてこんなことになったかと言うと…

真と地和、互いの旅の様子や途中で立ち寄った地方の話に花を咲かせていた時、それは真の一言から始まった。

地和「結局、プロデューサーに助けてもらったのが全ての始まりだったわ。」

真「へえ、顕Pって強いんだね。けど僕のプロデューサーの方が断然強いよ。この前もモヒカン二十人をあつという間に倒しちゃったんだから!」

そう、真のこの一言がいけなかった。

【カチン】

そんな擬音と共にムツとした表情を浮かべた地和は短い無言の後、

地和「あら、【私の】プロデューサーは洛陽に来る直前、賊の砦を襲撃して百人程倒しているわ。【私の】プロデューサーの方が強かったみたいね。」

真「ひゃ…百人!? け、けど【僕の】プロデューサーは拳法の達人だから顕Pとの一騎打ちなら【僕の】プロデューサーの方が強いよ！」

地和「あら、なら試してみる?」

真「望むところだあっ!」

まさに売り言葉に買い言葉、紀霊のいない状態で真と地和が勝手に決めようとしている一騎打ち。流石に闘う本人である司馬進が黙っているわけもなく

社友者P「いや待てふた」

まこ・ちー「プロデューサーは黙ってて!」

社友者「（お、お師さん…）」

…黙っているしかなかった。

そして紀霊が来るや否や地和が告げた一騎打ち…紀霊も紀霊で地和の剣幕に何の抵抗も出来ず今現在の状態に至るわけだ。まさにヘタレである。

紀霊「おい、ナレーション。お前後で星3コンな。」星3コン：簡単にいえば一度に星を3つ奪うコンボ。仕様のためサウザー以外は1回のコンボで取れる星の数は3つ。要するにテレッテーされるのが早くなる。

…それは勘弁願いたい。ま、まあ今の紀霊と司馬進はあまり乗り気では無いが取り敢えず向かい合って対峙している状況。

顕P「いやさ、俺人探ししなきゃいけないんだけど…」

社友者P「先程聞いたが天和さんと人和ちゃんか？」

顕P「いや、別の人物でな、名は「おらおらおらあ〜っ！頼むからどけーっ！」「んあ？」

不意に響いたどこかで聞いたことのある声。しかしその声の元は庭の出入口とかでは無い。

司馬進「むっ！？空から何か来るぞ！」

その声は空から降ってきたのだ。司馬進の指さした方向を見やると

孔融「うらあっ！！」

両腕に装着した孤手甲。そして建物に孤手甲の爪を飛ばしてまるでNYの空を飛び回る某蜘蛛男のような移動を繰り返しながら庭に突っ込んで来る孔融と

天和「あらあら、風が気持ち良いわね人和ちゃん。」

人和「はいっ！慎さんの発明って凄いです！」

呑気に孔融の背中に張り付いている天和さんと此方は逆に孔融の胸に抱きついて空の旅を楽しんでいる人和。

紀霊「地和、空からなんか降ってきたんだが…なんだありゃ？」

地和「はい、姉さん達ですね…」

そういう紀霊だが、紀霊も紀霊で普段から【ナギツ】で移動しているため【お前が言うな】と言っても問題ないと思うのは私だけだろうか？

そここうしている内に紀霊達のいる中庭に着地した孔融改め蜘蛛男とアイドル二人。

蜘蛛男「ほい到着、天和さんに人和ちゃん離れても大丈夫だよ」。

蜘蛛男改め孔融は二人を降ろして孤手甲を外して大きく背伸び。

天和「ありがとうございます！ 慎君。」

人和「地和お姉ちゃん只今れす！ 慎さんの御陰で帰ってこれました。」

地和「姉さん、人和：無事でよかったです。」

買い物に出かけてから三時間半。恐らく迷子になっていたであろう姉と巻き込まれた妹が空から降って来た。普通なら信じられない事

実であるが洛陽目指す旅の途中南蛮に迷い込むような姉故に何も言わない地和は、二人の無事が確認できた事に安堵する。

孔融「いやさ、【洛陽一番】に来ようと思った矢先に天和さんと人
和ちゃんがおっちゃんの部屋から出てきて驚いたよ。」

紀霊「普通に買い物してたら迷い込むような場所じゃねえぞそれ…
つか何で空から来んだ？」

孔融「衛さんが投石器で飛んだほうが早いってな。孤手甲も持って
たからある程度の移動は可能だったし飛ばせてもらったよ。」

ここで想像してみよう。天和と人和が孔融の背中と胸に抱きついた
状態で投石器に搭乗し

孔融「アム〇、逝きまーすっ!」

と言わんばかりに跳躍する様を…

紀霊「後で衛姉には新秘孔の究明に協力してもらおうか…んで、飯で
も食いに来たなら残念ながら今日は店仕舞だそうだが？」

孔融「げ、って親父さんの事だからお前絡んでるだろ絶対…それと、先輩から情報貰ってきてやったぞ。敬え。」

紀霊「情報か…」

司馬進「取り込み中のところ申し訳ないが頭P、少しいいか？出来れば彼の紹介をしていただきたい。」

早速情報を聞こうとした紀霊だが、不意に声をかけてくる司馬進。そう言えば紹介も何もしてなかったな…と思い返しつつ

紀霊「こりゃ失礼。今空から降ってきた…女の子二人は説明いらんから野郎だけだな。こいつは孔融。」

孔融「孔文挙だ。天和さん親衛隊の総大将をやっている。あ、副業で文政府の役人やってるぜ。」

いやいやいや待て、お前の本業は親衛隊か？役人だろお前…

司馬進「孔融…だと？あの孔子末裔の？」

孔融「ああ、一応ご先祖様だな。ってどちらさん？」

司馬進「これは失礼、社友者Pと申します。 顕Pとは先程お会いしました…」

社友者Pは目の前の孔融に一礼。 心の中で「もしかして顕Pも相当な身分では？」と焦りが生じながらもなんとか冷静を保とうと務める司馬進だが、孔融の次の言葉に心臓が止まりそうになった。

孔融「へえ、顕と同じでプロデューサーやってるんだ。 あ、そうそう。 司馬進殿についての情報、今聴聞くか？」

司馬進「!?!」

紀霊「助かる、早速で悪いが聞かせてくれ。」

孔融殿の先輩が何故自分の情報を顕Pに伝言したのか？そもそも顕Pは先程なんと言っていた…？

確か…

顕P「いやさ、俺人探ししなきゃいけないんだけど…」

だったはず。 まさか俺を探している!? 何故だ？ いやそれよりも不味い！今直ぐにでもこの場を離れて洛陽を出なければ俺の本能が

逃げると告げている…だが、頭Pとの闘いを捨てて逃げたら真の御仕置きが…

必死に打開策を探す司馬進の心情を知る訳がない孔融と紀霊は三姉妹と真、そして司馬進の前で司馬進の精神を削るような会話を始める。

孔融「えーと…確か凜々しい美少年っぽい少女をアイドルでプロデュースしてて髪の毛は金色、ちょっと悪人面。恐らく本名を隠しているって話だ。後、見た感じ武人として成長したようだって言うってたな。」

紀霊「司馬朗殿もそこまで解ってるなら自分で捕まえるよな…つかどっか…で…?」

司馬進「（不味い!というか兄上の仕業か!?なぜ今頃俺を探している?いやまて、それよりここを逃げ出すのが先だ…）」

結論にたどり着き、音を立てずに紀霊達から離れる。そして、地和と睨み合う真に向かってじりじりと近寄って気が付かれる前に抱えて逃げようとした司馬進だが

紀霊「なあ社友者P、色々あって司馬進って奴を探しているんだが何か知らないか?」

司馬進「いつ！？いや知らん！俺は知らんぞっ！！」

またもや心臓が止まるかと思う程のスリルを投げつけてくる紀霊達に動揺したのか額に冷や汗を掻きながら上擦った声で返答する。紀霊は「そうかー。ま、頑張つて探すか。」と気が付いていない様子だった事に一安心した司馬進。だが、

孔融「つて待て顕、えーと社友者殿だっけ？あの人プロデューサーだつて言つてたよな？」

紀霊「ああ、言つてたな。」

ドクン！ドクン！と心臓が激しく動悸するのが解る。

孔融「社友者Pの担当アイドルって地和さんとにらみ合ってるあの子？」

紀霊「そうだな。真つていう女の子だが、それがどうした？」

更に心音が加速し、自身の手が震えてくるのがよく解る。ああ、不味い。

孔融「社友者Pって金髪で結構体格良いよな？」

紀霊「たしかにな。つーか相当な強さだと思っぜ？」

も…もう駄目だ…俺の正体が…

孔融「先輩の弟さんにそっくりな人もいたもんだな！」

紀霊「本人を見たことないがこんだけ条件に当てはまるなんて物凄い偶然だな！」

バレないんかい！！

そう言っつて笑い合う二人に対し司馬進は地面へと盛大なヘッドスライディングを披露。途端に紀霊達の注目の的となる。

紀霊「社友者P、そんな盛大にこけるとは…大丈夫か？」

孔融「怪我ないかー？」

そう言って近づいてくる二人に対し、司馬進は四つん這いの状態になって体を震わす。

司馬進「フ、フフフ、フハハハハハハハ！お前ら馬鹿か！兄上から聞いた情報にここまで酷似している人間がそうそう何人も居てたまるか！俺だよ！司馬進は俺だよコンチクショー！！」

何度も心臓が止まりそうなくらい危機感を味わった拳句に人違いだと勘違いされる。そんな阿呆らしい結果に怒りを露わにした司馬進はついつい己から正体を明かしてしまう。

孔融「（ ^ ^ ）……………」

紀霊「……………（。・）」

しかしそれを聞いた紀霊と孔融達は無言。いや、思考が停止していると表現したほうが良いだろう。

司馬進「あ、やべ…」

孔融「……………よっしゃ顕！とっ捕まえるぞ！！やっちまえ！！」

紀霊「ヒヤッハー！！飛んで火にいる夏の虫だーっ！！」

司馬進「やっちまった！！」

目をぎらりと光らせて紀霊に指示を出す孔融、そして背中から三華尖を取り出して孔融の命令に答える紀霊は司馬進へと飛びかかる。

紀霊から繰り出された一撃を回避しつつ後退した司馬進。そして

真「ほら見る！【僕の】プロデューサーには顕Pの攻撃なんて当たらないんだ！！プロデューサー！！プロデューサーの方が強いって教えちゃってください！！」

司馬進「ねえ、もうちょっと空気読もうよ真！」

紀霊と司馬進が手合わせを開始したと勘違いした真によって色んな意味で逃げ道を塞がれ始める。まあ、真がこんな感じならば勿論…

地和「プロデューサー…負けたら五時間正座のままお説教ですからね？」

紀霊「俺に死兆星を見ると!?!」

地和も紀霊の応援（？）をするわけでして…

司馬進「ええい！こうなつたら頭Pを叩きのめして…」

紀霊「社友者P…いや、司馬進！俺が勝つたら暫く付き合ってもらう…それと俺の名は紀霊だ…！」

司馬進「ふんっ、なら俺が勝つたら見逃してもらつぞ紀霊…！」

刹那に紀霊の三華尖と司馬進の手刀がぶつかり合い弾け飛ぶ。

紀霊「今度は素手に防がれんのかよっ！一応衛姉を傷つけられる業物なんだぞこれ…！」

以前孔融の孤手甲に防がれたことはまだ良い。何故ならあれは手甲に防がれたから納得がいくのだが、今度は素手に己の一撃を防がれる。その事実について叫んでしまった紀霊であった。

司馬進「ふははははっ…！いかに優れた武器であろうが刃が触れなければ斬ることはできん…！」

紀霊「ってことは槍の腹を弾いたのか？どんな化け物だよこの野郎
！！」

司馬進には三華尖による攻撃は効果が無いと悟った紀霊は三華尖を地面に突き刺して拳を構えて司馬進を見据える。対する司馬進は不敵な笑みを浮かべて口を開く。

司馬進「ふん、少しは拳法の心得があるようだな…だが、鳳凰の夢がある限り…最強の拳法である南斗鳳凰拳は負けん！」

紀霊「鳳凰の夢？」

司馬進「そうだ、鳳凰の…俺の夢とは真を頂点に導くこと！その為ならばっ！！」

語り終えたと同時に紀霊の懐に突進。瞬間移動といった表現の方が似合うほどの踏み込みの速さをもって紀霊の懐に入り込んだ司馬進は両手を十字の形にして斬り付ける。

司馬進「退かぬ！」

紀霊「ちい！」

しかし紀霊の反射速度も早く頬に若干の切り傷が出来た程度に回避するが、追撃の手刀がさらに迫り来る。

司馬進「媚びぬっ！」

紀霊「まだだっ！！」

最初の一撃目は回避できた紀霊だが、二撃目は回避する猶予も余裕も無かったため防御し、即座に反撃の拳を繰り出したのだが

紀霊「ほあ たっ！！」

紀霊の拳が当たる前に空中をひらりと舞った司馬進を捕らえることは出来ずに空を斬る。そして拳を突き出した僅かな隙を見逃すほど司馬進は甘くない。即座に体を捻るとその反動を使い紀霊に蹴りを放つ。

司馬進「省みぬ！！」

そしてその蹴りは紀霊の顔目掛けて飛んで行き

紀霊「あっ…がああ！」

顔の右側に走る激痛。即座に飛び退いて司馬進との距離を取った紀霊だが

孔融「頭っ！お前右目っ！？」

孔融の言うとおり紀霊の右目を見た地和達は絶句した。

紀霊の右目瞼から頬にかけて縦に伸びる赤い線。そして赤い線の下からは大きな赤い雫が地面に向かってぽたぽたと垂らし続けている。

地和「プロデューサー！？」

紀霊「ちいっ…気にすんな！目までは斬られてねえ！！！」

そう言っつて司馬進を睨む紀霊。しかし、紀霊はそう言っつもの傷と流れる血によつて右目は殆ど視力を持たない状態。両目ですら苦戦する司馬進に対し片目での戦闘続行は相当な不利なのは間違いない。

司馬進「…ふん、殺すつもりで放ったが躲した上に俺を傷つけるか…だが、その目では満足に闘えまい。諦めて傷の治療でもするんだ

な。」

ふと見れば、司馬進の胸には大きな痣が出来ており口からは血が流れている。紀霊もやられっぱなしではなかったのだ。しかし、司馬進の言うとおり片目だと距離感覚が非常に取りにくく、更に視界の封じられた右側は大きな死角となる。その二つの事実は武人として致命傷といってもよく克服するためには相当な時間と苦勞が必要であり、現在の戦闘ですぐにその欠点を克服できる人間など殆ど居ない。居たとすればそれは天才と呼ばれる人種か化け物の類であろう。

紀霊「…だが断る。諦めるだあ？バーク、報酬は返品不可能だしここで諦めたら約束保反故にしてしまう。」

しかし紀霊は片目での戦闘続行を選択する。

紀霊「悪いが…司馬朗殿の前に連れていくって宣言したんでな。それと…」

ちらりと地和達三姉妹の方を見やると心配そうな顔で紀霊を見つめる三姉妹、中でも地和は目尻にうっすらと涙を浮かべて紀霊を見つめていた。ふと、紀霊と地和の視線が重なり互いに見つめ合う。

紀霊「……………」

地和「プロデューサー……」

心配そうに紀霊を見つめる三姉妹の視線を感じながらゆっくりと構えながら司馬進に口を開く。

頭P「担当アイドルが見ているってのにプロデューサーが退けると思っかい？なあ、社友者プロデューサーよう……」

社友者P「……フ、フハハハハハハハハハハ、その通りだ頭プロデューサー！俺も真のためならば、鳳凰の夢のためならば……退かぬ……！」

互いに申し合わせたように前進、紀霊と司馬進の距離はじりじりと短くなつていき……既に互いの攻撃範囲へと足を踏み入れている。

司馬進「……紀霊殿、勝つても負けても貴殿のようなプロデューサーと戦えたことに感謝する。」

紀霊「ああ、例えどちらかが命を落としたとしても……俺はあんたを恨まないぜ司馬進。」

司馬進「俺も同じだ。さあ！天空に舞う羽と化す我が体に拳を打ち込んでみよ……！」

そう叫ぶなり両手を広げ十字の形に構える司馬進。

南斗鳳凰拳の構え…、基本的に南斗鳳凰拳は攻撃に特化した拳法であり構えは防御の術であり必要としないため鳳凰拳には構えが存在しない。だが、対等の敵が現れたときに相手に全力で闘う意思と敬意を表す意味を込めた構えと取る奥義が密かに存在する。司馬進は、紀霊が自分と対等と認め全力で闘うとの意思表示を示したのだ。

紀霊「ならば俺も…奥義をもって答えよう。」

そんな司馬進に対峙するよう中腰になり、手のひらを見せるように前に突き出して親指を曲げて目を閉じる。

紀霊「ある時代…北斗神拳には四人の伝承者候補が居た。だが時代は荒廃していてな、長兄はその拳を自らの野望に使い、次兄はその拳を人の命を救うために役立てた。三男は北斗神拳を更に強くしようと拳を高めた。そして四男は…愛のためにその拳を使った。結局四男が正統後継者になってよ…残った三人の兄達との後継者争いをおっ始めたんだがさ…」

司馬進「ふん、長子を後継者にしないと問題が起こるのは明白だろう？それは師が悪い。」

紀霊「ああ、問題だらけだ。特に酷いのが三男でよ、弟が後継者に選ばれたのが認められなくてグレちまったや。悪逆非道の限りを尽くした拳句、最後は弟に殺された。だがよ、その三男は誰よりも努力家で…誰よりも人間臭かった。そんな三男が独力で習得した奥義は嫉妬、怒りといった感情を捨て去ることで初めて極められるという…俺はこの奥義を初めて人に放つ。」

司馬進「来るがいい…」

感覚を研ぎ澄まし息を大きく吐き出す。両目は閉じており光は見えずぬものの、司馬進が、地和が、孔融が、周囲の人間が今どう動いているのか…息遣いまで鮮明に感じ取ることができる。

目が見えなかるうが関係ない。今の紀霊には心の目が開いているのだから…

紀霊「貴様に北斗神拳の真髄を見せてやるう…【北斗羅漢撃！！】」

その叫びを合図に相手を幻惑するように両手を動かしながら突進し、司馬進に向かって無数の突きを繰り出す。

司馬進「ぬおっ!?!」

一撃目、二撃目を躲した司馬進だったが三撃目で頬に、四撃目で腹部にと切り傷を刻まれて徐々に徐々に躲しきれなくなっていく。だが、羅漢の手は緩まない。

紀霊「司馬進！貴様が天空に舞う羽だと言っならばっ、俺は羽を吹き飛ばす風となろうっ！さあっ！早い突きが躲せるかあ！？」

その言葉を合図に紀霊の突きが早さを増し、司馬進の体に多くの切り傷を与えていく。そして貫手が司馬進を徐々に捉え始め…

司馬進「馬鹿なっ！鳳凰がっ、鳳凰が負けるなどっ！！」

紀霊「トドメだあーっ！！」

おおきく振りかぶって放たれた紀霊の左手が司馬進の胸目掛けて繰り出され

司馬進「鳳凰の夢は、潰えたか…」

自らの敗北を感じ取ったのか、紀霊から放たれた貫手を回避することなくただ眺める司馬進。その顔には死への恐怖などは無く、清々しい笑さえも浮かべている…

真「社兄ーっ!!」

地和「プロデューサーーっ!!」

司馬進の危機に叫ぶ真と紀霊と止めるようと叫んだ地和、そして紀霊の貫手が司馬進の胸目掛けて

紀霊「…もういい、ここまでだ。」

突き刺さる直前、本当にあと数ミリで突き刺さるであろう至近距離で拳を止めた紀霊の言葉に司馬進は目を開ける。目を開ければ、目の前には口から吐血し顔の右側にある傷口からも流血つつ息を切らしながら自分を見ている紀霊が居た。

司馬進「…何故止めを刺さん。」

紀霊「司馬朗殿の元に連れていって約束したからな。それによ…」

横を向いてこちらに駆け寄ってくる真と地和を確認した紀霊はニヤリと笑いながら答えた。

紀霊「司馬進殿を殺してしまつたら…俺はあの子に恨まれるだろ？
そんなの御免だね。」

司馬進「くくっ…俺に勝つほどの男が何を恐ることがある。」

紀霊「はんっ、悪いが男よりも女の方が怖いんだぜ？」

そう言つて地面に胡座を搔いて座る紀霊はタバコを取り出して着火。
白い煙を吐きながら司馬進に笑い返す。最初は互いに笑いを堪えて
いたようだが、直ぐに耐え切れなくなつたのか

司馬進「フハハハハハハハッ！！俺の真名は社やしろ！」

紀霊「クハハハハハハハハッ！！俺の名は顕あき！社、悪いが暫く付き
合つてもらつぜ？」

司馬進「良いだろう！どこへだろうと連れていくがいい！！」

顕&社「フハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！！」

どちらからともなく高笑い。先程まで殺し合いを興じていた二人と

は思えないくらいの穏やかな空気を醸し出す。それは数年来の友人
同士のようでもあり、まるで…何か悪さをしようとする悪友同士の
ような表情をしていたそうなの…

紀霊「受けてみよ、我が奥義！」（後書き）

色々忙し過ぎた帰省も…もう終わります。

日付が変わるまでは続編の制作を行う予定ですのでメッセージ等を頂ければ返したいと思います。

柳の独り言？（前書き）

司馬進が出たのでヤリタカッタダケー（マテ
微修正加えました。

柳の独り言？

どうも、柳でございます。

前回の話でやっと司馬進が参入し、とうとう洛陽編の終わりが見えてまいりました。

と言うことで、ここらでオリジナルキャラクターの紹介（メタ発言）をシテミタイナーと思ひまして二度目の柳の独り言を投稿することにしました。

今回は趣向を凝らしてキャラクターのパラメータ的な物を入れてみたいと思います。

【基本事項】 柳の独断と偏見で作成したパラメータの為笑って見逃してくださいw

パラメーターに関しては某メーカーの三国志？に準拠します。（武力、知力、政治、魅力それぞれ1〜100）

わかりやすいように基準となる武将を以下に記述すると…

普通の武将 武力：60 知力：60 政治：60 魅力：60

それぞれ数値の偏差値が60で、60以上あれば普通にその分野でやっていける。勿論数値が高ければ高いほど優秀。といった感じですよ。

因みに、モデルとして上げますと

公孫讚 武力：68 知力：65 政治：66 魅力：80

と魅力以外のステータスは普通、魅力に関しては紅白姉弟のヒロインのため高め。というか女武将は大体皆高いです。

ま、こんな変な設定考えてないで本編はよ書けや！というツッコミが来ないよう祈りつつ…

【姓】：紀 【名】：靈 【字】：周英 【真名】：顯 【性別】：男 【年齢】：16

【武力】：89 知力：67 政治：66 魅力：77

・言わずとした本編主人公で【獲得経験値十倍】という特殊スキルを所持した転生者。実は精神年齢は肉体に引っ張られて若くなっている。けど偶におっさん臭い。

・けど肉体的な成長（筋力等）は簡単にいえば成長の限界が来ており余り上がらないが、技の熟練度や兵法等の知識系はまだまだ上がる余地有り。

・北斗及び南斗の拳法を使用するがあくまで使える程度でまだまだ半人前。ビームやら天破活殺、無想転生といった奥義は使えません人間なもの。

・実は年上（女性限定）と年下（女性限定）関係する場合、パラメーター【魅力】が+30される。通称【弟補正】と【兄補正】。得に年上の女性だとその補正率が凄いいことになりそう…

因みに楽就に対しては【兄補正】が働いている。

・主人公補正は隠しパラメータ。これがないと恋や衛姉に勝てるわけがない。

・キャラコンセプトは勿論ジャギ様。本人も無茶苦茶強い部類な上に（恋とか衛）が更に異常なので普通に見える。主人公ってこともあり基準に見られがちなのも原因かもしれませぬ。

・因みに貧乳派。

・柳的に殺すとしたら禄な殺し方をしないであろうキャラ。例：執務中に居眠りちゃったら筆が喉の奥に刺さって死亡等。

使用武器：【三華尖】部類：【三尖刀】

・元々読者様から募集した武器名を使用した紀例の愛槍。多分切れ味ゲージ白です。

・命名してくださった読者様にはその武器の製作者（刀匠）として名前だけ出させていたいております。

・特徴としては槍の特徴である刺突攻撃のみではなく、薙ぎ払う斬撃系や槍の腹で殴る打撃系も使えるので物理攻撃を反射するような敵が出てこない限り問題なく使えます。

各キャラクター相性表（紀霊対〇〇（?：?）で表示します。）

対呂布（1：9）無茶苦茶不利というか詰みゲー。MPを貯めましよう。

対朱儁（2：8）呂布戦よりは希望が見える。けど希望はあくまで希望でしかない。

対華雄（6：4）割りどどっちが勝ってもおかしくない。勝つても負けてもいちゃつくのは仕様です。

対張遼（6：4）こちらも姉者と同じくいい勝負。紀霊的には戦闘中に目の前で揺れちゃうから華雄よりもやりにくい？かもしれないw勿論いちゃつきます。けど華雄より糖分控えめ。

対凱乾（8：2）取り敢えずナギツって槍振ればええねん。

対司馬進（5：5）ガン攻めされると厳しい。早めにガークラさせて肋骨折るのがベスト。

対孔融（7：3）ワンチャン与えなければ何とかなるかも？孤手甲の射程が鬼畜なので注意。

【姓】：孔 【名】：融 【字】：文举 【真名】：慎 【性別】：男 【年齢】：16

【武力】：74 知力：75 政治：88 魅力：78

・紀霊の悪友にして最初の強敵。元々文官なのに結構強いんだけど紀霊達と見比べたら見劣りしてしまうのが難点。

・ポジシヨン的にはボケ、場合によってはツツコミ。

・発明系のネタがあるため【シンえもん】化する可能性大。というか今の時点で既に移動方法は蜘蛛男化している。

・司馬朗の人物資料集にも記述されたとおり、お年寄りに好かれる孫気質な部分あり。柳的にも書いてて楽しい。

・勿論コンセプトはシン。執念で猛者ぞろいの本編を生き抜いて欲しいものだw

・此方も内部補正で年配の方限定で【魅力+15】される【孫補正】、及び年上に女性と年下限定で【魅力+10】される【弟補正】と

【お兄ちゃん補正（紀霊の兄補正と違い男女区別無く懐かれる。）】がある。

・モデル及びキャラ発案は携帯談話先生。柳が丁度姉好きな新キャラを登場させようと思っていたときに携帯談話先生の感想を見てティーン！と来て出演依頼をしてしまった。携帯談話先生、すいません

（汗

・勿論巨乳派。

使用武器：【孤手甲】 部類：【鉤爪+手甲】

・無双で張？が使用していた武器をゴツくした感じの武器。爪は鷹みたいな形です。

・爪は着脱可能。内蔵された特殊鉄線で爪と手甲が繋がっておりそ

れを飛ばして攻撃する事が出来る。(ロケットパンチ的なイメージです。)

・射程距離は最大10m、正直この射程は狡い(紀霊でも2m)。皆が驚く特殊ギミック満載な武器であり、何故か爪で物を掴めたり応急修理キットなるものが内蔵されておりどんな便利キャラ化が進んでいる。こいつならその内火薬を詰めて撃つロックバスター的な機能を追加するんじゃないか?と柳は思ってしまった。

各キャラクター相性表(孔融対OO(???)で表示します。)

対呂布(1:9)そもそも戦う機会があるのかすら怪しい。対呂布対策はエンカウントしないこと。

対朱儁(1:9)師事してもらっている分呂布よりはやりやすい。けど圧倒的な実力不足は否めない。

対趙雲(3:7)頑張れば割りといい勝負しそう。戦い方次第では勝てそうなのだろうか?

対樂就(6:4)真面目な戦い方の樂就とは相性が良い。驚きギミックで相手を動揺させてしまおう。けど下手に虐めすぎると司馬朗と紀霊から御仕置きされます。

対袁紹(8:2)何回目(の攻撃)で死ぬかな?

対紀霊(3:7)三華尖の攻撃は孤手甲で防げるので北斗と南斗、ナギツに注意すればおもしろいことになりそう。

対司馬進(2:8)紀霊より容赦がない分辛いと思う。ていうか勝てなくね?

【姓】:司馬 【名】:進 【字】:恵達けいたつ 【真名】:社 【性】:男 【年齢】:18

【武力】90 知力:80 政治:71 魅力:79

・新キャラ。最近の紀霊の苦勞は大体此奴のせい。そして、紀霊の顔に傷を残したのも彼。

・既に立ち回りが微妙に不憫な気がしてならないのは柳だけだろうか？

・ポジションとしては基本ツツコミだけど偶に馬鹿。戦って作戦立案も出来る参謀的ポジションに据えても良いかもしれない。

・重度の弟愛フランクな姉一人とその幼馴染フランク(姉)の二人が今後出演予定。慎がまた悲しみを背負うのか？

・此方の補正は姉限定で発動する【魅力+20】、真限定で発動する【武力-10】、【魅力+15】がある。

・ご存知サウザー。というか司馬家は【フハハ！】の口癖する奴もうひとりいたなw

・モデル及びキャラ原案は【南斗鳳凰拳・聖帝 サウザー】先生。

・実は柳はサウザー先生のティンツときた！プロデューサー？が好きでして、続編出たらな〜とか無茶な願いを持っていましたw けど、我慢できずに…柳の作品でプロデューサーやってもらおう！とか考えついてサウザー先生に出演のお願いをしたところ快諾してくださいました。

・真の外見が2仕様なのはサウザー先生のリクエストです。流石まこりんスキー、お目が高い。

・実はキャラ設定等のメッセのやり取り中、司馬朗を番外編の語り部にしてしまおうと思いついた訳です。うん、気がつくキャラが膨らんでいくw

各キャラクター相性表(司馬進対00(???)で表示します。)

対呂布(2:8) 戦闘の機会はあるのだろうか？多分紀霊、孔融と比べたら呂布とは戦いやすい方だと思う。

対朱雋(2:8) 相手の攻撃はひらりと回避できるけど…ダメージ

通るのかな？

対紀霊（5：5）ナギツを使われて固められたら原作（AC）のよ
うに詰む。使われる前に殺すか気絶させるのが無難。

対孔融（8：2）ギミックに注意すれば自ずと実力で勝てると思っ
けど南斗習得し出したら面白いかも。

対？？（10：0）確実に関節技で骨が悲鳴を上げる。怒らせたら
容赦無くやられるので怒らせないよう注意。

…なんだこれ？w

まあ、あくまで洒落なんで…大目に見て頂けたら幸いです。

メインのオリジナルキャラ3人についてって事で…好評だったら別
のキャラもやってみます。

おまけ

姓：【楽】 名：【毅】 字：【不明】 真名：【不明】 年齢：

【二十代後半】

【パラメータ算出不能】

・感想欄において生まれたもう一つのジョインジョインジョインキ
レイの物語（？）において珍道中を繰り広げる主人公。何か気が付
いたら始まっていた。

・実は宇宙から来た宇宙人では？等と議論されるが実際のところ柳
にもわからない。

・感想欄みてたら【もうこの人この作品の登場人物にしても良いん

じゃね?】と考えて此処に記述。

・ライトセーバーやジェダイといったスターウォーズネタや本編の裏で進行される色々な事件には【そういうネタもあったか!】と感心させられることもあります。

・キャラ原案・モデルはそのまんま楽毅先生。そしてストーリー構成と執筆も楽毅先生。先生、お疲れ様です。

今回の【柳の独り言?】は完全に洒落やノリで構成されています。もし疑問に思うところがあったら質問どしどし送っちゃってください(汗)

柳の独り言？（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

孔融「フハハハハ！じゃねーよ！！」（前書き）

柳「……………」（ラオウの目押し修業中）

トキ（友人）「北斗有情破顔拳！」（テレッテー）

柳「……………あ”あ!？」

友人（素人）。けど何故か一撃と刹活のコマンドは知っている。「おっしやー!!！」

…目押しを継続させるのやっぱり大変です。というか今更だけどトキの刹活は意外と攻撃範囲デカくて鬼畜。

孔融「フハハハハ！じゃねーよ！！」

頭&社「フハハハハハハハハハハハハ！！」

傷だらけの手合わせが終わり俺と社は笑い合う。何でだろうね？すつごく痛かったしろくな目に会ってないはずなのに…ともかく、理由は分からないけど自然に笑みが溢れてしまったんだ。

孔融「フハハ！じゃねーよ！！」

笑いあっていた俺達だったが不意打ち気味に慎が放った5クト拳…じゃなかった南斗獄屠拳が社に直撃。蹴られた社は吹っ飛んで「ぬう」とかいう呻き声を上げている…いやー慎の獄屠拳だいぶ威力上がったんじゃない？って何やってんのよ！？

紀霊「ちょ！慎何やってんの？何やってんの！？」

いきなりすぎるぶっぱに驚いた紀霊だが、司馬進を吹っ飛ばした孔融は紀霊の方を向いて詰め寄ると捲し立てるように喋り始める。

孔融「何やってんの！？はこつちの台詞だ馬鹿！！ついさっきまで殺し合いに近い戦闘していた二人が勝敗決したら真名交換した拳句に高笑いだあ？ぶっざけんな！！そんな週刊【跳躍】の王道戦闘物

みたいな展開実践してんじゃねーよ！見てるこっちはどんだけ心配したと思ってるんだ！！」

よく考えてみたら孔融の言うとおり先程まで紀霊と司馬進は手合わせとかなんてレベルじゃない本気の戦いを行っており、素人目から見ても一歩間違えばどちらかが命を落としてもおかしくないと理解出来る程の状況であった。現に紀霊は顔面右側の脛から頬に掛けて切傷を負い、現在も絶賛出血中。なのに戦闘が終わった瞬間戦った張本人たちが高笑いを浮かべたとなつては心配しながら見た側からしたら堪ったものじゃないだろう。

紀霊「いや、その…悪い。」

それを感じ取った紀霊は直ぐ様孔融に向かって頭を下げる。それを見た孔融は溜息をつきながらも紀霊の怪我の具合を聞いてくる。やはり彼は彼なりに心配していたのだろう。

孔融「…たく…目は無事か？」

紀霊「ああ、まだボヤけて見えるがその内回復するだろう。傷に關してはどうしようもない。」

そつと傷口をなぞった指にべつとりと付着する鮮血。紀霊は改めて司馬進の手刀が如何に鋭い切れ味だったかを嫌でも再認識してしま

う。

孔融「そっか、なら良いや。…ま、後は後ろ向いて説教されてこいや。」

紀霊「へ？」

孔融の言葉に後ろを振り返ってみると…

地和「……………」

人和「プロデューサーには御仕置きが必要だと思います！」

天和「うふふ、悪い子には御仕置きですよ。」

物凄く9393やらニコニコした表情を浮かべる地和と人和にちよつぱりKINGが出ている天和さんが其処には居た訳で…

紀霊「あの〜、出来れば怪我の治療してか「プロデューサー、そこに正座してください。」…ヴァイ。」

せめて傷の手当だけでもと懇願する紀霊に対し地和の「おい、そこに座れ」が発動。勿論紀霊は条件反射で即座に正座し、それが合図となり三姉妹による紀霊への御説教ごしやうまねが幕を開けた。

~~~~~紀霊受刑中~~~~~

地和「これでよし…と。」

無事受刑を終えた紀霊。その紀霊に付き添って彼の顔にこびり付いた血を拭き取る地和はそつと傷口をなぞる。

紀霊「いてて…流石にそう簡単に治らんか。」

地和「当たり前です。こんな無茶ばかりしないでくださいよもう…」

紀霊「いや、本当悪かったって。あゝもう疲れた…ってそういや社は？」

ぐったりしながらも周囲を見渡し司馬進を探すと



司馬進「お、お師さん……」

真「ふふふ、社兄にはまだまだ御説教が必要だよ。ほらほら」

真つ白に燃え尽きかけている司馬進に対し、真は司馬進の顔を自分の太股で挟み、自分の両手で司馬進の両足を持つ変則的な逆海老固めの真つ最中。恐らく紀霊が三姉妹に説教されていた小一時間色々な関節技を喰らっていたのだろう。

紀霊「(社、南無。)」

執行風景を見た紀霊は心の中で合掌。だが不意に頭を掴まれて

ぽふっ

柔らかい感覚に女性特有の良い匂いと共に頭をぎゅっと抱きしめられる。

地和「……………」

紀霊「あの〜、地和？」

抱きしめたのは地和で、無言のまま紀霊の頭を抱きしめる。紀霊は地和の表情を見ることはできないが抱きしめられた腕が微かに震えているのを感じとる。

ああ、もしかしてまた悲しませたか？と不安に感じた紀霊に対し地和が声を震わしながら話しかけてくる。

地和「プロデューサー…約束してください。」

紀霊「約束？」

地和は紀霊を抱きしめたまま紀霊に対し静かにゆっくりと話しかけ、約束と言う単語に反応した紀霊を抱きしめる力を強めた彼女はゆっくりと口を開いた。しかし紀霊の耳に入るのは何時もの澄んだ声では無くどこか悲しい雰囲気を漂わせるか細く消え入ってしまったような声。

地和「これ以上大切な人が居なくなるのは…嫌です。だから…だから約束してください。もう無茶はしないって…。お願いしますプロデューサー。」

大切な人…、プロデューサーが弟に少し似てたこともあるのだろう。彼が傷つきながらも闘う姿を見ていたら凄く不安な気持ちになってしまった。まるで…プロデューサーまで私の目の前から居なくなってしまうような気がして…

紀霊「……………ああ、今後無茶はしない。」

地和「本当にですよ。本当に本当にですよ?。」

プロデューサーは無茶をしないと伝えてくれた。けど彼の事だからこれからも無茶をして傷ついたりしていくだろう。そんな事解りきっていても私は彼に約束を強請り、少しでも安心したかった。

…彼の頭を抱きしめる力を強めながら頭をそつと撫でる。そうすることです。少しだけ彼が弟のように見えて…なんとなく懐かしい感じを覚える。

紀霊「約束するぞ。」

地和「じゃあ指きりげんまんです。」

彼の小指に私の小指をしっかりと絡ませる。武将だと言うのにゴツゴツした感じはなく何よりも暖かく優しい感触。

地和「指きりげんまん」

紀霊「嘘ついたら」

地和「針千本飲みます。」

顕・地和「指きった。」

指を切ると同時に彼の手を握る。こんな子供じみた約束事で彼を止めることなど出来ないだろうが、今この時だけでも彼と繋がって…繋ぎ止めていられるなら…

【紀霊&地和から少し離れた場所】

人和「地和お姉ちゃんとプレデューサー…すっごい仲良しです！」

天和「邪魔しちゃダメよ人和ちゃん。ささ、後は二人に任せて私達は退散しましょ？」

孔融「いや、そうしたいけどまだ仕事残ってるからね？つーか司馬進の奴そろそろ助けないと死ぬよ？泡吹いてるし…後、プレデューサーじゃなくてプロデューサーね。」

紀霊「って思い出した!？」

地和「えっ!？」

恐らく孔融の声が聞こえて本来の要件を思い出したのだろう。いきなり紀霊は抱擁を解いて立ち上がり司馬進の元へと駆け寄っていく。

紀霊「おい社!ってヤバイヤバイヴァイ!!もう止めてあげて真ちゃんっ!社の肋骨はもう限界よ!!!」

地和は最初いきなり動き出した紀霊に呆気にとられていたが、必死に真を説得し司馬進を助け出そうとする姿を見て次第に笑みを零す。

地和「もう、プロデューサーったら…」

天和「あら地和ちゃん。もう一回抱きしめなくてもいいの?」

地和「姉さんっ!?!見たなの!?!」

孔融「いや、あれ見るなって方が無理だろうよ…」

人和「お姉ちゃんもプロデューサーもすっごい優しい顔してました  
!!!」

地和「くっ／＼／」

自分が紀霊にしていた事を思い出し、更には姉達見られていた事実、そしてそれをネタに弄られるであろう事を想像したのだろうか、地和は湯気が出そうなほど顔を紅潮させて俯いて小さな声を出さずしかなかった。

一方紀霊と司馬進はと言うと

紀霊「なんつーか…派手にやられたな。大丈夫か社？」

司馬進「う、顕…すまない、助かった。」

フラフラながらも紀霊の肩を借りてなんとか立ち上がる司馬進だが

紀霊「っても俺も割とフラフラなんでな、ちよいとやらせて頂くぞ。」

司馬進「へ？」

謎の言葉を発した紀霊に疑問を浮かべた司馬進だったが次の瞬間

紀霊「ほれ」

ブスリ

司馬進「あぎやあつ！？」

紀霊の指が司馬進の背中を一刺し、勿論激痛のサービス付きだ。

咄嗟に紀霊を振り払い構えを取り臨戦態勢に移る司馬進だが、そんな司馬進を見て紀霊はニヤリと微笑むだけ

司馬進「頭っ！貴様何を「まあ、待て社。体の調子はD o - D a i  
？」何が…おおっ！？」

まずは腕、そして足を動かしてみると痛みが無い。それどころか紀霊と闘う前の状態に等しく動く。

驚き戸惑う司馬進を見た紀霊は懐からタバコを取り出して吸いながら

紀霊「とある秘孔を突いた。効果はお前が体験しているとおり痛み

や疲れを消すって奴だ。」

司馬進「お前凄いな！フハハハハ！これならまだまだ闘える。恩に着るぞ頭！」

感謝の言葉を口にしつつ、高笑いしながら子供のように跳ね回る司馬進。

紀霊「いや、お前には將軍府まで同行願いたいんでな。（まあ、消すのは一時的にだから効果切れると反動でエライことになるが…傷の仕返しって事で問題ないだろ。）」

司馬進「俺はお前に負けた身。お前が行けというなら兄上の下へ行こう。」

紀霊「んじゃ行くか。っと慎、肩貸してくれ。」

おう。と答える孔融により紀霊と司馬進、そして真は三姉妹に別れを告げて將軍府へと歩み出す。目指すは司馬進の実兄司馬朗の下へ…



さてさて、兄と弟。この二人の再開が何を意味するのか…次回に期待するのでしょうかね。

孔融「フハハハハ！じゃねーよ！ー！」（後書き）

北斗は楽しいんですが、近くに北斗出来る人間が皆無という悲しい  
事実…

なので柳は行けるときは年に何回か中野TRFにバスケされに行き  
ます。

ご意見ご感想お待ちしております。

「ジョインジョインジョインキレイ100万アクセス記念作品」It is

これは100万アクセス記念作品で勿論本編とは違う世界です。

因みにこの作品、以前某携帯〇話な先生がリクエストされていたものです。

紀霊「んむ…」

微かに聞こえる小鳥の囀りと太陽光が充満する部屋の中、俺はうつすらと意識が浮き上がって朝が来たことを感じていた。

紀霊「朝か…」

徐々に体の感覚が鮮明に戻る最中、ふと左腕に温かく柔らかい違和感を感じた。…なんだ？衛姉と弥依姉か？それとも星が布団に入り込んできたか？やれやれ、起こして部屋に返さないと…

紀霊「つたく、勝手に布団入るなっ…て…の？」

目を開けて体を左側に起こしながら其処に居るであろう人物を起こそうとした俺だが…

華雄「んっ…おはよう顕／＼／」

紀霊「あっ姉者何故ここんぐっ!?!」

目の前にいたのは西涼に居るはずの姉、朝だというのに挨拶した瞬間俺の唇を奪い舌を絡ませてくる姉、更に抱きついて俺を押し倒して上に乗る嫁（予定）な姉が何故か居た。

【ジョインジョインジョインクレイ100万アクセス記念作品「It is sick Girl」】

華雄「」

紀霊「……………」

ハロー、紀霊です。…なんかこの入り方も久々な気がするが、俺は現在進行系で絶賛姉者に背中から抱きしめられております。え？何でこうなったかだって？そんなん俺が聞きてえよ…

華雄「こら頭、話を聞かぬか馬鹿者。」

紀霊「つとすまん姉者、考え事をしていた。」

華雄「考え事？頭が考えていいのは私の事だけだぞ。」

何その発想怖い。てかさつきから耳を甘噛みしたり舐めたりしないで、それくすぐつたいのよ。

紀霊「いや、そんなこと言われても…と言うか耳噛まないでくれ。」

だが俺の願いを拒否するかのように抱きしめた力を強めた姉者は吐息が感じられるほど耳元でやたらと妖艶な声を発する。

華雄「駄目だ。だが頭が私の耳を噛みたいって言うなら交代するぞ？ふふ…ほおら、お姉ちゃんの耳だぞ〜頭なら噛み放題舐め放題の好きにしていんだぞ？」

…姉者の誘惑で俺の理性がヤヴァインですがどうしたら良いんでしようか？というかこの現状がまず異常であって…

まず周囲を見渡してみると壁際に立て掛けられた金剛爆斧、本棚に所狭しと並ぶ月刊【猪突猛進】。そして久しぶりに見たけど床から飛び出る仕込み槍さん。

うん、どう見ても姉者の部屋だ。俺の部屋がこんなに危険なはずがない。

だとすれば、ここは洛陽ではなく西涼で何でか知らんがここに飛ばされた。そして今は姉者の部屋で姉者に抱きつかれているってのが

現状か：心当たりはおとやん位な物だがそれならそれで説明に出てくるだろうし…

華雄「つつ！頭！」

いきなり聞こえた姉者の声と同時に首筋に走るこそばゆくて生温かい感覚。

紀霊「ひゃへっ?!」

華雄「んっむう…れろっ。」

れろっ やびちゃびちゃ といった水音が紀霊の首筋に広がって温かい吐息が柔らかく当たる。紀霊からは見えないが、華雄は話を聞かない紀霊に腹を立てたのか首筋をゆっくりと舐め始めていたのだ。そして

華雄「ちゅっ、はむっ ころあ頭、お姉ちゃんの話の聞かない弟は御仕置きらぞあっ。」

彼女はこの仕置きを随分と気に入ったのか止める気配は毛頭ない。と言うことは勿論継続されるわけで、暴れる紀霊を押さえつけた彼女はその後、弟の首がテカテカと光る程に舐め上げた拳句数多くの

キスマークを付けたそうな…

【数十分後】

華雄「うむ、頭の反応は中々可愛かったぞ。」

紀霊「……………」（息を荒くした物言わぬ死体）

妙に肌がつやつやした華雄と無言で俯せになっている紀霊が何故かそこに居るわけで…

華雄「こら頭、ばててる暇はないぞ？今度は頭がお姉ちゃんを攻める番なんだからな。」

紀霊「し…死ぬ…。てか姉者…仕事だろ？」

元気一杯の華雄は第二Rに行こうとするが何とか回避したい紀霊は残る力を振り絞り話を逸らしてみる。と言っかこの姉弟は朝っぱらから何をしているんだらうか？

華雄「む、仕事か…」



紀霊「そうだぜ姉者。ここは西涼なら姉御や月ちゃんに挨拶もしたいしさ。後にしようよ…な？」

そう、西涼にはもう一人の嫁（予定）である張遼と嫁二人の主君で西涼太守でもある董卓が居るはず。どうして紀霊がここに居るのかはわからないが取り敢えず挨拶してなんとか帰る方法を模索しなければならぬ。勿論華雄も二人に会うことに反対するはずがないと紀霊は思っていたのだが…

華雄「霞と月様に挨拶？そんな必要ないだろ顕。」

彼女の口から出た言葉は紀霊の予想とは正反対であり更に続く言葉は彼を混乱させるには十分過ぎる威力だった。

華雄「顕は私の部屋から一步も外に出ちゃいけないんだし私以外の女と会うなんてしちゃいけないんだ。だって顕は私の弟だからお姉ちゃんである私意外を見ちゃいけないんだからな。」

紀霊「姉者っ…何を？」

華雄「だって霞も月様も顕を誘惑して私から奪うかもしれないだろう？私はそんなの嫌だ。顕が私以外の女を視界に入れるのなんて嫌だ。顕が他の女と話しているところを見るのは嫌だ。顕が私以外の

女の事を考えているだなんて認めない。それに顕の事を他の女がいやらしい視線で見ているのなんて殺意が湧いてくる…なあ、顕。顕もそんなの嫌だろう？それなら顕は頭も良いんだしどうすべきかわかるよな？」

余りにも異様で余りにも狂気的な言葉を淡々と喋り出す華雄の目は淀んだ光を妖しく放つ。そして壊れたような笑みを浮かべた彼女は紀霊に向かって徐々に近づいていき…

紀霊「落ち着け姉者！」

紀霊の中で生まれる華雄に対する違和感と恐怖心、まるで本能が彼女を避けようとしているようで華雄から距離を取ろうとする紀霊はなんとか落ち着くように話しかけるが

華雄「何故私から遠ざかるんだ顕？ほら、お姉ちゃんの胸に飛び込んで来い。な？な？」

紀霊「……だから落ち着け姉者。（不味い、姉者の様子の変過ぎる…出口は…後ろか。）」

だが、紀霊の対応は彼女にとって逆効果のようで

華雄「……なあ、頭は何で遠ざかるんだ？なんで扉の場所を確認したんだ？部屋から出たら他の女が沢山居て危険だつて言ってるだろ？……ああ、頭は出たくないのにその足が勝手に動いているんだな？わかった、そんな悪い足はお姉ちゃんが今すぐ斬つてやるから安心していいぞ。」

その言葉と共に金剛爆斧を手を伸ばす華雄。それを見た瞬間、紀霊は扉から勢い良く外に飛び出して直ぐ様駆け出す。

華雄「あはっ、あははははははは！駄目だな頭の足は。今すぐ追いついて斬つてやるから待つてろよ」

紀霊「ちいっ、悪いが今の姉者には近寄りたくないっ！！ユクゾツッ！」

金剛爆斧を振り回しながら追いかけてくる華雄を背に紀霊は北斗無想流舞を連発。距離を徐々に引き離して完全に撒いたのを見計い目の前にあつた部屋に侵入し身を隠す。

部屋に入って直ぐ紀霊を呼ぶ華雄の声が聞こえ、間一髪で逃げ切れたことに安堵した紀霊はタバコを取り出して溜息をつく。

紀霊「なんとか逃げ切れた…か。しかし姉者の様子が可笑しいだろこれ…」

着火して一吸いした俺は一時的に逃げ切れたことに安堵したの今後どうやって洛陽に帰るか考えるのに集中しすぎていたのかもしれない。

ガシャンー！

紀霊「がっ…」

何か割る音と後頭部に走った激痛、俺が覚えていたのはそれだけだった。

~~~~~

誰かに体を揺すられている感覚…また？

??「っ！起きんかい！！」

紀霊「っ！？あ、姉御！？」

張遼「お、やっと起きよつた。頭の方は大丈夫かいな？」

俺の目の前に居るのは姉御。うん、まあ姉者が居るなら姉御が居てもおかしくはないんだが…

紀霊「なんで馬乗り？」

俺に馬乗りになった状態の姉御。なんつーか良い眺めなのは良いんだが…

張遼「ええやんええやん。ほら、久しぶりの再会なんい細かい事は気にしちゃあかんて。」

紀霊「いや、まあ久しぶりだけどさ…なんで俺縛られてんの？」

両腕に両足が縛られております。どう考えても逃げ切れませんねありがとつございました。

張遼「ん〜、ほらアレや。今から色々するっちゅうんに逃げられたら馬鹿みたいやん。」

紀霊「いや、色々って何さ？」

嫌な予感しかしないんだが聞かずに入られない。例え答えが分かっ

ているとしてもだ…

張遼「何って…ナニに決まっとなんやんスケベ／＼」

そして俺の上で赤面しつつもじもじし始める姉御…うん、可愛い。
というか姉者もそうだが朝ですよ？

ツツコミを入れたいのを我慢した俺だがそんなの関係なしな姉御は
妙にエロい手つきで俺の胸やら喉やらをなぞり出す。

紀霊「うへあ…」

変な声あげちゃったけどそれすら姉御は楽しいのかクスクスと笑っ
ていたかと思えば顔を横に埋め、俺の体をぎゅっと抱きしめる。

張遼「ええなあ、可愛えなあ頭。何時の間にやらウチの身長越しと
るしええ男に成長してるっちゅうに…やっぱ可愛えなあ」

紀霊「姉御…ちよっ、撥りたいから！止めてっ、首筋吸わんとい
っ！」

久しぶりにあつた弟分兼婿（予定）の紀霊にとうとう理性が崩れた
張遼は自分の胸に紀霊の顔を埋めて頭を撫でたり、頬にキスした拳

匂、首筋やら頬つぺたにキスマークを付けるべく何度も何度も吸い付く。どうも二年と言う時間は彼女にとって弟成分（オトシウム：Oa）欠乏症にするには十分過ぎる期間だったようだ。うん、なんともエロイ。

張遼「頭と二人つきりになれるよう折角邪魔者消したんやし…ほら、ウチもええ加減頭がウチのモンやって証付けておきたいんよ。」

紀霊「証って…ん？」

ふと俺の頭の中に湧いてくる違和感。さて、姉御はなんて言った？

そこまで考えたとき、ふと部屋に少しだけ漂う臭い。その臭いは嗅いだ事のある臭い…そう彩を助けたとき山賊の拠点で嗅いだ…

紀霊「血の…臭い？」

少し鼻につく鉄分臭、その臭いの元は部屋を見渡すと直ぐに発見。その臭いの大元は…

姉御の愛刀である「飛龍偃月刀」の刃にべっとりと付着した血液。

そしてそれを見た瞬間本能が警告音をキンキンと撃ち鳴らし始める…

張遼「ああ、あれ頭が起きる前に洗い流そうと思ったんやけど後回しにしてみようた。」

紀霊「姉御…あの血は…」

俺の視線が自分の武器に行っているのに気がついた姉御は恥ずかしそうに語る。だが、そんな姉御は何時もと若干雰囲気が違うように見え、先程姉者に感じた違和感と同類のモノを俺に覚えさせる。そして、その違和感は姉御が次に放った言葉で確信に、更には俺の思考を停止させるには十分過ぎる言葉…

張遼「あれな、慧の血やねん。」

マテ、姉御八今何テ言ツタ？慧ノ血？慧ツテ姉者ノ真名ジャ…

張遼「頭の事探すのに夢中になっとなから後ろからブスってな。真正面からかち合ったらウチも苦戦しとなさかいなんとか一撃で殺せて良かったわ〜」

姉御八何テ笑ツテルノ？姉者ガ姉御ニ殺サレタ何テ嘘ダヨナ？嘘ナ
ンダヨナ？

張遼「まったく慧も慧やで、何が頭のお姉ちゃんやっちゅうねん。」

頭の姉貴はウチ一人で間に合つとるちゆうに…。ま、取り敢えず部屋に放り投げといたし暫くは大丈夫やる。ほら頭、邪魔者はもう居らんのやし…ウチとゆっくり…な。」

紀霊「あ、あ…姉御…」

両手両足ヲ幾ラ動カシテモ動ケナイ。ソナ俺ニ姉御ノ顔ガ近ツイテ来テ…

張遼「そや、頭唯一の姉。姉御やで？」

姉御ト俺ノ唇ガ重ナリ合ッテ…

ザシユツ！！

次ノ瞬間姉御ガ倒レ込ム…アア、ヨク見タラ姉御ノ背中ニ方天画戟ガ…刺ッテル？

呂布「…駄目。頭は恋のモノ…。」

其処に立つのは方天画戟を握り締め物言わぬ死体と化した張遼を感じ情のない瞳で見下す呂布。それだけ呟いた彼女は張遼の死体を投げ

捨てる。と紀霊の頬にそつと手を置く。

紀霊「れ…ん？」

呂布「うん、恋。… 顕大丈夫？」

恋ノ手、温カクテ優シイ… ケド姉御ヲ殺シタノツテ…

先程から続く衝撃の展開に紀霊は思考が麻痺しているのだろう。朦朧とした意識の中、妹弟子である呂布が其処に居ることだけは認識できたのか彼女の真名を呟いた。彼に真名を呼ばれたことが嬉しかったのか彼女は頬を赤らめ紀霊に抱きつく。と猫のように紀霊の頬をぺろぺろと舌で舐めて甘え始める。

呂布「あむっ、ぴちゃ… れろおつ。 顕… 恋の。」

紀霊「……………」

だが、紀霊は反応を返さない。いや、返せないといったほうがいいのだろう。だが、呂布はそんな兄に構わず己のやりたいことをやり続ける。

ナンデ

呂布「頭…恋だけのモノ。…大丈夫、頭の事はずっとずっと恋が守るからね…お兄ちゃん。」

ナンデコンナコトニタッタノダロウ？

最早考えることが出来なくなった紀霊は横にいる恋に見向きもせずただ天井を無表情のまま見つめるだけ。そこで紀霊の意識は途絶え、暗闇へと沈んでいった。

【何進邸・紀霊の部屋】

紀霊「……………夢…か？」

目が覚めて天井を見つめたまま力なく咳く。服は汗で動かすことが億劫になり頭痛も酷い。

コンコン

誰かが扉を叩く音が聞こえ、目だけを向ける。

皇甫嵩「頭君大丈夫？お薬持ってきたよ。」

楽就「頭様、風の調子は如何ですか？」

弥依姉に彩…か。そうか、俺は風邪ひいて寝込んでいたのか。

紀霊「ああ…まだぼーっとするし…悪い夢も見た。」

正直体を起こそうと思えない気たるさと頭痛の中、辛うじて答えた俺の枕元に二人はやってくる。弥依姉が手に持つのは桃色の粉薬。これで飲むの何回目だろ？

あれ？

皇甫嵩「さー頭君、お薬飲ますから口開けてね。」

俺、風邪ひいて何日経つんだっけ？

「楽就「ほら顕様、ちゃんとお口開けなきゃお薬飲ませれませんって。」

彩に言われるがまま口を開けた俺は粉薬特有の舌触りが口の中に広がるのを感じる。

皇甫嵩「じゃあお水飲ませるからね。」

弥依姉はそう言って自分の口に水を含んだと思ったら俺にキスをしてくる。温くとろつとした甘い水が口の中に少しずつ流れ込んでき…薬と共に嚥下する。

ああ、そついや何時もこつやつて飲まされてたな。けど、何時からこつしてもらってるんだっけな？…駄目だ考えが纏まんないや。

皇甫嵩「よく飲めました。そんな良い子にはお姉さんが添い寝してあげるからね。」

楽就「僕もご一緒しますよ顕様。大丈夫、僕たちが一緒に寝るときは【悪夢】なんて見ませんからね。」

そつ言つと二人は俺を挟むように寝転がり両側からそつと頬を撫で、耳元で囁いてくれる。なんか、二人の声聞くと安心スル…

樂就「安心してください顕様。僕と弥依さんがいれば顕様は何の心配もしなくて良いんですから…。」

皇甫嵩「そつだよ顕君。余計なことは考えないで良いから…顕君は私達二人の事だけ考えていれば良いんだよ…。」

アア、ソウナンダ…弥依姉ト彩ガ居レバ何ノ心配モ要ラナインダ…

今、紀霊の耳に響くのは皇甫嵩と樂就の声だけ、頭の中を埋め尽くすのも皇甫嵩と樂就の姿。

ソレダケヲ考エナガラ…俺ハユックリト目ヲ閉ジタ。

「ジョインジョインジョインキレイ100万アクセス記念作品」It is

リクエストされてから既に数ヶ月：元々構想は出来ており予備ネタとして執筆はちよいちよいちしてました。が丁度いいので100万アクセスの記念作品として投稿させていただきます。

因みに：星や衛姉も既に処分サレテマスヨ？

完全に本編とは違う世界ですのでご了承ください。

ご意見感想お待ちしております。

柳の独り言？（前書き）

ずいぶん遅くなりました…申し訳ありません（焦

柳の独り言？

柳です。またもや性懲りもなく柳の独り言を作成しました。前回は紀霊、孔融、司馬進、楽毅と男性キャラ四名だったので今回は女性キャラの紹介をしていこうと思います。

では一人目

【姓】：朱 【名】：雋 【字】：公偉 【真名】：衛 【性別】：女 【年齢】：24
【武力】96 【知力】74 【政治】73 【魅力】80

・御存知兵A、番外編【とある兵士の報告書（長安編）】のキャラで本編にも出演する作品を代表する人物。

・洛陽に来る前は一般の兵卒だったが何進に見いだされて武將に昇格。その後僅か六年で將軍号第三位にあたる右車騎將軍にと、とんでもない出世をした叩き上げの武將。

・コンセプトはお姉ちゃんではなくお姉さんな立ち位置で紀霊を手玉にする場面が描かれる事もある。

・ひたすらに頑丈。紀霊が全力で殴っても受けるダメージは紀霊の拳の方がデカい。岩の下敷きになるのが隕石が直撃しようが怪我など皆無。どう見てもチートです。ありがとうございました。

・内部補正として武力+15の【後漢最強の將】。投石器部隊指揮時に武力+10、知力+5、魅力+10、投石器の命中率と攻撃威力、耐久力が50%上昇する【兵A】。外的（殴打、剣での斬りつけ等）ダメージが一定以下なら無効、一定以上（呂布の攻撃全般、

紀霊の北斗千手殺、司馬進の極星十字拳、孔融の南斗千首龍撃等）なら90%軽減。内的（紀霊の秘孔等）ダメージを25〜75%軽減する【鋼の肉体】がある。

・紀霊の【経験10倍】も十分チートな筈なのだが上記の補正を見れば如何に彼女がチートかお分かり頂けただろうか？

・実は紀霊がチート化するのを阻止する目的で兵A Bは作られませんでした。それに兵Aなら納得出来る気がしたから。

・3サイズは上から80・57・81。スレンダー系で美脚なお姉さん。

使用武器：【双鬼斬^{そごうざん}】 部類：【双剣】

・元々は善宗先生が執筆されている作品「ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士」の主人公ジンキが使用していた武器を先生の御好意により使用。多分切れ味ゲージ白です。刃こぼれ？なにそれおいしいの？

・通常の攻撃範囲は短いものの素早い攻撃と手数で圧倒できるモンスターハンターでもお馴染みな双剣ですが、朱雋は某赤い弓兵ばりの投擲を見せてくれる。因みに孔融と皇甫嵩の改造により剣と腕輪が特殊鉄線でつながっているため投げても即座に回収できる。射程は孔融と同じく10m、しかし最近射程を伸ばすべく孔融が研究・開発をしているので伸びる可能性大。

各キャラクター相性表（本人対OO（? : ?）で表示します。）

対皇甫嵩（5 : 5）相方である兵Bとはそもそも勝負しない。多分勝敗は神経衰弱で決まる。ガチで戦ったら朱雋が勝つのは目に見えてわかりますねw

対呂布（6 : 4）流石の朱雋も呂布の攻撃は無効化できません。け

ど軽減は出来るのでガンガン斬り付ければ良いでしょう。

対紀霊（8：2）無効化出来ない攻撃と主人公故の補正、そして経絡秘孔に気を付けければ勝つる。けど下痢誘発の秘孔突かれたら諦めよう。

対孔融（9：1）イジメ良くない！というのは冗談で南斗聖拳が当たると痛い。フーかムテキングされなきゃ勝てるんでね？

対司馬進（8：2）此方の攻撃が回避されやすいので如何に捕まえるかが勝負の鍵。というか捕まえれば双鬼斬で足を固定し試合終了。司馬進のHPゲージがゴリゴリ削れていくのを見ながら小パン連打しよう。

【姓】：皇甫 【名】：嵩 【字】：義真 【真名】：弥依

【性別】：女 【年齢】：23

【武力】70 【知力】84 【政治】83 【魅力】95

・兵A BコンビがBの方。武力寄りの朱駿とは逆に知力や政治寄りのステータスになっている。

・朱駿の相方にして後輩。良くも悪くも二人で何かするときには紀霊が頭を抱える事間違いない。

・内部補正としては投石器部隊指揮時に武力+5、知力5に加え投石器の機動力、射程距離が50%上昇する上に常時発動する投石器の開発コスト25%軽減、開発速度50%上昇の【兵B】。朱駿同様防御チートの【鋼の肉体】がある。あと隠し補正として【開発・実験】がありたまに発動する。番外編で紀霊の精神を壊した薬等・ちなみに真名の弥依は弥依とも読むことができます。けどあからさまだったので「やい」に決定。

・3サイズは上から95・59・88。∴温泉とかの話作ったら孔融が泣いて喜ぶだろうなw

各キャラクター相性表（本人対〇〇（? : ? ?）で表示します。）

弥依はストライカー召喚型です。

召喚できる援軍

・朱儁：相手を双剣で簡易版【キリサケツ（8hit）】してくれます。尚、登場時は空から降ってくる。

・紀霊：相手の斜め上空に【ナギツ】で出現した紀霊が【北斗千手殺（6hit）】を出します。連発するとナギツって攻撃をキャンセルし、再度北斗千手殺を出します。

尚、援軍の紀霊は通常必殺で連射可能なため司馬進辺を固めると偉いことに…

・孔融：いきなり突進してきたかと思ったら南斗迫破斬で相手を上空に打ち上げます。相手から攻撃を受けると叫びながら吹っ飛んでいきます。

・何進：相手の攻撃を何進（盾）を使って防ぎます。発動したらなんか悲鳴あげますが気にせず使いまくりましょう。ユダのダガキャンと同様の効果があります。

ダガキャン：ユダが自分の部下を盾にして相手の攻撃を防ぐ技。
ガードキャンセルと同様、ガード時の硬直を無くす効果を持つためダガキャンと呼ばれる。

対朱儁（5：5）最早何も言うまい。

対呂布（4：6）攻撃の軽減は可能だけど此方の武力が低いので押され気味。援軍を呼ぼう。

対紀霊（4：6）秘孔の効果が地味に痛い。ていうか紀霊もいろいろな意味で戦い辛い相手なのでしょうがない。（胸的な意味ではない）

対孔融（5：5）そもそも巨乳な姉を正義と語る孔融が彼女を傷つけられるのだろうか？多分兵器開発勝負して勝敗決める。その後予

算無駄使いしたのが紀霊にバレて二人とも御仕置きですわかりません。

対司馬進（7：3）制圧力のある司馬進の攻撃に耐えて援軍を繰り返せば有利。けど司馬進だと星取り能力が高いので呼ぶ動作中に…。逆に紀霊を援軍召喚すれば司馬進に出来ることは座ってガードするのみ。イイゲームだなー。

【姓】：楽 【名】：就 【字】：子玲 【真名】：彩 【性別】：楽就 【年齢】：14
【武力】61 【知力】58 【政治】54 【魅力】100

・紀霊の部下である星彩コンビが一人、この作品随一の魅力（色んな意味で）を持つキャラクターであるものの若干影が薄い。というか他が濃すぎる。

・元々の案では趙雲は部下にならず楽就のみが紀霊の部下になる予定でした。けど趙雲があんな感じになったので今に至る。まったく誰だよこんなことしたの…

・現在最も女の子していると思われる。趙雲の女の子らしさが楽就にいったためこうなったと言う説も…

・もしこの作品で18禁な小説を別サイトに掲載しろ。と言われたら真っ先に思いつくのが楽就メイン。実は番外編で書こうと思ってる温泉編の裏ストーリーがコレに当たるが投稿する機会は無いと思われる。そもそも草案しか出来てない短編だからねーw

・内部補正としてはオールステータス+3の【器用貧乏】。人材登用成功率上昇、魅力+35に加え兵士の士気が急上昇する【男の娘】、能力値上昇率が+20%される【センス〇】等がある。他の潜在能力は隠し補正です。

・柳としては華雄、呂布、張遼の3トップに匹敵する可愛さを持つ
と思う。そもそもこの作品の3トップが強すぎるような…

武器：現在は普通に剣を装備。孔融の発明で…鞭とか持たせてみる
か？w

各キャラクター相性表（本人対〇〇（？：？）で表示します。）

対朱儁（1：9）…頑張れ彩！超頑張れっ！！

対皇甫嵩（2：8）なんとなく戦わずにお茶してそう…楽就がペチ
ペチ攻撃してるのに平然とする皇甫嵩が微笑ましい。

対呂布（1：9）取り敢えず「にげる」を押しそう。

対紀霊（1：9）稽古だからしょうがない。稽古終了後は一緒に御
風呂ですね、いつか書きたいです。

対孔融（4：6）おっかなびっくりギミックに注意すれば頑張れる。
どうしようもなくなったら助けを呼ぼう、司馬朗か紀霊が即座に駆
けつきます。

対趙雲（3：7）…槍のリーチって卑怯だね。それに趙雲さん紀
霊以外には割とsだから…勝つのは苦労します。それと、息を荒ら
げて闘う楽就を怪しい目をした司馬朗が隠れて取材（笑）してるん
で紀霊か司馬進に排除してもらおう。

さて、女性オリジナルキャラの紹介はこんなもんかな。

それでは今回はここまで、次回をお楽しみに^^

柳の独り言？（後書き）

ご意見感想及びご質問お待ちしております。

【蝶・鳳・孤】爆誕！！（前書き）

久しぶりの投稿：

番外編で御座います。割と今回暴走気味ですので……ご了承ください。

【蝶・鳳・孤】爆誕！！

【將軍府・廊下】

紀靈「〜」

珍しく何事もなく仕事を終えた俺は気分良く廊下を歩く。ああ、衛姉達が出来なかつたし変な書簡も来てないってなんといい幸せ…。まあ、そんなこんなで機嫌の良い俺が飯でも食いに出かけようかと移動していた訳だが

楽就「えいつ！やあああつ！！」

何故か広間で一人剣を振るい鍛錬を行う彩を見つけた。彩の奴、確か午後から警邏の指揮だったよな？頑張るのはいいが飛ばしすぎでね？

少々心配に思った紀靈は楽就へと歩み寄る。楽就も楽就で紀靈が近づいて来たのに気がついたのか、剣を収めると紀靈に向かい一礼する。

紀靈「お疲れ彩。随分と熱心だな…けど午後から警邏だろ？張り切りすぎていざというとき動けないってんじゃない話にならんぞ？」

樂就「は、はい…しかしあの人達に勝つには…」

紀靈「あの人達？何かあったのか？」

樂就「実は…捕まえたい人達が居るんです。」

~~~~~  
ジョインジョインジョインキレイ番外編 【蝶・鳳・孤】爆  
誕！~~~~~

### 【洛陽・市場通り】

あいも変わらず多数の人が行き交う市場通り、その市場通りで俺と彩は五名の兵士を引き連れて警邏の任務を遂行中だ。え、何で俺まで一緒に来てるかって？まあ、今から説明するんで安心してくれ。

紀靈「んで、その野郎どもが出没するのってここらへんか？」

樂就「はい、モヒカンさん達が騒ぎを起こしたときに大体出沒す  
ヒヤッハー！」

紀霊「…モヒカンが出たな。」

楽就「はい、しかも暴れ始めましたね。」

なんつー空気読めるっていうかタイミングが良いっていうか…しかも久しぶりの登場、モヒカンとモヒパンことモヒコンビじゃねーかあれ…若頭まで居るとかだったら俺逃げるぞ？

モヒカン「おっ、この野菜中々新鮮じゃねーか。全部頂いていくぜえ〜！！」

商人「ああ、売り物になんてことを…」

モヒカン「安心しろや、代金なら兄貴が体にちゃん払ってくれからよ。兄貴、お願いしますぜ。」

モヒカンの言葉を合図にいつの間にか商人の背後に立っていたモヒパンが商人の肩をがっしり掴む。

モヒパン「あぁん、最近だらしねえな？」

そして嫌がる商人のおっさんを店の裏側へと連れていこうと引きずり出す。勿論商人のおっさんは顔を青くして必死に抵抗するわけで

商人「ひいいいっ!? お、お止めください!!」

しかし筋肉隆々としたモヒパンと細身の商人では力の差は歴然。徐々に徐々に人通りの少ない店の裏側へと引きずり込まれて行く。つかモヒパン、お前喋れたんだ:

まあ、警邏に來ている俺が呆れて見逃す訳にもいかないので周囲に若頭が居ないことを確認し、商人の主に後ろの貞操を助けに行こうとした時、不意に上空から女の叫び声が周囲に響きわたった。

??「まてーい!!」

モヒカン「だつ誰だてめえら!!」

不意に響きわたった女の声、そして民家の上に立っている三人組。おそらくはその三人組が:

??「日々を必死に生きる罪もない人々の後ろ貞操を危険に陥れる…大いに結構!」

紀霊「いや、よくなーよ!!」

太陽の逆光で顔までは見えないが、つつい謎の女にツッコミを入れる俺。しかし他の二人が叫ぶことで展開は強制的に進行していく。

??「されど我らがある限り、貴様らドブネズミに明日を生きる資格は無い!!」

??「他人の迷惑顧みず、やってきました俺達三人！」

紀霊「って何なんだアレ？」

楽就「頭様、あの三人です!!」

予想通りというか何というか…屋根の上でなにやら喋る三人組、彩曰く彼らこそが洛陽の市場通りに出没してはモヒカンどもを散々に殴り飛ばして去っていく正義の迷惑集団。

華蝶仮面「我こそは槍の使徒、マスク・ド・バビヨン華蝶仮面!!」

最初に名乗りを上げたのは槍を振りかざし顔に蝶の模した仮面を着けた女、そして次は

鳳凰仮面「ふはははは！我こそは羽の使徒、マスク・ド・フェニックス 鳳凰仮面！！！」

顔に鳳凰らしき鳥を模した仮面を装着した男が高笑いしながら両手を広げ、十字の構えを取る。そして最後は

孤鷲仮面「遅れてきたナイスガイ！俺こそ爪の使徒、マスク・ド・イーグル 孤鷲仮面！！！」

爪を上空に射出しながら高らかに叫ぶ鷲を模した仮面を着けた男：

華蝶仮面「力をもって力を制し」

鳳凰仮面「洛陽の平和と少しばかりの混沌を守る」

孤鷲仮面「洛陽限定正義の味方！」

三仮面「我ら、仮面武闘会！！」

名乗り終えた瞬間、華蝶仮面を中心にそれぞれ思い思いのポーズを取る仮面武闘会。ポーズに統一感は一切無でありなんと締めまらない空気を醸し出す彼ら三人だが、

市民1「キヤーカチョーカメーン！」

市民2「イーグル来た！これで勝つる！！」

真「くうーっ！やっぱりフェニックスは格好いいや！頑張れー！！」

周囲にいた洛陽市民の皆様はそれぞれが応援する仮面戦士に手を振ったり黄色い声援を送ったりしているところを見ると意外と人気が高いようだ。あーもう、頭痛い…

仮面武闘会「喰らえ必殺…【困んで殴る】！！」

モヒカン「畜生めええええっ！！」

モヒパン「おっぱいのペラペラソース！！」

そして三人に囲まれてタコ殴りにされたモヒコンビはそのまま気絶。まあ、後でコンビは捕縛するとしてだ、俺は勝利のポーズをバラバラに取る三人に向かい一言

紀霊「お前ら…馬鹿だろ？」

と一言だけ投げつける。もう読者さんならわかりますよね？読者さん、三馬鹿ですよ三馬鹿！

華蝶仮面「初対面の我々をいきなり馬鹿呼ばわりするとは無礼な方ですな。」

紀霊「黙れ変態仮面。つーか彩、こいつらは「出たな仮面武闘会！今日こそは捕まえてみせるぞ！！」「えー……」

見れば剣を抜いて三人を睨んだ彩が俺の横に居るんですが、俺はどうすれば良いんでしょうか？本っ当、彩ハテンネンダー……

孤鷲仮面「おつ、警邏の可愛い隊長さんじゃないの。何？今日は助っ人に彼氏でも連れてきたの？」

楽就「かつ彼氏！？顔様はそんなんじゃない……／／／」

俺を見るや孤鷲仮面はニヤニヤ顔で彩をからかう素振りを見せる。奴の顔は……（・・）ニヤニヤ そうそうこんな感じ。正直殴りたい。



鳳凰仮面「ふんっ、…華蝶、孤鷲、我らの目的は達した今あの二人と戦う意味はない。引き上げるぞ！」

鳳凰仮面の合図と共に跳躍して裏路地へと姿を消した三仮面。そして数十秒後、空へと三つの物体が飛びだって行った。

鳳凰仮面「ふははははは！さらばだ市民共、天空の鳳凰は落ちぬ！」

孤鷲仮面「よっと、伸びろ孤手甲！皆、助けを借りたい時は時間を見て呼んでくれ！」

華蝶仮面「我らの名前を天高く叫べ！さすれば我ら、可能な限り駆け付けようぞ！！」

とか言いながらばらばらの方向に飛んでいく仮面武闘会の面々、恐らく衛姉と弥依姉が洛陽に多数設置した投石器のどれかに乗って飛んだんだろう。さて、思ったんだけど…彼奴ら正体隠す気ないだろ？社は何時もの高笑い普通にしてるし憤は憤で孤手甲でスパイダーマな移動してるし…気付くよね？普通気付くよね？特に真ちゃん、君は気付かなきゃ駄目なんじゃ…ってそーいや彩放ったらかかったな。

紀霊「おーい彩…彩？」

取り敢えず彩に声をかけた俺だが、

樂就「でっですから…僕と顯様は彼氏彼女な関係なんかじゃ無くて…いえ、別に彼氏だと思われるのはそれはそれで好都合…じゃなかった！あーもう、そう！そうだ！犬です！！僕は顯様の犬なんです！！だから彼氏なんか「彩ー、お手。」わん」

色々と危なそうなことを呟いていた彩を止めるべく、目の前に手を置いて簡単な魔法の言葉を呟いてみせる。実はこの言葉、意外と効果覲面で稽古中気絶した時や今みたいに自分の世界に入った彩を現実世界に引き戻してくれる便利なキーワードだ。因みにこの言葉、変態仮面こと星にすると縄と鞭、それに首輪まで用意してきやがる。まあ、勿論無視するけどね。

それに比べて彩は素直に戻ってきてくれるし、普段から真面目ない子だよ本当…よし、撫でよう。

紀靈「よーしよし良い子良い子。」

ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ

樂就「はうう……………くう／＼／／／」

撫でる紀霊に撫でられる楽就、なんとさえいいかわからない二人の空間を見た兵士達は

兵士1「ハアハア…紀霊様なんて羨ま…もとい羨ましい！」

兵士2「お、俺もう…鼻から楽就様への愛が…貧血起こしそうだ…」

兵士3「ば、馬鹿野郎っ、ここで死んだら…ここで死んだらっ！へっ、閻魔に良い土産話が出来るじゃねえか…」

兵士4「ここで死んだら…悔いはねえなあ…」

兵士5「楽就様頼むっ！俺と変わってくれ！！」

兵士1〜4「え？お前そっち！？」

皆一様に紳士のように、二人が作り出す空間を壊すような真似はせずそつと見守るだけである。彼らは本当に…どうしようも無いくらい紳士であったのだ…

紀霊「お前らー、阿呆な事やってないで帰るぞ。」

【蝶・鳳・孤】爆誕！！（後書き）

柳の暴走はまだまだ止まらない…かもしれないw

ご意見感想お待ちしております。

**番外編【編羅登場！】（前書き）**

暴走の番外編続編です。

ちなみに仮面戦士ネタは感想欄で星がマスク・ド・バタフライと書かれていたのから思いついたネタ。  
書いたことに後悔は無い（キリッ

## 番外編【蝙蝠登場！】

【????】

とある屋敷の一室に四人の人影が有る。その四人は其々が動物を模した仮面を装着し、傍から見れば異様すぎる空間を作り上げている中、三人の視線が一人の男に集中していた。

男に視線を集める三人は洛陽の平和を守る【仮面武闘会】の面々、そして視線を集める男は蝙蝠を模した仮面を着けて崩れることない笑顔を浮かべている。

????「そうですか、昨日の件で大將軍副官殿と遭遇しましたか？  
彼が介入するとなれば少しばかり厄介ですね。」

鳳凰仮面「そのとおりだ、警邏隊長とその部下なら簡単にあしらえるが、頭となれば話は別だ……」

孤鷲仮面「奴の事だ、自分の仕事増えるってなれば……」

????「貴方達の活動を邪魔するために動く。と言うわけですか？」

男の言う言葉に鳳凰、孤鷲の二人は同時に頷く。どうも仮面武闘会の面々は共通に紀霊のことを知っているようで、彼が障害になる可能性を恐れた仮面武闘会とはある仮面戦士を呼んで対策会議を開い

ていたようだった。

華蝶仮面「主なら動くでしょうな。だからこそ貴殿：いや、蝙蝠仮面殿にも動いて欲しいのです。」

部屋にある布団に寝そべり枕を抱きしめた華蝶仮面は蝙蝠仮面と呼ばれた男を目だけで見つめ言い放つ。蝙蝠仮面と呼ばれた男はその姿にやれやれと溜息を吐きながら口を開く。

蝙蝠仮面「承知してますよ華蝶仮面、マスク・ド・エージェント蝙蝠仮面の名に賭けて彼の動向を調査しておきましょう。ま、その分報酬も頂きますがね。」

華蝶仮面「ふっ、ではこれが報酬だ。」

そう言っつて蝙蝠仮面へと何かが含まれた袋を放り投げる。受け取った蝙蝠仮面が中を開いてみると…

蝙蝠仮面「ほう、これは…女性物の下着ですか。」

小さなりボンが一つ着いたシンプルな女性下着が一枚、華蝶仮面の言っつとおりだとこれが報酬になるのだが…

華蝶仮面「以前拙者が彩殿の部屋に戯れで未使用のものを何枚か忍ばせておいたものでしてな…その内の一枚でござる。」

蝙蝠仮面「貴女も悪いお人ですね…ですが、僕のやる気を引き出すには十分すぎる報酬です。」

その言葉通り蝙蝠仮面の瞳はキラキラと光り、体からは闘気が溢れ出ている。

華蝶仮面「しかし、彼女がそれを履いた。という確証は御座らん。」

蝙蝠仮面「ふふふ…ふははははっは！履いたか履いてないか分からない。ですか、それはそれで夢のある話です。これは同志達と共に宝として扱わせていただきます。」

仮面武闘会に何時もと変わらぬ笑顔を見せながら華蝶から渡された包みを懐に仕舞う蝙蝠仮面。そんな蝙蝠仮面を見る鳳凰は呆れたようにぼそりと呟く。

鳳凰仮面「俺としては宝になんぞして欲しくはないんだがな兄上…」

孤鷲仮面「いや、もう手遅れでね？つーかそろそろ出ないと不味いだろ。頭にバシたら秘孔フルコースされかねんぞ？」



蝙蝠仮面「孤鷲仮面の言うとおりです。というか僕も何進將軍邸までは予想してましたが、まさか頭君の部屋で会議するとは思ってませんでしたよ。」

華蝶仮面「最近主が構ってくれないものでしてな…主の布団目当てでついついやり申した。後悔はござらん。」

そう、実は仮面武闘会と蝙蝠仮面が居るのは何進邸の紀霊の寝所。灯台もと暗しにも程があるような気がするが今の彼等にそんなことを問うても意味がないような気がする…

鳳凰仮面「ふん、頭も変な奴に好かれるものだ。真のレッスンがあるので俺は失礼する。」

孤鷲仮面「やべっ、天和さんから買物誘われてたんだっ…待ち合わせあるから俺も行くわ。」

それだけ言うと鳳凰仮面と孤鷲仮面は窓から飛び出て庭にある投石器に乗ると空へと飛んでいった。

華蝶仮面「拙者もそろそろメンマの仕込みをせねば…それでは蝙蝠仮面殿、失礼する。」

蝙蝠仮面に一礼した華蝶仮面は天井へと跳躍、そして天井に空いた穴へと吸い込まれるとカタンと穴を塞ぐ音だけが部屋に残る。

仮面武闘会の三人が出ていった紀霊の部屋の中、一人残った蝙蝠仮面は部屋の戸締りを確認した上で小さく呟く。

蝙蝠仮面「やれやれ、皇甫嵩將軍と愼が改造したとはいえ…彼等はもう少しともな退室が出来ないのでしょうか？つと僕もそろそろ御暇しましょう。」

蝙蝠仮面はしゃがみこみ、床を拳で数回叩く。すると床の一部が盛り上がり、人一人通れるほどの階段が姿を現れて蝙蝠仮面はその中に消えていった。

### 【將軍府・紀霊の執務室】

俺が仮面武闘会の存在を知ってから三日、その間彩は仮面武闘会を捕まえるべく洛陽を駆けずり回る日々なのだが…敵も敵でそう簡単に捕まるような奴等じゃない。そして今日も…

紀霊「…行くのか？」

楽就「はい。今日こそ捕まえてみせます!!」

皇甫嵩「大丈夫だよ彩ちゃん。こんなに頑張ってる彩ちゃんなら絶対捕まえられるよ!」

今日こそは!!と意気込む彩は俺と弥依姉に一礼すると部屋を出ていく。その後ろ姿を見送ったあと横目で机に積まれた数本の書簡を見やる。内容は仮面武闘会に関する報告書や提案書。まあ、予想通り俺の仕事が増えたわけで…

紀霊「まだ数が少ないのが救いだが…このまま野放しって訳にもいかんだろうな。弥依姉、どうすりゃいいと思う?」

皇甫嵩「ん〜、顕君も仮面戦士になっちゃえばいいんじゃない?」

紀霊「あんな仮面どこで手に入れろって」はい、どうぞ。「弥依姉!?!これって…」

弥依姉が胸の谷間から取り出したソレ。明らかに胸の谷間に収まる質量じゃないがこの際それは無視するとしてだ…机の上に置かれたソレは俺の視線を釘付けにするには十分な代物だった。

皇甫嵩「んっふふっ さあ、顕君もこれを付けねば【仮面戦士】になれますよ。さあ、彩ちゃんを救う英雄になっちゃおうよ。」

【洛陽・市場通り】

鳳凰仮面「南斗爆星波！」

モヒカン「ホップ！！」

孤鷲仮面「南斗獄屠拳！」

モヒパン「ステップ！！」

華蝶仮面「神影流奥義・八寸！」

若頭「スキツポアツ！？」

お約束。とばかりに暴れていたモヒカン御一行を叩きのめし投げ捨てた仮面武闘会は勝利のポーズを取ろうとしたとき…

楽就「待て仮面武闘会！今日こそ神妙にお縄につくんだ！！」

鳳凰仮面「む、来たか。」

孤鷲仮面「あーら、警邏の隊長さん。今日は彼氏一緒「だっ、だから彼氏なんかじゃ有りません！！」赤くなっちゃって可愛いね！。」

三日前から言われ続けた軽口だが楽就の顔を赤くするには十分な言葉、だが

楽就「今日こそは…今日こそは捕まえてみせる！！」

以前のように動じずしつかりと仮面武闘会を睨みつける楽就と追従するように剣を抜いて構える兵士達。

華蝶仮面「…本来ならば引き上げるところだが、鳳凰、孤鷲よ相手してやるのも悪くはあるまい。」

孤鷲仮面「んじゃほいつとな。」

華蝶仮面の言葉に孤鷲仮面は兵士達の前に躍り出たかと思うと即座に孤手甲で殴り飛ばす。いきなりの事で反応できない兵士たちは勿

論吹き飛ばされ、立っているのは楽就一人だけという状況だ。

鳳凰仮面「これで三対一か。せいぜい楽しませてもらうとしようか  
隊長殿？」

楽就「っ!？」

楽就を囲むようにじりじりと距離を詰める仮面戦士達。しかしその  
包囲網は上空から来たモノによって崩されることになる。

鳳凰仮面「む？孤鷲っ!!上から来るぞ、気を付けろ!!」

孤鷲仮面「へ？矢あああああぁっ!？」

鳳凰仮面の叫びに空を見上げた孤鷲仮面だが、自分目掛けて飛んで  
くる一本の矢に驚き叫ぶ。しかし、身を振りなんとか頬に掠らす程  
度に収めるところは流石仮面戦士といったところだろうか。

孤鷲仮面「あ、危ねー。マスクが無ければ即死だったぜ…。っーか  
誰だ！不意打ちとか卑怯にも程があるだろうが!!」

???「はんっ、一人に対して三人で囲もつとしてた奴等が何言っ

てやがる。」

急に空から聞こえてきた声、そして次の瞬間

ドスン！！

仮面武闘会の後方に大きな衝撃と巻き上がる砂煙。落ちてきた何かに警戒し、構える仮面戦士達の目の前で徐々に砂煙が晴れていく。そして現れた男に三人の仮面戦士と楽就は驚きを隠せなかった。

その男の上半身は胸に横一文字に裂けた傷が目立つ裸に鎖骨部分を守るよう取り付けられた無数の刺とノースリーブが特徴的な紫色のジャケット。下半身は同じく紫色の入った丈夫そうな布地にジャケットと同じく後ろ側に棘の着いた脚絆と革製の長靴。腕には手甲、そして手には先程の矢を放ったと思われる弩を握りしめている。このような異形な出で立ちだが、それ以上に人の目を集めるのが

楽就「仮…面？」

顔どころか頭全体をすっぽりと包こみ、鈍い光沢を出す黒い兜。いや、現代風に言うならばアメフトのヘルメットに近い形をした仮面。

いきなり現れた謎の仮面戦士に驚く楽就や市民。だが、仮面武闘会

と謎の仮面戦士の会話により彼が何者かを知ることになる。

華蝶仮面「我らと同じ仮面戦士だと…!?!?」

鳳凰仮面「馬鹿なっ、仮面戦士は我らともう一人の4人だけではないかっただのか!?!?」

謎の仮面戦士「おい、手前等…!」

動揺する鳳凰達を睨みつけながら謎の仮面戦士は両手でジャケットを広げ、胸の傷を見せるようなポーズを取って叫ぶ。

謎の仮面戦士「俺の名前を言ってみろお!?!」

孤鷲仮面「まさか奴は…いや、間違いない…!」

同様を各せず戸惑う鳳凰仮面、華蝶仮面を余所に、孤鷲仮面だけは何かを知っているのか齒軋りをしながらボソリと呟く。

鳳凰仮面「知っているのか孤鷲!?!?」

孤鷲仮面「俺が知っている限り封印されし仮面は八つ…その内四つ



【華蝶】、【鳳凰】、【孤鷲】、【蝙蝠】は俺が持ち出したが…もし奴等が残りの封印を解いたとすれば…奴は俺達と同じ仮面戦士だ。あ、ちなみに出典は民明書房ね。」

鳳凰仮面「…その情報は本当に信用していいのか？」

だが、謎の仮面戦士は孤鷲仮面の説明を聞いてニヤリと笑い仮面武闘会へと口を開く。

謎の仮面戦士「民明書房の件は知らんが孤鷲仮面の言うとおりだ。拳の使徒、マスク・ド・ラカン羅漢仮面たあ俺様の事よ!!」

楽就「羅漢…仮面？あの傷って…」

### 【羅漢仮面 side】

さて、上手く乱入できたのは良いが…流石は弥依姉の用意した装備だけあった使いやすいな。しかし仮面だけじゃなく衣装まで用意できるとか弥依姉マジオ女…

鳳凰仮面「羅漢仮面…何故同じ仮面戦士が我らに敵対する？」

羅漢仮面「色々派手に暴れまわってる大馬鹿野郎どもぶちのめしてやろうと思ってな…」

彩の様子見てたし俺の仕事減らすためにも敵対するのは分かりきったことだろうよ。さて、先ずは彩を救うか。

羅漢仮面「ユクゾツ！」

華蝶仮面「なっ!？」

北斗夢想流舞を駆使して一気に彩まで距離を詰めて抱き上げる。

羅漢仮面「よう、無事か隊長さん？」

樂就「え?あ、はい…(この声…それに)」

よし、一度逃げて体制を立て直せば…

孤鷲仮面「瞬間移動だあ!?!おいおいそんな非常識な事できる奴なんざいな…居たよそっいゃ…」

鳳凰仮面「ああ、確かに居るな。しかし…縮地の使い手が洛陽に二人居るとは…」

いや、気づけよお前等。つーか「ナギツ」で移動できる奴がそこらへんにホイホイいてたまるかよ！何その存在がバグの大量発生？泣くよ？泣いちゃうよ俺？

市民1「警邏隊長の楽就様を人質にとるとか…汚い、流石羅漢仮面汚い。」

市民2「羅漢仮面…一体何者なんだ？」

真「待ってて下さいね楽就さん、直ぐに鳳凰が助けに来てくれますから安心して下さい！いけっ鳳凰！君に決めた！！」

羅漢仮面「ちよ、待て。なんでそうなる！？」

その警邏隊長困んで虐めようとしてた奴等が目の前にいるよね？何で俺悪役的な扱いなよ！？

華蝶仮面「おのれ羅漢め！か弱き隊長を盾にするとは…鳳凰、孤鷲

！正義の鉄槌を奴に！！」

鳳凰&孤鷲「応！！」

華蝶仮面に応じた二人は即座に羅漢へ飛びかかる。

鳳凰仮面「極星十字拳！！」

孤鷲仮面「南斗千首龍撃！！」

羅漢仮面「ちいっ！（一人でも手こずる相手だったのに……）」

即座に商店の屋根へと飛び乗りそのまま走り出す。しかしそんな紀れ…間違った。しかしそんな羅漢仮面を見ていた兵士達は大きな声で叫び始める。

兵士1「楽就様が攫われた！」

兵士2「殺せ！奴を殺して助け出せ！！」

兵士3「応、殺してでも奪い取る！！」

兵士4「兵士5、急ぎ皆に連絡を!!」

兵士5「承知した！ 紀霊様ーっ！！俺だー！！極彩色に染めてくれー！！」

仲間を呼ぶよう言われた兵士5が空に向かって大声を張り上げた数秒後、洛陽のあちこちから黒い塊が兵士達の元へと飛来してくると思ったら次々と着陸し整列し始める。

楽就親衛隊＋蝙蝠仮面「極彩色と聞いて飛んできました。楽就様は無事か!？」

兵士1～4「何故その台詞で来る!？」

そうしている間にも次々と飛んできて五十人程に増えた楽就親衛隊の兵士と羅漢仮面追跡の指揮を執る蝙蝠仮面、そして華蝶、鳳凰、孤鷺の三仮面が追ってくるのを確認した羅漢仮面は屋根の上を走りながら呆れ口調で口を開く。

羅漢仮面「…洛陽守備隊の訓練、見直したほうがいいかな？」

樂就「あははは…僕もそう思いますよ頭様。」

その呟きに苦笑しながら同意を口にする樂就は羅漢仮面改め正体である紀霊の真名を呼ぶ。

羅漢仮面「あ、やっぱりばれてた？」

樂就「胸の傷で…それに」

一度深呼吸した樂就はそのまま紀霊の胸へと頭を預けて笑顔のまま目を閉じる。

樂就「犬がご主人様の匂い忘れるわけ無いじゃないですか」

番外編【蝙蝠登場！】おわり。

**番外編【編羅登場！】（後書き）**

このネタは取り敢えず終わりですw

今回は本編の更新を頑張りたいと思います。

それと、ちょっとした疑問です。読者様方にとってこの作品【〜ジ  
ヨインジヨインジヨインキレイ〜】の顔！とも言えるキャラって誰  
なのでしょうか？

ご意見ご感想お待ちしております。

再開、そして河北へ（前書き）

友人「個人的には瑞希いち押しだね。やはり明久の彼女は瑞希が本命だ。」

柳「瑞希？悪いがそんな脇役に用は無い。秀吉こそが明久のメインヒロインだろ常識的に考えて！」

友人「だから秀吉は男だろうが！！」

柳「だから良いんだろうが！そもそも明久に危害加えないのが最重要だろ…秀吉ーっ！俺だあーっ！明久を幸せにしてやってくれーっ！！」

友人「駄目だコイツ…巨乳よりも男の娘を選ぶとは…」

~~~~~そんな柳と友人の「バカとテストと召還獣」談話な日常~~~~~

先週は急用で更新出来ないどころかログインすら出来ませんでした…更新をお待ちいただいていた読者の方々、申し訳ありません。

再開、そして河北へ

【將軍府】

ども、紀靈です。いやまあ、社連れて將軍府に戻ってきたは良いんだが…

司馬朗「いやはや、弟探しを紀靈殿に依頼しに来たら貴女のような可憐な方に出逢えるとは…運命に感謝しなければいけませんね。」

樂就「あ、ええと…ありがとうございます？」

司馬朗「そうだ、互いを良く知るためにも今宵御一緒に食事でも如何でしょうか？」

何故か彩を口説き落とし中の恥知らずな依頼主が居た。そして依頼主から見つけて来るよう言われた対象は…

司馬進「その飄々としてつっ面妖な雰囲気…ティンときた！貴殿！俺と共に天下一のアイドルを目指してみないか？」

趙雲「ほう、拙者に目を付けるとはなかなかの慧眼をお持ちなよう…だが拙者、主の忠実な犬でしてな。主意外に靡く考えは毛頭御

座らん。」

露骨に星をアイドルにスカウトしようと説得中なんだが…流石は兄弟。要らんとところで似てるとかどうしろと？

慎は呆れてどっか行っちゃうし、おっちゃんはおっちゃんて俺の傷見て慌てふためいてるし…

取り敢えず俺が今出来る事は…

紀霊「真ちゃん、社の方は頼んだ。」

真「任せてください紀霊さん。」

社の関節を痛めつけんとばかりに準備運動している真ちゃんに話し掛ける位なものだった。

~~~~司馬兄弟絶賛受刑中~~~~

司馬朗「……………社。」

司馬進「……………兄上。」

司馬兄弟が互いに向かい合い久しぶりの兄弟再会。六年ぶりの再会だから積もる話も有るだろうと距離を取って様子を見る紀霊達。互いを呼び合う兄弟だが次に出た言葉は

司馬朗「あの関節技の応酬受けてよく立って居られますね…」

司馬進「兄上こそ頭に攻撃されてよく生きてるな…人が鞠みたいに弾むところを見たのは初めてだ。」

お互いが紀霊と真の攻撃により満身創痍であることの話。

紀霊「ゴチャゴチャ言ってんじゃねえよ…文句有るなら今度は二人纏めてボールにすんぞ？」

指を鳴らしながら威嚇する紀霊を見た二人は額に一筋の汗を垂らしながらも即座に何事も無かったかのように互いを見やる。

司馬朗「相変わらず…歌や踊りをしているみたいだね社。」

司馬進「兄上こそ病は治ってないようだな…」

何事も無かったかのように初めからやり直す司馬兄弟。自重しない

彼等にとってもボールのように弾むのは嫌なようだ。

司馬朗「それが僕らしさだからね、治す気なんて無いよ。社、今度君がプロデュースしているアイドルのライブ：見せてもらっても良いかな？」

司馬朗からの提案に少しだけ驚いた表情を浮かばせる司馬進だが、直ぐ高慢な笑みに戻ると

司馬進「どういった風の吹き回しだ？散々バカにしていたものを見たいと言いつ出すなんて：まあ、真は可愛いし踊りが人を惹きつけるのは分からんでもないがな。」

司馬朗「あ、僕ノロケには興味ないんで本題に移るよ。社、：許してくれとは言いませんがそれでも謝らせて下さい。すまなかった。そして出来れば枢オウに会ってくれませんか？」

司馬進に頭を下げて謝る司馬朗。そんな司馬朗を見た司馬進は…

司馬進「兄上……………取り敢えず蹴らせる。」

司馬朗「へ？」

予想外の返事に呆気にとられて無防備な司馬朗。そんな司馬朗の腹部目掛けて浴びせるような軌道を描いた蹴り。即ちバニシングストライクが直撃し、攻撃された司馬朗は壁に向かって吹き飛んでいく。この光景は午前中に紀霊に吹き飛ばされる司馬朗を彷彿とさせるもので、本日二度目の体験である司馬朗は勿論壁に激突して崩れ落ちたままぼそりと呟く。

司馬朗「ま、また星が…」

樂就「司馬朗さん!？」

吹き飛ばされた司馬朗を案じて駆け寄ろうとした樂就。だが制止するように腕を伸ばす紀霊によってその動きを止める。

紀霊「これはあの二人の問題だ。…もう少し様子を見ようや。」

樂就「頭様がそう言うなら…」

主の言葉に渋々ながらも従う樂就の頭をあやすように撫でる紀霊は再度司馬兄弟に視線を向けて口を閉ざす。そんな紀霊の四選の先には、攻撃を喰らいつつもよろよろと立ち上がる司馬朗を睨みつつ口を開く司馬進の姿。

司馬進「この一撃は…そんな事を頭に依頼して無駄に戦わせた事と、むしゃくしゃしたから蹴った。兄上、この話はこれで終わりだ。」

司馬朗「や…社？」

司馬進「今の俺には南斗聖拳が有り真が居る。あの時は恨んでこそ今の俺があるのはそれがあつたからだ。…姉上に挨拶したら戻ってきて真のライブをやるからその時は特等席に案内してやる。頭、出立は明日で「お前かあああああつ！！」あぎやあああああつ！！」

やたらと清々しい顔で俺に語りかけてくる社だったが、台詞の途中に空から降ってきた衛姉のライダーキックが背中に直撃して悲鳴を上げる。

いやー、和解してよかったな司馬朗さん。これで一件落着くと

司馬進「良くないわあああつ！！何故この俺が空から降ってきた女性に蹴られなければならない！？というか貴殿、俺の手でアイドルとしてデ…年齢的に引つかかるか…」

朱雋「よし、お前半殺し一回で済ませてやるつと思つたが気が変わった。特別サービスで半殺し三回にしてやるつ。」

司馬進「それは全殺しな拳句に死人に鞭だ！そもそも俺を襲う理由はなんだ！？」

双剣を構える朱雋と必死に説得しようとする司馬進。しかしそんなところへもう一つ何かが降ってくる。

皇甫嵩「うーっーっーくーんっー！！」

紀霊「今度は俺の方が…って弥依姉ちよっま！んぶっー！？」

ライダーキックで降りてきた朱雋とは違い、普通に紀霊目掛けて飛び込んでその大きな胸で紀霊の顔を覆い隠す皇甫嵩がそこに降臨した。

~~~~~長安・凱乾邸~~~~~

華雄「むむむ！？」

張遼「どうしたんや慧？」

華雄「いや…今頭が私を物凄く不機嫌にするようなことをしている気がしてな…」

呂布「恋も感じた。多分……ましゅまる?」

張遼「なんやねんそれ…」

~~~~~洛陽・洛陽一番店内~~~~~

人和「天和お姉ちゃん…地和お姉ちゃんが物凄く怖いれす…」

天和「あらあら〜こついう時は揺れぬ胸に弾み無し。よ人和ちゃん。」

店主「それを言うなら触らぬ神に祟りなしだぜ天和ちゃん。しっかし…今の地和ちゃんからは坊主達と同じような鬨気出てんな…」

地和「……………くっ」



~~~~將軍府・庭~~~~

紀靈「弥依姉、あんた俺を窒息死させる気か？」

皇甫嵩「ごめんね顕君。愼君から顕君が傷物にされたって聞いたから居て立つても居られなくて…」

紀靈「まあ、傷物っちゃ傷物だが…愼の奴、どうりで居ないと思ったら…」

抱きつく皇甫嵩をお姫様抱っこに切り替えた紀靈は某正義超人ばりのキヤメルクラッチを喰らい悶絶する司馬進と目に光のない朱儁を見やる。

朱儁「ふっふっふ〜顕の事を傷物にした償い、その体で払ってもらおうか〜」

司馬進「あがつががあっ！？ た、助けてっ…くれ！顕う！！」

流石の司馬進も耐え切れず紀靈に助けを求めるが…

紀靈「お前のその姿が…聖帝に似ているっ！！」「聖帝って誰だああ

紀霊「あ、弥依姉。俺明日から休みとるから仕事の方は弥依姉と貂蟬に任せていい？」

皇甫嵩「おっけ～。お土産よろしくね」

悲痛な叫びを無視した紀霊は皇甫嵩を抱き上げたまま明日以降の仕事について打ち合わせを行いだす。理由は勿論河内にある司馬家へと司馬進を連れていくためで勿論紀霊のお願いなら喜んで快諾する皇甫嵩の様子に頷い紀霊は司馬進へと振り返り

紀霊「社々、明日の朝出立するから今日は早めに休んでおけよ？部屋はおっちゃんが一室用意してくれたから感謝しとけ。」

司馬進「それなら早く助ける願っ！！」

結局、司馬進は孔融が着地して彼を助けるまでずっと関節技の応酬に苦しんだそうなの…

~~~~何進邸・夜~~~~

司馬進と真に用意された一室、荷造りをする司馬進の背中を寝具に寝そべった真はじっと見つめている。

司馬進「明日から暫くここに逗留して良いそうだ。迷惑掛けないように良い子にしろよ?」

真「それは分かってるよ社兄。…どれ位で帰ってくるの?」

司馬進「行き帰りだけなら二、三週間有れば足りる。それまでは自分で鍛錬を積んでおけ、帰ってきたら特別ライブン開くんだからなよし、明日も早いし寝るとしよう。」

明日は実家のある河内に向かう。馬があるから楽では有るが今日は紀霊との戦闘に加え皇甫嵩や真からのお仕置きを受けた体だ。紀霊の秘孔によってダメージは消されているものの念には念をと考えた司馬進は寝具に入り布団を被り目を閉じる。

それから十数分が経過しただろうか、意識が浮いて眠りかけていた司馬進の布団に何かが入り込んできたのに気が付いて目を開けて横を見やると

真「……………」

目を閉じて司馬進に抱きついたまま眠ろうとする真の姿が目に入る。

司馬進「…何だ？」

真「暫く社兄と一緒にじゃないから…今の内に甘えちゃおっかな…つて…駄目？」

えへへ〜と笑みを浮かべ司馬進の体をぎゅっと抱きしめ上目遣いに見つめる真。そんな真を無言で見つめ返す司馬進は溜め息を吐きながら真の頭を撫で付ける。

司馬進「ふんっ…今日だけだぞ。」

真「やつりい〜 お休み社兄。」

そう言つと真は目を閉じて司馬進の体をぎゅっと抱き締め数分後には二人とも意識を手放した。

〜〜数時間後〜〜

互いに寝たはずの司馬進と真だが、すやすやと寝息をたてる真とは裏腹に目を開けて天井を睨みつける司馬進。

司馬進「……………」

真「んっ」

寝ぼけた真が司馬進の体をぎゅっとするど…

司馬進「っうゝゝゝっ！！（か、体の彼方此方から激痛が！？）」

先程から急激に痛み出した体の節々。どうやら紀霊に突かれた秘孔の効果が消えたようで呼吸をするだけで痛みを感じる始末。となれば真が動くど…

真「ふゃゝ…まっこまっこりゝん」

司馬進「（止める真おおおっ！？触れるな！揺するな！抱きつくなあっ！？）」

動いた分だけ痛みを感じるといっなのはお分かり頂けるだろう。そして残念なことに司馬進は真の寝相が悪いことを知っている。旅に出るから殆ど毎日一緒に寝ているから普段なら可愛いものだと思えないだろう日常も今の彼にとっては地獄でしかない。

ならば離れて寝れば良いだけなのだが…がっしりと抱きしめられたこの状況で無理矢理抜け出そうとすれば…起きた真によって朝には自分の関節が曲がってはいけない方向へと革新的なヨガのポーズで発見される可能性もある。

退くも地獄、進むも地獄。こんな状態に居る自分のプロデューサーなど露知らず、幸せそうに猫口をした真が抱き締める力を強めたとか強めなかったとか…

~~~~何進邸・朝~~~~

出立の準備を終えた紀霊は愛馬である夜雲の頭を撫で、背中には三華尖を背負っている。

紀霊「さて、出発なんだが…何故死にそんな顔してるんだ社？」

心配そうな紀霊が見るのは…

司馬進「気にするな…俺は気にしちやい無い。そう、気にしちやい
ないんだ…」

目の下に大きな隈を浮かばせて昨日よりもやつれた司馬進の姿。そして

孔融「頭ー、おやつはこんなもんで良いか？」

嬉しそうに馬を引いて来る孔融。

紀霊「おやつってお前、遠足じゃねえし…そもそも何故お前も来る？」

孔融「こんな面白そうな事に俺が参加しない訳が無い。頭が居るなら絶対何か起こるって！安心しろ、俺が保証する（キリッ）」

紀霊「そんな保証せんで良い！あゝもう、行くぞ二人とも。」

紀霊の言葉を合図に司馬進、孔融も馬を走らす。目指すは河内にあ
る司馬進の実家…

司馬進「六年振りか、…何事も無く終われば良いんだが。」

紀霊「お前もお前で余計なフラグ建てるんじゃないよー！…！」

孔融「ま、良いじゃねえの。楽しく行こうぜ？」

この三人による珍道中…無事に洛陽に帰ってこることが出来るのか？
まあ、無理でしょうねえ。さてさて、次回に期待しましょうか。

~~~~~数日後の洛陽・市場通り~~~~~

地和「姉さん、人和、今日のライブは成功したわね。」

人和「はいっ！今日も沢山踊りました〜」

天和「プロデューサーさんが居ないのは不安だけど頑張らなくちゃね。さあ、帰って店主さんのお手伝いでもしましょうか？」

顕Pが居ない状態でもなんとか市場通りのライブを成功させた三姉妹は和やかに談笑しながら洛陽一番へと歩き出す。だが、そんな三姉妹の行く手を遮るように立つ一人の人物により三人は足を止めて立ち竦む。

「……………けた……………」

その男は三人を見やり何かをぼそりと呟くが小さすぎて三人には聞こえない。

人和「？」

地和「あの…私達に何か御用でしょうか？」

若干怪しみながらも自分達を見つめる男に声をかける地和。そして声をかけられた男は、三姉妹に向けて…

「???」見つけたぞ……私の妖星！」

T o b e c o n t i n u e d . . .

再開、そして河北へ（後書き）

唐突ですが

柳のライバル的な作者さんは【変態紳士沈没戦艦BOTU】先生。  
強敵的な作者の先生方も勿論居ます。

理由は殆ど同じ時期に処女作を投稿した先生だから。

実は初期から先生のキャラを作品にちょい出ししたいとか考えてた  
りw  
ちゃんと時代が合うところまで書けたらですが…

許可してもらえるかな（チラ

とか露骨な柳は投げ捨てて…

御意見、御感想お待ちしております。

顕・慎・社の珍道中【孔融の隠された特技】（前書き）

友人「お前…何やってんの？」

柳「何って『聖　おにいさん』を読んでるんだが？」

友人「俺のベットの所で読むなよ…」

柳「何時もお前俺のベットで飯出来るまで寝てるだろ…」

~~~~~そんな友人と柳の読書の秋~~~~~

今回面白いところ…あるかな？w

頭・慎・社の珍道中【孔融の隠された特技】

河内に向かい、森林の近くを進む三つの影。紀霊、孔融、司馬進の三人は馬に揺られながら司馬家へと珍道中を開始してから早一週間、司馬進曰く早ければ今日の夕方。遅くてもあすの朝には到着すると言う話なのだが…

紀霊「疲れたな…」

孔融「言うな、俺まで疲れてくるじゃん。」

司馬進「疲労が貯まるのも無理はない。洛陽を出てからほとんど毎日モヒカン達の襲撃受けてるんだからな…」

疲れた表情を浮かばせながら煙草を吸う紀霊と同じく疲れた表情で並走する孔融。旅を何度も経験している司馬進はまだ余裕があるのか二人にフオローの言葉をかける。

孔融「今まで…襲ってきた団体さんが十、んでもって倒したモヒカンの数は…俺で五十か。ま、今日は襲われてないしこれで記録更新は無いだろうな…」

紀霊「おい馬鹿止め「ヒヤッハー!!」遅かったか…」

見れば三人に向かい土煙を当てながら迫り来るモヒカン集団。それぞれが剣や槍、はてはトゲの付いた棍棒を振り回して此方を威嚇するような姿に辟易しながらも新しい煙草に着火した紀霊。

司馬進「これで七日連続で襲撃されたか：頭、慎！モヒカンの数は五十騎程度、俺は二十だ。」

馬から飛び降りて籠手を装備した司馬進は腕を振り下ろす。すると装備された籠手の甲の部分から短剣が飛び出て来る。この武器の名は【鳳翼ほうよく】、洛陽出立前に孔融が徹夜で作成した司馬進専用の武器で籠手には孤手甲と同じ材質を使い頑強に仕上げ、尚且つ短剣が仕込まれており必要に応じて収納出来る何とも先進的な使用になっている。

孔融「んじゃ俺は十。」

紀霊「なら残りのモヒカンは俺が相手しよう。」

孤手甲を装備した孔融は十、三華尖を背中から外す紀霊は二十。この数字はモヒカンに襲われたら誰が何人相手するかを申告する此一週間毎日行われる三人の会話。そして先頭に立つ司馬進に向けて最初のモヒカンが剣を振り上げた瞬間：

司馬進「ふんっ！」

即座に鳳翼でモヒカンの腕を切り落とす司馬進。切られたモヒカンは痛みのためか腕を抑えて地ベタを転げ回り、仲間を斬られたモヒカン達はその様子に怯んで足を止める。勿論司馬進がそんな隙を見逃すわけもなく

司馬進「南斗爆星破！」

上空に飛び上がり爆星破を連発。そして着地の勢いを利用して

司馬進「飛べっ！」

地面を右足で大きく踏み付ける。すると

モヒカン「へ？なべゆあっ！？」

司馬進の右足から地面に衝撃が伝わり、その衝撃で多数のモヒカンが宙に飛び跳ねる。勿論モヒカン達の上空には先程司馬進が爆星破で作り出した衝撃波が対空しており…

モヒカン「へびゅらっあ!？」

体中に十字の傷を刻まれて絶命していくモヒカン達。そのモヒカン達が地面に落ちたのを確認した司馬進が周囲を見渡すと、攻撃を免れたモヒカンが数名だけ生き残っていた。しかし生き残ったモヒカンは仲間の惨状に腰が抜けているようだ…。だが、鳳凰に容赦はあらず。再び鳳翼を構え

司馬進「俺の進む道を邪魔するものは例え汚物であろうと容赦はせんぞ!」

残り数人のモヒカンに向かって前進を開始した。

~~~~~孔融の場合~~~~~

孔融「さ〜てさて、取り出したるは秘密のお薬」

モヒカン「へっへっへっへ〜、そんな黒い鞠取り出して…俺達に見世物でもしてくれるのかあ？坊っちゃんよう？」

所変わって自分を囲む十人のモヒカンを前に孔融は孤手甲の収納ス



ペースから黒い球体を取り出して指でくるくると回し始める。

孔融「見世物ね…まあ、見て損するもんじゃないってのは言えるかな？ 顕一、ライター貸してくれ！」

「壊すなよ？」という言葉と共に孔融目掛けて飛んできたライター。そのライターをキャッチした孔融は球体に生える細縄に着火。着火された細縄はパチパチと破裂音を鳴らしながら徐々に球体の方へと短くなっていく。

孔融「さあさあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい！ この黒い鞆、この鞆から生えた細縄が消えてなくなると」

即座に跳躍し孤手甲の爪で近くの木を掴んだのを確認した孔融は自分を見上げ呆気にとられているモヒカン達に向かって鞆を投げつける。そして鞆が着弾した瞬間…

【ドオオオオオオオン！！】

着弾した鞆が爆発し、周囲にいたモヒカン達が爆風と炎に包まれる。

孔融「火がつくと爆発して爆風を広げる葉なんだよねこれ。ま、御代はあんたらの命って事で。」

爆風を背に、森林に向けて某ゼルダの主人公の如くチェーンフックな移動をした孔融は着地すると未だモヒカンに囲まれた紀霊を見やる。

孔融「ありゃ、頭が一番遅いつても珍しい…」

~~~~紀霊の場合~~~~

モヒカン「うらあああっ！金目のもん寄越しやがれクソガキ！」

紀霊「無駄なことを…つかこんな治安悪いなら衛姉や弥依姉の討伐増えそつなもんだがな…」

剣や棍棒を振るうモヒカンの合間を北斗夢想流舞を駆使して摺り抜ける紀霊。本来モヒカン程度ならナギらずに立ち回ることも可能なのだが「正直しんどい。」と思った紀霊によりこの方法が取られている。

モヒカン「一発も掠らねえってどういうことだよ！！」

紀霊「俺に攻撃当てたきゃ世紀末バスケの一つや二つ出来るようになってから出直してこい。」

モヒカンの群れから抜け出した紀霊は槍を握り直して深呼吸。

紀霊「いい加減決めないと社達に何言われるか：臨兵闘者、皆陣列在前！」

モヒカン「ふっ：増えやがった!？」

紀霊が九字を切りナギツという音を合図にモヒカンを囲むよう分身した紀霊。紀霊全員が槍をモヒカンに向けて構えると同時に

紀霊「神影流秘奥義：裏・八寸!!」

一瞬姿が消えた紀霊達が次に姿を表した時、先ほどと違いモヒカン達に背を向けた状態で立つ紀霊。

モヒカン「はっ、なにもえびゅらっんわ!？」

何も起こらずきょんとしていたモヒカン達だが、次第に目や口か

らドバドバと血を流して崩れ落ちる。その中に立っている者は居らず、かるうじて生きている者もピクピクと痙攣するだけで虫の息だ。そんなモヒカン達を一瞥しつつ煙草を加えた紀霊は

紀霊「一撃で仕留めきれなかったか…俺もまだまだ鍛錬が足りないな。安心しろ、今楽にしてやる。」

苦しみからかうめき声を上げる数人のモヒカンに指を突き立てる。すると指を突き立てられたモヒカンは力を失い一人、また一人と静かに目を閉じる。

紀霊「有情の秘孔を突いた…後は閻魔に裁かれてくれ。慎！ライター
―返せ。」

孔融「おつよ、つか分身するとか…お前人間？」

司馬進「あの技…恐らく衝撃波だろう。分身で威力を増し尚且つ攻撃範囲を広めるとはな…」

先程の技は凄まじい速さで移動することにより生まれる衝撃波を相手に当て、相手の内蔵などに損傷を与える大技である。本来なら単体の敵に使用する技になるが、分身を作り効果範囲を広げることによりモヒカン達を一網打尽にしようとした紀霊により発動。既に片付いた司馬進と孔融が近寄り、ライターを受け取った紀霊は煙草に

着火し一吸いすると

紀霊「俺は普通の人間だ、衛姉や弥依姉を見てればつくづくそう思うよ。」

紀霊の言葉に朱雫と皇甫嵩を思い浮かべた二人は「（確かに…）」と苦笑い。この三人も割と人間離れしているところがある気はするが、どうにも彼女達に比べたら遙かに見劣りしてしまうのが現実だろう。

司馬進「まあ、予想より早く終わったからな。頑張れば今日の夕方には到着出来るだろう。」

孔融「よっし、ならモヒカン来る前にさっさと行こうぜ。ついてもこれ以上モヒカン出てくるなんてそんな事有る訳「ヒヤッハー!!」仲間の敵討ちだぜーっ!!」「…」

声が出た方向を見れば三十騎程度のモヒカンがこちらに向かって馬を走らせてくる姿…

紀霊「（*M*）…」

司馬進「…（*、*）」

孔融「……」

孔融？「……>…:なあ」

司馬進？「どうした愼？<（*、*）」

孔融？「……>…:キレテイイ？」

紀靈？&司馬進？「（*M*）>だったら俺達もお前にキレて
良いよな！？<（*、*）」

孔融？「……>エー…:」

フラグ建築士、孔融の建築作業はまだまだ終わりそうにも無さそう
だ。

~~~~司馬家・とある一室~~~~

太陽の光がちらちらと入る一室、中には布団を被り顔だけ出している少女とその隣の椅子に座り静かに書物を読む美女。ゆったりとした時間を満喫する中、不意に少女が布団から飛び起きた。

少女「んんっ！？この匂いと気配…やーちゃんだ！！」

美女「相変わらずくろ枢の鼻は凄いな。けど、私も社君の気配を感じるよ。」

書物を閉じ静かに目を閉じた美女は静かに微笑みを浮かべる。そんな落ち着いた美女とは違い、少女は布団の上でポンポンと跳ね飛びながら落ち着き無く燥ぐ。

少女「社ちゃんが近くに居るってことは！居るってことはだよひた沙羅ちゃん！えへへ〜やーちゃんはお姉ちゃんに美味しく頂かれる覚悟が出来たって事だよ。急いで縄とか薬とか用意しなきゃ…」

なにやら物騒なことを言いながらも考えに耽る少女、何を隠そう司馬朗の実妹で尚且つ司馬進の実姉、彼女こそ【司馬懿仲達】。

美女「落ち着いて枢、薬と縄は私が常備してるから。それよりも確実に仕留めるための計画が大事。今から練らなきゃ…」

そして止めるどころか常備とかとんでもないことを口走る美女、彼女が司馬懿の幼馴染にして司馬進のもう一人の姉的存在。「張春華」

司馬懿「そうだね沙羅ちゃん。私と沙羅ちゃんに掛かれば…ふははははーやーちゃんめ…いよいよ年貢の収めどきだっ！」

張春華「社君、今度こそは逃がさないよ？」

…  
どうにもこうにも、司馬家に到着しても紀霊達に安息は無さそうだ



頭・慎・社の珍道中【孔融の隠された特技】（後書き）

今回の強敵（先生）

善宗先生  
よしむね

代表作：ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士

IS インフィニット・ストラトス 絆（ネクサス）

割と初期から付き合いのある先生で特筆すべきは特撮（特に仮面ライダーとウルトラマン）に詳しい先生。

『ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士』の作中にジョイヤーと泣き叫ぶ迷子の小学生な拳王様が登場したのに腹筋がテレッターされたのはいい思い出w

実は朱雫の使用する武器は『ロザリオとバンパイア 刃の音撃戦士』の主人公【刃鬼】君が以前使用していた武器を頂戴しております。先生、本当に有難うございます。

今回の補足説明

裏・八寸：某マガジンで連載されていた侍漫画の登場キャラが使用する技。紅虎格好いよ紅虎（\*、\*、\*）

今回登場した顔文字

（\* M \*）

（\*、\*、\*）

、  
、  
某ゲーセンのプレイヤーとして有名な方々。この作品との関係性は  
有りませぬヨ？

ご意見ご感想お待ちしております。

続続々・紅白姉弟の普通(?)な乱世(前書き)

柳「ジャギ様は萌キャラ。異論は許さない。」

友人「……、」

~~~~~そんな柳と友人の萌談義~~~~~

さて、紅白姉妹の出番です。

続続々・紅白姉弟の普通(?)な乱世

〔幽州・鍛錬場〕

幽州の城内にある鍛錬場、ここは平和を守る兵士達の鍛錬の場として普段から厳しい訓練が行われている場所なのだが、普段聞こえてくるはずの兵士達の気迫のこもった声は響かず、居るのは馬に乗る張飛とそれを見つめる公孫越の二人だけ。そして張飛が馬を進めようと手綱を握り直した時

張飛「…こっ、こっなのだ！」

馬「ぶるううううあっ！（我にい乗るにはあ…まあーだ未熟！）」

張飛「うにゃああああ〜」

馬に騎乗した張飛だが、不意に馬が暴れ始めて振り落とされる。

公孫越「っと、危ない危ない。」

振り落とされ、地面に落下しそうになった張飛を受け止める公孫越。もし地面に落ちたものならケガの一つや二つ負っていてもおかしくない。

張飛「あ、ありがとうなのだ紅蓮お兄ちゃん。」

公孫越「だから一人で乗るのは難しいって言ったろ、鈴々ちゃん？」

何を隠そう、今日は張飛の乗馬練習がために兵士達の鍛錬を休止し公孫越師事の下、張飛は公孫越の愛馬である『赤元^{せきげん}』を使って馬の扱いに慣れようとしていたのだ。

張飛「うう、でも鈴々だつてやればきつと出来るのだ！」

公孫越に地面に下ろされた鈴々はそのまま赤元へと猛ダツシユし飛び乗る。

赤元「ヴェリイイイメロン！！（出直してきな、お嬢ちゃん。）」

張飛「うにゃあああああつ！？」

そして飛び乗った瞬間、赤元がまたもや暴れだして今度は空中に向かって一直線に飛んでいく張飛を見ながら頭を掻く公孫越。

公孫越「やれやれ、赤元も少しは手加減してやれよ。っと、鈴々ちやん受け止めねーと…」

~~~~~幽州・郊外~~~~~

公孫越を乗せた赤元は荒野を力強く地面を踏みしめ周り景色が流れるように進む。

張飛「凄いのだ！お馬さんってやっぱり早いのだ！！」

公孫越「楽しんでくれてるのは嬉しいが余り喋ると舌嚙んじゃうぞ？」

公孫越の前に座り、赤元の力強さに歓喜する張飛。実はあの後何度も練習をしたが結局乗りこなすことが出来ず落ち込む張飛を見かねた公孫越が元気づけようとした結果、二人乗りで馬を走らせることに相成った。

揺れる馬上においても張飛は目を輝かせ、普段蛇矛を振り回して兵士の鍛錬をする武将としてではなく年相応の子供っぽさを公孫越に見せてくれる。そんな張飛のハシヤギ具合に元気づけることに成功したと頬を緩める公孫越。

公孫越「よし、この先に小さいが綺麗な小川が有る。そこでひと休

みしようか鈴々ちゃん？」

張飛「わかったのだ！」

公孫越「んじゃ、赤元！もう少し走ってもらうぞ！」

赤元「ぶるうあああああつ！（任せとけい紅蓮、俺様にしてみればあ、千里も一里も似たようなもんだぜい。）」

~~~~~政庁・紅蓮の執務室~~~~~

公孫讚「おつかしいな〜折角お菓子作ったのに、紅蓮の奴どこ行っただんだ？」

普段紅蓮が政務を執り行なう執務室、彼の姉であり幽州太守でもある公孫讚は手にもった力ゴをちらりと見つめながら溜息をつく。今日のためにこつそりと練習しておいた茶菓子作り、やっと自信をもって弟に食べさせられる一品が完成したので部屋を訪れたら…肝心の弟が居らず、どこに行ったかもわからない。途方に暮れる公孫讚だったが

関羽「紅蓮殿失礼致す。あ、あのっ少しばかり料理を作りまして…
味見していただければ！…あれ？白蓮殿、紅蓮殿は？」

公孫讚が立ちすくむ中、扉を数回ノックして入ってきたのは関羽で
手に持った皿の上には液体なのか固体なのか判別しかねるような食
べ物（暗黒物質）が異様な存在感を放っている。

公孫讚「あ、愛紗殿か…紅蓮はどこ行ったか分からないんだ。そ、
それとその手に有るの…は？」

関羽「むう、紅蓮殿が留守でしたか…これですか？実は今日料理を
しておりますが会心の出来だったもので紅蓮殿に味見を…」と”思
っておりますが、残念です。」

料…理？「ピギイイツ！？」

公孫讚「ひいつ！？そ、そうかつ！あは、あははは…それは残念
だったな。（紅蓮っ！今は帰ってくるな！絶対帰ってくるな！）」

手にした料理がモゾモゾと動き奇声を発する惨状に頬を引き攣らせ
た公孫讚は今この時だけ弟がこの場に居なくてよかったと思ってい
た。だが

関羽「そつだ白蓮殿、宜しければ味見をお願いしてもよろしいですか？」

公孫讚「！？」

~~~~~その頃の劉備~~~~~

劉備「ふへっ えへへへ…お花綺麗…」

台所で床に仰向けで寝転がる劉備は白目で口を半開きにしたまま時折体を痙攣させている。どうみても異常な状態なのだが、原因は彼女の義妹である関羽の料理を味見したことによりどうも三途の川付近に意識が飛んでいるようだ。

劉備「こ…んなに綺麗なら…えへっ 今度紅蓮君と一緒に…こよ」

~~~~~郊外・小川~~~~~

公孫越「…今物凄く嫌な感覚に襲われた。」

張飛「どうしたのだ紅蓮お兄ちゃん？」

二人寄り添い小川に足をつけて休んでいた最中、公孫越は不意に背筋に走った悪寒に嫌な表情を浮かべ、張飛はそんな公孫越を心配そうにのぞき込む。まだ嫌な感覚は残っているものの心配させまいと「大丈夫だよ。」と一言だけ喋り張飛の頭を優しく撫でる。

張飛「えへへ、紅蓮お兄ちゃんの手は凄く優しいのだ！」

公孫越「姉貴や桃香姉の方が優しいだろ？俺の手なんて男だし優しくないぞ？」

張飛「紅蓮お兄ちゃんは凄く優しいと鈴々は思うのだ！だってそうじゃなきゃお馬さんだって鈴々だって紅蓮お兄ちゃんに懐いたりしないのだ」

張飛は公孫越に体を預けた状態で足をバシャバシャと揺らして水しぶきを跳ね飛ばす。その姿は元気な子どもそのもので、乱世に済む武将とは掛け離れた姿。いや、此方が本来あるべき姿なのは理解している筈…

公孫越「そういうもんかね？さつて、そろそろ城に帰るか！帰ったら飯にしようぜ鈴々ちゃん。」

公孫越は自分の頭の中から思考を振り払うように立ち上がると身支度を早々に整えて赤元の元に向かって歩き出す。

張飛「ご飯なのだー！」

そんな公孫越を追いかける張飛も急いで身支度を済ませ、二人とも赤元に騎乗。手綱を握る公孫越の裾をぎゅっと握り締めた張飛はもう片方の手で城の方向に人差し指を向けて叫ぶ。

張飛「さあ、紅蓮お兄ちゃん！美味しいご飯に向かって全速前進なのだ！」

公孫越「承知した。んじゃ飛ばすぜ！」

公孫越の言葉を合図に赤元が雄叫びを上げ、力強く大地を蹴り出した。

~~~~~幽州・政庁~~~~~

行きよりも短い時間で散歩を終えた公孫越と張飛、後は馬を繋いで夕食の準備をするだけのはずだったが

公孫越&張飛「只今」

関羽「紅蓮殿！それに鈴々つ！？」

何やら場内を慌ただしく移動する名もなき文官武官達、そして彼らの統制を必死に執っている関羽の姿に公孫越は何やら自分の嫌な予感が的中したのでは？と少々不安になった。

公孫越「愛紗さん、この騒ぎはどうしたんです？」

関羽「そっそれが…反乱です。」

次回、「幽州に吹き荒れる乱風」に続く。

続続々・紅白姉弟の普通(?)な乱世(後書き)

本日の強敵とせな先生

初心good先生

代表作：リリなのに転生っす！

魔法少女リリカルなのは〜最速のコックローチ〜

善宗先生に同様初期からの親交のある先生、書くのはリリカルなのはオンリーとかなり一途。けど新作の考案に凄い熱心で次から次へと案が出てくる模様。なにその才能？下さい。

絡むのは活動報告でのバトンが多いかな？

リリなのに転生っす！は現在休載中ですが、読んでみるとなのはさんマジ黒いっす。

ご意見感想お待ちしております。

とある兵士の報告書（長安編？）（前書き）

友人「最近釘宮の声が凄く良いんだ…」

柳「…頼むからその内くぎゅううう！とか言い出さないでくれよ？対応に困る。」

友人「お前、釘宮病を何か変な病気と勘違いしてないか？」

柳「ある意味では不治の病な気がしてならんがな。」

~~~~~そんな柳と友人の声優（釘宮）談義~~~~~

長らくお待たせいたしました。番外編ではありますが楽しんでいただけたら幸いです。

とある兵士の報告書（長安編？）

○年春

華雄ちゃんが長安を出てから二年が経とうという時、次は紀霊君が長安を出るのでは？との噂が守備隊に流れ始める。

一部の兵士は「そんな時期か」程度に考えているが大体の兵士は歡喜の余り「ヒヤッハー！」と叫びながら仕事をする始末。どんだけ紀霊君の事嫌いなんですかもう…

隊長からの返答

ヒヤッハー！これで恋ちゃん攻略における最大の障害が無くなるぜ！今日は俺の奢りだ、飲め！

兵士からの返答

まあ、貴方は罵巢蹴ののこされた身ですから嫌いでしょうね。それと、隊長じゃ一生賭けても攻略できないんで真面目に仕事してください。てか貴方華雄ちゃん派でしょうが…

隊長からの返答

…最近お前冷たくね？

兵士からの返答

誰のせいだと思ってるんですか…

正直紀霊君には私の補佐として長安に残って欲しかったんですが…非常に残念です。

○年春

噂が真実を呼んだのか、やはり流れるにとも言つべきか紀霊君は長安を出るようだ。

その真実による影響は我ら守備隊においても少なからず有り、一部女性兵士の落胆と大部分の男性兵士のモヒカン化が仕事に色々な影響を及ぼしている。紀霊君、本当に残念です…

隊長からの返答

最近元気なかつた理由はそれか…まあ、二度と会えないって訳じゃないんだし元気出せ。ほら、今日の仕事さつさと終わらせて飲み行くぞ！

兵士からの返答

隊長…ごちそうさまです。

隊長からの返答

え？俺の奢りなの！？

○年夏

とうとう紀霊君が長安から旅立ってしまった。思えば彼と初めて出会ってから早四年…長いようで短かい楽しい時間を思い返しながらか白馬に乗り荒野を駆けて行く彼の姿を見送る私は弟を見送る姉の気

持ちが理解できたような気がした。居場所は口止めされているので言えないが今後も紀霊君との文通は続けていきたいと思う。

隊長からの返答

ありや絶対いい武将になるだろうさ。それはそうと…俺の天下来た！（*´、*）ハヤル！！

兵士からの返答

この前の件で少しは見直したと思っただらに貴方という人は…取り敢えずその顔文字と天下は流行らないのでご安心を。

○年夏

紀霊君が旅立つて数日が経過した長安。仕事は副隊長に投げ捨てるものとして今日も恋ちゃんへの御菓子を手訓練場へ。最近恋ちゃんを交えて守備隊の訓練を行なっているので俺等としても非常にやりがいのある内容のだが、今までは常時紀霊君にくっついていたので色々苦労したが邪魔者は居なくなつて恋ちゃんはフリー。だからこそ紀霊君の変わりに俺が恋ちゃんの兄に…と考えながら歩いていたら他の守備隊長と太守様と遭遇。どうやら考えることは同じようだ…

兵士からの返答

仕事を私に落ち着けて他の隊長や太守様と乱闘騒ぎですか、そうですか…

というか太守様も私に仕事押し付けて何やってるんですか！投石器

で飛ばしますよ!?

太守からの返答

いや、業務より恋ちゃんの方が優先ですから(キリッ

隊長からの返答

そうそう、つーわけで明日も乱闘やるんで仕事よろしく(キリッ

兵士の嘆息

紀霊君：助けてください。

○年夏

紀霊君が居なくなり一週間が経過しましたが太守様と守備隊隊長による恋ちゃん争奪戦が一般の兵士にまで飛び火。その度に鎮圧部隊の指揮を執る私の業務は日々蓄積されていく始末。

長安市民は乱闘すらも賭け事の対象にして楽しんでいるようだ。毎回太守様と各隊長を投石しなければならぬ私の身にもなつて欲しい。紀霊君が居ればこんな苦勞することも無かつたろうに…やはり無理矢理にでも私の部下にするべきだった。

隊長からの返答

あの…そもそも紀霊君となんで仲良いの？俺全然知らなかったんだけど…

兵士からの返答

鍛錬の合間とか空いた時間は私の職場に遊びに来ることが有りましたよ？仕事の手伝いとかもしてくれましたし一緒に御茶を楽しんだりしていましたので…正直弟が出来たみたいで嬉しかったです。そもそも隊長は華雄ちゃんと恋ちゃん追い掛け回してたから職場に数時間も居ないから知らなくて当然です。

隊長からの返答

（・・・）

兵士からの返答

シヨボーンとする暇あるならさっさと仕事してください。

○年秋

二年ぶりに華雄ちゃんが長安に里帰り。太守様以下守備隊は歓喜の渦に包まれた。

酒瓶が空を舞い、モヒカンは叫び、華雄ちゃん達は里帰りしてきた喜びを噛み締めた。

だが…愛する弟である紀霊君の姿はもう長安には無かった！

紀霊君が居ないことに落胆する華雄ちゃんを見るのは悲しいが、本人に口止めされているため居場所を教えることが出来ないのは歯痒い。だがそれよりも…

隊長からの宣言

ヒヤッハー！華雄ちゃんの里帰りだーっ！！祭りじゃ！皆のもの祭りを開け！！

太守からの宣言

今日は特別に休日とし、長安市民全員を対象とした祭りを開きます。参加は絶対、太守命令ですよ。

兵士からの返答

浮かれすぎて話を聞いてない人達を投石する作業で忙しくなりそうだ…

○年秋

守備隊が完全モヒカン化した長安総動員の祭りが終わり、暫くは静かになると思っていたら大事件が発生。

どうにも恋ちゃんが華雄ちゃん達と共に西涼へと移るようだ…

華雄ちゃんが居なくなるだけでも内乱一步手前まで行ったというのに恋ちゃんまでもが居なくなったら…不味い、非常に不味い。

隊長からの演説

全守備隊に告ぐ！我ら長安守備隊は一週間後に西涼守備隊への宣戦布告を行い戦争状態に突入する！

投入兵力は長安安全軍及び予備兵も全てだ、一週間後の開戦に向けて皆準備するように！！

太守からの一言

さあ、西涼兵よ…お祈りは済ませましたか？部屋の隅でガタガタ震える準備は出来たでしょうか？

兵士からの泣き言

ああ、助けて紀霊君っ！！もう私だけじゃ抑えきれそうも無いです

…

とある兵士の報告書（長安編？）（後書き）

本日の強敵とせな先生紹介

携帯談話先生。

代表作

【真・恋姫無双 孫呉の為に…ていうか雪蓮の為？いや歪んでるか
らよくわからない作品。】

【ネギま！ 神殺しの末裔】

ご存知柳の作品で登場している孔融のモデルとなった作者さん。

活動報告で時たま見られる紀璃人先生との掛け合いには柳は正直「
これが…若さか。」状態です。いやあのノリで話し合えるってのは
良いねw

実は携帯談話先生、柳の作品最初の犠牲者（？）らしくて柳の作品
読み始めたたら姉属性が芽生えたらしいです。

…将来有望な高校生に対して柳は何をしているんだらう？w

ご意見ご感想お待ちしております。

番外編【料理だよ！全員集合！！】・ぜんぺん（前書き）

カオス、そしてスランプ故に今回とんでもないことになっています。
今回の作品はとある強敵な先生も登場されます。

それでもイイヨーと言って下さる読者様が居られましたら幸いです。

番外編【料理だよ！全員集合！！】・ぜんぺん

~~~~何進邸・夜~~~~

それは紀霊達が夕食を食べ終わってお茶を楽しんでいた中、朱雋と皇甫嵩の一言から始まった。

朱雋「料理だよ！」

皇甫嵩「一部を除き、全員集合！」

紀霊「……………衛姉に弥依姉、何やってんの？」

いきなり立ち上がり右手を高く上げる二人に呆れつつ聞き返す紀霊。それでも食器を片づける手を止めないのは流石といったところだろう。

朱雋「だ〜から料理だよ料理！」

紀霊「あーはいはい。駄目でしょ衛姉、ご飯はさっき食べましたよ。んじゃ洗い物と明日の仕込み手伝ったら寝るんでお休みなさい。」



朱儁の話聞き流し二人の女中と食器持って退室する紀霊に超雲や楽就は一礼し、何進に司馬進、真は固まっただまの朱儁を苦笑い。だが紀霊が居なくなつて数分後、固まっただまだった朱儁がいきなり動き始めた。

朱儁「ふ…ふははははは！ 頭め、私の話をスルーとは良い度胸だ！ 弥依っ！ 明日の昼に決行するから準備を頼む。」

皇甫嵩「はいっ 資材食材なんでも揃えて見せます。」

何が何だか解らない何進達を余所に「ヒヤッハー」と叫ぶ二人は窓から飛び降りたと思つたら庭にある投石器を使用し帰っていく。そんな一連の流れを見ていた何進達は

何進「なあ、社の坊主。俺凄く嫌な予感しかないんだが…」

司馬進「俺も將軍に同じです。まず間違いなく頭は巻き込まれるでしょうな…」

そんな二人の予感は翌日の昼、当然のごとく的中することになった。

~~~~~翌日・何進邸の庭~~~~~

??「料理だよ！」

??「全員集合！」

紀霊「わあ~~~~~何これ？」

取り敢えず拍手をさたものの訳が解らず周囲を見渡す紀霊。周りには複数個設置された調理台と中央にデカデカと置かれ審査員席と書かれた台。極めつけは…

朱雋軍兵士「ウオーイ！！！」

皇甫嵩軍兵士「料理じゃ！料理大会じゃ！」

朱雋と皇甫嵩の部下達が生き生きとした表情で会場を囲む。

雷薄「さあ！私達二人を讀者さんは誰だお前等？つて感じでしょうし自己紹介しておきます。私は現在弟募集中！最近やんちゃな慎ちゃんにも甘いと言われます。何進邸で女中をしています雷薄、真名は

零ひょうと申まをします。」

司馬朗の人物資料集優しそうなお姉さん。

陳蘭「私は同じく女中をしている陳蘭、真名は翠すい。弟あには顕君がいるから募集はしてないな。」

司馬朗の人物資料集クール系お姉さん。

雷薄「今回は朱雋將軍からの依頼もあつて私達二人が司会進行をやらせていただきます！」

陳蘭「それではまず審査員の入場だ。」

陳蘭の言葉を合図に兵士達は道を開き屋敷の方から四人の審査員が審査員席へと歩いてくる。

雷薄「先ずは審査員長、この屋敷の主でもあり愛すべき脇役。我等が大将、何進大將軍です！」

兵士「大将っ！俺だ！給料上げてくれ！」

兵士「大将！脇役って紹介されてNDK？NDK？」

何進「手前等…纏めて滅給にすつぞ!？」

雷薄「続きましてはこの作品きつてのチート、私達二人を斬れる者は居るかっ!？朱儁將軍と皇甫嵩將軍のお二人です!」

兵士「投石將軍っ!新しい投石器を我が隊に!!」

兵士「ここにいるぞ!…いや、やっぱり無理ですごめんなさい!」

朱儁「さあ、イカれたパァリイの始まりだ!」

皇甫嵩「番外編は私達が乗っ取りました!さあ、ご飯ですよ。」

雷薄「そして特別審査員、先月終わりに作者活動一周年を迎えまして浅門汰斗先生です!」

兵士「先生一周年おめでとうございます!」

兵士「電撃への投稿作品頑張ってください!」

浅門汰斗先生「ども」

雷薄「以上四名の方に今日は審査して頂きます。」

雷薄は審査員が着席し、兵士達が静まり返ったのを確認すると陳蘭に向き頷く。陳蘭も同様に頷き返してから軽く咳払いをして声を張り上げる。

陳蘭「続いては選手入場だ。料理に洗濯掃除と家事なら何でも御座れな彼だが彼女の尻には敷かれっぱなし。年上だろぅが関係ない、彼女に掛かれば顕君だつて弟さ。アイドルとプロデューサー、今日必要なのは歌唱力じゃなく料理の腕だ！紀霊と地和コンビの入場だ！」

兵士「紀霊様！爆死しろ爆死！」

兵士「ちーちゃんちーちゃんっ！蔑んだ目で俺を見てくれ！！」

紀霊「…どうしてこうなった？」

地和「プロデューサー、ぼさつとしてないで歩いて下さい。戦いはもう始まっているんですよ！」

陳蘭「続いてはこの二人。アイドルと親衛隊、だがそれは表向きの姿でしかなかった！まるで天真爛漫な弟とそれを見守り甘やかすおっとりな姉、実は隠れて甘い空間作ってます。孔融選手と天和選手の入場だ！」

兵士「5様！5様！」

兵士「はい、F91通りますよー。道開けてくださいねー。」

孔融「一体どこから情報が……
！」
「<オレモウカエル！」

天和「あらあら、逃げられんぞぉ〜ですよ慎ちゃん。私置いて逃げてたりしたらめっですからね？」

陳蘭「三組目はこれまた姉と弟…だと思ったか？残念俺達は兄と妹そしてアイドルとプロデューサーだ！料理の腕は未知数だが、制圧前進あるのみ！星取りと間接技なら任せとけ！司馬進選手と真選手の入場だ！」

兵士「鳳凰！やわからん聖帝！」

兵士「まっごまごにされてやんよー！」

司馬進「予想はしていたが…まあ良い。やるからには勝つぞ真！」

真「へへっ、料理なら任せてよっ！」

陳蘭「途中二組は省略し、最後に紹介するのは一体全体皇甫嵩將軍はどうやって連れてきたのか謎だらけ！そして何故普通の姉弟で参加しなかった！大会特別枠として、公孫越選手と関羽選手の入場だ！！！」

兵士「キヤーエツサーン！」

兵士「げえっ！！関羽！？」

公孫越「やれやれ、いきなり連れてこられたかと思ったら…愛紗さん、料理は出来ます？」

関羽「わ、私でよろしければやらせて頂きます！」

全選手が揃い、会場を囲む兵士達のボルテージが最高潮に達していたその時、雷薄の口から発せられた言葉により彼等は絶望の淵へと一気に転がり落ちることになる。

陳蘭「ちなみに特別参加枠である公孫越選手と関羽選手には会場にいる朱雋軍及び皇甫嵩軍の兵士に対して料理を振舞って頂きます。」

兵士「いやだあああああつ!?!」

兵士「まだ死にたくねえよおおおおつ!?!」

兵士「おつ、俺は逃げる!」

兵士「馬鹿野郎!死ねば諸共だつ!手前だけ生き残らせて堪るか!」

次々と絶望のあまり膝から崩れ落ちる兵士達。中には逃げようとする者も多少は居たのだが、既に覚悟を決めた兵士達が死ねばもろとも。とばかりに足止めする始末。会場には兵士達の阿鼻叫喚が木霊するのみだつた…

雷薄「さあ、全選手が揃ったので簡単にルールを説明します!ルールは簡単。審査員に美味いと言わせるような料理なら何でもいいです。あ、公孫越選手のチームはここにいる兵士皆さんの分なので大量に作れそうなのやっちゃってください。」

陳蘭「では選手宣誓を…孔融選手にお願いします。」

孔融「へ、俺？しゃあねえな」

事前に打ち合わせもしていなかったのかいきなりの氏名に戸惑いつつも中央に歩み寄る孔融。そもそも今日いきなり始まった大会で準備も何もあつたものではないのでしょうかと言えましょうがない。

審査員席に座る何進を一瞥した孔融は右手を高らかに上げると

孔融「あーあーあー、こほん。宣誓！我々料理人一同は！食材の旨みを生かし！審査員に「びやあああああつ！？うますぐる！」と言われるような料理を作り上げ、正々堂々どんな手を使ってでも顕の邪魔をし！豪華温泉旅館3泊4日のペア御招待券をこの手に取り戻すことを誓います！ヒヤッハー！料理大会だー！！西暦にひや…忘れたからいいや。天和親衛隊隊長孔文挙！」

天和「格好いいですよ！慎ちゃん」

その他「（紀霊を）ぶっころせ！ぶっころせ！」

孔融の選手宣誓により生まれる熱気は会場を包みこみ兵士たちが次々と騒ぎ出す。恐らく関羽の料理で苦しむ自分達の仲間を引きずり込もうと考えているのだろう。…正直怖い。

浅門汰斗先生「あははっ、ホームなのにアウエーだね紀霊君。さて、君がどんな料理を作るか楽しみだよ。」

普通なら恐怖で顔が引き攣るような状況が楽しいのか笑いながら紀霊の元に近づいてくる浅門汰斗先生。

そんな先生に一礼しつつわざわざ異世界の料理大会なんぞに参加してもらっている先生へとお礼の言葉を発す。

紀霊「料理よりも先に死体が出来上がりそうですがね先生。後、柳の無茶振りで出演していただき有難うございます。」

「いいよ、いいよ。」と軽く返す先生にほっとしたのか、紀霊は懐から煙草を取り出し着火。口から白煙を吐きながら周囲を警戒している。そんな紀霊に先生がふと思いついたかのように口を開いた

浅門汰斗先生「しかし…番外編だから華雄さんと組むものだと思っただけど地和さんと組んだんだ。どうしてだい？」

紀霊「多分空に叫べば三日くらいで洛陽に来るでしょうけど…まあ、次回のお楽しみって事で。」

その後も二人が会話（主に姉関係）を交わしていた時、ジャーンジャーンジャーン！と銅鑼の鳴り響く音が会場に木霊した。何かと

音の方向を見ると雷薄が銅鑼の前で大きく息を吸い込んでいる姿が目に見え込んでくる。

雷薄「さあ、いざ尋常に…料理開始です!!」

次回へ続く。

番外編【料理だよ！全員集合！！】・ぜんぺん（後書き）

今日の強敵とせな先生紹介

あさかどたいと
浅門汰斗先生

代表作品：真・恋姫十無双　　くただ愛しき人のためにく

柳の先輩作者でもあり基本的にはバトンでの絡みが多い先生。リアルの姉成分が渴望しているらしく柳の作品で姉成分を補給…しているかもしれない。

尚、慢性的な頭痛持ちらしい。…先生、お大事に><

十月末に作者活動一周年を迎えられ現在は電撃大賞への作品投稿を目指し鋭意執筆中。べ、べつに先生が一周年だからってこの番外編思いついたんじゃないからね！

最後に、作品への出演を快諾していただきありがとうございました。そして一周年おめでとunggざいます！！

ご意見ご感想お待ちしております。

ご意見ご感想。ついでに皆様がスランプの際どういう対処をするか等のお話お待ちしております。

番外編【料理だよ！全員集合！】こうへん（前書き）

友人「さあ、どちらかを選ぶがいい！」

- 1 桃鉄（友人&柳）で99年プレイ
- 2 麻雀

柳「せっかくだから、俺は3の執筆と女神転生イメージンとニコ動を取るぜ！」

友人「……………死ねえ！！！」

柳「ちょ！ゲーパンすんな！」

〈そんな柳と友人の日常〉

お待たせしました。少しだけスランプが抜けたようです。

番外編【料理だよ！全員集合！】こうへん

〽前回のあらすじ〽

朱雋と皇甫嵩が何か企んだ！

次の日料理大会が開催されて案の定紀霊達は巻き込まれちゃったよ
どーしょ、どーしと！？

浅門汰斗先生一周年おめでとーございます！

そして会場に忍び寄る4つの影！？

それじゃあ、【料理だよ！全員集合！】こうへん。ハージマールヨー

〽〽料理会場横の特設ステージ〽〽

ステージ前の観客席を総立ちの朱雋軍兵士と皇甫嵩軍兵士が埋め尽
くす中、壇上にいる一人の少女が喝采を浴びていた。

人和「フレッツフレッツ頑張れっファイト！」

後ろに複数の太鼓をリズム良く叩く趙雲、胡弓で透き通る音色を奏
でる楽就、六弦琵琶を掻き鳴らす聖帝、手拍子を入れる司馬朗を引
き連れ笑顔で元気良く飛び跳ねる人和。姉の天和と地和が料理大会
に参戦する中、彼女は皇甫嵩の依頼（紀霊に無許可）で会場を沸か
せるソロライブを決行していたのだ。勿論構成人数の大部分が紳士
である朱儁軍と皇甫嵩軍の兵士達がそんな彼女の魅力に気がつかな
いわけがなく…

兵士「れんほーちゃん！俺だつ、タッチさせてくれ！！」

兵士「お、俺…もうロリコンで良いや。いや、ロリコンが良い！」

兵士「うっうーうっうー！やよ…れんほーちゃん！！」

上記のように覚醒済みの紳士から覚醒しそうな紳士まで、彼女に魅
せられファンになる紳士が量産されていった…

人和「琵琶ーソロ、かもーん！」

聖帝「任せろおおおっ！！」

聖帝が琵琶をかき鳴らし会場をヒートアップさせる中、そんな人和
達を呆気にとられて眺めていた紀霊と地和は互いに口を開いた。

地和「人和…凄く楽しそうね。」

紀霊「星と彩を見かけないと思ったたらあんなところに…っーか聖帝混じってねえか？…ん！？」

地和「どうしたんですかプロデューサー？」

盛り上がる特設ステージの反対側に振り返りじっと空を見上げる紀霊を不思議に思ったのか紀霊と同じ方向を見ながら何事かと質問してみる。そんな地和に対し紀霊は空を見つめたままボソリと呟いた。

紀霊「何か…来る？」

地和「え？」

何が？と聞き返そうとした地和だが、次の瞬間聞こえてきた爆音に驚き紀霊にしがみついた。不安がる地和を落ち着かせようと肩に手を置きそつと抱きしめてあげた紀霊はどこか懐かしい爆音にある…この事に気がつく。

紀霊「バイクの…エンジン音？」

本来この世界では聞くことのできない懐かしい爆音。その爆音が徐々に大きくなりそして…それは姿を表した。

ウヴオオオオオン！

何も無い空間からいきなり現れたそれは庭に着地し大きな砂煙を上げる。そして砂煙が晴れた時、そこに居たのは…

ジンキ「やってきました洛陽に！！見た目はこれだが怖がらないで！彼女はマゾだが気にしない！！料理大会と聞いてちや黙っていられない！！たちはなからお土産の吉備団子を持って只今参上！！」

瑠妃「ジンキさんの紹介にもありました！私がジンキさんの彼女でマゾな瑠妃です！！」

モヒ安「ヒヤッハー！俺たちは良いモヒカンだぜーっ！！」

どこかの学園のブレザーを来た少年と少年に抱きつくゴスロリ調の服で着飾った挑発の美女。そして少年と同じブレザーを来た十人程度のモヒカンがそれぞれバイクに跨っていた。

雷薄「なっ、なんと乱入者だあああっ！？大将っ、空からモヒカ
ンが！！って奴ですかー！？」

陳蘭「どうやら彼等は料理大会に飛び入り参加をしたいようだが…
どうします大将？」

突然の乱入者。しかも料理大会に飛び入り参加を表明しているとあ
って最初は戸惑っていた観客も徐々にボルテージが上がっていく。
そもそももつと色々突っ込みどころがあると思うのだが流石は朱
雫と皇甫嵩の部下達とでも言うべきなのかジンキ達の奇抜な格好や
爆音を轟かすバイクを気にせず何を作るか楽しみだ！といった雰囲気
を出している。そして参加承認の是非を何進が言おうとした時…

浅門汰斗先生「面白そうだから許可！」

何進「ちよー！？」

雷薄「はい、許可が出ましたから乱入歓迎ですよー」

何進「俺審査員長だよな！？許可の権限は俺だよな！？なんで「ち
よー」とまったー！！」…今度はなんだよコンチクショウ！！」

何進の悲痛な叫びの中、またもや上空から声が聞こえてきて全員が

上空を見上げる。

紀霊「…はあ!？」

浅門汰斗先生「あら、こりやまた随分と派手な登場だな…つかス
ターウォーズ？」

上空に居たのはまたもやこの世界には関係の無いはずの…十数隻に
も及び戦艦が浮いていた。そして中央に位置していた一番大きな戦
艦から二つの影が急降下して土煙を巻き上げ…るかと思いきや音も
立てずにずんなり着地。着地してきた男女は周囲を見渡して男性が
ふと指を天に向けて指すポーズを取って声を張り上げる。

楽毅「料理大会参加の為に…俺、参上！」

田単「同じく私、参上です。」

綺麗なローブを羽織るこの二人。先のジンキと言う少年御一行の事
は誰も知らなかったのだが今回の二人を知る人物が今回は居たよう
だ…

趙雲「おや、楽毅殿に田単殿。お久しゅう。」

楽毅「やあ、趙雲さんお久しぶり。この前のメンマ談義楽しかったよ〜」

趙雲「ふふ、また朝まで語り明かしたいものですな。」

太鼓の撥をくるくると回しながら周囲の人間を余所に親しく話す趙雲。あまりの超展開に読者どころか柳でさえも呆気にとられているというのにこの女は…正に全身これ肝也。とでも言えばいいのだろうか？

紀霊「誰かと思えば楽毅さんかい！っ！かそーだよな…こんな登場できるのはあんた位しか居ないのすっかり忘れてたよ…！」

楽毅「皆の驚く顔が見たいからやった。後悔はしていない（キリッ）」

紀霊「皆驚くどころか呆気にとられて思考停止しとるわ…！っ！かあの物騒な戦艦早く消してくれ！最近何か騒ぎが起きるとご近所さんからまた紀霊君が何かに巻き込まれたのか…って哀れむ表情してくるんだから正直嫌なんだよ…！」

「えー」と拗ねる楽毅をなんとか必死に説得する紀霊。楽毅はそんな紀霊に根負けしたのか渋々ながらも艦隊に何やら指示を送り始める。すると、全艦隊が一斉に反転を始め徐々に姿を消していき数分

後には何時もと変わらない青空が広がっているだけの光景が広がっていた。

楽毅「皆の驚く顔見ようと思ってやったけど…失敗失敗（ノ、）」

田単「失敗失敗じゃありませんよ將軍。楽しむのはいいですがもう少し紀霊君の心中を察してあげないといけませんよ。まあ、ここは皆の呆気にとられた間抜け顔を拝めたから良かったじゃないですか。」

趙雲「いやしかし、久しぶりに主の困る顔を沢山堪能できたので拙者は楽毅殿に感謝しますぞ。」

紀霊「可愛く言ってんじゃねーよ楽毅さん！！後、田単さん最初有難うと思ったけどふざけんな！それに星、お前後で俺の部屋来い。」

~~~~~数十分後~~~~~

全員が正気に戻り、楽毅、田単ペアが料理大会への飛び入り参加を浅門汰斗先生に許可した事により料理大会は一応の再会となった。そっぴゃおっちゃんがいじけて会場の隅にいたけど人和ちゃんが頭撫でて慰めてたな…十三歳の少女に慰められる髭面のおっさん…情

けないだろ？これでも大將軍なんだぜ？

雷薄「なんか料理大会がどうでもよくなりそうな位濃い展開がありましたがい加減料理大会を進めたいと思います！！」

陳蘭「と言うことで料理開始。」

~~~~紀霊と地和の場合~~~~

地和「プロデューサー、何を作りますか？と言っても私は大したものの作れないんですが…」

紀霊「俺だつて大したもののは作れないさ。取り敢えず鳥肉と卵を煮込んだスープに米を入れた雑炊を作るとしよう。それと、ちーちゃん料理ならどんなに豪華な料理よりも美味しいと思うぞ。」

地和「なっ！？何言ってるんですかプロデューサー！！！！」

紀霊の台詞に顔を赤らめつつも既に動き出した紀霊の姿を見て地和は大きく深呼吸を一回。気持ちを切り替え紀霊の手伝いへと動き始めた。

~~~~~孔融&天和の場合~~~~~

天和「慎ちゃんは料理とかやったことあるかしら？」

孔融「あー、料理は顕に作ってもらっている（作らせている）から  
やったこと無いな…役立たずですいません天和さん。」

天和「あら、初めてなのね〜ならお姉さんが手取り足取り教えてあげるわ。今日は簡単に炒め物でも作るうかしら〜」

孔融「任せてください天和さん！」

~~~~~司馬進&真の場合~~~~~

真「今日は甘味系で攻めようと思うんだ。杏仁豆腐とか手堅いところ
で攻めるよ社兄！」

司馬進「料理の腕は顕に遠く及ばん俺だが…俺とて司馬家の男！（
食材を）無駄死にはさせん！！」

やしまこ「ふはははは！制圧前進あるのみ！！」

~~~~公孫越&関 羽の場合~~~~

公孫越「さて、料理なんだが…男の俺よりも愛紗の方が美味しいの作れるだろっし愛紗さんに任せるよ。」

関羽「承知しました！この関羽、全身全霊の力をもって兵士達を天にも昇るような料理を振舞ってみせましようぞ！！」

兵士達「（本当に天に昇っちゃうから勘弁してくれええええええええええ！！！！）」

~~~~ジンキ&瑠妃の場合~~~~

ジンキ「さて、飛び入り参加してみたはいいものの…何作ればいいんだろ？」

瑠妃「吉備団子がありますけど…流石に持ってきたのじゃ駄目ですもんね。少し食材見て考えてみますからジンキさんは少し待っていて

ください。」

数分後：何かを手にもった瑠妃がジンキの下に駆け足でやってきた
瑠妃は

瑠妃「ジンキさん今すぐ私を縛り上げてください!!」

ジンキ「食材見に行ったはずなのに何でそうなるの!?!」

瑠妃「実はあそこにいる趙雲さんって方は毎日ご主人様が鞭や縄を使って御仕置きをしてくれてるそうです。そんな事聞いたら…私黙ってなんていられません!!」

ジンキ「瑠妃さん落ち着いてっ、周りに人いるから!!」

瑠妃「ジンキさんにされるなら構いません！寧ろ人前でやるってドキドキ感が良いです!!」

縄を無理矢理手渡そうとする瑠妃と必死に止めようとするジンキ、
そんな二人のやりとりは他の選手にも見えているわけで…

紀霊「……………」

地和「…プロデューサー、はそういうのがお好きなんですね。」

紀霊「お、時に落ち着けちーちゃん。包丁は人に向けるものではなくまな板の上にあるお肉に向けるものであつて…」

何故か蔑んだ目をしながら自分に包丁を向ける地和を落ち着かせようとする紀霊だが、紀霊の台詞を聞いた地和から「カチン」と幻聴が聞こえてきたと思つたら…

地和「誰がまな板ですか！…どうせ私には削ぎ落とすほどのお肉もありませんよ！…」

紀霊の下腹部目掛けて神速の一撃を突き刺す地和。

紀霊「何故か知らんが地雷踏んだ！？つて痛えええつ！…」

下腹部をサクつと刺された紀霊だが、72が悪かつたのかのかわからず理解できるはずもなく傷口を抑えながら必死に地和を落ち着かせようとしている。いや、痛快痛快。ざまーみる。

雷薄「おおーつと！紀霊&地和ペア、優勝候補筆頭がまさかの仲間

割れか!？」

浅門汰斗先生「なんかnice boardされちゃってるけど紀
霊君なら仕方ない。さあ、気にせず他のペアを見ていこー」

~~~~楽毅&田単の場合~~~~

肉焼きセットを使い目を閉じた状態で骨付き肉を無言でくるくる回  
す楽毅とその横で野菜の盛りつけを淡々とこなす田単。そんな中、  
目を見開き楽毅が肉を天に向かって持ち上げる。

楽毅「上手に焼けましたー」

田単「將軍、今回は「ウルトラ上手に焼けましたー」じゃなきゃ  
駄目です。もう一度やり直してください。」

楽毅「えー、別にこんがり肉Gにしくなくても良いじゃ「やり直して  
ください。」はーい。」

田単にダメ押しを喰らい、楽毅は渋々新しい生肉を取り出し先ほど  
と同じように肉を焼き始めるのだった。因みに、今回使われている  
肉焼きセットは携帯肉焼きセットであり、それでこんがり肉Gを作

れという無理ゲーだと言うことを彼は知らなかった…（田単さんは知っていて敢えて隠しています。）

~~~~~審査員席~~~~~

雷薄「どうやら各ペアが作る料理を決めて色々と動き出しましたね
〜審査員の方々はどう思いますか？」

朱雋「頭が米類で慎が主菜、社が甘味ってそれぞれ被らないように
上手くやっているとと思うよ。頭の料理は優勝候補筆頭だと思ってたけど…あの程度で負傷するんじゃ勝負はもつれ込むかもね。ひ弱だな
ー頭。」

皇甫嵩「頭君も私達みたいに包丁くらい刺さってもすぐ回復させればいいのに…あ、飛び入り参加組みの楽毅さんはシンプルに肉料理、
ジンキ君のときは…女体盛り？」

陳蘭「ジンキ君が必死に止めようとしているが彼女の方が推し進めているな…放送コード的にも衛生的にも彼には頑張ってもらいたいものだ。それと朱雋將軍と皇甫嵩將軍、貴方達の定義で言ったら人類皆ひ弱です。」

何進「おい、あの紅髪坊主のどこ…鍋から紫色の煙出てないか？」

浅門汰斗先生「さっき鍋が爆発していたからその影響では？見たところ使っている食材は普通なのに何であることになるのか不思議でしょうがないね…」

雷薄「な、なんか料理を振舞われる兵士達に同情してしまいそうになつてきましたが構わず続けます！とここで私実況の方休憩して人和ちゃんのライブ見に行つてもいいですか？ほっぺぶにぶにしたいです。」

浅門汰斗先生「あ、俺もー」

陳蘭「雫も先生も駄目です。ここは私が行くから安心して実況と審査をしてくれ。」

何進「お前等…真面目に仕事しろ。」

呆れ返つた何進の冷めた突っ込みに残念そうな表情を浮かべる三人であつたが

雷薄「おおっと！またもや紀霊&地和ペアにトラブル発生の模様です！…」

会場で新たな動きが出たことにより実況が再開された…

~~~~紀霊&地和~~~~

地和「くっ…」

包丁（新品）を使い鳥肉を一口大の大きさに切っていた地和だったが、手元が狂ったのか自分の人差し指に小さな切傷を付けてしまう。自分の油断で起こした失敗と指から伝わる痛みで顔を顰める地和だが、不意に紀霊が地和の腕をそつと掴んだ

紀霊「ん…」

地和「え？ちよ！プロデューサー！？」

赤い血で滲む人差し指を確認した紀霊は躊躇なく傷ついた指を自分の口へ…

雷薄「こっ！これは指ちゅぱだああああっ！！やばい！お姉さんヤヴァイです！！今度実践してみようと思います！！」

わずか数秒にも満たない行為。しかし地和にはその数秒が永遠のように長い数秒の後、紀霊の口が静かに離れる。

地和「あ……／／／」

完全に滲み出ていた血が舐め取られた指とその指が先程まで含まれていた紀霊の口を交互に見つめ少し残念そうな表情を浮かべた地和だったが、そんな地和に気づかない紀霊は懐から絆創膏を取り出して手馴れた手つきで地和の指へと巻いていく。

紀霊「本当なら口でやるとよろしくないんだが鳥肉まみれのままよりはマシだろう。まったく、包丁の扱いには細心の注意を払わないとダメだぞ地和。って……地和、どうした？」

地和「……／／／／／」

紀霊「お〜い、ちーちゃん？」

地和「へっ？あ、あぁっ何でもないれふよプロレウサー！！／／／」

顔全体を茹で蛸のように真っ赤にしてあたふたしながらも何とか答えようとする地和だが呂律が回らず混乱状態のようだ。流石紀霊、

俺達の出来ないことをやってのける。そこに痺れぬ妬ましい。

紀霊「まあ、無理しない程度にしてくれよ？後は俺がやっておくからちーちゃんは休んでなさい。」

地和「ひゃ…ひゃい／＼／」

浅門汰斗先生「甘い…甘いぞあそこのペア！けしからん、もっとやれ！！」

案の定と言うべきかお約束と言うか…紀霊達の桃色空間は他の選手にも見られていたのだった。となれば…

~~~~その頃の姉者達~~~~

西涼、董卓軍の訓練場に響きわたる撃音。華雄、張遼、呂布の三人は彼女達の部下と主である董卓がじつと見守る中、三つ巴の一騎打ちを繰り広げていた…

華雄「うおおおおおおおっ！！」

張遼「うりゃあああああああつ!！」

呂布「……………えい!！」

兵士「凄い…將軍達だ…」

兵士「ていうか何であんな機嫌が悪いんだよ…また弟君が何かしたのを感じたのか?」

兵士「多分その通りだと思っぞ。くそっ、この後予定されてる俺達の訓練絶対厳しくなるぞこれ…」

董卓「うう……顯さん。三人が怖すぎますよ」

未だ激しくぶつかり合う三人を涙目で見つめる董卓はこの状況を打破できるであろう唯一の人物。紀霊の顔を思い浮かべながら体を震わすのだった。因みにこの状態の董卓を見ていた兵士達により董卓軍兵士の間で紀霊が更に妬まれる存在になったことはまた別の話…

~~~~~  
【洛陽】孔融&天和の場合~~~~~

孔融「ひゃく、頭の奴殺してえ…」

天和「……………えい」

紀霊達を見つめる孔融と紀霊達を交互に見ていた天和は何かを思いついたのか、未だ紀霊達を見ている孔融の人差し指へと包丁を軽く振り下ろす。勿論完全に油断していた孔融が避けられるわけもなく…

孔融「痛つてえええ!?!」

ほんの少しだけ指に切り傷が出来上がり徐々に徐々に赤い血が滲み始める。痛みと不意打ちに驚く孔融に天和は

天和「あらあら〜手が滑っちゃいました」

どうにもわざとらしいが天和はすかさず孔融の手を掴むと

天和「ごめんなさいね慎ちゃん。お詫びに…んっ」

雷薄「こっ今度は慎ちゃんが天和選手に指ちゅばされているうう! ?頂戴! 私にもその役目頂戴!!」

孔融「ててててっ天和さん何するだあああ!？」

~~~~司馬進&真の場合~~~~

司馬進「何をしてるんだ彼奴等は…」

真「…………ア、間違工テ指切ツチャッター」

あからさま過ぎるカタコトながらもほんの少しだけ血の滲んだ指を司馬進に見えるようにする真。彼女もまた司馬進からの指ちゅぱを欲しがる欲しがり勢であり…

司馬進「ん、まったく…変なところで抜けてるよなお前。ほら、絆創膏でも貼っておけ。」

そんな真の乙女心なぞ露知らず。誠に対して絆創膏を一枚手渡した司馬進は果物の皮剥き作業を再開する。こうなると察しの良い読者方は次の展開を予想できるだろう。

真「や…社兄の馬鹿ああっ!！」

司馬進「なっ！？こら！いきなり関節技はやめあがああっ！！夕
ワープリッジなぞ何時の間にか」

【ゴギッ】

司馬進「でゆあああああっ！？」

浅門汰斗先生「司馬進君、君の死因は唯一つ…たった一つのチャン
ブル（カオス的な意味で）な答えだ。…君は死亡フラグを建てす
ぎた！！」

~~~~公孫越&関羽の場合~~~~

大きな瓶にグツグツと煮え滾る紫色の液体。いや、液体と言うには  
ドロドロと滯みが有りすぎる気がするが関羽はその液体を小皿に取  
り分け、口に含んで無言で頷く。どうやら料理（？）は完成したよ  
うで再度小皿に少量を取り分けると自分を眺めている公孫越の元へ  
と歩み寄る。

関羽「紅蓮殿！でっ、出来れば味見などをお願いしてもよろしいで  
しょうか！！」

公孫越「ほんじゃ一口頂きます。」

数十歩離れた兵士達はそんな二人のやりとりを見つめ、公孫越が先立つのを心から合掌。そして次は自分達の番か…と覚悟を決める者、公孫越が倒れることで料理を振舞うこと自体が有耶無耶になつてくれるという希望に縋り付く者と様々な心情の中、公孫越がついに関羽の料理を口に含んだ。

兵士「公孫越エ…」

兵士「公孫越君、三日は君の勇姿を忘れないよ…」

しかし、公孫越の反応は兵士達を裏切った。

公孫越「うん、程よい酸味と渋み、そして後から来る辛味がいい味出していると思いますよ。愛紗さんの旦那になるやつが羨ましいです。」

兵士「S「エエエエ、（、）エエエエ」」

関羽「そ、そうですか！桃香様も白蓮殿も感想を言ってくれなかったので嬉しいです／＼」

兵士b「何！？どういうことなの！？」

兵士a「落ち着け兄弟。もしかしたら見た目はアレだが味の方は意外とまともかもしれん。」

兵士k「だったらあんな美少女が作った手料理を食べ無い手はねえぜ！」

兵士a「我慢なんてしねえ！たらふく食ってやる！！」

自分達に振舞われる料理が安全だと確認できたからなのか一斉に関羽達の元へと詰め寄る兵士達。

兵士「は、はやくその料理を食べさせてくれ！！」

兵士「馬鹿！俺の方が先だ！！」

関羽「う、うむ。沢山作ったからそんなに焦るでない。」

公孫越「よし、配るからちゃんと並んでくれよ。」

兵士「S & Mヒ安」ヒヤッハー!!」

数分後…

兵士「こ、こんな筈…ゲフッ」

兵士「あ、婆ちゃん久しぶり…こっち来ちゃ駄目？久しぶりなんだし…話デも…」

数分前まであんなに元気だった…数分前までモヒカンと化してヒヤッハー！と叫んでいた兵士達は今や無数の死体（仮）となり悲惨な光景を作り出していた…まさにその光景は地獄であり、事態に気がついた樂就が急遽生き残った兵士とモヒ安を指揮して懸命の救助を繰り返す事なきを得たという…関羽の料理の腕と公孫越の味覚、おそれるべし。

~~~~~審査員席~~~~~

雷薄「え〜、なんかこれ以上死体増やされたら洒落にならないんで結果発表の方に移りたいと思います。」

陳蘭「まずは審査員特別賞を浅門汰斗先生に発表して頂きたいと思
います。先生、お願いします。」

全選手が固唾を呑んで見守る中、朱儁と皇甫嵩による太鼓でのドラ
ムロールが高らかに会場へと響きわたる。音が止むと同時に中央で
立ち止まった浅門汰斗先生は一度大きく深呼吸。そして

浅門汰斗先生「えー、本日のピタリ賞は「これそういう番組じゃね
ーから!!」…もう少し気楽に行こうよ紀霊君。あー、ごほん。そ
れでは特別賞と副賞の金一封は…」

全員「…(。A。;)ゴクリ」

浅門汰斗先生「特設ステージで非常に素晴らしいライブを披露して
くれた人和ちゃんに差し上げたいと思います!!」

人和「え？私れすか？」

選手、審査員一同総ズッコケ。まさかの受賞者にあの朱儁と皇甫嵩
すらどんがらさせるといふ誰も予想していなかった展開に選手の気
持ちを代弁するのごとく司馬進が声を張り上げた。

司馬進「おいおいっ！！選手に渡すべき賞じゃないのかそれは！？」

浅門汰斗先生「不正はなかった（キリッ）」

孔融「不正じゃないじゃねーか！！」

浅門汰斗先生「うるせー！どうせ皆優勝狙いなんだから特別賞は人和ちゃんに上げてもいいだろうが！」ほら、紀霊君も人和ちゃんのプロデューサーとしてなんか言ってるやれ！！」

紀霊「あーもう、特別審査員権限なんだし良いじゃんもう…それに会場沸かせて盛り上げたのは事実だし十分受賞の資格はあると思うぞ？それでも文句ある奴は前に出る。秘孔突ききってやる。」

選手一同（天和、地和除く）「文句なんて有りません！どうぞどうぞ！！」

なんだか良く理解しないまま浅門汰斗先生から賞状と金一封の入った封筒を受け取りご機嫌な人和。余程嬉しいのか先生にハイタッチを求め、そして先生もそれに応じる微笑ましい光景が壇上で繰り広げられたあと、雷薄達からマイクを奪い取った朱雫と皇甫嵩が声を張り上げる。

朱雋「あーあーあー、よし野郎ども！優勝者の発表だー！！」

皇甫嵩「温泉宿泊券をこの手に取り戻せー！！」

選手一同「ヒヤッハー！！」

何進「それでは優勝者を発表する！優勝者は…」

紀靈「……………」

孔融「（；。 ）ゴクリ…」

司馬進「……………ふん。」

会場がシンと静まり返る中、何進の口から優勝者の名前が叫ばれる。

何進「秘伝のフカヒレとろとろ煮込みを作ってくれた【洛陽一番】の店主「伊准」選手及び何進邸メイド「貂蝉」選手の二人だ！！」

伊准「ん、俺か…悪いな坊主共。」

貂蝉「まあ、私と伊准ちゃんなら当然の結果よね。」

包丁をクルクルと回しながらニヤリと微笑む店主の親父さんと今回は以前よりもさらに短い丈のミニスカメイド服を身に纏う貂蝉。この二人が発表を聞いて前へと躍り出た。

紀霊「つておいしいいっ！親父さんと貂蝉出場してたのかよ！確かに親父さんの腕なら納得できるけど展開的には納得いかねえぞ！」

貂蝉「やあね〜紀霊の坊や。紹介は省略されちゃったけど私たちだってちゃんとしたのよ？」

司馬進「お、俺は…この化け物に負けたのか…」

貂蝉「あら、可愛らしいメイドは居ても化け物なんて何処にも居ないわよん？」

色々と衝撃で凹む選手達を尻目に壇上へと上がっていく二人。ここで改めて言おう。今日の貂蝉が着ているメイド服はスカートの丈が普段よりも異常に短い。数値的に言うならば当社比25%カットだ。そうなるは何進が待っている壇上へと上がる際に…

紀霊「いかんっ、皆目を閉じろっ!!」

兵士「ぎゃあああっ!!目がつ、目があああっ!!」

兵士「あ、アハはハハハは…記憶、記憶を失え俺えええっ!!」

スカートの下から下着が見えてしまうわけだ。直前に危険を察知した紀霊が周囲に注意したので近くにいた選手達は全員バルスされずに済んだが、観客として紀霊の忠告に気づかず優勝発表を見ていた兵士達の目には世にも恐ろしい光景が広がったことだろう。

何進「何やってんだかあの阿呆共は…つとすまねえな伊准殿、貂蝉。料理美味かつたぜ。」

伊准「おうよ、坊主の料理も中々だがまだまだ負けねえってんだ。大将も今度はウチに食べに来な、洛陽で一番上手い飯食わせてやるよ。」

貂蝉「大会参加を許可してくれてありがと何進ちゃん。今度は甘味でも作るわね。」

何進から賞状と商品である温泉宿泊券を受け取った二人は選手へと

向きを変え固く握った拳を天へと突き上げる。

紀霊「やれやれ、親父さんに勝つにはまだまだ遠いか…優勝おめでとうー！」

最初はただ面倒くさいとしか思わなかった今回の企画。だが終わってみると色々大変ではあったが楽しい思い出ができたこと、普段は出来ない体験をした事を首謀者である朱雋と皇甫嵩に少しでも感謝をしつつ優勝者である二人へと紀霊は惜しめない拍手を送った。

雷薄「それでは、【料理だよ！全員集合！】こうへん、閉幕です！」

~~~~おまけ~~~~

楽毅「んじゃね紀霊君。」

紀霊「お土産のワインありがとうございました。まあ、今度は艦隊連れずに来てくださいよ？」

それだけ交わすと楽毅と田単は迎えに来た小型船へと乗り込み宙へと消えて行く。

公孫越「えーと皇甫嵩將軍の言うとおりだとこの投石器で飛べば幽州に帰れるんだとさ。」

関羽「なんでも時空を超えるとかなんとか言っていましたけど…まあ、紅蓮殿とでしたらどこまでも行きましようぞ／＼／＼」

皇甫嵩「それじゃ飛ばすよ〜時空跳躍型投石器「蛇無派亜」…3、2、1、GO!!」

皇甫嵩の掛け声と共に公孫越と関羽は離れないよう抱き合ったまま空へと射出。そして空高く飛び上がったとき、空中で二人の姿は消えた…

皇甫嵩「ん〜、成功成功」

中庭の隅でモヒ安が集合し、ジンキがバイクの簡単な点検を行っている中、趙雲と瑠妃は少し離れた場所で何やら熱く語っていた。

趙雲「ほお、瑠妃殿の世界にはかのような道具が…」

瑠妃「はい、けどこの世界には私の知らないような縛り方があったんですね。とても勉強になりました。」

趙雲「ふふ、これも主と拙者の研究と実践を重ねた成果で御座る。何、貴殿と貴殿の伴侶ならすぐにでも極められよう。」

どうも自分にとっては良くないことを話し合っただけで二人を無視し、自分たちも下の世界へと帰ろうと思っただけでシンキは不思議そうな青ざめたようななんとも言えない表情を浮かべているのに楽就は何事かと近寄っていく。すると

シンキ「…あれ？」

楽就「どうしたんですかシンキさん？」

シンキ「…どうしよ、元の世界帰れないみたい。」

楽就「えええええつ！？ 頭様！ 大変ですーっ！！」

【料理だよ！全員集合！】ころへん 完



## 番外編【料理だよ！全員集合！】こうへん（後書き）

今回の強敵とてな先生

南斗鳳凰拳・聖帝 サウザー先生

代表作

- ・『烈火の拳聖』 魔法少女リリカルなのはStrikers
- ・ティンつときた！プロデューサー？

もはや強敵というか盟友。柳の作品とも絡みの多く趣味も合う（特にアイマス）サウザー先生です。そして司馬進です。

元々は読み専だったらしいですが意を決して作家デビュー。読み専の時から柳の作品を読んで下さったらしく、その事実を聞いた柳は嬉し恥ずかしで大変な事になりました（笑

因みに現在連載中の作品【『烈火の拳聖』 魔法少女リリカルなのはStrikers

】はサウザー先生のギンガスキーが全面に出た愛のある作品になっています。

メッセでの交流も盛んで作品クロスも時たま組ませていただいている最も親交の多い作者さん。サウザー先生、いつもありがとございます。

尚、サウザー先生の辛口活動報告（別名毒吐きの間）では中々の毒舌を披露してくれます。いいぞ、もっとやれ。

さて、実は別の番外編（柳の一周年記念作品）と孔融メインの番外編も企画しております。なんとか本編も番外編も早く投稿できるよ

頑張っていると思います。

ご意見、ご感想等お待ちしております。

【司馬進の受難、初めての实战・前編】（前書き）

柳（喫煙者）「そっぴやお前にZippoライター上げたよな？」

友人（非喫煙者）「おう、手慰み用なのにわざわざサンキュー。」

柳「ライター石とか紐変えてなかったから交換してやる。貸せ。」

~~~~~柳整備中~~~~~

友人「おおっ！着きやすくなったぜありがとな！」

柳「何、上げた奴が不良品だなんて嫌だからな。さて俺のも整備する。そんなことより桃鉄やろうぜ！！」∴わかったよ。」

~~~~~そんな柳と友人の日常~~~~~

本編です。スランプです。あばばばば…

【司馬進の受難、初めての实战・前編】

~~~~河代~~~~

司馬家や城から数里ほど離れた荒野、その荒野に数百名の男達が立っている。彼らの眼前には、彼らの同胞であり獲物を探しに行っていたはずのモヒカン達が物言わぬ冷たい死体となっている状況が広がっている。

モヒカン「ひでえ、まるで地獄じゃねえか…」

見れば体が十字に切り裂かれバラバラ、そこから目を背ければ肉の焦げる悪臭を帯びた黒い塊、そしてその奥には外傷の無いモヒカン達から流れ出た血が地面を赤く染める。

????「おい、手前等…こりゃどういうことだ？」

モヒカン「頭あ？俺たちにも分からねえ、人とは思えねえ殺し方だ…」

頭と呼ばれた大男はゆっくりと死体達を見渡し、拳を力強く握る。

頭「許さねえっ！山東賊が張烈の子分に手を出したこと…後悔させ

てやる！！お前等つ、付近の城を襲撃する手筈を整える！！」

~~~~司馬家・玄関~~~~

周囲を圧巻するほど大きな門、そして並び立つ壁に施された様々な装飾。そして門から見える内部にはこれまた美しく整えられた景観を持つ花や木達。ここは河代随一の名家である司馬家の屋敷で今回の目的地。いわば司馬進の実家だ。

紀霊「到着したな……」

孔融「ああ、なあ……ここ来るまでにモヒカン何人倒したっけ？」

司馬進「俺は百から先は数えるのをやめた……取り敢えず中に入って休んでくれ。と言いたいんだが……」

司馬進の視線の先を見る紀霊と孔融は二人の門番が此方を見ていることに気付く。流石は名家ともなれば門番の一人や二人居てもおかしくはない。そう思っていた紀霊達だが

門番・右「デーフェンス！」

門番・左「デイーフェンス！」

中腰になり此方に向かって【ふしぎなおどり】をしている姿を見た瞬間自分たちの認識が甘かったのだと確信。そして司馬家に対する評価を【凄く厳格な名家】から【凄く面妖な名家】へと改める。

司馬進「暫く見ないうちに我が家の様子が色々と豹変していた。…死にたい。」

孔融「まあ、なんか社の家でも退屈せずに済みそうだから俺としては構わないんだが？」

紀霊「余計なフラグ起てるな憤。…取り敢えず社を引き渡して休憩しようぜ。」

紀霊の言葉を合図に二人は未だ「デイーフェンス！」と叫んでいる門番へと歩み寄る。すると

門番・右「おかえりなさいませ司馬進様デイーフェンス！」

門番・左「そしていらっしやいませ孔融様とその他一名デイーフェ

ンス！」

不思議な構えはそのまま爽やかな笑顔を浮かべる筋肉隆々の二人。どうやって紀霊達より早く出来たのかは知らないが恐らく司馬朗からの連絡が家の方にも届いていたのだろう。

司馬進「う、うむ……」

紀霊「そのデューフェンスって語尾！？っていうか左の方、その他一名って扱いが雑すぎるだろ？なあ、息を吐き続けるのと吸い続けるの……どっちがいい？」

孔融「まあまあ、いつもは主人公なんだし今日くらいは我慢しろよ。ほら早く中入って休もうぜ」

紀霊「解せぬ……」

~~~~~司馬家・客間~~~~~

河代有数の名家だけあり紀霊達に通された客間は彩り鮮やかな色調の中で様々な装飾品がこれでもかとはかりに置かれており、正に豪

邸と言う印象を与えている。

紀霊「どうして金持ちってのは派手な感じにするんだか…無駄たる
実際。」

司馬進や孔融と違い庶民的な家庭で日々を過ごしてきた紀霊は価値
観の違いからか呆れ口調で一人ごちる。

孔融「俺の実家だってこんなもんさ。ま、馬鹿にされないためにも
見栄とか張るのって大事なんだよ。」

紀霊「そういうもんか、まあ俺には理解出来んがな。」

孔融「ぶつちやけ俺ん家はこんな金持ってるんだぜ舐めんなよゴル
ア！って奴だ。理解しなくて正解だと思うがな。お前もそう思うだ
ろ社…って」

そんな紀霊に分かり易く説明する孔融は司馬進に同意を求めて振り
返るが

孔融「社の奴、いつの間にか居なくなっただが…」

先程まで内装を懐かしむよう見ていた司馬進だがいつの間にもやら部屋から姿を消していた。

紀霊「彼奴の実家だし彷徨いいても問題無いだろ。俺達は部屋で待ってりゃ良いさ。」

紀霊はそう言いながら煙草を手に取り部屋の外で火を着けようとした時

司馬進「顕っ、慎！助けてくれええっ！！！」

屋敷に響き渡る司馬進の助けを求める絶叫。

紀霊「っ！？慎、行くぞ！」

孔融「合点だ！」

即座に孔融に指示した紀霊は司馬進の声が聞こえた方向へと駆け出した。

~~~~司馬懿の部屋~~~~

司馬懿「あぁもうっ、大声出したら駄目でしょーちゃん！沙羅ちゃん口塞いで！」

張春華「わかった。社君、ちょっとだけ我慢してね。」

司馬進「姉上達やめっんぐうっ!?!」

司馬懿の指示により司馬進の口に猿ぐつわを噛ませる張春華。見れば司馬進は両手両足を縛られて身動きが取れない状態である。そんな司馬進の姿に満めき声を出すことしか出来ない状態である。そんな司馬進の姿に満足したのか司馬懿はうんうんと頷きながら司馬進の顔を手でグイッと上げる。

司馬懿「んふふ〜良い格好だよーちゃん。お姉ちゃん興奮して我慢しきれないよ…沙羅ちゃん！早くやーちゃんに薬打ってヤっちゃおうよ。」

張春華「けど良いの？社君の友達が助けに来るかも…」

司馬懿「大丈夫大丈夫。誰だか知らないけど私達とやーちゃんの情事は邪魔させないから。それに今頃は仕込んである罠に「残念だが邪魔させて貰うぜ?」!?!」

その言葉と共に扉が開き二人の青年が部屋へと入ってくる。そんな邪魔者を睨みつつ構える司馬懿と張春華。貞操の危機に駆けつけてくれた頼もしい親友を見つめ心の中で感謝する司馬進。そんな三人を見て右目付近に傷の有る青年が不敵な笑みを浮かべ言い放った。

紀霊「落とし穴に虎ばさみ、挙げ句にや人を使って足止めか…その程度で罨だあ？俺を罨にかけたきや仕込み槍位はして貰わなきゃな…」

孔融「普通の人間からすりやさっきの罨は充分驚異的なんだがな…まあ頭が全部看破してくれたから命拾いしたよ。」

紀霊と孔融。この二人が司馬懿の予想を裏切り彼女達の目の前に立っていた…

司馬懿「そんなっ、ちゃんと殺傷能力も高めのやつ揃えて見破れないよう偽装したのに…」

張春華「ちゃんとトリカブトの液塗っておいたのに…残念。」

自信満々で仕掛けた罨故に看破された事にショックを受ける二人だが、色々と危ない言葉に若干頭痛を感じながらも紀霊は口を開く。

紀霊「足止めどころか殺すの前提かよ！？社、お前が家出した気持ちに少し共感できそうだぜ…なあ慎…？」

呆れつつも隣にいる孔融へと声を掛けた紀霊だが、

孔融「……………畜生、また姉かよ…なんでだよ、何で顕や社には姉が居て俺には居ないんだよ…俺だってな、ガキの頃は近所に幼なじみの姉ちゃんいたんだよ。けどどっかの寺に修行しにいくとか行つて出て行つちまうし…不公平だ…顕と社なんざ爆死しちまえば良いんだ…そうだ今度発明品の実験とか言つて闇に葬れば…」

独自に搭載している姉センサーが司馬懿と張春華を司馬進の姉と判断したのか今にも嫉妬でダークサイドに墜ちていきそうな勢いで何やらぶつぶつと喋っている孔融の姿。流石の紀霊もそんな孔融を見て頬を引きつらせてしまふ…

司馬懿「何しに来たのよあんたら！馬鹿！馬鹿よあんたらっ！こつちは六年振りの再会でやりたいこと一杯有るっていうのに何で邪魔すんのよ…！」

張春華「落ち着いて柩、彼等は社君を家に連れてきてくれた人。邪魔だけどそこまで邪魔者扱いしちゃ駄目…！」

紀霊「いや、もう素直に邪魔だつて言ってくれて良いよ…取り敢えず、落ち着いて話をしよう。ちゃんとした理由さえ聞けば俺達だつて邪魔しねえさ。」

~~~~司馬家・客間~~~~

司馬懿「私は司馬懿年齢は19で、変態兄貴（司馬朗）の妹でや〜ちゃん（司馬進）のお姉ちゃん兼お嫁さんよ。」

張春華「張春華、枢（司馬懿の真名）の幼なじみで親友です。」

二人から自己紹介を受けた紀霊は改めて二人を見やる。

司馬懿はかぐや姫のようなすらりとした綺麗な髪を持ち目はくりっとして可愛らしい見た目をしているが、どこをどう見ても19歳とは思えない程幼い見た目は鼻屑目に見ても13〜14歳、下手すれば幼女と言われても疑問に思わないほどだ。隣に座る張春華はそんな司馬懿とは逆に女性には珍しく紀霊と同じ位の身長で司馬懿と同じく太股付近まで伸びるすらつとした綺麗な長髪。そして何より子供らしさの残る司馬懿とは違いスタイルの良い身体に加え大人の女性といった雰囲気漂わせている。

紀霊「この国の軍師…ロリの割合多くね!？」

司馬懿の自己紹介に思わず突っ込む紀霊。彼の頭の中ではこの大陸に居るであろう「あわわ」やら「はわわ」と言って驚く某軍師コンビが浮かんでいるのだろう。

しかしそんな紀霊の行動を他の人間が理解できるはずもない。

孔融「何言つてんだお前…最近仕事し過ぎじゃねえの?少しは休むよう社も言つてやれよ。」

司馬進「確かに頭は働き過ぎな気はするが…何故俺は縛られたままなんだ!？」

見れば司馬進、猿ぐつわは外されているものの未だに両手両足を縛られた状態で椅子に腰掛けている。当初は司馬懿達に対し紀霊が拘束を解くよう交渉していたのだが姉二人は頑なに拒否。それでも粘りの交渉を続けた結果、猿ぐつわを外すという譲歩までこぎ着けたのだ。

紀霊「我が儘言つな。それでもかなり譲歩して貰ったんだからよ…」

張春華「結構譲歩したんだよ社君。だから我が儘なんてめっ、だよめっ。」

宥める紀霊と社の額を指で一押しし子供に言い聞かせるように諭す張春華。張春華の行動はお姉さんそのものであり紀霊はふと自分の姉を思い返し懐かしさに浸る中、孔融が最もらしい疑問を二人に投げつけた。

孔融「んで、社のお姉さん二人に聞きたいんだがさ…何しようとしてたんだ？」

司馬懿「は？何って男女の営みに決まってるでしょ？」

投げつけた疑問を見事に打ち返す司馬懿。血の繋がった実の姉が放った爆弾発言に司馬進は顔をしかめ、孔融はあんぐりと口を開けてポカンとし、張春華は司馬懿の発言に同意を示すようウンウンと頷く中、紀霊は頭に手を当てぼそりと呟いた。

紀霊「もう少しマトモな姉は居らんのか…まあ、そういう理由なら邪魔して悪かったな。」

司馬進「頭っ！？お前何を!？」

司馬懿「あら、ガツチガチに堅いと思ったら意外と話が解るじゃない。」

紀霊「俺も姉を持つ身だからな、姉がしたいことに答えるのも弟の役目さ。」

姉を止めてくれるだろうと考えていた司馬進だが、紀霊の予想外過ぎる返答に必死の形相で訴える。

司馬進「馬鹿者おおっ！！実の姉だぞ！血の繋がった姉なんだぞ！？」

孔融「そつだぞ頭！つーか近親相姦！！倫理とかヤバいからっ！」

司馬懿「近親相姦？何それ美味しいの？それに倫理は破るために有るんだよ！（キリッ）」

張春華「それに私と結婚すれば大丈夫。世間的には問題無い。」

司馬進「大丈夫じゃない大問題だ！！」

紀霊「正直阻止に回ったら面倒臭い事になりそうだからな。大人しく頂かれてしまえば丸く収まるだろ？」

投げやりになりつつある紀霊に文句を言おうとした司馬進だが侍女が青ざめた顔で部屋に駆け込んで来た事で事態は急変する。

侍女「司馬懿様！張春華様！賊がつ…賊が近くの集落を襲撃しております！安全な場所まで避難を！」

司馬懿「はあ！？近くに河代の官軍は居ないの！？」

張春華「枢、今は逃げないと…皆急いで準備して。」

取り乱す司馬懿を宥めつつ侍女に指示を出す張春華は紀霊達に振り返る。

紀霊は無言で頷き司馬進を縛る縄を短剣で斬り、孔融は三人の荷物を纏め避難の準備をテキパキと進めていく。

張春華「避難の準備が出来次第一番近くの城に行く。三人も付いて来て…」

未だに憤慨して喚き散らす司馬懿を抱え、部屋から早足で退室する張春華の背を見ながら紀霊は煙草に火を着け白煙を口からゆっくりと吐き出し…

紀靈「どっちにしる面倒臭い事になりそうだなこりゃ…慎、社！俺達も急ぐぞ！」

愛槍の三華尖を握り締めながら外へと駆け出していった。

【司馬進の受難、初めての实战・前編】完。

【司馬進の受難、初めての实战・前編】（後書き）

今週の強敵な先生

〜今回はお休み〜

一応今日で投稿一周年となりました。

こんなにも長いこと書き続けられたのは読者の皆様方、色々とアドバースを下さった先生方のおかげです。

最後まで読んだ人が楽しめるような作品を作っていけるよう頑張ります。

今後も【ジョインジョインジョインキレイ】を宜しくお願いいたします。

尚、一周年記念作品として善宗先生、そしてサウザー先生とのクロス作品を作成中です。出来上がり次第投稿させていただきます。

【司馬進の受難、初めての实战・中編】（前書き）

友人「義妹、幼なじみ、委員長でパンストと来たら…」

柳「次のヒロインは年上、しかも熟女か？」

友人「その通り、俺は主人公の母親が参戦すると見た。」

柳「ねーよ、それなら三十歳前後の未亡人で喫茶店経営とかの方が来るだろ…」

友人「あ、血は繋がってなくて良いのか。」

柳「当たり前だ馬鹿。だがそれはそれで面白そうだな…」

~~~~~そんな柳と友人の【お兄ちゃんのことなんてぜんぜん好きじゃないんだからねっ！】のヒロイン談義~~~~~

お待たせしました。本編更新です。

【司馬進の受難、初めての实战・中編】

~~~~河代のとある支城~~~~

賊から避難するために従者達を引き連れて最寄りの城へと来た紀霊一行だが、入城すると城内の惨状に唖然とした。

司馬懿「何よこれ……」

司馬懿が絶句するのも無理はない。本来なら城を防衛する守備隊が慌ただしく動き回っているはずの城内には慌てふためく市民の姿はあれど戦の準備をする兵士達の姿が無かったのだ。

従者達を待機させ城内を歩き回った結果、辛うじて見つけた兵士も市民を必死で落ち着かせようと奮闘しているが焼け石に水といった様子だ。

孔融「おいつ、ここの城主と守備隊はどうしたんだよ!？」

孔融が状況を把握しようとして兵士を捕まえ問いたですと

兵士「じよつ、城主様は賊が来ると聞いて一目散に逃げられた!守備隊も脱走者が続出して残ったのは五百も居らんっ!！」

張春華「そんな…」

城主も守備隊も居ない。後方には賊が迫り、逃げたとしても追い付かれるのは時間の問題。避難してきた司馬懿達にとっては最悪の状況に言葉を失う司馬懿と張春華だが紀霊達三人は違った。

紀霊「現状で最も階級が高い兵士は誰だ？急いで案内しろ。」

孔融「俺は急いで城壁とかの様子を見てくる！」

司馬進「ぼさつとしている場合では無いぞ姉上！俺は家の者達を政庁に連れて行く。」

紀霊「おう、集合は政庁で頼む。司馬懿殿と張春華殿は俺に着いて来てくれ。」

すぐさま行動に移る紀霊達に狼狽えつつも司馬懿達は慌てて紀霊に追従していった。

~~~~~政庁~~~~~

紀靈「將軍府所属、大將軍副官の紀周英だ。緊急時故に残った守備隊の指揮を執らせて頂く。」

政庁で頭を抱えつつも兵士達を指揮する隊長らしき女性に懐から取り出した將軍府の紋章を掲げた紀靈は告げる。すると女性は突然の乱入者である紀靈の言葉に何の疑問も感じずに縋りついてきた。正直藁をも掴む気持ちだったのだろうか…

隊長「正直私では賊に打ち勝つ妙案が浮かびませんでした…。それに司馬家の御息女も居るとあらば喜んでお渡し致します。」

そう言つて頭を垂れる女性の姿を見て静かに頷いた紀靈は次なる指示を出そうとした時、不意に司馬懿が紀靈を指差し大声で叫んだ。

司馬懿「ちょ、ちょっとあんた！大將軍副官つて聞いてないわよ！？」

紀靈「そりや言つてないからな。隊長さん、急ぎ残存兵力を訓練場に集めて騎兵、歩兵、弓兵に分けて整列させるようお願いします。それから賊の情報も知っている限り纏めておいて下さい。」

「わかりました。」と返答した隊長は一礼すると駆け足で退室し、部屋に残るは紀靈と司馬懿、そして張春華の三人だけになった。

沈黙の中、司馬懿は紀靈を睨み続け、睨まれた紀靈は司馬懿の視線

を無視するように煙草の白煙を立てながら城の見取り図と付近の地図をじっと見つめ続ける。

そんな紀霊に我慢が出来なくなったのか司馬懿が紀霊の真横まで近寄り口を開いた…

司馬懿「なんで言わなかったのよ…」

紀霊「生憎大將軍副官では有るが官位は持つてないんでな、大將軍副官つて肩書きを言い触らして威張り散らす趣味は無い。」

張春華「官位を持つてない？大將軍副官ならそれ相応の官位が有るはずだけど…」

二人の疑問も当然である。本来副官は將軍を補佐し、業務を円滑に行うために相応の將軍位を持った人物が就任するものだ。ましてや中央軍全軍を統括し朱儁、皇甫嵩と癖のある將軍が二枚看板として君臨する何進大將軍の副官ともなれば紀霊のような無位無冠の青年をそんな重職に起用するなんて普通では考えられない話である。

しかしそんな普通じゃ無い存在が目の前にいる事に顔をひきつらせる司馬懿と感心したような眼差しで紀霊を見やる張春華。

司馬懿「ふうん…アンタみたいな冴えない男が大將軍副官やってる位なら私と沙羅ちゃんもつと良い官位貰えるわね。」



だが未だ納得いかない様子の司馬懿は腹いせの憎まれ口を紀霊に向けるが

紀霊「なら、ゴタゴタが解決したらうちの大将に仕官してみないか？」

気にとめた様子もなくさらりと勧誘する紀霊。勿論今まで数々の勧誘を受けてきた司馬懿は【強いけど投石馬鹿の駄目將軍二人を制御出来ない無能】と評される何進に靡く訳はなく

司馬懿「はあ？あんた馬鹿じゃない？わざわざ私が仕官する訳ない」「社との情事を手引きしよう。」「訳ないじゃない。私の英知、何進大將軍のために捧げるわ。」「

張春華「樞が行くなら私も一緒。紀霊さん、私も樞と同じ条件でお願います。」「

断ろうとしたが、態度は180度反転。二人は紀霊の手をしつかりと握り締めて固い握手を交わす。どう見ても欲ほしくに目が眩くらんでいます。本当に有難う御座いました。

紀霊「まあ、取り敢えずは邪魔な賊を排除したいんだが…作戦立案を手伝って欲しい。」「

司馬懿「まっかせなさい 賊の百人や二百人、私と沙羅ちゃんが居れば問題なしよ。」

張春華「たかが賊なんだし今の数でも充分勝てる要素は有るはず…いや有る！」

自信満々の笑顔を見せる二人が地図を見て何やら考え始めた中、紀霊の指示した事が終わったのか隊長が入室し兵士の集合完了報告と賊についての情報を書き綴った書簡を手渡される…

紀霊「賊の名前は山東賊。推定される兵力は…三千弱だな。それに対して守備隊は五百未満か、兵力差は実に六倍。こりゃ確かに皆逃げまどうわ…」

司馬懿「え……………」

張春華「……………終わった。」

紀霊の口から発せられた情報により室内を再び沈黙が支配する。先程までは威勢の良かった司馬懿の頬は引きつり、張春華は静かに目を閉じて今までの人生を振り返り始める。そんな二人を見た隊長は目眩を起こし崩れ落ちそうになったところを紀霊に抱き起こされる始末。

最早絶望しか残って居ない…そんな空気を知ってか知らずか紀霊が口を開いた

紀霊「そこまで落ち込むことじゃ無いだろ。一人頭で計算すれば六人殺すだけで良い。」

なんともお気楽な台詞を吐く紀霊にカチンと来たのか司馬懿がバンバンと机を叩いて抗議の声を張り上げる中、司馬進と孔融が合流するが司馬懿は構わず紀霊に叫び続けた。

司馬懿「馬つ鹿じゃないの！そんな簡単に物事が進む訳無いでしょうが！籠城するにしたって六倍じゃ落とされるのも時間の問題なのよ？なのに…なんであなたはそうもお気楽にしてられんのよ！」

司馬懿が怒るのも無理はない。普通城攻めをするには攻撃側の兵力が守備側の三倍は必要と言われている。今回の兵力差はおよそ六倍、幾ら賊といえども数に物を言わせて攻められたら防ぎきる事は恐らく不可能だと安易に想像出来るからだ。だが紀霊は司馬懿の剣幕に対して反論する。

紀霊「悲観的になろうが楽観的になろうが状況は変わらん。勝てば生き残り負ければ死ぬ、指揮する将がやる前から悲観的になって兵士の士気に悪影響出すくらいなら虚勢でも良いから兵士を安心させないと勝てる戦も勝てんぞ？」

張春華「それはそうだけど…勝つための作戦なんて有るの？」

紀霊の言葉にも一理有ると同意はするものの、肝心の勝つ作戦が思いつかなければ意味がないと質問する張春華。そんな中、状況を把握した司馬進がぼそりと呟いた。

司馬進「…有る、やれるぞ頭。」

どうやら司馬進が妙案を思いついたようで、微かに見える希望を聞くべく皆が一斉に司馬進へと顔を向ける。

紀霊「ほう、作戦を聞こう。」

司馬進の作戦はこうだ。

現在残存する守備隊は騎兵130騎、歩兵250人、弓兵103人の計483人だ。

まず紀霊と司馬進を指揮官として騎兵100騎を編成し、敵が城門へ取り付く前に攪乱する。

続いて孔融が20騎を引き連れて一番近い城から援軍を連れてくる。その間司馬懿と張春華は歩兵と弓兵を率い籠城し時間を稼ぐ。単純明快な作戦だが他に良い案が出ない以上司馬懿と張春華は反論出来ずに渋々了承。

その後、紀霊達はすぐさま兵士達が待つ場所へと足を運んだ…

~~~~~訓練場~~~~~

訓練場に整列する兵士達。彼等の顔には迫ってくる賊達に対する恐怖といきなり現れた五人の若い男女が指揮を執る事への戸惑いが見取れる中、右目に傷を持つ青年が一人中央へと歩み出て口を開く。

紀霊「將軍府所属、大將軍副官の紀周英。今回臨時で指揮を執らせて貰う一人だ…諸君等に聞こう。諸君等は弱兵か？賊が来ると聞いて一目散に逃げ出した城主や逃亡兵と同じ惨めな負け犬か？…それとも、どうすれば良いか自分で考えられずに呆然と突っ立てるだけの馬鹿か？…答えは否だ。諸君等はこの城を、町を、人を護るために今立っている兵士ではないのか？もし自分は兵士では無いと思う奴が居るならば戦いの邪魔だ、今から三十秒数える間に尻尾を巻いてさっさと訓練場から出ていけ。いーち、にー…」

紀霊の演説を一旦止めて数を数え始めるが兵士達は誰一人動こうとしない。そして

紀霊「にじゅつきゅつ、さーんじゅつ…どつやら諸君等は全員立派な兵士のようだな…。」

逃げ出した者は一人も居らず。寧ろ兵士達のやる気を感じさせる顔付きに満足げに頷いた紀霊は三華尖を天に向かって突き上げて叫ぶ。

紀霊「ならばこれより我等は修羅となる！皆の者、各々に戟を！剣を！弓を手に！敵に会っては敵を斬り！神に会っては神を斬る！さあ、俺の名を言ってみろ！！」

兵士達「紀周英！紀周英！紀周英！」

地面が揺れるほどに響く兵士達の雄叫び。天を突かんばかりに士気は高揚し皆が闘志に満ち溢れた訓練場の中心に紀霊が立つ。

紀霊「俺のことは紀霊で良い。さあ、迎撃準備に取り掛かるぞ！！」

紀霊の号令を合図に全員が力強く動き始め、紀霊が壇上から降りて司馬進達の下へと戻ると孔融が肩を軽く叩く。

孔融「演説お疲れ様。早速俺も動くとするよ。」

紀霊「おう、最低でも四、五百人は連れて来いよ？」

「任せとけて。」と手をヒラヒラ振りながら返す孔融は護衛と共に

に馬で駆けていく。残った紀霊達とはいえば…

司馬懿「おかしい、あんた絶対將軍位持つてなきゃおかしいって…」

先の演説に対してぶつぶつと呟く司馬懿の姿がそこにあった。基本的に司馬進と張春華以外の人間は眼中に無い司馬懿でも紀霊は將軍の器有りとの評価をせざる得ないようだ。

紀霊「んな事言われてもな…將軍位も何も軍勢率いる戦いはこれが初めてだぞ俺。」

張春華「初陣でここまで出来るのは異常。何進大將軍の配下って実は人材豊富なんじゃ…」

司馬懿「もしくは優秀な人間を見極めらんない節穴よ、まったく…」

最早初陣と言う事実につっ込む気力も無くなったのか頭に手を当てて呆れ口調で返す司馬懿と張春華だが、そもそも五人全員が初陣でいきなり全体の指揮を執る事実ですら彼女達の頭痛を更に悪化させているのは言うまでもない。そんな中、騎馬隊の出撃準備を終えた司馬進が紀霊の夜雲と騎馬隊を連れて来る。

司馬進「頭、騎馬隊の準備が整ったぞ！」

夜雲を受け取り颯爽と飛び乗ると騎馬隊へと

紀霊「これより出撃する！我に続け！！」

騎馬隊へと号令し城門へと向かい駆け出して行った。

次回へ続く。

【司馬進の受難、初めての实战・中編】（後書き）

今回も強敵な先生紹介はお休みです。

一周年記念の番外編は進まんわ本編の更新も停滞するわ、挙げ句に出張であばばばば...

ご意見感想お待ちしております。

【司馬進の受難、初めての实战・後編】（前書き）

柳「……………ふむ。」

執筆を中断し友人の下へ…

友人「お、柳か。じゃがりこ喰うか？」

柳「最近お前俺の部屋来ねえじゃねーか！後じゃがりこ美味え！」

友人「おめー行ったら行つたで怒るだろうが！」

柳「手前が来ないと来ないでなんか調子狂うんだよ！」

友人「何その理不尽！？てかじゃがりこ全部喰うんじゃねーよ！！」

柳「お前のじゃがりこは俺の物。俺のじゃがりこはお前の…すまん、じゃがりこか買わねえわ俺。」

友人「じゃがりこ限定のジャイアニズム！？じゃがりこ位買つとけよ！」

〈そんな柳と友人のじゃがりこ争奪戦〉

お待たせしました。本編の更新ばかりです。番外編はまだ…（泣

因みに、第2回ダグ募集をしたいと思います。

【司馬進の受難、初めての实战・後編】

孔融が援軍を要請しに行ってから四時間、そして戦闘が開始してから三時間。

賊軍の中を縦横無尽に駆ける騎馬隊の姿がそこにあった。

司馬進「突撃せよ！敵陣を突っ切るぞ！」

兵士「応！」

賊を蹴散らす司馬進と紀霊の後に続き、次々と賊に戟を振り下ろす兵士達。

モヒカン「ぎひいつ！？」

騎馬隊最大の武器である機動力を生かした突撃に加え、先頭には進路を確保するべく三華尖と鳳翼を振るう紀霊と司馬進。一つの塊となって暴れまわる騎馬隊にモヒカン達は逃げまどう者、反撃を試みる者関係なく紀霊達の攻撃に倒れて被害を拡大させていく。そんな紀霊達を止めようとするモヒカンが一人、紀霊と司馬進の前に躍り出るが…

モヒカン長「待ちやがれ！俺様の名前は副頭目の程ら」はい、邪魔

！」「ぐへえ！？」

名乗り終える前に三華尖で突き殺されてあっさり落馬。副頭目がやられた事で怖じ気づくモヒカンが更に増加したのは言うまでもない。

司馬進「顕、今ので丁度四百だ！」

紀霊「残り二千六百か！？混乱が収まる前にもう一当たりすんぞ！」

この乱戦の中、自分達が副頭目を含むモヒカン達の撃破数を律儀に数えていた司馬進だが兵士達の撃破数は数えていないから実際の被害はもつと多いだろう。

騎馬隊の人数は紀霊と司馬進を合わせても百二人、こんな少人数で四倍以上の被害をもたらしたのは大戦果に近いが敵はまだ多く攻撃が必要と判断した紀霊は改めて三華尖を握り直す。

兵士「承知しました紀霊様！！」

兵士達も紀霊の命令に応える中、司馬進はモヒカンの一集団が城門ではなく騎馬隊に向かって弓を構える姿を目にして叫ぶ。

司馬進「矢がくるぞ！皆駆け抜ける！！」

瞬時に前傾姿勢を取り馬を走らせる。

兵士「ぐうっ！」

即座に対応したので前にいた紀霊と兵士達は難を逃れたが、後方に居た兵士に矢が襲い掛かり何人かが被害を受けたようだ。

紀霊「ちいつ、無事な者は負傷した者を庇うように隊列を入れ替える！」

紀霊の指示を即座に実行する兵士達を見つつ司馬進の隣に馬をつけながら馬を走らす。

紀霊「奴らの攻撃対象が城からこっちに移りつつあるな、もう一回突撃するには戦力が足りんかもしれん……」

司馬進「なら雑魚は捨て置いて頭だけ狙うか？所詮は烏合の衆、頭さえ潰せばなんとかなるだろう。」

紀霊「それでも厄介なのは変わらんがな……せめて「紀霊様っ！増援ですー！！」ああ？これ以上増えるのかよー！！」

兵士「違います！官軍っ…御味方です！！」

兵士が指差す方向を見れば確かに官軍の旗印を掲げた部隊がこちらに向かつて駆けてくる姿。待ちに待った援軍に感極まったのか兵士達は歓声を上げ、不意に現れた新手の官軍に混乱する賊軍。そんな中、紀霊達の騎馬隊に千人程の官軍が合流し指揮官らしき女性二人と対面。その内の一人は紀霊と面識が有る…

文醜「ナギツの兄ちゃん無事かー？助けに来たよ！！」

大剣娘と

デコが特徴的な女性「指揮官の紀周英殿はどなただ！？」

どう考えても華雄と並ぶ猪武者の代表格、夏侯淳。

紀霊「ここに居るぞ！！それと大剣娘！いい加減俺の名前覚えろ！」

そう言う紀霊だが、文醜の事を大剣娘と呼ぶ時点でお前が言っとなと突っ込みを入れるべきだろう。

夏侯淳「取り敢えず話は賊を蹴散らした後だ。皆一気に押し返すぞ！」

司馬進「頭、あれを見る！敵の大将だ！」

夏侯淳の言葉に同意しつつ司馬進の指差す方向を見やると周囲のモヒカンが怒鳴り散らす大柄の男が一人。状況から見るに司馬進の言うとおりモヒカン達の頭目であろう。

頭目を確認した紀霊と司馬進の行動は早かった。まるで申し合わせたかのように頭目の方向に馬首を翻すと即座に守備隊へと命令伝達。

紀霊「守備隊は夏侯淳殿と大剣娘の指揮に従え！」

夏侯淳「紀霊殿に司馬進殿、一体何を！？」

司馬進「何、ちょっと大将首を刈り取りにいつてくる。行くぞ頭！」

紀霊「ヒヤッハー！」

馬を並べてモヒカンの群れに姿を消した二人だが、時折聞こえる紀霊の奇妙な雄叫びと司馬進の高笑いを合図にモヒカンが吹き飛ぶ姿は彼等が問題無く暴れまわっている証拠だろう。

文醜「ナギツの兄ちゃんさく大剣娘つてのは酷いよー。デコっち、準備は出来てる？さっさとモヒカン蹴散らしてナギツの兄ちゃんには謝罪の証に料理作ってもらわなきゃ。」

夏侯淳「なんという二人だ！我等も負けてはおれん突撃だ！後文醜殿、デコっちって言うな！」

二人に負けていられないと文醜、夏侯淳も城壁周辺の敵へと攻撃を開始する。元々数は勝るが六分の一しか兵力のない紀霊達に苦戦していた賊軍が増援の来た守備隊に勝てる要素は薄く、ギリギリと押され敗走するのは時間の問題になりつつあった。そんな中、紀霊と司馬進は

モヒカン「頭に向かわせるな止めあびゃ！」

モヒカン「バカ野郎逃げるな！たかだかガキ二人だ殺つあぶぱつ！？」

賊の大將に向かい突き進む二人を止めようと群がるモヒカン達だが、近づいた瞬間には三華尖の餌食となつて物言わぬ死体へと変貌を遂げていき、槍を握り直し改めて司馬進と併走する紀霊は襲い来るモヒカンを突き殺し、斬捨てて司馬進にモヒカンが近づけないように注意しつつ話しかける。

紀霊「雑魚は俺に任せな社、精精暴れて囿になるからよ！お前は真っ直ぐ奴さん^{やつし}を狙えばいい。」

司馬進「…ふん、任せるぞ。」

紀霊に返す言葉は少ないが、司馬進はしっかりと賊の頭を睨みつけるように馬を走らす。鳳翼を構えて敵の総大将に前進するその背中に紀霊は頼もしさを感じ、自身のやるべきことを再認識すると大きく深呼吸を一回行なった。そして三華尖を馬上でグルグルと振り回しモヒカン達に向かい大声で叫ぶ。

紀霊「頭の悪いモヒカン共に御朗報だ！守備隊の総指揮官、紀霊たあ俺のことよ！俺の首を取れば官軍は敗走でお前さん達の勝ちだ。それにたんまり褒美も貰えるだろうなあ…さあさあ、俺の首を取りたい奴は早いもん勝ちだ！かかってこいやー！！」

夜雲に乗り三華尖を天高く突き上げる紀霊は一斉にモヒカン達の標的へと変化する。ある者は目をぎらつかせて我先にと紀霊に飛びかかり、またあるものは弓で紀霊目掛けて矢を放つ。何十、何百というモヒカンが紀霊目掛けて殺到したのだ。だが、

モヒカン（弓）「ボヒュラっ！？」

モヒカン（弓）「あがつ！？」

モヒカン（槍）「なっ！？放った矢が…戻ってきた？」

紀霊「二指真空把だ。俺に飛び道具は効かん、そして…」

夜雲から飛び上がり上空へと上昇する紀霊と走り出す夜雲。先程の二指真空把による出来事で呆気に取られているモヒカン達に対し、体を捻るように構えた紀霊は槍で高速の刺突を振り下ろす。

紀霊「これが北斗千手殺だ！」

一本のはずの槍が千本に増えたかのような怒涛の刺突に数十人のモヒカンが餌食となり命を散らす。そして落下する紀霊を待ち構えるように移動した夜雲に着地した紀霊は三華尖に付着した血糊を振り払いボソリと呟いた。

紀霊「ま、本来なら秘孔を突く技だからこういうのは違うんだろうけど…少しは露払い出来たかね？」

改めて周囲を見渡すと仲間がやられた事に対して怒っているのか、それともただ欲に眩んで力量の差を見誤ったのか…先ほどと変わら

ず殺気を放つモヒカンが紀霊を取り囲む。

司馬進が頭目を殺るための囷とは言え、こつも大量の獲物が釣れるとは…と内心呆れつつもモヒカンへと向かい不敵な笑を浮かべた紀霊は槍を振るい

紀霊「おい、お前等。俺の名を言ってみろ…」

その言葉を合図にモヒカンの群れへと夜雲を走らせた。

~~~~山東賊・本陣~~~~

彼等は戸惑っていた。

高々数百名だと思いつた既勝気分であったのに実際は苦戦を強いられ、僅か百数名の騎馬隊に対し味方の被害は増えるばかり。既に副頭目は殺され、城への攻撃も官軍の必死の抵抗でままならない。しかも官軍の増援が来たとなれば…彼らの脳裏に一番考えたくない結末が浮かんでくる。

張烈「幾ら増えようが…不抜けた官軍なんぞ俺達の敵じゃねえ！お前等つ、斬って斬って斬りまくれ！！」

そんな最悪の結末を脳内から振り払うかのように部下達に対し激を飛ばす頭目だが、慌てて駆け込んでくるモヒカンの言葉に体中から

脂汗がどつと出るのを感じた。

モヒカン「か、頭！敵将と思わしきガキが二人暴れていやがる！！  
し、しかも一人は本陣目掛けて突っ込んで来やがった！！」

張烈「なににい！？おつ、お前等！急いで本陣の守りを固めろ！ガキの一人や二人、囲んで殺つちまえ！！」

しかし次の瞬間、轟音と共に本陣近くに居たモヒカンが上空から張烈達の足元へと降ってくる。落ちてきたモヒカン達は皆物言わぬ死体である上に、体のアチコチに切傷や十字の傷が有る者、もつと酷いものでは四肢がバラバラの状態で悲惨な姿をしている。そしてこの傷は張烈にとって見覚えのある傷であった…

張烈「なつ、この傷は俺達の仲間…」

司馬進「ふむ、その身なりからすると貴様がドブネズミの親玉か…」

驚く張烈とモヒカン達の本陣へ鳳翼を白く輝かせた司馬進がゆつくりと入ってくる。突然現れた青年…彼が何者かは知らないが官軍の一人で、恐らくは指揮官だろう。だがそれ以上に

張烈「手前が俺達の仲間を殺つた野郎か…！！野郎ども！殺せつ、

殺しちまえ!!」

この青年が自分達の仲間の手を下した一人であると察知した張烈は怒りからか腹の底から怒鳴り散らす。戸惑っていたモヒカン達は張烈の声に我を取り戻したのか司馬進の前にズラリと並んで各々に武器を構えて囲むようにジリジリと動き始める。だが、司馬進は不敵かつ高慢そうな表情で張烈だけをじっと見やる。

司馬進「ふん、ドブネズミの親玉も所詮ドブネズミよ。鳳凰の前には無力であると教えてやろう。…鳳凰呼闘塊天!!」

【鳳凰呼闘塊天】、己の闘気を飛躍的に上昇させて全身に帯びさせることで常人には捉えることのできないスピードで動き回ることが可能になる南斗鳳凰拳の奥義が一つで、まだ伝承者候補の司馬進は一定時間しかこの奥義の効果を得られないが、モヒカン相手には十分過ぎる技だ。そして全身に闘気が行き渡った司馬進は目を開き、周囲を見やるとモヒカン達の動きが全てスローモーションで映し出されている。拳を握り締め、司馬進は遅すぎる敵に対して直ぐ様斬り付け、蹴り殺し、雑魚であるモヒカン達をまたたく間に血の海へと沈めてしまった。

司馬進「…次は貴様だ。」

張烈「ひいつ!?!」

本陣にいたモヒカン達を一掃し終えた司馬進は次の標的である張烈へと向かいゆつくりと歩を進める。僅か数秒で護衛のモヒカンを葬り去った司馬進に恐怖を感じたのか、張烈は若干後退りつつ右手に握る棘付き棍棒を地面へと力無く落としたかと思っただけなら両膝をついて必死に命乞いを司馬進へと始めた。

張烈「おつ、俺が悪かった！軍は退くし今後一切ここいらの奴には手を出さねえ！だからつ、だから命だけは助けてくれええつ！！」

顔を崩し、涙と鼻水でグシャグシャになった姿で司馬進に土下座する姿は賊軍の頭目としての威厳なぞ見る影もなく惨めな姿をさらけ出すだけだった。

司馬進「……………ふん、次は無いぞ。」

そんな張烈の醜態に呆れたのか、それとも同情からか張烈に背を向けて歩き始める司馬進。だが、見逃された張烈は司馬進の背中を見た途端、即座に棘付き棍棒を拾って司馬進へと振りかぶる。

張烈「ひやははははつ、とんだ甘ちゃん野郎だぜ！死にやがれっつ！！」

だが張烈の振り下ろした棍棒は空を切り、地面へと突き刺さるだけ。

張烈「あぁっ？」

何が起きたか理解できない張烈だが、背後から聞こえる司馬進の声に血の気が一気に退いていく。

司馬進「貴様等のような人種は隙を見せれば直ぐこつだ…次は無いと言ったからな、勿論覚悟は出来ているだろう？死ぬ。」

張烈「てっ、手前が死にやがっ!？」

振り返り改めて司馬進に攻撃しようとした張烈だが振り返った瞬間、鳳翼で首を跳ね飛ばされてその命を散らす。  
ドサツと音を立てて地面に落ちる張烈の首を司馬進は持ち上げて本陣を後にする。そして本陣の外に出て高らかに叫んだ。

司馬進「賊軍が大将、司馬恵達じまけいが討ち取った!!」

~~~~~本陣から離れた戦場~~~~~


司馬進「賊軍が大将、司馬恵達が討ち取った！！」

大将撃破の宣言、その言葉は官軍に勝利を、賊軍に絶望と敗北を伝える。モヒカン達は頭目が殺された事実が続々と逃げ始め、守備隊は勝利に沸き立ち歓声を上げながら賊軍の追撃へと移行する。その時、紀霊は

紀霊「やーれやれ、やっと休めそうだな…」

勝利に沸く官軍と逃げ惑うモヒカン達を見やりながら白煙を上らせ一人呟いていた。見れば紀霊は血まみれで顔も返り血を浴びて真紅に染まった状態である。しかも周囲には数百を超えるモヒカン達の屍がひしめき合い紀霊を中心に赤黒い血の海を作り出していた。そんな中、ぼけーっと煙草を吸う紀霊に近づいた司馬進と夏侯淳の二人は紀霊の様子に一瞬息を呑む。

夏侯淳「これは…紀霊殿が一人でやったのか？」

司馬進「恐らく…いや、正真正銘頭が一人で倒したのだろうな。」

背筋に嫌な汗が流れるのを感じつつも目の前の現実を受け止める二人に気付いたのか、紀霊は手を振りながらゆっくりと近寄ってくる。

紀霊「社に夏侯淳殿か、城に戻りながらで良いから戦況を教えてくださいませんか？」

そう言いながら歩き出す紀霊に数秒遅れて追従する二人。

大将撃破の経緯や追撃部隊は文醜の指揮によりある程度追撃したら城へと帰還する旨を聞きつつも城門前へと辿り着き、三人が門をくぐる...

兵士「我等が指揮官、紀霊様の御帰還也！」

ワアアアアアアツ！！

住民「紀霊様に司馬進様だ！我等の救世主様ー！！」

通りを埋め尽くす兵士や住民の歓声が紀霊を出迎える。皆一様に紀霊へと熱い視線を向けている。

紀霊「…なんだこれ？」

自分に送られる声援に戸惑い二人に聞く紀霊だが、その質問に答えたのは二人ではなく前方から聞こえる男の声だった。

孔融「そりゃ圧倒的に不利な状況を勝利に導いた総指揮官と勝利を決定付けた一番手柄だ。歓迎しねえ訳がねえよ。」

紀霊「慎、お前も無事だったか…」

援軍を呼びに駆けてくれた友の出迎えに自然と笑みがこぼれた紀霊は三華尖を天へと突き上げ、周囲に大声で叫ぶ。

紀霊「お前等あ！俺の名前を言っつて見ろあつ！！」

【司馬進の受難、初めての实战・後編】（後書き）

今日の強敵とせな先生紹介

今回もお休み…orz

今回はnukosanぬこさん先生を紹介する予定です。

第2回ダグ募集について

性懲りもなくダグを募集したいと思います。

御意見、御感想及び御指摘等お待ちしております。

番外編【仮面戦士集結！！洛陽大決戦の巻・前編】（前書き）

クリスマスが近いので華雄と紀霊のクリスマスを想像してみる……

……

柳「うん、確実に砂糖量産かつ18禁展開だ。」

友人「何訳の分からんことを……そっぴや後輩（ ）がお前のクリスマス当日の予定を知りたがってたぞ？」

柳「仕事。ついでに言うとお大晦日に元旦も仕事。」

友人「……すまん。」

「そんな柳と友人の12月」

お待たせしました。今更ながら一周年記念番外編の投稿です。

今回の番外編は

常連の南斗鳳凰拳サウザー先生。前回に引き続き善宗先生。そして越後の佐吉先生に許可を頂きまして各先生のキャラをお借りしております。

各先生方、クロスの許可有難う御座います。

番外編【仮面戦士集結！！洛陽大決戦の巻・前編】

洛陽と長安を間には弘農という地域がある。弘農は洛陽と長安を最短で結ぶ隣接地域で長安から洛陽へと移動する最短の道のりで紀霊もこの弘農を通過して洛陽へと移動している。

ある夜、洛陽と弘農の境界線付近に野営をする数百名の集団が居た。旗印には董の文字。見張りの兵士がちらほらと立ち、異常が無いか目を光らせている中、一人の女性が兵士へと近寄って話し掛けた。

華雄「見張りご苦労。大事無いか？」

兵士「はっ、異常は見られません！將軍こそこんな夜更けまでお疲れ様です！」

うむ。と返し見回りを再開する女性。彼女こそ紀霊の姉であり、最愛の人。そして董卓軍で牙門將軍を務める華雄だ。何故西涼に居るはずの彼女がここにいいのか？しかも数百の兵士を従えて行軍している目的とは？色々知りたい事は有るが、空から降り注ぐ流星群により物語は進行していく。

華雄「流星群か、何かの前触れか？」

兵士「きつと吉兆で御座いましょう。」

兵士と共に流れ落ちる星達を見上げる華雄。幻想的な美しさに浸る董卓軍の面々だが、一際強い光を放つ流星が地面へと落下して一瞬周囲を明るく照らしつけた。

華雄「なっ!?!」

兵士「星が落ちたにしては面妖な…将軍、数里も離れていないようですが如何致します?」

華雄「うむ、十名程私について来い。流星が落ちた付近の探索を行うぞ。」

十騎の兵士を率い星が落ちた近辺に到着した華雄は周囲の探索を開始、すると数分程で兵士が華雄に大声で叫んだ。

兵士「将軍っ、意識を失った男女が居ります!」

その言葉に現場へと駆け寄った華雄だが、二人の男女を見た瞬間驚きの声を上げることとなった。

華雄「キョウにギンガ!? 何故ここに…いや、話は後だ。この二人

を丁重に野営地に運べ。」

空から降ってきた二人、華雄はこの二人を知っているのか兵士達にすぐさま指示を出して野営地へと馬を翻す。

華雄とキョウウにギンガが同じ場所に集結する。それは新たな何かを予感させるものだった…

~~~~~【番外編】仮面戦士集結、洛陽大決戦の巻~~~~~

~~~~~董卓軍野営地、華雄の野営テント内部~~~~~

蠟燭の火が薄暗く室内を照らす中、数回瞬きを繰り返しながらゆっくりと起き上がる。

キョウウ「ん…あれ？俺確かギンガと公園で…」

華雄「起きたようだな。」

ギンガ「キョウウ君！良かった…体とか大丈夫？」

意識を取り戻したキヨウに安堵の表情を浮かべるギンガと華雄にキヨウは状況を把握して出来ず頭に？マークを浮かべながらも応答する。

キヨウ「ギンガに…慧さん？お久しぶりです。」

華雄「うむ、久しぶりの再開嬉しく思うぞ。しかし…にわかには信じられんが災難だったな。」

キヨウ「災難？ってそっぴや華雄さんが何でこっちの世界に？」

華雄の言葉に混乱しつつも華雄が居ることに対して疑問を投げかけるキヨウだが、その答えは意外にもギンガからもたらされた。

ギンガ「キヨウ君、落ち着いて聞いて。華雄さんが私達の世界に来たんじゃ無いの。私達が聖帝の力でこっちに来させられたのよ。」

聖帝というキーワードを聞いたキヨウは全てを思い出す。

久しぶりにギンガと公園でゆっくり過ごしていた矢先に聖帝が現れ、有無を言わず転移させられた事。そして、今紀霊達の世界に居るといふ事実。

- ・ 肩部分に二門装備した投石機による長距離投石。
- ・ 近距離戦用に腕部に装備した三連装式連弩

来るべき動乱に備え將軍府と文政府の総力を注ぎ、洛陽を守るカラクリ兵器「頑単駆」を作りたいかの。頭君お願いっ！予算ちょうだい

これなんて機動戦士？

てか孔融まで絡んでやがるしなんで操縦が俺？なんで一人でも厄介なのに二人合わさって来るかなあ…

考えたら頭痛がしてきそうだったので思考を中断し気分転換のため部屋の外へ

ジンキ「あ、頭さんお疲れ様です。」

モヒ安「ヒヤッハー！お疲れ様だぜー！」

扉を開けた途端、武装したモヒカンを率いたジンキと鉢合わせした紀霊は右手を上げて挨拶を返す。

紀霊「そちらこそお疲れさん。悪いなジンキ君…市中の警邏なんてさせちまってよ。」

ジンキ「いやいや、働かざる者食つべからず。屋敷に置いて貰ってるんですし、せめて何進さんや紀霊さんの手伝い位させて下さいよ。」

紀霊に爽やかな笑顔を見せるジンキに対し

紀霊「久しぶりに人間を見た気がする…ジンキ君、今日辺り軽く飲もうや。」

先程、無茶苦茶な書簡を送り付けてきた皇甫嵩と孔融を思い出した紀霊はジンキのまともっぷりに感激したのかポンポンとジンキの肩を叩く。ジンキは紀霊の心中を察したのか苦笑いしながら頭を掻く。

ジンキ「また無茶な書簡が来たんですか…つか俺未成年ですよ。」

紀霊「この世界じゃ十五越えりゃ大人だ大人。それによ…」

そこまで言っただけで反対側の廊下から紀霊達目掛けて走ってくる二人の女性を見やる。

趙雲「主ー！是非っ、是非ともジンキ殿と共に我等の肉体に縄の味を刻んでくだされ。それがし…三日も仕置きされぬのは苦しゅう御座います！」

瑠姫「ジンキさんお願いです！私ジンキさんになら何をされても悦ぶ自信が有りますからっ！」

この作品随一の変態である趙雲、そしてジンキの彼女である瑠姫が縄や蝋燭を手に握って駆け寄ってくる。

その姿に紀霊は頭を抑え、ジンキは顔を赤く染めながら反対方向へと駆け出した。

紀霊「お互い女には苦勞させられるなジンキ君！星の奴瑠姫さんが来てから余計酷くなりやがって…少しはまともにする馬鹿！！」

ジンキ「今まだ昼前なのに何言っちゃってるの瑠姫さん！？お願いだからそう言うのは夜に言ってよ！」

紀霊「いやそう言う問題じゃねーから！」

後方で騒ぎ追いかけてくる二人に紀霊とジンキは塀を飛び越えて即座に市場通りへと全力疾走。勿論変態コンビも獲物を捕まえるべく塀を乗り越えて壮絶な鬼ごっこが開始される。

趙雲「ふふふふ…逃がしませぬぞ主。今日こそ我が肉体に主の縄を！」

紀霊「ユクゾツユクゾツユクゾツユクゾツユクゾツ！」

ジンキ「ちよっ、紀霊さん速っ！？なんですかそのナギツて瞬間移動！？」

後から迫る変態二人と逃げる男二人。必死に逃げる紀霊とジンキは逃げる道中に出会った二人の少女が自分達について話をしていたことに気が付かなかった…

おっとりとした感じの少女「あっ、紀霊さんだ。駆けっこしてるみたいだし私達も混ざろっか？」

気の強そうな少女「無理ですよお姉さま、ナギツをしている紀霊さんに追いつける訳無いじゃ無いですか。それより緑お姉さまが待ってますし、お昼御飯食べに行きましょう。」

おっとりとした少女「ん〜しょうがないっか。確か洛陽一番ってお店だよな？」

気の強そうな少女「そのお店で間違いないですね。緑お姉さまが待ってますよ。」

おっとりとした少女「ん〜しょうがないっか。確か洛陽一番ってお店だよな？」

気の強そうな少女「そのお店で間違いないですね。ささ、緑お姉さまが待ってますよ。」

気の強そうな少女はそう言つと自らがお姉様と呼ぶ少女の腕を抱き締めながら市場通りへと向かつていった…

~~~~~洛陽の城門前~~~~~

華雄「到着したぞキョウ。ここが洛陽、漢の首都だ。」

兵士を待機させキョウとギンガを連れて城門を指差す華雄。

キョウ「はあ〜、流石に人が多いですね。何時もの服装だったら絶対目立ってたな…」

そう言つて今自分が着ている服を見やる。

ギンガもそうだが今彼等が着用しているのは普段から着ているバリアジャケットではなく、この世界で着用される一般的な男女の服装。どうにも聖帝が転移の際に手を加えたようで服の内部には物理的には有り得ない程に物が収納出来るオマケ付きだ。

ギンガ「あはは…そこだけは聖帝に感謝しなきゃね。それにキョウ君似合ってるよ。」

キョウ「そう言うギンガだって似合ってる可愛いよ。」

そう言いながらギンガを見やるキョウ。ギンガはギンガで彼氏に可愛いと言われて顔を赤らめつつも上機嫌そうに笑顔を見せる。

ギンガ「キョウ君だって…何時もと変わらず格好良いよ／＼」

キョウ「ギンガ…」

ギンガ「キョウ君…／＼」

どちらからともなく自然と顔が近づき、唇と唇がそっと触れ合う。唇が離れた後も見つめ合う二人だが…

張遼「何公衆の面前で二人の世界入っとるねん！」

パシーン！とバカップルの頭で快音を上げるハリセンといつの間



やら隣に居た張遼の声で二人は我に返る。

キョウ「す、すいませんでした姉御！」

ギンガ「ごめんなさい……／＼／」

我に返り、自分達を見る洛陽市民の2828した視線に恥ずかしがる二人……そんな二人に呆れつつ張遼は溜め息を吐きながら隣にいるはずの華雄と呂布に顔を向ける。

張遼「まったく、慧と恋も何とか言ってやりい……」

だが華雄と呂布は

華雄「顕……お前は今どこに居るんだ？お姉ちゃん唇が寂しいぞ馬鹿者おおおつ！」

呂布「………恋、顕を探す旅に出る。」

御覧の有様である。

どうもキョウとギンガのバカップル振りにあてられたのか未だ会えぬ紀霊への思いを相当募らせていたのだろう。

張遼「慧落ち着きや！取り敢えずその血涙を拭きい…それと恋！何旅支度しとるねん、やめんかい！！」

暴走寸前の二人にそれを必死に宥める張遼。

キョウ「顕さん愛されてるをだなあ…」

ギンガ「うん。けど私も慧さん達に負けなくらいキョウの事愛してるよ。」

そんな三人を眺めていたキョウとギンガはまた二人の世界を作り上げる。

張遼「ああもう！顕の阿呆ーっ！はよウチ等の前に姿表さんかい！」

~~~~~洛陽一番・台所~~~~~

野菜を千切りに刻む紀霊と鍋を煮詰めるジンキ。昼の忙しい時間帯だけあり店内では地和達が忙しそうに料理を運んでいくなか、ふと紀霊が顔を上げた。

紀霊「ん？」

ジンキ「どうしたんです顕さん？」

紀霊「いや、姉者と姉御の声が聞こえた気がするが…空耳だな。」

そう言いながら再び包丁を動かし始める紀霊に対しジンキは笑いながら口を開く。

ジンキ「流石の顕さんもお姉さんが恋しいんじゃないですか？」

紀霊「否定は出来んが目的が達成するまでは会えん。だが、今は目の前に有る料理作るのが先さ。ちーちゃん、もやし定食（通称：人和定食）と炒飯出来上がったから頼む。」

地和「わかりましたプロデューサー。」

紀霊から料理を受け取った地和は台所から足早に客の元へと料理を届ける。

炒飯を注文した少年「この炒飯：グレイト!!」

炒飯を味わう客から聞こえてくる評価に耳を傾けながらふと、包丁と止めて空を見ながら紀霊は静かに口を開く。

紀霊「姉者達元気にしてっかな？まあ、西涼で頑張ってるんだろっかな…」

だが紀霊の言葉に反し、彼の想い人である華雄、張遼に呂布。そして居るはずのない二人の強敵が紀霊の目と鼻の先に居ることを彼は知らない。

次回：番外編【仮面戦士集結!!洛陽大決戦の巻・中編】に続く。

番外編【仮面戦士集結！！洛陽大決戦の巻・前編】（後書き）

本日の強敵とてな先生。

nukosぬこsan先生

代表作：リリカルなのはStrikers 己の拳にかける道

【リングにかける】と【はじめの一步】を織り交ぜ魔力皆無な主人公が己の拳で闘っていく硬派なストーリー。と思いきや笑い有りてほのぼのした空気も有り。

取り敢えず

はやてさんマジ狸。

竜児さんマジ兄貴。

フェイトさんマジ純情！！

うん、フェイトさん可愛いよ。姉になってくれ。
シグナムさんもなってくれ（切実）

次回は番外編の続きか本編又は紅白姉弟を投稿します。
後引き続きダグ募集中です。

御意見、御感想及び御指摘等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397o/>

真・恋姫†無双～ジョインジョインジョインキレイ～

2011年12月19日01時54分発行